

<p>階層を 求める カレンダ への探 メ メルマ ガ 文庫</p>	<p>管理No等</p>	<p>R Quotes 366 英語術と 日本語</p>	<p>12月31日現在：ミスタイプなどを適宜修正。(またコメントも適宜修正追加します。)</p>	<p>仮訳(「**訳」と先頭に書かれている場合は 松下以外の訳 ← 今のところ一つのみ他人の訳)</p>	<p>関連するキーワード あるいは 松下コメント1</p>	<p>松下のコメント2 あるいは注記 【 内に読書会メンバーのコメント記入！ 松下のコメントが書いてなくても自由に書いてください ！</p>	<p>ラッセルの言葉366 (ラッセル、カレンダー用) ワン・センテンスあるいはTwitter140字以内</p>
<p>候補 ★</p>			<p>A1 幸福 / A2 恋愛と結婚 / A3 教育 / A4 倫理宗教 / A5 ウィット・ユーモア / A6 毒舌・皮肉 / A7 その他 B1 社会思想 / B2 科学思想 / B3 戦争と平和 / B3-2 ラッセル=インシュタイン宣言 / B4 理論哲学 / B5 数学・論理学 / B6 その他 C1 ラッセル自伝 (A,Bにとりきれなかったものから) *C2 ラッセルについて( 編者,友人,アラブ・ワット他) *D 三浦伸樹からの訳及び転載するラッセルの英文</p>		<p>***** 松下のコメント1 *****</p>	<p>***** 松下のコメント2 ***** 【 あるいは 読書会メンバーのコメント 】</p>	
<p>r366-c001</p>	<p>○</p>	<p>A全般・一 般 A1幸福 A1-01</p>	<p>The psychological causes of unhappiness, it is clear, are many and various. But all have something in common. The typical unhappy man is one who, having been deprived in youth of some normal satisfaction, has come to value this one kind of satisfaction more than any other, and has therefore given to his life a one-sided direction, together with a quite undue emphasis upon the achievement as opposed to the activities connected with it. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 1 : What makes people unhappy? http://russell-j.com/beginner/HA11-040.HTM</p>	<p>&lt;不幸な人間の典型&gt; 不幸の心理的原因は、明らかに、多様多様である。しかし、いかなる不幸にも、共通点がある。不幸な人間の典型は、若いときに何らかの正常な満足を得られなかったため、その一種類の満足への他よりも価値があると思うようになり、それゆえ自分の人生に一方性の方向性を与え、その目的に関連した活動ではなく、その目的の達成のみをまったく不当に強調するようになった人である。</p>	<p>[ n.0002 : 不幸な人間の典型 ] 有益なこだわりと無益なこだわり / 幅広い好奇心と人間の幸福 / バランス感覚の重要性 * 悩み相談サイトの例</p>	<p>他人がどのようなものを偏愛しようがどうでもよいことかも知れませんが、家族がある場合はそうも言えません。なんらかのものに偏執的な愛着を覚える場合は、その原因をじっくり反省したほうがよさそうです。 過度な欲求や賭け事、大食漢、好きを無視した高額商品買い、常に興奮を求めること、その他いろいろ・・・</p>	<p>不幸な人間の典型は、若いときに何らかの正常な満足を得られなかったため、その一種類の満足への他よりも価値があると思うようになり、それゆえ、自分の人生に一方性の方向性を与え、その目的に関連した活動ではなく、その目的の達成のみをまったく不当に強調するようになった人である。 The typical unhappy man is one who, having been deprived in youth of some normal satisfaction, has come to value this one kind of satisfaction more than any other, and has therefore given to his life a one-sided direction, together with a quite undue emphasis upon the achievement as opposed to the activities connected with it. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 1 : What makes people unhappy? http://russell-j.com/beginner/HA11-040.HTM</p>
<p>r366-c002-1 + r366-c002-2</p>	<p>○</p>	<p>A1-01-2</p>	<p>Drunkenness, for example, is temporary suicide; the happiness that it brings is merely negative, a momentary cessation of unhappiness. The narcissist and the megalomaniac believe that happiness is possible, though they may adopt mistaken means of achieving it, but the man who seeks intoxication, in whatever form, has given up hope except in oblivion. The Conquest of Happiness, 1930 chap. 1 : What makes people unhappy? http://russell-j.com/beginner/HA11-040.HTM</p>	<p>&lt; 陶酔を求める人は忘却を求める人 &gt; たとえば、泥酔は、一時的な自殺(行為)であり、酒のめたる幸福は、単に消極的な、不幸の一時の休止にすぎない。ナルシストも、誇大な強狂も、幸福を得るのに誤った手段を探さずとも、幸福は可能だと信じている。どのような形にせよ、陶酔を求める人は、忘却以外の希望をあきらめてしまっている。</p>		<p>ラッセルは、お酒を飲むことは全て良くないが、何かに夢中になるにはいけないが、言っているわけではない。実際、ラッセルは年をとってから、「ワイスキー(レッド・ハッフル)を飲む」といって、初恋のときとは夢中になった。ラッセルがいっているのはあくまでも「過度」になるはよくない、また過度の陶酔を求めるのは、真実に立ち向かいたくないための「逃避」である場合が多いので、自らをよく振り返ってみる必要があると言っているにすぎない。</p>	<p>Drunkenness, for example, is temporary suicide; the happiness that it brings is merely negative, a momentary cessation of unhappiness. The Conquest of Happiness, 1930 chap. 1 : What makes people unhappy? http://russell-j.com/beginner/HA11-040.HTM 2)どのような形にせよ、陶酔を求める人は、忘却以外の希望をあきらめてしまっている。 The man who seeks intoxication, in whatever form, has given up hope except in oblivion. The Conquest of Happiness, 1930 chap. 1 : What makes people unhappy? http://russell-j.com/beginner/HA11-040.HTM</p>
<p>r366-c003</p>		<p>A1-01-02</p>	<p>I wish to persuade the reader that, whatever the arguments may be, reason lays no embargo upon happiness; nay, more, I am persuaded that those who quite sincerely attribute their sorrows to their views about the universe are putting the cart before the horse; the truth is that they are unhappy for some reason of which they are not aware, and this unhappiness leads them to dwell upon the less agreeable characteristics of the world in which they live. The Conquest of Happiness, 1930, chap.2, Byronic unhappiness. http://russell-j.com/beginner/HA12-010.HTM</p>	<p>&lt; 自分の不幸の原因を自分の世界観のせいにする人 &gt; どのような議論があるにせよ、理性は幸福を禁止するものではない。むしろ、私は読者に納得させたい。いや、それどころか、自分の不幸を大まかに自分の世界観のせいにする人びとは、本来を転倒している。私は固く信じている。真実は、彼らは自分では気づいていない何か別の理由で不幸なものであり、この不幸の原因は、自分が住んでいる世界のあまり気にいらぬ特徴についてよくよく考えるようになるのである。</p>		<p>この前のほうに、次の文章があります。 「自分(たち)の不幸を宇宙の本質のせいだとして、また、そのよきよきと考えることが賢明な(啓蒙された)人間の取るべき唯一の態度であると考えている。(彼らが)不幸を借り込んでいることは、それほど教養が高くはない人々に、その誇りの純粋さに疑いを持たせる。(即ち)不幸であることを楽しんでいない人間は、(本当に)不幸ではないと考える。」石原慎太郎のペシミズムとあわせて読む、面白いと思われる。 http://voicejapan2.heteml.jp/panjan/government/0404/0404223512/1.php</p>	
<p>r366-c004 + r366-c004-2</p>	<p>○</p>	<p>A1-01-02-2</p>	<p>There is no arguing with a mood; it can be changed by some fortunate event, or by a change in our bodily condition, but it cannot be changed by argument. I have frequently experienced myself in the mood in which I felt that all is vanity; I have emerged from it not by means of any philosophy, but owing to some imperative necessity of action. The Conquest of Happiness, 1930, chap.2: Byronic unhappiness. 【George Allen &amp; Unwin Ltd., 1930, p.22( = paperback ed.)】 http://russell-j.com/beginner/HA12-020.HTM</p>	<p>&lt; 空虚感からの脱出 &gt; 気分については議論しても仕方がない。気分は何か幸運な出来事や身体的な変化によって変化するかもしれない。私自身も、一切が空しいと感じるような気分をしばしば経験した。そんな気分から脱出できたのは、何らかの哲学によつてではなく、どうしても行動を起こさなければならぬ何らかの必要性に迫られたからであった。 出典：ラッセル『幸福論』第2章「バイロン風の不幸」</p>	<p>一切が空しいと感じたら、落ち込んでばかりいないで、とにかく必要なことをいろいろやってみよう。そのうちきっとそのような気分から抜け出すことができるだろう。</p>	<p>私自身も、一切が空しいと感じるような気分をしばしば経験した。そんな気分から脱出できたのは、何らかの哲学によつてではなく、どうしても行動を起こさなければならぬ何らかの必要性に迫られたからであった。 出典：ラッセル『幸福論』第2章「バイロン風の不幸」</p>	<p>私自身も、一切が空しいと感じるような気分をしばしば経験した。そんな気分から脱出できたのは、何らかの哲学によつてではなく、どうしても行動を起こさなければならぬ何らかの必要性に迫られたからであった。 出典：ラッセル『幸福論』第2章「バイロン風の不幸」</p>
<p>r366-c005</p>		<p>A1-01-02-3</p>	<p>If your child is ill, you may be unhappy, but you will not feel that all is vanity; you will feel that the restoring of the child to health is a matter to be attended to regardless of the question whether there is ultimate value in human life or not. A rich man may, and often does, feel that all is vanity, but if he should happen to lose his money, he would feel that his next meal was by no means vanity. The Conquest of Happiness, 1930, chap.2. Byronic unhappiness. http://russell-j.com/beginner/HA12-020.HTM</p>	<p>&lt; 虚しいなんていつてられない状況 &gt; もし自分の子供が病気でなったら、あなたは不幸になるかもしれないが、いっさいが空しいとは思わないだろう。あなたは、子供の健康を回復させることこそ注意を払うべき事柄であって、人間の命に究極的な価値があるかどうかという疑問などはどうでもよいと感じるだろう。金持ちも、しばしばそうであるが、いっさい空しいと感じるかもしれないが、もし万一財産を失うようなことでもあれば、次の食事は決して空しいものではないと感じることだろう。 http://russell-j.com/beginner/HA12-020.HTM</p>	<p>「母親は強い！」ということですね。それに比べ男はいつまでもよくよく考える人が少なくないとも言われますが・・・</p>		
<p>r366-c006</p>	<p>○</p>	<p>A1-01-02-4</p>	<p>The man who acquires easily things for which he feels only a very moderate desire concludes that the attainment of desire does not bring happiness. If he is of a philosophic disposition, he concludes that human life is essentially wretched, since the man who has all he wants is still unhappy. He forgets that to be without some of the things you want is an indispensable part of happiness. The Conquest of Happiness, 1930, chap.2. Byronic unhappiness. http://russell-j.com/beginner/HA12-020.HTM</p>	<p>&lt; 欲しいものの欠けは幸福の不可欠の要素の一つ &gt; 特別に強い欲望を感じていない(ごく普通の欲望のみを感じる)ものを容易に手に入れる人は、欲望を達成しても幸福はもたされないと結論する。もし、彼が哲学者気の人であれば、人生は本質的にみじめである、なぜなら、欲しいものは何でも持っている人でも、なお不幸なのだから、と結論する。彼は、欲しいものをいくつ持っていることこそ、幸福の不可欠の要素の一つである、ということを忘れてしまっている。</p>	<p>[ n.0003 : 悪しき思考習慣 ] 有害な思考習慣</p>	<p>今はこういつた(たとえばショーベンハウエルのような)厭世主義者はそれほど多くなく、どこまでも欲望や権力を追い求める人間の方が多くなるでしょう。あるいは、日々を生活に費やしている人々には比べれば、自分はずっと幸福だと自分自身に聞かせて幸せ(人生の充実感)を喪失感を感じない自分をいまいづれにしても、他人と比較することによって、幸福に感じたりせず感じたりするのは、おかしな話。 自分に欠けていくものを、簡単に手に入れられないものを手に入れようとして一生を通じて絶えずに努力することが「できる」。これは、幸福のための重要な要素の一つですので、ラッセルの言うように「欲しいものをいくつも持っていないことは、幸福の不可欠の要素の一つ」だと思われる。</p>	<p>欲しいものをいくつも持っていないことこそ、幸福の不可欠の要素の一つである。 To be without some of the things you want is an indispensable part of happiness. The Conquest of Happiness, 1930, chap.2: Byronic unhappiness. http://russell-j.com/beginner/HA12-020.HTM</p>
<p>r366-c007 + r366-c007-2</p>	<p>○</p>	<p>A1-02</p>	<p>The habit of looking to the future and thinking that the whole meaning of the present lies in what it will bring forth is a pernicious one. There can be no value in the whole unless there is value in the parts. Life is not to be conceived on the analogy of a melodrama in which the hero and heroine go through incredible misfortunes for which they are compensated by a happy ending. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.2 : The Byronic unhappiness. http://russell-j.com/beginner/HA12-030.HTM</p>	<p>&lt; 部分に価値があれば全体にも価値はない &gt; 将来に期待して、現在の意味はすべて未来の(もたらすもの)の中にある、と考える習慣は、有害である。(なぜなら)部分に価値があるのと同じく、全体にも、価値はありえない。人生は、(意味)を乗り越え、最後にはハッピーエンドで終わる、といったメロドラマの類推で思い描かれるべきではない。</p>	<p>[ n.0003 : 悪しき思考習慣 ] 有害な思考習慣</p>	<p>注：社会(=国家その他)と個人が対立する(利益が相反する)場合は、ラッセルは、常にといつてよいほど「個人の尊重」の立場に立つ。ここでは、もちろん2004年11月5日付の掲示板への書き込みにあるように、「将来を思い煩うのではなく、日々の生活を有意義に過ごすべきである。なぜなら、人生の全体は自分の福分だから。」といつた意味合いであるが、ラッセルが多量の著書で言っているように、「部分よりも全体の強調」は、全体主義国家観、偏執な異国、個人の自由や幸福を犠牲にした公共の利益・福祉等々に密接に関連している。 法廷・ワーキング・でなやしい)症候群、ただ目玉症候群 / 現実を直視しない人、いやなものから目を背ける人は、ハッピーエンド症候群にかかっている人が少なからずいると思われる。</p>	<p>将来に期待して現在の意味はすべて未来の(もたらすもの)の中にある、と考える習慣は、有害である。(なぜなら)部分に価値があるのだから、全体にも(も)価値はありえない。 The habit of looking to the future and thinking that the whole meaning of the present lies in what it will bring forth is a pernicious one. There can be no value in the whole unless there is value in the parts. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.2 : The Byronic unhappiness. http://russell-j.com/beginner/HA12-030.HTM</p>

	r366-c006		A1-02-2	R366	<p>I live and have my day, my son succeeds me and has his day, his son in turn succeeds him. What is there in all this to make a tragedy about? On the contrary, if I lived for ever the joys of life would inevitably in the end lose their savour. As it is, they remain perennially fresh.</p> <p>I warmed both hands before the fire; It sinks, and I am ready to depart.</p> <p>The Conquest of Happiness, 1930, chap.2 : The Byronic unhappiness. http://russell-j.com/beginner/HA12-030.HTM</p>	<p>&lt;人生に終わりがあがるからこそ、人生の喜びは永続的に新鮮さを失わない&gt; 私は生き私りに自分の日々を過ごし、息子(あるいは「娘」以下同様)が自分の後を継ぎ、息子は息子なりに日々を過ごし、今度は、彼の息子(私の孫)があとを継ぐ。こういったこと全てにおいて、悲劇となるようなものが存在するだろうか。それどころか、もしも私が永久に生きるとしたら、人生の喜びはいつかは必然的にその味わいを失ってしまうだろう。現実には人生に終わりがあがるので、人生の喜びは永遠に新鮮さを失わない。</p> <p>私は(命)火の前で両手を暖めた(命)の火が消える、そして私は(この世)を去る準備(覚悟)はできている</p> <p>出典：ラッセル『幸福論』第2章「パイロン風の不幸」 http://russell-j.com/beginner/HA12-030.HTM</p>	<p>引用された2行の詩はラッセルのものでなく、ウォルター・サヴィジ・ランド(Walter Savage Landor: 1775 - 1864)のもので、出典をあげていないということは、英人であればほとんどの人が知っているためだと想像されます。</p>		<p>もしも私が永久に生きるとしたら、人生の喜びはいつかは必然的にその味わいを失ってしまうだろう。現実には人生に終わりがあがるので、人生の喜びは永遠に新鮮さを失わない。 If I lived for ever the joys of life would inevitably in the end lose their savour. As it is, they remain perennially fresh. The Conquest of Happiness, 1930, chap.2 : The Byronic unhappiness. http://russell-j.com/beginner/HA12-030.HTM</p>
	r366-c009		A1-03		<p>It is very singular how little men seem to realise that they are not caught in the grip of a mechanism from which there is no escape, but that the treadmill is one upon which they remain merely because they have not noticed that it fails to take them up to a higher level. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.3:Competition http://russell-j.com/beginner/HA13-020.HTM</p>	<p>&lt;逃げ場がないという思い込み&gt; 次のような事実を認識している人がほとんどいないように思われるのは、なんとも奇妙である。即ち、人びとは、逃げ場のないメカニズムにすっかり捕まっているのではなく、踏み車を踏んでいながら、いつまでもそれをやめないのは、踏み車で自分を高いレベルに引き上げることにはできないということに気づいていないからにほかならない、という事実である。</p>	<p>[ n.0006 : 踏み車? ] 多忙な人が偉い、偉い人は多忙であるという思い込み、軌道を外れることの恐怖</p>		<p>人びとは、逃げ場のないメカニズムにすっかり捕まっているのではなく、踏み車を踏んでいながら、いつまでもそれをやめないのは、踏み車で自分を高いレベルに引き上げることにはできないということに気づいていない。 They (You) are not caught in the grip of a mechanism from which there is no escape, but the treadmill is one upon which they remain merely because they have not noticed that it fails to take them up to a higher level. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.3:Competition http://russell-j.com/beginner/HA13-020.HTM</p>
★	r366-c010	○	A1-03/04	R366	<p>For my part, the thing that I would wish to obtain from money would be leisure with security. But what the typical modern man desires to get with it is more money, with a view to ostentation, splendour, and the outshining of those who have hitherto been his equals. The social scale in America is indefinite and continually fluctuating. Consequently all the snobbish emotions become more restless than they are where the social order is fixed. From: The Conquest of Happiness, 1930, chap.3:Competition http://russell-j.com/beginner/HA13-030.HTM</p>	<p>&lt;他人より抜きん出たいという欲求&gt; 私はと言えば、私が金銭から得たいと思うものは、安心して楽しむ余暇である。ところが、典型的な現代人が金で手に入れたがっているものは、もっと金をもうけることであり、なんのためかといえば、人に見せびらかし、豪勢さほこり、これまで対等であった人々たちを追い越すことである。アメリカの社会的階級(階層)は、段階が不明確で、絶えず変動している。その結果、社会的な序列が固定化しているところよりも、俗物根性がおさまらない(血が騒ぐ)ことになる。</p>	<p>続けて次のように書いています。 金はそれ自体では人間を"立派"にするに十分でないが、金なしに立派になることはむずかしい。その上、もうけた金の額が一般に、頭のよさの尺度とされている。金をたくさんもうける人間は賢く、もうけない人間は賢くないとされる。たれだつて愚かだとは思いたくない。そこで、株式市場が不安定な状態になると、人は試験中の子供のような気むすずかしい気持ちになる。</p>		
★	r366-c011	○	A1-04	R366	<p>The root of the trouble springs from too much emphasis upon competitive success as the main source of happiness. I do not deny that the feeling of success makes it easier to enjoy life. A painter, let us say, who has been obscure throughout his youth, is likely to become happier if his talent wins recognition. Nor do I deny that money, up to a certain point, is very capable of increasing happiness: beyond that point, I do not think it does so. What I do maintain is that success can only be one ingredient in happiness, and is too dearly purchased if all the other ingredients have been sacrificed to obtain it. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.3:Competition http://russell-j.com/beginner/HA13-040.HTM</p>	<p>&lt;成功のための高い代償&gt; この災いの根元は、幸福の主な源泉として競争のうち勝つこと(立身出世すること)を強調しすぎることにある。成功者が、人生をよりインジヨシしやすくすることは、私も否定はしない。たとえば、若いうちずっと無名であった(一自立たなかつた)画家は、才能が世に認められれば、以前よりも幸福になる傾向がある。また、金銭も、ある点までは幸福を非常に増進できるものであることを、私は否定しない。(しかし)その限界を越えれば、幸福をより増進するとは思えない。私が主張したいのは、成功は幸福になるための一つの要素にしかならず、成功を得るために他の要素がすべて犠牲にされたらすれば、あまりにも高い代償を支払って手に入れたことになる、ということである。 &lt;余暇も競争の哲学によって奪われている&gt; 競争の哲学によって奪われているのは、仕事だけではなく、余暇も同じように奪われている。静かで神経の疲労を回復してくれるような余暇は、過度なものと見られる。競争は絶えず加速される運命にあるため、その当然の結果は、薬物(依存)であり、衰弱(気力喪失)である。これに対する治療法は、バランスのとれた生活、人生の理想の中に、健全で、静かな楽しみの(果たす)役割を認めることにある。</p>	<p>[ n.0007 : 成功は幸福の必須条件? ] 成功は幸福のため? それとも自己満足のため?あるいは虚栄心を満足させるため? 「勝ち組」だと思つたら、自分に負けた「負け組」だつた?</p>	<p>自分は幸福を求めているわけではなく、生きがい求めている(あるいはそのためのたれだつたと思つているだけ)であるから、これは自分にはあてはまらないという人びとかも知れない。家族がいない場合は、そういった主張を否定することはできない。しかし、家族やお世話になっている多くの人びとに(自分は気づかずに)迷惑をいろいろかけている場合は、それも言っているにない。</p>	
★	r366-c012	○	A1-04-2	R366	<p>It is not only work that is poisoned by the philosophy of competition; leisure is poisoned just as much. The kind of leisure which is quiet and restoring to the nerves comes to be felt boring. There is bound to be a continual acceleration of which the natural termination would be drugs and collapse. The cure for this lies in admitting the part of sane and quiet enjoyment in a balanced ideal of life. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.3:Competition http://russell-j.com/beginner/HA13-060.HTM</p>	<p>&lt;余暇も競争の哲学によって奪われている&gt; 競争の哲学によって奪われているのは、仕事だけではなく、余暇も同じように奪われている。静かで神経の疲労を回復してくれるような余暇は、過度なものと見られる。競争は絶えず加速される運命にあるため、その当然の結果は、薬物(依存)であり、衰弱(気力喪失)である。これに対する治療法は、バランスのとれた生活、人生の理想の中に、健全で、静かな楽しみの(果たす)役割を認めることにある。</p>	<p>[ n.0105 : 競争の哲学が流す毒薬 ] 競争には良い面と悪い面がある。現代日本においては、良い面ばかり強調されるきらいがある。支配・管理監督する立場にあつては、国民や部下が、大きな不都合を産まない限り、競争にあげられてくれたほうが都合である。だが、それは不幸の大きな要因となる。新しいものを創造しようという競争ならよいが、限られたもの(ポスト、エネルギー資源、その他の精神的なもの)以外のものの競争は、益よりも大きな不幸を世界に生み出してしまふ。そのことをよく表した、世界中のラッセルファンが引用するの次のラッセルの言葉です。 The best life is one in which the creative impulses play the largest part and the possessive impulses the smallest.</p>	<p>「脱法ドラッグ」を「危険ドラッグ」と呼称を交えるのはよいが、しかし多くの人が刺激を求めるような社会のあり方にこそ、もっと問題があるのではないか。為政者や管理、監督する者にとって都合の良い「競争の哲学」に疑問をもちます。そういった主張から逃げ出そうとする人間が「危険ドラッグ」に走ったりする。サッカーでもなんでも、興奮を与えられなければ満足できない現代人にとって、「危険ドラッグ」はてつとりの代りだ。「逃避手段」となっているのだから思われる。中国から「脱法ドラッグ」がはいつてくるからいけないのだとか、小さいうちから道徳教育をしっかりする必要があるとか、極端な「闘争」は日本に徴兵制がないからいけないという人まである。ラッセル曰く、「これに対する治療法は、バランスのとれた生活、人生の理想の中に、健全で、静かな楽しみの(果たす)役割を認めることにある。」 そういう生活が退屈だと思わないようではなければならない(退屈をまぎらすものを人から与えられるのではなく、自らが新しいものを創造し、そこに喜びを見いだせる人間にならなければならない。 )。</p> <p>常に向うしたい(今の自分を越えたい)ということ而努力することは善いことですが、他者を踏みつけても、自分が上に立ちたいということ競争にはけむらに、よって、多くの弊害が生まれます。 しかし、組織の長や、多くの人間が賢明に働くことによって利益を得る人(資本家も含む)は、そのような弊害に目をつわり、不当に競争を奨励します。最近では、(安部首相も)そうですが、何れでも挑戦できる機会のある社会が善い社会だ。「結果の平等」については、彼らは「結果の平等を呼びます。」として、「競争の哲学」が正しいことを疑いません。これは、「経済格差」だけでなく、「教育格差」その他、様々な格差が拡大していかざるを得ないと思われまふ。 最近の日本の経済政策(アベノミクス)は、持てるもの(富者、勝ち組)がますます豊かになれば、そのほこりばかり持たざるもの(貧者、負け組)にいくらお金を注ぎ込んでいこうからということ、自動車産業等の関連産業の裾野の広い大企業が有利になるような政策ばかりに「規制緩和(したり)お金(国民の税金)をたくさん使つたりしています。3年くらい経てば結果がでるだろうと思われまふ。(アベノミクスが不調になる原因がきつかけが、新たな「大地震」かも知れませんが、起こつたあとで、そういうものを「想定外」だとして「免罪符」にすることは許されないでしょう。)</p>	

			A1-05	We are less bored than our ancestors were, but we are more afraid of boredom. . . . As we rise in the social scale the pursuit of excitement becomes more and more intense. Those who can afford it are perpetually moving from place to place, carrying with them as they go gaiety, dancing and drinking, but for some reason always expecting to enjoy these more in a new place. Those who have to earn a living get their share of boredom, of necessity, in working hours, but those who have enough money to be freed from the need of work have as their ideal a life completely freed from boredom. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.4:Boredom and excitement http://russell-j.com/beginner/HA14-030-HTML	<興奮の追求> 私たちは、先祖ほど退屈していないが、先祖よりもより退屈を恐れている。社会的な階級が上がるにつれて、興奮の追求はますます激しくなる。余裕がある人びとは、絶えずあちこち動き回り、彼らは行くところ陽気に振る舞い（←陽気さを運び）、ダンスをし、酒を飲む。だが、どういふわけか、新しい場所ではいつも、これらをもっと楽しむことを期待している。走馬灯に舞がなければならぬ。人びとは、勤務時間中、どうしてもそれなりに退屈をおぼえるが、働く必要がないだけのお金のある人びとは、まったく退屈しない生活を理想として思い描いている。	[n.0009: 退屈の恐れ] 退屈を我慢できない心 / 興奮の追及 / 精神的・活動的な生活の賛美 / 人類の質が少なくとも半分は退屈を恐れることに起因している？	
r366-c013			A1-06	A life too full of excitement is an exhausting life, in which continually stronger stimuli are needed to give the thrill that has come to be thought an essential part of pleasure. A person accustomed to too much excitement is like a person with a morbid craving for pepper, who comes last to be unable even to taste a quantity of pepper which would cause anyone else to choke. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.4:Boredom and excitement http://russell-j.com/beginner/HA14-040-HTML	<絶えずより強い刺激を求める人> 過剰に興奮に満ちた生活は、心身を消耗させる生活であり、そこでは、快楽の必須の部分と考えられるようになったスリルを得る（自分に与える）ために、絶えずより強い刺激が必要となる。過度の興奮に慣れた人は、胡椒（シヨウワ）を病的に好むように似ており、そのような人は、ついに、ほかの人なら誰でも意識しそうなほど多量の胡椒が食べられなくなる。	[n.0010: 刺激を求める現代人] 刺激や興奮を求める現代人 / しだいに強い刺激でないと満足しなくなる / 視覚だけでなく聴覚も味覚も、...、いつのまにか感覚が麻痺 / 心の平穩の大切さ 一般の人が得る刺激や快楽では、(他者に対し優越感を得られないから / また、普通の刺激では快楽が得られなくなってしまうために) しだいに強い刺激を求めるようになる。 ついに、...	
r366-c014 + r366-c014-2			A1-07	I do not want to push to extremes the objection to excitement. A certain amount of it is wholesome, but, like almost everything else, the matter is quantitative. Too little may produce morbid cravings, too much will produce exhaustion. A certain power of enduring boredom is therefore essential to a happy life, and is one of the things that ought to be taught to the young. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.4:Boredom and excitement http://russell-j.com/beginner/HA14-040-HTML	<退屈に耐える力は幸福な生活に不可欠> 私は、興奮に対する異議を極端に押し進めるつもりはない。一定の量の興奮は健康によい。しかし、他のほとんどすべてののと同様、問題は分量である。少なすぎれば病的な渴望を生むかもしれないし、多すぎれば疲労を生むだろう。それゆえ、退屈に耐える力のある程度持つていることは、幸福な生活にとって不可欠であり、若い人たちに教えられるべき事柄の一つである。	[n.0011: 退屈に耐える力] 何でも与える親もいれば、子供をほったらかしにする親もいる / いずれも、子供が自立、自律できるような状態への教育はしない / 時間の有効な使い方を教えない親 / 退屈に我慢できない子供たち / 刺激と興奮を求める人々、社会	前半部分は誰もが認める、あたりまえのことである。それならば、後半に書かれている「退屈に耐える力のある程度持つていることは幸福な生活にとって不可欠」ということが出てくるはずなのに、刺激や興奮がないと不幸だと思ってしまう現代人...
r366-c015			A5に移動！				
r366-c016 + r366-c016-2			A1-09-1	The capacity to endure a more or less monotonous life is one which should be acquired in childhood. Modern parents are greatly to blame in this respect; they provide their children with far too many passive amusements, such as shows and good things to eat, and they do not realise the importance to a child of having one day like another, except, of course, for somewhat rare occasions. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.4:Boredom and excitement http://russell-j.com/beginner/HA14-060-HTML realise (英) = realize (米)	<単調な生活に耐える能力は幼少期に獲得されるべきもの> 多少とも単調な生活に耐える能力は、幼少期に獲得されるべきものである。この点で、現代の親たちは大いに責任がある。彼らは子供たちに、ショー(注: 演劇、映画、各種見物)や、現代でいえばテレビ)だの、おいしい食べ物だのといった、変動的な娯楽をあまりにもたくさん与えすぎており、...もちろんやや特別の機会とは別ではあるが、...毎日同じような日々を持つことが子供にとってもどんなに重要であるかを、理解していない。 出典、ワセダ『幸福論』第4章「退屈と興奮」 http://russell-j.com/beginner/HA14-060-HTML		何もしないで物思いにふけっていることは「怠惰」と考えるような世の中。何もしないで、誰にも邪魔されずに自由に色々なことを考える時間を若い時にたっぷり持つことは貴重だが、せちがら世の中ではそんなことをしている時間があまりない。娯楽を身につけたい、働かない、勉強しない、(それはあんなに努力しないと「非正規労働者」にならないうえ、最悪の場合はホームレスになってしまう)などと肩がしきえする。非正規労働者を大嵐に生み出し、経済格差それが主原因の教育格差で、その他いろいろな格差を生み出す社会(やれやれと推測する権力者(支配階級)に従順にならざるをえない。「競争の哲学」に書かれた人々が多すぎる。
r366-c017 + r366-c017-2 + r366-c017-3			A1-09-2	The pleasures of childhood should in the main be such as the child extracts from his environment by means of some effort and inventiveness. Pleasures which are exciting at the same time involve no physical exertion, such, for example, as the theatre, should occur very rarely. The excitement is in the nature of a drug, of which more and more will come to be required, and the physical passivity during the excitement is contrary to instinct. A child develops best when, like a young plant, he is left undisturbed in the same soil. Too much travel, too much variety of impressions, are not good for the young, and cause them as they grow up to become incapable of enduring fruitful monotony. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.4:Boredom and excitement http://russell-j.com/beginner/HA14-060-HTML	<喜びある単調さに耐えること> 幼少期の喜びは、ほとんど、子供自身が多少の努力と創造工夫によって、自分の環境から引き出すようなものでなければならぬ。興奮は、喜びの体が、はまったく動かさないような快楽、たとえ興奮に似たものであっても与えるべきでな。この種の興奮は、娯楽に似ており、より多量に求められるようになる。興奮しているときに快楽を少しも動かさないと、本能的に反対する。子供が最もよく育つのは、若い苗木と同じく、邪魔されずに同じ土壌の中に置かれていくときである。多すぎる旅行やあまりにも、種々雑多な印象は、幼い子供たちにとってもよくない。大人になった時に、喜びある単調さに耐えることをできなくしてしまう。	[n.00**: 喜びある単調さ] (*修正: grow *up なので、「成長するにつれて」を「大人になった時に」、修正しました。) 若波文庫の安藤直雄訳(p.71)では「大きくなるにつれて、喜びある単調さに耐えることができなくなってしまう」となっていますが、こゝはやはり「英文解釈教室 p. 33の)伊藤和夫訳のように「大人になった時に」と訳すべきだと思います。	最近の若い人はテレビをあまり見なくなり、ネット(インターネット)に依存する人が少なくないと言われている。ネットはテレビのような変動的なものではないので、その面ではよいことと思われるが、ネットの利用も、見るだけで発信しないのであれば、やはり「受動的」という側面がかなりある。その点では、ブログを開発し、いろいろな情報を発信したり、意見を言ったりするのは、より能動的と言える。しかし、これを毎日書かなければという事で、あまり内容のないことを書き綴ったり、他のサイトにのっているものを、コピー＆ペーストばかりしているようでは、非生産的というが、あまり充実感でもない。
r366-c018 + r366-c018-2			A1-10	A boy or other young man who has some serious constructive purpose will endure voluntarily a great deal of boredom if he finds that it is necessary by the way. But constructive purposes do not easily form themselves in a boy's mind if he is living a life of distractions and dissipations, for in that case his thoughts will always be directed towards the next pleasure rather than towards the distant achievement. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.4:Boredom and excitement For all these reasons a generation that cannot endure boredom will be a generation of little men, of men unduly divorced from the slow processes of nature, of men in whom every vital impulse slowly withers, as though they were cut flowers in a vase. http://russell-j.com/beginner/HA14-060-HTML	<なぜ建設的な目的を持っていないか> 何らかの真面目かつ建設的な目的を持っている青少年は、目的の達成の途上で必要だとわかれれば、自主的に多量の退屈に耐えるだろう。だが、建設的な目的は、娯楽と浪費の生活を送っている少年の精神の中では、容易には芽ばえな。なぜなら、そのような場合は、考えがつかぬに次の快楽に向いて、遠くにある目的達成には向かないからだ。退屈に耐えられない世代 / 人物の世代、即ち、自然の持つていた進歩から不意に切り離された世代。花びんに生けられた切り花のように徐々に死んでいく世代となるだろう。	[n.0013: 目的の追求のためには...] 変動的な人間の悲劇 建設的な目的をもっている青少年(人間)は、追求する目的のために必要な退屈は我慢できる。所有の衝動を可能な限り少なくし、創造の衝動を最大化するのが最も幸福かつ望ましい人間の本質だと考えるラッセル	何でもよいから一生追求できる(建設的な)目的や目標を持つるとよい。何が自分にとって一生追求して行ける目的や目標になるかは、いろいろ考え、試みているうちに(10年もすれば)はつきりしてくるだろう。目標がよければ、少しずつ努力していけばよい。1年では満足いく状態にはならないだろう。3年努力してやってみても5年、5年でもうまくいかないのではあれば、とにかく10年続けてみるとうい。10年続けることができれば後はそれはど努力し、一生けられるのではなくなる。短期の利益をどうしても求めがちな。時間を大事にしない人も少なくない。生活があるので(生活費を稼がないといけないが)、自由にできる時間の価値を過小評価する人が少なくない。
r366-c019			A1-11	The special kind of boredom from which modern urban populations suffer is intimately bound up with their separation from the life of Earth. It makes life hot and dusty and thirsty, like a pilgrimage in the desert. Among those who are rich enough to choose their way of life, the particular brand of unendurable boredom from which they suffer is due, paradoxical as this may seem, to their fear of boredom. In flying from the fruitifying kind of boredom, they fall a prey to the other far worse kind. A happy life must be to a great extent a quiet life, for it is only in an atmosphere of quiet that true joy can live. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.4:Boredom and excitement http://russell-j.com/beginner/HA14-070-HTML	<実りある退屈とは？> 現代の都市に住む人びとが苦しんでいる特別な種類の退屈は、彼らが大地の生から切り離されたことと密接に結びついている。そのことによって、生活は砂漠の中の、孤独な、遅い、静か、ほこりっぽく、喉が乾くものになっている。自分のライフスタイルを選択できるほど裕福な人々の間において、特に彼らが苦しんでいる耐え難い退屈は、逆説的であるように思われるかもしれないが、退屈への恐れにその原因がある。実りある退屈から逃げることで、別な、静かな退屈の退屈の餌食になる。幸福な生活は、大部分、静かな生活でなければならぬ。なぜなら、真の喜びは、静かな雰囲気の中でのみ、生きながらえることができるからである。	[n.0014: 実りある退屈] 退屈しなきゃ時間つぶしの娯楽 / 話題になりそうなのなら何でも、視聴者や読者が喜びそうな取り上げ方をマスコ、刺激や興奮を求める現代人 / 実りある退屈とは？ 瞬間的な喜びでなく、持続する喜び、幸福感がほしい。持続する喜びや幸福(感)は、しみじみとしたものであり、刺激や興奮を求める生活では得られない。	それはさておきラッセルがここで言っているのは、青年のようにならなくてはならないのではなく、それより前の幼少期のころ、幼少期に受動的な生活態度を見つけてしまったら、青年期になつてから親がおそろしく思ってもう遅い。それゆえ、小さい頃にとりつけた生活習慣や生活態度を見につけておかないのであれば、非依に期待するのは無理かもしれないが、...

<p>r366-c020</p> <p>f 366 c 02 0-2</p>	<p>A-11/12-2</p>	<p>.... all through working hours, and still more in the time spent between work and home, the urban worker is exposed to noise, most of which, it is true, he learns not to hear consciously, but which none the less wears him out, all the more owing to the subconscious effort involved in not hearing it. Another thing which causes fatigue without our being aware of it is the constant presence of strangers. http://russell-j.com/beginner/HA15-010.HTM</p>	<p>&lt;騒音による疲労-聞かないようにしても、・・・&gt; 都会で働く人は、勤務時間中ずっと、そして通勤時間中(職場と家との間に費やれる時間)はさらにより多く、騒音にさらされる。そういう騒音の大部分は、遠くから、意識的には聞かないようにできているが、しかしそれはそれで疲労が少なくなることはなく、(それどころか)騒音を聞かないように意識しなくて(無意識に)騒音を聞き取ってしまう。騒音は、騒音のうらみとつ別の、気づかないうちに疲労をもたらし、見知らぬ他人がいつもそばにいることである。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲労」 http://russell-j.com/beginner/HA15-010.HTM</p>	<p>騒音だけに限らない。自宅にいる時と違って、他人の中にいる時は、気がつかないと思っても、やはりかなり気がつかっている。家でだらしないかこうをしていても平等な状態で(身なりを気にしないでよいので)リラックスできるが、外では気がつかざるをえない。そういう時間が長いほど知らぬうちに疲労がストレスがたまっていく。 そこで休日もしっかり休み、気分転換をし、神経疲労をとりきる必要がある。 いや、普段が大切だから、通勤時間はできるだけ短くして、通勤勤務はできるだけやらないようにして労働時間を短くし、ワーク・ライフ・バランスに気を付けて、自分の自由時間をできるだけ確保するのが肝要。 え？ それは理想論だから無意味？ べつに、それで後から後悔しないのらないが、...</p>	<p>アルコールの好きな人は「酒は百薬の長」と言うが、多くはラッセルが指摘するように、「アルコールの助けにはなにはあめない」という人が多いのではないかと。つまり、嫌なことや少量だけ飲め、ほろよい気分がやめておける人は、気分転換になり、健康にもよいが、そのようにコントロールできる人はそれほど多くはないのである。 また、お酒のせいで大きな失敗をする人も少なくない。張り詰めた神経はゆるむ必要がある。しかし、それはお酒を飲むことによって解る解決するのではなく、労働時間を短くしたり、あるいは長時間働いても「神経」が疲れないように仕事の仕方や他人との付き合い方を工夫する必要がある。</p>
<p>r366-c021</p> <p>f 366 c 02 1-2</p>	<p>A-11/12-4</p>	<p>It is amazing how much both happiness and efficiency can be increased by the cultivation of an orderly mind, which thinks about a matter adequately at the right time rather than inadequately at all times. When a difficult or worrying decision has to be reached, as soon as all the data are available, give the matter your best thought and make your decision; having made the decision, do not revise it unless some new fact comes to your knowledge. Nothing is so exhausting as indecision, and nothing is so futile. http://russell-j.com/beginner/HA15-020.HTM</p>	<p>&lt;アルコールや刺激(キャンパスや麻薬等)がないと楽しめない人々&gt; 確かに、世の中には金持の子供たちがいるが、概して彼らは、金持ちに生まれながら苦しむ可能性のある心配事と同じような心配事を、自分で首肯良作りあげている。賭けやキャンパスをやリ、父親の不良を買ひ、享楽のために睡眠を切りつめ、体を衰弱させる。いよいよ腰を落さず着けようとする頃には、父親が以前そうであったように、幸福を享受することができなくなっている。 自発的であれそうでないにせよ、自ら選んだこと必要に迫られたにせよ、現代人の大部分は、神経をすりへらす生活を送っている。そして、いつも疲れてすていかなる状態にあるため、アルコールの助けなしでは楽しむことができなくなっている。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲労」 http://russell-j.com/beginner/HA15-010.HTM</p>	<p>考えるべき時に徹底的に考える習慣。これほど幸福と効率が増すかは、驚くほどである。きちんとした精神は、ある事柄について24時間十分に考えるのでなく、考えるべき時に十分に考える。困難な、あるいはやっかいな結論を出さなければならぬ時には、すべてのデータがそろいまでになった。大部分の神経疲労は、このようなやり方で処理することが可能である。私たちのすることは、自分たちが当然だと考えているほど重要なものではない。我々が成功しようが、失敗しようが、結局、あまり大したことはない。非常に大きな悲しみでさえ乗り越えることができる。その人の生活の幸福に終止符を打ちにちがいないと思われるような悩みごとも、時がたつにつれあせてゆき、ついには、その痛切さを思い出すことさえほとんどできなくなる。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲労」 http://russell-j.com/beginner/HA15-020.HTM</p>	<p>考えるべき時に考え、日々ダラダラと考えない。これは習慣づけることによって多くの人が獲得する。たとえできるとはならないか？ もちろん一罰一夕にはいかない。 幼い時や若い時によい習慣を身に付けることは非常に大事なことであり、勉強さえできればその他のことを怠る暇もない。きちんとした精神を持った子供は育ち、大人になってから幸福感が減ってしまっているのではないかと？</p>
<p>r366-c022</p> <p>f 366 c 02 2-2</p>	<p>A-11/12-5</p>	<p>I found that the less I cared whether I spoke well or badly, the less badly I spoke, and gradually the nervous strain diminished almost to vanishing point. A great deal of nervous fatigue can be dealt with in this way. Our doings are not so important as we naturally suppose; our successes and failures do not after all matter very much. Even great sorrows can be survived; troubles which seem as if they must put an end to happiness for life fade with the lapse of time until it becomes almost impossible to remember their poignancy. But over and above these self-centred considerations is the fact that one's ego is no very large part of the world. The man who can centre his thoughts and hopes upon something transcending self can find a certain peace in the ordinary troubles of life which is impossible to the pure egoist. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.5:Fatigue http://russell-j.com/beginner/HA15-030.HTM</p>	<p>&lt;私は話か上手でも下手でも気にしなければいじいど、ますます下手に話すことが少なくなることに気がつき、徐々に神経の緊張が少なくなり、ほとんど消滅するくらいまでになった。大部分の神経疲労は、このようなやり方で処理することが可能である。私たちのすることは、自分たちが当然だと考えているほど重要なものではない。我々が成功しようが、失敗しようが、結局、あまり大したことはない。非常に大きな悲しみでさえ乗り越えることができる。その人の生活の幸福に終止符を打ちにちがいないと思われるような悩みごとも、時がたつにつれあせてゆき、ついには、その痛切さを思い出すことさえほとんどできなくなる。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲労」 http://russell-j.com/beginner/HA15-030.HTM</p>	<p>準備万端整えて人前で話しても、自意識過剰だと(話に余裕がないため)人をひきつける話ができない場合が多い。ラッセルが言うように、うまく話することができなくて大したことではないと聞き直つて、心に余裕をもつて話をすれば、気楽に話すことができ、思いがけない良い話ができたりする。話したいことを話さることができたりする。 自分に降りかかる不幸も同様に苦にすれば気がするほどよりひどくなる。 Take it easy!</p>	<p>準備万端整えて人前で話しても、自意識過剰だと(話に余裕がないため)人をひきつける話ができない場合が多い。ラッセルが言うように、うまく話することができなくて大したことではないと聞き直つて、心に余裕をもつて話をすれば、気楽に話すことができ、思いがけない良い話ができたりする。話したいことを話さることができたりする。 自分に降りかかる不幸も同様に苦にすれば気がするほどよりひどくなる。 Take it easy!</p>
<p>r366-c023</p> <p>f 366 c 02 2-3</p>	<p>A1-12</p>	<p>Our doings are not so important as we naturally suppose; our successes and failures do not after all matter very much. Even great sorrows can be survived; troubles which seem as if they must put an end to happiness for life fade with the lapse of time until it becomes almost impossible to remember their poignancy. But over and above these self-centred considerations is the fact that one's ego is no very large part of the world. The man who can centre his thoughts and hopes upon something transcending self can find a certain peace in the ordinary troubles of life which is impossible to the pure egoist. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.5:Fatigue http://russell-j.com/beginner/HA15-030.HTM</p>	<p>自己を超越するものに思考を希望を集中できる人&gt; 私たちのすることは、自分たちが当然だと考えているほど重要なものではない。我々が成功しようが、失敗しようが、結局、あまり大したことはない。非常に大きな悲しみでさえ乗り越えることができる。その人の生活の幸福に終止符を打ちにちがいないと思われるような悩みごとも、時がたつにつれあせてゆき、ついには、その痛切さを思い出すことさえほとんどできなくなる。しかし、さらにこうして自己中心的な考えに加うるに、(各個人の)自我などなく世界全体の幸福に集中する。その人の生活の幸福に終止符を打ちにちがいないと思われるような悩みごとも、時がたつにつれあせてゆき、ついには、その痛切さを思い出すことさえほとんどできなくなる。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲労」 http://russell-j.com/beginner/HA15-030.HTM</p>	<p>【n.0015：自己にとらわれない心】 自己中心的な人間(エゴイスト)や自己を過大評価する人間(不幸/自己を客観視できる人間は極端な不幸に陥らない/自分を超えるものの視点で(たとえ神の視点ではなく)世界や自己をみられる人間は幸福</p>	<p>ラッセルが自己を超越するものとしていっているのは一神教の「神」(たとえばキリスト教のイエスなど)ではない。アインシュタインの場合と同じく、宇宙的宗教像でもよい。宇宙の広大さから考えれば一人の人間はごくちっぽけな塵のようなものであるが、そんなちっぽけな人間が宇宙の広大な宇宙を想像することができるといふ不思議な... 等々。</p>
<p>r366-c023</p> <p>f 366 c 02 3</p>	<p>A1-13</p>	<p>The harm that is attributed to overwork is hardly ever due to that cause, but to some kind of worry or anxiety. The trouble with emotional fatigue is that it interferes with rest. The more tired a man becomes, the more impossible he finds it to stop. One of the symptoms of approaching nervous breakdown is the belief that one's work is terribly important; and that to take a holiday would bring all kinds of disaster. If I were a medical man, I should prescribe a holiday to any patient who considered his work important. The nervous breakdown which appears to be produced by the work is, in fact, in every case that I have ever known of personally, produced by some emotional trouble from which the patient attempts to escape by means of his work. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.5:Fatigue http://russell-j.com/beginner/HA15-040.HTM</p>	<p>&lt;神経衰弱が近づいた徴候&gt; 過労が原因だとされる害はほとんど過労によるものではなく、何らかの悩みや心配によるものである。情緒的な疲労のやっかいな点は、休息を妨げるということだ。人は疲れば疲れるほど仕事をやめることができなくなる。神経衰弱が近づいた徴候の一つは、自分の仕事は非常に重要であり、休暇をとったりすれば種々の災難をもたらすことになる、と思ひこむことである。もし私が医者なら、自分の仕事は重要だと思っているすべての患者に対し、休暇をとるよう指示する(処方する)だろう。仕事によって生じたように思われる神経衰弱は、実は私が個人的に知っているいかなる場合においても、何らかの情緒的な心配事によって生じたものであり、患者は、仕事をすることでそれらの心配事から逃れようとしていたのである。</p>	<p>【n.0016：神経衰弱の兆候】 自己を過大評価する人間の不幸/仕事中毒の原因は？ / 自分の仕事に対する自己評価と他人による評価のギャップ / 神経衰弱の兆候</p>	<p>One of the symptoms of 始まる3つ目の文は、ラッセルの格言・警句と、よく引用されるものです。 現代人は農業社会の時代比べれば、肉体労働という側面から見れば、天国と地獄くらいの差があります。しかし、神経疲労は、昔とくらべ格段に増えています。 そうして、神経の疲労度が増すにつれて適切な判断ができなくなり、思い切つて休むことができなくなってしまう。本当は、思いきつて休み、神経疲労が回復してから一生懸命仕事に取り組んだほうが能力がよりだけなく、よい考えも浮かび、良い仕事ができるのです。ワーク・ライフ・バランス(work-life balance: 仕事と生活の調和)の考え方が、社会全体に広がっていくことが望まれます。</p>
<p>r366-c024</p>	<p>A1-13/14</p>	<p>When some misfortune threatens, consider seriously and deliberately what is the very worst that could possibly happen. Having looked this possible misfortune in the face, give yourself sound reasons for thinking that after all it would be no such very terrible disaster. Such reasons always exist, since at the worst nothing that happens to oneself has any cosmic importance. When you have looked for some time steadily at the worst possibility and have said to yourself with real conviction, "Well, after all, that would not matter so very much", you will find that your worry diminishes to quite extraordinary extent. http://russell-j.com/beginner/HA15-050.HTM</p>	<p>&lt;起こりうる最悪の事態を想定&gt; 何らかの災難が迫ってきたときには、起こりうる最悪の事態はどのようなものであるか、真摯かつ慎重に考えてみるといい。起こりうる災難を直視した後は、それは結局、それほど恐ろしい災難ではないだろうとみなす。確定的、しっかりとした理由を見つければよい。そのような理由は、常に存在している。なぜなら、最悪の場合でも人間に起こることは、何ひとつ宇宙的な重要性を持つものではないからである。しかし、最悪の可能性をしっかり見ると、真に確信をもって、「たとえそれがあっても、それはそれほど恐ろしい災難ではないだろう」といって、自分自身に言いかけたとき、あなたは自分の心配事がまったく驚くほど減つていくことに気づくだろう。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲労」 http://russell-j.com/beginner/HA15-050.HTM</p>	<p>逃げられないと思つたら、無駄な抵抗をやめて、積極的の問題に対処したほうがよい。その際、最悪の事態を予想し、最悪の事態が起こつてもなんとかなると思つたら、恐怖心や不安がかなり少なくなることで済みますので、よい考えも浮かび、良い仕事ができるのです。ワーク・ライフ・バランス(work-life balance: 仕事と生活の調和)の考え方が、社会全体に広がっていくことが望まれます。</p>	<p>現実を直視しないと、つまり自分の不幸の原因を徹底的に考えずに、仕事で忙しい、ということに仕事に「逃避」すると、神経疲労がますますひどくなっていきます。 自分が認めたくない事実や感情は、多くの人にあります。しかし、多少キツくても現状を直視し、不幸の原因を時間にかけてなくしていくことが賢明です。そういった努力を日直していれば、そのうちさつと生きていくことがずつと楽になるのではないのでしょうか？</p>

★	↑ 366 c 02 5	○	A1-13/14-2	R366	<p>Now every kind of fears grows worse by not being looked at. The effort of turning away one's thoughts is a tribute to the horribleness of the spectre from which one is averting one's gaze; the proper course with every kind of fear is to think about it rationally and calmly, but with great concentration, until it has become completely familiar. In the end familiarity will blunt its terrors; the whole subject will become boring, and our thoughts will turn away from it, not, as formerly, by an effort of will, but through mere lack of interest in the topic. http://russell-j.com/beginner/HA15-060.HTM</p> <p>* spectre = specter (名)；幽霊：(心に浮かぶ)恐ろしいもの / avert (動) (抑えなを)；そらす blunt (動)；鈍くする；鈍らせる</p>	<p>&lt;見て見ぬふりをしないほうがいい&gt; 恐怖はどのようなものであれ、直視しないことによつてよれは、自らの心にかけてい。考えよ、それと努力すれば、目をそむけようとしている幽霊の恐ろしさが一段と増してくる。あらゆる種類の恐怖に対処する正しい恐怖は、理性的かつ平静に、しかし極力集中的に、その恐怖がつかかり身近なものになるまで考えることである。つまり、怖いものは、怖いままに、怖いままに、離れてくる。(そうして)その事件がまったく退屈なものとなり、考えがそこからそれていく。それも、以前のように、意志的に努力したからではなく、ただ、そういう難目に興味がなくなったからである。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲労」 http://russell-j.com/beginner/HA15-060.HTM</p>	<p>現実を直視したくないということで、見て見ぬふりをすると、糸計にまづい状態になりやすいというお話 いかなることにおいても現実を直視したほうがいいが、それがあまりにも辛いあるいは恐ろしいという場合には、少しずつならしていけば、いずれ慣れてきて正面から対処できるようになるはずである。いつれにして、現実や事実を直しく認識することは大事であり、まず最初にやるべきことである。</p>	
★	↑ 366 c 02 6 + ↑ 366 c 02 6-2 イラスト 画像	○	A1-14	R366	<p>A very frequent source of fatigue is love of excitement. If a man could spend his leisure in sleep, he would keep fit, but his working hours are dreary, and he feels the need of pleasure during his hours of freedom. The pleasures which are easiest to obtain and most superficially attractive are mostly of a sort to wear out the nerves. Desire for excitement, when it goes beyond a point, is a sign either of a twisted disposition or of some instinctive dissatisfaction. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.5:Fatigue http://russell-j.com/beginner/HA15-080.HTM</p>	<p>&lt;最も手に入れやすく、表面的に最も魅力的な娯楽&gt; 疲労の原因は、非常に多くの場合、興奮を好むことにある。余暇を睡眠に費やせるならば、人間はいつも健康を保てるだろう。休んでいる間は、自由な時間も、娯楽の必要を感じる。困ったことに、最も手に入れやすく、表面的に最も魅力的な娯楽は、大部分、神経を消耗する種類のものである。興奮への欲求も、限度を越える場合は、性格がひねくれているか、あるいは、何か本能的に満たされないものがあるか、いずれかの徴候である。 http://russell-j.com/beginner/HA15-080.HTM</p>	<p>【n.0017：興奮への欲求】 ・興奮や強い刺激を求める現代人 / 過度な興奮を求めたい、日常生活あるいは仕事がつまらないから？ ・スポーツなどに対する興奮はまだよいが、大きな事件が起こると興奮 = 喜びを感じるようになってしまったら・・・</p>	<p>誰でも刺激や興奮を求めるが、限度を越えなければそれほど問題ではない。しかし、刺激に慣れるとより強い刺激を求めるようになり、感度が少しずつ麻痺していく。マスコミは面白がってそういう傾向を助長する。低俗番組もそう。非常に娯楽なものになってから初めて、やり過ぎだと批判されたり、指摘を受けて自己反省したりする。 たとえば、最近多い反韓、反中国、反ロシアの言動も、愛国心の衣をかぶっているものが少なくない。ラッセルがいう「性格がひねくれている」か「何だか満たされていないものがあり」(生理的に好まない)外国人に不満をぶつけている。としが思えないような「愛国的な」評論家も少なくない。</p>
△			A1-14/15		<p>One of the worst features of nervous fatigue is that it acts as a sort of screen between a man and the outside world. Impressions reach him, as it were, muffled and muted; he no longer notices people except to be irritated by small tricks or mannerisms; he derives no pleasure from his meals or from the sunshine, but tends to become tensely concentrated upon a few objects and indifferent to all the rest. This state of affairs makes it impossible to rest, so that fatigue continually increases until it reaches a point where medical treatment is required. http://russell-j.com/beginner/HA15-090.HTM</p>	<p>&lt;神経疲労の最悪の特徴の一つ&gt; 神経疲労の最悪の特徴の一つは、神経疲労は人と外界をへたなぬき、その間の遮断がある。人間の幸福を増やしたいと思ふ人は誰でも、贅美の情熱を増やし、'ねたみ'を減らしたいと願わなければならない。 出典：ラッセル『幸福論』第6章「ねたみ」 http://russell-j.com/beginner/HA16-030.HTM</p>	<p>疲労がたまると仕事の能率が悪くなるだけでなく、大きな失敗をする危険性もでてくる。また、周囲の人の言葉で苦しむのを待つ余裕もなく、いやいや、疲れがたまっている場合は休息あるいは休養をとったほうがいい。</p>	
★	↑ 366 c 02 7 + ↑ 366 c 02 7-2	○	A1-15	R366	<p>Of all the characteristics of ordinary human nature envy is the most unfortunate; not only does the envious person wish to inflict misfortune and do so whenever he can with impunity, but he is also himself rendered unhappy by envy. Instead of deriving pleasure from what he has, he derives pain from what others have. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.6:Envy http://russell-j.com/beginner/HA16-030.HTM</p>	<p>&lt;ねたみの習慣の形成&gt; 通常の人間性の特徴の中で、'ねたみ'が最も不幸なものである。'ねたみ'深い人は、他人に災いを与えたいと思いと、かめられることなく(罰を受けることなく)できなく、またはいってやるさうなだけでなく、'ねたみ'によって、自分自身をも不幸にする。'ねたみ'深い人は自分を持っているものから喜びを引き出すかわりに、他人が持っているものから苦しみを引き出す。 自分にはないものをいろいろの人のなかに見つけ、多様な羨望、すなわち、羨望の質がある。人間の幸福を増やしたいと思う人は誰でも、贅美の情熱を増やし、'ねたみ'を減らしたいと願わなければならない。 出典：ラッセル『幸福論』第6章「ねたみ」 http://russell-j.com/beginner/HA16-030.HTM</p>	<p>【n.0018：妬み深い人の不幸】 嫉妬を始めとした妬み(ねたみ)は不幸の主要な原因の一つ / 客観的に見たら幸福はずっと周囲から思われる人も、ねたみにより、自分(自分)を不幸にしてしまう</p>	<p>ねたみ深い人/嫉妬深い人は態度や顔の表情にあらわれやすいのでわかりやすいですね。 'ねたみ'によって、自分自身をも不幸にする。'ねたみ'深い人は自分を持っているものから喜びを引き出すかわりに、他人が持っているものから苦しみを引き出す。'というところで、ねたみの対象となった人を追い落とすことができず、気持ちよくないと感じるかも知れないですが、結局は自分を不幸にしてしまう。。</p>
△			A1-15/16		<p>Fortunately, however, there is in human nature a compensating passion, namely that of admiration. Whoever wishes to increase human happiness must wish to increase admiration and to diminish envy. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.6:Envy http://russell-j.com/beginner/HA16-030.HTM</p>	<p>&lt;ねたみの習慣の形成&gt; 'ねたみ'は、幼少期における不幸によって著しく助長されると思われ。兄弟姉妹の誰かが自分よりもかわいがられているのを発見(自慚)した子供は、'ねたみ'の習慣を身につける。人間性として、人間は自分自身に比べて、他人が持っている不公平を捜しまわり、不公平が起これば即座に認知し、起こらなければ不公平を想像する。 出典：ラッセル『幸福論』第6章「ねたみ」 http://russell-j.com/beginner/HA16-040.HTM</p>	<p>自分にもないものをいろいろの人のなかに見つけ、多様な羨望、すなわち、羨望の質がある。人間の幸福を増やしたいと思う人は誰でも、贅美の情熱を増やし、'ねたみ'を減らしたいと願わなければならない。 現実には、組織の中の良い子(上司の間違った意見には反対しないこと)により「棟の玉棟」を生み出す人が少なくない。 兄弟の仲が(大人になってからも)悪いのは、両親のいづれか(あるいは両方)が子供への接し方の問題があったという場合が多いと思われる。両親がいづれかの子どもをえこひいきすれば、子どもは嫉妬に感じひがみやすくなる。親が口で「兄弟仲良くしなさい」と何度いっても、虚しくひびき、効果はほとんどなさそう。</p>	
★	↑ 366 c 02 8	○	A1-15/16-2		<p>I think envy is immensely promoted by misfortunes in childhood. The child who finds a brother or sister preferred before himself acquires the habit of envy, and when he goes out into the world looks for injustices of which he is the victim, perceives them at once if they occur, and imagines them if they do not. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.6:Envy http://russell-j.com/beginner/HA16-040.HTM</p>	<p>&lt;ねたみの習慣の形成&gt; 'ねたみ'は、幼少期における不幸によって著しく助長されると思われ。兄弟姉妹の誰かが自分よりもかわいがられているのを発見(自慚)した子供は、'ねたみ'の習慣を身につける。人間性として、人間は自分自身に比べて、他人が持っている不公平を捜しまわり、不公平が起これば即座に認知し、起こらなければ不公平を想像する。 出典：ラッセル『幸福論』第6章「ねたみ」 http://russell-j.com/beginner/HA16-040.HTM</p>	<p>自分にもないものをいろいろの人のなかに見つけ、多様な羨望、すなわち、羨望の質がある。人間の幸福を増やしたいと思う人は誰でも、贅美の情熱を増やし、'ねたみ'を減らしたいと願わなければならない。 現実には、組織の中の良い子(上司の間違った意見には反対しないこと)により「棟の玉棟」を生み出す人が少なくない。 兄弟の仲が(大人になってからも)悪いのは、両親のいづれか(あるいは両方)が子供への接し方の問題があったという場合が多いと思われる。両親がいづれかの子どもをえこひいきすれば、子どもは嫉妬に感じひがみやすくなる。親が口で「兄弟仲良くしなさい」と何度いっても、虚しくひびき、効果はほとんどなさそう。</p>	
★	↑ 366 c 02 9	○	A1-16	R366	<p>The habit of thinking in terms of comparisons is a fatal one. When anything pleasant occurs it should be enjoyed to the full, without stopping to think that it is not so pleasant as something else that may possibly be happening to someone else. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.6:Envy http://russell-j.com/beginner/HA16-050.HTM</p>	<p>&lt;他人と比較してものを考える習慣は、致命的な習慣&gt; 他人と比較してものを考える習慣は、致命的な習慣である。何でも楽しいことが起これば、大いに楽しむべきであり、これは、よその誰かに起こっているかもしれないことほど楽しくないかもしれないことと、立ち止まって考えるべきではない。 http://russell-j.com/beginner/HA16-040.HTM</p>	<p>【n.0019：他人と比較する習慣】 ・'賢い'あうことには、良い面と悪い面がある ・限られたパイを奪い合う競争(所有的衝動の助長)はよくないが、純粋な学問芸術活動のように、競争しても資源が減らない競争(創造的衝動の助長)は大部分はいいものである。 ・前者の競争を促進し、格差(国家間、階級間、男女間 / 経済、教育、その他いろいろの格差)を大きくしようとする、競争哲学の信奉者たち。</p>	<p>自分は自分(他人)は人(他人)ということ、他人と比較してものを考える習慣がまったくなければ喜ばしい。そういう習慣が見についているが、なんとが抜けていたしと努力しているのなら、きつとそううち抜けたら。しかし、そういう習慣があるのに、それが自分を不幸にしているに気づいていないとしたら「重症」である。</p>
★	↑ 366 c 03 0	○	A1-17	R366	<p>Envy, in fact, is one form of a vice, partly moral, partly intellectual, which consists in seeing things never in their merits, but only in their relations. I am earning, let us say, a salary sufficient for my needs. I should be content, but I hear that someone else whom I believe to be in no way my superior is earning a salary twice as great as mine. Instantly, if I am of an envious disposition, the satisfactions to be derived from what I have grow dim, and I begin to be eaten up with a sense of injustice. For all this the proper cure is mental discipline, the habit of not thinking profitless thoughts. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.6:Envy http://russell-j.com/beginner/HA16-050.HTM</p>	<p>&lt;'ねたみ'易い人のための治療薬&gt; 'ねたみ'の実態の大部分は道徳的・倫理的な悪徳の一形態であって、その本質は、決してものを「それそのもの」として見ず、他の関係において見ることにある。たとえば、私は必要を満たすだけの給料をもらっているに仮定しよう。私はその給料で満足すべきだが、どう考えても自分より優秀だと感じる人間が私の2倍の給料をもらっていることを耳にする。(すると)私がねたみ深い人間であれば、即座に、自分の持っているものから得られる満足は色あせ、不公平感にとらわれ始める。そういう事態に対する適切な治療薬(治療法)は、精神を訓練することであり、'有益なことは考えない習慣'(を身につけること)である。</p>	<p>【n.0020：妬みの原因】 比較・競争・比較・学問・学問の世界においても、他のものと比較して考えることは、有益な方法(該)である。 'しかし、他人(の持ち物、容顔、その他)に対する'妬み'は、他の人との比較でものを見る習慣の弊害であり、不幸の大きな原因となる</p>	<p>通常なら、'ねたみ'は道徳的・倫理的に善くない(悪徳だ)と言っただけだろうが、ここではラッセルらしく、一部は知的な悪徳(「その本質は、決して物事をそれそのものとして見ず、他の関係において見ること)だと指摘する。その具体例として、自分の給料とライバルの給料との比較がされる。ラッセルはよくわかる「なえ話」をいって、天才であり、世界によく知られているたとえ話が美にたくさん存在する。</p>
↑ 366 c 03 1			A1-17/18		<p>All bad things are interconnected, and any one of them is liable to be the cause of any other; more particularly fatigue is a very frequent cause of envy. When a man feels inadequate to the work he has to do, he feels a general discontent which is exceedingly liable to take the form of envy towards those whose work is less exacting. One of the ways of diminishing envy, therefore, is to diminish fatigue. But by far the most important thing is to secure a life which is satisfying to instinct. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.6:Envy http://russell-j.com/beginner/HA16-080.HTM</p>	<p>&lt;悪の枢軸? 「疲労」と「妬み」&gt; 悪いものはみな、互いに関連しており、いずれ(の悪しきもの)も、他の(悪しきもの)原因になりやすい。特に、'疲労'は、非難しげに、'ねたみ'の原因となる。人は、やらなければならない仕事を感ずる力が自分には、十分ないと感じると、'漠然とした不満'を感じ、その不満は、'自分よりも楽な仕事をしている人びとに対する'ねたみ'の形をとります。それゆえ、'ねたみ'を減らす方法の一つは、'疲れ'を減らすことである。しかし、'ほかに重要なことは、'本能'を満足させる生活を確保することである。 出典：ラッセル『幸福論』第6章「ねたみ」 http://russell-j.com/beginner/HA16-080.HTM</p>	<p>過度な疲れ(疲労)は快眠につながるのですが、'過労'は心身ともに悪影響を及ぼす。'ねたみ'の原因にもなる。また、疲労が少なくなるように注意すれば、'ねたみ'の原因も減らせるが、ラッセルの言うように、それだけでは根本的な解決にはあない。 簡単ではないが、'本能'を満足させる生活、'を'できるだけ確保できるように、日々'努力'が必要。努力するのでは疲労がたまるのでないかと言われるかも知れないが、ラッセルが言いたいのは、自分の好きなことであれば努力は気にならない(それほど疲れにくい)ので、努力の方向を間違えてはいけないということだとと思われる。</p>	

<p>r 366 c 03 2</p>		<p>A1-17/18-2</p>	<p>Why is propaganda so much more successful when it stirs up hatred than when it tries to stir up friendly feeling? The reason is clearly that the human heart as modern civilisation has made it is more prone to hatred than to friendship. And it is prone to hatred because it is dissatisfied, because it feels deeply, perhaps even unconsciously, that it has somehow missed the meaning of life, that perhaps others, but not we ourselves, have secured the good things which nature offers man's enjoyment. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.6:Envy http://russell-j.com/beginner/HA16-080.HTM</p>	<p>「ねたみ」をかきたてる宣伝 宣伝は、反対的な感情をきき立てようとするときよりも、憎しみをきき立てようとするときよりも効果的である。なぜなら、現代文明が作りあげた人間の心は、友情よりも憎しみに傾きやすいからである、というは明らかである。そして、人間の心が憎しみに傾きやすいのは、人々が満たされていないからであり、また、他人の幸福を羨望し、また人間が享受すべき自然の恵みを見失っているからである。また人間が享受すべき自然の恵みを見失っているものもある。自分たち自身ではなく、たぶん他人のひとが確保してしまっていると、心の奥底で感じているからである。 出典 ラッセル「幸福論」第6章「ねたみ」 http://russell-j.com/beginner/HA16-080.HTM</p>	<p>相手が政府であっても、「宣伝」には最大限注意が必要である。「宣伝」にはキャッチフレーズが効果的である。権力者支配層、その他権力者であっても、憲章が進んでいる団体や組織は、同じ言葉(キャッチフレーズ)を繰り返します。「宣伝」には要注意です。 そういった意味では、メディアリテラシー教育が重要ですが、残念ながら、日本ではほとんど行われていません。政府も文部科学省も、事実と宣伝を峻別し、自分で正しい判断ができるような教育(よりも、(自意識が発達する前に)子供のうちに「愛国心や愛国心涵養のための歴史教育」に力を入れよう)としています。表面では「敵愾的互恵関係」とかなんとか繰り返して書いても、経済以外は、中国や韓国をけなして、相対的に日本(結局は自分たち権力者)を褒めるような言動がめだちます。 n.0021: 良心とは? ・24時間「良心地球」を教わ? それもいけど、年に2、3回だけそんな気にならなければ「良心地球」に悪いことをやっているようでは・・・時々そんな気分になれば、免罪符になる? 罪滅ぼし? ・愛国(心)教育よりも、相互理解のための教育をもっとやるべき</p>		
<p>r 366 c 03 3</p>		<p>A1-18</p>	<p>Conscience has ceased to be something mysterious which, because it was mysterious, could be regarded as the voice of God. We know that conscience enjoins different acts in different parts of the world, and that broadly speaking it is everywhere in agreement with tribal custom. We know that conscience enjoins different acts in different parts of the world, and, that broadly speaking it is everywhere in agreement with tribal custom. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.7:the sense of sin http://russell-j.com/beginner/HA17-010.HTM</p>	<p>「良心とは何か?」 良心は、神秘的であったからこそ、神の声とみなされてきたのであるが、もはや神秘的なものでなくなった。「良心」は世界の異なる国々で、異なる行為を命ずるものであることを、さらにもっと大ざっぱに言えば、どこへ行っても種族の慣習と一致するものであることを、私たちは理解している。 年をとるにつれて、しだいに、自分の道徳規範がどこから来たものか、それに違反した場合の罰は元来どんなものであったか、それについて自分の罪意識を捨ててしまおう、とともなかつたし、またそれを犯せば何か恐ろしいことがわが身に降りかかるといって考えることもやめなかつた。</p>	<p>「n.0022 良心の由来?」 自分の倫理観、道徳観や良心の由来は? / 母親の言の葉に育ち、世帯を仕度した母親や乳母の信じていた悪が、自然道徳感からいって、子供に補完づけられ・・・ / 不合理なタブーや迷信を子供時代に補完づけられ・・・ / 意識と無意識との関係</p>		
<p>r 366 c 03 4</p>	<p>△</p>	<p>A1-19</p>	<p>Gradually as he grew older he forgot where his moral code had come from and what had originally been the penalty for disobeying it, but he did not throw off the moral code or cease to feel that something dreadful was liable to happen to him if he infringed it. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.7:the sense of sin http://russell-j.com/beginner/HA17-030.HTM</p>	<p>「理性の声と良心?」 良心を押しつけないと告げる行為について、あなたが後悔を感じはじめるようなときは、いつでも、後悔の感情の原因を調べ、その不合理について、細部においてまで確信をもつべきである。 年をとるにつれて、しだいに、自分の道徳規範がどこから来たものか、それに違反した場合の罰は元来どんなものであったか、それについて自分の罪意識を捨ててしまおう、とともなかつたし、またそれを犯せば何か恐ろしいことがわが身に降りかかるといって考えることもやめなかつた。</p>	<p>「n.0022 良心の由来?」 自分の倫理観、道徳観や良心の由来は? / 母親の言の葉に育ち、世帯を仕度した母親や乳母の信じていた悪が、自然道徳感からいって、子供に補完づけられ・・・ / 不合理なタブーや迷信を子供時代に補完づけられ・・・ / 意識と無意識との関係</p>		
<p>r 366 c 03 4</p>		<p>A1-20</p>	<p>Whenever you begin to feel remorse for an act which your reason tells you is not wicked, examine the causes of your feeling of remorse, and convince yourself in detail of their absurdity. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.7:the sense of sin http://russell-j.com/beginner/HA17-060.HTM</p>	<p>「良心の由来?」 良心を押しつけないと告げる行為について、あなたが後悔を感じはじめるようなときは、いつでも、後悔の感情の原因を調べ、その不合理について、細部においてまで確信をもつべきである。 年をとるにつれて、しだいに、自分の道徳規範がどこから来たものか、それに違反した場合の罰は元来どんなものであったか、それについて自分の罪意識を捨ててしまおう、とともなかつたし、またそれを犯せば何か恐ろしいことがわが身に降りかかるといって考えることもやめなかつた。</p>	<p>「n.0023 良心の由来?」 自分の倫理観、道徳観や良心の由来は? / 母親の言の葉に育ち、世帯を仕度した母親や乳母の信じていた悪が、自然道徳感からいって、子供に補完づけられ・・・ / 不合理なタブーや迷信を子供時代に補完づけられ・・・ / 意識と無意識との関係</p>	<p>社会一般に受け入れられている考え方と異なる考えを持つ場合には、ほとんどの場合、自己ではほとんど行われていない、弱気になりながら(時には自分が間違っているかも知れないと思ったりする)。しかし、今週読となつて、これまで以上に多くの人に多くの人々が、以前は非難されてきた考え方、このことを、歴史を勉強することによって学べば、勇気が湧いてくる。</p>	
<p>r 366 c 03 5 + r 366 c 03 5-2</p>	<p>★</p>	<p>A1-21</p>	<p>When a rational conviction has been arrived at, it is necessary to dwell upon it, to follow out its consequences, to search out in oneself whatever beliefs inconsistent with the new conviction might otherwise survive., and when the sense of sin grows strong, as from time to time it will, to treat it not as a revelation and a call to higher things, but as a disease and a weakness, unless of course it is caused by some act which a rational ethic would condemn. I am not suggesting that a man should be destitute of morality, I am only suggesting that he should be destitute of superstitious morality, which is a very different thing. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.7:the sense of sin http://russell-j.com/beginner/HA17-070.HTM</p>	<p>「迷信に基づくような道徳は必要ない?」 合理的な確信に達したときは、その確信について十分考え、その帰結に徹底的に従い、新しい確信と矛盾するような信念が別の状態で生き残っていないかどうか、自分の心の中を探求しつづける必要がある。また、罪意識が強くなくなったときは、たとえときが来るとしても、それらを神からの啓示であるとか、高次のものへの誘い(呼びかけ)であるというように考えずに、... 当然のことながら、その罪意識が合理的な道徳が非難するようなある種の行為によつて引き起こされたものでない限り、... それは、(28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.7:the sense of sin http://russell-j.com/beginner/HA17-070.HTM</p>	<p>「n.0024 良心の由来?」 人は皆、多くの誤解や迷信や思い込みを持っている / 大人になってから、小さい頃からの思い込みが間違っていることに気がつくことが時々あり、気づいて恥ずかしくなったり、突っ当たりする / そのような新しい確信と矛盾することはよくある / しかし、それ以上考えることなく、多くの迷信や誤解の上に乗っかる</p>		
<p>A1-21/22 A-21をずらしたものに</p>	<p>△</p>	<p>A1-21/22</p>	<p>Most men, when they have thrown off superficially the superstitions of their childhood, think that there is no more to be done. They do not realise that these superstitions are still lurking underground. When a rational conviction has been arrived at, it is necessary to dwell upon it, to follow out its consequences, to search out in oneself whatever beliefs inconsistent with the new conviction might otherwise survive, ... (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.7:the sense of sin http://russell-j.com/beginner/HA17-070.HTM</p>	<p>「無意識下に潜伏している幼少時代の迷信?」 大部分の人は、幼少時代の迷信を表面的に「投げ捨ててしまおう」と、なすべしとそれですべておぼろげに考えている。彼らは、こいつら迷信がなおも地下に潜伏している。無意識下に潜伏している迷信を、合理的な確信に達したときは、その確信について十分考え、その帰結に徹底的に従い、新しい確信と矛盾するような信念が別の方法で生き残っていないかどうか、自分の心の中を探求してみることが必要である。「罪の意識」 http://russell-j.com/beginner/HA17-070.HTM</p>	<p>「n.0024 良心の由来?」 人は皆、多くの誤解や迷信や思い込みを持っている / 大人になってから、小さい頃からの思い込みが間違っていることに気がつくことが時々あり、気づいて恥ずかしくなったり、突っ当たりする / そのような新しい確信と矛盾することはよくある / しかし、それ以上考えることなく、多くの迷信や誤解の上に乗っかる</p>		
<p>r 366 c 03 6 + r 366 c 03 6-2 + r 366 c 03 6-3</p>	<p>★</p>	<p>A1-22</p>	<p>Nothing so much diminishes not only happiness but efficiency as a personality divided against itself. The time spent in producing harmony between the different parts of one's personality is time usefully employed. I do not suggest that a man should set apart, say, an hour a day for self-examination. This is to my mind by no means the best method, since it increases self-absorption, which is part of the disease to be cured, for a harmonious personality is directed outward. What I suggest is that a man should make up his mind with emphasis as to what he rationally believes, and should never allow contrary irrational beliefs to pass unchallenged or obtain a hold over him, however brief. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.7:the sense of sin http://russell-j.com/beginner/HA17-080.HTM</p>	<p>「不合理な信念に支配されてはならない?」 人格の分裂ほど、幸福のみならず、効率も減らすものはない。自分の人格(性格)の異なる諸部分の間に調和を生み出すために費やされる時間は、有益に費やされた時間である。 私は、たとえば、人は一日一時間、自省のために時間を確保しておくべきだと、提案しているのではない。私の考えでは、これは決して最善の方法ではない。なぜなら、自省は、自己専念(自己)と自己陶酔を増大させるものであり、調和のとれた性格は外に向かうものであるからである。私が勧めたいのは、自分が合理的に信じていることについては、断固たる決意を持っているべきであり、たとえそれが不合理な信念を異議なく見過ごしたり、たとえつづかまでも、不合理な信念に支配されたりしてはならない、ということである。</p>	<p>「n.0025 人格の分裂?」 ・大衆の前では、「偉い」人たちは思ったことを言えない「我慢時代?」 ・高い地位や高給は、思ったことを言えない「我慢時代?」 ・政治家にとって嘘は必要悪? ・個人(自分)や家族の幸福よりも権力を振るう方が魅力的? ・他人に抜かされるのが一番幸福? しかしそのような、他人との格差に満足する態度は、社会にとってだけなく、その人自身にとっても良い結果をもたらさないのではないか?</p>	<p>NHKは、初井勝人が会長になってから危機的状況にある。NHKは受信料で成り立っている公共放送であり、言論放送ではないはずだが、その会長は、現政権の「意向」で選ばれている。初井会長の意向を多くの人々が批判しているが、政府や保守政党や産業界の御用新聞である産経新聞などは、「あざむきをとるな」と初井氏を擁護している。会長が誰になろうと、自由に取材や放送、報道ができれば大きな影響はないが、そういうことはありえず、初井会長の意向を「ヒラメ」のように目上についている官僚的な人間)がかなり少なからず出てくる。そうして、しだいに組織が変化していく。そのような組織においては、正しいと思っていることが言えない(自己規制するようになる)ので、人格の分裂を引き起こしてしまう。NHKは冬の時代に入ったようである。初井会長がやめざるを得なくなり、また新しい会長になった時、初井会長の悪行をまとめて放送できるように、材料(憶測ではなく、具体的な証拠)を取集め、録音し、NHKスペシャルで放送してもらえればと思う。</p>	
<p>r 366 c 03 7 + r 366 c 03 7-2</p>	<p>★</p>	<p>A1-23</p>	<p>In passionate love, in parental affection, in friendship, in benevolence, in devotion to science or art, there is nothing that reason should wish to diminish. The rational man, when he feels any or all of these emotions, will be glad that he feels them and will do nothing to lessen their strength, for all these emotions are parts of the good life, the life, that is, that makes for happiness both in oneself and in others. There is nothing irrational in the passions as such, and many irrational people feel only the most trivial passions. No man need fear that by making himself rational he will make his life dull. On the contrary, since rationality consists in the main of internal harmony, the man who achieves it is freer in his contemplation of the world and in the use of his energies to achieve external purposes than is the man who is perpetually hampered by inward conflicts. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.7:the sense of sin http://russell-j.com/beginner/HA17-090.HTM</p>	<p>「内面の葛藤によつて絶えず邪魔されている?」 情熱的な恋愛、親としての愛情、友情、慈悲心、科学や芸術に対する献身などの中には、理性が滅したと思つても何の損もなし。情熱的な人間は、これらの情熱のいずれか一つまたは全部を感じるとき、そのことを喜びとするのであり、そうした情熱の強さを減らすようなことは何もしないだろう。なぜなら、これらの感情は全て、善い生活、すなわち、自分自身及び他人の、双方の幸福を促進する生活の一部であるからである。つまり、情熱そのものには、不合理なところは全くないが、非合理的な人びとの中には、こつこつと情熱が感じない人が多数存在する。自分を合理的にすることで生活がつまらなくなる、などと恐れる必要はない。逆に、合理性は主として内面的調和から成り立つものである以上、内面的調和を達成した人は、内面の葛藤によつて絶えず邪魔されているよりも、世界の良しな面について、外的な目的を達成するためのエネルギーの使い方において、よりいっそう自由である。</p>	<p>n.0026 内的調和 情緒や感性を重視し、理性や合理主義を非難する人々 / 理性や合理主義についての決め付けや無理解 / 情熱的な恋愛、親としての愛情、友情、慈悲心、科学や芸術に対する献身などの中には、理性が滅したと思つても何の損もなし。情熱的な人間は、これらの情熱のいずれか一つまたは全部を感じるとき、そのことを喜びとするのであり、そうした情熱の強さを減らすようなことは何もしないだろう。なぜなら、これらの感情は全て、善い生活、すなわち、自分自身及び他人の、双方の幸福を促進する生活の一部であるからである。つまり、情熱そのものには、不合理なところは全くないが、非合理的な人びとの中には、こつこつと情熱が感じない人が多数存在する。自分を合理的にすることで生活がつまらなくなる、などと恐れる必要はない。逆に、合理性は主として内面的調和から成り立つものである以上、内面的調和を達成した人は、内面の葛藤によつて絶えず邪魔されているよりも、世界の良しな面について、外的な目的を達成するためのエネルギーの使い方において、よりいっそう自由である。</p>		

<p>r 366 c 03 8 + r 366 c 03 8-2</p>	<p>A1-24</p>	<p>The man divided against himself looks for excitement and distraction; he loves strong passions, not for sound reasons, but because for the moment they take him outside himself and prevent the painful necessity of thought. Any passion is to him a form of intoxication, and since he cannot conceive of fundamental happiness, all relief from pain appears to him solely possible in the form of intoxication. This, however, is the symptom of a deep-seated malady. Where there is no such malady, the greatest happiness comes with the most complete possession of one's faculties. It is in the moments when the mind is most active and the fewest things are forgotten that the most intense joys are experienced. This, indeed, is one of the best touchstones of happiness. The happiness that requires intoxication of no matter what sort is a spurious and unsatisfying kind. The happiness that is genuinely satisfying is accompanied by the fullest exercise of our faculties, and the fullest realisation of the world in which we live. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.7:the sense of sin <a href="http://russell-j.com/beginner/HA17-100.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA17-100.HTM</a></p>	<p>&lt; 陶酔を必要とする幸福は見せかけのもの &gt; 自分自身に強いる人間は、興奮と気晴らしを追い求める。彼は、強い情熱を好むが、それには十分な理由があるわけではなく、しばらくの間、その情熱が私を忘れさせ、痛の折れる思考の必要性が遠ざけてくれるからである。彼にとって、いかなる情熱も陶酔の形となり、根本的な幸福などは想像できないので、彼には、苦痛からの救いはすべて陶酔の形しか可能ないように思われる。しかし、これは、根の深い病気の徴候である。このような病気のないところでは、最大の幸福は、自分の能力を最も完全に所有しているときにやってくる。最も強烈な喜びを経験できるのは、精神が最も活発で忘れることが最も少ない瞬間である。これはまさに幸福の最高の試金石の一つである。いかなる種類のものでもあり、陶酔を必要とするような幸福は、見せかけのものであり、不満足なものである。本当に満足できる幸福は、私たちの様々な能力を最大限に發揮させてくれるものであり、私たちの生きている世界を最大限に理解させてくれるものである。</p>	<p>「n.0027：陶酔を求める心」 サッカーを始めとするスポーツに対する過度な熱狂、常に興奮と気晴らしを追い求める心性、大きな天災・人災さえも・・・マスコミはそういった人間の気持や欠点を利用する。9・11、仮想の敵やスケーター・ゴードをやっつけるのスロガン、右も左も真ん中。</p>	<p>コメント 常に強い刺激や興奮を求める人は、反省してみようがよいというラッセルの指摘。 スポーツに対する興奮であればほぼ無害であろうが、それさえもただ応接対象の選手個人やグループあるいは日本が勝ちさえすればよい。そのためには相手を罵倒したり、負けた場合は応援してはばすの選手にケチをつけたりするようでは、スポーツを本当に楽しんでいるとは言えない。 オリンピックも、国を背負って立つのではなく、参加することに意義がある、といった「オリンピックの精神」はどこへやら。選手強化には1,000億円は最低必要だとか、オリンピックの経済効果は〇億円だとかいった周知の事実ばかり。東京オリンピックの第一放送権を獲得するために米国の放送局が国際オリンピック委員会に支払う放送権料は約9,000億円とのこと。日本の放送局はアメリカの放送局に二次放送権料として莫大なお金を払うことになるはず。 そういうことでは驚愕と思ったのが、東北の被災者を応援するために（被災者を招待しよう・・・）、再開場によって東京を災害に強い都市につくりかえよう・・・、とか言っている。本当にそれがメインであれば、東京オリンピックの開催意義はあるだろうか・・・。 6年以後ということであれば、東京に直下型地震がおこるが、南海トラフ大地震が起こるが、富士山が大噴火するが、いずれかの一つは起こる可能性が大きいのではないかと。（あるいはオリンピックが終わった直後かもしれないが・・・）。オリンピック開催前に、不幸にも大災害がまた起こった場合でも、また（災害から立ち直るのをはげますためにとか）何ら理由をつけて、（オリンピックを返上しないで）開催を強行するのだろうか？</p>	<p>ラッセルは、陶酔している時は本当の幸福な状態ではないといっているのではなく、幸福のためには陶酔が必須であるという。そのような状態は幸福であるとは言えないと指摘している。権力者に従順であれば困らないようにしてあげると言われても、言いたいことが言えなくなったり、やりたいことに制限がいろいろ設けられたりするようなら、得るものよりも失うものの方がずっと多い。 現在日本の多くの国民は、経済発展が第一と言っているが、そちらに目を奪われていこううちに、経済格差がますますひどくなったり、特定秘密保護法を通過してしまったり、憲法解釈を統治者、権力者の都合のよいように変える動きがあったりしても、それほど悪いようにはするはずがないと甘く考えているようでは気がつかない。ラッセルの分析は被害妄想気味な人に対する理解には役立ちます。</p>
<p>△</p>	<p>A1-24/25</p>	<p>In accordance with the doctrine of probability, different people living in a given society are likely in the course of their lives to meet with about the same amount of bad treatment. If one person in a given set receives, according to his own account, universal ill-treatment, the likelihood is that the cause lies in himself, and that he either irritates injuries from which in fact he has not suffered, or unconsciously behaves in such a way as to arouse uncontrollable irritation. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.8:Persecution mania <a href="http://russell-j.com/beginner/HA18-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA18-010.HTM</a></p>	<p>&lt; ほとんどの場合は確率論が当たっている &gt; 確率論に従えば、ある特定の社会に住んでいる異なる人びとは、一生の間には、ほぼ同量のひどい仕打ちを受けるといえるのが、ありそうなことである。ある（人間の）集合のなかの（要素である）一人が、その人自身の説明によれば、みんなが同じ仕打ちを受けているとすれば、それは多分、その原因は彼自身の中にあるのであり、実際は「危害を受けていないのに受けた」と空想しているか、あるいは、無意識的に、抑えきれない怒りを引き起こすようなふるまいをしている（注：そうしてその結果としての反応を得ている）と思われる。 出典：ラッセル『幸福論』第8章「被害妄想」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA18-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA18-010.HTM</a></p>	<p>もちろん、例外はありますのでその人がたまたま特異な経験（ありえないほどの不幸の連続、マイノリティとしての迫害、その他）をしてきた可能性はゼロではありません。しかし、ほとんどの場合は確率論が当たっています。従って、客観的にみて、自分がそういった特殊な環境、状況のなかにいると断定できない場合には、善意を保持した人に騙させたくなければ、常に冷静さを失わないように気を付ける必要があります。たとえば、冷静さを失わなければ、「オレオレ詐欺」などはふつとはひっかからないはずですが・・・？</p>	<p>自分があるがままに見てもらうよりも、少しよく見てもらいたいと思っるのは人情です。また、少しだけ悪く（低く）評価されると、少しだけではなく、かなり憤慨する人も情です。被害妄想というのは、そういった感情が極端になったものだと思います。ほとんどの人にあてはまらぬかも知れませんが、ラッセルの分析は被害妄想気味な人に対する理解には役立ちます。</p>	<p>「人の振り見て我が振り直せ」ということで、たとえ悪いものであっても、人の悪口を言う場合には、十分気を付けなければいけない、という注意喚起です。</p>
<p>△</p>	<p>A1-24/25-2</p>	<p>The person inclined to believe in luck, when he finds a hard-luck story believed, will embellish it until he reaches the frontier of credibility; when, on the other hand, he finds it disbelieved, he has merely another example of the peculiar hard-heartedness of mankind towards himself. The disease is one that can be dealt with by understanding. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.8:Persecution mania <a href="http://russell-j.com/beginner/HA18-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA18-010.HTM</a></p>	<p>&lt; 哀れな身の上話を信じるが信じないか・・・ &gt; 被害妄想の傾向のある人は、自分の哀れな身の上話を相手に信じたことがわかると、話しを面白く、信憑性を帯びてもらう限界を超えてしまふか、あるいは、反対に、自分の話が信じしてもらえないとわかると、そのことは人類（人間）が特に彼に対して冷淡である一例になるだけのことである。この病気は、（病気の原因の）理解によってのみ治療できるものである。 出典：ラッセル『幸福論』第8章「被害妄想」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA18-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA18-010.HTM</a></p>	<p>自分があるがままに見てもらうよりも、少しよく見てもらいたいと思っるのは人情です。また、少しだけ悪く（低く）評価されると、少しだけではなく、かなり憤慨する人も情です。被害妄想というのは、そういった感情が極端になったものだと思います。ほとんどの人にあてはまらぬかも知れませんが、ラッセルの分析は被害妄想気味な人に対する理解には役立ちます。</p>	<p>「完壁主義は不幸のもと」 完壁主義は長続きしない。またやめると他人と対しても完壁をもとめやすい。もつと肩の力を抜いて</p>	<p>「完壁主義は不幸のもと」 完壁主義は長続きしない。またやめると他人と対しても完壁をもとめやすい。もつと肩の力を抜いて</p>
<p>★</p>	<p>A1-25</p>	<p>We know that our friends have their faults, and yet are on the whole agreeable people whom we like. We find it, however, intolerable that they should have the same attitude towards us. We expect them to think that, unlike the rest of mankind, we have no faults. When we are compelled to admit that we have faults, we take this obvious fact far too seriously. Nobody should expect to be perfect, or be unduly troubled by the fact that he is not. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.8:Persecution mania <a href="http://russell-j.com/beginner/HA18-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA18-020.HTM</a></p>	<p>&lt; 知人への過大な期待 &gt; 私たちは、我々の友人たちは欠点はあるが、全体的に見れば、好意を持って、癒しのいい人たちであることを知っている。しかし、彼らが私たちにに対して同じ態度をとるのは耐えられないという自分を発見する。私たちは、その他の人間と異なり、私たちに欠点などない、友人たちが思ってくれることを期待する。私たちに欠点があることを認めざるを得ない場合、私たちは、この明白な事実に、あまりにも深刻に考えすぎる、いかなる人間も、完璧であるのを期待すべきではなく、また、完全でないという事実について、不当に悩むべきではない。</p>	<p>「n.0028：完璧主義は不幸のもと」 完璧主義は長続きしない。またやめると他人と対しても完璧をもとめやすい。もつと肩の力を抜いて</p>	<p>「人の振り見て我が振り直せ」ということで、たとえ悪いものであっても、人の悪口を言う場合には、十分気を付けなければいけない、という注意喚起です。</p>	<p>「人の振り見て我が振り直せ」ということで、たとえ悪いものであっても、人の悪口を言う場合には、十分気を付けなければいけない、という注意喚起です。</p>
<p>★</p>	<p>r 366 c 03 9</p>	<p>Very few people can resist saying malicious things about their acquaintances, and even on occasion about their friends; yet when people hear that anything has been said against themselves, they are filled with indignant amazement. It has apparently never occurred to them that, just as they gossip about everyone else, so everyone else gossips about them. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.8:Persecution mania <a href="http://russell-j.com/beginner/HA18-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA18-020.HTM</a></p>	<p>&lt; 人の振り見て我が振り直せ &gt; 知人について、時には友人についてさえ、意地悪いことを言わずにいられない人は、実に少ない。それにもかかわらず、人は、誰かが自分の悪口を言ったということを耳にすると、怒りと驚きでいっぱいになる。彼らがほかのすべての人の噂話をするように、ほかのすべての人も彼らの噂話をする、ということをどうやら彼らは考えたことがないらしい。 出典：ラッセル『幸福論』第8章「被害妄想」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA18-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA18-020.HTM</a></p>	<p>「人の振り見て我が振り直せ」ということで、たとえ悪いものであっても、人の悪口を言う場合には、十分気を付けなければいけない、という注意喚起です。</p>	<p>「人の振り見て我が振り直せ」ということで、たとえ悪いものであっても、人の悪口を言う場合には、十分気を付けなければいけない、という注意喚起です。</p>	<p>「人の振り見て我が振り直せ」ということで、たとえ悪いものであっても、人の悪口を言う場合には、十分気を付けなければいけない、という注意喚起です。</p>
<p>△</p>	<p>A1-25/26-2</p>	<p>If we were all given by magic the power to read each other's thoughts I suppose the first effect would be that almost all friendships would be dissolved; the second effect, however, might be excellent, for a world without any friends would be felt to be intolerable, and we should learn to like each other without needing a veil of illusion to conceal from ourselves that we did not think each other absolutely perfect. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.8:Persecution mania <a href="http://russell-j.com/beginner/HA18-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA18-020.HTM</a></p>	<p>&lt; 皆読心術を身につけたら &gt; もし私たちがみんな魔法によってお互いの考えを読み取る力を与えられたとしたら、その最初の効果は、ほとんどすべての友情は解消されるだろうということだと思われる。しかし、第2の効果は、すばらしいものかもしれない。なぜなら、友人が一人もいない世界は耐えがたいと感ぜられるだろう。つまり、私たちがお互い完全無欠とは思っていないということを自らに欺くおこなうための幻想のフェールの必要性もなく、お互いを好きになれるはずだからである。 出典：ラッセル『幸福論』第8章「被害妄想」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA18-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA18-020.HTM</a></p>	<p>「偽善（「を暗黙の了解」）で社会を維持するよりは、最初は大変でも「正直（あるいは誠実）」を旨としたほうがよいということですね。</p>	<p>「偽善（「を暗黙の了解」）で社会を維持するよりは、最初は大変でも「正直（あるいは誠実）」を旨としたほうがよいということですね。</p>	<p>「偽善（「を暗黙の了解」）で社会を維持するよりは、最初は大変でも「正直（あるいは誠実）」を旨としたほうがよいということですね。</p>





<p>△ 140字以上 のため</p>		<p>A1-28/29</p>	<p>If it is to become possible, some way must be found by which the tyranny of public opinion can be either lessened or evaded, and by which members of the intelligent minority can come to know each other and enjoy each other's society. 注: 'it' は前の文章を受けていて、「真の幸福」です。 (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-020.HTM</a></p>	<p>もしも、(そのような状況で)真の幸福を可能にしたいのであれば、世論の横暴さを減らすか回避できるような方法を見つづけるか、あるいは、少数派の知的な人間が互いに知り合い、つきあいを楽しめるようななんらかの方法を発見しなければならない。 出典: ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-020.HTM</a></p>	<p>大都市であれば、善くも悪くも、自分の特殊な趣味や考え方に共感してもらえない仲間を見つづけることができる。ラッセルは少し前の法で、次のように書いています。  「たとえば」ロンドンやニューヨークのような大都市に住む知能な人間は、大部分、気分をなしたり、粗行(二行)の、自慢のな実体があるわけではなく、多くの人々が同じ意見だろうということで、その雰囲気を感じ取ったマスコミが、「世論」が支持すると思われるやり方で、憤むべき特定の個人(やグループ)をなたなくということと恐れず、しかし、相手(例: 麻生元首相?)であれば、叩いても効果がない(あるいは仕返しがかわい)ということ、マスコミも真正面から指導することは少ない(というが、横柄な態度をいつまでも許しているところを見ると、そう思えて仕方ないです)が、</p>	
<p>r366-c041 ~ r366-c041-2 (11月29日) angry_dog.gif (beginner)</p>		<p>A1-28/29-2</p>	<p>Public opinion is always more tyrannical towards those who obviously fear it than towards those who feel indifferent to it. A dog will bark more loudly and bite more readily when people are afraid of him than when they treat him with contempt, and the human herd has something of this same characteristic. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM</a></p>	<p>&lt;世論は犬と同様、世論を怖がっている人によりきつくある。世論は、世論に無頓着な人びとに対してよりも、あきらかに世論を恐れている人びとに対し、つねによりいっそう圧政的になる。人間が犬を見下してあしらうときよりも、人間が犬を怖がっているときのほうが、犬はよりいっそう、人間に対し苛酷に吠え、いっそう愛みつきやうだらう。人間集団(群衆)にも、多少これと同じ特徴がある。 出典: ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM</a></p>	<p>「世論が圧政的になる」というのはもちろん、世論といふ一つの、自慢のな実体があるわけではなく、多くの人々が同じ意見だろうということで、その雰囲気を感じ取ったマスコミが、「世論」が支持すると思われるやり方で、憤むべき特定の個人(やグループ)をなたなくということと恐れず、しかし、相手(例: 麻生元首相?)であれば、叩いても効果がない(あるいは仕返しがかわい)ということ、マスコミも真正面から指導することは少ない(というが、横柄な態度をいつまでも許しているところを見ると、そう思えて仕方ないです)が、</p>	
<p>△ 140字以上 のため</p>		<p>A1-28/29-3</p>	<p>People who are not in harmony with the conventions of their own set therefore to be prickly and uncomfortable and lacking in expansive good humour. These same people, transported into another set where their outlook is not thought strange, will seem to change their character entirely. From being serious, shy and retiring they may become gay and self-confident; from being angular they may become smooth and easy; from being self-centred they may become sociable and extrovert. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM</a></p>	<p>&lt;捨てる神あれば拾う神あり&gt; 自分の属している集団の慣習としくりいっていない人々は、それゆえ、上げたらけになり、居心地が悪くなり、また、包容力のある自分(マスコミ)にたいして人間になりやすい。そういふ人々も、彼らの物の見方が変わっていると思われるような別の集団に移し変えられたとしたら、彼らの性格は、まったく変わるだろうと思われる。まじめで、内気でひっこみ思案であったのが、陽気で自信を持つようになり、かたがであったのが人当たりがよく話しくなり、自己中心的であったのが社会的かつ外向的になる、かもしれない。 出典: ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM</a></p>	<p>生まれた国とそりがあわない人間であっても、自分に合う国があるかも知れない。 愛国心が無い? 日本が好きで日本に帰化する人、その国を好きで住む人、その国を好きで住む人が特定の外国を好きになってその国に帰化したとしても、少しも非難すべき要素はないであろう。そのようにして、自分の住みたい国を自由に選べるようになれば、世界平和も促進されるであろう。</p>	
<p>★ r366-c042 (11月30日)</p>		<p>A1-28/29-4</p>	<p>Wherever possible, therefore, young people who find themselves out of harmony with their surroundings should endeavour in the choice of a profession to select some career which will give them a chance of congenial companionship, even if this should entail a considerable loss of income. Often they hardly know that this is possible, since their knowledge of the world is very limited, and they may easily imagine that the prejudices to which they have become accustomed at home are world-wide. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM</a></p>	<p>&lt;世間での評判ではなく、やりたい仕事を選ぶ勇氣&gt; (それゆえ)、自分の周囲の環境としくりいっていないと思う若者は、職業を選択するにあたっては、たとえそのために収入がかなり減るとしても、可能な場合はいつでも、気の合う仲間(マスコミ)の心算で、仕事を選ぶべきに努めるべきである。しばしば若者たちは、そのようなことが可能だということをはほとんど知らない場合が多い。なぜなら、彼らの世の中についての知識はひどく限定されており、わが家と慣れている(その家の)偏見が世の中全体に行き渡っていると思われやすいからである。 出典: ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-030.HTM</a></p>	<p>勇氣が必要。 自分は間違っていないと思ったら、リスクがあっても、やってみる価値がある。たとえ失敗したとしても、若いうちならやり直せる。失敗するよりも、あきらめずトライがよかった、いつまでも後悔するよりはましであろう。</p>	
<p>★ r366-c043 (12月1日)</p>	<p>○</p>	<p>A1-28/29-5</p>	<p>To be out of harmony with one's surroundings is, of course, a misfortune, but it is not always a misfortune to be avoided at all costs. Where the environment is stupid or prejudiced or cruel, it is a sign of merit to be out of harmony with it. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM</a></p>	<p>&lt;過度に周囲にあわせるのは不幸の種&gt; 自分自身にうまく環境とうまくいかないのは、もちろん不幸ではあるが、それは常に、いかなる犠牲を払っても避けなければならない不幸であるわけではない。環境が悪かであったり、偏見にみちみちたり、残酷であったりするような場合は、それと同調しないことは、長所(美点)の印である。 出典: ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM</a></p>	<p>独善的になつてはいけないが、過度に周囲にあわせることは不幸の種となる。自分が正しいと思ったら、孤立することを恐れない(ただし周囲の人々を過度に非難せずに)、自我を過すことは、長い目でみればきつとよいことがあると思われる。</p>	
<p>★ r366-c044 (12月2日) Allen and Unwin 社のラッセルの著書の個別力タロウの画像添付</p>	<p>○</p>	<p>A1-28/29-6</p>	<p>If a man is once launched upon the right career and in the right surroundings, he can in most cases escape social persecution, but while he is young and his merits are still untested, he is liable to be at the mercy of ignorant people who consider themselves capable of judging in matters about which they know nothing.... (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM</a></p>	<p>&lt;「無知な人々」による若者いじめ&gt; もしも、ある人が、いったん適切な職業に適切な環境のもとにつけば、たいていの場合、社会的迫害をまぬがれることができるが、しかし、一方、彼が若く、彼の長所がまだ証明されていない間は、自分が何も知らないような事柄についても判断を下す力があると、思いこんでいる無知な人びとからいじめられる恐れがある。 出典: ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM</a></p>	<p>適材適所とはよく言われるが、言うは易くして行うは難し。 組織を統制・管理しやすいようにすることが第一と、思い人事を行っている、その組織はいずれ窮屈な働きにくい職場となってしまう。 自分が使いやすい人間ばかりを集めれば、その人事担当は組織はうまく働いていると感じるかもしれないが、いずれ権の王様となってしまうが、特に(たとえ人を動かす理由がなくても)ほとんど例外なく、3年毎に定期的には人を動かす(官庁(以前官の組織)は国立大学法人も含む)では、仕事の中身を知らずに(部下としての扱いやすさや、上の意向を組んだ)交易な人事が多すぎると、と思うが、。。。</p>	
<p>★ r366-c045 + r366-c045-2 (12月3日)</p>		<p>A1-28/29-7</p>	<p>There is a comfortable doctrine that genius will always make its way and on the strength of this doctrine many people consider that the persecution of youthful talent cannot do much harm. But there is no ground whatever for accepting this doctrine. It is like the theory that murder will out. Obviously all the murders we know of have been discovered, but who knows how many there may be which have never been heard of? In like manner all the men of genius that we have ever heard of have triumphed over adverse circumstances, but that is no reason for supposing that there were not innumerable others who succumbed in youth. Moreover, it is not a question only of genius, but also of talent, which is just as necessary to the community. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM</a></p>	<p>&lt;迫害やいじめの口実&gt; 「迫害を切り開く」という、耳に心地よい説があるが、この説に力を得て、若い才能を迫害してもそれほど害にならないと、多くの人が考えている。しかし、このような説(考え方)を受け入れるいかなる根拠もない。これは、人殺しは必ず露見する、という説と同じである。明らかに私たちが知っている天才は、すべて発見されている。しかし、まったく知られていない天才が、いっただいどれくらいあったか、誰が知っているというのか。同様に、私たちが見聞している天才は、すべて逆境にうち勝つているが、若くして挫折した天才は、(過去)非常に多数は存在しなかったと、思われるべきではない。さらに、天才だけの問題ではなくて、才能のある人の問題でもある。才能のある人も、天才と同様、社会にとつて必要だからである。 出典: ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-040.HTM</a></p>	<p>良い面ばかりみていれば気持ちがよいでしょうが、他者の痛みに関心では為政者としては失格です。 即ち、自分に対して、逆境にあつても常に前向きに対処することはほめられることですが、それを他者にもとめることは、多くの場合、不正の力モブージュだったりします。</p>	

★	r366-c046 + r366-c046-2 + r366-c046-3 (12月4日)	○	A1-29	<p>While it is desirable that the old should treat with respect the wishes of the young, it is not desirable that the young should treat with respect the wishes of the old. The reason is simple, namely that in either case it is the lives of the young that are concerned, not the lives of the old. When the young attempt to regulate the lives of the old, as, for example, by objecting to the remarriage of a widowed parent, they are quite as much in the wrong as are the old who attempt to regulate the lives of the young. Old and young alike, as soon as years of discretion have been reached, have a right to their own choices, and if necessary to their own mistakes.</p> <p>(28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. http://russell-j.com/beginner/HA19-050.HTM</p>	<p>&lt; 間違いを犯す権利を奪うな！ &gt; 年寄り（年輩者）が若者の希望を尊重するのは望ましいことであるが、他方若者が（若者に対する）年寄り（年輩者）の希望を尊重するのは望ましいことではない。その理由は簡単である。すなわち、いずれの場合も、ここで関心（関係）があるのは若者の生き方であって、年寄り（年輩者）の生き方ではないからである。老若無差しの親の再婚に反対するなどして、たとえば配偶者をなくした親の再婚に反対するなどは、規制しようとするのは、若い人の生き方を規制しようとする年寄り（年輩者）と同じように、まちがっている。年寄りも、若者も、思慮分別のつく年齢に達すれば、自分で選択する権利があり、また必要ならば、自分で間違いを犯す権利だってある。</p>	<p>[n.0034：生き方の強制] 年取った両親は、新たな恋愛などしてもらいたくないと思ってる人たち 子供は、社会のルールに従順であり、良い子であってほしいと思う親たち いずれもお互いを独立した一個人として扱っていない。</p>	<p>「・・・年寄りも、若者も、思慮分別のつく年齢に達すれば、自分で選択する権利があり、また必要ならば、自分で間違いを犯す権利だってある。」 そう、「間違いを犯す権利」が重要。あなたのためだと言って、人のいやがることを押し付け、その人から「間違いを犯す権利」を奪っていることが多くないか？ 社会全体が少しのミスも犯さないようにするために、面倒な手続きを多くしすぎてはいないか？（そのために経費をけずぎていないか？ たとえば、生活保護費の支給を厳密にやらなければいけないということで、多くの生活保護を受ける権利がある人々に、結果的に生活保護費を支給しない事態が生じていないか？ 日本では生活保護費の受給資格のある人の半数以下しか恩恵を受けていないといわれているが・・・世間体から申請しない人も少なくないがそれ以上に・・・ 個人個人の意見は、押さえつづきものがあったとしても、世論という力たち（多くの場合でマスコミが醸成することが多い）では、不適切であったり、他人を傷ついたり、良いものを押しつぶしたりすることが少なくない。世論は良いものの後押しをするということもあるが、良いもの（or悪いもの）を、（嫉妬心などから）引き下ろす「つぶしてしまっ」こともけっこうよくある。それは世論の一番のデメリット（いやゆる集団リンチ）であり、そういったものは無視したほうがよい。 ↑ ↑（さしかえ） （△）自分の能力に自信が持てない、どうしても他人（ただし、親しい人や組織での上司）の意見を気にしすぎてしまう。しかし、他人の意見に、あくまでも一つの意見として「敬意を払うのはよいが、自分が正しいと思う場合は、自分の意見を簡単にとりきけるべきではないだろう。ただし、むやみに摩擦を起こさないように、かしく対応する必要があるだろうが・・・」</p>	
r366-c047 + r366-c047-2 (12月5日)	○	A1-29/30	<p>I think that in general, apart from expert opinion, there is too much respect paid to the opinions of others, both in great matters and in small ones. One should as a rule respect public opinion in so far as is necessary to avoid starvation and to keep out of prison, but anything that goes beyond this is voluntary submission to an unnecessary tyranny, and is likely to interfere with happiness in all kinds of ways.</p> <p>(28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. http://russell-j.com/beginner/HA19-060.HTM</p>	<p>&lt; 自発的な「無用な暴力への服従」&gt; 専門家の意見は別として、廣くして、重大な問題でもささいな問題でも、他人の意見が尊重されすぎているのではないかと、私は思ふ。一般的に言つて、飢えを避け、刑務所に入らないようにするために必要な限りで世論を尊重すべきであるが、それを超えて世論に耳を傾けるのは、自発的な「無用な暴力への服従」であり、あらゆる形で幸福を邪魔する傾向がある。 出典：ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 http://russell-j.com/beginner/HA19-060.HTM</p>	<p>特定の英雄や能力のある者だけでなく、多くの人々の個性が尊重される社会は善い社会。今の社会はどうか。競争を必要以上に重視していないか？ 必要以上に競争を重視したり強調したりする社会は、弱いものや敗者（「負け組」という不適切な言い方がある。）に対し、言葉では「何處でも活躍できる社会を実現」とかいつて、敗者を自分たちが大風呂に生産していることを力モブラージュする。某首相も、追従者も、巧言令色鮮しん。</p>			
r366-c048 + r366-c048-2 + r366-c048-3 (12月6日)	○	A1-29/30-2	<p>There is, of course, no point in deliberately flouting public opinion: this is still to be under its domination, though in a topsy-turvy way. But to be genuinely indifferent to it is both a strength and a source of happiness. And a society composed of men and women who do not bow too much to the conventions is a far more interesting society than one in which all behave alike. Where each person's character is developed individually, differences of type are preserved, and it is worth while to meet new people, because they are not mere replicas of those whom one has met already.</p> <p>(28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. http://russell-j.com/beginner/HA19-060.HTM</p>	<p>&lt; 因習に過度に屈しない男女がらなる社会は善い社会 &gt; もちろん、故意に世論を馬鹿にして多少しも良いことはない。これは、逆の意味で、やはり、世論に支配されていることにほかならない。 しかし、世論に本当に無関心であることは、一つの方であり、同様に幸福の源でもある。そして、因習に過度に屈しない男女がらなる社会は、誰もと同じようにふるまう社会よりもずっと面白い社会である。各人の個性がそれぞれ伸ばされていくところでは、（個性的）タイプの違いが保持されてあり、-彼らは、これまでに会った人びとの味なるとして、記憶に残るではないので、新しい人々に会うだけの価値がある。 出典：ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 http://russell-j.com/beginner/HA19-060.HTM</p>	<p>（発展するところが「期待される」と言っているのだから必ずそうなるとはいっていい。因習にとらわれない人々を左右することで得ている、加虐的な快楽を減少させる」ことに成功しているかどうか疑問に思うことも少なくないので・・・</p>			
★ △ 140字以上のため		A1-29/30-3	<p>Happiness is promoted by associations of persons with similar tastes and similar opinions. Social intercourse may be developed more and more along these lines and it may be hoped that by these means the loneliness that now afflicts so many unconventional people will be gradually diminished almost to vanishing point. This will undoubtedly increase their happiness, but it will of course diminish the sadistic pleasure which the conventional at present derive from having the unconventional at their mercy. I do not think, however, that this is a pleasure which we need be greatly concerned to preserve.</p> <p>(28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. http://russell-j.com/beginner/HA19-060.HTM</p>	<p>&lt; 加虐的な快楽は減らそう！ &gt; 「加虐的な快楽」は減少しよう。そのような意見を持った人々との交際によって増進される。社交は、ますますこの線に沿って発展することが期待され、そして、こうした方法により、現在、非常に多くの因習にとらわれたい人々を苦しめている孤独感も、しだいにほとんど消滅する位に減少することが期待される。これにより、彼らの幸福は増すだろうが、因習的な人たちが、現在、因習にとらわれたい人々を左右することによって、加虐的な快楽をもちろん減少させるだろう。ただし、こういう快楽は、保存することに大いに関心を持つ必要があるとは、私は思ふ（皮肉です） 出典：ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 http://russell-j.com/beginner/HA19-060.HTM</p>	<p>[n.0035：寛容さを増す最善の方法] 日本社会はたんに多様性を認めるより、寛容な社会になつてきているように思われる。しかし、「大衆の声」を聞かずに、余り一般的でない意見を持つマイノリティを政府やマスコミが抑圧したり非難したりする時がときときある。個性の強い政治家やテレビの人気キャスターなども、自分の「常識」を過信し、世間一般的でない考え方をする人を押さえつけようとする。ことごときある</p>			
r366-c049 (12月7日)	○	A1-30	<p>The best way to increase tolerance is to multiply the number of individuals who enjoy real happiness and do not therefore find their chief pleasure in the infliction of pain upon their fellow-men.</p> <p>(28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.9: Fear of public opinion. http://russell-j.com/beginner/HA19-070.HTM</p>	<p>&lt; 社会における寛容度を増す最善の方法 &gt; 寛容さを増す最善の方法は、真の幸福を享受し、仲間の人間に幸福を伝えることを主な楽しみとし、個人の数を増やすことである。</p>	<p>[n.0035：寛容さを増す最善の方法] 日本社会はたんに多様性を認めるより、寛容な社会になつてきているように思われる。しかし、「大衆の声」を聞かずに、余り一般的でない意見を持つマイノリティを政府やマスコミが抑圧したり非難したりする時がときときある。個性の強い政治家やテレビの人気キャスターなども、自分の「常識」を過信し、世間一般的でない考え方をする人を押さえつけようとする。ことごときある</p>			
★	r366-c050 (12-8)	○	A1-31	<p>Pleasures of achievement demand difficulties such that beforehand success seems doubtful although in the end it is usually achieved. This is perhaps the chief reason why a not excessive estimate of one's own powers is a source of happiness. The man who underestimates himself is perpetually being surprised by success, whereas the man who overestimates himself is just as often surprised by failure. The former kind of surprise is pleasant, the latter unpleasant. It is therefore wise to be not unduly conceited, though also not too modest to be enterprising.</p> <p>(28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.10: Is Happiness still possible? http://russell-j.com/beginner/HA21-010.HTM</p>	<p>&lt; 自分を過大評価する人と過小評価する人 &gt; 達成の喜びを得るためには、最後には過剰達成されることになる。事前には、成功は疑わしいと思うような困難が存在する必要がある。これは、多分、なぜ過度にならい程度に自分の能力を高く評価することが幸福の一つの源である、とかという理由のなかの、主なもの（理由）である。自分を過小評価する人は、成功する（いつも驚く）が、これに対し、自己を過大評価する人は、失敗する（いつも驚く）。前者の場合の驚きは愉快であるが、後者の場合は不愉快である。したがって、不当にうぬぼれないほうが賢明である。ただし、何かやりとげようとするためには控えめ過ぎるのもよくないが、</p>	<p>n.0036：過大評価と過小評価 自分に自信を持つこと、自分を過大に評価することとは異なる / 自信をありのままに正当に評価するのが一番よいが難しい！</p>	<p>目標を高く置く人と自分の成果をいつも強調する人ももちろん、自己を過正に評価できるのが一番よいが、他者からの評価は（おろおろとして）短期に成果えられるかどうかの社会的価値に量り量られるので、それを意識すると、自分を過小評価したり過大評価することになりやすい。しかし、できれば、早く成果を求める社会に抗して、自分のペースでひとつひとつハードルを越えて、ゆくゆくは大きな、有益なことをなしとげたい。そのためには、簡単にはあきらめないことが必要。</p>	
r366-c051 + r366-c051-2 (12-9)	○	A1-31/32	<p>Fads and hobbies, however, are in many cases, perhaps most, not a source of fundamental happiness, but a means of escape from reality, of forgetting for the moment some pain too difficult to be faced. Fundamental happiness depends more than anything else upon what may be called a friendly interest in persons and things.</p> <p>(28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.10: Is Happiness still possible? http://russell-j.com/beginner/HA21-060.HTM</p>	<p>&lt; 現実からの逃避のための流行追求や趣味 &gt; けれども、（一時的な）流行追求や趣味、多くの場合、多分大部分、根本的な幸福の源泉ではなく、現実からの逃避のための手段になっている。即ち、直視するには大きすぎる苦痛を当面的に忘れるための手段になっている。根本的な幸福は、ほかの何にもまして、(人間)や事物に対する友好的な関心とも言うべきものに依存しているものである。 出典：ラッセル『幸福論』第10章「今でも幸福は可能か？」 http://russell-j.com/beginner/HA21-060.HTM</p>	<p>他者（マスコミ、親、組織、その他）がら与えられない既成のものも満足できるのなら、それはそれでよいだろう。しかし、普通は、作られた流行にのってばかりいる自分がいやになったり、人からいかにどんなに小さなものでも、自分で創作したり、他者からのすすみを無視して自分で探し遊びたり、たくなるのである。世の中には、スポーツ、グルメ、ファッション、その他、商業主義のもとつくられた流行が横行している。それらを追いかければ、気はまくれ、そこそこの満足が得られるだろう。しかし、半をどって、そういったものに興味を持てなければ活動である。それに対し、たいしたものでもなくとも、悪い面もつちかつた、つまあげた喜びは、そう簡単に消費去るものではない。所有衝動よりも創造衝動を！ 所有物は消えても、他人と共有できる創造物は永い喜びの源泉となるだろう。</p>	<p>某首相の言っていることややっていると、まったく反対しやないですか！ 経済成長第一と言っておけば国民の支持が得られる。かっこばかりつけて、「国民の生命を守る」と繰り返すばかり。国民の生命を守るのであれば、何がなんでもまずどこかの原発を稼働させようと思わないと思われないか？ 日本では原発を稼働させないことと、日本同様地震の多いトルコでは、はじめ世界に原発を輸出しようとしたり、兵器開発に関わる共同研究協約を各国と結んだり、世界中に武器を売ることによって景気を回復させようとしたり・・・ つまり、国民の幸福を第一に考えているわけではなく、たとえ格差が今以上進むとしても、国力を強くして、自分や自分の仲間の権力欲を満たしたいというのが一番の動機であるようにしか見えませんが・・・？</p>		

★	r366-c052 ( 12-10 )		A1-32 A friendly interest in persons is a form of affectionateness, but not the form which is grasping and possessive and seeking always an emphatic response. This latter form is very frequently a source of unhappiness. The kind that makes for happiness is the kind that likes to observe people and finds pleasure in their individual traits, that wishes to afford scope for the interests and pleasures of those with whom it is brought into contact without desiring to acquire power over them or to secure their enthusiastic admiration. The person whose attitude towards others is genuineness of this kind will be a source of happiness and a recipient of reciprocal kindness. ( 28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.10:1s Happiness still possible? http://russell-j.com/beginner/HA21-070.HTM	< 人に対する友好的な関心を持つ人は幸福 > < 人に対する友好的な関心は、深い愛情のひとつの形であるが、欲望で所望が強く、強い反応を求めた形はそうではない。後者は、しばしば不幸の源泉となる。幸福に寄与するものは、人びとを観察することを好み、個人々の特徴に喜びを見いだす種類のものであり、( また ) 接触するようになった人びとの興味や楽しみのための機会を与人と、いと願ひ、その人々に対する影響を獲得したいが、その人たちの情熱的な称賞を得たいか、ということとは願わぬ種類のものである。他人に対して真にこうした態度をとる人は、( 他人にとつての ) 幸福の源泉になるだろうし、またお返しに親切の受け手になるだろう。	[ n.0037 : 他人に対する友好的関心 ] 親の子供に対する愛情は、他の愛情に比べれば比較的「無私」である。恋愛においては無私であるように見えて、そうでない場合が多い / 相手に対する独占欲は、最初は深い愛情のように見えて、相手もそれに応えるかもしれないが、割合早く束縛と感じられるようになり、嫉妬し弱い	
★	r366-c053 + r366-c053-2 ( 12-11 )	○	R366 A sense of duty is useful in work, but offensive in personal relations. People wish to be liked, not to be endured with patient resignation. To like many people spontaneously and without effort is perhaps the greatest of all sources of personal happiness. ( 28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.10:1s Happiness still possible? http://russell-j.com/beginner/HA21-070.HTM	< 多くの人びとを無意識かつ努力しないで好きになれることは・・・ > < 義務感には、仕事においては有用であるが、人間関係においてはいいやなものである。人は、他人に好かれることは望むが、私強欲いあるためをもって耐えられないことは望まない。多くの人びとを無意識かつ努力しないで好きになれることは、おそらく個人の幸福のあらゆる源泉のなかで最大のものであろう。	[ n.0038 : 努力しないで人を好きになること ] 人から嫌われるよりも、好かれたいと思う人が大部分 / 多くの人間が好きになれるということは、その人にとっても、好かれる人にとっても幸せである / しかし、義務感から好きになろうと努力されてもうれしくない	仕事だって義務感だけでやるようでは、満足感が少なく、長続きしない。 支配・管理する立場の者にとっては配下の人間が義務感から仕事に動いているのをみれば、心地よいかも知れないですが、長目でみれば、そういう組織は次第々々衰退していつか、国家・企業その他あらゆる組織の成長を長目でみているリーダーは、組織の構成員に義務感を押し付けることなく、構成員が自発的にその組織の発展に寄与・努力するようになるようにいろいろ工夫する。
★	r366-c054 + r366-c054-2 + r366-c054-3 ( 12-12 )	○	A1-34 The world is vast and our own powers are limited. If all our happiness is bound up entirely in our personal circumstances it is difficult not to demand of life more than it has to give. And to demand too much is the surest way of getting even less than is possible. The man who can forget his worries by means of a genuine interest in, say, the Council of Trent, or the life history of stars, will find that, when he returns from his excursion into the impersonal world, he has acquired a poise and calm which enable him to deal with his worries in the best way, and he will in the meantime have experienced a genuine even if temporary happiness. The secret of happiness is this: let your interests be as wide as possible, and let your reactions to the things and persons that interest you be as far as possible friendly rather than hostile. ( 28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.10:1s Happiness still possible? http://russell-j.com/beginner/HA21-080.HTM	< 幸福の秘訣 > < 世界は広大であり、我々自身の力には限界がある。もしも、私たちの幸福のすべてがまったく個人的な環境と結びついているのであれば、人生に与えられる以上のものを人生に求めないということとは困難である ( どうしても求めることにはなりやしない ) 。 そして、あまりに多くを求めることは、入手可能なものよりも少ないものしか得られない ( 得られるものも得られない ) 一種確実な法である。 たとえば、トレント公会堂や、星の生命史などに純粋な興味を持つことで、心配ごとを忘れることのできる人は、非人間的な世界への旅 ( 小旅行 ) から戻ってきたときに、自分の心配ごとを最善の方法で処理することができる。ある種の落着きと穏やかさを獲得している ( 身につけている ) ことに気づくだろう。そうしてその間、たとえ東の間であっても、純粋な幸福を味わったことだろう。	[ n.0039 : 幸福の秘訣 ] これは多数のホームページ上の格言集で引用されているもの 年をとって、孫以外には興味を持ってなくなったら悲 職場では偉くなれば、皆がもちあげてくれて、へまをやっても部下に責任を押し付けることができる。でも、定年退職すれば、そういう人は敬遠 ( 尊敬されて遠ざけられる ) されてしまう。 権力を持っている政治家も、権力を失えば、独断的なイデオロギイだった人は惨めな末路にやりやしない。もちろん、そういう人もあいがわらずヨイショする人はいるだろうし、そういうたとりまきにおべっかを使われて満足する人はいいかもしれないが・・・	
★	r366-c055 + r366-c055-2 + r366-c055-3 ( 12-13 )	○	A1-35 The more things a man is interested in, the more opportunities of happiness he has, and the less he is at the mercy of fate, since if he loses one thing he can fall back upon another. Life is too short to be interested in everything, but it is good to be interested in as many things as are necessary to fill our days. We are all prone to the malady of the introvert, who, with the manifold spectacle of the world spread out before him, turns away and gazes only upon the emptiness within. But let us not imagine that there is anything grand about the introvert's unhappiness. ( 28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.11:Zest http://russell-j.com/beginner/HA22-010.HTM	< 関心を寄せるものが多いほど幸福になる機会が増える > < 関心を寄せるものが多いほど幸福になる機会が増える。人生は短く、興味をひく「事物」や「人」に対する反応を敵意あるものではなく、できるがぎり友好的なものにしないこと。 < 関心を寄せるものが多いほど幸福になる機会が増える > < ありとあらゆる事柄に興味を持つには、人生は短すぎる。しかし、日々 ( 生涯 ) を満たすに足るだけ多くのものに興味を持つことは、良いことである。 私たちはみな「内向性」という病気にかりやすい。内向的な人間は、世界の多彩なスベクタクルが目前に繰り広げられていても、顔をそむけ、心の中的空虚のみを凝視する。しかし、内向的な人間の不幸に何か偉大なものがあるなどと思慮しないことにしよう。 読書を楽しむ人は、そうでない人よりも、なおいっそう偉れている。なぜなら、読書の機会は、フットボールを観戦する機会よりもずっと多いからである。	[ n.0040 : 多くのものに興味を持つこと ] n.0041: 人生を満たす興味 趣味を持つもの ( 書籍 ) が少ないと、それら少数のものに興味を持ってなくなると、その人は不幸になりやすい。 / とはいっても、非常に多くの興味を持っていても、いずれも表面的な、浅い趣味のものばかりでなければ、何らかの機会に、一挙にそれらの多くのものに対する興味を失う危険がある。	現実目目を背けるために、気をそらすために、趣味をたくさんするのは、自分自身が本当に興味を持てるものことに関心を引くことは良いことである。人生には打ちひしがれて何も興味を持ってなくなることもあつてあつてあつて。しかし、自分が本当に興味を持てるものをたくさん持つていられれば、その幸はずいぶんではない。 / とはいっても、非常に多くの興味を持っていても、いずれも表面的な、浅い趣味のものばかりでなければ、何らかの機会に、一挙にそれらの多くのものに対する興味を失う危険がある。 普段は外交的であっても、うまくいかない時や、自分の限界を見せつけられるような出来事があった時には、「内向性」の病気がかりやすい。そのような時は、周囲でいろいろ楽しいことがあつても自分もそのなかに加わる気がおこらない。一時的にはそれも仕方ないであろうが、そのような状態からよい結果は生れない。ある程度内向的な気分を「楽しんだら」、また世界に対し感受性を持つて戻ると、前向きにとりかへよう。
★	r366-c056 ( 12-14 )	○	A1-35/36-1 The man who enjoys reading is still more superior to the man who does not, since opportunities for reading are more frequent than opportunities for watching football. ( 28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.11:Zest http://russell-j.com/beginner/HA22-010.HTM	< 読書を楽しむ人は、そうでない人よりも、なおいっそう偉れている。なぜなら、読書の機会は、フットボールを観戦する機会よりもずっと多いからである。 >	楽しむ機会は多ければ多いほどよい。	
★	r366-c057 + r366-c057-2 + r366-c057-3 ( 12-15 ) あのソーゼージの機械	○	A1-35/36-2 The mind is a strange machine which can combine the materials offered to it in the most astonishing ways, but without materials from the external world it is powerless, and unlike the sausage machine it must seize its materials for itself, since events only become experiences through the interest that we take in them: if they do not interest us, we are making nothing of them. The man, therefore, whose attention is turned within finds nothing worthy of his notice, ... ( 28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.11:Zest http://russell-j.com/beginner/HA22-020.HTM	< 外界からの原料 ( 情報 ) の摂取のない精神は無力 > < 精神は、不思議な機械であり、提供された原料 ( 材料 ) をまったく驚くべきやり方で組み合わせることができるが、外界からの原料があれば無力である。 また ( 精神は )、ソーゼージ製造機と違って、精神は、自分で原料を確保しなければならぬ。なぜなら、種々の出来事 ( 読書 ) は、私たちがそれらに対して興味を持つことによつてのみ経験となるからである。 もしも、種々の出来事が私たちの興味をひかなければ、私たちはそれを全然生かさないことになる。( 自分に於いて自己の内部にのみ注意を向けている人は、( 自分に於いて世界に対して ) 注目に値する何物をも発見しない。 出典 : ラッセル『幸福論』第11章「熱意」 http://russell-j.com/beginner/HA22-020.HTM		外界から情報を得ることができるだけ多く受けとればよいというものでもない。そして「受動的に」情報 ( 映像や音声・文字データ ) を受け取つてばかりいると、間違つた理解をしたり、情報を流すもの都合のよい視聴者になつたりするかもしれない。しかし、マスコミは便利かつ重要な情報源だから、受け手はしかし、自分で情報を識別し、不十分な場合は自ら調べて補充したり、間違ひを正したりする必要があつて、それに、偏見がないということ、空っぽな精神は同じものではない。 ラッセル法廷 ( フォートナム戦争犯罪法廷 ) メンバーの第1回集會での94歳のラッセルのスピーチより : 「我々は、無関心な人間のみが公平な人間であるという考えを拒否しなければなりません。我々は偏見のない広心と空っぽな心とを混同するようなら、人間の知性についての墮落した考え方は拒絶しなければなりません。」
★	これだけでわがりにくい?	○	A1-35/36-2 .. whereas the man whose attention is turned outward can find varied, in those rare moments when he examines his soul, the most varied and interesting assortment of ingredients being dissected and recombined into beautiful or instructive patterns. = assortment (n) を取り揃えたもの、詰め合わせのもの ; 雑多なものの ( 人 ) のあつまり ( 28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.11:Zest http://russell-j.com/beginner/HA22-020.HTM	< たまに自分の魂を覗いてみると・・・ > < 一方、外界に注意を向けている人は、たまに自分の魂を覗いてみるようなひとと同じ、自分の心の中に、この上なく多様な興味深い種々の成分の機会が詳細に分析され組み立てられる。美しいものは益々複雑で遠らなつたものを発見することができる。 出典 : ラッセル『幸福論』第11章「熱意」 http://russell-j.com/beginner/HA22-020.HTM	常日頃有益な情報や情緒をためこみ、内省することはほとんどないが、ごくたまに、ふと自分の心のなかに成り立っているのに気づく。それによつて、日々自分の頭で考え、その大団円を再構築することができる。ラッセルが「懷疑論」の冒頭に掲げたボルテールの言葉が思い出される。 「愛し考える事、それが精神の眞の生命だ」 (Voltaire)	

	短くとりよ したものは あまりなし		A1-35/36-3	Take again such a matter as travel: some men will travel through many countries, going always to the best hotels, eating exactly the same food as they would eat at home, meeting the same idle rich whom they would meet at home, conversing on the same topics upon which they converse at their own dinner-table. When they return, their only feeling is one of relief at having done with the boredom of expensive locomotion. Other men, wherever they go, see what is characteristic, make the acquaintance of people who typify the locality, observe whatever is of interest either historically or socially, eat the food of the country, learn its manners and its language, and come home with a new stock of pleasant thoughts for winter evenings. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.11.Zest http://russell-j.com/beginner/HA22-020.HTM	<海外旅行・有意義なものと無意義なもの> もう一度、旅行の時の出来事についてとりあげてみよう。ある人たちは、多くの国を旅行し、いつも一流ホテルに泊まり、自宅で食べるものとまったく同じものを食べ、自宅で会うのと同じ食卓のものを手持ち運中と会い、自宅の食卓で話すのと同じような話題についておしやりをする。(旅行から自宅に)戻り、彼らが一感するのには、おどろかぬ(移動)の運送を(今より)やがて終わらせた、という一種の安堵感のみである。(これに対し)別の人たちは、どこへ行ってでもその土地の特徴的なものを見出し、その土地の典型的な(特徴的な)人たちと親しくなり、その土地の歴史あるいは社会的に興味深いものであれば何でも学び、その国(や地方)の食べ物や味を、その国(や地方)の風習や言葉を学び、冬の夜のための楽しい思い出を新たにたくさん持って帰国する。 出典：ラッセル『幸福論』第11章「熱意」 http://russell-j.com/beginner/HA22-020.HTM	中国人は世界中の旅行先で饗應を買う行動をしているとよく報道されています。しかし、考えれば、日本人の多くが海外旅行でできるようになった初期の頃は今の中国人と同じような行動をとっていました。海外旅行にできない初期の頃ですのたでカイドさん(添乗員)の旗を目印に団体行動をし、現地の人の迷惑を考えずにエチケットに反する行動をたくさんしていました。 今はそのことを忘れ(あるいは若い人は過去にそうしたことのおつたことを知らずに)中国人を軽蔑し、マスコミもそれを助長するような報道を好んでしていますが、高度成長より余裕ができた国からの旅行者は同じような行動をするものです。 現在の北朝鮮は情報統制のために、自由な国に住んでいる我々から見ると奇異な行動をいつぱいやっているように映りますが、日本も情報統制にあった戦前、戦中は、現在の北朝鮮とまったく同じ行動を多くの国民がしていました。動画がいつぱい残っていますから若い人も確認は容易です。 <虚心に外界を観察すればきっと、多くの人が強い興味を持ってゐるものを見ることができるのではないだろうか。>	
★	r366-c058 + r366-c058-2 (12-16)		A1-36	It is quite impossible to guess in advance what will interest a man, but most men are capable of a keen interest in something or other, and when once such an interest has been aroused their life becomes free from tedium. Very specialised interests are, however, a less satisfactory source of happiness than a general zest for life, since they can hardly fill the whole of a man's time, and there is always the danger that he may come to know all there is to know about the particular matter that has become his hobby. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.11.Zest http://russell-j.com/beginner/HA22-040.HTM	<特殊化された興味> 「何がその人の興味・関心を起こさせるか」事前に推測することはできないが、大部分の人は、何らかのものに強い興味を持つことができる。いったんたそう興味呼び起こされれば、その人たちの人生は退屈から解放される。しかし、非常に特殊化された興味は、人生に対する一般的な熱意ほど幸福の源となすべしではない。なぜなら、そういった興味で、ある人の時間のすべてを満たすことは可能ではなく、また、彼の興味となった特定の事柄について知るべきことはすべて知り尽くしてしまう、という危険が常にあるからである。 <特殊化された興味> 「善い生活においては、諸活動の間にバランスがなければならず、そうした諸活動は、これ1つとして、その他の活動が不可能になるまで押し進められなければならない。大食漢(暴飲暴食をする人)は、食べる楽しみのためにその他の楽しみをすべて犠牲にすることによって、彼の人生の幸福の総量を減らしている」 出典：ラッセル『幸福論』第11章「熱意」 http://russell-j.com/beginner/HA22-050.HTM	n.0042：誰にでも、興味を持ってゐるものがあるはず +n.0043:特殊化された興味 強い興味を持ってゐるものを小さい時に見つけ一生を通じてできる幸福な人も少数いる。/年をとっても強い興味を持ってゐるものをいつか発見できない人もいる。/しかし、狭い自己の殻に閉じこもらずに、虚心に外界を観察すればきっと、多くの人が強い興味を持ってゐるものを見ることができるのではないだろうか。	
r366-c059 (12-17) あのGIF画像 をアップ する(食べ 続けている 男)	○		A1-36/37	In the good life these must be a balance between different activities, and no one of them must be carried so far as to make the others impossible. The gormandiser sacrifices all other pleasures to that of eating, and by so doing diminishes the total happiness of his life. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.11.Zest http://russell-j.com/beginner/HA22-050.HTM	<特殊化された興味> 「善い生活においては、諸活動の間にバランスがなければならず、そうした諸活動は、これ1つとして、その他の活動が不可能になるまで押し進められなければならない。大食漢(暴飲暴食をする人)は、食べる楽しみのためにその他の楽しみをすべて犠牲にすることによって、彼の人生の幸福の総量を減らしている」 出典：ラッセル『幸福論』第11章「熱意」 http://russell-j.com/beginner/HA22-050.HTM	TV(マスコミ)では、大食い選手権などの「大食漢」を褒めるような煽動番組をけっこう放送します。私はそういった大食自慢の人も、それではよしとするTV(マスコミ)も、そういった番組を好んでみる視聴者も嫌いです。 若いうちは暴飲暴食しても異色が悪くなることはないかも知れないですが、過去の暴飲暴食が辛苦となってから大きな影響を与えます。後悔先に立たす。 暴飲暴食者の一食でアフリカの飢饉者がどれだけ救われるかなどと言え、せつなく(多くの)人が楽しんでいるのに無神経な奴だと思つても知れませんが、やはり、「1人人間して不善をなす」という悪いが強くあります。	
★	r366-c060 + r366-c060-2 + r366-c060-3 (12-18) あの画像 Drinker_4. gif	○	A1-37	The man in whom one desire runs to excess at the expense of all others is usually a man with some deep seated trouble, who is seeking to escape from a spectre. In the case of the dipsomaniac this is obvious: men drink in order to forget. If they had no spectres in their lives, they would not find drunkenness more agreeable than sobriety. As the legendary Chinaman said: 'Me no drinke for drinkee, me drinkee for drinkee.' This is typical of all excessive and one-sided passions. It is not pleasure in the object itself that is sought, but oblivion. There is, however, a very great difference according as oblivion is sought in a sottish manner or by the exercise of faculties in themselves desirable. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.11.Zest http://russell-j.com/beginner/HA22-060.HTM	<1つの欲望が度を越し、他の全ての欲望を犠牲にする人> 1つの欲望が度を越し、他の全ての欲望を犠牲にする人は、通常、根深い心配事(や悩み)をかかえていて、恐ろしい「怖れ」から逃げようとしている人である。アルコール依存症の場合、これは明白である。 人は、(いやなことを)忘れるために酒を飲む。生活の中に恐ろしいものがないければ、彼は、(素直)でいいから、酒を飲まなければならない。快いとはいわれないだろう。伝説上の中国人が言ったように、「私は、飲むために飲むのではない。酔うために飲むのである。」 これは、あらゆる、度を越した、また偏った情熱に典型的な例である。 求められているのは(一人が求めているものは)、対象そのものにおける快楽ではなく、忘れることである。しかし、忘却を求めるにしても、酔っぱらって(感が方法)で求めるのではなく、健全な能力を使って求めるのでは、非常に大きな違いがある。 <自由の束縛は熱意を保つことを困難にする> 生活のどの瞬間においても、文明人は、衝動を制限するものによって、周りを取り囲まれている。 (たとえば)彼は偶然陽気な気分になつたとしても、道(通り)で歌つたり踊つたりしてはいけない。一方、偶然悲しい気分になつても、歩道(舗装道路)に座つて立いたりしてはいけない。なぜなら歩行者の通行を妨げてはいけないからである。 若いときには、学校で自由を束縛され、大人になってからは(成人生活においては)、勤務時間中ずっと自由を制限される。これら全ては、熱意を保つことをますます困難にする。なぜなら健全な(感)を抑制すると、疲弊と退屈が生じがちだからである。 出典：ラッセル『幸福論』第11章「熱意」 http://russell-j.com/beginner/HA22-070.HTM	[n.0044：逃避の原因] 熱烈な○×ファン、アルコールや薬物への依存症、とにかく何かを過度に偏愛・固執する人は、直視したくない何らかのものから逃げていく場合が多い。 日本社会は酔っぱらいに寛容。それだけ集団主義のしめつけが厳しく、その日のいやなことを忘れるために酒を飲む人が多いのか。そうやって多くのことをうやむや・あいまいにしてしまう。	
r366-c061 + r366-c061-2 + r366-c061-3 (12-19) あの画像 Liberty.gif	○		A1-37/38	At every moment of life the civilised man is hedged about by restrictions of impulse: if he happens to feel cheerful he must not sing or dance in the street, while if he happens to feel sad he must not sit on the pavement and weep, for fear of obstructing pedestrian traffic. In youth his liberty is restricted at school, in adult life it is restricted throughout his working hours. All this makes zest more difficult to retain, for the continual restraint tends to produce weariness and boredom. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.11.Zest http://russell-j.com/beginner/HA22-070.HTM	(たとえ)彼は偶然陽気な気分になつたとしても、道(通り)で歌つたり踊つたりしてはいけない。一方、偶然悲しい気分になつても、歩道(舗装道路)に座つて立いたりしてはいけない。なぜなら歩行者の通行を妨げてはいけないからである。 若いときには、学校で自由を束縛され、大人になってからは(成人生活においては)、勤務時間中ずっと自由を制限される。これら全ては、熱意を保つことをますます困難にする。なぜなら健全な(感)を抑制すると、疲弊と退屈が生じがちだからである。 出典：ラッセル『幸福論』第11章「熱意」 http://russell-j.com/beginner/HA22-070.HTM	だから幼児(特に自分の幼い子供)が何の気兼ねもなく、自由に楽しそうに遊んでいる姿をみると、うれしく、ほほえましく思う。それは今では自分には享受できない自由を子どもを遊ばせ、擬似体験しているのだろうか(代償行為ではないか?)。	
r366-c062 + r366-c062-2 + r366-c062-3 (12-20) あの画像	○		A1-38	The habits of mind formed in early years are likely to persist through life. Many people when they fall in love look for a little haven of refuge from the world, where they can be sure of being admired when they are not admirable, and praised when they are not praiseworthy. To many men home is a refuge from the truth: it is their fear and their timidity that make them enjoy a companionship in which these feelings are put to rest. They seek from their wives what they obtained formerly from an unwise mother, and yet they are surprised if their wives regard them as grown-up children. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.12:Affection. http://russell-j.com/beginner/HA23-040.HTM	<幼少時代に形成された心の習慣は、生涯持続する傾向がある> 幼少時代に形成された心の習慣は、生涯持続する傾向がある(持続しがちである)。 多くの人は、恋をするとき、世間から逃れるためのささやかな「安楽所」を探し求めるが、そこでは、感心すべきでないのに、賞賛される価値がないのに賞賛されることを確信していらる。 多くのひとにとって、家庭は真実からの避難所である。つまり、彼らは、恐怖心を持ち、臆病であるため、そのような感情を忘れさせてくれる「仲間つきあい」を楽しむようになるのである。 彼らは、以前賢明でない(自分の)母親から得たものを(自分の)妻に求める。そのくせ、妻が彼ら(夫)のことを「大きな子供だ」とみず、驚く。 他人のことを心配することは、自分自身のことや心配することよりも、こくわがよいだけにすぎない。さらに、他人に対する心配(気遣い)は、非常にしばしば、所有欲のカムフラージュになっている。(即ち)他人の不安をかき立てることによって、他人をもっと完璧に支配する力を得られると期待されるからである。これは、これまで男性が「離婚女性」を好んできた理由のひとつであることは、言うまでもない。	n.0045：恋は盲目] ・「家庭も恋愛も、現実直視(真実)からの避難所」 ・Love is blind / あばたもえくぼ / 一生それであれば幸福なのだが、いずれも冷め...	
r366-c063 (12-21) あの画像 R青年画像イ ラスト	○		A1-38/39	Fear for others is only a shade better than fear for ourselves. Moreover it is very often a camouflage for possessiveness. It is hoped that by rousing their fears a more complete empire over them can be obtained. This, of course, is one of the reasons why men have liked timid women, since by protecting them they came to own them. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.12:Affection. http://russell-j.com/beginner/HA23-050.HTM	他人のことを心配することは、自分自身のことや心配することよりも、こくわがよいだけにすぎない。さらに、他人に対する心配(気遣い)は、非常にしばしば、所有欲のカムフラージュになっている。(即ち)他人の不安をかき立てることによって、他人をもっと完璧に支配する力を得られると期待されるからである。これは、これまで男性が「離婚女性」を好んできた理由のひとつであることは、言うまでもない。		

★ r366-c064 + r366-c064-2 画像 Sacrifice (12/22)	○	A1-39  <b>R366</b> <b>(恋愛)</b>	Affection in the sense of a genuine reciprocal interest for two persons in each other, not solely as means to each other's good, but rather as a combination having a common good, is one of the most important elements of real happiness. however successful he may be in his career. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.12:Affection. http://russell-j.com/beginner/HA23-080.HTM	<人生が提供する最良のもの> 二人の人間が相手に対して本物の相互的(双方向の)関心を持っていくという意味での愛情即ち、相手を幸福のための手段として見るだけではなく、むしろ共通の利益(幸福)を持つ結合体だと感じる愛情は、真の幸福の最も重要な要素の一つであり、 自我が鋼鉄の壁の中に閉じ込められていて、このように自我を支配するものが頂戴な人はたまたえい(幸福)の面でどんなに成功していても、人生が提供する最良のものをつかみ損なっていることになる あまりにも強烈な自我は一つの牢獄であり、もしも、人生をせいつばい享受したいのであれば、人はその牢獄から逃げ出さなければならない。本物の幸福を持つ能力は、この自我の牢獄を抜け出した人間の特徴の一つである。	【n.0046：本物の愛情】 相手を自己実現のための手段としてみるのではなく、同等の人間と認めること / 相思相愛 + 相互理解 + 共通の目的、共通の感情をもてること / 理想だけがなかなか難しい / 難しいとしても自己満足だけの人生に終わらせないためには・・・	
r366-c065 (12/23) 橋太郎の 画像	○	A1-39-2  <b>R366</b>	A too powerful ego is a prison from which a man must escape if he to enjoy the world to the full. A capacity for genuine affection is one of the mark of the man who has escaped from this prison of self. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.12:Affection. http://russell-j.com/beginner/HA23-080.HTM	相手や自己実現のための手段としてみるのではなく、同等の人間と認めること。相思相愛 + 相互理解 + 共通の目的、共通の感情をもてること / 理想だけがなかなか難しい。難しいとしても自己満足だけの人生に終わらせないためには・・・	【n.0047：親との関係】 ・引きこもり、受験競争、就職できない若者、いつまでも独身の子供を抱えた年老いた親 ・子供を顧みない若い親、精神的成長していない ・未熟な大人が子供をもつことの弊害 ・平均寿命がのびたことにより年金では生活できない老人の増加 ・教育も含め競争原理があらゆるところで導入され、若い者が競争が激化 ・がんばった人に頼る社会をというたい文句、しかし大部分の人は成功しないのはあきらか、ジューバニース・ドリームとでも言いたいのか？	
r366-c066 (12/24) カエルが 飛びつく 画像	○	A1-40  <b>R366</b>	Affection of parents for children and of children for parents is capable of being one of the greatest sources of happiness, but in fact at the present day the relations of parents and children are, in nine cases out of ten, a source of unhappiness to both parties, and in ninety-nine cases out of a hundred a source of unhappiness to at least one of the two parties. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.13:The family. http://russell-j.com/beginner/HA24-010.HTM	<幸福の最大の源が不幸の源となる皮肉> 両親の子供に対する愛情および子供の両親に対する愛情は、幸福の最大の源の一つとなりうるが、実際は、今日において、親子関係は90%または(十中八九)両者に、この自我の牢獄を抜け出した人間の特徴の一つである。 これは、意識的な感情としては、決まり文句で言えば、疑いもなく、高度に洗練された知的な世界観が含まれている。しかし、感情的な自然な感情の一部だと感じること)は原始的で自然な感情であって、高度に洗練されているというのは、原始的で自然な感情が欠如していること(状態)である(注：安藤真雄氏は「意識的な洗練された知的な世界観は、感情的には疑いもなく、過度に洗練された知的な世界観が含まれている。しかし、偶然とした本能的な感情としては、これは原始的で自然な感情であって、原始的で自然な感情の欠如こそ、過度に洗練されているのである。」と訳しがおられる。過度にという言葉には否定的な意味合いがあるが、これはそのような意味合いなく、高度にすすべきではないか。また最後の一文の安藤訳は意味がよくわからない。) 子供にとって両親が最も頼りになるのは、～まともな親であれば、(子供が)病気の時、世間から非難されている時でさえも、幸いなきまで。 私たちはみな、自分の長所ゆえにほめられれば喜びを感じるが、大部分の人は、心底ではそういう称賛は心もとないと感じるだけの謙遜さを持っている。親が子供である私たちを愛するのは、私たちが彼らの子供であるためである。	n.0048：生命の流れ+n.110：個人の死と生命の流れ 「自分が死んだらすておしまい」としか考えられない人は、不幸な晩年を過ごすことになりやすい 自分が死んでも自分の子供を通して永遠に生きていくことは、決して思えば少しは安らぐ、このような情緒は、無神論者であっても可能である。「それでは子供のいない人間は？ 他人の子供であっても愛情を持ってない人間に比べ、ずっと幸福であるだろうか」	若いうちはそのように感じることは難しいだろう。若いうちは、あたかも自分は永久に死なないように、あるいは少なくとも平均寿命くらいは生きられるだろうから。(肉親や親しい知人が死んでない限り)死はまったく他人のように感じられない。 東北大地震が起こった時はさすがに、他人の死も他人事ではないと思っただ人が多かつたと思われうた。しかし、そう思わない(思わなかった)人も少なくないよ。うた。 そうであれば、原発の再稼働がとんとん申請されているのに抗議するものが余り多くないように見えるのは理解に苦しむ。 原発の再稼働に賛成している(あるいは仕方がないと思っている)人も、原発が自宅の近くにないからであり、自宅の近くにあれば反対するだろう。 どうしても原発を再稼働させる必要があるというのであれば、古くなった原発は早めに廃棄し、大量にエネルギーを消費するところに、原発をつくるようにしたほうがよいであろう。海岸近くのような地盤が弱かつたり、海洋汚染を引き起こし、そのところでなく、たとえば岩盤がしっかっている武蔵野台地に建設するともいかもしれない。それだけの準備があればであるが、必ず人口が多い地区では多数の人が反対して建設できないのは目に見えている。結局、少数者がしいたげられる。
r366-c067 (12/25) 画像	○	A1-41  <b>R366</b>	To be happy in this world, especially when youth is past, it is necessary to feel oneself not merely an isolated individual whose day will soon be over, but part of the stream of life flowing on from the first germ to the remote and unknown future.  As a conscious sentiment, expressed in set terms, this involves no doubt a hyper-civilised and intellectual outlook upon the world, but as a vague instinctive emotion it is primitive and natural, and it is its absence that is hyper-civilised. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.13:The family. http://russell-j.com/beginner/HA24-080.HTM	<自分は生命の流れの一部と感じることができるとは・・・> この世で幸福になるためには、特に青年期が過ぎ去らば、自分のことを、まもなく一生を終える孤立した個人として感じるだけでなく、最初の胚から永遠に未知の将来へとどこまでも流れていく生命の流れの一部だと感じることが必要である。 これは、意識的な感情としては、決まり文句で言えば、疑いもなく、高度に洗練された知的な世界観が含まれている。しかし、感情的な自然な感情の一部だと感じること)は原始的で自然な感情であって、高度に洗練されているというのは、原始的で自然な感情が欠如していること(状態)である(注：安藤真雄氏は「意識的な洗練された知的な世界観は、感情的には疑いもなく、過度に洗練された知的な世界観が含まれている。しかし、偶然とした本能的な感情としては、これは原始的で自然な感情であって、原始的で自然な感情の欠如こそ、過度に洗練されているのである。」と訳しがおられる。過度にという言葉には否定的な意味合いがあるが、これはそのような意味合いなく、高度にすすべきではないか。また最後の一文の安藤訳は意味がよくわからない。) 子供にとって両親が最も頼りになるのは、～まともな親であれば、(子供が)病気の時、世間から非難されている時でさえも、幸いなきまで。 私たちはみな、自分の長所ゆえにほめられれば喜びを感じるが、大部分の人は、心底ではそういう称賛は心もとないと感じるだけの謙遜さを持っている。親が子供である私たちを愛するのは、私たちが彼らの子供であるためである。	n.0048：生命の流れ+n.110：個人の死と生命の流れ 「自分が死んだらすておしまい」としか考えられない人は、不幸な晩年を過ごすことになりやすい 自分が死んでも自分の子供を通して永遠に生きていくことは、決して思えば少しは安らぐ、このような情緒は、無神論者であっても可能である。「それでは子供のいない人間は？ 他人の子供であっても愛情を持ってない人間に比べ、ずっと幸福であるだろうか」	若いうちはそのように感じることは難しいだろう。若いうちは、あたかも自分は永久に死なないように、あるいは少なくとも平均寿命くらいは生きられるだろうから。(肉親や親しい知人が死んでない限り)死はまったく他人のように感じられない。 東北大地震が起こった時はさすがに、他人の死も他人事ではないと思っただ人が多かつたと思われうた。しかし、そう思わない(思わなかった)人も少なくないよ。うた。 そうであれば、原発の再稼働がとんとん申請されているのに抗議するものが余り多くないように見えるのは理解に苦しむ。 原発の再稼働に賛成している(あるいは仕方がないと思っている)人も、原発が自宅の近くにないからであり、自宅の近くにあれば反対するだろう。 どうしても原発を再稼働させる必要があるというのであれば、古くなった原発は早めに廃棄し、大量にエネルギーを消費するところに、原発をつくるようにしたほうがよいであろう。海岸近くのような地盤が弱かつたり、海洋汚染を引き起こし、そのところでなく、たとえば岩盤がしっかっている武蔵野台地に建設するともいかもしれない。それだけの準備があればであるが、必ず人口が多い地区では多数の人が反対して建設できないのは目に見えている。結局、少数者がしいたげられる。
r366-c068 + r366-c068-2 (12/26) 画像 カエルの 親子	○	A1-42  <b>R366</b>	But it is in times of misfortune that parents are most to be relied upon, in illness, and even in disgrace if the parents are of the right sort. We all feel pleasure when we are admired for our merits, but most of us are sufficiently modest at heart to feel that such admiration is precarious. Our parents love us because we are their children, and ... (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.13:The family. http://russell-j.com/beginner/HA24-070.HTM	子供にとって両親が最も頼りになるのは、～まともな親であれば、(子供が)病気の時、世間から非難されている時でさえも、幸いなきまで。 私たちはみな、自分の長所ゆえにほめられれば喜びを感じるが、大部分の人は、心底ではそういう称賛は心もとないと感じるだけの謙遜さを持っている。親が子供である私たちを愛するのは、私たちが彼らの子供であるためである。	何故理由があるから相手を愛するのではなく、たとえ相手がどうであろうと愛することができるとする親と子。	
r366-c069 + r366-c069-2 (12/27) 画像 カエルの 親子	○	A1-41/42  <b>R366</b>	The primitive root of the pleasure of parenthood is two-fold. On the one hand there is the feeling of part of one's own body externalised, prolonging its life beyond the death of the rest of one's body, and possibly in its turn externalising part of itself in the same fashion, and so securing the immortality of the germ-plasm. On the other hand there is an intimate blend of power and tenderness. The new creature is helpless, and there is an impulse to supply its needs, an impulse which gratifies not only the parent's love towards the child, but also the parent's desire for power. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.13:The family. http://russell-j.com/beginner/HA24-090.HTM	<親であることの喜びの根源> 親であることの喜びの根源は、二重にある。一方で、自分自身の肉体の一部(注：精子と卵子が受精したもの)が外在化し、自分の肉体の死を越えて生命を延ばしていき、そして、今度はその一部を同じようにして外在化し、そのようにして遺伝子(生殖質)の不滅が確保されるといふ感覚がある(これが喜びの根源のひとつ)。 他方では、権力と懐きの密接に交じり合ったものがある。これがもう一つの喜びの根源。 生まれたばかりの赤ん坊は無力ながら、赤ん坊が必要とする物を与えたいという衝動がある。その衝動は、親の子供に対する愛情だけではなく、親の権力欲(支配欲)をも満足させるものである。 <仕事があること 利点> 仕事には、単なる「退屈し」のぎから最も深い喜びを得られるものまで、仕事の性質と労働者の能力に応じて、あらゆる段階(程度)が存在する。 大部分の人がしなければならない(大部分の)仕事は、それ自体面白いものではない。しかし、そういう仕事でさえ、できるかぎり、今度は、第一に、仕事を、何をすべきかを決める必要なしに、一日のうちのがなり多くの時間を満たしてくれる。 大部分の人は、自分の時間の全てを自由に好きなように使ってよいと思われ、たとしても、その衝動が、自分が何をやらせようかを決めたいとしても、何かが別なことのほうがかもっと楽しかったのではないかと、いったん思い悩まされる。 余暇(時間)を「知的に」使う(＝満たす)ことができるというところ、人間の最後の成果であり、現在、このレベルに達している人はほとんどいない。	・自分の肉体の外在化 ・自分の死を越えて生命を延長 / 子や孫が同じように子供を残していく ・自分をたよるものを保護したいという感情や欲求	
r366-c070 r366-c70-2 + r366-c70-3 (12/28) 画像 南海の孤島にとり のこされた人	○	A1-42  <b>R366</b>	There are in work all grades, from mere relief of tedium up to the profoundest delights, according to the nature of the work and the abilities of the worker. Most of the work that most people have to do is not in itself interesting, but even such work has certain great advantages. To begin with, it fills a good many hours of the day without the need of deciding what one shall do. Most people, when they are left free to fill their own time according to their own choice are at a loss to think of anything sufficiently pleasant to be worth doing. And whatever they decide on, they are troubled by the feeling that something else would have been pleasanter. To be able to fill leisure intelligently is the last product of civilisation, and at present very few people have reached this level. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.14:Work http://russell-j.com/beginner/HA25-010.HTM	仕事があること 利点 仕事には、単なる「退屈し」のぎから最も深い喜びを得られるものまで、仕事の性質と労働者の能力に応じて、あらゆる段階(程度)が存在する。 大部分の人がしなければならない(大部分の)仕事は、それ自体面白いものではない。しかし、そういう仕事でさえ、できるかぎり、今度は、第一に、仕事を、何をすべきかを決める必要なしに、一日のうちのがなり多くの時間を満たしてくれる。 大部分の人は、自分の時間の全てを自由に好きなように使ってよいと思われ、たとしても、その衝動が、自分が何をやらせようかを決めたいとしても、何かが別なことのほうがかもっと楽しかったのではないかと、いったん思い悩まされる。 余暇(時間)を「知的に」使う(＝満たす)ことができるというところ、人間の最後の成果であり、現在、このレベルに達している人はほとんどいない。	【n.0049：余暇(時間)を「知的に」使うこと】 経済的にめくまれている人は、現代においては多種多様な楽しみを享受することが可能であるが、知的な「お金の使い方」をしている人は少ない。一方経済的にめくまれていなくても、「知的に」余暇を使うことは可能なが、年を取っても量がなくてはならず、金銭的な満足は、肉体的あるいは精神的疲労のため、余暇を充分楽しむことができない。	
r366-c071 (12/29) 画像 砂漠を行く 巡礼者の 画像	○	A1-42/43  <b>R366</b>	Continuity of purpose is one of the most essential ingredients of happiness in the long run, and for most men this comes chiefly through their work. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.14:Work http://russell-j.com/beginner/HA25-020.HTM	目的の持続性というところは、長い目で見れば幸福の最も本質的な成分(要素)の一つであるが、大部分の人の場合、これは主に仕事を通して得られる。	【n.0049：余暇(時間)を「知的に」使うこと】 経済的にめくまれている人は、現代においては多種多様な楽しみを享受することが可能であるが、知的な「お金の使い方」をしている人は少ない。一方経済的にめくまれていなくても、「知的に」余暇を使うことは可能なが、年を取っても量がなくてはならず、金銭的な満足は、肉体的あるいは精神的疲労のため、余暇を充分楽しむことができない。	
r366-c072 (12/30) 画像 Satan in the Suburbs より(親戚)	○	A1-43-1  <b>R366</b>	But not infrequently a man will engage in activities of which the purpose is destructive without regard to any construction that may come after. Frequently he will conceal this from himself by the belief that he is only sweeping away in order to build afresh, ... (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.14:Work http://russell-j.com/beginner/HA25-040.HTM	人間は少なからずその後、続くべき建設を何ら顧慮しない破壊的(破壊)な活動に没頭する。しばしば人は自分自身は新たな建設のために古いものを一掃しているだけだと信じこもうとすることによって、このこと(破壊だけが目的であること)を自分に隠そうとする。	多くの人は自分のやりたいことを、自分には力がないと思いきや、20年で20年たためなら生涯の内にといい直せばよい。結局、目標を十分達成できなくても、自分はできるかぎり、肉体的あるいは精神的疲労のため、余暇を充分楽しむことができない。	政治家に多いタイプ

<p>r366-c073 + r366-c073-2 (12/31) 画像 = Blue Plate</p>	<p>A1-43-2</p>	<p>R366</p>	<p>The most satisfactory purposes are those that lead on indefinitely from one success to another without ever coming to a dead end; and in this respect it will be found that construction is a greater source of happiness than destruction. Perhaps it would be more correct to say that those who find satisfaction in construction find in it greater satisfaction than the lovers of destruction can find in destruction, for if once you have become filled with hate you will not easily derive from construction the pleasure which another man would derive from it. At the same time few things are so likely to cure the habit of hatred as the opportunity to do constructive work of an important kind. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.14:Work http://russell-j.com/beginner/HA25-040.HTM</p>	<p>&lt;仕事があることの利点&gt; 最も満足できる目的とは、1つの成功から次の成功へと無限に達して終わりのない目的である。 そして、この点において、建設は、破壊よりもいっそう大きな幸福の源であることがわかるであろう。多分、建設の中に満足を見た人びとは、破壊を好む人々が破壊の中に見いだすよりも、いっそう大きな満足と建設の中に見いだす幸福のほうがいっそう正確であるだろう。というのは、ひとたび心が喜びで満たされた場合は、ほかの人が(建設から)得るような喜びを、建設から得ることは容易でなくなるからである。 同時に、重要な建設的な仕事をする機会ほど、喜びの習慣を定むべき理由は少ない。 &lt;首尾一貫した目的は幸福のほぼ必須の条件&gt; 人生を一つの全体としてながめる習慣は、知恵と真の道徳のいずれにとっても必要不可欠な部分であり、教育においても奨励されるべき事柄の一つである。首尾一貫した目的の利点では、人生を幸福にするに十分ではない。しかしそれは、幸福な人生のほぼ必須の条件である。そして、首尾一貫した目的は、主に、仕事においてその具現化が行われる。</p>	<p>[ n.0050 : 最も満足できる目的+n.0051 : '憎しみの習慣'を治す ] 簡単に達成できることは達成しても満足感があってもない。困難であればあるほど、困難を克服して目的を達成すると喜びが大きい。しかし目的・目標の達成によって目的・目標がなくなってしまつと不幸である。即ち、ラッセルが言うように、「最も満足できる目的は、1つの成功から次の成功へと無限に達し、決して終わりのない目的」である。 [ n.0052 : 首尾一貫した目的 ] ・世の中の流行や力ある者の意向に影響され、あつちへゆらゆら、こつちへゆらゆら ・くだらないことはいくらも経験ができて良い面もあるが中途半端な満足(あるいは自分は自分が本当に求めていることを我儘する習慣)は、不幸の原因となりやすい。 ・首尾一貫した目的や情熱を持てるに越したことはない。もちろんそれだけでは幸福な人生を送るに十分ではないだろうが。 [ n.0053 : 不幸や疲労や神経の緊張の原因 ]</p>
<p>r366-c074 (1/7) 画像 = The Good Citizen's Alphabet, 1953</p>	<p>A1-44</p>	<p>R366</p>	<p>The habit of viewing life as a whole is an essential part both of wisdom and of true morality, and is one of the things which ought to be encouraged in education. Consistent purpose is not enough to make life happy, but it is an almost indispensable condition of a happy life. And consistent purpose embodies itself mainly in work. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.14:Work http://russell-j.com/beginner/HA25-060.HTM</p>	<p>&lt;首尾一貫した目的は幸福のほぼ必須の条件&gt; 人生を一つの全体としてながめる習慣は、知恵と真の道徳のいずれにとっても必要不可欠な部分であり、教育においても奨励されるべき事柄の一つである。首尾一貫した目的の利点では、人生を幸福にするに十分ではない。しかしそれは、幸福な人生のほぼ必須の条件である。そして、首尾一貫した目的は、主に、仕事においてその具現化が行われる。</p>	<p>[ n.0054 : 意識下の思考 ] 起きているときに押さえつけておいても、寝ている時には、押さえつけられたものが制止を聞かずに勝手に動きまわろうとする。意識下の思考は、意識下の世界を甘く見ると手痛い反響にあうかも知れない / 「夢」という言葉は良いイメージで使われることが多いが、実際は、「意識下の世界である」夢の世界」は、自分にとって都合の良いものも勝ち悪いものも多く出現するそうである。真実であろうか [ n.0055 : 気分転換 ] 即ち、興味・関心の対象が広いことは、幸福の条件の一つ</p>
<p>r366-c075 H27年度 (1/2) 画像 = セルが顕微鏡で悩める人の脳を覗いている画像</p>	<p>A1-45</p>	<p>R366</p>	<p>One of the sources of unhappiness, fatigue, and nervous strain is inability to be interested in anything that is not of practical importance in one's own life. The result of this is that the conscious mind gets no rest from a certain small number of matters, each of which probably involves some anxiety and some element of worry. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 15 : Impersonal interests http://russell-j.com/beginner/HA26-010.HTM</p>	<p>&lt;自分に直接関係のないことに興味が続けなくなる不幸&gt; 不幸や疲労や神経の緊張の原因の一つは、自分自身の生活において実質的な重要性のないかなるものに対して興味・関心を持つことができないことである。その結果として、意識的な心は、多少の不安と多少の心配の雲が垂れかかっているだろう(数少ない)事柄のために(事柄が原因で)、休息を得ることができない(できなくなる)。 (注：自分や家族にとって重要性のあるものに注意が集中し、他のものには、興味が続けなくなる。するとわずかな(少数の)心配事なども、(通常であればそのような些細な心配事は、気分転換によってうまく処理されるのであるが)、頭の片隅に残ってしまい、それが原因で気が休めなくなる。また、意識下は眠ったと思っても、意識下では働いていて、やはり休息がとれなくなる。)</p>	<p>[ n.0054 : 意識下の思考 ] 起きているときに押さえつけておいても、寝ている時には、押さえつけられたものが制止を聞かずに勝手に動きまわろうとする。意識下の思考は、意識下の世界を甘く見ると手痛い反響にあうかも知れない / 「夢」という言葉は良いイメージで使われることが多いが、実際は、「意識下の世界である」夢の世界」は、自分にとって都合の良いものも勝ち悪いものも多く出現するそうである。真実であろうか [ n.0055 : 気分転換 ] 即ち、興味・関心の対象が広いことは、幸福の条件の一つ</p>
<p>366-c076 H27年度 (1/3) 画像 = 地球儀を手にとっているもの</p>	<p>A1-46</p>	<p>R366</p>	<p>Except in sleep the conscious mind is never allowed to lie fallow while subconscious thought matures its gradual wisdom. The result is excitability, lack of sagacity, irritability, and a loss of sense of proportion. All these are both causes and effects of fatigue. As a man gets more tired, his external interests fade, and as they fade he loses the relief which they afford him and becomes still more tired. This vicious circle is only too apt to end in a breakdown. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 15 : Impersonal interests http://russell-j.com/beginner/HA26-010.HTM</p>	<p>&lt;疲労が原因の悪循環&gt; 眠っているとき以外、意識的な心は決して休むことを許さないが、一方、意識下の思考は、徐々に知恵をつけ、成熟していき、その結果、興奮や不安、過度な心配、ぼんやり、パランス感覚が失われる。これらは全て、疲労の原因であり、結果である。 人間は疲れば疲れるほど、外界に対する興味が無くなる。外界への興味が無れるにつれて、そうした興味から得られる喜びもなくなり、さらに疲れるようになる。この悪循環は、最後には、「(遺憾ながら)神経衰弱を引き起こしやすい。</p>	<p>[ n.0054 : 意識下の思考 ] 起きているときに押さえつけておいても、寝ている時には、押さえつけられたものが制止を聞かずに勝手に動きまわろうとする。意識下の思考は、意識下の世界を甘く見ると手痛い反響にあうかも知れない / 「夢」という言葉は良いイメージで使われることが多いが、実際は、「意識下の世界である」夢の世界」は、自分にとって都合の良いものも勝ち悪いものも多く出現するそうである。真実であろうか [ n.0055 : 気分転換 ] 即ち、興味・関心の対象が広いことは、幸福の条件の一つ</p>
<p>★ 366-c077 + 366-c077-2 H27年度 (1/4) 画像 = ラッセルがテニスをしているイラスト</p>	<p>A1-47</p>	<p>R366</p>	<p>And it is very much easier to forget work at the times when it ought to be forgotten if a man has many interests other than his work than if it is he has not. It is, however, essential that these interests should not exercise those very faculties which have been exhausted by his day's work. They should not involve will and quick decision, they should not, like gambling, involve any financial element, and they should as a rule not be so exciting as to produce emotional fatigue and preoccupy the subconscious as well as the conscious mind. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 15 : Impersonal interests http://russell-j.com/beginner/HA26-010.HTM</p>	<p>&lt;仕事と気分転換&gt; 仕事が終われば仕事のこととは忘れ、翌日再開するまで思い出さない。その結果、仕事に集中し、気がかけている人よりも、ずっとよい仕事をしやすくなる。 また、仕事以外について興味をたくさん持つていれば、持っていない場合よりも、仕事を忘れるべきときに忘れることがずっと容易になる。ただし、こういう興味は、一日の仕事に興味を持ってはならないという、最も重要なことである。 こうした興味は、意志とか即座の決断とかを伴うものであってはならず、チャンプル(賭け事)のように金銭的な要素を含むものであってはならず、また、原則として、感情を疲労させ、意識だけでなく無意識の心の注意をうばうほど興奮させるものであってはならない。</p>	<p>[ n.0055 : 気分転換 ] 即ち、興味・関心の対象が広いことは、幸福の条件の一つ</p>
<p>366-c078 + 366-c078-2 H27年度 (1/5) 画像 = 汝自身を知れ</p>	<p>A1-48</p>	<p>R366</p>	<p>All impersonal interests, apart from their importance as relaxation, have various other uses. To begin with, they help a man to retain his sense of proportion. It is very easy to become so absorbed in our own pursuits, our own circle, our own type of work, that we forget how small a part this is of the total of human activity and how many things in the world are entirely unaffected by what we do. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 15 : Impersonal interests http://russell-j.com/beginner/HA26-020.HTM</p>	<p>&lt;非個人的な興味(私心のない興味)の効用&gt; 非個人的な興味(私心のない興味)は全て、「気晴らし」として重要であることはさておき、他にも様々な効用がある。まず第一、こういう興味は、パランス感覚を保持するこの手助けとなる。私たちは、自分たちの職業や、自分たちの仲間社会、自分たちの仕事の種類の非常にたやすく没頭するために、それらが人間活動全体の中心のいかに小さな部分でしかないか、また、私たちの活動によって、世界中のいかに多くのものがまったく影響されないかということ、を忘れてしまふ。 &lt;良い目的に方向付けられた少しい仕事のおかげ&gt; &gt; 私たちはみな、不当に興味がしたり、不当に緊張したり、自分たちの住んでいる世界の片隅や、その間のほんの一部分の時間の重要性を不当に重んじがちな傾向がある。こうした興奮や私自身自身の重要性の過大評価には、望ましいものも何もなし。実際、それは、私たちがもつと懸命に働かせるがもしないが、もっと良く働かせないだろうか。良い目的に方向付けられた少しい仕事のおかげで、良い目的に方向付けられた大量の仕事よりも、より良い。ただし、「精神的な人生を信奉する人(使徒)たちは、そのようには考えないであろうか。」</p>	<p>[ n.0056 : 井の中の蛙 ] ・井の中の蛙 / 蟻社会 ・木を見て林を見ず、林を見て森を見ず ・宇宙から地球をみれば、地球の表面上にばいばいのように繁殖した人類。しかしそれを対象化できる人間の精神はすばらしいといわれるが、果たして・ ・ [ n.0057 : 不当な反応 ] ・本当に自分が望むものを発見でき、熱中することができるとすれば幸せなことである。だが、何も熱中できるものがないよりは、何であつても熱中できるものがあつた方がよいということだけで、真に自分が望むものでない、何らかの対象に、不当にこだわったりする(固執したりする)ことがある。 ・自分から望むものを追い続ける人は、そうでもないものに、不当に興味がしたり、不当に重要性を強調したりすることはないであろう。</p>
<p>★ 366-c079 + 366-c079-2 H27年度 (1/6) 画像 = 多くの機械を回しているイ(技術系企業内訳)</p>	<p>A1-49</p>	<p>R366</p>	<p>We are all inclined to get unduly excited, unduly strained, unduly impressed with the importance of the little corner of the world in which we live, and of the little moment of time comprised between our birth and death. In this excitement and over-estimation of our own importance there is nothing desirable. True, it may make us work harder, but it will not make us work better. A little work directed to a good end is better than a great deal of work directed to a bad end, though the apostles of the strenuous life seem to think otherwise. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 15 : Impersonal interests http://russell-j.com/beginner/HA26-030.HTM</p>	<p>&lt;狂信に対する予防薬&gt; 狂信の本質は、素晴らしいことを一つか二つ覚えていて、それ以外のことは全て忘れてしまふ。この一つか二つを追求するにあつては、他の種類のいかなる付随的に起こる害も大したことではないと考えることにある。こうした狂信的な気質に対する「予防薬」としては、宇宙にむける人間の一生と人間の位置とを大らかに認識することに勝るものはない。そのような(人間と宇宙との)関連を引き合いに出すことは、「大げさだと思われるかもしれない。しかし、こうした効用のほかには、パランス感覚には、それ自体大きな価値がある。</p>	<p>[ n.0057 : 不当な反応 ] ・本当に自分が望むものを発見でき、熱中することができるとすれば幸せなことである。だが、何も熱中できるものがないよりは、何であつても熱中できるものがあつた方がよいということだけで、真に自分が望むものでない、何らかの対象に、不当にこだわったりする(固執したりする)ことがある。 ・自分から望むものを追い続ける人は、そうでもないものに、不当に興味がしたり、不当に重要性を強調したりすることはないであろう。 [ n.0058 : 狂信の本質 ] 特定の政治に属する政治家は、反対政党を「隴華の根拠」という非難の仕方をする。このような態度は政治家に限ったことではなく、国民一般にもよく見られる。もっとも多くの政治家の場合は、もっと不潔であり、より権力を握れるほどに、政党の所属さえも変えてしまう人も珍しくない。良いことを行うにも、権力を握る必要があると主張し、いつの間にか手段が目的化してしまふ。</p>
<p>366-c080 H27年度 (1/7) 画像 = リッセルのイラスト</p>	<p>A1-50</p>	<p>R366</p>	<p>Fanaticism consists essentially in remembering one or two desirable things while forgetting all the rest, and in supposing that in the pursuit of these one or two any incidental harm of other sorts is of little account. Against this fanatical temper there is no better prophylactic than a large conception of the life of man and his place in the universe. This may seem a very big thing to invoke in such a connection, but apart from this particular use it is in itself a thing of great value. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 15 : Impersonal interests http://russell-j.com/beginner/HA26-030.HTM</p>	<p>&lt;狂信に対する予防薬&gt; 狂信の本質は、素晴らしいことを一つか二つ覚えていて、それ以外のことは全て忘れてしまふ。この一つか二つを追求するにあつては、他の種類のいかなる付随的に起こる害も大したことではないと考えることにある。こうした狂信的な気質に対する「予防薬」としては、宇宙にむける人間の一生と人間の位置とを大らかに認識することに勝るものはない。そのような(人間と宇宙との)関連を引き合いに出すことは、「大げさだと思われるかもしれない。しかし、こうした効用のほかには、パランス感覚には、それ自体大きな価値がある。</p>	<p>[ n.0058 : 狂信の本質 ] 特定の政治に属する政治家は、反対政党を「隴華の根拠」という非難の仕方をする。このような態度は政治家に限ったことではなく、国民一般にもよく見られる。もっとも多くの政治家の場合は、もっと不潔であり、より権力を握れるほどに、政党の所属さえも変えてしまう人も珍しくない。良いことを行うにも、権力を握る必要があると主張し、いつの間にか手段が目的化してしまふ。</p>

★	366-c081 H27年度 (1/8)		A1-51 A3教育 へ移動	R366	It is one of the defects of modern higher education that it has become too much a training in the acquisition of certain kinds of skill and too little an enlargement of the mind and heart by any impartial survey of the world. You become absorbed, let us say, in a political contest, and work hard for the victory of your own party. So far, so good. But it may happen in the course of the contest that some opportunity of victory presents itself which involves the use of methods calculated to increase hatred, violence and suspicion in the world. For example, you may find that the best road to victory is to insult some foreign nation. If your mental purview is limited to the present, or if you have imbibed the doctrine that what is called efficiency is the only thing that matters, you will adopt such dubious means. Through them you will be victorious in your immediate purpose, while the more distant consequences may be disastrous. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 15: Impersonal interests http://russell-j.com/beginner/HA26-030.HTM	[n.0059: 目先の勝利] 短期的な成果ばかり求める心性の現れ。		
	366-c082 + 366-c082-2 H27年度 (1/9)	○	A1-52	R366	Among those that I regard as harmful and degrading I include such things as drunkenness and drugs, of which the purpose is to destroy thought, at least for the time being. The proper course is not to destroy thought but to turn it into new channels, or at any rate into channels remote from the present misfortune. It is difficult to do this if life has hitherto been concentrated upon a very few interests and those few have now become suffused with sorrow. To bear misfortune well when it comes, it is wise to have cultivated in happier times a certain width of interests. * suffuse (v): (光・色・涙などが――を) おお、いっぱいにする (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 15: Impersonal interests http://russell-j.com/beginner/HA26-050.HTM	[n.0060: 不幸の予防策] つらい経験をしたことが余りない人は、ちよつとした不幸で覆ち込んでしまう。人によっては、それが「感受性が豊かな証拠」だと勘違いする人もいる。/ ちよつとしたことで動揺する人は、「世間知らず」であり、狭い世界に住んでいる人である。/ 興味関心の対象が狭いと、それらが失われると、気分転換によって不幸を招きやすくなる。/ 子供は、子供の幸福を望むのであれば、親や社会は、子供に広い視野や興味関心を持てるように家庭の養育教育をしなければならない。		
★	366-c083 + 366-c083-3 H27年度 (1/10)	○	A1-53	R366	The golden mean is an uninteresting doctrine, and I can remember when I was young rejecting it with scorn and indignation, since in those days it was heroic extremes that I admired. Truth is not always interesting, and many things are believed because they are interesting; although, in fact, there is little other evidence in their favour. The golden mean is a case in point: it may be an uninteresting doctrine, but in a very great many matters it is a true one. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 16: Effort and resignation http://russell-j.com/beginner/HA27-010.HTM	[n.0061: 軽信は禁物] 人の噂などというものは頼りない。いいかげんなものであり、多くの場合間違っている。しかし人は、自分の場合だったら根拠するようなくとも、他人のこの場合は「ありえる」と思ってしまうがち。お互い人(他人)の噂話は、疑ってかかった方が安全である。噂話の対象が、敵・嫌いな相手であれば、味方・好きな相手であれ、。		
	366-c084 H27年度 (1/11)	○	A1-54	R366	The wise man, though he will not sit down under preventable misfortunes, will not waste time and emotion upon such as are unavoidable, and even such as are in themselves avoidable he will submit to if the time and labour required to avoid them would interfere with the pursuit of some more important object. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 16: Effort and resignation http://russell-j.com/beginner/HA27-040.HTM	[n.0062: 感情の浪費を避ける] 避けられる不幸なのか、避けられない不幸なのか。判断が難しい場合は少なくない。/ 自力解決を簡単にあきらめるのもよくないが、自分に力がないのを理解せずむやみにジタバタするのも知恵がない。/ 避けられない不幸だと判断可能な場合、あるいは少なくとも現時点では抵抗できないと思ったら、無駄なエネルギーを使わない方がよいだろう。・		
	366-c085 H27年度 (1/12)	○	A1-55	R366	Efficiency in a practical task is not proportional to the emotion that we put into it; indeed, emotion is sometimes an obstacle to efficiency. The attitude required is that of doing one's best while leaving the issue to fate. Resignation is of two sorts, one rooted in despair, the other in unconquerable hope. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 16: Effort and resignation http://russell-j.com/beginner/HA27-040.HTM	[n.0063: 感情の浪費を避けるn2] 冷静な判断を伴わない精神論や過大な思い入れは、目的を達成する邪魔になることも少なくない。/ 目的に向かつて、たんとんと課題を処理したほうがよい。		
	A6 毒舌集 に移動		A1-56	R366	Those who can only do their work when upheld by self-deception had better first take a course in learning to endure the truth before continuing their career, since sooner or later the need of being sustained by myths will cause their work to become harmful instead of beneficial. → これは毒舌集に含めたほうがよいと思われま。	[n.0064: 真実に耐える学習] 進前と本音の使い分け / 表立って本音を言うことと失職するので、。		
★	366-c086 + 366-c086-2 H27年度 (1/13)	○	A1-57	R366	The happy man is the man who lives objectively, who has free affections and wide interests, who secures his happiness through these interests and affections and through the fact that they, in turn, make him an object of interest and affection to many others. To be the recipient of affection is a potent cause of happiness, but the man who demands affection is not the man upon whom it is bestowed. The man who receives affection is, speaking broadly, the man who gives it. But it is useless to attempt to give it as a calculation, in the way in which one might lend money at interest, for a calculated affection is not genuine and is not left to be so by the recipient. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 17: The happy man http://russell-j.com/beginner/HA28-010.HTM	[n.0065: 幸福な人間とは] 自意識過剰な人間は嫌われる。視野が狭く、自分のことばかり考えている人間も嫌われる。打算の上で他人に親切な行為をする人も好かれない。/ 事実や現実に目をつぶらず、視野が広く、他人の幸福をあたかも自分の幸福であるかのように感じられる人は幸福な人間である。		

<p>366-c087 + 366-c087-2 H27年度 (1/14)</p>	<p>○</p>	<p>A1-58 Undoubtedly we should desire the happiness of those whom we love, but not as an alternative to our own. In fact the whole antithesis between self and the rest of the world, which is implied in the doctrine of self-denial, disappears as soon as we have any genuine interest in persons or things outside ourselves. Through such interests a man comes to feel himself part of the stream of life, not a hard separate entity like a billiard-ball, which can have no relation with other such entities except that of collision. All unhappiness depends upon some kind of disintegration or lack of integration; there is disintegration within the self though lack of coordination between the conscious and the unconscious mind; there is lack of integration between the self and society where the two are not knit together by the force of objective interests and affections. The happy man is the man who does not suffer from either of these failures of unity, whose personality is neither divided against itself nor pitted against the world. Such a man feels himself a citizen of the universe, enjoying freely the spectacle that it offers and the joys that it affords, untroubled by the thought of death because he feels himself not really separate from those who will come after him. It is in such profound instinctive union with the stream of life that the greatest joy is to be found. [28] The Conquest of Happiness, 1930, chap. 17 : The happy man http://russell-j.com/beginner/HA28-030.HTM</p>	<p>「人格が分裂していない宇宙の市民」 私たちは、愛する人びとの幸福を願うべきであるが、私たちが自身の幸福と「引き換え」であってはならない。善業「自己否定」の教義に含まれている「自己とその他の世界との対立」は、私たちが外部の人びとや事物に本物の関心を寄せるようになるやいなや、消滅する。そういう関心を通して、人は「自分が生命の流れの一部」であり、衝突時以外には他の善業「自己否定」の教義と「引き換え」であってはならない。善業「自己否定」が分離した実体ではないということを感じるようになる。全ての不幸はある種の分裂あるいは「統合の欠如」にその原因がある。「意識的な精神」と「無意識的な精神」とをうまく調整できないと、自我の中に分裂が生じる。自我と社会とが客観的な関心や感情によって結合されていないと、両者間に「統合の欠如」が生じる。幸福な人とは、これらの統一のいずれにおいてもうまくいかないということに苦しんでおらず、自分の人格が内部で分裂していかなくて、世界と対立してもいない人である。そのような人は、自分が宇宙の市民であると感じ、宇宙が提供するスペースが、自分や宇宙が与える喜びを十分に享受し、また、自分の後から来る人々（子孫その他）と自分とは本当に別個な存在だとは感じないで、死を恐怖して悩むこともない。最も大きな喜びが見いだされるのは、生命の流れと深く本能的な結合においてである。</p>	<p>n.0066 : 自分の幸福と愛する人の幸福 愛する人のために自己を犠牲にすることを万人がみな行うべき徳目としたらどうなるであろうか？ / 自分自身の幸福のために自分の愛する人が犠牲になるとしたら、愛されている人も心苦しいであろう。 / 「愛する人のために」という言葉を「愛する人のために（敵国と戦う）」と「家族を守るために（敵国と戦う）」と言い換えてはどうであろうか？ / 自分たちの国土が侵略にあつたのであれば、是非そうしなければならぬであろうか？ / その国に赴いて「日本のため」、「愛する人々々のため」などと「自己犠牲」を強調してもそれは自己欺瞞ではないか？ / そう思わない政治家や国民も少なくない。 / 日本のため、「愛する人々々のため」であれば外国に赴いて外国人を殺すこと（攻撃は最大の防御）は「必要悪」とも言うのであろうか？ / 「はむかしてくるから自衛のために戦うだけ」と言っても、それは日本以外の軍隊が平和を維持するためと言つて侵入してきたらどうか、彼らも同じような言い方をするのであろう。/ 固有の文化に対する愛着ではなく、国体のような「政治的な愛国心」を強調する人々は自己欺瞞に陥っているのか、そうでないとしたら、単に冷静かつ客観的に善事を考える能力に欠けているだけなのであろうか？</p>	
<p>366-c088 + 366-c088-2 H27年 (1/15)</p>	<p>○</p>	<p>A1-59 But without a considerable amount of leisure a man is cut off from many of the best things. There is no longer any reason why the bulk of the population should suffer this deprivation, only a foolish asceticism, usually vicarious, makes us continue to insist on work in excessive quantities now that the need no longer exists. [32] In Praise of Idleness, 1935]</p>	<p>R386 しかしかなりの余暇時間がなければ、人間は（人生における）最良のものから切り離される。国民（民衆）が大半の人口が苦しむこの貧乏は、必要とされない理由はもはやまったくない。愚かな禁欲主義のみが - それは通常「身代わり」のものであるが - 今日ではもはや必要のない「過度の労働」（の必要性）を強調し続けるのである。 (注 vicarious asceticismの意味は、ラッセル「身代わり」の禁欲主義について）を参照。 http://russell-j.com/KINYOKU.HTM</p>	<p>[格言・警句集 n.117 : 身代わりの禁欲主義]</p>	
<p>366-c089 H27年 (1/16)</p>	<p>○</p>	<p>A1-60 The first time one learns that one's best friends are liable to be wittily satirical at one's expense, the experience is very painful, and one feels furious in spite of the consciousness of often having done the same thing oneself; but a little experience and a little reflection will convince anybody that he cannot hope to be an exception and to have none of his foibles ever laughed at. The same sort of thing applies also to graver matters. It is possible, though I admit that it is difficult, to view oneself as an exception to general laws and as not having a sacrosanct immunity from the ordinary misfortunes of life. There is much too much pompous self-esteem in the world, and anything that diminishes the harm that people do by demanding more than their due share of the world's room is to be welcomed. [From: On Jealousy (written in July 22, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/JEALOUSY.HTM</p>	<p>R386 最も親しい友人までが、自分（あなた）をからかって、機知をきかせて皮肉を言つて楽しむ傾向があることを初めて知ると、そのような経験は非常に辛いものであり、大抵他人に対し同様のことをよくやっていることに気づいていても、ひどく立腹する。 しかし、少し経験や反省をすれば、自分だけが例外でありまた自分の欠点を他人から笑われることを期待することのできない人びとが必ずしもいるとは考えられないであろう。同様のことはもつと深刻なことから当ても当てはまる。認めることは難しいことではあるが、自分が一般法則の例外ではなく従つて人生の通常の不幸からの免罪符を持っていないと認識することは可能である。確かに世の中にはもつとひどいことがあつてもよいと主張する者もいる。考えれば、人々が自己の分け前以上のものを要求することによつてなされる害を減らすものは歓迎すべきものであることは疑いない。</p>	<p>[格言・警句集 n.118 : 人の振り見て・・・]</p>	<p>ラッセルは『幸福論』のなかで、嫉妬について次のようにべています。「通常の人間性のあらゆる特質のなかで、嫉妬は最も不幸なものの一つである。嫉妬深い人は単に他人に不幸を加えようと望み、また罰せられることなしになし得ることもなれどもやつてのけるだけではない。さらに自分自身もまた嫉妬により不幸にする。嫉妬深い人は自分の持っているものから羨しみを取り出すがわりには他人の持っているものから羨しみを取り出す。この嫉妬の嫉妬は、男女間の愛情だけでなく、もつと広い意味で使われていますが、みなさんどう思われるでしょうか？」</p>
<p>366-c090 H27年 (1/17)</p>	<p>○</p>	<p>A1-61 In the modern world there is hardly any leisure, not because men work harder than they did, but because their pleasures have become as strenuous as their work. The result is that, while cleverness has increased, wisdom has decreased because no one has time for the slow thoughts out of which wisdom, drop by drop, is distilled. [From: The decay of meditation (written in Nov. 7, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/MEDITATE.HTM</p>	<p>R386 今の世の中には、時間のゆとりがほとんどないが、それは昔より人々が働いて暮らすよりも、私たちが愛する友人達から、しごとが仕事同様に努力を要する事柄になったためである。その結果、人間は小利口にはなつたが、知恵が少しずつ「蒸留」されるゆつたりと考える時間(余裕)を持っていないため、知恵は減少してしまつた。</p>	<p>[格言・警句集 n.129:小利口だが知恵が乏しい現代人]</p>	
<p>Twitterで使したばかりなので・・・</p>	<p>○</p>	<p>A1-62 Where there is delight in a process, there will be style, and the activity of production will itself have aesthetic quality. But when men assimilate themselves to machines and value only the consequences of their work, not the work itself, style disappears, to be replaced by something which to the mechanised man appears more natural, though in fact it is only more brutal. [From: In praise of artificiality (written in Sept. 9, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/ARTIFICI.HTM</p>	<p>R386 ・・・。（ものを作る）過程に喜びがある場合、そこには必ずスタイルがあり、従つて生産活動はそれ自体、美的特質を持つに至るだろう。しかし、人間が機械に同化した、仕事者の魂のみに価値をおき、仕事それ自体を価値とするならば、スタイルが姿を消し、機械に同化した人間には普通に見られるが実際はたつと野蛮なもののみがそれに取つて代わる。</p>	<p>[コメント]通常、「手段」という言葉は、「ある目的を実現するためのもの」という意味合いで使われています。これに対し、プラグマティストのJ. デューイは、彼等の目的は「より高次の」目的のための「手段」にすぎないとします。最高次の目的を「人間の幸福」におくことに対しても異論を唱える人はいると思われすが、このJ. デューイの中でラッセルは、(常識的な意味合いで)人間の幸福を最重要なものとして、(科学技術や機械の利用において)手段と目的をとりちがえないよう警鐘をならしています。70年前に書かれたものですが、的確に備するとと思われる。</p>	<p>On Education (1926) は、90年近く経った現在でも読み続けられている名著です。この本は、初等教育についてラッセルの体験をもとにして書かれたものであるため、かなり具体的かつ説得力のある記述となっています。 1934年には、Education and the Social Order という本を出しました。こちらは社会との関連で教育の諸問題を考えたものであり、姉妹編とでもいうべきものです。</p>
<p>これは、まともがりがよくない(不十分)</p>	<p>○</p>	<p>A1-63 To make children happy is not difficult. It requires only affection, common sense, and good spirits. But I am constantly told by my friends - and not only by the highbrows among them - that those who make children happy unfit them for later life. The highbrow tells me that the world is a horrible place which can only be endured by those who have never experienced happiness and therefore do not miss it. The ordinary citizen tells me that it was not by means of happiness in his early years that he was made into the man he is. No, sir, it was by stern discipline, by the austere experience of going without, by toil and hardship and severity. [From: Should children be happy? (written in June, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/CHILDHAP.HTM</p>	<p>R386 子供を幸福にすることは難しくない。必要なものは愛情、常識、そして好ましい気持だ。だが私は常に友人達から、しかも単にインテリ層からばかりでなく、子供を幸福に育てると成人後の彼らの生活を不安定かつ不適切なものにしてしまつと警告され続けている。彼らインテリは、この世は幸福を肌で体験せず従つてそれを得ない望まない人間に育つていくと主張する。子供を幸福にするには、大抵世間の市民は、自分が現にあるような人物となれたのはけつて若いときの幸福のおかげではないと言ふ。即ち、自分が今日あるのは、それは逆の、厳しい規律と過酷な体験、亮苦勉勵の努力の賜物なのだ、と彼は言う。</p>	<p>[格言・警句集 n.129:小利口だが知恵が乏しい現代人]</p>	
<p>366-c091 H27年 (1/18)</p>	<p>○</p>	<p>A1-64 The ideal of financial success is set before the young by most of the influences that form their minds. In the cinema they see representations of luxury, where plutocrats own marble halls and beautiful ladies in splendid dresses. The hero generally succeeds, in the end, in belonging to this successful class. Even artists come to be judged by the amount of money they make. Merit not measured in money comes to be despised. Every kind of sensitiveness, being a handicap in the struggle, is regarded as a stigma of failure. [From: Fope and Fear, Oct. 7, 1932. In Mortals and Others, v.1, 1975.] http://russell-j.com/HOPEFFEAR.HTM</p>	<p>R386 若者の精神を形成する影響力のある大部分のもの（人やメディア）によつて、金銭面での成功の理想像が若者の前に示される。映画では、若者たちは豊沢を表現したのを見る。英雄は美しき大抵世間の市民は、自分が現にあるような人物となれたのはけつて若いときの幸福のおかげではないと言ふ。即ち、自分が今日あるのは、それは逆の、厳しい規律と過酷な体験、亮苦勉勵の努力の賜物なのだ、と彼は言う。</p>	<p>知性や感性よりも「意志の力」が重視され、あらゆるものが、金銭の尺度ではかられる現代世界・・・</p>	



<p>366-c092 H27年 (1/19)</p>	<p>A1-65</p>	<p>R366</p>	<p>I like to think that civilisation will continue to improve, and the opposite thought when it comes, as it sometimes will, is depressing. In these days, when the immediate outlook is somewhat gloomy, the thought of a more distant future is often cheering. [From: Taking long views, Mar. 30, 1932. In Mortals and Others, v.1, 1975.] http://russell-j.com/LONGVIEW.HTM</p>	<p>私は、人類の文明は改善され続けると考えたいが、時々起こる ように、まったく逆の考えにとらわれると憂鬱になる。(しかし)今日、当面の将来が憂鬱な時に、はより遠い 将来のことを考えると、しばしば元気づけられる。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「 長い目で見ること」 http://russell-j.com/LONGVIEW.HTM</p>	<p>人類の進歩と言った場合、医療の進歩、寿命の大幅延長、その他いろいろありませぬ。しかし、「進歩」というのは、吾輩的なものではなく、人類の「繁殖」のために人間が本能的にそのように感じざるをえないようになっているのかも知れませぬ。現在地球上の人口は約70億ですが、これが200億、1000億と増えていくのが、本当に人類の進歩になるのか？、生産能力以上に人口が増えていく場合には、自然の調整機能が働いて大きな戦争が起ころのか？ 宇宙「開拓」なんていっても、1000億の恒星を含んだ銀河団が1,000億以上もある宇宙の規模から考えれば、人類のやっていることはとるに足らないことであり、数百年後に大きな天体が地球にぶつかり、他の惑星に移住した人間以外、地球上の人類は全滅するかも知れませぬ。人間の生命は百年たらずなので、こういうことは考えても仕方がないことですが、時々こんなことを思ったりすることは人類・人間が傲慢になる反省の機会として意義があるかも知れませぬ。</p>	
<p>366-c093 H27年 (1/20)</p>	<p>A1-66</p>	<p>R366</p>	<p>I believe that if our pessimists were subjected to a rigorous regimen of physical exercise, a simple but wholesome diet and long hours of sleep, they would begin to find all sorts of things worth doing and would feel hopeful as to the possibility of doing some of these things themselves. Any man who contemplates writing a book or engaging in any forms of preaching or propaganda should be obliged to do an hour's digging or other outdoor manual work before breakfast. By that time breakfast would be such a delight that throughout the rest of the day he would be incapable of thinking that all is vanity. " regimen (n) : 養生, 養生法 出典：Why are we discontented? In: Mortals and Others; Bertrand Russell's American Essays, v.1 (1975) 詳細情報：http://russell-j.com/YOKKYU.HTM</p>	<p>もし現代の厭世主義者たちが身体運動、質素ではあるが健康に良い食事、長い睡眠時間という確かな養生法に従うならば、彼らはやる価値のある事柄をいろいろ発見し、それらの事柄のなかのいくつについては自分たちでも実行できるかもしれないという希望を抱くであろう。本を書いたり何らかの形で人に説教したり、思想を広めたりしたいと考えている人は、朝食前に1時間の土曜日もしくはその他の野外的な肉体労働を自らに強いるとよい。そうすれば朝食は非常に美味となり、朝食以後その日は一日中、世の中のことが全て空虚であるなどと思うことはできなくなる、と私は信じる。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「なぜ我々は欲求不満か？」 http://russell-j.com/YOKKYU.HTM</p>	<p>自由業でない限り、現代人は毎日朝1時間運動する時間はとることが難しいですね。しかし、毎朝10分間のTV体操（NHKラジオ体操）なら心がけ次第で誰でも可能なはずですが、いかがでしょうか？ そうして土曜日曜に1時間ほどの散歩をすることによって、かなり健康を維持できそうです。</p>	
<p>割愛 or ペンディング</p>	<p>A1-67</p>	<p>Those of us whose work is not manual are apt to have far less physical exercise than the health of the body demands; or diet also tends to be rich without being nourishing. Such homely reasons as these have, I believe, much more to do with the discontent of moderns than has any form of cosmic despair or decay of faith. If I am right, the cure for modern despair is a matter for the physician, not for the philosopher. I, alas, am a philosopher, not a physician.</p>	<p>肉体労働に従事しない現代人の運動量は、肉体そのものを健康に保つために必要な運動量をどうしても下回る。また、我々のとる食事も豊かではあるが栄養がないものになりがちである。これらが生じている日常的原因が、世界についての絶望感や信仰の衰微といったいかなる形でも、現代人の欲求不満と一層深く関係している、と私は信じている。もしも私の考えが正しいならば、現代人の絶望を直す仕事は医者や哲学者の任務であって、哲学者の任務ではない。残念ながら、私は哲学者であって、医者ではない。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「なぜ我々は欲求不満か？」 http://russell-j.com/YOKKYU.HTM</p>	<p>「我々のとる食事も豊かではあるが栄養がないものになりがちである。」 「栄養がない」というのは、「栄養が少なかったり、栄養のバランスがとれていない」と読めます。野菜に限定してみても、高級野菜は別として、日々の食事に野菜は、昔の野菜に比べて栄養価が数分の一のものとなっています。昔と同じ栄養価の野菜も売られていますが、そういったものに限定すると、エネルギーがずっとアップしてしまい、高所得者しかその恩恵を受けることができません。 ラッセルが言いたいのは、もちろんどんなに健康であっても、厭世主義的になってしまうような不幸はあるけれども、非常に多くの不幸が、運動不足や栄養不足による不健康が原因と思われ、ということですね。 不健康であれば医者のお世話になる必要があり、哲学や哲学者に救いを求めてはいけぬ、との警句です。</p>		
<p>ペンディング</p>	<p>A1/C 1-01</p>	<p>The most unhappy moments of my life were spent at Grantchester. My bedroom looked out upon the mill, and the noise of the millstream mingled inextricably with my despair. I lay awake through long nights, hearing first the nightingale, and then the chorus of birds at dawn, looking out upon sunrise and trying to find consolation in external beauty. I suffered in a very intense form the loneliness which I had perceived a year before to be the essential lot of man. I walked alone in the fields about Grantchester, feeling dimly that the whitening willows in the wind had some message from a land of peace. I read religious books such, as Taylor's Holy Dying, in the hope that there might be something independent of dogma in the comfort which their authors derived from their beliefs. I tried to take refuge in pure contemplation; I began to write The Free Man's Worship. The construction of prose rhythms was the only thing in which I found any real consolation. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6: Principia Mathematica, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB16-090.HTM</p>	<p>私の生涯で最も不幸な時期をグランチェスターで過ごした。私の寝室は水力製粉所に面していた（注：現在は製粉所はない）。そして、製粉機の水車の水の流れる音と私の絶望感（？）が、離れできない距離で、混じり合っていた。私は、強晩も、長い夜を、いつまでも眠らずに、ベッドに横たわっていた。まず最初にナイチンゲール（nightingale サヨナキドリ）：夜美しく鳴くので有名）上の切手の鳥の鳴き声を聞き、それから夜明けに鳥たちの合唱を聞き、目の出を眺め、そして外界の美しさに魅めを見たそうと努めた。私は、孤独から、非常に激しく、悩ま苦しんだ。1年前は、孤独は人間の本質的な運命であると思っていた。私は、風になびいている白柳（whitening willows）が、平和の国からのメッセージを何かもたらしているのではないかと、ぼんやりと思いつながら、グランチェスター周辺の野原を一人で散策した。私は、宗教書の著者たちが自分たちの信条から得ている類めのうちに、独断的な教条によらない何かがあるにちがいないという希望をいだいて、テイラー（Jeremy Taylor, 1613-1667）の「聖なる死」といったような宗教書を何冊か読んだ。純粋な理想の中に避難しようとした。即ち、「自由人の崇拜」（A Free Man's Worship）を執筆し始めた。散文のリズムを組み立てることは、私が真の慰めをいくらも見いだした唯一のものであった。</p>			
<p>ペンディング</p>	<p>A1/C 1-02</p>	<p>In the following year, 1930, I published The Conquest of Happiness, a book consisting of common-sense advice as to what an individual can do to overcome temperamental causes of unhappiness, as opposed to what can be done by changes in social and economic systems. This book was differently estimated by readers of three different levels. Unsophisticated readers, for whom it was intended, liked it, with the result that it had a very large sale. Highbrows, on the contrary, regarded it as a contemptible pot-boiler, an escapist book, bolstering up the pretence that there were useful things to be done and said outside politics. But at yet another level, that of professional psychiatrists, the book won very high praise. I do not know which estimate was right; what I do know is that the book was written at a time when I needed much self-command and much that I had learned by painful experience if I was to maintain any endurable level of happiness. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 4: Second Marriage, 1968] http://russell-j.com/beginner/AB24-100.HTM</p>	<p>私の1930年には「幸福論」という本を出版した。それは、不幸の気質的な原因を克服するために、社会的・経済的制度的変革によってなされることに対照する（向かい合っている）ものとして、各個人が何をなされるかということに関する常識的な助言を記したものである。この本は、3つの異なる階層の読者によって異なる評価を受けた。素朴な読者は、本書はそれらの人向けに執筆されたものだが、本書を愛読した。その結果、大受けた行き先を記した。これと反対に、自棄連発の書であり政治以外になされるべきあるいは言われるべき有益なことがあるのだという虚偽（みせかけ）を支持する本だと見なした。しかしながら、またさらに別の階層、即ち専門的な精神科医のレベルにおいては、この本は非常に高い評価を得た。いずれの評価が正しいのか私にはわからない。はっきりしていることは、この本が書かれたのは、もし自分が我慢できる程度のいかなる幸福を維持しようとしても、大変な「自利心」や「辛い経験」から学んだ多くのことを必要とした、そういった時期だったということである。浪費するのを楽しんだ時間は、浪費された時間ではない。</p>	<p>（訳注：そういった意味でラッセルにとって、また多くの人にとっても、「幸福」とは向こうからやってくるものではなく、努力して獲得するものである。そこで、ラッセルは書名を The Conquest of Happiness としたのである。）</p>		
<p>A2 割愛と結 尾</p>						

				A2-01-2	A couple may form, as the Brownings did, a mutual admiration society. It is very pleasant to have someone at hand who is sure to praise your work, whether it deserves it or not. The Conquest of Happiness, 1930, chap.2 : The Byronic unhappiness. http://russell-j.com/beginner/HA12-050.HTM	(夫婦や恋人などの)カップルは、ブラウニング夫妻がそうしたように、相互にはあつた社会を作るかもしれない。ほめられる価値があつてもなくても、身近に必ずほめてくれる人がいることは、非常にうれしいことである。 出典：ラッセル『幸福論』第2章「バイロン風不幸」 http://russell-j.com/beginner/HA12-050.HTM	深め合う関係が一生涯けばよいのかも知れないですが、ほとんどの場合、そのようなことにはなりません。 人間には誰にも欠点がありますので、よい関係を取り続けようと思えば、常に向上しようという気持ちと取り組みがあるかどうかが重要となります。お互いが努力していれば、まず幻滅するようなどはごく少なくなるはず。 [n.0005 恋愛の価値] 恋愛経験の重要性 / 自我の固い殻をこわす恋愛 / 恋に恋する恋愛 / 心の底から湧き出る感情としての恋愛 / 恋愛の生物学的役割		
				A2-01	Love is the first and commonest form of emotion leading to cooperation, and those who have experienced love with any intensity will not be content with a philosophy that supposes their highest good to be independent of that of the person loved. (28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.2:Byronic unhappiness http://russell-j.com/beginner/HA12-070.HTM	恋愛(男女間の愛情)は、協力を生み出す感情の、第一のそして最も一般的な形であつて、いかなる程度であつても恋愛を経験したことのある人ならば、自分の最高の幸福(善)が愛する人の幸福(善)とは無関係であるとするよ(28)The Conquest of Happiness, 1930, chap.2:Byronic unhappiness http://russell-j.com/beginner/HA12-070.HTM		注：the greatest good of the greatest number は、ベンサム功利主義の理念である「最大多数の最大幸福」のこと。ラッセルのこの文章の中の good も「善」ではなく、「幸福」と訳さないとピンとこなくなる。	
				A2-01-3	I have by no means lost my belief in love, but the kind of love that I can believe in is not the kind that the Victorians admired; it is adventurous and open-eyed, and, while it gives knowledge of good, it does not involve forgetfulness of evil, nor does it pretend to be sanctified or holy. The Conquest of Happiness, 1930, chap.2 : The Byronic unhappiness. http://russell-j.com/beginner/HA12-060.HTM	私は決して恋愛を信じなくなったわけではないが、私が信じることのできる恋愛の種類は、ヴィクトリア朝時代の人々が賞賛したような性格のものではない。私に定まっている恋愛は、冒険心に富み、目を大きく見開き、善(とは何か)についての知識を与える一方で、悪の存在も忘れないし、神聖ぶつたり、高徳ぶつたりもしない(ものである)。	現実にも目をつぶつたり、相手の自由な思考や行動を制約するような「恋愛」はいずれ破綻する。お互いの欠点に目をつぶるのではなく、それらを容認しつつ、ともに向上しようとする「恋愛」は長続きする。お互い向上しようとする限り、少なくとも相手に「幻滅する」ようなことは少ないはず。		
				A2-01-4	Or, again, consider the difference between love and mere sex attraction. Love is an experience in which our whole being is renewed and refreshed as is that of plants by rain after drought. In sex intercourse without love there is nothing of this. When the momentary pleasure is ended, there is fatigue, disgust, and a sense that life is hollow. Love is part of the life of Earth; sex without love is not. * hollow (adj.) : うつろの ; うわべだけの The Conquest of Happiness, 1930, chap.4 : boredom and excitement http://russell-j.com/beginner/HA14-070.HTM	あるいはまた、愛(情)と単なる性的魅力との間の違いについて考えてみるよ。草木が日照りの後で雨で生きかえるように、愛は、私たちの全存在を新しくよみがえらせ、生き生きとさせる一つの経験である。愛のない性交には、こういったものはまったく存在しない。つかの間の快楽が終われば、疲労、嫌悪、人生はむなしという感じが残る。愛は「大地」の生の一部であるが、愛のないセックスはそうではない。 出典：ラッセル『幸福論』第4章「退屈と興奮」 http://russell-j.com/beginner/HA14-070.HTM			
				A2-02	A great deal of our modern trouble has come from mixing up romantic love, which is a poetic and anarchic impulse, with marriage, which is a social institution. The French have not made this mistake, and on the whole they are considerably happier in these respects than English-speaking nations (From: Sex and happiness (written in Aug. 5, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975). http://russell-j.com/SEX-HAPPY.HTM	現代の「男女」間のトラブルの多くは、詩的で無政府の衝動であるロマンチックな恋愛を、単なる社会制度にすぎない結婚と混同することに由来している。フランス人はこの種のまちがいをおこさない。だから概して、彼らはこの点で英語を話す国民よりもずっと幸福である。	ラッセルの結婚観は realistic(現実主義的)、恋愛観は idealistic(理想主義的)であると言つたらよいでしょうか？ 恋愛と結婚についての考え方は人様々ですが、結婚「制度」の法的意味合いを軽視している人が多くいように思われます。法律は犯罪防止や弱者保護の側面を持っていますが、「離婚」によって不利益を受ける人間(妻、子供、ケースによっては夫)を保護するという側面が重要だと思われます。		
				A2-03	The Don Juan type, while it believes itself very manly, is really the victim of a mother complex. Children do not know their mother as a rule at all completely - their mothers keep their adult concerns away from the children's notice. Children thus get a conception of a woman wholly devoted to them, having no life apart from them, destitute of that core of egoism without which life is impossible. Even those who like Byron, have mothers who are the exact opposite of all this derive from literature and current sentiment an ideal of motherhood and unconsciously desire of a wife what they have failed to obtain from a mother. (From: Our woman haters (written in May 25, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975). http://russell-j.com/HA1E-W.HTM	ドンファン・タイプの男は、自分では非常に男らしいと思つているが、実際はマザー・コンプレックスの犠牲者にすぎない。子どもは通常、母親のすべてを知つてはいない。実際は大人の隠された心配事は知らず、自分から、子供は母親について、自分に頼む必要を懐き、子ども抜き生活は持たず、人間生活に不可欠なあの自我(エゴ)のかけらさえ持たない女性という概念を持つことになる。バイロンのように、これとはまったく反対のタイプの結婚を持つ人たちは、次世代の母性や母性論の母性像を引き出し、自分が母親から得られなかったものを無意識のうちに妻に求めることになる。			
				A2-04	In marrying, bride and bridegroom are informed that it will henceforth be their 'duty' to love one another, although, since love is an emotion, it is not subject to the control of the will and therefore cannot come within a scope of duty. Considerate behaviour may be a duty, but love is a gift from heaven: when the gift is withdrawn, the one who has lost it is to be pitied, not blamed. (From: On expected emotions (written in July 13, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975). http://russell-j.com/EXPECTED.HTM	・・・結婚の際して新郎新婦は、今後永くたがいに愛しあうことが「義務」と教えられるが、所詮愛情は一つの情緒であつて、意志の働きに服する余地はなく、したがつて義務の部類には入りえない。思慮深い振舞いは、義務に属すると言えても、愛は天の賞賛である。この感情が消える時、それを喪失した人を憐れむのはよいが、非難することは筋違いである。・・・	愛情(恋愛感情)は一つの情緒であり、急に生じたり消えたりする。意志の力で好きになつたり嫌いになつたりするわけではない。だから、恋愛感情が消えたらということこそでその人を責めることはおかし。意志の力で愛することを強制することはできず、強制した自然な愛情ではなくなる。		
				A2-05	Love is something far more than desire for sexual intercourse; it is the principal means of escape from the loneliness which afflicts most men and women throughout the greater part of their lives. There is a deep-seated fear, in most people, of the cold world and the possible cruelty of the herd; there is a longing for affection, which is often concealed by roughness, boorishness or a bullying manner in men, and by nagging and scolding in women. Passionate mutual love while it lasts puts an end to this feeling; it breaks down the hard walls of the ego, producing a new being composed of two in one. Nature did not construct human beings to stand alone, since they cannot fulfill her biological purpose except with the help of another, and civilised people cannot fully satisfy their sexual instinct without love. The instinct is not completely satisfied unless a man's whole being, mental quite as much as physical, enters into the relation. Those who have never known the deep intimacy and the intense companionship of happy mutual love have missed the best thing that life has to give; unconsciously, if not consciously, they feel this, and the resulting disappointment inclines them towards envy, oppression and cruelty. To give due place to passionate love should be therefore a matter which concerns the sociologist, since, if they miss this experience, men and women cannot attain their full stature, and cannot feel towards the rest of the world that kind of generous warmth without which their social activities are pretty sure to be harmful. From: Marriage and Morals, 1929, chap.9: The Place of Love in Human Life. http://russell-j.com/cool/277-0901.HTM	恋愛は、性交への欲望よりもはるかに上のもの(価値のあるもの)である。恋愛は、人間の生涯の大部分を過して、大部分の男女が苦しんでいる孤独から逃れるための主要な手段である。大部分の人には、冷たい世間や、起こりうる群衆の残酷さに対する根深い恐怖(心)がある。(また)愛情への憧れがある。それは、男性の場合には、しばしば粗野、粗野(がさつさ)、またはいばり散らす(弱いものいじめをする)態度に隠されており、女性の場合には、口やましかつたり、がみがみ言つたりする態度に隠されている。相互の情熱的な愛が続いているが、そういう愛は、このような感情を消滅させる。相互の情熱的な愛は、自我の堅い壁を打ち壊し、二人が一つに解けた新しい存在(人格)を生み出す。自然は、人間を孤独で生きるものとし、構建しなかつた間は、もう一つ、ここでは愛情の奨励者なしには、自然の生物学的な目的を果たすことができないからである。また、文明人は、愛なしには、自分の性本能を完全に満足させることはできない。肉体的であるだけでなく、同程度に精神的に、人間の全存在が男女の関係の中にあつていかないが、この本能は完全に満足されないのである。幸福な、相互的な愛という、深い親密さと強い交わりを経験したことのない人びとは、人生が提供する最上のものを失つことになる。彼らは、意識的ではないにせよ、無意識的にこのことを感ずる。結婚しては、ねたみや抑圧や残酷に傾いていく。したがつて、情熱的な愛に正当な位置をあたえることは、社会学者にかかわる問題であるはずである。なぜなら、男性も女性も、もしもこの経験の機会を失つれば、完全な精神的成長をこけることはできず、世界のほかの人びとと比べて、寛容で寛い気持ちを持てないからである。この気持ちがなければ、まずまぢがなくなり、彼らの社会活動は有害なものになる。	愛情(恋愛感情)は一つの情緒であり、急に生じたり消えたりする。意志の力で好きになつたり嫌いになつたりするわけではない。だから、恋愛感情が消えたらということこそでその人を責めることはおかし。意志の力で愛することを強制することはできず、強制した自然な愛情ではなくなる。	「愛すること」、「愛しあうこと」を義務だとかんがえたり、強制すれば、その愛はその価値が半減する。知・情・意、即ち知識(理性)感情、意志はそれぞれ違った働きをし、それぞれ大事なものであるが、現代日本においては、政治においても、経済においても、スポーツにおいても、意志が不当に強調されすぎていないか？ その結果、ごまかしや偽善が世にはびこり・・・。恋愛中の男女は孤独感に味合わない。	
				A2-05	Love is something far more than desire for sexual intercourse; it is the principal means of escape from the loneliness which afflicts most men and women throughout the greater part of their lives. There is a deep-seated fear, in most people, of the cold world and the possible cruelty of the herd; there is a longing for affection, which is often concealed by roughness, boorishness or a bullying manner in men, and by nagging and scolding in women. Passionate mutual love while it lasts puts an end to this feeling; it breaks down the hard walls of the ego, producing a new being composed of two in one. Nature did not construct human beings to stand alone, since they cannot fulfill her biological purpose except with the help of another, and civilised people cannot fully satisfy their sexual instinct without love. The instinct is not completely satisfied unless a man's whole being, mental quite as much as physical, enters into the relation. Those who have never known the deep intimacy and the intense companionship of happy mutual love have missed the best thing that life has to give; unconsciously, if not consciously, they feel this, and the resulting disappointment inclines them towards envy, oppression and cruelty. To give due place to passionate love should be therefore a matter which concerns the sociologist, since, if they miss this experience, men and women cannot attain their full stature, and cannot feel towards the rest of the world that kind of generous warmth without which their social activities are pretty sure to be harmful. From: Marriage and Morals, 1929, chap.9: The Place of Love in Human Life. http://russell-j.com/cool/277-0901.HTM	恋愛は、性交への欲望よりもはるかに上のもの(価値のあるもの)である。恋愛は、人間の生涯の大部分を過して、大部分の男女が苦しんでいる孤独から逃れるための主要な手段である。大部分の人には、冷たい世間や、起こりうる群衆の残酷さに対する根深い恐怖(心)がある。(また)愛情への憧れがある。それは、男性の場合には、しばしば粗野、粗野(がさつさ)、またはいばり散らす(弱いものいじめをする)態度に隠されており、女性の場合には、口やましかつたり、がみがみ言つたりする態度に隠されている。相互の情熱的な愛が続いているが、そういう愛は、このような感情を消滅させる。相互の情熱的な愛は、自我の堅い壁を打ち壊し、二人が一つに解けた新しい存在(人格)を生み出す。自然は、人間を孤独で生きるものとし、構建しなかつた間は、もう一つ、ここでは愛情の奨励者なしには、自然の生物学的な目的を果たすことができないからである。また、文明人は、愛なしには、自分の性本能を完全に満足させることはできない。肉体的であるだけでなく、同程度に精神的に、人間の全存在が男女の関係の中にあつていかないが、この本能は完全に満足されないのである。幸福な、相互的な愛という、深い親密さと強い交わりを経験したことのない人びとは、人生が提供する最上のものを失つことになる。彼らは、意識的ではないにせよ、無意識的にこのことを感ずる。結婚しては、ねたみや抑圧や残酷に傾いていく。したがつて、情熱的な愛に正当な位置をあたえることは、社会学者にかかわる問題であるはずである。なぜなら、男性も女性も、もしもこの経験の機会を失つれば、完全な精神的成長をこけることはできず、世界のほかの人びとと比べて、寛容で寛い気持ちを持てないからである。この気持ちがなければ、まずまぢがなくなり、彼らの社会活動は有害なものになる。	愛情(恋愛感情)は一つの情緒であり、急に生じたり消えたりする。意志の力で好きになつたり嫌いになつたりするわけではない。だから、恋愛感情が消えたらということこそでその人を責めることはおかし。意志の力で愛することを強制することはできず、強制した自然な愛情ではなくなる。	昔は生命は雌雄の別がなかったが、生存競争により、雌雄に分かれるものが増加していったという。今後生命科学が進めば、自分の皮膚からささえも子供を残せるようになるかもしれないが・・・？！ 人生において「ねたみ」がいかに大きな役割を演じていることが。わりと知られた本として、小谷野敦『恋愛の昭和史』(文春文庫)というのがあります。それから、読んだことないですが、アマゾンで検索すると『恋愛の社会学』(清井)とロマンティックラブの愛音(青弓社、2008年)という本がありますね。	

366-c102 H27年 (1/29)	A2-06	There is, however, another type of woman hater, rather more complex; this is the Don Juan type, who is perpetually seeking his ideal in woman, failing to find it, and abandoning the flawed idol as soon as he perceives the flaw. I confess I have little patience with this type. [From: Our woman haters (written in May 25, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1., 1975). http://russell-j.com/HATE-W.HTM	けれども、世の中には、女を憎むもつと複雑な別のタイプの男がいる。それは、ドンファン・タイプの男(Don Juan type)である。彼は絶えず女性の心中理想像を追い求め失敗し、相手の欠点を見つけたやいなや、その傷ついた情懷を捨ててしまふ。正直に言つて、私はこのタイプの男に我慢がならない。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「女嫌ひについて」	ラッセルは長い生涯のうちに4度結婚し、結婚した女性以外の女性にも恋愛をした。しかし決してドンファン・タイプではなかった。それを理解していないラッセルは自分勝手な女性をどんどん捨てたが非難する人や、逆に羨ましがる人がけっこういる。	
★ 366-c103 H27年 (1/30)	A2-07	Many husbands and many wives will forgo their own pleasures out of jealousy of the pleasures that they imagine their partners as desiring. It is much more harmful to object to other people's pleasures than it is to be a trifle selfish in pursuing one's own, and a certain amount of social separateness of husband and wife is necessary if they are not to become dull and incapable of finding anything to say to each other. In this respect, however, a better convention is rapidly spreading. http://russell-j.com/MARRIAGE.HTM	多くの夫婦は、自分の連れ合いが望んでいる快楽への妬みから、自分の快楽の充足を差し控える。自分の快楽を多少利己的に追求することよりも、他人の快楽に反対することの方がはるかに目立たない。また、夫婦間に嫉妬感が生れたり、共通の話題がなくなったりすべきでないとしたら、夫婦間にはある程度の社会的距離が必要である。もっともこの点に関しては、以前よりむしろ夫婦間の慣習が急速に広まりつつある。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「結婚」 http://russell-j.com/MARRIAGE.HTM	嫉妬心は人間のな感情であり、嫉妬心を否定する(あるいは持たない)ラッセルは人間のでない(あるいは非難する人が時々いる)。しかし、ラッセルに嫉妬心が「なかった」というのは誤解である。第一次世界大戦中、反戦運動のためにプリクストン刑務所に約5ヶ月入れられるが、恋人のコレットがラッセル以外に愛人をつくったことを知り、ラッセルは刑務所のなかでどうすることもできず嫉妬心に悩まされる。	嫉妬心は人間のな感情であり、嫉妬心を否定する(あるいは持たない)ラッセルは人間のでない(あるいは非難する人が時々います)。しかし、ラッセルに嫉妬心が「なかった」というのは誤解です。第一次世界大戦中、反戦運動のためにプリクストン刑務所に約5ヶ月入れられますが、恋人のコレットがラッセル以外に愛人をつくったこと、ラッセルは刑務所のなかでどうすることもできず嫉妬心に悩まされます。しかし、そのような感情はよくないということで「克服し」、次第に嫉妬心を抱かなくなります。
★ 366-c103 H27年 (1/30)	○		『幸福論』は1930年に『幸福論』を出版したがその英文タイトルはThe Conquest of Happinessであった。即ち幸福は「種からボタ持ち」のように努力なしで手に入るものではなく、努力して、いろいろな楽しみを克服することによって獲得できるものだという気持ちで込められている。ラッセルは『幸福論』の中で次のように書いている。	『幸福論』は1930年に『幸福論』を出版したがその英文タイトルはThe Conquest of Happinessであった。即ち幸福は「種からボタ持ち」のように努力なしで手に入るものではなく、努力して、いろいろな楽しみを克服することによって獲得できるものだという気持ちで込められている。ラッセルは『幸福論』の中で次のように書いている。	「通常の人間性のあらゆる特質のなかで、嫉妬は最も不幸なものの一つである。嫉妬深い人は単に他人に不幸を加えることなしに、得ることなら何でもやっつけるだけではない。さらに自分自身もまた嫉妬により不幸にする。嫉妬深い人は自分の持っているものから楽しみを取り出すかわりに他人の持っているものから苦しみを取り出す。」
ペンティン	○	The facts of sex first became known to me when I was twelve years old, through a boy named Ernest Logan who had been one of my kindergarten companions at an earlier age. He and I slept in the same room one night, and he explained the nature of copulation and its part in the generation of children, illustrating his remarks by funny stories. I found what he said extremely interesting, although I had as yet no physical response. It appeared to me at the time self-evident that free love was the only rational system, and that marriage was bound up with Christian superstition. (I am sure this flection occurred to me only a very short time after I first knew the facts.) [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1., chap. 2, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB12-020.HTM	性の事実を私が初めて知るようになったのは、12歳の時幼稚園時代初期に幼稚園で一緒だったアーネスト・ローガンという名前の少年を通してであった。ある夜、彼と私は同じ部屋に寝ており、そうして彼は、交媾(交尾)の有り様と、出産における交媾の役割について、面白い話にして、具体的に例示しながら説明した。私は、彼の話を非常に興味を持ったが、まだ肉体的な反応は起こらなかった。当時私は、自由恋愛だけが合理的な方式であり、結婚(制度)はキリスト教の迷信で縛られているということ、自明のことであると思われた。このような考え方の変化(屈折)がここであったと思ふ。	ラッセルはこの時点ではまだ自由恋愛論者とはいえない。アリスは理論上はラッセルよりも自由恋愛論者であったが、却ち自由恋愛に走った時に「恥じ入った」というのは、「理論と実際」のくいちがって興味深い。	
366-c104 H27年 (1/31)	○	At fifteen, I began to have sexual passions, of almost intolerable intensity. While I was sitting at work, endeavouring to concentrate, I would be continually distracted by erections, and I fell into the practice of masturbating, in which, however, I always remained moderate. I was much ashamed of this practice, and endeavoured to discontinue it. I persisted in it, nevertheless, until the age of twenty, when I dropped it suddenly because I was in love. The same tutor who told me of the approach of puberty mentioned, some months later, that one speaks of a man's breast, but of a woman's breasts. This remark caused me such an intolerable intensity of feeling that I appeared to be shocked, and he rallied me on my prudery. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1., chap. 2, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB12-030.HTM	15歳の時ほとんどがまんができないほどの強烈な性的感情を感じ始めた。意識を集中する努力をしながら勉強のため私の前に座っている間、絶えずペニスの勃起によって悩まされ、そうして自慰の習慣に陥入った。けれどもいつも過度になることはなかった。私は、自慰の習慣を大変恥ずかしく思い、やめようと努力した。その努力にもかかわらず、20歳の年になるまで、この習慣をやめようとはしなかった。20歳になって突然この習慣は消えたが、それは恋愛をしたからである。	ラッセルはこの時点ではまだ自由恋愛論者とはいえない。アリスは理論上はラッセルよりも自由恋愛論者であったが、却ち自由恋愛に走った時に「恥じ入った」というのは、「理論と実際」のくいちがって興味深い。	
★ 366-c105 H27年 (2/1)	○	I came of age in May 1893, and from this moment my relation with Alys began to be something more than distant admiration. In the following month I was Seventh Wrangler in the mathematical Tripos, and acquired legal and financial independence. Alys came to Cambridge with a cousin of hers, and I had more opportunities of talking with her than I had ever had before. During the Long Vacation, she came again with the same cousin, but I persuaded her to stay for the inside of a day after the cousin was gone. We went on the river, and discussed divorce, to which she was more favourable than I was. She was in theory an advocate of free-love, which I considered admirable on her part, in spite of the fact that my own views were somewhat more strict. I was, however, a little puzzled to find that she was deeply ashamed of the fact that her sister had abandoned her husband for Berenson, the art critic. Indeed, it was not till after we were married that she consented to know Berenson. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1., chap. 4: Engagement, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB14-110.HTM	私は、1893年5月に成人(注：21歳)に達した。この時が私とアリスとの関係は、尊敬あつたがよそよそしいところのある(距離感がある)状態を乗り越えたものになり始めた。翌月私は、ケンブリッジ大学の数学学位(学士)優等試験で1級合格者の第7席に入り、また法律上及び経済的な自立を獲得した。アリスは、以前よりも、彼女と語り合う機会をより多く持った。(その年の夏期休暇期間に彼女は、同じいところにも、再びケンブリッジにやって来た。私はアリスにそのいとこが痛ったあとと一日一緒にいるように頼んだ。私たちはカム川(Cam River)に行つてボートに乗った。そして離婚の問題)について話した。私よりも彼女の方が(愛情がなくなった場合の)離婚により賛成であった。彼女は、理論上は、自由恋愛の信奉者(自由恋愛論者)であり、私自身は自由恋愛に対し、アリスよりも厳し見方をしていただけれども、私はそのことを彼女の称賛すべき点と看した。けれども、彼女の姉(Mary Costelloe 旧姓 Mary Pearsal Smith)が夫を捨て、美術評論家のベレンソン(Bernard Berenson, 1865 - 1959)のもとにいったことを、彼女が深く恥じているのを知り、(彼女の口癖と異なるので)私は少し当惑した。実際、彼女がベレンソンを認めることに同意したのは、私たちが結婚した後のことであった。	ラッセルはこの時点ではまだ自由恋愛論者とはいえない。アリスは理論上はラッセルよりも自由恋愛論者であったが、却ち自由恋愛に走った時に「恥じ入った」というのは、「理論と実際」のくいちがって興味深い。	

	<p>366-c106 H27年 (2/2)</p>	<p>A2/C1-04</p>	<p>... I went out bicycling one afternoon, and suddenly, as I was riding along a country road, I realised that I no longer loved Alys. I had had no idea until this moment that my love for her was even lessening. The problem presented by this discovery was very grave. We had lived ever since our marriage in the closest possible intimacy. We always shared a bed, and neither of us ever had a separate dressing-room. We talked over together everything that ever happened to either of us. She was five years older than I was, and I had been accustomed to regarding her as far more practical and far more full of worldly wisdom than myself, so that in many matters of daily life I left the initiative to her. I knew that she was still devoted to me. I had no wish to be unkind, but I believed in those days (what experience has taught me to think possibly open to doubt) that in intimate relations one should speak the truth. I did not see in any case how I could for any length of time successfully pretend to love her when I did not. I had no longer any instinctive impulse towards sex relations with her, and this alone would have been an insuperable barrier to concealment of my feelings. At this crisis my father's priggery came out in me, and I began to justify myself with moral criticisms of Alys. I did not at once tell her that I no longer loved her, but of course she perceived that something was miss. She retired to a rest-cure for some months, and when she emerged from it I told her that I no longer wished to share a room, and in the end I confessed that my love was dead. I justified this attitude to her, as well as to myself, by criticisms of her character. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6 : Principia Mathematica, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-060.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-060.HTM</a></p>	<p>私はある午後、自転車に乗って外出した。そして田舎道を走っていた時、突然私はもはやアリスを愛していないことになった。その瞬間にいたるまで私は彼女に対する私の愛情が薄らぎつつあるなどということさえ思ったことがなかった。この発見によって生じた問題は非常に重大であった。私たちは結婚以来、これ以上ないと思われるほど親密に暮らしていた。私たちはいつも同じベッドと一緒に寝ており、同じ dressing room、寝室のとなりにある、層替えたり化粧をしたりする部屋)をもったことがなかった。二人のうちのどちらに起こった全ての問題について二人で話し合った。彼女は私より5つ年上であり、彼女の方が私よりずっと実務家で(経験に裏打ちがあり、)ずいぶん世知に長けている(世間的なことに通じている)と、私はいつも考えていたので、日常生活の問題の多くは、彼女のイニシアティブにまかされていた。私ははいまなお深く私を愛していることがわかってきた。私は彼女に不親切にしようなどという考えは少しもなかったが、当時私は、新しい関係では真実を語るべきであると感じていた(その後の経験の教えによればそれは恐らく疑わしいことである。)。とにかく私は、彼女を愛していないのに一瞬でも愛しているふりをいかにして上手にできるかわからなかった。私は、もはや、彼女と性的関係をもちたいという本能的衝動をまったく感じなくなっていたこのことだけが、もはや彼女を愛せなくなったという私の感情を、どうしても隠し通すことをできなくさせた(乗り越えることができない障害となった)のであった。こうした危機に際して、父のしからせが私に現れ、彼女の道徳的批判をすることとよんで自分自身を正当化し始めた。私は、彼女をもはや愛していないということとをすくなく話さなかったが、彼女は、もちろん何かがうまくいっていないと感じた。彼女は、数ヶ月の間、安静療法に入った。彼女がそれを脱してから私は彼女に、部屋を一緒にしなくないと思った。そしてついには彼女をもはや愛せなくなったと告白した。私は、彼女に対するこうした態度を、自分自身に対してと同様、彼女の性格を批判することによって正当化した。</p>			
	<p>366-c107 H27年 (2/3)</p>	<p>A2/C1-05</p>	<p>Although my self-righteousness at that time seems to me in retrospect repulsive, there were substantial grounds for my criticisms. She tried to be more impeccably virtuous than is possible to human beings, and was thus led into insincerity. Like her brother Logan, she was malicious, and liked to make people think ill of each other, but she was not aware of this, and was instinctively subtle in her methods. She would praise people in such a way as to cause others to admire her generosity, and think worse of the people praised than if she had criticised them. Often malice made her untruthful. She told Mrs. Whitehead that I couldn't bear children, and that the Whitehead children must be kept out of my way as much as possible. At the same time she told me that Mrs. Whitehead was a bad mother because she saw so little of her children. During my bicycle ride a host of such things occurred to me, and I became aware that she was not the saint I had always supposed her to be. But in the revision I went too far, and forgot the great virtues that she did in fact possess. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6 : Principia Mathematica, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-070.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-070.HTM</a></p>	<p>その時の私の強善は、いま振り返って見るとぞつとずるが、彼女を批判したこととして仕方ない理由(権威)があった。彼女は、人間として不可能ほど、点の非のうちどころもないくらい高潔(有徳)であろうとしていたが、そのために、偽善に陥っていた。彼女は、彼女の兄のロガン同様、意地が悪く、人をして互いに悪く思わせて喜んでいた。しかし彼女自身は、そのこと(自分の悪業)に気づいておらず、そのやりかたは本能的に巧妙であった。彼女はいつも、他人に彼女の悪さを賞賛させるようなやり方で人をほめていた。また、彼女が批判していた人たちが、他からほめられると、彼女は、より以上に、彼らを悪く思った。彼女の悪業は、しばしば彼女を確つきにした。彼女は、私(ラッセル)は子供には我慢できないので、(子供が嫌いなため)、できるだけ子供たちを私に近寄らせないように、ホワイトヘッド夫人に言っていた。同時に彼女は、私には、ホワイトヘッド夫人は自分の子供たちの面影をほとんと見ない悪い母親だと言っていた。(注、右欄)私が自転車に乗っている間、それらのことが山のように思い出され、そして、それまでずっと彼女を聖人だと思っていたが、実際はそうではないと気づいた。私の感情の激変で極端な方向に進み、実際彼女がもっていた多くの美德さえ、忘れ去ってしまった。</p>	<p>松下注：ラッセルは子供が欲しかったが、アリスは不妊症でありあきらめていた。また、ラッセルは、ホワイトヘッド夫人に好意をもっていた。アリスが、そのような言動をホワイトヘッド夫人に対してしたのは、嫉妬心や子供のことにふられたいという気持ちがないためであろうか？)</p>		
	<p>366-c108 H27年 (2/4)</p>	<p>A2/C1-06</p>	<p>When the autumn came we took a house for six months in Cheyne Walk, and life began to become more bearable. We saw a great many people, many of them amusing or agreeable, and we both gradually began to live a more external life, but this was always breaking down. So long as I lived in the same house with Alys she would every now and then come down to me in her dressing-gown after she had gone to bed, and beseech me to spend the night with her. Sometimes I did so, but the result was utterly unsatisfactory. For nine years this state of affairs continued. During all this time she hoped to win me back, and never became interested in any other man. During all this time I had no other sex relations. About twice a year I would attempt sex relations with her, in the hope of alleviating her misery, but she no longer attracted me, and the attempt was futile. Looking back over this stretch of years, I feel that I ought to have ceased much sooner to live in the same house with her, but she wished me to stay, and even threatened suicide if I left her. There was no other woman to whom I wished to go, and there seemed therefore no good reason for not doing as she wished. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6 : Principia Mathematica, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-120.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-120.HTM</a></p>	<p>秋がくると、私たち夫婦は6ヶ月の期限でチエイン・ウォーク(Cheyne Walk)に家を借りて住むようになり、人生(生活)は、以前よりも耐えられるものとなった。私たちはそこで非常に多くの人たちと会い、多くは愉快で感じのよい人たちであったが、私たちは二人とも、次第に外部との接触が多くなり始めた。しかしそれは、常に精神的な負担を与えるものであった。私がアリスと同じ家に一緒に暮らしている間、彼女はベッドに入ったあとで、時々化粧箱のままで私のところにやって来て、一緒に夜を過ごしてくれるよう私に懇願した。時々私は彼女の言うとおりにしたが、結果は全く不満足なものであった。そのような状態が9年間続いた(注、ラッセルは、9年後の1911年にアリスのもとを去ることになる)。その間、彼女は私の心をなんとか取り戻そうと思い、他の男性にはまったく関心を示さないようにならなければならぬ。私は、その9年間、他の女性とはまったく性的関係をもたなかった。私は、彼女の惨めな思いを軽減してあげたいと思い、1年に2度ほど彼女と性行為を試みたが、彼女はもはや私を引きつけることはなく、それは無益な悩みであった。その長い歳月を今振り返ると、私はもっと早く彼女と同じ家で暮らすのをやめるべきだったと思われる。しかし彼女は私と一緒にいたいと願っており、もし私が出ていけば自殺すると言って私を脅かすことさえした。当時私は、(そのもとに)行きたいと思う女性は他にまったくいなかった。彼女の願いを聞いてあげない十分な理由は、特にないように思われた。</p>	<p>注：チエイン・ウォーク or チェイニー・ウォークは、ロンドン・チェルシー地区のテムズ川沿いにある通りで、善人が多く住んでいた。また住んでいることで有名であり、ラッセル夫妻は、チエイン・ウォーク14番に1915秋から1916年春まで住んだ。ラッセルは田舎暮らしが好きであったが、アリスは田舎暮らしはどちらかという好まなかった。アリスの両親と離れるために、妥協した結果か？</p>		

366-c109 H27年 (2/5)	翻訳の 可能性	A2/C1-07	<p>From this scene I went straight to Studland, still believing that I had cancer. At Swanage, I obtained an old-fashioned fly with an incredibly slow horse. During his leisurely progress up and down the hills, my impatience became almost unendurable. At last, however, I saw Otoline sitting in a pine-wood beside the road, so I got out, and let the fly go on with my luggage. The three days and nights that I spent at Studland remain in my memory as among the few moments when life seemed all that it might be, but hardly ever is. I did not, of course, tell Otoline that I had reason to fear that I had cancer, but the thought of this possibility heightened my happiness by giving it greater intensity, and by the sense that it had been wrrenched from the jaws of destruction. When the dentist told me, my first reaction was to congratulate Deity on having got me after all just as happiness seemed in sight. I suppose that in some underground part of me I believed in a Deity whose pleasure consists of ingenious torture. But throughout the three days at Studland, I felt that this malignant Deity had after all been not wholly successful. When finally I did see the specialist, it turned out that there was nothing the matter.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 7 : Cambridge Again, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB17-040.HTM</p>	<p>&lt;以下は、特にwhen life seemed all that it might be, but hardly ever is. のところは、翻訳の可能性がありま。口ジカカ、シンキングが得意を見つけたと思います。&gt; ・(アリスとの)この出来事の現場から、まだ自分は癌だと信じつつ - スタッドランドに直行した。スワネージ (Swanage) で私は、信じがたいほど歩みののろい馬の旧式の一端立て資馬車を手に入れた。幾つもの丘を登ったり降りたりして、よく進むうち、私の冥心は、ほとんど限界に達した。けれども、ついに道路脇の松林の中にオットリンが坐っているのを発見し、私は馬車から降り、荷物をのせたまま馬車を先に行かせた。私がスタッドランドで(オットリンとともに)過ごした3日3晩は、人生が最も可能にぞり素晴らしいものであるように思われた貴重なひとときの一つとして、私の記憶に残っている。実際は、人生はその可能性の全てを開花させることなどめつたにないのだが、もちろん私は、私が癌であるかもしれないということを怖れる理由のあることを、オットリンには書きなかつた。その可能性があるとすれば、私の幸福感により強度を与えることによつて、また自分の幸せが敏感の入り口でもぎとられようとしているという思いによつて、私の幸福感を高めたのである。歯科医が私に(癌の可能性について)話した時、私の最初の反応は、幸福が目に見えられたと思われた丁度その時に、結局はこのような運命神が私をつかまえてくれたことを誇つたというものであった。私は、心の奥底のどこかで、喜びを得てもそれは巧妙に仕組まれた責め言がら成り立つているという、そういう(自分の)運命神を信じていたと思われ。しかしながら、スタッドランドの3日間を通して、この悪性の運命神も結局のところは完全には成功しなかつたように思われた。(というのは)私がついに専門医に会った時、心配すべき重大なことは何もないということがわかつた(からである)。</p>	
★ 366-c110 H27年 (2/6)	○	A2/C1-08	<p>Otoline had a great influence upon me, which was almost wholly beneficial. She laughed at me when I behaved like a don or a prig, and when I was dictatorial in conversation. She gradually cured me of the belief that I was seething with appalling wickedness which could only be kept under by an iron self-control. She made me less self-centred, and less self-righteous. Her sense of humour was very great, and I became aware of the danger of rousing it unintentionally. She made me much less of a Puritan, and much less censorious than I had been. And of course the mere fact of happy love after the empty years made everything easier. Many men are afraid of being influenced by women, but as far as my experience goes, this is a foolish fear. It seems to me that men need women, and women need men, mentally as much as physically. For my part, I owe a great deal to women whom I have loved, and without them I should have been far more narrow-minded.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 7 : Cambridge Again, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB17-050.HTM</p>	<p>オットリンは非常に大きな影響を私に与えたが、ほとんどの場合、有益なものであった。私がケンブリッジ大学の教師や学者のように振舞つたり、独断的な話し方をすると、彼女は(声をだして)笑つた。鉄のような自制(心)によつてのみ抑制可能な怒るべき罪悪感で自分を苦しめていたと私は信じていたが、彼女はそれを徐々に治してくれた。彼女は、私の自己中心的なところや、独善的なところを少なくしてくれた。彼女のユーモアのセンスはすばらしかつたが、私はすっかりして彼女のユーモアのセンスを脅かしてしまふ危険に気づくようになった(松下注：自分が不用意な発言をし、オットリンのユーモアによつてからがわかれる危険をラッセルは言っているのか?)。彼女は、私の禁欲的(清教徒的)なところをかなりなくしまつた他人に対し批判的なところ(人に難癖をつけたがること)を、以前よりかなりなくしてくれた。それから、もちろん、空虚な年月(松下注：アリスとの愛が破局した。1901-1910年までの約10年間)が続いたあとで、幸福な愛情をつかんだという単純な事実が、すべてのものをより容易なものにした。女性によつて影響を受けることを怖れる男性が多いが、私の経験による限りでは、これはばげけた怖れである。肉体的と同様に精神的にも、男は女を必要とし、女は男を必要とする、と私には思われる。自分のことをいへば、私はかつて愛した女性たちのおかげを非常に受けており、彼女たちがいなければ、私は今よりもずっと狭量な人間になつていただであらう。</p>	
366-c111 H27年 (2/7)		A2/C1-09	<p>... She was very young, but I found her possessed of a degree of calm courage as great as Otoline's (courage is a quality that I find essential in any woman whom I am to love seriously). We talked half the night, and in the middle of talk became lovers. There are those who say that one should be prudent, but I do not agree with them. We scarcely knew each other, and yet in that moment there began for both of us a relation profoundly serious and profoundly important, sometimes happy, sometimes painful, but never trivial and never unworthy to be placed alongside of the great public emotions connected with the War. Indeed, the War was bound into the texture of this love from first to last. The first time that I was ever in bed with her (we did not go to bed the first time we were lovers, as there was too much to say), we heard suddenly a shout of bestial triumph in the street. I leapt (= leaped) out of bed and saw a Zeppelin falling in flames. The thought of brave men dying in agony was what caused the triumph in the street. Colette's love was in that moment a refuge to me, not from cruelty itself, which was unescapable, but from the agonising pain of realising that that is what men are.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1 : The First War, 1969] http://russell-j.com/beginner/AB21-190.HTM</p>	<p>...。彼女は非常に若かつたが、オットリンと同じくらいすばらしい、落ち着いた勇氣をもっていることがわかつた。(勇氣は、私が真剣に愛そうとする女性には不可欠な性質である。私たちは、夜中まで語り合った。そして語りあううちに恋人同志になつた。分別を持つべきだと言う人たちがいるが、私はそういう人の言うことには同意できない。私たちはお互い相手のことをほとんど知らなかつたが、それにもかかわらず、あの瞬間において、二人の間に、きわめて鋭利かつ、きわめて重大で、時に幸福で、時に苦痛である関係が始まつた。だが、二人の関係は、大膽と結びついた巨大な大衆感情と同列に置く価値がないほど、とるにたらないものでも無価値なもので決してなかつた。事実、第一次大戦は、最初から最後まで、私たち二人の恋愛の織物の中に織り込まれた。私が彼女と初めて肉体関係を持った時、私たちが最初に恋人同志となつた夜は、話すべきことが多すぎたために肉体関係は持たなかつた。)、突如として敵のような勝利の叫び声が通りから聞こえてきた。私はすぐにベッドから飛び起きた。そして(ドイツの)ツェッペリン飛行船が包まれてから墜落するのを見た。勇敢な飛行士が苦悶しながら死につくつたという思いが、群衆性勝利の喜びをもたらした全てであつた(それ以外の何物でもなかつた。)。その瞬間において、コレットの愛(のみ)が私の心の避難所であつた。それは、逃れられない残酷さそのものからではなく、人間とはなんであるかということを信ずることによる魂を切り刻む激しい苦痛からの避難所であつた。</p>	



	<p>366-c115 H27年 (2/11)</p>	<p>n.0049</p>	<p>A2/C1-13</p>	<p>In 1929, I published Marriage and Morals, which I dictated while recovering from whooping-cough. (Owing to my age, my trouble was not diagnosed until I had infected most of the children in the school.) It was this book chiefly which, in 1940, supplied material for the attack on me in New York. In it, I developed the view that complete fidelity was not to be expected in most marriages, but that a husband and wife ought to be able to remain good friends in spite of affairs. I did not maintain, however, that a marriage could with advantage be prolonged if the wife had a child or children of whom the husband was not the father; in that case, I thought, divorce was desirable. I do not know what I think now about the subject of marriage. There seem to be insuperable objections to every general theory about it. Perhaps easy divorce causes less unhappiness than any other system, but I am no longer capable of being dogmatic on the subject of marriage. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 4:Second Marriage, 1968] http://russell-j.com/beginner/AB24-100.HTM</p>	<p>1929年に私は『結婚と(性)道徳』を出版した。この本は、私が百日咳から回復しつつある時期に口述したものである。年のせいでその病状を診断してもらわないうちに、学校のおとこの児童に感染してしまった。(松下注：成人の場合はかかっても軽症のため、診断が見逃され易く、菌の供給源となって乳幼児への感染源となることである。)1940年にニューヨークにいた私に対する攻撃材料を提供したのは、正にこれであった。本書において私は、完全な貞節というものはほとんどの結婚において期待できないが、婚外の恋愛が生じたとしても、夫婦は良い関係を維持できなければならないという見解を展開した。だが私は、もしも妻がその夫が父でないところの子供を一人あるいは複数持つとしても合理的な状態で結婚をせざるを得ないことは主張しなかった。そのような場合は、離婚する方が望ましいと考えた。(松下注：トローは別の男性との間に子供をつくったため、ラッセルはトローと離婚することになる。)結婚の問題について現在どう考えているか、自分でもはっきりしない。結婚に関する一般理論から、見逃できない反対意見があるように思える。多分、離婚を容易ならしめる方が、他のどんな制度よりも不幸を少なくしてくれるだろう。しかし、私はもはや結婚問題について独自の意見を持つことはできない。</p>			
	<p>366-c116 H27年 (2/12)</p>	<p>n.0050</p>	<p>A3教育 A3-01</p>	<p>There can be no agreement between those who regard education as a means of instilling certain definite beliefs, and those who think that it should produce the power of independent judgement. (23) On Education, especially in early childhood, 1926, Introduction. http://russell-j.com/beginner/OE-PRUF.HTM</p>	<p>教育はある明確な信念を注入する手段であると考えている人びとと、教育は自立的な判断力を養う、生み出すべきものであると考えている人びととの間には、意見の一致はまったくない。</p>	<p>[n.0067: 教育の最重要の目的] 新保守主義を標榜する政治家や評論家などは、「義務教育については、自立的な判断ができる「人間」を養うよりも、彼らが「国民」として備えるべきと考えられる知識や感性を子供たちに注入し、法律や秩序を守り、国家のためになる人間を養うことが重要と考えているのではないか」</p>		
	<p>366-c117 H27年 (2/13)</p>	<p>n.0051</p>	<p>A3-02</p>	<p>What will be the good of the conquest of leisure and health, if no one remembers how to use them? The war against physical evil, like every other war, must not be conducted with such fury as to render men incapable of the arts of peace. What the world possesses of ultimate good must not be allowed to perish in the struggle against evil. (23) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 1:Postulates of modern educational theory. http://russell-j.com/beginner/OE01-060.HTM</p>	<p>余暇(時間)と健康を努力して獲得したとしても、誰もそれらの活用(の仕方)を心に留めない(注意を払わない)としたら、それらにいかなる善さがあるのだろうか? 合理的な事業との闘いは、他のすべての闘い同様、人間が平和な方法で奮闘しなくてはならぬ。究極的な価値として世界が所有しているものを、善悪との闘いの中で消滅させてはならない。</p>	<p>[n.0068: 余暇の賢い使い方] 昔と比較すれば、現代人(特に先進国)は余暇をたくさん持てるようになった。健康にも充分注意を払い平均寿命もかなり延びてきている。しかし、余暇の賢い使い方がわからず、くだらないことばかりの時間を費やすようでは、どれだけ人間の幸福を増進できるのだろうか。お金の場合も同様である。経済的に余裕があるのに越したことはないが...</p>	<p>小人閑居して不善を為す。多くの人を助け、社会に大きな善与をする人達であれば、自分や自分が属するグループの利益ばかり考える人達もいる。この差はどこからくるのか? 余暇の過ごし方についても同じである。自分の楽しみをより多くの人の楽しみにする人もあるかと思えば、結果的に社会に迷惑をかけることを楽しみにする人もいない。</p>	
	<p>366-c118 H27年 (2/14)</p>	<p>n.0052</p>	<p>A3-03</p>	<p>but no one had supposed that the acquisition of knowledge could be made sufficiently interesting to bring the same motives into operation. We now know that this is possible, and it will come to be done, not only in the education of infants, but at all stages. I do not pretend that it is easy. The pedagogical discoveries involved have required genius, but the teachers who are to apply them do not require genius. They require only the right sort of training, together with a degree of sympathy and patience which is by no means unusual. The fundamental idea is simple: that the right discipline consists, not in external compulsion, but in habits of mind which lead spontaneously to desirable rather than undesirable activities. (23) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 1:Postulates of modern educational theory. http://russell-j.com/beginner/OE01-090.HTM</p>	<p>しかし、知識の獲得も、ゲームの場合と同じ、動機を奮らかせられるほど興味深いものにできると想像した人は誰もいなかった。私たちは、今やそれが可能であることを理解している。それは、幼児教育だけではなく、あらゆる段階で行なわれるようになるだろう。私は、それが容易なことか平和な方法で奮闘しなくてはならぬ。究極的な価値として世界が所有しているものを、善悪との闘いの中で消滅させてはならない。</p>	<p>[n.0069: 余暇の賢い使い方n.2] 昔と比較すれば、現代人(特に先進国)は余暇をたくさん持てるようになった。健康にも充分注意を払い平均寿命もかなり延びてきている。しかし、余暇の賢い使い方がわからず、くだらないことばかりの時間を費やすようでは、どれだけ人間の幸福を増進できるのだろうか。お金の場合も同様である。経済的に余裕があるのに越したことはないが...</p>		
	<p>366-c119 H27年 (2/15)</p>	<p>n.0053</p>	<p>A3-04 毒舌集 に入れる</p>	<p>I shudder when I think of the wars, the tortures, the oppressions, of which upright men have been guilty, under the impression that they were righteously castigating 'moral evil' (23) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 1:Postulates of modern educational theory. http://russell-j.com/beginner/OE01-110.HTM → 毒舌集に含めたいほうがいいと思います。</p>	<p>高潔な人たちが自分正当にも「道徳的な悪」を懲らしているのだと思っていて行ってきた戦争や拷問や虐待のことを考えると私は身震いする。 → 毒舌集に含めたいほうがいいと思われます。</p>	<p>[n.0070: 余暇の賢い使い方n.3]</p>		
	<p>366-c120 H27年 (2/16)</p>	<p>n.0054</p>	<p>A3-05</p>	<p>Happiness in childhood is absolutely necessary to the production of the best type of human being. Habitual idleness, which Dr. Arnold regarded as a form of 'moral evil', will not exist if the child is made to feel that its education is teaching it something worth knowing. (Probably many of Dr. Arnold's pupils suffered from adenoids, for which no medical man would prescribe flogging, although they cause habitual idleness.) But if the knowledge imparted is worthless, and those who impart it appear as cruel tyrants, the child will naturally behave like Chekhov's kittens. The spontaneous wish to learn, which every normal child possesses, as shown in its efforts to walk and talk, should be the driving-force in education. The substitution of this driving-force for the rod is one of the great advances of our time. (23) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 1:Postulates of modern educational theory. http://russell-j.com/beginner/OE01-120.HTM</p>	<p>「幼児期の幸福(幼児期幸福であること)」は、最良のタイプの人間を作り出すためには、必須である。アーノルド博士が「道徳的な悪」の一形態とみなした「習慣的怠惰」(怠けづ)は、教育とはある価値のあることを教えることだということを知れば、子供たちに感心させることができれば、子供たちの怠けづもなくなるだろう。(ラッセル注: 多分アーノルド博士の生徒の多くは、「アデノイド」に罹っていたかも知れない。「アデノイド」は怠けづの原因になるが、医者だつたら「むち打ち」という処方薬は書かないであろう。)しかし、もしも、授けられる知識が価値のないもので、その知識を授ける人々が残酷な暴君のように見えるならば、子供たちは、当然のこと、「チエーホフの子猫」のように振舞うだろう。歩いたり話したりしようとする努力において示されるように、正常な子供が習得している、歩いたり話したりする自発的な願望が、教育の推進力となればならない。この推進力を「むち」に代替させたことは、現代の大きな進歩の一つである。</p>	<p>[n.0071: 幼児期の幸福] 「幸福な幼児期」を過ごした人間は他人に対して危害を加えないという気持ちを含みださない。もちろん生涯幸福かつわがままに育つことが「幸福な」状態ではない。自分が幸福であれば、他人に対しても親切になれるというのが通常の姿であろう。しかし、個人の幸福よりも、国家に役立つ人間をつくるのが教育の第一の目標になると、結果として、不幸な人間を大量に生み出すことになりかねない。</p>		
	<p>366-c121 H27年 (2/17)</p>	<p>n.0055</p>	<p>A3-06</p>	<p>The old idea was that virtue depends essentially upon will: we were supposed to be full of bad desires, which we controlled by an abstract faculty of volition. It was apparently regarded as impossible to root out bad desires: all we could do was to control them. The situation was exactly analogous to that of the criminal and the police. No one supposed that a society without would-be criminals was possible; the most that could be done was to have such an efficient police force that most people would be afraid to commit crimes, and the few exceptions would be caught and punished. The modern psychological criminologist is not content with this view; he believes that the impulse to crime could, in most cases, be prevented from developing by suitable education. And what applies to society applies also to the individual. Children, especially, wish to be liked by their elders and their companions; they have, as a rule, impulses which can be developed in good or bad directions according to the situations in which they find themselves. Moreover, they are at an age at which the formation of new habits is still easy, and good habits can make a great part of virtue almost automatic. (23) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 1:Postulates of modern educational theory. http://russell-j.com/beginner/OE01-130.HTM</p>	<p>古い考え方は、徳は、本質的に「意志」に依存するというものであった。つまり、私たちが「悪い」欲望を制御しているに過ぎなかった。悪い欲望を根絶することは明らかに不可能と考えられていた。つまり、できることは、「欲望」を制御することだけであった。この状況は、犯罪者と警察の状況に酷似していた。犯罪者(犯罪者)が犯罪(犯罪)を犯す(犯罪)が存在しない社会で実現可能だと考える人は、独りもいなかった。最大限までできることは、有能な警察力を持ち、それによって、大部分の人が怖がって犯罪を犯さなくなり、ごく少数の例外者は捕まって罰せられるようになることである。現代の犯罪心理学者は、このような見解に満足しない。犯罪への欲求は、大部分の場合、適切な教育によって大きくなくなるを防ぐことができると彼は信じている。そして、社会に当てはまることは、個人にも当てはまる。特に子供たちは、年長者や仲間から好かれたいと思望。子供たちは、高じて、その高じている状況に応じて、良い方向にも悪い方向にも振舞う可能性がある。特に、子供たちは、新しい習慣を身につけることがいまだ容易な年頃にある。そして、よい習慣は、徳のほとんどを自動的なものとする(よい習慣を身につければ、良い行いをしようとする衝動的に努力しなくても、良い行いを自動的・無意識的にすることができる)ようになる。)。</p>	<p>[n.0072: 良い習慣を身につけること] 良い習慣は、「第2の天性」である。幼少期に良い習慣を身につければ(親が子供に良い習慣を身につけさせることができれば)他人から良く思われるよう有意義な努力をしなくても、普通に振舞うだけで他人から好かれ、周囲に良い影響を与える。子供に良い習慣をつけさせることの重要性を理解していない親が少なくない。</p>		

366-c122 H27年 (2/18)	○	A3-07 Ever since the advent of Commodore Perry's squadron, the Japanese have been in a situation in which self-preservation was very difficult; their success affords a justification of their methods, unless we are to hold that self-preservation itself may be culpable. But only a desperate situation could have justified their educational methods, which would have been culpable in any nation not in imminent peril. ( 23 ) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education http://russell-j.com/beginner/OE02-040.HTM	ペリー提督の艦隊到来以降、日本人は自己保存が非常に困難な状況にあり続けてきており(注「ラッセル教育論」が出版された1926年頃までのこと)、「自己保存」自体が責められるべきと考えるのでないか? 彼ら(日本人)が自己保存に成功したこと(事実)は、日本人の教育方法の正当化のための理由を与えることになる。しかし、彼ら(日本人)の教育方法は、(日本が)絶望的な状況にあったからこそ正当化されたのであって、いかなる国家・国民も、同様な危機にない場合は、責められるべきでもあつたであろう。	【コメント】 ラッセルが言っているのはあくまでも、大正時代までの日本についてです。  [n.0073: 手段(材料)としての子供(生徒)] 子供の気持ちや考えを無視し、あなた(たち)のためだけに、いかにいかにそのことを聞きかじりし、大人は言う。しかし、子供のためといふなら、「子供の」気持ちよりも、子供を思う「自分の」気持ちを大事にしていることが少なくない。これは自己欺瞞の一種であるが、政治家のお家か?
366-c123 H27年 (2/19)	○	A3-08 Apart from such considerations, children and young people feel instinctively the difference between those who genuinely wish them well and those who regard them merely as a raw material for some scheme. Neither character nor intelligence will develop as well as freely where the teacher is deficient in love, and love of this kind consists essentially in feeling the child as an end. ( 23 ) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education http://russell-j.com/beginner/OE02-090.HTM	こういう考察はさておき、子供や若者は、彼らの幸せを純粋に願う人と、彼らを何らかの計画のための原材料(素材)としてが考えたい人との違いを本能に感じ、前者に愛情が欠けている場合には、性格も「知性」も、十分にまたそのびとは発達しないだろう。そして、この種の愛情は、本質的に言って、子供を「目的」として感じることにいる。	[n.0074: 「活力」は「客観性」を促進する] 「活力」は、精神的特質というよりも、むしろ、生理的な特質であるため、年をとると自然に衰えてくる。しかし、年に関係なく、通常は、活力があれば、多くのことに興味を持つことができ、気持ちにも余裕ができるので、物事をより客観的に見るようになる。
366-c124 H27年 (2/20)	○	I will take four characteristics which seem to me jointly to form the basis of an ideal character; vitality, courage, sensitiveness and intelligence. I do not suggest that this list is complete, but I think it carries us a good way. Moreover, I firmly believe that by proper physical, emotional and intellectual care of the young, these qualities could all be made very common. I shall consider each in turn. Vitality makes it easy to take an interest in whatever occurs, and thus promotes objectivity. ( 23 ) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education http://russell-j.com/beginner/OE02-110.HTM	合わさって人間の理想的な性格の基礎を形作ると思われる4つの特質を取り上げてみよう。即ち、活力(Vitality)、勇気(Courage)、感受性(Sensitiveness)、知性(Intelligence)の4つである。右記参照。しかし、この4つの特質がそれぞれ、我々は良い方向に進むことができるかと私は考えている。さらに、若い人たちの肉體や感情や知性を適切に取り扱えば(世話すれば)、これらの特質は必ずしも、元々持っている「わたしの」肉體の大きさや環境のよさ(正気であること)のために不可欠であるところの客観性を促進する。	[n.0075: 「活力」の衰え] 活力が悪い方向に向けられると不幸な結果を生むが、概ね活力は人間にとってよい性質である。子供の頃は、大抵活力にあふれているが、教育や訓練によって、だんだんとなくなったり、年をとると活力が少なくなっていく。日本の場合は、経験の影響がかなり大きいと思われるが、周囲の目を気にする国民性も大きな影響を与えている。逆に言えば、いろいろなことに興味を持てれば、活力の減退を少なくすることができる。
366-c125 H27年 (2/21)	○	A3-10 これはA1 幸福へ Human beings are prone to become absorbed in themselves, unable to be interested in what they see and hear or in anything outside their own skins. This is a great misfortune to themselves, since it entails at best boredom and at worst melancholia; it is also a fatal barrier to usefulness, except in very exceptional cases. Vitality promotes interest in the outside world; it also promotes the power of hard work. Moreover, it is a safeguard against envy, because it makes one's own existence pleasant. As envy is one of the great sources of human misery, this is a very important merit in vitality. ( 23 ) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education http://russell-j.com/beginner/OE02-110.HTM	人間は、(活力の衰えとともに)しだいに、自分のことに注意を奪われ、見たり聞いたりすることや自分に直接関係のないものに興味を抱くことができなくなる傾向がある。これは、人間にとって非常に不幸なことである。なぜなら、それは、よくて退屈を感ずる、または憂うつ症を伴うからである。それは、また、よくて、別外な機会を失って、有用性に対する致命的な障害となる(実際に役立つことを習得できなくなる)。「活力」は、外界に対する興味を増進する。また、困難な仕事をやる力を増進する。さらに、活力は自分が生きていることを楽しむものにするため、なやみに対する完全放棄となる「わたしの」肉體の大きさや環境のよさであるので、このことは、活力の非常に重要な長所である。	[n.0076: 恐怖心の克服1] 不合理な恐怖心を持つのはよくない。だからといって、そのような恐怖を持つようになる原因 - 心理的なものも含む - を理解しないで、ただ単に精神的な「勇気(蛮勇)」でもって押さえ込むのはよくない。そのように無理やり意識下に押し込めると、他人に対する無意識的な強烈な反感など、恐怖心は、意識された感情だけでなく、無意識の感情においても同様に克服されなければならない。
366-c126 H27年 (2/22)	○	A3-11 「Always speak the truth except when something frightens you」 was a maxim taught to me in childhood. I cannot admit the exception. Fear should be overcome not only in action, but in feeling; and not only in conscious feeling, but in the unconscious as well. The purely external victory over fear, which satisfies the aristocratic code, leaves the impulse operative underground and produces evil twisted reactions which are not recognised as the offspring of terror. ( 23 ) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education http://russell-j.com/beginner/OE02-130.HTM	「何が怖いことがない限り、常に本当のことを言いなさい」というのが、私が幼年時代に教え込まれた格言であった。私は、このような例外を認めるところではできない(一時的にでも本当のことを言うべきである)。恐怖は、行動だけでなく、感情においても克服されなければならない。しかも、意識された感情だけでなく、無意識の感情においても同様に克服されなければならない。貴族主義的な道徳律を否定する、たけな、恐怖に対する最大限の努力は、意識下で働く(作用する)恐怖の衝動を、恐怖の申し子として認識されない「邪悪なねじれた反応」を生じさせる。	[n.0077: 臆病からくる残虐] 戦前の不敬罪、治安維持法、思想弾圧、非国民呼ばわり、テロ相絶望のモノと、残虐行為、人種差別、ヘイトスピーチ、天安門事件、イスラム国の問題、その他いろいろ。
366-c127 H27年 (2/23)	○	A3-12 From the point of view of psychology and physiology, fear and rage are closely analogous emotions: the man who feels rage is not possessed of the highest kind of courage. The cruelty invariably displayed in suppressing Negro insurrections, communist rebellions and other threats to aristocracy, is an offshoot of cowardice, and deserves the same contempt as it bestowed upon the more obvious forms of that vice. ( 23 ) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education http://russell-j.com/beginner/OE02-140.HTM	心理学や生理学の観点から見ると、恐怖と激怒は、非常に類似した感情である。激怒を感じる人は、最高の勇気を持っていない。黒人暴動、共産主義者の反乱、その他、貴族制度(特権階級)に対する脅威を鎮圧する際に必ず顕になる残虐さは、臆病(な心)から出たものであり、もっと明確な形の臆病に与えられるのと同様の軽蔑に値する。	[n.0079: 勇敢な行為] 昔、共産主義の頃は、階級主義に支配されるくらいなら、核戦争も辞さないといった大団のリーダー達がいた。当時はそう言った発言は勇気があるとほめた。たえな、人々が少なくなつたが、それは「蛮勇」とでも言うべきものである。ラッセルも一時期仏僧などで同様の発言をしたと非難する人が時々あるが、スターリン体制化のソ連が核兵器を持つ危険性に恐怖を覚え、(ソ連が核兵器を所有する前に)米国の核で脅かして、早期に戦争のできない世界連邦をつくらせようといった趣旨であり、だいふくな発言である。また、すぐにそのような発言はしなくなっている。
366-c128 H27年 (2/24)	○	A3-14 Sensitiveness, the third quality in our list, is in a sense a corrective of mere courage. Courageous behaviour is easier for a man who fails to apprehend dangers, but such courage may often be foolish. We cannot regard as satisfactory any way of acting which is dependent upon ignorance or forgetfulness: the fullest possible knowledge and realisation are an essential part of what is desirable. ( 23 ) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education http://russell-j.com/beginner/OE02-160.HTM	「蛮勇(危険を感知できない人間や無知な人間の危険性)」> 我々のリストの3番目の性質(特質)としてあげた「感受性」は、ある意味では、単に勇気を矯正するものにすぎない。危険を感知することのできない人にとっては、勇敢な行為は容易であるが、そういう勇気は誰かである場合が多い。無知や覚悟(一忘れれば)にに基づく行動(様式)は、いかなるものも満足すべきものと見なすことはできない。なぜなら、最大限充分に知り理解することは、望ましいもの全てにとつて、不可欠の要素だからである。	[n.0080: 科学による世界の拡大] 近代科学、特に自然科学は、時間的及び空間的に人間の知的世界を急速に拡大させた。知的世界の拡大は、多くの事柄に対する理解力、可能性を拡大するが、人間の怖者に対する同情心や共感力を必ずしも拡大しなかった。たとえ、核物理(の応用研究)を例にとれば、原子力の平和利用、核兵器の開発など、自然に対する人間の力を増大させたが、(日本の)被爆者の苦しみに対する共感を増大させてこなかった。ラッセルがここで言っているのは、知的理解による共感力(想像力)の拡大である。従って、被爆者を直接知らなければ共感も持たないといふのは、ハズレであろう。
366-c129 H27年 (2/25)	○	A3-15 Science has greatly increased our power of affecting the lives of distant people, without increasing our sympathy for them. Suppose you are a shareholder in a company which manufactures cotton in Shanghai. You may be a busy man, who has merely followed financial advice in making the investment; neither Shanghai nor cotton interest you, but only your dividends. Yet you become part of the force leading to massacres of innocent people, and your dividends would disappear if little children were not forced into unnatural and dangerous toil. You do not mind, because you have never seen the children, and an abstract stimulus cannot move you. That is the fundamental reason why large-scale industrialism is so cruel, and why oppression of subject races is tolerated. An education producing sensitiveness to abstract stimuli would make such things impossible. ( 23 ) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education http://russell-j.com/beginner/OE02-170.HTM	科学は、遠隔地の人びとの生活に対する私たちの(現代人・人間)の影響力を非常に増大させたが、その人々に対する私たちの共感(力)を増大させなかった。仮に、あなたが上海で綿糸・綿布を製造している会社の一社員として、上海で綿糸・綿布を製造している会社の一社員として、あなたが多忙で、投資を行うにあたっては専門家の助言に従っただけであり、上海にも綿糸・綿布にも関心はなく、ただ配当金に関心があるだけかもしれない。しかし、あなたが罪のない人びとを大産線するに至る力の一部となり、(権力に加担することになり)、しかも、もし幼い子供たちが異常かつ危険な仕事を強いられなければ、あなたの配当金は消えてしまうだろう。(しかし)あなたは気にしない。なぜなら、あなたはその子供たちには会ったことも、抽象的な刺激で心が動かされることもないからである。これが、大規模な産業主義が非常に残虐であり、被支配民族に対する抑圧が黙認されている根本的な理由である。抽象的な刺激に対する感受性を養う教育が行なわれるならば、そういう状況は存在しなくなるだろう。	[n.0080: 科学による世界の拡大] 近代科学、特に自然科学は、時間的及び空間的に人間の知的世界を急速に拡大させた。知的世界の拡大は、多くの事柄に対する理解力、可能性を拡大するが、人間の怖者に対する同情心や共感力を必ずしも拡大しなかった。たとえ、核物理(の応用研究)を例にとれば、原子力の平和利用、核兵器の開発など、自然に対する人間の力を増大させたが、(日本の)被爆者の苦しみに対する共感を増大させてこなかった。ラッセルがここで言っているのは、知的理解による共感力(想像力)の拡大である。従って、被爆者を直接知らなければ共感も持たないといふのは、ハズレであろう。



★	366-c130 H27年 (2/26)	○	A3-16	No doubt the word 'intelligence' properly signifies rather an aptitude for acquiring knowledge than knowledge already acquired; but I do not think this aptitude is acquired except by exercise, any more than the aptitude of a pianist or an acrobat. It is, of course, possible to impart information in ways that do not train intelligence; it is not only possible, but easy, and frequently done. But I do not believe that it is possible to train intelligence without imparting information, or at any rate causing knowledge to be acquired. And without intelligence our complex modern world cannot subsist; still less can it make progress. I regard the cultivation of intelligence, therefore, as one of the major purposes of education. This might seem a commonplace, but in fact it is not. The desire to instill what are regarded as correct beliefs has made educationists too often indifferent to the training of intelligence. (23) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education http://russell-j.com/beginner/OE02-180.HTM	「知性」という言葉は、正確に言えば、すでに獲得された知識よりも、知識を獲得する知的能力をさしていることは、疑問の余地はない。しかし、この才能は、ピアニストや音楽教師の才能と同様、訓練なしに獲得されるとは考えられない。もちろん、知性を鍛えないやり方で情報を伝達することは可能である。可能なだけではなく、容易であり、現にしばしば行なわれている。しかし、情報を伝えずに、あるいは少なくとも知識を獲得させようとして、知性を鍛えることはできない。と私は信じている。しかも、知性なしには、複雑な現代世界は存続することができないし、進歩することはおろそかである。正しい信念とみなされているものを教えること、また好奇心の死とともに活発な知性も死んでしまったと結論を下してもよいだろう。	[n.0081+0082: '知性' と '知識' との関係] 「知識人」というのは、単に知識をいっぱい持っている人を指すわけではない。知識をいっぱい持っているでも、「知性」を感じる人が少ない人は少なくない。百科辞典的な知識を多くもっている人よりも、発想力・理解力にすぐれ、難しい物事をわかりやすく他人に説明できる人こそ「知性」があると言える。それにして、「知性」や「智慧」のある知識人、は少なくない。似非知識人が増えているように思われるが気のせいだろうか。過去の偉大な人間に学ぶよりも、まず自分の考えを主張したがる人間が増えている。たとえばブログの流行は、「彼も人よりも書く人の言が正しい」という意見を例証していると言っひとがいるが、いかかであるだろうか。	
★	366-c131 H27年 (2/27)	○	A3-17 → 知識と知意に移動	Animals, machines, thunderstorms, and all forms of manual work arouse the curiosity of children, whose thirst for knowledge puts the most intelligent adults to shame. This impulse grows weaker with advancing years, until at last what is unfamiliar inspires only disgust with no desire for a closer acquaintance. This is the stage at which people announce that the country is going to the dogs, and that 'things are not what they were in my young days.' The thing which is not the same as it was in that far-off time is the speaker's curiosity. And with the death of curiosity we may reckon that active intelligence, also, has died. But although curiosity lessens in intensity and in extent after childhood, it may for a long time improve in quality. (23) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education http://russell-j.com/beginner/OE02-190.HTM	動物、機械、雷雨、及びあらゆる種類の手細工が子供の好奇心をかき立てる。子供の旺盛な知識欲（知識に対する渴望）は、最も知的なおとなもしのく。この衝動は、年をとるにつれて弱くなり、ついには、おなじみでないものは嫌悪感を抱かせるだけ、もっとよく知りたいという欲望はまったく抱かなくなる。人々が、この国は没落しつつある（going to the dogs.）とか、「いろんなことが、自分の若い頃とは違ってしまっている」となど言い出すのは、この段階である。遠い昔と同じでない（変わってしまった）のは、そのようなことを言い出す人の好奇心である。また、好奇心の死とともに活発な知性も死んでしまったと結論を下してもよいだろう。	[n.0083: 好奇心: 大人と子供の違い] 子供の好奇心は旺盛である。大人になると衰えてくるので、しだいに新鮮な好奇心を掛けなくなる。したがって年をとっていてもいろいろなものに好奇心をもっていることは希少価値があるというところで、「子供のよきな（素直な）心を持っている」と羨める。しかし何も知らない子供がいるいろいろなものに好奇心を持つのは、早く大人になって自立しなければならぬ動物にとって共通の、欠くべからざる天与の性質である。それに好奇心の質は必ずしも善いとはいえない。その点、大人は好奇心が持てる対象（量）はへるだろうが、「質」は高まることは「可能」である。「可能」なだけだが・・・。	
				削除			
★	366-c132 H27年 (2/28)	○	A3-19	Most of what was formerly taught was useless in itself but had the merit of teaching accuracy. What is taught in up-to-date schools is often worth knowing on its own account but is usually taught in such a way that the pupils do not know it at the end. The consequence is that adults have slipshod habits of mind and cease to notice distortions of fact which have a sinister motive. The modern youth who intends to adopt a profession tends to be idle at school and only to begin hard work when he embarks upon technical training. In law school or medical school he exerts himself to acquire knowledge because it has for him an obvious economic utility. [From: The decay of intellectual standards (written in Oct. 19, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.)] http://russell-j.com/DECAY-IS.HTM	昔学校で教えられたことは、大部分それ自体は無益なものであったが、正確さを教えるという長所を持っていた。今日の（現代的な）学校で教えられることからは、それ自体知る価値があるものが多いが、週例、生徒が結局は（よく）理解しない方法で教えられる。その結果、大人たちは正確さを欠いた心的習性を身につけ、悪意のある動機による事実の歪曲に気がたくなる。専門職を選ぶことを心に決めた現代の若者は、通常学校では怠け、専門的訓練を受ける時になってはじめていっしょうけんめい勉強を開始する傾向がある。ロー・スクールやメディカル・スクールにおいて、彼は知識習得に懸命になるが、それはそれらの知識が彼にとって疑いえない経済的效用を持つからである。	[n.095: 知的水準の低下] 現代人は多くのことを知らねばならず、学校時代に非常に大量の知識を詰め込まれます。しかし、(受験勉強に象徴される)詰め込み教育のおかげで、消化不良の知識を多く身につけ、「正確性に欠けた」「博識だが智慧に乏しい」人間を大量に生み出しています。それによつて、悪意のある動機による事実の歪曲を看破する能力を喪失するといったゆゆしき事態が生きていると警告するツイセイ(1932年に発表)ですが、現代日本にも適用すると思われれます	
★	366-c133 H27年 (3/1)	○	A3-20	Real virtue is robust and in contact with facts, not with pretty-pretty fancies. We have chosen to hedge round the profession of teaching with such restrictions that, in the main, those who choose this profession are men and women who are afraid of reality, and we have done this because, while many of us recognise that contact with reality has been good for us, few of us have the courage to believe that it is good for our children. This is the fundamental reason why education, as it exists, is so unsatisfactory. [From: Does education do harm? (written in Feb. 17, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.)] http://russell-j.com/EDU-HARM.HTM	真の美德は、力強く、真実から目をそらさぬものであって、きれい事だらけの空想ではない。われわれは教職に就く者にさまざまな制限を設けてきたので、今日教職を仕事として選ぶ男女は、たいてい現実との接触を恐れる人々に限られてしまったが、われわれがこのような政策をとる理由は、自分たち大人には現実との接触が有益だったことが分っているのに、子供が現実と接触することが良いと思う勇敢な人が少ないからである。ここに、われわれが今の教育にきわめて不満な理由がある。	たとえば、教科書検定など本当に必要か？ 特に、歴史教科書の検定は「国民」にとって必要だろうか？ 必要であるとするならば、国際的委員会を組織して「標準世界史」を作り、その記述内容を前提として、それそれの国で（世界史成立以前の）「各国史」と（世界史成立以後の）地域史としての「各国史」を作ればよいのではないか。	教員を要縮させる制度はよくない。愛国主義的な考えを若者に植えつけるための歴史教科書の検定「いじめの問題の解決」を隠れ裏にした教育委員会制度の改善、大学院における教員の再教育も利用した教員の管理の強化・・・
★	366-c134 H27年 (3/2)	○	A3-21	In these days, under the influence of democracy, the virtue of co-operation has taken the place formerly held by obedience. The old-fashioned schoolmaster would say of a boy that he was disobedient; the modern schoolmistress says of an infant that he is non-co-operative. It means the same thing: the child, in either case, fails to do what the teacher wishes, but in the first case the teacher acts as the government and in the second as the representative of the People, i.e. of the other children. [From: Of co-operation (written in May 18, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.)] http://russell-j.com/KYORYOKU.HTM	今日では、民主主義の影響をうけて、協力の美德が過去において服従の美德が占めた位置に取って代わった。昔流儀の男性教師ならば、生徒の人稱を評してあなたは素直でないと言ったところを、現代（＝1930年代）の女性教師なら、幼い生徒に対して、あなたは非協力的だと言っだろう。要するに両者は同じことを意味している。どちらも生徒が先生の期待に添わなかったわけであり、前者の場合は先生は統治者として振る舞い、後者の場合は、教師は人民即ち他の生徒達の代表として振る舞う。・・・。	中学校頃までは、多くの子供は同年代の仲間と同じで不安を覚えます。しかし、(なかには大人になってもいっつも流行を追っつとはいますが)通常は、次第に成長するにつれ、他人と一緒であることがイヤになっていきます。とは言っても、その個性の主張も、茶髪やピアスや人目をひく服といったような外見的なものが大部分であり、自分なりの世界観を形成していく努力を日本人は余りしてこなかったように思われます。	社会や組織が凝縮しなければならぬほど「社会的協力」は重要なものとなっていきますが、その中で個人が創造性を発揮できるような社会をつくっていくことは、現代社会の大きな課題だと思われれます

366-c135 H27年 (3/3)	○	A3-22 They (=Children) have a dislike of humbug, which usually disappears in later life. The habit of screening them from the knowledge of disagreeable truths is not adopted for their sakes although adults may think it is; it is adopted because adults themselves find candour painful. [From: On protecting children from reality (written in Oct. 5, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.)] <a href="http://russell-j.com/CHLD-P-HTML">http://russell-j.com/CHLD-P-HTML</a>	子供は本来ごまかしを嫌うが 通例そのような気持ちは 年を取るにつれて消滅する。それゆえ子供に不快な真実を知らせない習慣が採用されている。大人の都合で子供のために採用されたのではなく、ほかに知らぬ大人にとって卒直さが苦痛であるがゆえに作られるにすぎない。	子供にはありのままの事実をしらせない方が「子供のための」ということで、子供を過保護にすると多くの弊害が生じます。日本の歴史教育が良い(と思うか)「悪い」例です。社会が不快な事実を知らぬままですまそうとする結果はやがて社会全体の災厄を招く破目になる」というラッセルの警告は、拝聴すべきものだと思います。	現実を直視することが苦痛であっても、現実から逃げないで直視し続けなければならない。それに対し自分や自国に不都合な真実から目をそらしてきた場合には、なんとかしてそういった事柄はなかったこととしてしまい、真実があるみに出そうになると、個人情報保護や偏向、特定秘密法、自虐だと書いて、そういった報道や言動をつぶそうとする。 朝日による従軍慰安婦に関する誤報はお粗末であり、ジャーナリズムの信頼をひどく損ねてしまった。しかし、それを連日のように報道している読売新聞などが立派な報道をしてきたという証明にはならない。それどころか憲法改正、原発再稼働賛成、その他、体制寄りの報道ばかりしている。 何で読売が忘れてしまったが、毎日本新聞を中(まんなか)とすると、体制擁護、右より度原、に並ぶと、読売新聞 > 産経新聞 > 日本経済新聞 > 毎日新聞 > ? > 朝日新聞 という順序になると評価していた。 読売が産経よりも権力者寄り、体制寄りというのとは、渡辺社主のせいなのか、正力松太郎氏の時代からなのか・・・? 読売新聞は渡辺社主(渡辺天皇と呼ばれているとのこと)が気に入らない記事は、いっさい載せられない新聞になってしまっているのではないかと、渡辺社主は若い時は日本共産党員だったが、その後180度思想傾向が変わった。 長谷川慶太郎も若い時日本共産党員だったが、その後、体制にまわり、反体制側を糾弾する本を大量生産し続けている。若い路に日本共産党員であり、その後転向した人にも、体制擁護に回る人間が多いのは、日本だけではなく世界的な現象である。心理(学)的に言うとう、昔いよな自分を否定したために、反体制的な人間を必要以上にたたく、ということであろうか？
★ 366-c136 H27年 (3/4)	○	A3-23 Every State wishes to promote national pride, and is conscious that this cannot be done by unbiased history. The defenceless children are taught by distortions and suppressions and suggestions. The false ideas as to the history of the world which are taught in the various countries are of a kind which encourages strife and serves to keep alive a bigoted nationalism. If good relations between States were desired, one of the first steps ought to be to submit all teaching of history to an international commission, which should produce neutral textbooks free from the patriotic bias which is now demanded everywhere. From: Principles of Social Reconstruction, 1916, chap. 5: Education. <a href="http://russell-j.com/cool/10T-0501.HTML">http://russell-j.com/cool/10T-0501.HTML</a>	いかなる国家も、国民としての誇りを助長したいと望んでおり、この国民的誇りは偏見のない歴史(教育)によってはなすことができないという意識を持つている。(そこ)無防備の子供たちは、事実の曲解とかある種の事実の隠蔽とか、種々の暗示とかによって教えられることになる。様々な面で教えられている世界史に関する誤った諸概念は、闘争を奨励し、頑迷なナショナリズムを存続させる役割を果たすような性質をもっている。国家間の良好な関係が望まれるとするならば、とるべき最初の処置のひとつは、歴史の教育の全てを国際的な委員会に委ね、その委員会が、現在のどの国でも要求されるような愛国的偏見を有しない中立的な教科書をつくるようにすべきである。	「ありのままの」歴史を子どもに教えたのでは愛国心は育たない。考えが固まってしまふ大人になってからでは遅いので、何も知らない無垢な子供のうち、愛国心を教育によって注入してしまいたいという為政者。 「核戦争の危険を除去するためには、戦争の廃絶をしなければならぬ。そのためには、『交戦権』という国家主権を制限し、世界連邦政府を樹立する以外にない」というのガラツセル及びアインシュタインの信念でした。それは、ラッセルもアインシュタイン宣言の精神でもあり、宣言に明確に書かれていた。しかし日本では、集団的自衛権を擁護し、保護することを目的に、交戦権を認めようとする憲法改正をしようとする動きが強まっており、その考え方を国民に浸透させるための愛国心教育や歴史教育が強調され・・・。	
366-c137 H27年 (3/5)	○	A3-24 The most serious aspect of over-education is its effect on health, especially mental health. This evil, as it exists in England, is a result of the hasty application of a Liberal watchword, "equality of opportunity." Until fairly recent times, education was a prerogative of the sons of the well-to-do, but under the influence of democracy it was felt, quite rightly, that higher education ought to be open to all who could profit by it, and that ability to profit by it depended in the main upon intellect. The solution was found in a vast system of scholarships depending upon scholastic proficiency at an early age, and to a very large extent upon competitive examinations. Belief in the sovereign virtues of competition prevented anyone from reflecting that boys and girls and adolescents ought not to be subjected to the very severe strain involved. If the strain were only intellectual it would be bad enough, but it is also emotional: the whole future of a boy or girl, not only economically, but socially, turns upon success in a brief test after long preparation. Consider the situation of an intelligent boy from a poor home, whose interests are almost wholly intellectual, but whose companions care nothing for books. If he succeeds in reaching the university, he may hope to make congenial friends and spend his life in congenial work; if not, he is doomed not only to poverty but to mental solitude. With this alternative before him, he is almost certain to work anxiously but not wisely, and to destroy his mental resiliency before his education is finished. From: Education and the Social Order, 1932, chap. 12: Competition in Education. <a href="http://russell-j.com/cool/30T-1201.HTML">http://russell-j.com/cool/30T-1201.HTML</a>	過剰教育の最も重大な面は、健康、特に精神の健康に及びず影響である。この害(弊害)は英国においてみられるように、「機会均等」という自由主義の標語を性急に適用しようとする結果である。つい最近まで教育は裕福な人たちの子弟の特権であった。しかし、民主主義の影響のもと、高等教育はそれに値するすべての人々に開放されるべきであり、また高等教育から利益を得る能力は主として知性(の程度)にかかっていると、(正当にも)思われるようになった。この問題の解決(策)は、幼少の頃の学業成績及びかなりの程度まで競争試験によることである。競争試験による学業成績によって見出された、競争は最も重要なものであるという原則(思い込み)のため、少年少女も、競争に耐えかねる緊張を伴うようなものに従事させられるべきではないということ、誰も思いついたらなかった。たとえ緊張はたまた知性的なものだけでも十分悪いが、(実際は)さらに感情的な緊張も加わるのである。即ち、少年少女でもその子の将来は、経済的な将来だけでなく社会的な将来も、長い間の準備のあと、ほんの短時間の試験で左右されてしまうという感情的な緊張があるのだから。その少年の興味は全く知的な方面に向いているのに、彼の友達とは全く本心に興味を持たないような環境にある。鋭い家庭の聡明な少年の立場を考慮してみれば、もうまく大学にまでゆくことができれば、彼は気の合った友達を作る望みも持てるし、気に入った仕事に一生を送ることもできるだろうが、もし入学できなければ、貧乏だけでなく心の孤独を運命付けられる。競争、二重苦に直面して、彼は不安に陥らねばならぬ強さがあるが、しかしその方法は賢明ではないのは確かである。また彼の教育が完成する前に、精神的な弾力性は失われてしまうのも確かなことである。		権力者に反発をおぼえるのであれば、権力者に対抗すればよいはずであるが、実際は、自分より弱い者に対しては権力を振るうミニ権力者になってしまう。いわゆる「長いものは巻かれる」ということで、権力者は安泰となる。
366-c138 H27年 (3/6)	○	A3-25 The submissive lose initiative, both in thought and action; moreover, the anger generated by the feeling of being thwarted tends to find an outlet in bullying those who are weaker. That is why tyrannical institutions are self-perpetuating: what a man has suffered from his father he inflicts upon his son, and the humiliations which he remembers having endured at his public school he passes on to 'natives' when he becomes an empire-builder. Thus an unduly authoritative education turns the pupils into timid tyrants, incapable of either claiming or tolerating originality in word or deed. The effect upon the educators is even worse: they tend to become sadistic disciplinarians, glad to inspire terror, and content to inspire nothing else. As these men represent knowledge, the pupils acquire a horror of knowledge, which, among the English upper-class, is supposed to be part of human nature, but is really part of the well-grounded hatred of the authoritarian pedagogue. From: In Praise of Idleness, 1935, chap. 12: Education and Discipline. <a href="http://russell-j.com/cool/32T-1201.HTML">http://russell-j.com/cool/32T-1201.HTML</a>	のいいいなりになる者(従順な人間)は、思想と行動の面において進取の気性を失う。さらに、出鼻をくじかれていたという感情によって引き起こされる怒りから、自分より弱い者をいじめることにはけ口を見つけてがちである。これが圧政的な慣例がいつまでも続いている理由である。即ち、自分の父親から受け取られた苦しみは、自分の息子が誇り、パブリック・スクールで受けることになる屈辱を忘れずにそれを自分が大英帝国の建設者(の一員)となった時に(植民地の)原住民に屈辱を転嫁する(引き渡す)。こうして、不当な権威主義的な教育は、生徒を臆病な暴君にさせ、善行における独創性を自分自身でなくさせたり、他人の独創性を許すことをできなくさせたりする。教育に及びず影響はもっと悪い。彼ら教育者は加法的な規律執行者となり、生徒に恐怖心を起こさせることを喜び、他に何も起こさなくても満足する。こういう人間が知識を言で授ける。生徒は知識を謙遜することになる。この知識に対する態度は、イギリスの上流階級の間では、人間性に含まれていると思われるが、実際、権威主義的な教育者の根強い憎悪心の一部となっているのである。徳は不愉快なものという事実を立証するために、教育当局は、最も望ましい人間については、これは異なる考えを持っている。私は、人間は陽気で元気で親切であるべきであり、ノーと言ふよりもイエスと言ふ傾向があるべきであると考えている。即ち、自分自身をノーと言いたる人たちは、おぼろげな他人の情状に共感し、たとえノーという権利があるかと思ふ傾向がある。		政府は道徳教育を「教科化」しようとしています。道徳教育をする「姿勢」があると認定された教師たちは、一部を除いて、人間的に魅力のない人間が多くなり、もうな気がします。結局、国家主義的な国家観を持った政府による道徳教育は、「正しい」と彼らが生かすことを子供のうちに叩き込んで権力者に従順な国民をこころにたくす。その道徳性のもと、疑問を持たずに「ゴノミエ」で押しつけて、働いてもらいたい」ということ(本人達が自覚しているかどうかにかかわらず)本音のようです。
366-c139 H27年 (3/7)	○	A3-26 In order to prove to them that virtue is unpleasant, education authorities try to provide teachers who shall be at once unpleasant and virtuous. For my part I have a different view as to the best sort of person. I think people should be jolly, and cheerful, and kindly, and more inclined to say 'Yes' than to say 'No'; those who say 'No' to themselves generally feel that this gives them a right to say 'No' to others, especially to children. From: Who may use lipstick? (written in Sept. 14, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) <a href="http://russell-j.com/KUTIBENI-HTML">http://russell-j.com/KUTIBENI-HTML</a>			

				A3-27	The ignorant person with affection is perhaps better for an infant than a well-informed person who has no heart; but a well-informed person who is fond of children is much better than either.	愛情のある無知な人は、愛情はないが育児の知識に明るく人よりも、幼児にとって多分より良いであろう。しかし子供が好きでしかも育育の知識がある人のほうが、いずれかしかない人よりも、子供にとってははるかに良いであろう。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「結婚」 <a href="http://russell-j.com/MARRIAGE.HTM">http://russell-j.com/MARRIAGE.HTM</a>	ごく常識的な発言ですが、我が子に対し愛情にあふれると同時に豊富な育児の知識もっている人というのはそれほど多くはないようです。	
				A3-28	To avoid too much passivity is an educational problem. It demands, in play, the absence of elaborate apparatus and no undue respect for exceptional skill; in work, encouragement of active investigation rather than mere listening to knowledge imparted by means of lectures. Unfortunately the authorities like passivity because it is convenient. <a href="http://russell-j.com/PASSIVE.HTM">http://russell-j.com/PASSIVE.HTM</a>	過度の受動的な態度をさけることは、教育上の課題である。それには、子供の遊びにおいては手のこんだ用具を与えるべきではなく、特別な技能に対して決して過度にほめなう。むしろ、より積極的に知識を授けてもらうよう、講義の与えらる知識ばかりに耳を傾けず、自分で能動的に調べ勉強することを勧めなければならない。不幸にして権力者は、自分にとって都合の良いため、(多くの人間が)受動的であることを好む。 出典：Are we too passive? (written in Feb. 3, 1932 and published in Mortals and Others, v. 1, 1975) <a href="http://russell-j.com/PASSIVE.HTM">http://russell-j.com/PASSIVE.HTM</a>	権力者は受動的で情緒的な人間(被支配者)を好みます。雄弁にすぐのりやすい選挙民、国民は政治家にとって御し易い対象です。国民(選挙民)を持ち上げているように見えて、実は、「由らしむべし知らしむべからず」が基本の保守政治家。	
*				A3-29	It is not by an all-round education or by catholicity of interests that first-rate eminence is achieved; it is achieved by concentration and a certain narrowness both emotional and intellectual. In a world where all young people have the same environment, and the same standards presented for their acceptance, this does not easily happen. Diversity is necessary to distinction, and uniformity in education tends to produce mediocrity in adult life. We must therefore expect that individual eminence will be rarer in the future than it has been in the past. <a href="http://russell-j.com/FATHER.HTM">http://russell-j.com/FATHER.HTM</a>	第一級の名声を勝ち取るのは、オールラウンドの教育や幅広い興味をもってではない。感情と知性の両面における個性が重要で、自覚がある。環境が同じ環境にあり、同一の基準を要しなければならない世界においては、このような条件は容易に起こらない。傑出した人物を生み出すには多様性が必要であり、画一的な教育は、平凡な大人を生み出す傾向がある。従って今後は、昔と違い、個人的名声を得ることはより稀なものになるだろう。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「父親の影響」 <a href="http://russell-j.com/FATHER.HTM">http://russell-j.com/FATHER.HTM</a>	先進国(北欧、英国など)においては、社会福祉の対象は「ゆりかごから墓場まで」というように人間生活全般に拡大しつつある。従来であれば親や家族(あるいは親類縁者)が担っていた役割のかなりの部分を社会(国や地方自治体)が果たすようになってきている。それにつれて親(特に父親)の影響が相対的に大幅に低下しつつある。そのこと自体は望ましい面が多く悪いことではないが、(引用した文章の方で)ラッセルが指摘するような画一化、標準平等化の危険もひそんでいる。多様性や個性を尊重しない社会は、たとえ社会福祉が充実していても生き甲斐のある社会とはならない。	
				A3-30	The morality of the heart, as I see it, consists in the main of kindly feelings and good nature. But these cannot be produced by sermons; they are produced by good digestion, sound glands, and fortunate circumstances. "Do your duty, however unpleasant it may be for all concerned" is edifying and appeals to your sadistic instincts.	心の道徳性は、主に思いやりの感情と気だての良さからなると私は思う。しかしこれら性質は説教によっても生み出されず、十分な消化力と健全な分泌腺と恵まれた環境によって生みだされる。「関係者がみな不愉快な思いをしたとしても、自らの義務を果たせ」というのは教化(善導)であり、道徳的である。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「教化・善導について」 <a href="http://russell-j.com/EDIFY.HTM">http://russell-j.com/EDIFY.HTM</a>	我が子の教育にあたる教師は、高い道徳的な感性を持ってほしいと多くの親が望みますが、ラッセルが言うように、「正しいことを教える(あるいは説教する)」ことばかりに力をいれる教師は余り良い教師とは言えません。現代日本ではむしろ、受容を要請した「知識の詰め込み」教育をしている教師の方が多くかもしれませんが、ラッセルがこのエッセイでのべているような「教化(善導)」を主張する教育関係者の悪意や迫害性を自覚している人はどれだけいるでしょうか?	
*				A3/C1-01	In the circumstances it was natural that I should become interested in education. I had already written briefly on the subject in Principles of Social Reconstruction, but now it occupied a large part of my mind. I wrote a book, On Education, Especially in Early Childhood, which was published in 1926 and had a very large sale. It seems to me now somewhat unduly optimistic in its psychology, but as regards values I find nothing in it to recant, although I think now that the methods I proposed with very young children were unduly harsh [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 4: Second Marriage, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB24-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB24-020.HTM</a>	そうした環境にあって私が教育に関心をもつようになるのは自然であった。私は既に「社会改造の原理」(1916年)において教育の問題について簡潔に書いてきた。しかし今や教育の問題が私の心の大部分を占領したのだ。私は『教育について - 特に幼少時における』という本を書き、1926年に出版され、かなりの売れ行きを示した。「教育論」についてお考えれば、その本の基礎に置いた心理学はいくらも楽観的過ぎたように思われる。しかし私が提案した方法は - ごく幼い子供たちをとり扱うには、不当に厳しすぎたように今では考えるが - 価値基準(何に価値を置くか)については、自説を撤回すべき点はないと考える。		
*				A3/C1-02	For us personally, and for our two children, there were special worries. The other boys naturally thought that our boy was unduly favoured, whereas we, in order not to favour him or his sister, had to keep an unnatural distance between them and us except during the holidays. They, in turn, suffered from a divided loyalty: they had either to be sneaks or to practise deceit towards their parents. The complete happiness that had existed in our relations to John and Kate was thus destroyed, and was replaced by awkwardness and embarrassment. I think that something of the sort is bound to happen whenever parents and children are at the same school. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 4: Second Marriage, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB24-080.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB24-080.HTM</a>	(私達夫婦が経営していた Beacon Hill School において) 私たち夫婦と二人の子供には私的な特別な悩みがあった。他の少年たちは - 彼らがそう考えるのは自然なことではあるが - 私たちが自分の息子を不当にひいきしていると考えた。そういうことも考慮して、私たちは自分の息子とその妹をひいきにすることをさけるため、休暇のとき以外は、我が子と私たちの間に不自然な距離を置かなければならなかった。そうして、今度は、私の子供たちの方が、親への忠誠心を分断され、苦しんだ。即ち自分の両親に対して、密告者(告げ口をする人)になるかあるいは欺瞞的行為をしなければならなかった。このようにして、私たちとジョンおよびケイトとの間に存在していた完全な幸福が壊されてしまい、そうしてきこちなさと当惑がそれにとって代わった。(教師である)両親とその子供たちが同じ学校にいては、これと同じような問題が生ぜざるをえないと思われる。		
*				A3/C1-03	In retrospect, I feel that several things were mistaken in the principles upon which the school was conducted. Young children in a group cannot be happy without a certain amount of order and routine. Left to amuse themselves, they are bored, and turn to bullying or destruction. In their free time, there should always be an adult to suggest some agreeable game or amusement, and to supply an initiative which is hardly to be expected of young children. Another thing that was wrong was that there was a pretence of more freedom than in fact existed. There was very little freedom where health and cleanliness were concerned. The children had to wash, to clean their teeth, and to go to bed at the right time. True, we had never professed that there should be freedom in such matters, but foolish people, and especially journalists in search of a sensation, had said or believed that we advocated a complete absence of all restraints and compulsions. The older children, when told to brush their teeth, would sometimes say sarcastically: 'Call this a free school!' Those who had heard their parents talking about the freedom to be expected in the school would test it by seeing how far they could go in naughtiness without being stopped. As we only forbade things that were obviously harmful, such experiments were apt to be very inconvenient. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 4: Second Marriage, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB24-090.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB24-090.HTM</a>	ふり返って見ると、学校(注: Beacon Hill School)の経営管理の方針のいくつかが誤りがあったように思われる。集団のなかの幼い子供たちは、一定の規律や目録がなくては routine まで保てられず、自由に遊ばせておく、道徳になり、頑い者いじめをしたり、破壊的行為をしたりする。自由時間には、いつも大人がついていて、何が彼らの喜びそうなゲームや娯楽を提案したり、幼い子供たちだけでは期待できそうな自主性(イニシアティブ)を補ってあげるべきである。もう一つの間違いは、実際存在する以上に自由があるふりをしていたことである。健康と清潔に関係したものについては、子供達にほとんど自由はなかった。子供たちは、歯や手を洗わなければならない、湯をみがかなければならない、適切な時間に寝なければならない、それらは、私たちが、そうした事柄について、子供の自由にまかせるなどと言いついては、いかなかった。しかし愚かな人たちは、特にセンセーショナルなことを探し求めている新聞記者連中は、私たちが一切の制限と強制を完全に無くすることを囁き出した。そうして、何もしないで、自分の歯をみがくよう言われると、時折、皮肉を込めてこう言うのだった。「これでも自由学校など言うの!」 親たちが、この学校で期待される自由について話しているのを(以前聞いた子供たちは、(教師に)止められることなく、臍白な行為をともなうまで行うことが出来るが試そうとした)、あなたが私たちに、明らかに害になることのみ禁じていたので、そのような試みは、大変不都合なものになりがちであった。		



★			A4-05	<p>... : the morality which I should advocate does not consist simply of saying to grown-up people or to adolescents: "Follow your impulses and do as you like." There has to be consistency in life: there has to be continuous effort directed to ends that are not immediately beneficial and not at every moment attractive; there has to be consideration for others; and there should be certain standards of rectitude. I should not, however, regard self-control as an end in itself, and I should wish our institutions and our moral conventions to be such as to make the need for self-control a minimum rather than a maximum. The use of self-control is like the use of brakes on a train. It is useful when you find yourself going in "the wrong direction, but merely harmful when the direction is right. No one would maintain that a train ought always to be run with the brakes on, yet the habit of difficult self-control has a very similar injurious effect upon the energies available for useful activity. Self-control causes these energies to be largely wasted on internal friction instead of external activity; and on this account it is always regrettable, though sometimes necessary.</p> <p>From: Marriage and Morals, 1929, chap. 21: Conclusion.  <a href="http://russell-j.com/cool/27T-2101.HTM">http://russell-j.com/cool/27T-2101.HTM</a></p>	<p>私が唱道したい道徳は、成人や青年に対して単純に「自分の衝動に従い、好きなようにやらない」と言うだけのものではない。人生には恒常性がなければならない。即ちすぐに利益にはならなくて、いかなる時にも魅力的であるというわけではない目的を目指して、継続的な努力をしなければならぬ。他人への思いやり（考慮）も必要だし、正直であることについての一定の基準も必要である。けれども、私は、自衛それ自体を目的としては考えていない。我々の制度や道徳的慣習は、自衛の必要を最大限ではなく、最小限にするようなものであることを望んでいる。自衛の効用は、列車のブレーキの効用に似ている。誤った方向に進んでいることに気づいたときには役に立つが、方向が正しいときには邪魔になるばかりである。列車はつねにブレーキをかけたまま走らなければならないけれども主張しないだろうが、それでも、困難な自衛をする習慣は、有用な活動にあてべきエネルギーに対して、きわめてよく似た有害な影響を及ぼす。自衛が原因となって、こうしたエネルギーの大部分は、外的な活動に対してではなく、内的な摩擦にむだ使いされることになる。こういった理由で、自衛はときには必要であるが、つねに遺憾なものである。</p> <p>『国家礼讃は、実際は少数支配者(支配階級)礼讃』</p>		
★			A4-06	<p>There are some among philosophers and statesmen who think that the State can have an excellence of its own, and not merely as a means to the welfare of the citizens. I cannot see any reason to agree with this view. "The State" is an abstraction; it does not feel pleasure or pain, it has no hopes or fears, and what we think of as its purposes are really the purposes of individuals who direct it. When we think concretely, not abstractly, we find, in place of "the State," certain people who have more power than falls to the share of most men. And so glorification of "the State" turns out to be, in fact, glorification of a governing minority. No democrat can tolerate such a fundamentally unjust theory.</p> <p>There is another ethical theory, which to my mind is also inadequate. It is that which might be called the "biological" theory, though I should not wish to assert that it is held by biologists. This view is derived from a contemplation of evolution. The struggle for existence is supposed to have gradually led to more and more complex organisms, culminating (so far) in man. In this view, survival is the supreme end, or rather, survival of one's own species. Whatever increases the human population of the globe, if this theory is right, is to count as "good," and whatever diminishes the population is to count as "bad."</p> <p>I cannot see any justification for such a mechanical and arithmetical outlook. It would be easy to find a single acre containing more ants than there are human beings in the whole world, but we do not on that account acknowledge the superior excellence of ants. And what human person would prefer a large population living in poverty and squalor to a smaller population living happily with a sufficiency of comfort?</p> <p>From: Authority and the Individual, 1949, chap. 6: Individual and Social Ethics.  <a href="http://russell-j.com/cool/40T-0601.HTM">http://russell-j.com/cool/40T-0601.HTM</a></p>	<p>哲学者や政治家のなかで、国家は単に市民の福祉の手段としてばかりではなく、それ自体として優れた点をもち得ると考える人たちがいます。私は、この見解に同意する理由をみつけないで済ませません。「国家」というのは抽象的なものです。国家は喜びも痛みも感じません。国家は希望も恐れも持っていません。また、我々が国家の目的と考えているものは、実際は、国家を指揮する個人の目的です。抽象的ではなく、具体的にも（国家）を考えると、「国家」の代わりに、大部分の人間以上に権力をもっている、ある一定の人々をわれわれは発見します。そうして「国家」礼讃は、実際は少数支配者(支配階級)の礼讃であるということが明らかになります。そのような根本的に不正な説を我々が受ける民主主義者はありません。もう一つ別の倫理説がありますが、これも私の考えでは不十分なものです。それは、生物学的、理論と呼べるもので、それが生進生物学によって信じられているとは断言したくはありません。その見方は進化の考察から出ているものです。生存競争は徐々により複雑な有機体を次第に導き、これまでのところ、人間が頂点に達していると考えられています。この見解によれば、生存が最高目的となります。いや、むしろ（自）種の生存がそれであるというのです。もしこの説が正とすれば、地球上の人類の人口を増加させるものならば何でも「善い」ものとみなされ、人口を減少させるものならば何でも「悪い」ものとみなされます。私は、そのような機械的かつ算術的な見方に、正当な理由をまったく見だせません。世界中の人間よりも多くの蟻を飼っている工一カ一の地面を我々よりはる容易でしよう。しかし、そのために、蟻の方が人間よりも優れていると認めることはありません。また、どういった人が十分な楽しみをもって幸せに暮らしているか、人口よりも、貧困とむき苦しむの中で生活している大人口の方を選ぶでしょうか？</p>		
★			A4-07	<p>... I am told over and over again that I over-estimate the part of reason in human affairs. This may mean that I think either that people are, or that they ought to be, more rational than my critics believe them to be. But I think there is a prior error on the part of my critics, which is that they, not I, irrationally over-estimate the part which reason is capable of playing, and this comes I think from the fact that they are in complete confusion as to what the word 'reason' means.</p> <p>'Reason' has a perfectly clear and precise meaning. It signifies the choice of the right means to an end that you wish to achieve. It has nothing whatever to do with the choice of ends. But opponents of reason do not realize this, and think that advocates of rationality want reason to dictate ends as well as means. They have no excuse for this view in the writings of rationalists. There is a famous sentence: 'Reason is and ought only to be, the slave of the passions.' This sentence does not come from the works of Rousseau or Dostoevsky or Sartre. It comes from David Hume. It expresses a view to which I, like every man who attempts to be reasonable, fully subscribe. When I am told, as I frequently am, that I almost entirely discount the part played by the emotions in human affairs, I wonder what motive-force the critic supposes me to regard as dominant. Desires, emotions, passions (you can choose whichever word you will), are the only possible causes of action. Reason is not a cause of action but only a regulator.</p> <p>From: Human Society in Ethics and Human Society, 1954.  <a href="http://russell-j.com/cool/47T-PREF-01.HTM">http://russell-j.com/cool/47T-PREF-01.HTM</a></p>	<p>・・・。私は、人事(人間社会の出来事)における理性の役割を過大評価している、とくりがえし批難されている。これは、私の批評家(私を批難する人々)たちが信じているよりも、人々(人間)は、より理性的である、あるいはより理性的であるべきであると、私が考えている、ということかも知れない。しかし、批評家の側にも(こそ)より重大な誤りがあり、その誤りとは、私ではなく、批評家たちが、理性の演じ得る役割を非合理に過大評価していることであると私は考える。また、これは、彼らが「理性」という語の意味する内容について、まったく混乱に陥っている、ということが生じている、と私は考える。</p> <p>「理性」には完全に明確かつ精確な意味がある。それは、我々が達成したいと思う目的に対して正しい手段を選ぶ、ということの意味している。理性は目的の選択とは何らの関わりもないのである。しかし、理性を敵とする者は、このことを理解せずに、合理主義の唱道者は、手段同様目的に対しても理性に指図させたがって、と考えるのである。彼らにこのような見解の口実を与えるものは、合理主義者の著作のなかには、まったくない。理性は情熱の奴隷であり、またたかそうあるべきである、という有名な一文がある。これは、ルソー(1712-1778)やドストエフスキー(1821-1881)あるいはサルトル(1905-1980)の著作のなかにある文ではない。デューク・ド・ラモネ(1711-1776)の著作のなかにある言葉である。それは、理性的であろうとするいかなる人と同じく、私も全面的に賛同する見解を表現している。私がしばしば言われているように、「人事(人間社会の出来事)において情動の演ずる役割をラッセルはほとんど全面的に無視している」と言われるとき、私がいつかという情動力を支配的なものとなんとして、と、批評家たちは考えているのだろうか、と私は不思議に思う。欲望、情動、情熱(どの語を選んでかまわないけれども)が、唯一行為の原因となりうるものである。理性は行為の原因ではなく、調整役にすぎない。</p>		

	<p>A4-08</p>	<p>Why, then, is there this violent passion which causes people, when they read me, to be unable to notice even the plainest statement, and to go on comfortably thinking that I say the exact opposite of what I do say? There are several motives which may lead people to hate reason. You may have incompatible desires and not wish to realize that they are incompatible. You may wish to spend more than your income and or yet remain solvent. And this may cause you to hate your friends when they point out the cold facts of arithmetic. You may, if you are an old-fashioned schoolmaster, wish to consider yourself full of universal benevolence, and at the same time derive great pleasure from caning boys. In order to reconcile these two desires you have to persuade yourself that caning has a reformatory influence. If a psychiatrist tells you that it has no such influence on some peculiarly irritating class of young sinners, you will fly into a rage and accuse him of being coldly intellectual. There is a splendid example of this pattern in the furious diatribe of the great Dr. Arnold of Rugby against those who thought ill of flogging.</p> <p>There is another, more sinister, motive for liking irrationality. If men are sufficiently irrational, you may be able to induce them to serve your interests under the impression that they are serving their own. This case is very common in politics. Most political leaders acquire their position by causing large numbers of people to believe that these leaders are actuated by altruistic desires. It is well understood that such a belief is more readily accepted under the influence of excitement. Brass bands, mob oratory, lynching, and war, are stages in the development of the excitement. I suppose the advocates of unreason think that there is a better chance of profitably deceiving the populace if they keep it in a state of effervescence. Perhaps it is my dislike of this sort of process which leads people to say that I am unduly rational.</p> <p>From: Human Society in Ethics and Human Society, 1954 . http://russell-j.com/cool/47T-PREF-02.HTM</p>	<p>それでは、私の著書を読んで(世間の)人々に、その中の最も平明な陳述を気づかなくさせ、また、私が言おうとしているのと正反対のことを喜んで聞いてくれる人を容易に惹きつけるようなこの強烈な情熱があるのはなぜだろうか。人々に理性を憎ませる可能性のある動機がいくつかある。(たとえば)両立しない欲望を持ちながら、それらが両立しないことに気づきたくない、または人思うかも知れない。以上以上の消費したいと思いつながら、やはり収入を減らさないようにしよう、と思うかも知れない。そうして、このことは、友人に算術計算の冷徹な事実を指摘された時、その友人(たち)を毛嫌いさせる原因になるかも知れない。もしあなたが古風な教師であるならば、あなたは誰に対しても懲罰的でないでほしい、とも自認したいと同様に、子供たちを鞭打つことに大きな喜びを得ているかも知れない。この2つの欲望を両立させようとするならば、どうしても、鞭打ちには矯正効果があると自ら思い込まなくてはならない。(それゆえ、もし、精神科医が、あなたに、特別に腹たしい年少のいたずらから子たちのクラス(学級)のために、鞭打ちを拒否したならば、あなたの怒り激った批難の確証がある。もう一つ、理性的でないこと(不合理)を好むもう一つ、悪意のある動機がある。相手(対象の人々)が十分に不合理な人間の場合、あなたは彼らをそそのかして、自分たち自身の利益のために尽くしていると思込ませる(実際は)あなたの利益のために奉仕させることも可能である。こういった事例は、政治(の世界)ではどこにありふれている。政治的指導者の大部分は、自分は利他的願望のために行動していると多くの人々を信じ込ませて、その地位を得ている。そのような信念も、輿論の影響下では一層容易に受け入れられることは、よく理解されている。フランスの第二帝政(第二共和政)の執行、そして戦争(注: オリンピックの招致、国会議員団による靖国参拝、マスコミによる集団リンチ、仮想敵国による国土侵略の恐怖、その他)と、疫病を巡って興奮が高まる。不合理を唱導する者たちは、どうやら、大衆を興奮状態においておいて、自分たちと都合のよいように彼らにたまたますつと成り果てていく、と思っているようである。私がこのようなやり方を好まないことが、恐らく、人々に私が不当に合理的であると書かれているようである。</p>			
★テキストに脱落	<p>A4-09</p>	<p>There appears to be in human nature an impulse to demand conformity even when it serves no social purpose. This is especially notable in schoolboys. In a school where everybody wears a hat, a boy will be kicked if he goes bare-headed; while, in a school where nobody wears a hat, he will be kicked if he does not go bare-headed.</p> <p>Not one boy in a thousand would think that an eccentric in the matter of hats is harmless. Civilized people gradually grow out of this blind impulse towards enforced uniformity, but many never become civilized, and retain through life the crude, persecuting instincts of the schoolboy. If there is to be political liberty, this feeling must not be embodied in legislation. It was only this feeling which caused hostility to the Mormons. It was not a belief in the conventional moral code, since no one objected to polygamy in Asia and Africa. I should not like it to be thought that I favour polygamy, but the true test of a lover of freedom comes only in relation to things that he dislikes. To tolerate what you like is easy. It is toleration of what you dislike that characterizes the liberal attitude.</p> <p>From: What is Freedom? (1952 ) http://russell-j.com/cool/0984_what_is_freedom.htm</p>	<p>人間性のある社会的な目的に役立つものがまったくなくない場合でさえ、画一性を要求する衝動があるように思われます。特に、この衝動は、小中学生の間に顕著です。誰もが帽子をかぶっている学校において、もし帽子をかぶらずに登校すれば、その生徒はいじめられます。ところが一方、誰もが無帽で登校する学校では、独り無帽で登校する生徒はいじめられます。幸福の問題で、強く変わっていることは、無害だと考える生徒はほとんど皆無でしょう。文明化された人々の間では、画一性を強制したいというこの盲目的衝動は、次第に弱まっています。しかし、多くの( )は、決して文明化されず生涯、小中学生の持つ、相対的な本能を保持し続けます。もし政治的自由が存在するならば、この迫害したいという感情を、法律のなかに具現化してはいけません。モルモン教徒(注: 一夫多妻主義で有名であったが、今では違つたこと。池上彰によるモルモン教徒解説)に対し敵愾心を抱かせたのは、ほかならぬ、この感情です。それは、伝統的な道徳律のなかの一つの信条ではありませんでした。なぜなら(米国人は同国人に対してはそのような感情を抱いても)アジアやアフリカにおける一夫多妻に対しては、(米国人は)誰も反対しなかったからです。(注: このあたり、牧野氏力は誤訳している)</p> <p>私は自分が一夫多妻制に賛成していると思われたくありません。しかし、自由の愛好者であるかどうか調べる正真正正のテストは、その人が嫌う物事に對してその人が示す態度との関係を見ることにあります。自分の好きなことに対して寛容であることは容易です。自由主義的な態度を特徴づけるものは、自分の嫌う物事に對して寛容であることです。</p>	<p>(松下注: この講演が収録されている Fact and Fiction (George Allen &amp; Unwin ed., 1961 = 1st ed.) では、以下のように途中の文章が脱落してしまっている。また、現在最も多くラッセルの著書を出している Routledge 版の2009年刊行のものも、アレン版をそのまま引き継いでおり、要注意。因みに、Google eBooks で schoolboys をキーワードにして検索すると、オリジナル版である Batchworth Press ed. (1952) - 32pp. を脱落がないものもこの文章を確認できる。[...] notable in schoolboys. In a school where nobody wears a hat, a boy will be kicked if he does not go bare-headed. Not one boy...]</p>		
	<p>A4-10</p>	<p>To prevent crime there are therefore two requisites : one is to make crime contrary to self-interest, and this is a matter for the criminal law and the police ; the other is to give men that degree of self-control and sound judgement which will enable them to act in accordance with their own interests - this is a matter for the psychologist. But in neither department has the moralist anything useful to contribute.</p>	<p>それゆえ、犯罪防止には、2つの必要不可欠な条件があることが、第一、犯罪を自己利益に反するものにすることであり、これは刑法と警察に依る事柄(問題)である。第2の条件は、自分の利益を考えた上で行動がとれるような自制心と十分な判断力を各自に持たせることであり、これは心理学者が係る事柄(問題)である。しかし、いずれの場合も、道徳家の出る幕などはどこにもない。</p> <p>出典: ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「犯罪者は一般人より悪人か?」 http://russell-j.com/CRIMINAL.HTM</p>	<p>単純に何でも厳罰にすればよいと考える人が少なくありません。厳罰では被害者の立場が強調され、被害者の家族が裁判に参加する事例が出てきました。犯人を厳罰にしたいというのは、被害者の家族であれば自然な感情ですが、(陪審員、裁判官)腐女狩りようになってしまつては危険です。元弁護士の実告のように、母子殺人事件の犯人に法律の規定以上に厳罰を与えるべきといった発言をするよ うではこまりません。</p>		
★	<p>A4-11</p>	<p>The habit of work has become ingrained in the greater part of the human species and not only the habit of work but, what is worse, the habit of looking for ways by which work can be made more productive. Nobody has thought for a moment that it might be a good thing if somebody could enjoy the produce of human labour. Our morality is ascetic, which makes us regard work as a virtue; it follows that production is good and consumption is bad. This ascetic twist has produced a world system in which half the world is poor because it produces too much and the other half because it consumes too little.</p>	<p>労働の習慣は人類の大部分に深く染みこんでおり、労働習慣を一層上げの方法を探求し続ける習慣も同様に人類の大部分に深く染みこんでいる。労働の成果を減らしたからさぞ素晴らしいだろう、と一瞬でも考える人はいなかった。われわれの道徳は禁欲的なものであり、労働を美德と見なしている。その結果、生産は善であり、消費は悪となる。この禁欲主義的偏見が、世界(人類)の半数は過剰生産のために貧しく、他の世界(人類)の半数は過剰消費のために貧しくなっている、今の世界の制度(体制)を生み出した。</p> <p>出典: ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「世界は発狂する?」 http://russell-j.com/GO-MAD.HTM</p>	<p>支配・統治・管理する者は、配下にある者が余暇は最小限にして働き続けることを好ましく思うという傾向がある。組織の維持・発展が第一であり、愛国心教育や道徳教育の教科書も、国民一人ひとりの幸福よりも、国家や社会の発展に力をそそぐ、従順な国民の育成を目指したのと言える。</p>		

★	○	<p>A4-12</p> <p>The subject of suicide is apt to be considered not on its merits but in relation to what is called the sacredness of human life. I find, however, that it is illegal to take this phrase seriously, since those who do so are compelled to condemn war. So long as war remains part of our institutions it is mere hypocrisy to invoke the sacredness of human life against those unfortunate whose misery leads them to attempt suicide.</p>	<p>我々は自殺の問題をその可否よりも、人命の尊厳に関連づけて考える傾向がある。しかし、この「人命尊重」という言葉を真面目に考えるのは（ルールを）だと世間では、なぜなら人命の尊重を真剣に考える人は、戦争を非難しなければならぬことになるからである。今の世の中で戦争が我々の制度の一部になっている限り、惨めな人生を送り自殺までも企てなければならぬ不幸な人たちに對して「人命尊重を引き合いにする」ことは、全くの偽善である。出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「自殺は違法か？」 <a href="http://russell-j.com/ILLEGAL.HTM">http://russell-j.com/ILLEGAL.HTM</a></p>		<p>自殺についての考え方・感じ方は、国・地域や文化によりかなり異なっています。日本社会においては、自殺の理由がなんであれ、自殺した（自殺をせざるを得ないほどひどい状況に置かれていた）人間に対して憐憫の情を覚える人が多いですが、欧米特に米国においては、大変事情が異なっています。自殺者や自殺未遂者に対する目は厳しすぎると思うかもしれません。西洋社会（特にキリスト教社会）において、ラッセルのような見方をする人は多くないようです。人命の尊重を最重要だと主張し、自殺を潔しとしない人や社会は（大量死をもたらす）戦争や戦争の危険性を増大させる軍拡競争や武器の売買（例：現政権による武器輸出制限の緩和の動き）等に対しては益害を論じなくてはならないはずではないでしょうか。そうでない（経済的利益追求のためには支持するよりほかに）と見て見ぬふりをする」としたら、ラッセルが言うように、その人や社会は「偽善的である」と言わざるを得ません。</p>	
	○	<p>A4-13</p> <p>As a matter of fact the sense of sin, so far from being a cause of a good life, is quite the reverse. It makes a man unhappy and it makes him feel inferior. Being unhappy, he is likely to make claims upon other people which are excessive and which prevent him from enjoying happiness in personal relations. Feeling inferior, he will have a grudge against those who seem superior.</p>	<p>實際のところ、罪の意識は、良い人生の原因（源）になるどころか、まったくその逆である。罪の意識が、不幸にし、劣等感をいだかせる。自分が不幸なので、他人に対し過大な要求をしがちであり、人間関係において幸福を享受することをさまたげる。劣等感を持っているので、自分よりもすぐれていると思われる人たちに對して恨みを持つようになる。出典：ラッセル『幸福論』第7章「罪の意識」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA17-080.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA17-080.HTM</a></p>	<p>言うまでもなく、犯罪をおがした場合でも「罪の意識」を持つ必要はないと言っているわけではありません。ここで言っているのは、次のラッセルの説明のようにキリスト教における「原罪」や、不合理な社会道徳が醸成するような「罪の意識」のことを言っています。「その罪の意識が、合理的な道徳が非難するようなある種の行為によって引き起こされたものでない限り、それは（罪の意識を持つことは）、1つの病いであり、1つの罰であると考えなければなりません。人間には道徳が不要だと言っているのではない。人間には迷信に基づくような道徳は必要ないと言っているにすぎないのであり、両者（合理的な道徳と迷信に基づくような道徳）は、非常に異なったものである。」</p>		
	○	<p>A4-14</p> <p>To find ways of minimizing hatred and envy is no doubt part of the function of a rational psychology. But it is a mistake to suppose that in minimizing these passions we shall at the same time diminish the strength of those passions which reason does not condemn. In passionate love, in parental affection, in friendship, in benevolence, in devotion to science or art, there is nothing that reason should wish to diminish. The rational man, when he feels any or all of these emotions, will be glad that he feels them and will do nothing to lessen their strength, for all these emotions are parts of the good life, the life, that is, that makes for happiness both in oneself and in others.</p>	<p>憎悪や「ねたみ」を最小にする方法を発見することは、疑いもなく、理性的な心理（状態）の働きの一部である。しかし、（理性によって）これらの情熱を最小にする際、同時に、理性が非難しない情熱の力で弱めてしまおうのではないかと想像するのは誤りである。情熱的な恋愛、親としての愛情、友情、慈悲心、科学や芸術に対する献身などの中には、理性が滅しみたいと思うものは何ひとつない。理性的な人間は、これらの情緒のいずれか一つまたは全部を感ずるとき、そのことを善いとすることであり、そうした情緒の強さを減らすようなことは何もしないだろう。なぜなら、これらの感情は全て、善い生活、すなわち、自分自身及び他人の、双方の幸福を促進する生活の一部であるからである。出典：ラッセル『幸福論』第7章「罪の意識」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA17-090.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA17-090.HTM</a></p>		<p>ラッセルは合理的・理性的でありすぎるので、嫉妬などの人間的な感情を理解できない冷たい人間だと決めつけ人が時々います。ラッセル『幸福論』の「嫉妬」の章に對しても同様の批判が時々なされます。ラッセルの著書をいくつか読めば、またラッセルの生涯を知れば、これは誤解であり、決めつけであることがわかります。ラッセルは第一次世界大戦の時、反戦運動のために約5ヶ月間、入獄します。その時に愛人のゴレット、オニールが別の男性と恋愛をしていることを知り、嫉妬心をどうしてもおさえることができませんでした。しかし、嫉妬心には屈服すべき長所はほとんどないことを理解・実感し、克服します。ラッセルの『幸福論』の原題は The Conquest of Happiness (1930)です。幸福というものは「棚からぼた餅」のように、何も努力しなくても空から降ってくるものではなく、努力して勝ち取るもの（獲得するもの）だという意味がこめられています。従って、誤解を与えないためにも、邦訳書にもサブタイトルをいれたほうがよいと思われまます。この直前に次のように書かれています。</p>	
		<p>A4-15</p> <p>In every kind of trouble what is wanted is not emotional cheerfulness but constructive thinking. This fact is gradually, being borne in upon the world by the world-wide depression, and in this I perceive the only basis for optimism that our present troubles afford. These troubles can be cured by constructive thinking, not by ballyhoo.</p>	<p>いかなる種類の問題でも、解決に必要なのは、情緒的な陽気さではなく、建設的な思考である。この事実を、世界恐慌(注：1929年の世界大恐慌のこと)を経験したことによって、世界の人々が徐々に確信しつづつある。そうして、この事実の中に、我々が現在抱える諸問題に對して認めることができる楽観主義の唯一の基礎を、私は認める。現在の諸問題を解決するのは、建設的思考によつてであり、内容のない囃り物入りの宣伝(ballyhoo)によつてではない。出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「楽観主義について」 <a href="http://russell-j.com/OPTIMISM.HTM">http://russell-j.com/OPTIMISM.HTM</a></p>	<p>過去2年間（注：1929年世界大恐慌発生後の2年間の経済恐慌について楽観的なことを言ってきた人たちの大部分は、（我々の資格のある）医者ではなく、（そのうちよくなるさと楽観に言っていた無責任な）陽気な友人の役割を果たしてきた。そうして、彼らのこの陽気さが、肌立た人々の幸福に大きく貢献したかどうか、はなはだ疑問である。</p>	<p>1929年の世界大恐慌は、アメリカ型の資本主義の破綻によつて起こったものです。2008年9月にはリーマンショックがあり、世界中に大きな影響を与えました。今後ともヨーロッパにおけるこの国が財政破綻したり中国のバブルがはじけたり、というように、同じようなことがおきそうです。アベノミクスもうまくいかなかったり、うまくいった場合でもバブルが再来するようでは、経済格差が拡大したという結果だけ残るかもしれません。富裕層だけが以前より豊かになつて、経済格差が以前より拡大するのであれば、（某首相は成功あるいはトントんと考えるかもしれないですが）国民全体の繁栄をはかるべき政府としては失敗と考えるしかありません。</p>	<p>補足説明は不要と思われる。結局いろいろな視点でものを見る必要がある。一方面的な視点でものをみたり（納得したり）してはいけないということですね。</p>
		<p>A4-16</p> <p>If you want to understand what a man feels, you must learn to put yourself inside his skin and to see the world from his point of view. But if you want to know what he would do, you will find it wiser to regard him quite externally, as an astronomer regards the moon or the planet Jupiter. The difference between the two points of view comes out most clearly where the acts of nations are concerned. Take, for example, the behaviour of the British in India. To most English people it seems that Anglo-Indians have been struggling heroically to spread the light of civilisation in the face of obscurantism, intolerance and superstition. To almost everybody who is not British, the British appear in India as brutal tyrants, enjoying power and extracting tribute. If you wish to know how an Anglo-Indian feels, you must adopt the British point of view; whereas if you want to know what he does, you must adopt the point of view of the rest of the world. The same thing may be said of the doings of Americans in Haiti and Central America, and of imperialist doings generally.</p>	<p>他人がどのように感じるかを知りたいと思えば、我々はその人の立場に立つて、その人のものの見方、世界を見るようにしなければならぬ。だが他人が何をやるかを知りたいれば、我々はちょうど天文学者が月や木星を観測するように、その人をまったく外側から見る方が賢明だということがわかるだろう。この2つの視点の違いは、国家の行動に関する場合、非常にはっきりする。たとえば、インド（注：英国統治時代の）におけるイギリス人の行動を例にしてみよう。たいていのイギリス人には、インド在住のイギリス人は、蒙昧主義、不寛容、迷信に異つ向から対抗して、勇ましく、文明の光があたることを広げようとして奮闘している姿に見える。（これに対し）イギリス人でないほとんどの人々には、インドにいるイギリス人は、権力を振るい、貢ぎ物を強引にとりたてる残忍な専制君主に映る。インド在住のイギリス人がどのように感じているかを知りたいれば、イギリスの視点（立場）に立たなければならぬ。同様のことが、ハイチや中央アメリカにおけるアメリカ人の行動や、帝国主義者が行っていること一般について言えるだろう。出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「他者の視点で見ること」 <a href="http://russell-j.com/AS-O-SEE.HTM">http://russell-j.com/AS-O-SEE.HTM</a></p>	<p>帝国主義時代には、たとえばフランスがベトナムを植民地にしたやり方、現地人をキリスト教化するためにまず宣教師を送り、次にベトナム在住の宣教師たちの命（某首相がいう国民の生命）を守るために軍隊（ここでは海軍）を派遣するというステップをとりました。（参考） <a href="http://russell-j.com/cool61T-0001.HTM">http://russell-j.com/cool61T-0001.HTM</a></p>	<p>帝国主義時代には、米国もソ連も、英国も、日本も、全ての強国が同じようなことをしました。第二次世界大戦後も、石油利権などのエネルギー資源の利益を守るためにアメリカ始め各国が軍隊（武力）を中東その他に送っていました。最近では、かつての強国のやり方をまねて中国も民間企業の権利（利益）を断固として守るといって、護衛艦などを南シナ海ほかに送っています。昨日、ベトナムで中国人がベトナム人暴徒により殺されました。国外でのことなので、「中国国民の生命を守る」という名目で軍隊を送ることまではいかならうと思われまますが、過去には大国がそのようなことをよくやってきました。</p>	<p>某首相も、憲法解釈の変更によつて、集団的自衛権を認めることによる、自衛権を軍隊らしく、指揮できるようにしたいとしています。が、盟約の三原則を縛られる環境をつくり、世界中の同盟国や友好国に日本製の武器を売り、経済の再生の一助にしたいという下心があるかも知れません。そうではなく、あくまでも、「日本国民の生命を守るため」という尊い志が言っていないだけで、言うのもあれ、小悪魔的では、厳密にいうならば、高邁な政治家の「言葉は、司令官としてはなく、最前線で一兵卒として、国民のために戦うという（自発的？）ルールで対処してもらいたいものです。</p>

	A4-17	Men have set a standard of intelligence and have instinctively set it to suit themselves; they have created a mechanical civilisation which largely ignores human values. Women left to themselves would, I believe, never have invented machines. But if they had been able freely to contribute to the sum total of civilisation, they would not have forgotten to preserve what is valuable in human life and would not have been led astray, as men have been, by a blind worship of mechanical ingenuity.	男性は知能の基準(尺度)を決めたが、彼らはそれを本能的に男性に都合の良いように定めた。即ち男たちは、人間の価値を大體無視する機械文明を創造した。女性は、もし自由にさせていたら、決して機械を発明しなかつたろうと私は思う。しかし女性が、人類の文明全体に対して自由に貢献できる立場にあつたならば、女性は人間の生活の中の価値ある部分を保持することを忘れたらなかつたであらうし、世のようになんか機械を發明する才能を盲目的に崇拜することによって、道を誤るようなことはなかつたであらう。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「少年と少女の知能の差異」 <a href="http://russell-j.com/BOY-GAL.HTM">http://russell-j.com/BOY-GAL.HTM</a>		「正規」労働者については、労働環境はかなり改善されてきました。日本においては、高度成長期に、男性が家庭を犠牲にして、夜遅くまで働くことは普通と考えられていました(産婦も労働者の了解なく勝手にカットされていました。また超勤時間を過少申告するための書類さえもつくらされてきました)。従って、女性は、男性と同じように業績をあげて昇進することは、例外者を除けば、ほぼ不可能です。最近では、ワーク・ライフ・バランスやワーク・シェアリングの考え方が普及しつつあり、しだいに働きやすくなってきました。しかし、その反面(経済界の要求により、また政府も同調するようになり、)非正規労働者が爆発的に増え、多くの人が劣悪な状態に置かれるようになりまし。その結果、「正規」労働者にとっては労働環境が改善され、働きやすくなりましたが、「非正規」労働者になってしまった多くの人は、労働環境が悪化し、生活が苦しくなりました。よく平均賃金など、「平均」の数字の推移によって、事務が改善しつつあるかそうでないかを示せることが少なくないですが、それは数字のマジックであり、ダメなものはよくないようには見えません。たとえば、みなさんご存知のように、アメリカでは、国民の1.2%が米国のGDPの40%を得ている実態が報告されていますが、たとえ平均所得が少し増えたとし、経済格差が大幅に拡大するような社会はよい社会とは言えません。従って、あらゆるルールは、強いもの(富んだもの)や男性などに都合のよいものであってはならず、できるだけ多くの人に幸福をもたらすようなものにする必要があります。
	A4-18	The only ultimate cure for this evil (social persecution) is, however, an increase of tolerance on the part of the public. The best way to increase tolerance is to multiply the number of individuals who enjoy real happiness and do not therefore find their chief pleasure in the infliction of pain upon their fellow-men.	けれども、この善悪(マスコミによる特定の個人に対する集団リンチ)に対する究極的な治療法は、唯一、一般大衆側の寛容さを増大させることであり、寛容さを増す最善の方法は、真の幸福を享受し、仲間の人に苦痛を与えることを主な楽しみとし、個人の数を増やすことである。 出典：ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA19-070.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA19-070.HTM</a>	マスコミが特定の個人やグループを魔女狩りのごとくたたくことができるのは一定の世論の支持があるからであり、マスコミもその心を汲み取り、正義の味方であるかのごとく、過剰な××たきには正義を告げることによる利益のほうが大きいのでセビクともしない。 不幸な人々がたくさんいるかぎりこういって現象はなかなかなくなる。結局、できるだけ差別や格差のない社会をつくっていく努力が重要ということになる。 しかし、現実には、経済成長の美名のもとに、格差を拡大させる諸政策が推進され・・・。 [n.0084] 軽信と安心感 世の中は分らないことばかりであり、不安に満ちている。そのような環境では安住できないので、人は「軽信」に陥り易い。人によって「軽信の対象」は種々様々である。「自由人」とは金持ちで気ままな生活のできる人と言つてではなく、そのような軽信に陥らない、「精神の自由」を持った人間を指す。しかし、ラッセルが言うように、自由な生活は、何らかの信条(教義)に包まれた生活のように暖かく、快適で、愛想のよいものではない。あなたはどこまで道徳を信じているか？	
★	○	A4-19 (A3から移動したもの) All sorts of intellectual systems - Christianity, Socialism, Patriotism, etc. - are ready, like orphan asylums, to give safety in return for servitude. A free mental life cannot be as warm and comfortable and sociable as a life enveloped in a creed: only a creed can give the feeling of a cosy fireside while the winter storms are raging without. This brings us to a somewhat difficult question: to what extent should the good life be emancipated from the herd? (23) On Education, especially in early childhood, 1926, chap. 2 The Aims of Education <a href="http://russell-j.com/beginner/OE02-210.HTM">http://russell-j.com/beginner/OE02-210.HTM</a>	あらゆる種類の知的体系 - (たとえば)キリスト教、社会主義、愛国主義など - は、孤児院のように、隷属の返礼に安心感を与えようとする。自由な精神生活は、何らかの信条(教義)に包まれた生活のように、暖かく、快適で、愛想のよいものではない。外で冬の嵐が吹きまさんでいる間は、信条のみが、炉火のそばに居る感情を与えてくれる。このことは、私たちに、よい生活のためにどの程度まで集団から解放されるべきかというや難しい問題をもちたす。		
★	○	A4-20 (A3から移動したもの) Having renounced pleasure for himself, the ascetic saint renounces it for others also, which is easier. Envy persists underground, and leads him to the view that suffering is ennobling, and may therefore be legitimately inflicted. Hence arises a complete inversion of values: what is good is thought bad, and what is bad is thought good. The source of all the harm is that the good life has been sought in obedience to a negative imperative, not in broadening and developing natural desires and instincts. (23) On Education, especially in early childhood, 1926. <a href="http://russell-j.com/beginner/OE02-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/OE02-150.HTM</a>	禁欲主義の聖者は、自分自身の快楽を放棄(否定)したあとで、他人の快楽も否定する。(そして)他人の快楽の否定は、自分の快楽の否定よりももっと容易である。心の奥底には(他人に対する)「ねたみ」がずっと居座り続けており、そのねたみにこそめされて「苦しみ」は人を高貴にするものであり、それゆえに苦しみを受けたいと考えるようになる。ここから、価値の完全な逆転が生じる。(即ち)善いものは悪いとされ、悪いものは善いとされる。これらの善悪は全て、善い生活を探求するにあたって、否定的な命令に従い、自然な欲望や本能を拡大伸張させなかつたことに原因がある。	禁欲主義にひそめねたれた複雑な感情。自分に敵しすぎる人は、他人に対して、往々にして非寛容的で、屈折した情緒を抱き易い。古今東西の宗教家、生徒指導に燃える教師、多くの愛国主義者達・・・？	
★	○	A4-21 Snobbery becomes a serious evil when it leads to false standards of value and to tolerance of social inequality. The man who is respected merely for being the son of his father loses one of the normal incentives to useful effort. He is likely to develop views of life which attach undue importance to the accident of birth and to think that by merely existing he does enough to command respect. He believes himself rather better than other men and therefore becomes rather worse. All distinctions not based upon intrinsic merit have this bad effect upon character and on this ground, if on no other, deserve to be abolished. [From: On snobbery (written in Dec. 30, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) <a href="http://russell-j.com/SNOB.HTM">http://russell-j.com/SNOB.HTM</a>	家柄崇拜は、それが誤った価値基準や社会的不平等の容認に結びつく時、重大な悪となる。父親の七光りに特別扱いされる人間は、有益な努力をしようとする正常な動機を失なってしまう。そのような人間は名家に偶然生れたという事実に、不当な重要性を与える。生誕を身につけがちであり、また、自分が存在するだけで周囲の尊敬を受ける資格があると考える。自分は他の人間よりもかなり優れていると信じて、彼らに逆にならざるを得ない。このようになる。本人に固有な長所にもとづかない差別待遇は、全て人間性に悪影響を与えるために、他に理由がなくてこの理由一つだけしかないとしても、廃止すべきものである。	[n.101: 家柄崇拜について] 2世議員の増加や政治的、経済的あるいは社会的に成功すると、次は階級によって差をつけたがる権力エリートたちによくみられる俗物根性(家柄崇拜は俗物根性と同じ問題)、日本でも家柄崇拜流行の兆し? 少しずつ貴族の差が拡大? 天皇(制)の意味合い、人間を序列化する叙位叙勲制度(天皇が最高地位、国民の大部分は無冠)・・・ 英国屈指の名門に生まれたラッセル「伯爵」ゆえにより説得力を持つ発言(イギリス国王)を華頭とする「家柄崇拜」批判	家柄ではなくても(あるいは広い意味での家柄とも言えますが)「親の七光り」の恩恵を被っている人間は政治の世界でもかなりあります。安部首相が自民党総裁に選ばれた時の自民党総裁選挙を記憶されているでしょうか? 自民党総候補が誰か入立候補しましたが、その5人ともが全て二世議員でした。これは大変なことであり、危機感を持つべきことですが、どれだけの人がそう思ったのでしょうか? たまたま複数、二世議員だったというだけではなく、全員二世議員でした。大きな組織の支那を受けるか、二世議員が、ダラントでなければ政治家になれない状況を皆さんどう思われるのでしょうか?
○	○	A4-22 There is no impersonal reason for regarding the interests of human beings as more important than those of animals. We can destroy animals more easily than they can destroy us; that is the only solid basis of our claim to superiority. We value art and science and literature, because these are things in which we excel. But what prizes might value spouting, and donkeys might maintain that a good brass is more exquisite than the music of Bach. We cannot prove them except by the exercise of arbitrary power. All ethical systems, in the last analysis, depend upon weapons of war. [From: If animals could talk (written in Sept. 14, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) <a href="http://russell-j.com/ANIMALS.HTM">http://russell-j.com/ANIMALS.HTM</a>	人間の利益が動物の利益より格段に重要だとみなすに足る客観的理由は何一つない。動物が我々を滅ぼすより我々も動物を滅ぼす方が我々人間の優越性の唯一の現実的根拠である。我々が芸術や科学や文学の価値を認める理由は、それらが我々人間が得意とする部門だからである。しかし、鰐は鰐の舌の味よりも自分の素敵いななきの方が価値が大きいと思うかも知れない。我々が彼らの言いつを誤り(と認)しては、恣意的権力の行使によるものである。すべての倫理体系は結局、戦闘用の武器に依存している。	広い視野でものを考える大切さと同時に「等身大」でものを考える重要性が強く指摘されます。どちらも大切なことはありますが、どちらの場合も人間中心主義に陥ることが多々あります。(人間に似せた)「神」を安易に持ち出して一挙に解決しようとしたりせずに、(解決を急がずに)問答の意思について自分なりに深く考えてみることは非常に重要なことと思われま	
★	○	A4-23 The reason for the universal interest in sensational crime is a little obscure. I think it is made up of two parts: one is the pleasure of the hunt, and the other the imaginative release in the minds of those who would like to commit murders but dare not. I am afraid the pleasure of the hunt is a stronger element in human nature than most people are willing to recognise: it plays its part in all popular outbursts of moral indignation. Among the head-hunters of Borneo it is indulged without the need of any moral claptrap, but civilised people cannot adequately enjoy the indulgence of their baser passions until they have cloaked them in a garment of lofty ethical sentiments. When people let loose sup on a murderer the savage impulses of the head-hunter, they feel neither savage nor wicked but believe themselves to be causes upholders of virtue and good citizenship. The other motive for interest in crime, namely that of sympathy for the criminal, has to remain more secret and ... [From: Interest in crime (written in Dec. 21, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) <a href="http://russell-j.com/CRIME-1.HTM">http://russell-j.com/CRIME-1.HTM</a>	センセーショナルな犯罪への世間の一般の興味の理由が何かが、あまりはっきりしないが、私はそれが2つの要素から成ると思う。1つは狩猟(ハント)の喜びであり、もう1つは殺人を犯したいがあえて為しえない人々の、心の中における望みの発露である。人間の心中の狩猟(ハント)の快楽は、普通に人が承認を原とするほど強力な要素であると私は思う。現にそれは民衆による道徳的憤慨の発散の場合に、必ず一役を買っている。ボルネオの首狩り族の間では、この行動は何ら道徳的ハッタリする必要なく承認されるに反して、文明国民は自分の低俗な感情の発散を、高貴な倫理感情の衣を着るには満足に享受しえない。殺人者に対してならば、首狩り族と同じ野蛮な衝動を発散させても、民衆はそれを野蛮とも邪悪とも意識せず、逆に自分を徳性と善良な市民意識の持主だと信ずることができ、犯罪者も、その衝動も、一つの衝動として、犯人の共感の動機は、前者よりも一層秘密で無意識なものであるが・・・。	このエッセイに書かれていることは、犯罪心理学、群衆心理学の良い題材です。ライブドア事件主役のホリエモン(堀江貴文)、事件発露前にホリエモンを持ち上げた世間や政治家やマスコミ、犯罪現場直後のホリエモンの後援、ホリエモンを罪人としてホリエモンを糾弾する人々やマスコミの反響のなさ・・・。	



4-**	<p>It appeared to me obvious that the happiness of mankind should be the aim of all action, and I discovered to my surprise that there were those who thought otherwise. Belief in happiness, I found, was called Utilitarianism, and was merely one among a number of ethical theories. I adhered to it after this discovery, and was rash enough to tell grandmother that I was a utilitarian. She covered me with ridicule, and ever after submitted ethical conundrums to me, telling me to solve them on utilitarian principles. I perceived that she had no good grounds for rejecting Utilitarianism, and that her opposition to it was not intellectually respectable. When she discovered that I was interested in metaphysics, she told me that the whole subject could be summed up in the saying, 'What is mind? no matter; what is matter? never mind.' At the fifteenth or sixteenth repetition of this remark, it ceased to amuse me, but my grandmother's animus against metaphysics continued to the end of her life.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 2: Adolescence http://russell-j.com/beginner/AB12-130.HTM</p>	<p>私には、人類の幸福はあらゆる行動の目的でなければならぬということ、これは、明らかなことであると思われたが驚いたことに、そのような考えない人たちがいることを発見した。幸福を信ずる立場は、功利主義と呼ばれる。多数の倫理学説のうちの一つにすぎないこともわかった。このことを発見してから、私はこの理論に忠実に従い、性善にも、自分は功利主義者であると祖母に語った。祖母は私をひどくあざむき、その後ずっと、ever after = ever afterwards)、倫理学上の難問を出し続け、それを功利主義の原理に立つて解決するようになつた。私は、祖母は功利主義を拒否する十分な根拠をもつておらず、祖母の功利主義に対する反対は「知的な不寛容」であるというものである。形而上学に興味をもっているということに祖母が発見した時、彼女は、形而上学の問題の全ては次のように要約できる、と私に言った - 「心(精神)とは何か - たいした問題ではない(物の数に入らない)。物質とは何か、一気にしてはいけぬ」この言葉を15,16回くりかえしているうち、面白くなくなった。しかし形而上学に対する祖母の敵意は、その生涯を終えるまで続いた。</p>	<p>(松下注: 日高氏は What is matter? を「問題は何か」と訳されている。ここは言つてもなくなく、「精神」と物質)を対比させており、しかも 'What is mind?' に対しては 'no matter', 'What is matter?' に対しては 'never mind' と変わった言い方をしている。)</p>
A4-**	<p>Mrs. Whitehead was at this time becoming more and more of an invalid, and used to have intense pain owing to heart trouble. Whitehead and Alys and I were all filled with anxiety about her. He was not only deeply devoted to her but also very dependent upon her, and it seemed doubtful whether he would ever achieve any more good work if she were to die. One day, Gilbert Murray came to Newnham to read part of his translation of The Hippolytus, then unpublished, Alys and I went to hear him, and I was profoundly stirred by the beauty of the poetry. ( See letter to Gilbert Murray and his reply, p.159. Also the subsequent letters relating to the Bacchae ) When we came home, we found Mrs. Whitehead undergoing an unusually severe bout of pain. She seemed cut off from everyone and everything by walls of agony, and the sense of the solitude of each human soul suddenly overwhelmed me. Ever since my marriage, my emotional life had been calm and superficial. I had forgotten all the deeper issues, and had been content with flippancy cleverness. Suddenly the ground seemed to give way beneath me, and I found myself in quite another region. Within five minutes I went through some such reflections as the following: the loneliness of the human soul is unendurable; nothing can penetrate it except the highest intensity of the sort of love that religious teachers have preached; whatever does not spring from this motive is harmful, or at best useless; it follows that war is wrong, that a public school education is abominable, that the use of force is to be deprecated, and that in human relations one should penetrate to the core of loneliness in each person and speak to that.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6, Principia Mathematica, 1967 http://russell-j.com/beginner/AB16-030.HTM</p>	<p>ホワイトヘッド夫人(Evelyn Whitehead)は、当時したいに病弱になりつつあり、心臓病のために常に強い痛みを感じていた。ホワイトヘッドとアリスと私は、3人も、彼女のことが心配でならなかった。ホワイトヘッドは、妻を深く熱愛していただけでなく、非常に彼女を頼りとしていた。それさえ、もし彼女が死ぬようなことがあれば、彼が今後、良い仕事を成すことができなくなるがどうなるか思われた。ある日、ギルバート・マレー(Gilbert Murray, 1866-1957)が、当時まだ出版されていなかった「エウリピデス作の『ヒッポリュトス(Hippolytus)』」(注: Euripides, B.C. 485?-406? 古代ギリシアの三大悲劇詩人のひとり)の(マレーによる)翻訳の一部を、(マレー)講義するために、(ケンブリッジの)ニューナム・コレッジ(Newnham)やつて来た。アリスと私は、彼の講義を聴講にいった。そして私は、その詩の美しさに深く感動した。私たちが夫婦が離婚した時、ホワイトヘッド夫人は、これにたいして、突然に言、人間の魂の孤独は耐えられないものではない、また、宗教的導引がたいような魂の痛みの最も最高度にして、この愛の泉からわき出たものでなければいかなるものも有害か、よくても無用である。その当然の結果として、戦争は間違っており、(英国の)パブリック・スクール式の教育は受けれないものである、暴力の行使は非難されるべきである。また、人間関係において、人は、一人一人の人間の内的な孤独の核心にふれあうべきであり、語りかけるべきである。」</p>	
A4/C1-01	<p>I was, in fact, unusually prone to a sense of sin. When asked what was my favourite hymn, I answered: 'Weary of earth and laden with my sin.' On one occasion when my grandmother read the parable of the Prodigal Son at family prayers, I said to her afterwards: 'I know why you read that because I broke my jug.' She used to relate the anecdote in after years with amusement, not realizing that she was responsible for a morbidity which had produced tragic results in her own children.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967 http://russell-j.com/beginner/AB11-160A.HTM</p>	<p>事実私は、異常と言えるほど、罪の意識にとらわれがちであった。お気に入りの賛美歌は何かと問われたら、私はこう答えた。『世に倦(う)み、罪を背負いいて』ある時、家族祈禱の時、祖母がルカ福音の改心した放蕩息子の子の寓話を読みあげたので、その後私は祖母に次のように言った。『僕は、おばあさんがどうしてそれを讀んだかわかっているよ。僕が酒差しを壊したからでしょう。』後年、祖母はよくその逸話を楽しそうに語った。しかし自分自身の子供たちに悲劇的な結果を生み出した(彼女の)不慮なきに對して責任があるということに、祖母は気づいていなかった。</p>	
A4/C1-02	<p>Alongside with my interest in poetry, went an intense interest in religion and philosophy. My grandfather was Anglican, my grandmother was a Scotch Presbyterian, but gradually became a Unitarian. I was taken on alternate Sundays to the (Episcopalian) Parish Church at Petersham and to the Presbyterian Church at Richmond, while at home I was taught the doctrines of Unitarianism. It was these last that I believed until about the age of fifteen. At this age I began a systematic investigation of the supposed rational arguments in favour of fundamental Christian beliefs. I spent endless hours in meditation upon this subject; I could not speak to anybody about it for fear of giving pain. I suffered acutely both from the gradual loss of faith and from the need of silence. I thought that if I ceased to believe in God, freedom and immortality, I should be very unhappy. I found, however, that the reasons given in favour of these dogmas were very unconvincing.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 2, 1967 http://russell-j.com/beginner/AB12-060.HTM</p>	<p>語に対する興味、関心とともに、宗教と哲学に非常に強い興味、関心を持った。祖父は英国国教徒、祖母はスコットランド長老派教会員であったが、2人も次第にユニテリアン(三位一体を認めない一神論者)になっていった(参看: 聖公について)。私は祖母に、私に祖母は、ユニテリアンにある(聖公会の)、私に祖母は、ユニテリアンにある長老教会につれていかれる一方で、さらに家では、ユニテリアンの教義を教えられた。私がほぼ15歳の年頃まで信じ、いたのが、この最後のユニテリアンの教義であった。この15歳の年に私は、基本的(根本的)なキリスト教の信仰(信を)を支持する合理的な論と表わされているものについて、体系的に調査検討することを始めた。私は、この問題について、際限のない時間をかけて理想した。(しかし家族などに)苦痛を与えることを恐れ、このことについては誰にも話すことができなかった。私は、神を造つたという疑問が出てくるからである。」ということを知った。このことについて沈黙を守らなければならない必要性から、激しく苦しんだ。もし神(の存在)と(人間の意志の)自由と(人間の)不滅とを信じなくなったら、とても不幸になるだろうと考えていた。けれども、(検討の結果)こうした教義の根拠(=理由づけ)となているものは、まったく納得できるものでもなかった。けれども、18歳の年、ケンブリッジに進学する直前に、ミルの「自伝」を讀んでいて、彼の父親が彼に、「私を造つたのは誰か」という疑問には答えることができない、なぜならそれに答えるに、神を造つた議論か、という疑問が出てくるからである。」ということを知った。このことについて、この文章を発見した。これによって、私は、「第一原因」の議論を放棄し、無神論者になった(松下注: 精確に言えば、理論的には「不可知論」であるが、美学的には「無神論」)。宗教的疑問が長い長い期間、次第に信仰を失って、と、とりは非難されることになる。この過程が完了した時、驚いたことに、私は、これらの問題全てを扱ったことを非常に嬉しく感じた。</p>	
A4/C1-03	<p>At the age of eighteen, however, shortly before I went to Cambridge, I read Mill's Autobiography, where I found a sentence to the effect that his father taught him that the question 'Who made me?' cannot be answered, since it immediately suggests the further question 'Who made God?' This led me to abandon the 'First Cause' argument, and to become an atheist. Throughout the long period of religious doubt, I had been rendered very unhappy by the gradual loss of belief, but when the process was completed, I found to my surprise that I was quite glad to be done with the whole subject.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 2, 1967 http://russell-j.com/beginner/AB12-060.HTM</p>	<p>けれども、18歳の年、ケンブリッジに進学する直前に、ミルの「自伝」を讀んでいて、彼の父親が彼に、「私を造つたのは誰か」という疑問には答えることができない、なぜならそれに答えるに、神を造つた議論か、という疑問が出てくるからである。」ということを知った。このことについて、この文章を発見した。これによって、私は、「第一原因」の議論を放棄し、無神論者になった(松下注: 精確に言えば、理論的には「不可知論」であるが、美学的には「無神論」)。宗教的疑問が長い長い期間、次第に信仰を失って、と、とりは非難されることになる。この過程が完了した時、驚いたことに、私は、これらの問題全てを扱ったことを非常に嬉しく感じた。</p>	

★	A4/C1-04	<p>Of all that he had written I admired most the terrible story called The Heart of Darkness, in which a rather weak idealist is driven mad by horror of the tropical forest and loneliness among savages. This story expresses, I think, most completely his philosophy of life. I felt, though I do not know whether he would have accepted such an image, that he thought of civilised and morally tolerable human life as a dangerous walk on a thin crust of barely cooled lava which at any moment might break and let the unwary sink into fiery depths. He was very conscious of the various forms of passionate madness to which men are prone, and it was this that gave him such a profound belief in the importance of discipline. His point of view, one might perhaps say, was the antithesis of Rousseau's: 'Man is born in chains, but he can become free.' He becomes free, so I believe Conrad would have said, not by letting loose his impulses, not by being casual and uncontrolled, but by subduing wayward impulse to a dominant purpose.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1 , chap. 7:Cambridge Again, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB17-090.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB17-090.HTM</a></p>	<p>彼(コンラッド)の著作のなかで私が最も賞賛したのは、「闇の奥」と題する恐ろしい小説である。その小説の中で一人のやや或の弱い理想主義者が熱帯(地方)の森の恐怖と野蛮人との間の孤独から発狂する。この小説は、彼の人生観を最も完璧に表現している、と私は思う。彼は、そのようなイメージを受け入れたかどうかはわからないけれども、文明化され、道徳的に何とが罰えられる(？)人生を、何時でも不注意な人間を灼熱の深みに墜下させるかもしれない、かろうじて冷えた溶岩の薄い地殻(皮)の上を歩くような危険なものとして考えた、と私は思った。彼は、人間が陥りやすい情熱的な狂気の多様な形態について非常によく自覚しており、この自覚から彼は「規律(自制)」というものの重要性を深く信じた。彼の物の見方は、ルソーの主張のアンチ・テーゼ(正反対)、「人間は鎖につながれて生まれるが、自由になることができる」とであると、恐ろしく言ってしまう。 (即ち)人間は自由になることができるが、それは人間の衝動を解放することによってでも、きまぐれになやり方によってでもなく、また制約を一切しないといったやり方によってでもなく、きまぐれな本能を支配的な(自分が一番重要だと考える?)目的に従わせることによって人間は自由になることができると、そのように彼は言おうとしたのだ、と私は信じる。</p>			
	A4/C1-05	<p>... Conrad's point of view was far from modern. In the modern world there are two philosophies: the one which stems from Rousseau, and sweeps aside discipline as unnecessary, the other, which finds its fullest expression in totalitarianism, which thinks of discipline as essentially imposed from without. Conrad adhered to the older tradition, that discipline should come from within. He despised indiscipline and hated discipline that was merely external. In all this I found myself closely in agreement with him. At our very first meeting, we talked with continually increasing intimacy. We seemed to sink through layer after layer of what was superficial, till gradually both reached the central fire. It was an experience unlike any other that I have known. We looked into each other's eyes, half appalled and half intoxicated to find ourselves together in such a region. The emotion was as intense as passionate love, and at the same time all-embracing. I came away bewildered, and hardly able to find my way among ordinary affairs.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1 , chap. 7:Cambridge Again, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB17-100.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB17-100.HTM</a></p>	<p>コンラッドが野蛮人の間にあって感じ、厳格な意志の努力でこらえていたこの人間の孤独がコンラッドにとっていかに大きかったか(ということに気づき)私は時々驚いたものである。コンラッドのものの見方は、現代人の物の見方からは、はるかにかけはなれたものであった。現代世界には、2つの哲学がある。1つはルソーから由来するもので、「規律」を不必要なものとして脇に片付けてしまう。もう1つは、- -その完全な表現を全体主義のうちに見ることができ、- -「規律」を外側から課せられる本質的なものと考えられる。コンラッドは「規律」は(人間の心の)内部から来るべきものであるという古い伝統に固執した。彼は「規律」のなさを軽蔑し、また単なる形式的な(外部からの)規律を嫌った。</p> <p>すべてこうした点で私は、自分が彼とほとんど一致していることがわかった。私たちは、まさに最初に出会った時、語り合うほどにしたいに親密度を増していった。私たちは、表面の層をしないで通過し、人とも、中心部の炎に到達したように感じた(注:地球の表面から掘り進み、マグマに達するというイメージか?)。それは、それまで自分が経験したことがないものとも異なるものであった。私たちは、お互い相手の目を見つめ合い、そういう場所(中心の炎の中に)に一線にいる自分たちを見出し、半ばぎょっとし、半ば陶酔した。その感動は、「情熱的な恋愛」のごとく強烈であり、同時に、すべてを包含する(包括的な)ものであった。私は、混乱(当惑)した気持ちでその場(コンラッドの家)を離れ、そうして日常的な事柄(雑事)にはほとんど手がつかなかった。</p>			

A4/C1-06

I think I was mistaken in being surprised that my lectures were liked by the audience. Almost any young academic audience is liberal and likes to hear liberal and even quasi-revolutionary opinions expressed by someone in authority. They like, also any jibe at any received opinion, whether orthodox or not: for instance, I spent some time making fun of Aristotle for saying that the bite of the shrewmouse is dangerous to a horse, especially if the shrewmouse is pregnant. My audience was irreverent and so was I. I think this was the main basis of their liking of my lectures. My unorthodoxy was not confined to politics. My trouble in New York in 1940 on sexual morals had blown over but had left in any audience of mine an expectation that they would hear something that the old and orthodox would consider shocking. There were plenty of such items in my discussion of scientific breeding. Generally, I had the pleasant experience of being applauded on the very same remarks which had caused me to be ostracized on the earlier occasion.

I got into trouble with a passage at the tail end of my last Columbia lecture. In this passage, I said that what the world needs is 'love, Christian love, or compassion'. The result of my use of the word 'Christian' was a deluge of letters from, Free-thinkers deploring my adoption of orthodoxy, and from Christians welcoming me to the fold. When, ten years later, I was welcomed by the Chaplain to Brixton Prison with the words, 'I am glad that you have seen the light', I had to explain to him that this was an entire misconception, that my views were completely unchanged and that what he called seeing the light I should call groping in darkness. I had thought it obvious that, when I spoke of Christian love, I put in the adjective 'Christian' to distinguish it from sexual love, and I should certainly have supposed that the context made this completely clear. I go on to say that,

"If you feel this you have a motive for existence, a guide in action, a reason for courage, and an imperative necessity for intellectual honesty. If you feel this, you have all that anybody should need in the way of religion."

It seems to me totally inexplicable that anybody should think the above words a description of Christianity, especially in view, as some Christians will remember, of how very rarely Christians have shown Christian love. I have done my best to console those who are not Christians for the pain that I unwittingly caused them by a lax use of the suspect adjective. My essays and lectures on the subject have been edited and published in 1957 by Professor Paul Edwards along with an essay by him on my New York difficulties of 1940, under the title Why I am not a Christian. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969] <http://russell-j.com/beginner/AB31-220.HTM>

私の講演（講義）が聴衆の受けがよかったということを感じたことは、間違っていたと思っ。大学の若い聴衆の大部分は自由主義的（リベラル）であり、自由主義者が一時的に革命的にさえ思われる意見が誰か権威ある人間によって述べられるのを聴くことを好むものである。彼らは、また、正統主義的であろうとながらうと、一般の通念として受け入れられているいかなる見解も嘲笑することを好む。たとえば私は、講演のなかで「アリストテレスをからかうことでしばらく時間を費やし、馬ガトガリネズミに噛みつかれるのは危険なことだ、特に、トガリネズミが妊娠しているときはなおさらそうである」と言った。聴衆は不遜な連中であり、私自身もまたそうであった。そのことが、彼らに私の講義を好んだ基礎をなしていると思う。私が一般の通説（正統主義）に従わないのは政治問題に限ったことではなかった。1940年に私の身に起こったニューヨークでの性道徳の問題に関する揉め事（ゴタゴタ）は忘れ去られていたが、どの聴衆の心の中にも、年寄りや一般の通説を重んずる人々（正統主義者たち）がショックを受けそうな事を私が話すの聞けるだろうという期待があった。人間の科学的繁殖（品種改良）に関する議論のなかにはそのような要素がたぐさんあった。だいたいにおいて私は、以前（のニューヨークにおける事件の時）には非難排斥される経典となつた話とあまりなく同じことを言つて拍手喝采を受けるといふ愉快な経験をしたのである。

コロンビア大学での最後の講義の末尾で私の言った一節（くだり）でトラブルに巻き込まれてしまった。私はその一節のなかで「世界が必要としているのは、愛（love）、キリストの愛（Christian love）、即ち思いやり（compassion）です」と言った。私がこの「キリストの」という言葉を使ったことで、自由思想家たちからは一般通説の考え方（正統主義）に従つたといつて嫌う手紙が、またキリスト教徒の側からは彼らの教会に勧誘するといふ手紙が殺到した。それから10年後に（反核子弾行進のために収監された）プリクストン刑務所でその教職師から「あなたが光明を見いだされたことをうれしく思います。」といつて歓迎された時、私は彼に、それはまったくの誤解であること、私の考えはまったく違つていないこと、また私なら「暗中探察している」と言うべきところをあなたは「光明を見いだしている」と言っているということ、説明しなければならなかった。あの時の講義で私が「キリストの愛」（Christian love）と言つたのは、その「愛」を普通の性的な愛から区別する意味で「キリストの」という形容詞をつけたのであるが、それはまったく自明のことと考へていた。前後の関係（文脈）からしてこれはまったくあきらかであると本心に想つていた。

（松下注）ラッセルは1929年に出版した Marriage and Morals 第9章(p.96)で次のように書いています。Love, when the word is properly used, does not denote any and every relation between the sexes, but only one involving considerable emotion, and a relation which is psychological as well as physical. つまり「love」は、love(愛情)は、正しく使われた場合は、男女間のどんな関係でも全て指すのではなく、肉体的であると同時に心理的である関係のみを意味する。しかし、誤解をする人もいと思われるために、コロンビア大学の講義では、男女間の愛をいうのではないことを明確にするために「Christian」という形容詞をつけた、ということである。）

私は続けて次のように言っている。

「もしこの愛を感じるならば、それは生きる目的（動機）、行動の指針、勇気、理由、知的誠実のための不可欠の要素をもつことになります。もしこの愛を感じるならば、それは、誰もが宗教において必要とされる一切を持つことになりす。

上記の発言を、キリスト教について述べていると考える者が誰かいたとしたら、私にはまったく不可解である。キリスト教徒の中には記憶している人もいるだろうが、キリスト教徒がキリストの愛を示してきたのはごく稀にしかなかったということも覚えておられることである。私は、うかつにも疑わしい形容詞を使って不測の苦痛を非キリスト教徒たちに与えることになつたので、彼らを慰めるために最善を尽くした。この問題に関する私のエッセイや講演（講義）が、ポール・エドワード教授によつて、教授自身が1940年のニューヨークにおける私の事件について書いたエッセイとともに、1957年に『なぜ私はキリスト教徒ではないか』という書名のもと、編集され、出版されている。

		A4/C1-07	<p>What led me to write about ethics was the accusation frequently brought against me that, while I had made a more or less sceptical inquiry into other branches of knowledge, I had avoided the subject of ethics except in an early essay expounding Moore's Principia Ethica. My reply is that ethics is not a branch of knowledge. I now, therefore, set about the task in a different way. In the first half of the book, I dealt with the fundamental concepts of ethics; in the second part, I dealt with the application of these concepts in practical politics. The first part analyses such concepts as moral codes; good and bad, sin, superstitious ethics, and ethical sanctions. In all these I seek for an ethical element in subjects which are traditionally labelled ethical. The conclusion that I reach is that ethics is never an independent constituent, but is reducible to politics in the last analysis. What are we to say, for example, about a war in which the parties are evenly matched? In such a context each side may claim that it is obviously in the right and that its defeat would be a disaster to mankind. There would be no way of proving this assertion except by appealing to other ethical concepts such as hatred of cruelty or love of knowledge or art. You may admire the Renaissance because they built St Peter's, but somebody may perplex you by saying that he prefers St Paul's. Or, again, the war may have sprung from lies told by one party which may seem an admirable foundation to the contest until it appears that there was equal mendacity on the other side. To arguments of this sort there is no purely rational conclusion. If one man believes that the earth is round and another believes that it is flat, they can set off on a joint voyage and decide the matter reasonably. But if one believes in Protestantism and the other in Catholicism, there is no known method of reaching a rational conclusion. For such reasons, I had come to agree with Santayana that there is no such thing as ethical knowledge. Nevertheless, ethical concepts have been of enormous importance in history, and I could not but feel that a survey of human affairs which omits ethics is inadequate and partial.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-250.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-250.HTM</a></p>	<p>倫理(学)について著述をしようとしたのは、頻りに私に対してなされた非難、即ち私が知識の他の諸分野については多かれ少なかれ体系的な探求を行っているのに、倫理(学)の問題については、(自分の)初期の論文の中でムアの『倫理学原理(プリンキピア・エティカ)』について詳しく述べている以外は、避けている、という非難にあった。それに対する私の答えは、倫理(学)は知識の一部門ではないということである。そこで私は今や、この倫理問題の探求を別のやり方で着手した。私はこの本の前半の第一節(注：2部構成)で、倫理学の基本概念(根本概念)をとり扱った。第二節で、これらの概念を政治の実際に応用する問題をとり扱った。第一節では、善悪、罪、迷信的な倫理、倫理的制裁といった概念を倫理規則(道徳律)として分析している。即ち、これらすべてのなかで、伝統的に倫理的として分類づけられている主題における倫理的要素を探求している。私が現在到達している結論は、倫理(学)は独立(自立)している要素ではなく、どこまでも分析していくと最後には政治(政治学の問題)に関連できるというものである。たとえば、(西)当事者(注：国、地域、民族、宗教など)が互角に対抗している戦争(の問題)について、われわれは何を言うべきであろうか。そのような状況では、どちらの側も、自分たちの側が正しい(正義であること)は明らかであり、自分たちの側(注：国、地域、民族、宗教など)が敗れるのは、人類の不幸であると主張するだろう。この主張を証明する方法としては、他の倫理的概念、たとえば「残酷(な行為)」に対する憎悪、あるいは「知識あるいは芸術に対する愛」といったような概念に訴える以外に方法はないであろう。セント・ピーターズ寺院を建立したこと、ルネッサンス時代を皆讃美するかも知れない。しかし中には、自分は、セント・ポール寺院のほうがよいと思うって皆をまごつかせる者がいるかも知れない。あるいはまた一方の側がついた嘘から戦争が勃発してしまっただけかも知れない。その嘘もついでには地方の側にも同じような価値があったこと、明らかになるまでは疑いのための賞賛されるべき根拠であるように思われるかも知れない。このような性質の議論に対しては、純粋に合理的な結論というものはまったく存在しない。もしある人が地球は丸いと信じ、他の人が地球は平らだと信じているのであれば、彼らは一緒に航海に出てこの問題を合理的に決めることができる。しかしもし、ある者がプロテスタントを信じ、他の者がカトリックを信じる場合は、合理的(理性的)な結論に達する方法というものは何一つ知られていない。そのような理由から、私は、倫理的な「知識」というものはまったく存在しないと主張するサンタヤナと意見に同意するようになったのである。しかしそれにもかかわらず、倫理的概念は歴史のみで非常に重要性をもってきたのであり、倫理をぬきにして人間の問題を概観することは不適切であり、かつ部分的なものになってしまうと感じないわけにはいかないものである。</p>			
--	--	----------	--	---	--	--	--

		A4/C1-08	<p>I adopted as my guiding thought the principle that ethics is derived from passions and that there is no valid method of travelling from passion to what ought to be done. I adopted David Hume's maxim that "Reason is, and ought only to be, the slave of the passions". I am not satisfied with this, but it is the best that I can do. Critics are fond of charging me with being wholly rational and this, at least, proves that I am not entirely so. The practical distinction among passions comes as regards their success: some passions lead to success in what is desired; others, to failure. If you pursue the former, you will be happy; if the latter, unhappy. Such, at least, will be the broad general rule. This may seem a poor and tawdry result of researches into such sublime concepts as "duty", "self-denial", "ought", and so forth, but I am persuaded that it is the total of the valid outcome, except in one particular: we feel that the man who brings widespread happiness at the expense of misery to himself is a better man than the man who brings unhappiness to others and happiness to himself. I do not know any rational ground for this view, or perhaps, for the somewhat more rational view that whatever the majority desires is preferable to what the minority desires. These are truly ethical problems, but I do not know of any way in which they can be solved except by politics or war. All that I can find to say on this subject is that an ethical opinion can only be defended by an ethical axiom, but, if the axiom is not accepted, there is no way of reaching a rational conclusion. There is one approximately rational approach to ethical conclusions which has a certain validity. It may be called the doctrine of possibility. This doctrine is as follows: among the desires that a man finds himself to possess, there are various groups, each consisting of desires which may be gratified together and others which conflict. You may, for example, be a passionate adherent of the Democratic Party, but it may happen that you hate the presidential candidate. In that case, your love of the Party and your dislike of the individual are not compossible. Or you may hate a man and love his son. In that case, if they always travel about together, you will find them, as a pair, not compossible. The art of politics consists very largely in finding as numerous a group of compossible people as you can. The man who wishes to be happy will endeavour to make as large groups as he can of compossible desires the rulers of his life. Viewed theoretically, such a doctrine affords no ultimate solution. It assumes that happiness is better than unhappiness. This is an ethical principle incapable of proof. For that reason, I did not consider compossibility a basis for ethics.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return England, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-260.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-260.HTM</a></p>	<p>私は、倫理（道徳原理）は情熱に由来するという原理及び、情熱から出現して何かなされるべきかということ（当為）に到達する論理的に妥当な方法はまったく存在しないという原理を自分の基本的な考え（基本思想）として採用した。私は、デイヴィッド・ヒューム(David Hume, 1711-1776)の格言「理性は情熱の奴隷であり、またたさうあるべきである」を採用した。私はこれで満足しているわけではないが採用することができるとすればこれが最善である。批評家たちは、私がまったく合理主義的であるという私を責めたがるが、少なくともこの格言に私が同意していることをみれば、私が完全に合理主義的であるわけではないことが証明されるであろう。様々な情熱の間の現実的な区別はその情熱の結果（成功）は異なる（成功）に関して生ずる。ある感情は欲求していることさらに成功に導き、他の感情は失敗に導く。もし前者を追求すれば幸福になり、後者を追求すれば不幸になるであろう。おおざっぱに言えば、それが一般原則であろう。</p> <p>「義務」「自己否定」「道徳」「高尚な理念の探求の結果としては、これは貧弱かつ卑俗だと思われるかもしれない。しかし私は、ある一点を除けば、それが正当な結果の全てであると確信している。その例の一点とは、自分自身の不幸という代償において広く一般に幸福をもたらす人々、他人に不幸をもたらして自分だけに幸福を求める人々よりも善人である、と我々は感じることである。（しかし）こういった見方を支持する合理的な根拠を私はまったく知らない（見つけていない）。あるいは、多分、何であれ多数の人々の求めるものは、自分が求めるものよりも好ましいという見解の方が幾分かより理屈にかなった見方であるが、そういう見方に対する合理的な根拠さえ、私はまったく知らない。これはまったく倫理的な問題であるが、それらの問題が、政治や競争以外のいかなる方法で解決し得るのか、私にはまったくわからない。この問題について私が言えることは、倫理的な意見は、ただ倫理上の公理（それにより証明できない命題）によってのみ擁護することができるということだけである。しかし、もしその公理が容認できないものとするれば、もはや合理的な結論に到達する方法はまったくない。（私下法）いわゆる amovible theory of value 価値情緒説 / ラッセルは倫理の問題はあくまで知識論の対象にならず、論理的に導きだせるものではないと考える。）</p> <p>（ただ）ある程度根拠をもつ倫理的結論に到達するためのほぼ合理的と思われる方法がある。それは、両立可能性の説（原則）と各づけてもよいであろう。すなわち次のような原則である。人が、自分が持っていると感じている欲望の中には種々のグループがあり、いずれも、同時に満たされることのできる欲望から成り立っているグループと、互いに反らなければならないグループとがある。たとえば、あなたが民主党の熱心な支持者であるのに、たまたまその民主党の大統領候補は嫌いだということがあり得る。そのような場合、党を愛するということと、その個人は嫌いだということとは、両立可能ではないのである。あるいはまたある人間は嫌いだか、の男子は愛しいか、という事もあるかもしれない。その場合は、もし彼らがいつも一緒に旅行しているとすると、あなたがたは、彼らを親子一対の組み合わせは両立可能とは考えないであろう。政治の手腕は、できるだけ多数の両立可能な人々の集団をきわめて汎視ししようということに存する。幸福になりたいと望む人間は、できるだけ大きな集団の共存可能な欲望を自分の人生の支配者にしようとして努力することであろう。けれども理論的な観点から見れば、その様な信条は、すこしも究極の解決にはならない。幸福であるということは幸福でないということよりもいいことだと想定している。これは別に（論理的に）立証することのできない倫理上の原則（原理）である。そういう理由から私は、両立可能性を倫理学の基礎（支えとなるもの）とは考えなかったのである。</p>			
★		A5 ウィット・ユーマ A5-01	<p>We may remain intellectually convinced of the necessity of change since this is one of our fixed verbal habits, but we cannot bear actual change. The aged radical is therefore in the sad situation that he can only be happy so long as he is ineffective; he cannot stop doing any of the things that he always has done, including the advocacy of change, but not of course including its actual realization.</p> <p>[From: The menace of old age (written in Aug. 27, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975).]  <a href="http://russell-j.com/RONEN.HTM">http://russell-j.com/RONEN.HTM</a></p>	<p>我々はいつても変化は必要だと口癖のように言うけれども、そのことを頭のなかでは（理屈の上では）分かっていても、現実における変化には耐えられない。それゆえ、年取った急進派は、彼が無効であるがぎり幸せになれるという悲しい身の上にある。即ち、彼は、いつも行ってきたこととは異なること、変革の暗礁をぬかんとど一切やめることはできないが、当然のこと、変革の実現自体は含まれていない。</p>	<p>[n.98 : 老年の脅威]  自分はまだ若いと思っけていても、誰もがいづれば年をとります。ですから、老人を祖来に扱う社会をつくらば、将来自分で自分の首をしめることにもなりかねません。長生きをしたいと思う人は多く、その意味では日本が世界一の長寿国である事実は善いことかもしれませんが、しかし長寿社会は、手放しては喜ばないことがたくさんあります。ラッセルは今から約80年前（1931年）に、高齢化社会の到来が、将来大きな問題となることを早くも指摘しています。ラッセルの文章に親しんでいない人はラッセルの冗談をそのまま受け取ってしまいがちですが、この文章も本気の部分と冗談の部分を取り違えないよう、注意が必要だと思います。ラッセルのポータルサイトのトップページに連載しているラッセル格言、書句集の n.120として、かつて掲載したものを（「要約された「人類の歴史」」）で</p>		
★		A5-02	<p>I found one day in school a boy of medium size ill-treating a smaller boy. I expostulated but he replied: "The bigs hit me, so I hit the babies; that's fair." In these words he epitomized the history of the human race.</p> <p>[From: Education and the Social Order, 1932, p.32]</p>	<p>ある日、学校（注：ラッセルが一時経営していた Beacon Hill School）で、中くらいの体格の少年が自分より小柄な少年をいじめていたのを見つけた。私はそれを見て、怒り、次は次のように答えた。「自分より大きな奴が自分をなぐる。そこで私は自分より小さい奴をなぐる。公平だよ。」この言葉によって、この少年は、「人類の歴史」を要約してみせた。</p>	<p>このような現象は、あらゆる世界に見られます。権力に抵抗するのではなく、権力者には面従腹背で、自分より権力のある者に抵抗できない（するのではなく）そのつづがんを、自分より権力のないものに対しては、自ら首を絞める必要があり、それをしてはならない。従って、弱者はどこにそれをしてはならない限り、いろいろなかで「格差」はひろがるばかりです。</p>	<p>強い者に反抗するのではなく、自分より弱い者をいじめることにより、バラスをえらう（くやしさを解消しよう、穴埋めをしよう）とする人間。長いものにまかれるという気持ちの強い日本人。集団がまとまることは良い面もあるが、集団主義（組織の維持第一）という態度には、自らの首をしめるという側面も多いということをもっと自覚する必要があります。</p>	

	A5-03	<p>It is a curious fact that nine people out of ten become happier when faced with some small misfortune. On my first visit to America, thirty-five years ago, a train in which I was travelling became stuck in a snowdrift so that we did not arrive in New York until a great many hours after all the food on the train had been eaten up. I was beginning to expect that the passengers would draw lots as to who should be eaten, but, far from that, everybody was in the best of spirits.</p> <p>[From: Why we enjoy mishaps (written in Feb. 10, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.)] http://russell-j.com/MISHAPS.HTM</p>	<p>ほとんどの人が(10人中9人までが)ちょっとした災難に見舞われると、なんとなく楽しくなるのは奇妙なことである。35年前(1897年)に、私は初めてアメリカの世界旅行をした時のことであるが、私が乗っていた汽車が大雪で動けなくなり、乗客が汽車に積んであった食料を食べつくしてかたまりてから、ようやくの思いでニューヨークに達していたことがあった。私は当初、乗客たちがくしを引いて、誰が人肉俵俵者になるか争うであろうと、大に愚痴を言っていた。ところが、乗客は全員しごく陽気であった。</p>	<p>新生児はお愛想笑いはいらないが、よその人がかわいいねと言った時には、親(特に母親)がお愛想笑いをするように、につこり話しかけると、しばらくするとそのように「督促」するようになる。これがお愛想笑い発生の起源か！?</p>
★	A5-04	<p>All the higher animals have methods of expressing pleasure, but human beings alone express pleasure when they do not feel it. This is called politeness and is reckoned among the virtues. One of the most disconcerting things about infants is that they only smile when they are pleased. They stare at visitors with round grave eyes, and when the visitors try to amuse them, they display astonishment at the foolish antics of adults. But as soon as possible, their parents teach them to seem pleased by the company of people to whom they are utterly indifferent.</p> <p>[From: On smiling (written in Aug. 17, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.)] http://russell-j.com/SMILING.HTM</p>	<p>高等動物は全て、喜びを表現する方法を持っている。しかし喜びを実感しない時に、喜びが口ずかすのは、動物である。これは「礼儀(politeness)」と呼ばれ、徳目の一つに数えられている。乳幼児の(人を)と感させる特性の一つは、彼等は本当に喜びを感じた時だけ笑うという事実である。乳幼児は、素喜を真顔のままにして、目を見開いて、なみめ、指先がやがやとすると、大人は愚痴を言ったり動作(仕草)に対し怪訝な表情を表す。しかし彼らの両親は、即座に乳幼児に、彼とはまったく無関係な人々が出現しても嬉しいような表情をするように教えこむ。</p>	
★	A5-05	<p>Men who live on islands have been much maligned by those who live on continents, and as the latter are the majority they have made their case heard more effectually than has been possible for the minority. Having just returned from an excursion to the Scillies, which are among the smallest inhabited islands in the world, I feel impelled to take up the cause of islanders in general and to argue that, whatever else they may be, they are not 'insular' in the ordinarily accepted meaning of the term. ...</p> <p>In the centre of the American continent the same sort of thing happens. The bulk of the population feels that American ways are the only natural ways, American forms of government the natural forms of government, and American abuses only such as human nature makes inevitable. The same sort of thing would be found in the centre of China or of any large homogeneous continental area. It would seem, therefore, that 'insularity', so far from being a characteristic of islanders, is, on the contrary, most often to be found among the inhabitants of vast inland countries.</p> <p>[From: On insularity (written in Sept. 21, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.)] http://russell-j.com/INSULAR.HTM</p>	<p>島(国)に住む人々は、大陸に住んでいる人々からこれまでずっと悪口を言われ続けてきた。そして大陸の住民は多数派であるため、彼等(大陸の住民)は自分たちの言いつを、少数派である島国の住民よりもっと効果的に世の中へ伝えられることになる。私は、最近、世界で最も小さい島の一つであるシリ-群島への船旅からもって来たばかりの私としては、島の住民一般に味方して、彼等がそれ以外のことでどのようにあれ、彼らは決して世間普通に使われる意味での「島国的」ではない、と立証したい衝動が湧いてくるのである。</p>	<p>「日本人は島国根性が強くて・・・」と、自虐的に言われることがよく(時々?)あります。しかしラッセルに言わせれば、戦争の影響で、孤立している国や地域が多いような時代にはそうであっても、交易がさかんな時代においては、島国には「島国根性」の特徴と言われるものはそれほどなく、むしろ(アメリカやロシアなど)領土の広い大陸諸国(の中央部)の方がより「島国根性」が強い、と指摘しています。ラッセルの主張はそれほど思われず、日本人よりもアメリカの方が「島国」根性により多く持っている(アメリカ以外の地域や国について無知なアメリカ人が少ない)ように思われます。</p>
★	A5-06	<p>There is, however, another element more profound than this. The flight of time, the transitoriness of all things, the empire of death, are the foundations of tragic feeling. Ever since men began to reflect deeply upon human life, they have sought various ways of escape: in religion, in philosophy, in poetry, in history - all of which attempt to give eternal value to what is transient. While personal memory persists, in some degree, it postpones the victory of time and gives persistence, at least in recollection, to the momentary event. The same impulse carried further causes kings to engrave their vicinies on monuments of stone, poets to relate old sorrows in words whose beauty (they hope) will make them immortal, and philosophers to invent systems providing that time is no more than illusion. Vain effort! The stone crumbles, the poet's words become unintelligible, and the philosopher's system are forgotten. Nonetheless, striving after eternity has ennobled the passing moment.</p> <p>[From: On old friends (written in Jan. 4, 1933 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.)] http://russell-j.com/O-FRIEND.HTM</p>	<p>アメリカ大陸の中央部においても、これと同様ことが生ずる。大部分のアメリカ人は、アメリカの流儀は唯一自然なやり方であり、また、アメリカの統治形態は唯一自然な統治形態であると考え、(従って)アメリカ社会における弊害は、人間本性として不可避なものであると認めている。同じようなことは、多分、中国大陸の中央部や、その他広大で均一な大陸の中央部ではどこでも見られるものであるだろう。それゆえ、「島国根性」は、島(国)の住人の特徴ではなく、逆に、広大な内陸諸国の住民の間でも普通に見られる特徴であると思われる。</p>	<p>「親しかった旧友に、長い年月を経て偶然出会った時に感じる喜び」に関するエッセイです。短い文章のなかにもラッセルの世界観、人生観、人間観、真理の探求(哲学)に対する基本的姿勢がよく表現されていると思います。年をとるとありかたな昔話になぜかふけるのが、旧友をどうして「過度」に懐かしがるのか。そのような感情がわきあがってくる原因について反省してみると、運が早かれ死ななければならぬ「孤独な人間の姿」が見えてきます。</p>
○	A5-07	<p>My Aunt Agatha was the youngest of the grown-up people at Pembroke Lodge. She was, in fact, only nineteen years older than I was, so when I came there she was twenty-two. During my first years at Pembroke Lodge, she made various attempts to educate me, but without much success. She had three brightly coloured balls, one red, one yellow, and one blue. She would hold up the red ball and say: 'What colour is that?' and I would say: 'Yellow.' She would then hold it against her canary and say: 'Do you think that it is the same colour as the canary?' I would say, 'No', but as I did not know the canary was yellow it did not help much. I suppose I must have learned the colours in time, but I can only remember not knowing them.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB11-100.HTM</p>	<p>アガサおばさんはペンブローク-ロッジに住んでいた大先輩で、9歳年上であるにすぎず、私がペンブローク-ロッジに、(1876年2月、ラッセル3歳9ヶ月の時に)来たとき、彼女は22歳であった。(訳注: それだけ年寄りに囲まれて暮らしていたというw!) 私がペンブローク-ロッジに来た最初の数年、彼女は私を教育しようとして、さまざまな試みをしたが、大きな成果はあけられなかった。</p> <p>彼女は色鮮やかなボールを3つ - 赤色のもの1つ、黄色のもの1つ、青色のもの1つ - 持っていた。彼女は赤色のボールを持ち上げ、「何色をしていますか?」と私によく聞いたものである。私は「黄色」といつも答えた。すると彼女は、そのボールをカナリアのすぐ近くにもっていき、「このボール(の色)はカナリアと同じ色だと思いませんか?」と言った。私は「いいえ」といつも答えたが、私はカナリアの色は黄色だということを知らなかったもので、おばこの方法もないうして後立たなかった。そのうち私も色について理解するようになったにちがいないが、私は(当時)全く色のことはわからなかったということだけが記憶に残っていない。</p>	
○	A5-08	<p>On another occasion I heard one of the grown-ups saying to another, 'When is that young Lyon coming?' 'I picked up my ears and said, 'Is there a lion coming?' 'Yes,' they said, 'he's coming on Sunday. He'll be quite tame and you shall see him in the drawing-room.' I counted the days till Sunday and the hours through Sunday morning. At last I was told the young lion was in the drawing-room and I could come and see him. I came. And he was an ordinary young man named Lyon. I was utterly overwhelmed by the disenchantment and still remember with anguish the depths of my despair.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB11-090B.HTM</p>	<p>また別の機会にある大人が別の大人に「あの若いライオンは、(何の何時来る予定ですか?)」と語っているのを聞いた。私は耳を敷て(そばだて)てうかがった。「ライオンが来るの?」。彼らは答えた。「ええ、日曜日に来ます。とてもおとなしいんです。応接間で会えますよ」。私は日曜が来るまで毎日、日を数え、そして日曜の朝には(いままで)と噂されていたライオンが来るのを待っていた。ライオンが来たので、応接間に行けば会えることと知らされた。私は、応接間に行った。するとそれはライオンという名の普通の青年であった。私は迷夢からさまされ、まったく打ちのめされた。今でもその時の絶望の深さを舌痛を伴って思い出す。</p>	
○	A5-09	<p>I do not clearly remember the incident which first brought me into contact with my friend Whitehead. I had been told that the earth was round, and had refused to believe it. My people thereupon called in the vicar of the parish to persuade me, and it happened that he was Whitehead's father. Under clerical guidance, I adopted the orthodox view and began to dig a hole to the Antipodes. This incident, however, I know only from hearsay.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB11-180.HTM</p>	<p>友人のホワイトヘッド(Whitehead, Alfred North, 1861-1947: Principia Mathematicaの共著者/ラッセルより11歳年上)とはどういう出来事がきっかけで初めて知り合いになったのかははっきりとは記憶していない。私は、当時「地球は丸い」と教えられていたが私はそれを信ずるのを拒否していた。そのために、家の者たちが私を説得しようとして、その地区の牧師を招いたが、偶然にも、その牧師はホワイトヘッドの父親であった。聖職者の働きのもと一般に認められた正統的な考え方を受け入れ(注: 注内) 地球の正反対の地点(対蹠地)に到達して穴を掘り始めた。ただしこのことは私はたまたから聞いて知っているだけである。</p>	

	<p>A5-10</p> <p>Her attempts to prevent me from knowing things were seldom successful. At a somewhat later date, during Sir Charles Dilke's very scandalous divorce case, she took the precaution of burning the newspapers every day, but I used to go to the Park gates to fetch them for her, and read every word of the divorce case before the papers reached her. The case interested me the more because I had once been to church with him, and I kept wondering what his feelings had been when he heard the Seventh Commandment. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB11-190.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB11-190.HTM</a></p>	<p>いろんなことを私に知らせまいとする祖母の試みはめったに成功しなかった。その後少したって、チャールズ・ディルケ卿の1891年のとしてスキャンダラスな離婚問題の渦中、祖母は私に知らせないように毎日新聞を焼くという予防対策をとったが、しかし私は、リッチモンド・パークの門まで、注:祖母のために新聞をとりに行く習慣があったので、新聞を祖母に返すまでの間に、この離婚問題の記事を一通も焼かず読んでしまった。私は一度彼と一緒に教会に行ったことがあるため、それだけこの離婚問題は私の興味をよりいっそう引くこととなり、彼が(教会で)モーゼの十戒の一番目(松 downstream 注:汝姦淫することなかれ)を聞くときとどんな感情を抱いたのだろうかと思案し続けた。</p>	<p>* 松下注: 日高一層(氏)は、「私は、祖母のためにハイドパークの入り口まで新聞をとりに行くのがなわらわしであった。」と訳されているが、ラッセルが住んでいた Pembroke Lodge は、ロンドン郊外にある Richmond Park の端にあり、ロンドン市内のハイドパークまで幼いラッセルが新聞をとりに行くなどということでは、ありえない。</p>	
<p>*</p>	<p>A5-11</p> <p>Once when I was about twelve years old, she had me before a roomful of visitors, and asked me whether I had read a whole string of books on popular science which she enumerated. I had read none of them. At the end she sighed, and turning to the visitors, said: 'I have no intelligent grandchildren.' She was an eighteenth-century type, rationalistic and unimaginative, keen on enlightenment, and contemptuous of Victorian goody-goody priggrery. She was one of the principal people concerned in the foundation of Girton College, and her portrait hangs in Girton Hall, but her policies were abandoned at her death. 'So long as I live', she used to say, 'there shall be no chapel at Girton.' The present chapel began to be built the day she died. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB11-250.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB11-250.HTM</a></p>	<p>私12歳頃のある時、彼女(新卒の祖母 Lady Stanley of Alderley、右写真真身 Bertrand Russell Archives)は私を部屋いっぱい訪問客の前に立たせ、彼女が列挙した通俗科学の一連の本を読んだかどうかを私に質問した。私はそのうちの二冊も読んでいなかった。彼女は最後に嘆息をついた。そして来客の方を向いて言った。「私は知的な孫は一人もいません。」</p> <p>彼女は18世紀タイプの人であり、合理主義的で、想像力に乏しく、啓蒙(活動)に熱心で、ヴィクトリア朝時代の善良ぶった口やかましさを経典していた。彼女は(ケンブリッジ大学の)「ガートン・コレッジ(Girton College)」の創設に関係した主要人物の一人であり、彼女の肖像写真はガートン・ホールに掲げられているが、彼女の方針は彼女の死とともに顧みられなくなった。(松下注: 因みに、ラッセルの2番目の妻ドラは、ガートンを卒業している。)</p> <p>彼女はもう一つで、「私が生きている限り、ガートンには決して礼拝堂を建てさせません。」</p> <p>現在の礼拝堂は、彼女が亡くなったその日に建設が始められた。</p>	<p>(吉田)</p> <p>「いろんなことを私に」新聞を焼いてまで隠していたから、一層興味をひいてしまったのでは。</p> <p>実権を握っている政治家や起業家の皆さん。気を付けてください。実権を失えばあつという間に人は去って行きます。</p>	
<p>*</p>	<p>A5-12</p> <p>Next to these three the most important person in the College was the Senior Porter, a magnificent figure of a man, with such royal dignity that he was supposed by undergraduates to be a natural son of the future Edward the Seventh. After I was a Fellow I found that on one occasion the Council met on five successive days with the utmost secrecy. With great difficulty I discovered what their business had been. They had been engaged in establishing the painful fact that the Senior Porter had had improper relations with five bedmakers, in spite of the fact that all of them, by Statute, were 'nec juvenis, nec pulchra'. As an undergraduate I was persuaded that the Dons were a wholly unnecessary part of the university. I derived no benefits from lectures, and I made a vow to myself that when in due course I became a lecturer I would not suppose that lecturing did any good. I have kept this vow. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB13-220.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB13-220.HTM</a></p>	<p>私その人(注: 学寮長、副学寮長、下級学監のこと?)に次いで、トリニティ・コレッジにおける最重要人物は、守衛長であったが、彼は王族のような威厳をもった堂々とした風貌をしていたので、学部生からは将来のエドワード七世(Edward the 7th, 在位1901-1910 / ラッセルが学部生の頃は皇太子であったが、新卒の。)という形容詞がついていると思われる。(右欄上肖像画参照)の私生児だろうと想像されたほどであった。私がフェローになった以後のある時、連続して5日間、極秘の評議会が開かれたことを私は知った。非常に困難ではあったが、私は、彼らの相談事があるとながわかつた。人々の守衛長が三人の寝室係(の女性)。(松下注: コレッジにおける寮生のベッドメイキング役) - 『トリニティ・コレッジ規則』(Statutes)により、彼女たちは「若くも美しくもなかった。いささか不適切な(みだらな)関係を結んだという癖をしい事実を立証するに從事していた。」</p> <p>学部生として私は、トリニティ・コレッジの学寮の教師達は、大学には全く不要であると確信していた。彼らの講義は、何の役にもたなかつた。それゆえ私は、いずれ自分が講師になった時には、講義をすることが何かの役に立つものだとは思わないうようにしようと思つた。そして私はこの誓いを守った。</p>	<p>(松下注: 'nec juvenis, nec pulchra' 英語の junior はラテン語 juvenis 「若い」の比較級で、junior より若い)に由来する。ラテン語 juvenis を語源とする英語には、他に juvenile 「少年少女の、若い」がある。また pulchra は、ラテン語で美しいの意 / 学生と問題を起こすといけないうので、トリニティ・コレッジ規則。では、寝室係の女性は若い女性や美人は雇用しないことになっているようである。)</p>	
	<p>A5-13</p> <p>... Once in the year 1904, when I was living in an isolated cottage in a vast moor without roads, he wrote and asked if I could promise him a restful weekend. I replied confidently in the affirmative, and he came. Within five minutes of his arrival the Vice Chancellor turned up full of University business. Other people came unexpectedly to every meal, including six to Sunday breakfast. By Monday morning we had had twenty-six unexpected guests, and Keynes, I fear, went away more tired than he came. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 3, Cambridge, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB13-280.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB13-280.HTM</a></p>	<p>・・・。1904年のある時、私が道もない広大な荒地(ムーア)の中の一軒家(小さなコテージ風別荘)に住んでいた時のことであるが、彼は手紙で私の家で週末の休息をとってほしいが尋ねて来た。私ははつきりとうとうと返事したところ、彼は(週末を過ごすため)しやってくる。彼が着いて5分たつたがたないうちに、ケンブリッジ大学の副総長(松下注: 英国の大学では、総長は名誉職であり、副総長が実際上の総長=学長にあたる。)が大学の仕事をいっさいかたえてひまわりつてきた。他の連中も何の連絡もなしに、- 日曜日に朝食にやってきた6人も含め - 食事ごとにやって来た。月曜の朝までに、予期せぬ客の数は26人に達した。多分、ケインズは、私の家に来た時よりももっと疲れて帰って行ったと思われる。</p>		
	<p>A5-14</p> <p>Lytton, who was too delicate to be sent to a conventional school, was seen by his mother to be brilliant, and was brought up to the career of a writer in an atmosphere of dedication. His writing appeared to me in those days hilariously amusing. I heard him read Eminent Victorians before it was published, and I read again to myself in prison. It caused me to laugh so loud that the officer came round to my cell, saying I must remember that prison is a place of punishment. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 3, Cambridge, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB13-310.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB13-310.HTM</a></p>	<p>因習的な(伝統的な)学校に入れるのにはあまりに繊細すぎるリットンには、彼の母の眼には聡明と映り、顧身の雲間気のもと、著作家の生涯を送るよう育てられた。彼の著作は、当時の私には、楽しくかつ面白く思われた。私は、彼の著書な『ヴィクトリア朝時代人』を出版前に、彼が牢に出して読んでいるのを聞いたが、私は獄中で再び黙読した。大変面白く、大声で笑ってしまったので、看守が私の独房にやって来て、「刑務所は罰を受けるところだということをお忘れはならない」と言った。</p>		
	<p>A5-15</p> <p>In the last years I had lost contact with him, because he became absorbed in the question of an international language. He advocated Ido rather than Esperanto. According to his conversation, no human beings in the whole previous history of the human race had ever been quite so deprived as the Esperantists. He lamented that the word Ido did not lend itself to the formation of a word similar to Esperantist. I suggested 'idiot', but he was not quite pleased. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5: First marriage, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB15-170.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB15-170.HTM</a></p>	<p>彼の晩年には、- 彼は「国際語の問題」に没頭するようになったため、- 彼との接触は無くなった。彼はエスペラントよりもイド語(注: エスペラント語を一周間易化したもの)を擁護した。彼の話によれば、人類の全歴史を通して、エスペラントほど豊饒な人間はなかった。彼は、イド語が、エスペラントと同様の言葉の形成に向かわなかったこと(注: 即ち、エスペラント語を使う人を「エスペラントイスト」というように、イド語を使う人を呼称する言葉が造語されなかったこと)と、95%を非難した。私「Idiot (ばかまぬけ)」という言葉を提案したが、彼は余り喜ばなかった(注: もちろん冗談)。</p>		

	A5-16	<p>In July 1900, there was an International Congress of Philosophy in Paris in connection with the Exhibition of that year. Whitehead and I decided to go to this Congress, and I accepted an invitation to read a paper at it. Our arrival in Paris was signalled by a somewhat ferocious encounter with the eminent mathematician Borel. Carey Thomas had asked Alys to bring from England twelve empty trunks which she had left behind. Borel had asked the Whiteheads to bring his niece, who had a teaching post in England. There was a great crowd at the Gare du Nord, and we had only one luggage ticket for the whole party. Borel's niece's luggage turned up at once, our luggage turned up fairly soon, but of Carey's empty trunks only eleven appeared. While we were waiting for the twelfth, Borel lost patience, snatched the luggage ticket out of my hands, and went off with his niece and her one valise, leaving us unable to claim either Carey's trunks or our personal baggage. Whitehead and I seized the pieces one at a time, and used them as battering-rams to penetrate through the ring of officials. So surprised were they that the manoeuvre was successful.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6: Principia Mathematica, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-010.HTM</a></p>	<p>1900年7月(ラッセル28歳)その年のパリ万国博覧会にあわせて、(第1回)国際哲学学会(International Congress of Philosophy)がパリで開催された。ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead, 1861-1947.12.30)と私は会議に出席することを決め、私は会議で論文を発表するようにの招待を引き受けた。私たちのパリ到着は、著名な数学者であるエミール・ボレル(Emlie Borel, 1871-1956)とのいくらか騒いで出で歸られて、カレライ・トーマス(アリスの親戚でプリエ・マーマン大学学長)は、彼女が英国を立つとき後に残して来た12個の空のトランクを英国から持って来てくれるようにとアリスに頼んでいた。(一方)ボレルは、ホワイトヘッド夫妻に、英国で就職について自分の姪と一緒に連れて来るようにと頼んでいた。ガレ・ド・ノール(Gare du Nord:パリ北駅)はたがいへん混雑しており、そして私たちは、一行全員に対して一枚の荷物用チケットしか持っていなかった。ボレルの旅行用カバンはすくりに出て来た。私たちの旅行用カバンもかなり早く出てきた。しかしカレライの空のトランクは1個だけ出てきた。それで私たちは、12個目の空トランクが出てくるのを待っていたのであるが、その間にボレルは我慢しきれなくなり、私の手から荷物引き換えチケットをひったくり、彼の姪とその姪の旅行用引き掛けカバンをつかんで駅を出て行き、カレライのトランクも私たちの手荷物も講求できないままにしてしまった。そこでホワイトヘッドと私は、荷物を1つにくくり合わせ、係員の輪を突破する破城槌(注:城壁破壊用の首の武器)として使った。駅員たちが非常に驚いたので、この戦術は成功であった。</p>			
★	○	<p>... By the intervention of Arthur Balfour, I was placed in the first division, so that while in prison I was able to read and write as much as I liked, provided I did no pacifist propaganda. I found prison in many ways quite agreeable. I had no engagements, no difficult decisions to make, no fear of callers, no interruptions to my work. I read enormously, I wrote a book, Introduction to Mathematical Philosophy, a semi-popular version of The Principles of Mathematics, and began the work for Analysis of Mind. I was rather interested in my fellow-prisoners, who seemed to me in no way morally inferior to the rest of the population, though they were on the whole slightly below the usual level of intelligence, as was shown by their having been caught. For anybody not in the first division, especially for a person accustomed to reading and writing, prison is a severe and terrible punishment; but for me, thanks to Arthur Balfour, this was not so. I owe him gratitude for his intervention although I was bitterly opposed to all his policies. I was much cheered, on my arrival, by the warden at the gate, who had to take particulars about me. He asked my religion and I replied 'agnostic'. He asked how to spell it, and remarked with a sigh: 'Well, there are many religions, but I suppose they all worship the same God.' This remark kept me cheerful for about a week. One time, when I was reading Strachey's Eminent Victorians, I laughed so loud that the warden came round to stop me, saying I must remember that prison was a place of punishment. On another occasion Arthur Waley, the translator of Chinese poetry, sent me a translated poem that he had not yet published called 'The Red Cockatoo'. It is as follows: A red cockatoo.</p> <p>Coloured like the peach-tree blossom, Speaking with the speech of men And they did to it what is always done To the learned and eloquent They took a cage with stout bars And shut it up inside.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-270.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-270.HTM</a></p>	<p>アーサー・バルフォア (Arthur Balfour, 1848-1930: 英国保守党の政治家。1902年に首相となった。)の介入のおかげで私は刑務所の第一部門に位置づけられ、そのために、刑務所内では平和主義者としての宣伝を行なうという条件を課せられなかった。しかし私にひとり取り決めることを許された。刑務所は多くの面で非常に快適であることがわかった。用事は何もなく、決定をしなければならない難しい問題もなく、来客の心配もなく、また、仕事をじやまされることもなかった。私は大量の本を読んだ。また、『数学の原理』(注: Principia Mathematica)ではなく、『The Principles of Mathematics』(注: 注意)の半ば一般向きの本である『数学哲学入門』)を書き上げ、また、『精神の分析』(The Analysis of Mind)の執筆にとりかかった。</p> <p>私は、刑罰の囚人たちにかなり興味を持った。彼らは他の一般の人々と比較して少しも道徳的に劣っていないように思えたが、捕まってしまった事実からもわかるように、概して一般の知的水準より少し低かった。第一部門以外の部門に入っている囚人にとっても、特に読書や秘書を習得している人間にとっては、刑務所での監禁状態はひどく厳しく恐ろしい処罰である。しかし私の場合は、アーサー・バルフォアのおかげでそうではなかった。私は、彼の政策の全てに対して激しく反対していたけれども、彼が間に入ってくれたことに、感謝しなければならぬ。その刑務所に到着した時、入所のための圖書をとり付けられなければならない入口の看守に、私は希望の気分を味わった。彼が私の信仰している宗教は何かと尋ねたので、私は「不可知論者」(agnostic)だと答えた。彼はその語はどのように綴るのかと尋ねた。そしてため息をつきながらこう言った。「まあなんと、宗教はたくさんあるけれど、その宗教が同一の神を拝んでいると思いませんね」。この一言が、その後の約一週間、私を愉快にしてくれた。ある時、私がリットン・ストレイチーの『著名なヴィクトリア朝時代人』を読んでいるとき、余りに声高にその時代のその看守が強いするのを止めさせた。私にやって来て、刑務所は処罰の場所だということをはなれたいが、いけませんと言った。(また)別の機会に、漢詩の翻訳者であるアーサー・ウエイリー (Arthur Waley, 1889-1966)は、当時まだ出版されていなかった『赤い鸚鵡』(The Red Cockatoo: 冠毛が動かせるオウム類の鳥科)という訳詩を送ってくれた。それは、次の詩である。(松下注: この詩のなかの鳥類の中のオウムは、ラッセル自身を象徴している。即ち、政府の連中はラッセルを丁重に取り扱い、籠(監獄)の中に入れてしまった! そう、それが彼のやり方なんだ、と。)</p> <p>安南(ベトナム中部の都市)から贈られてきた 一羽の赤いオウム 桃の花のような色をしていて 人間がしゃべるとそれをまねてしゃべる。 そこで彼らはその鳥を、 いつも学者や雄弁家に対してやっているように遇した。 丈夫な止まり木(横木)のついた鳥籠を手に入れ、 そして、その鳥を鳥かごの中に閉じ込めた。</p>			
★	○	<p>The ending of the war enabled me to avoid several unpleasant things which would otherwise have happened to me. The military age was raised in 1918, and for the first time I became liable to military service, which I should of course have had to refuse. They called me up for medical examination, but the Government with its utmost efforts was unable to find out where I was, having forgotten that I had put me in prison.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 2: Russia, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB22-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB22-010.HTM</a></p>	<p>第1次世界大戦が終ったことで、より戦争が続いて来た軍に徴兵される必要がなくなった。徴兵年齢が1918年(ラッセルが46歳の時)に引き上げられ、私も、初めて兵役義務を免れることになった。(しかし召喚がなかったとしても)当然のこと、私はそれを拒否していたのである。政府は(徴兵のための)身体検査(医学検査)のために私に召喚をかけたけれども、政府は私を投獄したことを忘れていたので、最大限の努力を払ったが私の居所をつきとめることできなかった。</p>		<p>(注)イギリスは第一次大戦前までは志願兵制度をとっていたが、1916年1月、18歳以上50歳以下の男子(並びに56歳までの医師)に兵役の義務を課する強制徴兵法(Military Service Act)が成立した。/参考文献:藤田綱雄『欧米の軍制に関する研究』(有斐閣出版サーゴ株式会社、1991年3月刊)/ (故)藤田綱雄氏の学位論文を私が出版したものを)</p>	
	○	<p>A5-19</p> <p>Like all great men he had his weaknesses. At the height of his mystic ardour in 1922, at a time when he assured me with great earnestness that it is better to be good than clever. I found him terrified of wasps, and, because of bugs, unable to stay another night in lodgings we had found in Innsbruck. After my travels in Russia and China, I was inured to small matters of that sort, but not all his conviction that the things of this world are of no account could enable him to endure insects with patience. In spite of such slight foibles, however, he was an impressive human being.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 2: Russia, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB22-100.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB22-100.HTM</a></p>	<p>すべての偉大な人間がそうであるように、ワイトゲンシュタインにも弱点があった。1922年、彼の神秘主義的な情熱が最高度に達していた時、彼が、「善良であるということ」は、「利口であること」よりもいっそうよいというのは確かだと、きわめて裏面に私に言ったのと同じ時に、スズメバチを怖がり、湧き虫のせいで私たちが(オーストリアの)インスブルックで見付けた宿舎に寝ることも出来ない。彼を我慢した。私は、ロシアや中国を旅行した以後は、そのような些細な事には慣れてしまったが(注: 当時の中国のホテルでは、湧き虫がでるのは日常的なことであった。彼は、この世のことは取るに足らないと確信しているにも関わらず、昆虫に対しては忍耐できないものだった)けれども、そのような(愛嬌のある)些細な弱点があったが、彼はきわめて印象深い人間であった。</p>			



				A5-20	<p>... In spite of all this, we found ourselves taking all the necessary steps required for going off together for a year in China. Some force stronger than words, or even than our conscious thoughts, kept us together, so that in action neither of us wavered for a moment. We had to work literally night and day. From the time of her arrival to the time of our departure for China was only five days. It was necessary to buy clothes, to get passports in order, to say goodbye to friends and relations, in addition to all the usual bustle of a long journey; and as I wished to be divorced while in China, it was necessary to spend the nights in official adultery. The detectives were so stupid that this had to be done again and again.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 2: Russia, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB22-230.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB22-230.HTM</a></p>	<p>・・・。全てがこのような状態であったにもかかわらず、私たちは一年間中国と一緒に滞在するために必要な一切の手続きをとっていた(のに気づいた)。言葉以上の即ち意識的な思考以上の、何らかのより強い力が、私たちを結びつけていた。そのため、私たちのどちらも、行動において、一瞬たりとも、ためらわなかった。私たちは、文字通り昼夜を回らなければならなかった。彼女がロンドンに到着してから一人で中国に帰って行く準備を急ぎ、さらさらと聞けなかった。長旅に出かける時の通常のせわしい活動に加えて、衣服を買ったり、パスポートを入手したり、友人や親戚に別れを告げなければならなかった。そうして私は、中国滞在中に(アリスト)離婚したかったので、幾夜も公衆の面前で性交があった(私下注)。当時のイギリスでは、いずれかの方に不倫行為がなければ離婚できなかった。(しかし、依頼した)探偵連中がとてども聞けなかったために、何度も繰り返さなければならなかったのである。</p> <p>中国人はユーモアのセンスがあり(あるいはあったと言ったほうがよいかもしれない)が、それは私にとって非常に相性のよいものであった。恐らく、共産主義は中国人のユーモアのセンスを抹殺してしまったであろうが、私が中国にいた時は、彼らは絶えず私に、中国の古典に出て来る人物を思い起こしてくれた。ある暑い日、二人の肥った中年の実業家が、ある非常に有名な半ば朽ちたパゴダ(注：仏塔)を見、自動車で田舎に出かけようと私を誘ってくれた。私たちがそこに到着すると、私は螺旋階段を上っていった。彼らも後々に上って来ると思っていたが、塔のつづべんに上りきってから見下ろすと、彼らは半ば朽ちたに立っていた。なぜ上って来なかったかの理由を尋ねたところ、彼らは驚くほど厳粛な面持ちでこう答えた。</p> <p>「私たちは上ろうと思っていました。しかし、上っていくべきかどうか議論しました。賛成反対の両側から多くの重要な論点(議論)が出されました。しかし、ついに、私たちの態度を決定した論点(議論)が出されました。つまり、このパゴダはいつ崩れるかわからない状態です。でもし崩れた場合、この哲学者がどのようにして死んだか自撃証言することのできる者がいることは良いことだろう、と私たちは思いました。」</p> <p>彼らが本当に言おうとしたことは、その日は暑くて、自分たちは肥っているので登りたくないということであった。</p>		
				A5-21	<p>The Chinese have (or had) a sense of humour which I found very congenial. Perhaps communism has killed it, but when I was there they constantly reminded me of the people in their ancient books. One hot day two fat middle-aged business men invited me to motor into the country to see a certain very famous half-ruined pagoda. When we reached it, I climbed the spiral staircase, expecting them to follow, but on arriving at the top I saw them still on the ground. I asked why they had not come up, and with portentous gravity they replied:</p> <p>"We thought of coming up, and debated whether we should do so. Many weighty arguments were advanced on both sides, but at last there was one which decided us. The pagoda might crumble at any moment, and we felt that, if it did, it would be well there should be those who could bear witness as to how the philosopher died."</p> <p>What they meant was that it was hot and they were fat.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 3: China, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-080.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-080.HTM</a></p>	<p>「私たちは上ろうと思っていました。しかし、上っていくべきかどうか議論しました。賛成反対の両側から多くの重要な論点(議論)が出されました。しかし、ついに、私たちの態度を決定した論点(議論)が出されました。つまり、このパゴダはいつ崩れるかわからない状態です。でもし崩れた場合、この哲学者がどのようにして死んだか自撃証言することのできる者がいることは良いことだろう、と私たちは思いました。」</p> <p>彼らが本当に言おうとしたことは、その日は暑くて、自分たちは肥っているので登りたくないということであった。</p>		
				A5-22	<p>The Japanese journalists were continually worrying Dora to give them interviews when she wanted to be nursing me. At last she became a little curt with them, so they caused the Japanese newspapers to say that I was dead. This news was forwarded by mail from Japan to America and from America to England. It appeared in the English newspapers on the same day as the news of my divorce. Fortunately, the Court did not believe it, or the divorce might have been postponed. It provided me with the pleasure of reading my obituary notices, which I had always desired without expecting my wishes to be fulfilled. One missionary paper, remember, had an obituary notice of one sentence: "Missionaries may be pardoned for heaving a sigh of relief at the news of Mr. Bertrand Russell's death. I fear they must have heaved a sigh of a different sort when they found that I was not dead after all..."</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 3: China, 1968].  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-110.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-110.HTM</a></p>	<p>ドーラが私の看病をしたいと望んでいた時、日本の新聞記者は、彼女にインタビューに応じるよう求めてたえず彼女を困らせた。ついには、彼女が彼らにぶつきらば、この新聞記者は、彼女を殺すかもしれないと脅かした。日本の各新聞に私が死亡したと報道させることとなった。このニュースは、郵便で日本からアメリカへ、そしてアメリカから英国へと送られた。英国の新聞には、私の離婚のニュースと同日に発表された。幸いにも、(英国の)裁判所は私が死したとの報道を信用しなかつた。また、アリスト(イギリスとの)離婚は延期されたかもしれないのであろう。その誤報は私に、(生きながら)自分の死亡記事を読むという楽しみを与えてくれた。それは、- - そのような望みがかなえられないとは思ってもしないが、それでも、私がずっと望んでいたことである、キリスト教系の、布教のためのある新聞が次のような一行の私の死亡記事を載せていたのを記憶している。</p> <p>「宣教師は、パートランド・ラッセル氏死去の報に接し、安堵から胸をなでたとしても(ほっとしてため息をついても)許されるであろう。</p> <p>結局は私が死ななかったことを聞き、彼らは別の種類の「ため息」をついたにちがいない。</p> <p>(1921年)9月27日、私たちは結婚した。国王代訴人(注：離婚裁判所において不正がある際に法廷に異議を申し立てる者に離婚手続きを早めさせることに成功したが、そのためには、チャリング・クロス駅のプラットフォームで、ドーラは私が公然と姦通した女性であると、全能の神の御名にかけて宣誓する必要があった。11月16日に長男ジョンが生まれ、その瞬間から長年の間、子供たちが私の人生の主要関心事となった。</p>	(注：「大阪毎日新聞」1921年3月29日朝刊第2面)「思想界の巨星、ラッセル氏逝く」)	
				A5-23	<p>... On September 27th we were married, having succeeded in hurrying up the King's Proctor, though this required that I should swear by Almighty God on Charing Cross platform that Dora was the woman with whom I had committed the official adultery. On November 16th, my son John was born, and from that moment my children were for many years my main interest in life.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 3: China, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-160.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-160.HTM</a></p>	<p>私はシカゴ大学で規模の大きなゼミを持ち、オックスフォード大学の時と同じテーマ、即ち「言語と事実」について講義を続けた。しかし、「言語と事実」といったような単語を扱うと、「メタ」人は私の講義をあまり重視しなかつた。このことを聞かされていたのは、私はその名称を「口述と身体運動習性の相関関係」(The Correlation between Oral and Somatic Motor Habits)とつけたようなものに改めた。この名称のもと、あるいはこれに似た名称のもと、ゼミの開設が認められた。</p>		
				A5-24	<p>In Chicago I had a large seminar, where I continued to lecture on the same subject as at Oxford, namely, 'Words and Facts'. But I was told that Americans would not respect my lectures if I used monosyllables, so I altered the title to something like 'The Correlation between Oral and Somatic Motor Habits'. Under this title, or something of the sort, the seminar was approved.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 6: America, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB26-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB26-010.HTM</a></p>	<p>私はシカゴ大学で規模の大きなゼミを持ち、オックスフォード大学の時と同じテーマ、即ち「言語と事実」について講義を続けた。しかし、「言語と事実」といったような単語を扱うと、「メタ」人は私の講義をあまり重視しなかつた。このことを聞かされていたのは、私はその名称を「口述と身体運動習性の相関関係」(The Correlation between Oral and Somatic Motor Habits)とつけたようなものに改めた。この名称のもと、あるいはこれに似た名称のもと、ゼミの開設が認められた。</p>		
				A5-25	<p>In the summer of 1938, John and Kate came to visit us for the period of the school holidays. A few days after they arrived the War broke out, and it became impossible to send them back to England. I had to provide for their further education at a moment's notice. John was seventeen, and I entered him at the University of California, but Kate was only fifteen, and this seemed young for the University. I made enquiries among friends as to which school in Los Angeles had the highest academic standard, and there was one that they all concurred in recommending, so I sent her there. But I found that there was only one subject taught that she did not already know, and that was the virtues of the capitalist system. I was therefore compelled, in spite of her youth, to send her to the University.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 6: America, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB26-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB26-020.HTM</a></p>	<p>1939年の夏、ジョンとケイトは、学校の休暇期間中に、私たちのところに来てきた。彼らが到着して2、3日すると、第二次世界大戦が勃発した。そのため、彼らを英国に戻すことが不可能になった。そこで、できるだけ私は、二人のそれ以後の教育の手配をしなければならなかった。ジョンは17歳だったので、カリフォルニア大学に入学させた。しかしケイトの方はまだ15歳だったので、大学に入れるのは若すぎるように思われた。私は、ロサンゼルスでは、どの学校が一番学力水準の高い学校かというのを友人たちに尋ねたところ、彼ら全員一致して推薦して貰っていたところ、一校あった。そこでケイトをその学校に入れた。しかしその学校で教えられている科目でケイトがまだ知っていないものは一つしかなく、それは「資本主義制度の長所」というものであった。そのため私は、彼女が年齢が若すぎたが、ケイトを大学にやらざるえなかった。</p>		



A5-28	<p>It is a commonplace that the young are influenced by imagination and reasoning while the old are guided by experience. When I myself was young I had once a remarkable illustration of this fact. I had walked from the old-world village of Clovelly, in Devonshire, to a cape called Hartland Point, from which I could see Lundy Island at the mouth of the Bristol Channel. I got into conversation with a coast guard, who told me that the distance to Clovelly was eight miles, and to Lundy Island ten miles. And how far is it from Clovelly to Lundy Island? I asked. The answer was twenty-two miles. At this I burst into argument to the effect that two sides of a triangle are always greater than the third side, and that if one went by way of Hartland Point the distance would only be eighteen miles. The coast guard, however, was quite unmoved. 'All I can say, sir,' he replied, 'is that I was speaking with Captain Jones the other day, and he said: "I've known this coast, man and boy, for thirty years, and I make it twenty-two miles."' Before the man-and-boy argument, geometry had to retire abashed.</p> <p>[From: The lessons of experience (written in Sept. 23, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/EXPERIEN.HTM]</p>	<p>若者は「想像（空想）」と「推論」によって影響され、老人は経験に導かれる（経験に頼って生きる）。私はよく言われる。私自身、若い頃のこの経験例を経験した。私はデヴォンシャー州のクロヴリーにある古い村からブリストル海峡の入口にあるランディ島が見えるハートランド・ポイントと呼ばれる岬まで歩いた。そこで、私は沿岸警備隊員と会話をした。彼は、「（ハートランド・ポイントから）クロヴリーまでの距離は8マイルであり、ランディ島までは10マイルと語った。それでは、クロヴリーからランディ島までの距離はどれくらいですか」と私は尋ねた。彼の答えは22マイルだった。これ聞いて私は、三角形の二辺の和は他の一辺よりも常に長いはずであり、彼の言うとおりにすると、ハートランド・ポイント経由でも（クロヴリーからランディ島まで）距離は18マイルにすぎない（ことになり、二辺の和18マイルよりももう1辺の方が長いことになり）そんなことはないはずである」と主張し、彼と激論をした。しかし、沿岸警備隊員はまったく動じなかった。「私が言えるのは、先日ジョーズ船長とこのことについて話をしたが、船長は、「子供のころから30年間もこの沿岸のことを知っているが、クロヴリーからランディ島までの距離は、22マイルだ」と言っていましたよ」と彼は答えた。子供のころからの話という議論の前には、幾何学の出る事はなかった（松下注：Googleの衛星地図で実測してみると、クロヴリーからハートランド・ポイントまで約8マイル、クロヴリーからランディ島まで約16マイル、クロヴリーからランディ島まで直線で約21マイルあった。とうことは、ハートランド・ポイントからランディ島までの距離のみが沿岸警備隊員の誤解あるいは言い間違いということになりそうである。また、非常に長いロープを張って2点間の距離を測っているわけではなく、海には潮流があり船は流されるので、実際に船が走行した距離が増えても不思議ではない。潮流がはげしいところではかなり航行距離がひびくであろう。）</p>	
A5-29	<p>While I was in Paris I had a long discussion about my plan with Frederic Joliot-Curie. He warmly welcomed the plan and approved of the statement except for one phrase: I had written, 'It is feared that if and only bombs are used there will be universal death - sudden only for a fortunate minority, but for the majority a slow torture of disease and disintegration'. He did not like my calling the minority 'fortunate'. 'To die is not fortunate', he said. Perhaps he was right. Irony, taken internationally, is tricky. In any case, I agreed to delete it. For some time after I returned to England, I heard nothing from him. He was ill, I learned later.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 2: At home and abroad, 1968 http://russell-j.com/beginner/AB32-200.HTM</p>	<p>パリ滞在中、この計画についてフレデリック・ジョリオ＝キュリー（Frederic Joliot-Curie, 1900年-1958年8月14日；フランスの原子物理学者で、1935年に妻イレーヌ・ジョリオ＝キュリーとともにノーベル化学賞受賞）とイレーヌとは1926年に結婚したが、その際、姓を2人の旧姓を組み合わせ「ジョリオ＝キュリー」とした。晩年はワグネル・オッシュ会議の設立にも尽力）と長時間に渡って語り合った。彼は、心からこの計画を歓迎してくれたことも、たまたまを除いてこの声調（声）に感服して居た。（その一句というのは、）私が次のように書いたところであった。「もしも多数の原爆が使用されるならば、全人類の死（全体的破壊）に到る恐れがある。それは、少数の者だけにとっては幸運にも一瞬の出来事（即死）であるが、大多数の者にとっては徐々に進行する病気と同等の害の害である。キュリーは、私がその病気を「幸運にも」と表現したところを好まなかった。「死ぬことは幸運なことではない」と彼は言った。おそらく、彼の言うことは正しかったであろう。皮肉というものは、国を越えると、悪ふざげととられる場合がある（から注意が必要である）。ともかく私は、その句を削除することに同意した。英国に帰国してしばらくの間、彼から何のたよりも来なかった。後に知ったことであるが、その時彼は病気をしていたとのことであった（注：フレデリック・ジョリオ＝キュリーは、3年後の1958年8月14日に死亡。妻のイレーヌは長年の放射能研究により1956年白血病で死亡しているが、夫のフレデリックも同様と思われる。）</p>	
A5-30	<p>For a time, however, I had to put my bothers behind me, especially as they were so shapeless and amorphous, as my daughter and her husband and their children came to visit me. I had not seen them for a long time, not since I was last in the United States. Since that time my son-in-law had become a full fledged Minister in the Episcopal Church - he had been a layman and in the State Department - and he was taking his whole family to Uganda where he had been called as a missionary. My daughter had also become very religious and was whole-heartedly in sympathy with his aspirations. I myself naturally, had little sympathy with either of them on this score. When I had wished to send a sum of money to them shortly before they came to England, and had to go to the Bank of England to arrange the transfer, my request was greeted with smiles and sometimes laughter at so old and confirmed an atheist wishing to help someone to become a Minister of the Gospel. But about many things we agreed, especially in liberal politics, and I loved my daughter clearly and was fond of her family. They were to stay in England for two years to prepare for their mission work, and each July they came to North Wales where they were put up in one of the Portmeirion Hotel cottages and we saw them daily. This, with other smaller happenings, absorbed most of my time during these two months.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3, chap. 3: Trafalgar Square, 1969 http://russell-j.com/beginner/AB33-130.HTM]</p>	<p>けれども、しばらくの間、私はそうした厄介な事は背後に押しやっておかなければならなかった。その主な理由は、そうしたものは形がなくて漠然としていることと、それから娘（注：ドーラ・ブラックとの間に産まれた長女）とその夫と、その子供たちが私を訪ねてきたからである。娘の家族たちとは長いこと会っていなかった。私が最後に米国に滞在していた時（注：1944年）以来一度も会っていなかったのである。私の娘婿（善理の息子）は、以前は聖職者ではなく（俗人であり）、米国國務省に勤務していたが私が最後に米国に滞在していた以後、聖公会の専任の牧師になっており、宣教師として赴任を命じられ、（アフリカの）ウガンダへ家族全員をつれていこうとしていた。娘もまた非常に信仰心が豊かになっており、心の底から彼の大吉に共感していた。私自身は、当然のことながら、この点に関しては彼ら夫婦のどちらにもほとんど共感していなかった。彼らが英国へやって来る直前に、お金をいくらか送金してあげたいと思い、送金手続きのために英国銀行に向かかなければならなかった時、私の送金手続の依頼は、年寄った信念の堅い無神論者（ラッセルのこと）が福音の伝道者（宣教師）になる者を支援するというところで、「微笑」と「時折起こる笑い声」をもって歓迎された。しかし私たちは多くの事柄で意見が一致していた。政治においては私リベラルであるという点において、特にそうだった。もちろん、私は娘を愛していたし、娘の家族全員が好きだった。彼女と、その宣教師としての仕事の準備のため、2年間英国に滞在することになった。そしてその2年間、7月には北ウェールズにやって来て、ポート・メイリオン・ホテルの коттеジに泊まった。そして私たち夫婦は、毎日彼らと会った。こうしたことと、その他小さな出来事とともに、当時の2ヶ月間の私の時間のほとんどを占有した。</p>	

<p>A5-31</p>	<p>8 September 1961 Dear Mrs. Bartholomew,</p>	<p>... I have heard all the statements pretending that from the newest nuclear bomb there is no fall-out. All these statements are deliberate lies. I had a broadcast discussion on this point with . . . one of the chief governmental nuclear authorities in the U.S., who boasted that he had discovered how to make "clean" bombs and that his research towards this end had been dictated by humanitarian motives. I said, "Then I suppose you have told the Russians about it?" He replied with horror, "No, that would be illegal!" Was I to conclude that it was only Russian lives that he wished to spare, not American? Yours sincerely, Bertrand Russell From: Dear Bertrand Russell; a selection of his correspondence with the general public, 1950 - 1968. Allen &amp; Unwin, 1969. <a href="http://russell-j.com/beginner/DBR2-04.HTM">http://russell-j.com/beginner/DBR2-04.HTM</a></p>	<p>あなたの耳にまだ届いていないでしょうか？ つまり、最も新しい核爆弾においては放射能の落下がまったくなく（放射能塵）危険が低減することも無いという「極秘事項」から広がった馬鹿げた宣伝ですが．．． (ラッセルからの返事：1961年9月8日付) 拝復 ミセス・バートロミューズ様 私は最新式核爆弾からは放射能塵がまったく発生しないと偽って主張している声明を全部聞いて知っています。このような声明は全て故意の嘘です。私は以前、この点について、米国防政府の核に関する権威筋の主要人物の一人と放送討論を行いました。彼は、自分はきれいな核兵器（原水爆兵器）の製造法を見つけたこと、この目的のための自分の研究は人道主義的動機からなされてきたものであると誇らしげに言いました。私は言いました。「それなら、あなたはそのことをロシア人たちに伝えたでしょうかね。」彼は不快な表情を浮かべこう答えました。「いいえ、そんなことはできません。」 そうだとすると、彼が生命を助けてやりたいと思っただけは（敵国）ロシア人の生命だけであって、アメリカ人の生命ではなかったと結論づけてよいのでしょうか？（注：アメリカの「きれいな」核兵器でロシア人の生命をすくうことになるといふ皮肉）」 敬 具</p>			
<p>A5-32</p>	<p>When it was found that the average weight of a man's brain is greater than that of a woman's, this was held as proof of his superior intellectuality. When it was pointed out that an elephant's brain is even heavier, the eminent scientists scratched their heads since they could not admit that their wits were elephantine. Somebody suggested that the important thing is the proportion of the weight of the brain to the weight of the body. But this had a disastrous result: it seemed to show that women were, on the whole, cleverer than men. This would never do. So they said that it was not mere brute weight that mattered but delicacy of organisation. As this was still a matter conjecture, it could be assumed to be better in men than in women.</p>	<p>バートランド・ラッセル 男性の脳の平均重量が女性の脳の平均重量より大きいことが分ると、それは男のほうの女性よりもすぐれた知性を持っていることの証拠とされた。さらに象の脳は人間（男性）の脳よりも重く重いという事実が指摘されると、有名な科学者たちは、自分たちの知力は象並みであると認めたくないので、逃げにくれた。またある科学者は、重要な結論を導き出すべき実験を企及したのだ。もしも、しかしこれでは悲惨な結果となる。即ち、女性は全般的に男性よりも賢いことを示すことになると思われる。これはまったくうまくいかない。そこで科学者たちは、重要なものは単なる重量ではなく、脳組織の繊細さであると語った。これもまだ推測上のことであるので、女よりも男が優れているという仮定も可能である。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「科学者は科学的か？」 <a href="http://russell-j.com/KAGAKSHA.HTM">http://russell-j.com/KAGAKSHA.HTM</a></p>	<p>優れた科学者の場合は、自分の専門分野についてはラッセルのあけるような偏見はほとんどないものと思われます。しかし専門分野以外は、けっこういろいろな偏見をもっている人が多いのは多くの人が目に入っていることと思います。</p>			
<p>A5-33</p>	<p>Everybody knows how Mrs Patrick Campbell, after being rehearsed by Bernard Shaw, exclaimed: "If he should ever eat a beefsteak, God help us." She evidently had little experience of those who live upon a vegetable diet. Otherwise she would have known that a beefsteak would constitute her best hope. This is not a new phenomenon in the world's history. Abel, as we know, was a meat eater, but Cain agreed with Mr Bernard Shaw on the subject of diet.</p>	<p>パトリック・キャンベル夫人（Patrick Campbell, 1865-1940：英国の劇台女優）が、バーナード・ショー（注：菜食主義者）によるリハーサル後に、「（菜食でさえこうなんだから）あの人がピラフィチキを食べたならば、どうなったことでしょうか。」と叫んだ。彼女は間違いない。菜食主義者もさきもって実験を企及したのだ。もしも、しかしこれでは悲惨な結果となる。即ち、女性は全般的に男性よりも賢いことを示すことになると思われる。これはまったくうまくいかない。そこで科学者たちは、重要なものは単なる重量ではなく、脳組織の繊細さであると語った。これもまだ推測上のことであるので、女よりも男が優れているという仮定も可能である。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「菜食主義者の弊害さ」 <a href="http://russell-j.com/VEGETABL.HTM">http://russell-j.com/VEGETABL.HTM</a></p>	<p>冷凍技術が発達し、世界中から様々な食材が日本に輸入されていますので、今では食べたいと思えば、季節に関係なく、いろいろなものを食べるのが可能となりました。昔は冷凍技術や品種改良技術が発達していませんでしたので、地元で何が食料として利用できるかということがその地域の文化や人々の考え方に大きな影響を与えてきました。その結果、いろいろな習慣や迷信的な考え方も生まれました。</p>			
<p>A5-34</p>	<p>Of the more highly educated sections of the community, the happiest in the present day are the men of science. Many of the most eminent of them are emotionally simple, and obtain from their work a satisfaction so profound that they can derive pleasure from eating and even marrying.</p>	<p>最も幸福な教育を受けた社会階級のなかで、今日最も幸福なのは、科学者である。科学者のなかで最も著名な人たちの大部分は、情緒的には単純で、従事している仕事から深い満足を得ているので、食べることから、また結婚からさえ、快楽を得ることができるといふのである（冗談ですよ）。 出典：ラッセル『幸福論』第10章「今でも幸福は可能か？」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA21-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA21-020.HTM</a></p>	<p>ラッセルは真面目な議論の最中に、冗談をよく挿入します。その冗談には、まったくの冗談（少し悪ふざけ）、半分冗談、冗談をよそおっているが「真面目な」冗談、とういうようにいろいろなニュアンスの違いがあります。ラッセルの読者でラッセルの冗談を的確につかみず、本心で言っていると思ひ込み、そのもとにラッセルをいろいろ批評、批判する人がけっこういます。あるいは、それを知っていて、悪い例として引用したり言っているところを、その前後の文章を無視して、ラッセル批判を行っているものが、特にWEB上には散見されます。さらに比較的良心的ではあるけれども、思ひ込みによって、「曲解」している「識者」も時々います。たとえば、算算をとった『暇と退屈の倫理学』を書いた國分功一郎氏です。 <a href="http://russell-j.com/cool/kankei-bunken_shokai2014.html#r2014-2">http://russell-j.com/cool/kankei-bunken_shokai2014.html#r2014-2</a></p>			
<p>A5-35</p>	<p>Artists and literary men consider it de rigueur to be unhappy in their marriages, but men of science quite frequently remain capable of old-fashioned domestic bliss. The reason for this is that the higher parts of their intelligence are wholly absorbed by their work, and are not allowed to intrude into regions where they have no functions to perform.</p>	<p>芸術家や文学者は、結婚生活が不幸であることが職業柄必要（礼儀上必要）だと考えているが、科学者はしばしば、いまだに古風な家庭生活の幸福が可能である。その理由は、彼ら科学者の知性の高級な部分はすべて仕事に吸収されてしまっており、彼らが果たすべき役割のない領域に踏みこむことは許されぬからである。 出典：ラッセル『幸福論』第10章「今でも幸福は可能か？」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA21-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA21-020.HTM</a></p>	<p>自然科学の場合は、まず科学的探求と倫理や価値との関係をおとまわしにして、科学技術の成果をどのように利用するか（善用・悪用）は、科学の問題ではなく、人間個人（あるいはグループ）の問題とすることができ。これに対し、自然科学以外、特に人文科学は、研究そのものが倫理や価値の問題と密接に結びついている。そういった事情で、自然科学者は、自分の研究の倫理的問題に悩むことはあまりないが、人文科学や社会科学の研究者は、倫理的問題（価値に関わる問題）を常に審議してはなくてはならず、自然科学者とは人種がまったく別々であるかのような性格をもつようになりやすい。</p>			
<p>A5-36</p>	<p>There were once upon a time two sausage machines, exquisitely constructed for the purpose of turning pig into the most delicious sausages. One of these retained his zest for pig and produced sausages innumerable; the other said: "What is pig to me? My own works are far more interesting and wonderful than any pig." He refused pig and set to work to study his inside. When bereft of his natural food, his inside ceased to function, and the more he studied it, the more empty and foolish it seemed to him to be. All the exquisite apparatus by which the delicacy transformation had hitherto been made stood still, and he was at a loss to guess what it was capable of doing.</p>	<p>昔々あるところに、ブタをこれ以上いほど美味しいソーセージ製造機がありました。そのうちの1台は、ブタへの熱意を持ち続け、無数のソーセージを製造しました。もう一台の製造機は、こう言いました。「私にとって、ブタがなんたうていうんだ。私の仕掛けのほうで、いかなるブタよりもずっと興味深いし、すばらしい。」彼はブタの受け入れを拒否し、自分の内部の研究をするための仕事にとりかかりました。自然の食物を失うと、彼の内部は機能しなくなり、研究すればするほど、自分の内部は空虚であるかと思われるようになり、止まるといふこと、それまでブタをいよいよソーセージに「素晴らしい変換を行ってきた精巧な装置はすべて、止まってしまい、自分はいったい何ができるのか」と思い、彼は遠方にくれてしまいました。 出典：ラッセル『幸福論』第11章「熱意」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA22-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA22-020.HTM</a></p>	<p>外界に対する興味・関心、熱意の重要性を言っています。ただし熱意は重要ですが「熱意さえあれば」大丈夫だとはもちろん、ラッセルは言っていない。 ところが、（紀伊國屋人対象を受賞した）『暇と退屈の倫理学』のなかで、國分功一郎氏は、「ラッセルは、熱意があればよいと言っている」と曲解し、そのもとにいろいろな議論をしています。 この本では一番多く引用されているのがハイテグーですが、次に多く引用されているのがラッセルの『幸福論』です。冷静に読めば國分氏の誤読は容易にわかると思われますが、どうして國分氏はこんな初歩的な誤読をしてしまうのでしょうか？ それに國分氏の本と真逆にも最も関係しているのは、ラッセルの『幸福への讃歌』（平凡社文庫）ですが、國分氏は読んでいないようです。 興味のある方は次のページを読んでもいただければ幸いです。 國分功一郎『暇と退屈の倫理学』におけるラッセル『幸福論』の「誤読」 <a href="http://russell-j.com/cool/kankei-bunken_shokai2014.html#r2014-2">http://russell-j.com/cool/kankei-bunken_shokai2014.html#r2014-2</a></p>			





★		A6-11	<p>Why is it that, if Satan and Beelzebub were nominated as the official candidates and the Archangel Gabriel stood as an independent, the Archangel would have no chance of being elected? For that is the fact, strange as it may seem. One reason is that an independent candidate does not command such large campaign funds and therefore cannot generate mass enthusiasm by the techniques in which politicians are adepts. But this reason, again, does not take us all the way, since it leaves us wondering why men are so unwilling to subscribe to the campaign funds of independents. The answer, no doubt, is that independents are not likely to be elected, which is also a reason for not voting for them. But that only brings us back to our first question: why are they not likely to be elected?</p> <p>[From: On politician (written in Dec. 16, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/POLITICI.HTM</p>	<p>もし悪魔と墮天使が党公認の候補に指名され、大天使ガブリエルが無所属で立候補するならば、ガブリエルに当選のチャンスはないはずである。公認、不承認といふうち、しれないが、それが現実である。．．．ともかく民主主義国家において、自分たちが選んだ政治家を批判することは、我々自身を批判することであるということを経に銘じよう。我々は我々にふさわしい政治家を選ぶのである。これはどうしてだろうか。不思議だと思つてもいいが、それが現実である。</p> <p>理由の一つは、無所属の候補者は公認候補のように巨額の選挙資金を使えず、そのため「政治家」の得意な権謀術策を使うが大衆の熱意を生み出すことができないからである。しかしこの説明もやはり十分ではない。世間が無所属の候補に選挙資金を寄付したがるのはなぜかという疑問が解消されないからである。疑いもなく、無所属の人間は当選する見込みがないというのがその答えであり、またそのことが彼らに投票しない理由でもある。しかしそれは、なぜならが選挙に勝てないのかという最初の問題にひきもどしてしまふ。</p> <p>世の中の大多数の人々に比べて、恒常的により快適な境遇のもとに生きる人々は、通常、自分よりも不幸な人々への同情を感じない。彼らは、時折あからさまに「無感謝」であり、時折、人間の幸福は魂のみがかり物質的福祉とは無関係であるから（正当な）取り分以上の財産を自分たちが得たとしても貧乏人に実書を及ぼすことにはならないといった嫌悪感を抱かせる見解を採用する。例外的特権に依存する安心・安全は不正であり、それゆゑ、自分に都合のよい社会的不正のための口実を身いだいとする人間は、必ず「ゆがんだ道義的感覚」を身につけることになる。他方、自由競争の勝者である現代世界の支配者たちは、競争での成功を実現する冷酷さや様々な行為の価値を過大評価する。</p>	<p>[ n.096 : 我々に相応しい政治家]</p> <p>もちろんラッセルは自分が選んだ政治家を批判してはいけぬと言っているわけではありません。猪瀬氏を都知事に選んだ都民やみんなの党首の渡辺氏に選挙で票を入れた国民も、「裏切られた」と言つてばかりいないで、自分の見る目のなさも反省してみる必要があるだろうということです。大に唾する者は．．．。</p>	<p>もちろん、無所属であっても、現代にあつては、人気のあるタレントであれば当選する可能性があります。しかしタレントの場合は、政治家になつてもほとんど役に立たず、早晩、どこかの政界に取り込まれ、客寄せパンダになる場合がほとんどです。</p> <p>政治家、特に国会議員の場合は、選挙区や特定のグループへの利益誘導ではなく、国全体あるいは他国との関係も考慮に入れて、大局的見地から発言・行動することが望まれます。しかし、この国でも地元や支持グループへの利益誘導型の候補者に投票する選挙民が少なくありません。そうである以上、政治家の悪口をいろいろ言い、政治家の道德観のなさを誹謗の餌元のように言つても「天に唾をする」ような感じがいけません。もちろん、日本に比べれば民主主義がはるかに定着しているイギリスやアメリカにおいても同じような傾向はないわけではあります。とにかく、「我々は我々にふさわしい政治家を選ぶ」というラッセルの言葉は、時々思い出してみる必要がありそうです。</p>
★	○	A6-12	<p>Men whose circumstances have always been more comfortable than those of the majority are, as a rule, incapable of sympathy with those who are less fortunate. Sometimes they are frankly callous, sometimes they adopt the more nauseous view that happiness depends upon the soul and is independent of material well-being, so that they are doing no real harm to the poor in taking more than their share of this world's goods. Security depending upon exceptional privilege is unjust, and the man who has to find excuses for an injustice by which he profits is bound to acquire a distorted moral sense. On the other hand, the powerful men of the present day who are the victors in a free fight overestimate the value of ruthlessness and of the various acts by which success in competition is achieved.</p> <p>[From: On economic security (written in Dec. 16, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/ESECURITY.HTM</p>	<p>世の中の大多数の人々に比べて、恒常的により快適な境遇のもとに生きる人々は、通常、自分よりも不幸な人々への同情を感じない。彼らは、時折あからさまに「無感謝」であり、時折、人間の幸福は魂のみがかり物質的福祉とは無関係であるから（正当な）取り分以上の財産を自分たちが得たとしても貧乏人に実書を及ぼすことにはならないといった嫌悪感を抱かせる見解を採用する。例外的特権に依存する安心・安全は不正であり、それゆゑ、自分に都合のよい社会的不正のための口実を身いだいとする人間は、必ず「ゆがんだ道義的感覚」を身につけることになる。他方、自由競争の勝者である現代世界の支配者たちは、競争での成功を実現する冷酷さや様々な行為の価値を過大評価する。</p>	<p>[ n.100 : 例外的特権に依存する安心・安全]</p> <p>今日の状況を抱いた「競争の哲学」に対する批判</p>	
★	○	A6-13	<p>The fundamental cause of the trouble is that in the modern world the stupid are cocksure while the intelligent are full of doubt.</p> <p>[From : The Triumph of Stupidity (written in May 10, 1933 and pub. in Mortals and Others: Bertrand Russell's American Essays, 1931-1935, v.2 , p.28.)</p>	<p>猿め事(トラブル)の根本原因は、現代世界においては知的な(聡明な)人々が懐疑心でいっぱいである一方、愚かな人々が確信過剰である(cocksure)ということである。</p>	<p>[ n.103 : 確信過剰]</p>	
★		A6-14 ユニーモア 篇でも可	<p>We all ought, of course, to be highly virtuous, but the degree to which we ought to proclaim our own virtue depends upon our profession. A horse dealer or a bookmaker is not expected to have an air of piety, a sailor is not expected to be as nice in his diction as a family physician. The professions in which a man is allowed to behave in a natural manner are, of course, on the whole less lucrative than those in which a high standard of humbug is required. The corporation lawyer, the corrupt politician, and the popular psychiatrist are expected to utter moral sentiments with profound earnestness and great frequency, but in return for this hard work, they are allowed a suitable remuneration.</p> <p>[From: On being edifying (written in June 11, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/EDIFY.HTM</p>	<p>我々(人間)は、もちろん皆高潔であるべきではあるが、自分の美德をどの程度まで公言すべきかは職業によって異なる。馬喰(ハクロウ)や競馬のみ屋は信心深い態度を示すことを期待されたいないし、娯楽の言葉遣いが、かかりつけの医者ほど丁寧であることも期待されていない。自分の思うままに自然に振る舞える職業は、概してかなりの欺騙を要する職業に比べて、金銭的利益が少なくなるのは当然のことである。企業の顧問弁護士、腐敗した政治家や人気のある精神科医は、道徳的な感想(や意見)を、ごく真面目に頻りに述べなければならぬが、こういった困難な仕事の見返りに、彼らはそれ相応の報酬が与えられる。</p>	<p>[ 格言・警句集 n.106 : '困難な仕事の見返り']</p> <p>我が子の教育にあたる教師は、高い道徳的な観念を持っていてほしいと多くの親が望みますが、ラッセルが言うように、「正しいことを教える(あるいは説教する)」ことばかりに力を入れる教師は、余り良い教師とは言えません。現代日本ではむしろ、受験を意識した「知識の詰め込み」教育をしている教師の方が多いかもしれませんが、ラッセルがこのエッセイでのべているような、教化(善導)を主張する教育関係者の悪意や迫害性を自覚している人は、どれだけの人がいるのでしょうか？</p>	
★	○	A6-15	<p>One of the most important elements of success in becoming a man of genius is to learn the art of denunciation. You must always denounce in such a way that your reader thinks that it is the other fellow who is being denounced and not himself; in that case he will be impressed by your noble scorn, whereas if he thinks that it is himself that you are denouncing, he will consider that you are guilty of ill-bred peevishness.</p> <p>[From: How to become a man of genius (written in Dec. 28, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/GENIUS.HTM</p>	<p>天才になるための秘訣の最重要要素の一つは、非難の技術の習得である。あなた方は必ず、この非難の対象になっているのは自分ではなくて他人であると思わせるような仕方でも非難しなければならない。そうすれば、読者はあなたの気高い軽蔑に深く感銘するだろうが、非難の対象が他ならぬ自分自身だと感じたと同時に、彼はあなたを相手で偏屈だと非難するだろう。</p>	<p>[ 格言・警句集 n.107 : 天才になるための秘訣]</p> <p>橋本さん、石原さん、あなたたちのことですよ！</p>	
★	○	A6-16 社会的不正へ	<p>But a man who acquires a fortune by cruelty and exploitation should be regarded as at present we regard what is called an 'immoral' man; and he should be so regarded even if he goes to church regularly and gives a portion of his ill-gotten gains to public objects.</p> <p>[From: The Harm That Good Men Do , 1926] http://russell-j.com/0393HGMD.HTM</p>	<p>しかし、残酷と搾取によって財産を獲得した人は、たとえ定期的に教会に行き、不正に獲得した収入の一部を公共的な目的(対象)に寄付したとしても、「不道徳な人間」と見なされなくてはならない。</p>	<p>[ 格言・警句集 n.111 : たとえ信心深くても・ ]</p>	
★	○	A6-17	<p>Great States have, at present the privilege of killing members of other States whenever they feel so disposed, though this liberty is disguised as the heroic privilege of dying in defence of what is right and just. Patriots always talk of dying for their country and never of killing for their country.</p> <p>[From: Has Man a Future?, G. Allen &amp; Unwin, 1962, p.84]</p>	<p>超大国(強国)は、今のところ、その気になればいつでも、他の(弱小)の国々の成員を殺す特権を持っている。この自由を殺す特権は、正義と平和を守るために、死ぬ英雄的の特権として偽装させられている。愛国者は、国(祖国)のために死ぬとは言つが、国(祖国)のために外国人を殺すとは言わない。</p>	<p>[ 格言・警句集 n.113 : 愛国心(1)]</p>	

★	A6-18	Education authorities, as opposed to teachers, have not this merit, and do in fact sacrifice the children to what they consider the good of the State by teaching them 'patriotism', i.e. a willingness to kill and be killed for trivial reasons. Authority would be comparatively harmless if it were always in the hands of people who wish well to those whom they control, but there is no known method of securing this result. [From: Sceptical Essays, 1928, chap. 13: Freedom in Society.]	教師と対立したものとしての教育当局は、このような長所を持たず、子供たちに「愛国心」を言い換えれば、取るに足らぬ理由から進んで人(=外国人)を殺したり、殺されたりする心、教え込み、彼らが国のため(国益!)と考えるもののために子供たちを事実上犠牲にしている。「権威は監督下にある人たち(子どもたち)のために良かれと折っている人々の手の中に常時あれば比較的無害であろうが、この結果を確保する方法はまったくわかっていない。	【格言・警句集 n.116: 愛国心(3)-教育】 日本では戦死したら「英霊」とされ、国家犯罪が隠蔽される。(国家主義・政治的)愛国心、対「郷土愛や(文化的)愛国心」。「国益追求」と「地球益と調和する自由利益の確保」。「教育を国の発展に役立つ国民の養成を第一に考える教師及び権力者」対「一人ひとりの生きる力や想像力・個性の涵養を第一に考える教師及び社会」	白井俊雄『本気で鍛える英語 - ビジネスマンに必須の英語表現と語彙を一気に習得する』(パシ出版,2012年)のp.214にはラッセルの名言として次の2つがあげられており、( ) 内のような訳がつけられている。 The good life is one inspired by love and guided by knowledge.(すばらしい人生は、愛に鼓舞され、知識に導かれたものだ。) Patriotism is the willingness to kill and be killed for trivial reasons.(愛国心とは、善んで人を殺し、つまらぬことのために死ぬことだ。)	どちらの訳も気に入らないが、特に後者は問題である。白井氏の訳では、the willingness is to kill だけにかなり、to be killedにはかからないとしている。また、for trivial reasons は to be killedにはかかるとはkillにはかからないとして訳している。英文をよくみずに、勝手に勝手についている内容のイメージをつくりあげ日本語をあてはめてしまっている。 普通にこの英文を解釈すれば、次のような構造になっている。 the willingness to kill for trivial reasons + the willingness to be killed for trivial reasons → the willingness to kill and to be killed for trivial reasons. p215に「willingness ~ 快く~すること」という注がついている。全体の意味を正確にとらえずに、willingnessに「快く~すること」という訳を固定化して、「快く殺されるはずはないから」と考えてしまっただけで、for trivial reasonsは後者だけではなく、この引用句も、ラッセルが言ったとおりではなく、実際は下段の文脈で言われたものを、独立した警句になるように一部文脈を変えたのである。 ★従って、引用する場合には、どの書籍からという情報だけでなく、どの版(どの出版社の、何年に出版されたもの)で、ハードカバー版かペーパーバック版か、また何ページに掲載されているか、まで示すようにしたほうがよいだろう。
★	A6-19	During the French Revolution, when the Reign of Terror came to an end, it was found that no one was left alive among the politicians except prudent cowards who had changed their opinions quickly enough to keep their heads on their shoulders. The result was twenty years of military glory, because there was no one left among the politicians with sufficient courage to keep the generals in order. The French Revolution was an exceptional time, but wherever organisation exists cowardice will be found more advantageous than courage. Of the men at the head of businesses, schools, lunatic asylums, and the like, nine out of ten will prefer the supple lickspittle to the outspoken man of independent judgement. In politics it is necessary to profess the party programme and flatter the leaders; [From: The advantages of cowardice (written in Nov. 2, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/COWARD.HTM	フランス革命期の、恐怖政治が終わった時、政治家で生き残ったのは、断首されないようにすばやく意見を交えた、抜けない臆病者だけだった。その結果、政治家の中に將軍たちの秩序を保つ勇氣のある人物はまったくなくなり、軍部の榮光が二十年間続くこととなった。フランス革命(期)は例外的な一時期であった。しかし、組織が存在するところではどこでも、勇氣よりも臆病であることの方が(のし上がっていくために)より有利であることが見いだされるだろう。会社(企業)・学校・精神病院等の長になる人たちの十中八九は、独自の判断力を持ち率直に自分の考えを言う人間よりも、従順な胡麻すりを好むだろう。政治の世界では、党の綱領を信譽すると公言し、指導者たちにお世辞を言う必要がある。	【格言・警句集 n.124: どこでもコマズリガ...】 1)自分の意見を述べずに上司の意見を述べよ。 2)自分で良いと思う目標を実現しようとして、大金持ちが崩壊した組織が目指す目標の達成に協力せよ。 3)個人的な交友では、できれば権力を持った人たちのしる人々を選べ。 もちろん、このような処世術に従う位なら死んだほうがまし、とラッセルは言いますが...	最近強調されているコミュニケーション中有心の英語教育にはこういった文法を頭からしてしまっているものが多いとされる。多くの人が組織の属さず、自由に生きたいと思う。しかし、生活があるので、働かなくても一生暮らしていけるくらいのお金がない(あるいは抜きん出た能力がない)とながなが組織から離れる勇氣を持ってない。 新聞の売とる、組織に属していても、できるだけ風通しをよくしたいと考える者が(「権力や権限を持っている者」の寛さをよくしようという人間が多く...。 ラッセル曰く、 権力要はまた、臆病な人々の間では、全く姿を変えて(偽装されて)、指導者に対する唯々諾々とした服従の衝動という形をとることがあり、これが大胆な人々の権力衝動の範囲をますます増大させる結果ともなる。 (大胆な人とは、安倍首相、石原元都知事、橋本大阪市長など) It is disguised, among the more timid, as an impulse of submission to leadership, which increases the scope of the power-impulses of bold men. (出典: Bertrand Russell: Power, a new social analysis, 1938, chap. 1) [邦訳書: 『権力・その歴史と心理』(みすず書房	戦争になれば敵国の人間を殺せば殺すほど英雄になることができません。その時でも、一般国民に対しては決してその事実を表立って言うことにはしないで、「国のために一命を捧げた」と、無私精神を強調します。 ラッセルの次の言葉は有名ですので知っている人は多いと思われる。 ・愛国者は、国(祖国)のために死ぬとは言いが、国(祖国)のために外国人を殺すとは言わない。 ・文化的な愛国心であればそれほど問題ではないですが、政治的な愛国心は大変危険です。関係したラッセルの言葉を以下3つあげておきます。 ・国家主義的な型の愛国心は、学校教育でえられなければならない型の愛国心とはかけ離れたものであり、人々が不幸にして陥りやすい集団ヒステリーの形態だと書かれてはならない。 また、そのような愛国心(教育)に対し、知的にも道徳的にも防備を固めなければならない。国家主義は疑いもなく現代の最も恐ろしい悪徳である。 ・教師と対立したものとしての教育当局は、このような長所を持たず、子供たちに「愛国心」を言い換えれば、取るに足らぬ理由から進んで人(=外国人)を殺したり、殺されたりする心、教え込み、彼らが国のため(国益!)と考えるもののために子供たちを事実上犠牲にしている。「権威は監督下にある人たち(子どもたち)のために良かれと折っている人々の手の中にいつもあれば比較的無害であろうが、この結果を確保する方法はまったくわかっていない。 ・人びとが不幸なあまりに、日中(の光)のまぶしさを耐え続けるよりも(現実を直視し耐え続けるより)、「相互殺戮のほうが悪く恐ろしくないと思われるうちは、戦争を回避するための(組織的な)方法を発見する機会はない。
○	A6-20	Every student of history or sociology must be struck by the fact that the men who do the most harm are not the sort of criminals who are sent to prison but the sort to whom equestrian statues are put up. [From: Are criminals worse than other people? (written in Oct. 29, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/CRIMINAL.HTM	歴史や社会学を学んでみると、世の中にもっとも悪悪を流す者は刑務所に入れられる罪人ではなくて、銅像となって馬上に雄姿を見せる英雄の人物であることと知って誰もが愕然とするにちがいない。	ラッセルは、反戦活動のため、第一次世界大戦中に約5ヶ月間、ロンドン郊外のプリクストン刑務所に収監されました。このエッセイに書かれているように刑務所の住人を観察したりして、刑務所暮らしという貴重な体験を楽しみました。ラッセルの観察眼の確かさはここにも現れていると思われる。		



	A6-21	<p>The greatest field for snobbery is the Monarchy, which succeeds in doing more harm than most English people suppose. Few people can bring themselves to treat the opinions of a monarch with no more respect than they would show to those of a common mortal, and yet the education and surroundings of royalty are hardly such as to promote intelligence. In England, while the King has no power to dictate policy, he has the right to have it explained to him by the Prime Minister and to express his opinion of it privately to the Prime Minister. A democratic politician is very likely to be overawed by the unaccustomed pomp and to be led, almost unconsciously, into a deference for royal judgements, which is not likely to be advantageous to the public. [From: On snobbery (written in Dec. 30, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975). http://russell-j.com/SNOB.HTM</p>	<p>家柄崇拜の最大の舞台は王室であり、それが生む弊害は英国民の想像が及ばないくらいである。国王の意見を一般の人にはほとんどないだろうし、その上、王室の教育と生活環境は人間を知的にするようなものではない。イギリス国王は、政治的権力は持たないが、総理大臣に政策の説明を求めた上で自分の個人的な意見を総理大臣に対し述べる権利を持っている。平民の政治的意見は見たこともない首相の謙美に圧倒され、ほとんど無意識に国王の判断に敬意を表してしまうが、これは民衆に利益をもたらすものではない。</p>	<p>2世議員の増加や、政治的・経済的あるいは社会的に成功すると、次は閣員によって追いつけたがる権力エリートたちによりみられる俗物根性（家柄崇拜は俗物根性としばしば同屋）、日本でも家柄崇拜流行の兆し？ 少しずつ貧富の差が拡大？ 天皇「制」の意味合い、人間を序列化する叙位叙勲制度(天皇が最高勲位、国民の大部分は無勲)、『英蘭両国の名門に生まれたラッセル』伯爵、ゆえにより説得力を持つ発言(イギリス国王)を筆頭とする「家柄崇拜」批判)</p>	<p>国王や王室を天皇や天皇家に入れ替えたらどうでしょうか？ ラッセル自身、伯爵家を継いでいますが、生涯、伯爵の称号を公の場で使うことはありませんでした。 ラッセルは、貴族制度などはなくなったほうがよいと言っていますが、条件つきで英国王室の存在を認めています。また、1949年に国王から Order of Merit (メリット勲章 = 日本の文化勲章のようなもの) をもらった時には名義に感じたと「自伝」に書いています。ただし、そだからと言って、英国王室に代表される英国の貴族制度に対する批判をやめることはありませんでした。</p>
A5に移動？	A6-22	<p>Men like Einstein proclaim obvious truths about war but are not listened to. So long as Einstein is unintelligible, he is thought wise, but as soon as he says anything that people can understand, it is thought that his wisdom has departed from him. In this folly, governments take a leading part. It seems that politicians would rather lead their countries to destruction than not be in the government. A greater depth of wickedness than this it is not easy to imagine. [From: Do governments desire war? (written in Aug. 24, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975). http://russell-j.com/DESIRE-W.HTM</p>	<p>ほとんどの人が(10人中9人までが)、ちょっとした災難に見舞われると、なんともなく、索しなくなるのは奇妙なことである。35年前(1896年)に、私ははじめてアメリカを訪れた。大時のごとであるが、私が乗っていた汽車が大暴動で動けなくなり、乗客が汽車に積んであった食料を食べつくしてかたまり、それから、ようやくの思いでニューヨークに達した人があった。私は当初、乗客たちがくしを引いて、誰が人肉提供者になるか決めるのではないかと予想したが、それどころか、乗客は全員ごく陽気であった。</p>	<p>このエッセイの書かれた1932年におけるラッセルの予想(来る大戦は、多分、文明の消滅をもたらすだろう。)は、思いやないことの中にあった。戦争停止策を(積極的に)とろうとしない諸政府、反戦活動をする人間は(資本主義国にあつては)「共産主義者(赤)」であり、(社会主義国にあつては)「反革命分子」であると決めている。平和のためにも、権力をにぎりに続けることを優先する政治家たち。</p>	
★	A6-23	<p>When Gregory VII was engaged in enforcing the celibacy of the clergy, he called in the help of the lady, who, even when happily married themselves, were delighted at the opportunity of persecuting parish priests and their wives. It is the strength of this impulse in human nature that makes democracy necessary. Democracy is desirable, not because the ordinary voter has any political wisdom, but because any section of mankind which has a monopoly of power is sure to invent theories designed to prove that the rest of mankind had better do without the good things of life. This is one of the least amiable traits of human nature, but history shows that there is no adequate protection against it except the just distribution of political power throughout all classes and both sexes. [From: On vicarious asceticism (written in Aug. 3, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975). http://russell-j.com/KINYOJU.HTM</p>	<p>グレゴリウス七世が、聖職者の独身制度を強行しようとした時、一般信者に助力を呼びかけた。彼ら一般信者たちは、自らは幸福な結婚生活を享受しているにもかかわらず、教区牧師とその妻を迫害する機会を得たことを喜んだ。 民主主義が不可欠である理由は、このような人間性にひそむ本能的な衝動のためである。民主主義が望ましいのは、普通の選挙民が政治的叡知をもっているからではなく、権力を独占するいかなる集団も、必ず自分たち以外の人々はある特定の生活の便益を享受しないほうが望ましいと証明する理論を発明するがゆえに、そのことを予防するため必要なのである。そのような衝動は、人間本性の中でも最も可愛げのないものの一つであるが、全ての階級及び男女両性への権力の公正な分配以外に十分な防護策はないことは、歴史が示している。</p>		
○	A6-24	<p>Most political leaders acquire their position by causing large numbers of people to believe that these leaders are actuated by altruistic desires. It is well understood that such a belief is more readily accepted under the influence of excitement. Brass bands, mob oratory, lynching, and war, are stages in the development of the excitement. I suppose the advocates of unreason think that there is a better chance of profitably deceiving the populace if they keep it in a state of effervescence.</p>	<p>政治的指導者たちの大部分は、自分たちは利他的欲求のために行動していると多くの人々を信じ込ませてその地位を得ている。そのような信念も、興奮の影響下では一層容易に受け入れられることはよく理解できる。ブラスバンド、集団祈禱、私刑(リンチ)の執行そして戦争(注:オリンピックの招致、国会議員団による靖国参拝、マスコミによる集団リンチ、反共圏による国土侵略の恐怖、その他)と、段階を追って興奮は高まる。不合理を唱道する者たちは、どうやら、大衆を興奮状態においておけば、自分たちに都合のよいように彼らをたまたますつと良い機会がでてくると、思っているようである。 出典：ラッセル『倫理と政治における人間社会』まえがき http://russell-j.com/cool/477-PREF-02.HTM</p>	<p>説明はあまり必要ないと思われます。麻生元総理が推奨した子テスの手口です。</p>	
	A6-25	<p>The modern millionaire, though he may shower wealth upon elderly artists after they have lost their powers, never imagines that their work is as important as his own. Perhaps these circumstances have something to do with the fact that artists are on the average less happy than men of science.</p>	<p>現代の億方長者(一百万長者)は、年取った芸術家が創作力を失ってしまった後になって、長年その手にお金を儲けるように降らせることはあるかも知れないが、芸術家の仕事は自分の仕事に劣らず重要であるとは思わない。芸術家が衰えて科学者よりも幸福でないのは、たぶん、こうした事情と多少とも関係があるだろう。 出典：ラッセル『幸福論』第10章「今でも幸福は可能か？」 http://russell-j.com/beginner/HA21-020.HTM</p>	<p>自分の芸術を理解してくれているわけではなく、自分を褒めてくれるバトロウ(金持ちや権力者)には、おべっかを言わなければならない。そうしなくては、意地をはると、長い間苦しい暮らしをしなくてはならず、理解・評価されないことからくる緊張状態が長い間続くことになりかねない。我々が知っている有名な芸術家は生前に評価を受けることができた者も少なくない。しかし、生前に評価されずに無名のままに死んでいった芸術家が大量に存在していたとしても、鑑識眼がかならずしもあるとは言えない我々はそのようなことは知り得ない。</p>	
	A6-26	<p>To ensure that people should have good feelings is extremely desirable, but it cannot be achieved by preaching. On the contrary, one of the effects of a belief in sin is to justify malevolence towards the sinner under the guise of a wish to bring him to repentance. When we get rid of the belief in sin, it becomes much harder to disguise our unkind feelings, under a cloak of morality.</p>	<p>人々が良い感情を持つことを保証することは大変望ましいことであるが、それは説教によっては達成できない。それどころか、罪人を後悔させたいという願いを口実にその罪人への悪意を正当化することは、罪(の存在)を信ずることの影響の一つである。我々が罪に関する信を放棄すれば、道徳を楯にして罪人に対する冷酷な感情を偽装する(隠す)ことは、ずつと難しくなる。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「教化、善導について」 http://russell-j.com/EDIFY.HTM</p>	<p>マスコミによる集団リンチ。マスコミだけが悪いわけではなく、多くの人が「いじめ」をのぞむために、テレビや週刊誌などのマスコミがその材料を提供している。</p>	
A7 その他					

★	○	A7-01	<p>Perhaps the essence of the Liberal outlook could be summed up in a new decalogue, not intended to replace the old one but only to supplement it. The Ten Commandments that, as a teacher, I should wish to promulgate, might be set forth as follows:</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Do not feel absolutely certain of anything.</li> <li>2. Do not think it worth while to proceed by concealing evidence, for the evidence is sure to come to light.</li> <li>3. Never try to discourage thinking for you are sure to succeed.</li> <li>4. When you meet with opposition, even if it should be from your husband or your children, endeavor to overcome it by argument and not by authority, for a victory dependent upon authority is unreal and illusory.</li> <li>5. Have no respect for the authority of others, for there are always contrary authorities to be found.</li> <li>6. Do not use power to suppress opinions you think pernicious, for if you do the opinions will suppress you.</li> <li>7. Do not fear to be eccentric in opinion, for every opinion now accepted was once eccentric.</li> <li>8. Find more pleasure in intelligent dissent than in passive agreement, for, if you value intelligence as you should, the former implies a deeper agreement than the latter.</li> <li>9. Be scrupulously truthful, even if the truth is inconvenient, for it is more inconvenient when you try to conceal it.</li> <li>10. Do not feel envious of the happiness of those who live in a fool's paradise, for only a fool will think that it is happiness.</li> </ol> <p>[From: A Liberal Decalogue, 1951 (This first appeared at the end of his article 'The best answer to fanaticism - liberalism' in New York Times Magazine, 16 Dec. 1951, p.42.) http://russell-j.com/0972-ALD.HTM]</p>	<p>(自由人の十戒、はすべてとりあげる)——自由主義 一九五一年十二月、廷信への最後の解答「自由主義」という論文の末段に、「十戒」を掲げる文章があり、ではなくただ補足し広めたい意味から、「自由人たる精髓」として、次の十項目を発表した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>一、何事も絶対確実だと思込んではいけない。(この世に絶対の真理などある筈はない。)</li> <li>注：ネット上では、どんなことでもこれだよいと思っ てはいけない」と誤訳している例が多い)</li> <li>二、何事も証拠を隠してまでして、物事はこぼ価値があると 考えてはいけない。なぜなら、そうした証拠は必ず明る みに出るものだからだ。</li> <li>三、成功を確信しても、考え続けることを決してやめてはい けない。</li> <li>四、反対意見には、家族の反対でも、議論で脱けし、権威で勝 つとしてはいけない。権威を使つての勝利は、真の勝利 ではなく、単なる幻にすぎないからである。</li> <li>五、他人の権威を尊重するに及ばない。なぜなら、それが 尊敬に値しない権威であると露見するのが普通だからだ である。</li> <li>六、有害と思う意見を力で抑圧してはいけない。なぜなら 、もし力で抑えれば、それらの意見は同じようにあなたを 抑圧するからである。</li> <li>七、自分の意見が並外れたものであっても恐れてはならな い。なぜなら、現在当り前とされている意見はいずれも 当初は並外れていたからである。</li> <li>八、様々な異なる意見の中でも、よく分別を働かせて異議を 唱える方がよい。なぜなら、もしあなたがそのままに知 性に価値を認めれば、前者よりも後者の方がより深い 同意を意味するからである。</li> <li>九、たとえ真実が不都合なものであったとしても、どこまで も良心的な態度を必要とする。なぜなら、もし もあなたが本当の心算をそうとすると、もつと都合が悪い ことになるからである。</li> <li>十、愚者の楽園に暮らす人々の幸福を羨ましがってはいけ ない。それを幸せだと考えるのは愚者がだけだからであ る。</li> </ol>	<p>「由らしむべし、知らしむべからず」の精神では、い ずれほころびがでる。 権威を制限する理由、あるいは隠れ蓑として、現 政権は、「国民の生命を守る」「土を死守する」 「国民の生活、暮らしを守る」などと繰り返して、批 判をそらしている。 原野の安全審査に厳しい目をそそぐ、規制委員会の 「ついでに」で、(注)「土を死守する」が、自分なりに の報道で、昨日、日本経済新聞(朝刊)に出た。 時間のかかる思考は敬遠し、早く結論をだしたい人 が多い。 しばらくそれで事が問題なく運ぶかも知れないが、 問題がいろいろ起きて結局は、「急がば回れ」と いうことになりやすい。 (10) なかなかこのような心境に達するのは難しく 、(つい)強んでしまいがちだが、自分なりに たいことを努力してやっているうちに、いずれは無理 をしなくても、このような心境になっていくと思わ れます</p>	
★	○	A7-02 A6-1 2と重複	<p>Men whose circumstances have always been more comfortable than those of the majority are, as a rule, incapable of sympathy with those who are less fortunate. Sometimes they are frankly callous, sometimes they adopt the more nauseous view that happiness depends upon the soul and is independent of material well-being, so that they are doing no real harm to the poor in taking more than their share of this world's goods. Security depending upon exceptional privilege is unjust, and the man who has to find excuses for an injustice by which he profits is bound to acquire a distorted moral sense. On the other hand, the powerful men of the present day who are the victors in a free fight overestimate the value of ruthlessness and of the various acts by which success in competition is achieved. From: On economic security (written in June 1, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/ESECURITY.HTM</p>	<p>世の中の大多数の人々に比べて、恒常的により快適な境遇 のもとに生きる人々は、通常、自分よりも不幸な人々への 同情を感じない。彼らは、時折自分からさまたげ「無感」であり 、時折、人間の幸福は魂のみにかかわり、物質的福福祉とは 無関係であるから(正当な)取り分以上の財産を自分たちが 得たとしても貧乏人に実害を及ぼすことにはならない といった嫌悪感を抱かせる見解を採用する。例外的特権 に依存する安心・安全は「不正」であり、それゆえ、自分に 都合のよい社会的不正ののための口実を見いだすとする人 間は、必ず自分と道義的感覚を失いつけることになる。 他方、自由競争の勝者たる現代世界の支配者たちは、冷 酷無慈悲さをはじめ、競争での成功を実現する様々な行為 や資質の価値を過大評価する。</p>	<p>【n.0086、競争の勝者の冷酷さ】 これは、1929年の世界大恐慌から世界がまだ立ち 直っていない1932年に、ラッセルが Hearst 系の雑 誌に掲載したエッセイに出てくる言葉です</p>	<p>そう。 だから口でいくら同情心を表しても、表面的な理解なので、自分 がいったことをすぐ忘れてしまい・・・。某首相も、某人々 レントも・・・。 偽善者(自覚していない者も含む)や論理的に余り物事を考 えられない人(困窮者だが、権力がない場合は、周囲に少し迷惑を かけるだけです)。 しかし、これが、政治的あるいは経済的な権力者の場合には 、(目利きをする一部の追随者を除いて)多くの国民、ある いは世界中に、被害をもたらす。 自分たちの利益(や権力欲)が中心であっても、国民のため 、国民の生命を守るため、世界平和のため、などと連呼しても 、むなしくひびく。 しかし、そういう言葉や余り疑問をもたずに、受け入れて いる国民が多すぎるように思われるか？ 強い者(富める者)がますます強くなれば(富めば)、いずれ 弱い者(貧しい者)にもおこぼれが行く。そうすれば国全体が 豊かになる、という哲学(考え方)を内心抱いている人々。 権威がますます拡大しても、国全体が豊かになればよいと内心 考えている人々。 1. 2%の国民が国の富の大部分を有しているアメリカが、い つも見本にする人々。 日本においても、非正規労働者が非常に増えてしまったが、そ の事態に危機感を抱いている人が少なすぎるのではないかと。 大きな書店にくと、だいぶ前から、反韓(嫌韓)、反中国(嫌中 国)のコーナーがもうけられていて、日本に対して友好的な感 情をもっていない国々(の政府や国民)を罵倒する本であられ ています。オトナ戦争の時やブッシュイラクに米軍を送 っていたときは反米(ただし、対中・韓と異なり、反米政府で あり反米国民はほとんどなし)図書がたくさん置かれていま した。 反韓(嫌韓)、反中国(嫌中国)のほとんどが、愛国主義の衣を まとうているのも共通しています。某明治天皇の玄孫(やしゃ こ)とかいふ人物が出ている本も日本礼儀いづつもとです 。そうすることによって、(天皇家につらなっているとい うことで)自分の価値が高まると思っているようです。某歌手との 打算的な?恋愛騒動では価値を落とすたようです。話題にな る人物は商品価値があるといふことで、マスコミは引き続き利 用し続けるでしょうが・・・。</p>
★	○	A7-03	<p>There are those who say that love is the key to understanding, but if scientific understanding is meant, I do not think they are right. It would, however, be even more unscientific to regard hatred as the key to understanding. Every emotion, whether friendly or unfriendly, distorts judgement. If astronomers had regarded the moon either as a deity or as a devil it would have taken them much longer to construct, an adequate theory of the moon's motions. Where human beings are concerned there is, however, a difficulty. We do not, as a rule take a very great interest in the doings of other people unless we either love or hate them. If we do not take an interest in them, we do not take the trouble to get information about them; while if we either love or hate them, the information which we shall obtain is likely to be misinformation. This applies in particular to one nation's knowledge of another nation. [From: As others see us (written in Mar. 23, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/AS-O-SEE.HTM</p>	<p>愛が(対象を)理解する鍵であると説く人もいるが、その 理解が科学的理解のことであれば、この言葉は正しいと私は 思わない。けれども、情報を物事の理解への鍵と見直す のは、さらに非科学的であろう。すべての感情は、理解しよ うとする対象について好意的であろうと悪意をもってい ようと、必ず判断をゆがめる。天文学者が月を神もしくは 悪魔と見なしたならば、彼らは月の動きに関する満足してい く理論を作り上げるのにはるかに多くの時間を要したであ らう。しかし、人間が関係する場合は、困難が存在する。 一般的にいって、我々は他人の行動について、一般的に言 って、その人を愛したり憎んだりしたりしていない限り、余 り興味を持たない。他人に興味を持たなければ、あえて他 人に関する知識を求めようとはしない。だが愛したり憎 んだりする限り、我々が他人について得る情報は、間違えや りとなる傾向がある。このことは特に、他国に対する知識 についても言える。</p>	<p>[n.97: 愛憎感情と先入観] もちろん、大地震や大事故などの自然災害や人災が おこれば、知らない人々の安全についても無関心で はいられなくなります。 ここで言っているのは、あくまでも「一般的にい て(通常の大部分)は」ということであり、「直接 関係していない人や事柄」に対しては、お互いさま さであり、ほとんど無関心、時には「冷酷」で さえあります。 他国に対する理解や好意の感情は、マスコミによ って流される情報によってかなり影響されます。事 件が起らないより起こったほうが「生き生きと する」(大きな事件が起こってこれたほうがよい とさえ考えるマスコミ関係者も少なくない)とい うのが現実ですので、マスコミ報道については、常に 冷静な目で見る必要があります。 最近では中国と韓国(または韓国政府や韓国 国民)を罵るような報道が多いですが、逆に、 中国や韓国における、日本政府や日本国民を罵 るような報道を同時にみることに、自分な りの冷静な判断をすることが望めます。 マスコミと賢くつきあうためには、メディアリテ ラー教育は非常に重要です。 「時の」政権を批判することになる題材は、公教育 では無理でしょうから、「過去の」政権(いかなる 政党であっても)が政権発足当初に言っていたこ とと実際にやったことを比較的教育を行えば、自 身が得る教訓が得られるのではないと思わ れます。</p>	
★	○	A7-03/04 知識と知 意へ	<p>I imagine that most Americans view Latvia, for example, without either love or hate and the consequence is that they know nothing about Latvia. If they love or hate a country their newspapers will supply them with favourable or unfavourable information, as the case may be, and their prejudices will gradually come to be confirmed by a mass of what appears to be knowledge. http://russell-j.com/AS-O-SEE.HTM</p>	<p>たとえば、ほとんどのアメリカ人は、ラトヴィアを好意の感 情で見ない。その結果、アメリカ人はラトヴィアについて は何一つ知らないということになる。もしもアメリカ人 がある国を好きになったり、嫌いになったりすれば、自国ア メリカの新聞は、事情に応じて(場合に応じて)、その国に 関する好意的あるいは悪意のある情報を国民に提供す るのである。アメリカ人のその国に対する偏見は、大抵の知識ら しいものによって、たいてい強められるようになるだろう 。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「 他者の視点で見ること」 http://russell-j.com/AS-O-SEE.HTM</p>		

	<p>A7-04</p> <p>It cannot be denied that tact is a virtue. The sort of person who always manages to blurt out the factless thing, apparently by accident, is a person full of dislike of his or her fellow creatures. But although tact is a virtue, it is very closely allied to certain vices; the line between tact and hypocrisy is a very narrow one. I think the distinction comes in the motive: when it is kindness that makes us wish to please, our tact is the right sort; when it is fear of offending, or desire to obtain some advantage by flattery, our tact is apt to be of a less amiable kind. Men accustomed to difficult negotiations learn a kind of tenderness towards the vanity of others and indeed towards all their prejudices, which is infinitely shocking to those who make a cult of sincerity.</p> <p>[From: On tact (written in Feb. 1, 1933 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/TACT.HTM</p>	<p>「醜態応答の才( 気取を働かせること )」が一つの美德であることは、否定できない。まったく思いがけず、場所にとくわぬ発言を次々とする人間は、仲間たちを益から疎まれるだろう。しかし、「醜態応答の才( 気取を働かせること )」は美德であるが、ある種の悪徳とときわめて密接に繋がっている。即ち、醜態応答の才( 気取を働かせること )と偽善の境界( 線 )はきわめて狭い。両者の違いはその動機にあると思われる。即ち( 相手 )を喜ばせようとする「親切心」からくるものである場合は、醜態応答の才( 気取を働かせること )」は正しいものであるが、それが相手の感情を損なう不安、あるいはおべっか( お世辞 )により何らかの利益を得ようとする気持ちにもとづくものである。「醜態応答の才( 気取を働かせること )」はあまり好感もてないものになりやすい。他人との困難な交渉に慣れている人間は、相手の虚栄心に対するいやむし各種の偏見に対する思いやりを体得するが、誠実さを第一と考える者にはそれは非常に不愉快なものである。我々は今まで余りに相手に支配され続けており、肉体労働や頭脳労働のとりこになっている状態からの解放手段として機械を十分に活用してこなかった。我々はその気になれば、もっと余暇が持てる。我々は皆、その気になれば子供を軍隊組織の便利構成単位( 車軍 )にしてしまわなくて、彼らの権威に至る所表現を与えることができる( ? )。そうしないのは、我々は「美よりも力( 権力 )」を愛するからである。・・・。</p>	<p>[ n.099 : 醜態応答の才 ]</p>	<p>自分が行った悪事も長い年月がたつと、そういった悪事を行ったことさえも忘れてしまう。しかし、ふとした偶然のきっかけから(あるいは第三者におぼされて)、往事のあやないことを指摘され、「記憶にありません」とか言って逃げていても、まだいろいろ証拠をつぎつけられ、マスコミがとりあげられるようになり、弁解がきかなくなり、ついには逃げられなくなり、最悪の場合は自己顕彰してしまふ。「記憶にありません」という逃げ口上。それは国民によく知られていて、政治家やブラック企業の経営者や悪徳官僚だけでなく、権力のない一般国民も、自分の立場があぶなくなる、彼らのマネをして「記憶にありません」を多用するところ。</p>	
	<p>A7-05</p> <p>... We have allowed ourselves to be too much dominated by work and have not sufficiently used machines as a means of liberation from the thraldom of manual and mental labour. We could, if we chose, all have more leisure. We give artistic expression to their impulses, rather than so as to be convenient units in a regiment. We do not do this because we love power more than we love beauty.</p> <p>[From: In praise of artificiality (written in Nov. 9, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/ARTIFICI.HTM</p>	<p>現代の若者のほとんどは、巨大な組織の末端の地位から人生のスタートを切らざるをえない。彼の上司が経験豊かな学校の先生が持っている寛容の精神の持主であるのは種であり、組織の中の「良い」子に昇進の道を与えがちである。ば、人に従うことを覚えた人間は、自分の個人の創意を志すというが権威に対する敬意を燃すに至り、攻撃的で残忍な志向を身につけるに至る。</p>	<p>どの分野においても、廉くなっていくと( =ポスト)があがっていくと)、相手を説得しなくても( 説得する努力をしなくても )上下関係( 権力 )だけで自分の思ったことができるようになっていきます。そこから不奉命論議いがおこり、世界が見えなくなり、「衆の王者」状態になりやすくなります。そのような事態に陥らないためには、権力をもっていないでできるだけ行使せず、できるだけ論理的に説得する習慣をしつかり身につけてこそが肝要となります。</p>		
	<p>A7-06</p> <p><b>重獲のため削除</b></p>			<p>愛国心教育を強調するようになったのは、それだけ日本の「相対的」国力が低下した恐れがもれない。「愛国心」を強調することによって「利益」を得るひとは、国民になんとか「愛国心」を植え付けようとする。日本をいろいろな分野で「支配」できる、権力や権限を持っている人々にとっては、「愛国心」を持つ人間が増えれば都合が良く、・・・。</p>	
★	<p>A7-07</p> <p>But nowadays almost every young man has to begin with a very subordinate post in some vast organisation. His superiors seldom have the tolerance of the experienced schoolmaster and are likely to give promotion to the 'good' boy. ... The man who has learnt to obey will either have lost all personal initiative or will have become so filled with rage against the authorities that his initiative will have become destructive and cruel.</p> <p>[From: On being good (written in Nov. 18, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/BEING-G.HTM</p>	<p>新聞「注：現在ではテレビなどのマスコミ」の発達に伴い、昔と比べ、現代では、死後の名声に対する欲求が減少した。現世での名声は、現在では昔では考えられなかったほどずっと大きなものとなったので、昔のように歴史に名を残して後世の読者のかすかな賞賛を求めようとする人はほとんど見られなくなった。昔の歌や詩、大作家の名声は、最盛期のアレクサンダー大王やジュリアス、シーザーの名声をはるかに上回る。アルキメデスの名前が生きていた時代から今日までに知った人の数よりも、現在アインシュタインの名を知っている人の数の方が多いだろう。全てがこのようにあるため、その結果、現代は昔の人に比べてはるかに短命な形の賞賛を追い求めることになる。人間の行いは今では昔とことなり威厳がなくなり、広く大衆にアピールすることに努力がなされるようになる。</p>	<p>有名であることが人間としてすぐれていると勘違山頭火のような世捨て人は例外として、愛する人や親しい人からほめられたいと思うのは人情です。身近な人からの賞賛だけではなく、世間から賞賛を受けたいという場合、どういった人からほめられたいかは時代によって、人によって様々だというのは、ラッセルのいうとおりです。それにしても、現代人は昔の人に比べてはるかに短命な形の賞賛を追い求める、また、人間の行いは今では昔とことなり威厳がなくなり、広く大衆にアピールする努力がなされるという80年前の指摘は、政治家だけでなく、多くの人にとって耳が痛いのではないでしょうが。</p>		
	<p>A7-08</p> <p>The desire for posthumous fame has grown less than it was in those days, because of the growth of newspapers. Contemporary fame can now be much greater than it could be in former times that it has almost crowded out the wish for the slender trickle of admiration derivable from the readers of history. The fame of a film star at the present day far exceeds that of Alexander or Caesar at the height of his career. Probably more people know the name of Einstein now than have known the name of Archimedes in all the centuries from his day to our own. The effect of all this is that admiration is sought in more ephemeral forms than those formerly desired. Men's work becomes less statuesque, and there is more effort to make it appeal to all and sundry.</p> <p>[From: Whose admiration do you desire? (written in Dec. 12, 1931 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/ADMIRE.HTM</p>	<p>現代社会においては、専門家の重要性がしだいに増してきているが、その予期しない、また意図しない結果の1つは、かつて自分の力を発揮した人間生活のほとんどの分野で、「平均的な普通の人間は皆「受身」になっているということである。</p>	<p>[M]テレビや新聞を全然見ない(あるいは見ない主義)の人もいますが、大部分の人々は毎日マスコミづけとなっており、それらのメディアから多くの情報を得たり、種々の娯楽を享受したりしています。これには国民の共通理解のスピードアップ(ただし、あくまで可能)というプラス面もありますが、自分の頭で考える、またそのために主体的に情報を収集するという、一個の独立した市民として一番重要な能力の一つを身につけることがおろそかになる危険性もあります。</p>		
	<p>A7-09</p> <p>One of the unforeseen and unintended results of the increasing importance of experts in the modern world is that, in a great many departments of life, the ordinary man has become passive where he used to be active.</p> <p>[From: Are we too passive? (written in Feb. 3, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/PASSIVE.HTM</p>				
	<p>A7-10</p> <p>Throughout recent years, a vast amount of money and time and brains has been employed in overcoming sales resistance, i.e. in inducing unoffending persons to waste their money in purchasing objects which they had no desire to possess. It is characteristic of our age that this sort of thing is considered meritorious.</p> <p>[From: On sales resistance (written in June 22, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/SALES-R.HTM</p>	<p>近年、販売抵抗(sales resistance)を乗り越えるために、即ち控えめな人たちに働きかけ、彼(彼女)等の財布のひもをゆるませ、自ら欲しと全然思わぬ物品を購入させようとする、膨大なお金と時間と頭脳が費やされてきた。そしてこういった事柄(たくさん物売って賞賛成績をあげることに)が立派なことであるかのように考えられるのが、我々の時代(現代)の1つの特徴である。</p>	<p>このエッセイ(「販売抵抗について」)は、80年前に書かれたものですが、現代でもほぼそのまま受け流して買っただろうと思います。来年の流行の色、流行の服、流行の○○は、これにしようと考え、(主として)企業関係者が現在多数いますが、その術中にはまる。(あるいは無知無識なく幸運に受けられる)人が少なくありません。多くの人が本当に望むものであるならば、それも悪いことではありません。それがいつのまにか感覚が麻痺して、与えられることばかり望む(自主性の欠如する)ようになっているとしたら、不幸な事態といわなければなりません。</p>	<p>「すぐに買いたい」とは思わないまでも、「あると便利そう」「コスト、パフォーマンスがよさそう」とか思って、通販サイトで見ようと思ったら、何となく使わなくなるとか、売れ残るとか、買ったものの使い方がわからなくなるとか、家にそろったものの使い方がわからなくなるとか、家庭もすくなくないところ。それにしても、現代人は昔の人に比べてはるかに短命な形の賞賛を追い求める、また、人間の行いは今では昔とことなり威厳がなくなり、広く大衆にアピールする努力がなされるという80年前の指摘は、政治家だけでなく、多くの人にとって耳が痛いのではないでしょうが。</p>	
	<p>A7-11</p> <p>The flight of time, the transitoriness of all things, the empire of death are the foundations of tragic feeling. Ever since men began to reflect deeply upon human life, they have sought various ways of escape: in religion, in philosophy, in poetry, in history - all of which attempt to give eternal value to what is transient. While personal memory persists, in some degree, it postpones the victory of time and gives persistence, at least in recollection, to the momentary event. The same impulse carried further causes kings to engrave their victories on monuments of stone, poets to relate old sorrows in words whose beauty (they hope) will make them immortal, and philosophers to invent systems providing that time is no more than illusion. Vain effort! The stone crumbles, the poet's words become unintelligible, and the philosopher's system are forgotten. Nonetheless, striving after eternity has enabled the passing moment.</p> <p>[From: On old friends (written in Jan. 4, 1933 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.) http://russell-j.com/O-FRIEND.HTM</p>	<p>時の急速な経過、森羅万象のはかなさ、死の世界は、悲劇的感情のもとである。人類が人生について深い考察をめぐらし始めて以後、人類は様々な逃避方法を探してきた。宗教、哲学、詩、歴史において、これら全てにおいて、移りゆく物事(事象)に永遠の価値を与えようと試みている。個人の記憶が存続する間は、幾分か時の(流れ)勝利を遅らせる。時々刻々の出来事も少なくとも、思い出の中で持続させる。同様の衝動がいつそう強くなると、諸国の王は戦勝記念の石碑を彫らせ、詩人たちは自分の名を不朽にするような美しい言葉で昔の悲話を物語り、哲学者は時(間)は単なる幻影(虚像)にすぎないことを立証する哲学体系を發明する。むなしい努力よ！石碑は崩れ、詩人の言葉は読解不能となり、哲学者の体系は忘れられる。にもかかわらず、永遠(なるもの)を追求する努力は、移りゆく瞬間を価値あるものとしている。</p>	<p>[M]テレビや新聞を全然見ない(あるいは見ない主義)の人もいますが、大部分の人々は毎日マスコミづけとなっており、それらのメディアから多くの情報を得たり、種々の娯楽を享受したりしています。これには国民の共通理解のスピードアップ(ただし、あくまで可能)というプラス面もありますが、自分の頭で考える、またそのために主体的に情報を収集するという、一個の独立した市民として一番重要な能力の一つを身につけることがおろそかになる危険性もあります。</p>	<p>「すぐに買いたい」とは思わないまでも、「あると便利そう」「コスト、パフォーマンスがよさそう」とか思って、通販サイトで見ようと思ったら、何となく使わなくなるとか、売れ残るとか、買ったものの使い方がわからなくなるとか、家にそろったものの使い方がわからなくなるとか、家庭もすくなくないところ。それにしても、現代人は昔の人に比べてはるかに短命な形の賞賛を追い求める、また、人間の行いは今では昔とことなり威厳がなくなり、広く大衆にアピールする努力がなされるという80年前の指摘は、政治家だけでなく、多くの人にとって耳が痛いのではないでしょうが。</p>	

	<p>A7-12 ざしがえ</p> <p>A hundred years ago, in a society now extinct, the point of view which puts charity above independence now seems to us grotesque. But in newer forms it still survives and is still politically powerful. It is this very same outlook which makes large numbers of people think it better that the unemployed should be kept alive by private benevolence than that they should have the legal right to support by the public authorities. In a just world, there would be no possibility of charity. 出典：Bertrand Russell: On charity, Nov. 2, 1932. In: Mortals and Others, v.1 (1975) http://russell-j.com/CHARITY.HTM</p>	<p>&lt;「慈善行為の必要のない社会(2)&gt; 今から100年前の、現在では消滅した社会における(人々の)直なりげ、を信じている人々の進歩を確立する考え方は、今日の我々にはグロテスクに映る。しかしそれは、新しい形態では依然として現在でも残っており、いまだ政治的に有力である。失業 者たちは公的権威による支援を求める法的権利を持つよりも、私的慈善によって生存を保たせようとする。いまだ多額の金に考えさせるのは、まさにこの種の物の 見方である。慈善が行き渡った、正しい世界では、「慈善」の可能性はなくなるだろう。</p>	<p>最低限度の文的生活を営む権利(生存権)は、憲法によって保障されていることになっているが、歴代の政府はいろいろ理由をつけて守っていない。憲法は時の政府の都合のよいように解釈されるようでは、憲法に値しない。非正規労働者をとどろかすのを助長した責任が政府にはあるが、まったく反省をしていない。 低賃金の非正規労働者は、正規労働者とくらべて、景気のよいときに雇用し、景気の悪い時に解雇しやすいので、企業の望むところであるが、政府は企業への利益を第一に考えているとしたが言えないではないか？</p>
	<p>A7-13</p> <p>Like most of my generation, I was brought up on the saying: 'Satan finds some mischief still for idle hands to do.' Being a highly virtuous child, I believed all that I was told, and acquired a conscience which has kept me working hard down to the present moment. But although my conscience has controlled my actions, my opinions have undergone a revolution. I think that there is far too much work done in the world, that immense harm is caused by the belief that work is virtuous, and that what needs to be preached in modern industrial countries is quite different from what always has been preached. Everyone knows the story of the traveller in Naples who saw twelve beggars lying in the sun (it was before the days of Mussolini), and offered a lira to the laziest of them. Eleven of them jumped up to claim it, so he gave it to the twelfth. This traveller was on the right lines. But in countries which do not enjoy Mediterranean sunshine idleness is more difficult, and a great public propaganda will be required to inaugurate it. I hope that, after reading the following pages, the leaders of the Y.M.C.A. will start a campaign to induce good young men to do nothing. If so, I shall not have lived in vain. From: In Praise of Idleness, 1935, chap. 1. http://russell-j.com/cool/321-0101.HTM</p>	<p>私と同じ世代の人々と同様、私も「何もしないでなまけている者のところには、悪魔がやってきて、何か不審の種を見つけて出す」(宗教詩人 Issac Watts, 1674-1748 の句。Moral songs for children にある。)という格言に則って、「(いつも何かしているように)育ちた。私は非常に勤勉な子供であった。言われたことは何でも信じ、任された任事主になり、私はその良心によって現在まで、生計けんめい働き続けてきた。しかし、私の良心は、私の「行為」を支配してきたけれど、私の「考」えはすっかり変わってしまった。私は次のように考えている。即ち、これまで、世界中で、あまりにも多くの仕事(労働)がなされて、仕事は悪いものだとどういふ信念が恐ろしく多くの善をひきおこしており、(それゆえ)現代の産業国家で教えることと必要のあることは、今までいつも説教されてきたことはまるきり違うものである。と。 日本など、このようにしている12人の学生を見つ(ムソリーニの時代以前のことであった。)その中で最もなまけものに1リラをやろうと申し出た。あのナポリの旅行者の話を知らない人はいないだろう。。11人の乞食がそれをもちあうと飛び上がったので、その旅行者はしつとして12人目のものにお金を与えた。これは何でとも信じないことは、正しい。しかし地中海の陽光のめぐみを享受できない寒い国々においては、何もせず怠惰でいることははかに難しいので、怠惰を始めるには、大規模な大衆公的な宣伝が必要となるだろう。キリスト教育青年会の指導者諸君は、以下のページを讀まねば、必要な手助けをしないように導く運動を始め、て下さることを希望する。し そうなれば、私としては生き甲斐があったことになろう。</p>	
	<p>A7-14</p> <p>... The desire to obtain a confession was the basis of the tortures of the inquisition. In Old China, torture of suspected persons was habitual, because a humanitarian Emperor had decreed that no man should be condemned except on his own confession. For the taming of the power of the police, one essential is that a confession shall never, in any circumstances, be accepted as evidence. This reform, however, though necessary, is by no means sufficient. The police system of all countries is based upon the assumption that the collection of evidence against a suspected criminal is a matter of public interest but that the collection of evidence in his favour is his private concern. It is often said to be more important that the innocent should be acquitted than that the guilty should be condemned, but everywhere it is the duty of the police to seek evidence of guilt, not of innocence. Suppose you are unjustly accused of murder, and there is a good prima facie case against you. The whole of the resources of the State are set in motion to seek out possible witnesses against you, and the ablest lawyers are employed by the State to create prejudice against you in the minds of the jury. You, meanwhile, must spend your private fortune collecting evidence of your innocence, with no public organization to help you. If you plead poverty, you will be allotted Counsel, but probably not so able a man as the public prosecutor. If you succeed in securing an acquittal, you can only escape bankruptcy by means of the cinemas and the Sunday Press. But it is only too likely that you will be unjustly convicted. If law-abiding citizens are to be protected against unjust persecution by the police, there must be two police forces and two Scotland Yards, one designed, as at present, to prove guilt, the other to prove innocence; ... 'inquisition (名)：審理。(大文字 The Inquisition)で(異端審理の)宗教裁判(所) / decree (動)：法律として宣告する / prima facie 一見したところでの / plead (動)：弁護する / 喚問する Counsel (名)：辯護法廷弁護士 / acquittal (名)：無罪放免、釈放 / convict (動)：有罪と宣告する；有罪と決する / law-abiding 道法の、法を守る From: Power, a new social analysis, 1938, chap. 18: The Taming Power</p>	<p>。・・・カトリックの異端審問(注：正統信仰に反する教義(異端)を信じている人々の罪を問うた者)に対するカトリック教会による宗教裁判)における拷問の根柢にあったものは、自白させたいという欲求であった。古代中国では、容疑者を拷問にかけけるのは、習慣的なものになっていたが、それは人間性豊かなある皇帝が、いかなる者も自白したのではなければ、有罪の判決を受けることはないと言明したからであった。有罪の権利を削ぐなら、おさえつけておだやかなものにさせる)ために必須のことは、いかなる状況においても、決して自白を証拠として採用してはならないということである。 けれども、このような実証は、必要であるが、決してそれだけでは十分ではない。すべての国々の警察制度は、容疑者にとって不利な証拠を集めることが公衆の利益になる事柄であり、容疑者にとって有利な証拠を集めることは全くこの容疑者に関わる私的の関心事に過ぎないという仮定。その基礎を置いている。罪を犯した人間が、有罪の判決を受けることよりも、無実の人間が放免されることのほうが重要だとよく言われることである。しかし、いかなる場合においても、警察の任務は犯罪の証拠を探することであり、無罪の証拠を探し出すことではない。かりにあなたが不当に私人罪を犯したと見られても、あなたに見つけて十分な証拠があるとしてみたまえ、そうすると、国家の資源の全体があなたに不利な入手可能な証拠を探し出すために動員され、国家は最も有能な法律家を雇って、陪審員の中にあなたにとって不利な偏見を植えつけようとする。他方、あなたはその偏見を打ち消してくれる組織は何一つなしに、自分の無罪を証立てるものを集めるために、私的財産を費やさなければならない。あなたが貧乏だと言いつれば、(国選)弁護人の割当てもあるであろうが、しかしその弁護人は、検事ほど有能ではない。かりにあなたが有罪と見られても、映画や日曜新聞にあなたの記事が、または破産を免れることができるに過ぎないであろう(注：同情が集まるからなのか?)。しかし、(実際は)不当な有罪の判決を受けるほうがずっと多そうである。 法律を守る市民が、警察の不当な迫害から保護されるべきだとすれば、一つの警察力と、一つの捜査課刑事部がなくてはならない。一つは、現在のように、犯罪を立証する意図をもったものであり、いま一つは無罪を立証するためのものでなくてはならない。・・・</p>	
	<p>A7-15</p> <p><b>重複のため削除</b></p>		
	<p>A7-16</p> <p>* This obituary (full text) will (or will not) be published in The Times for June 1, 1962, on the occasion of my lamented but belated death. It was printed prophetically in The Listener in 1936...</p> <p>His life, for all its waywardness, had a certain anachronistic consistency, reminiscent of that of the aristocratic rebels of the early nineteenth century. His principles were curious, but such as they were, they governed his actions. In private life he showed none of the acerbity which marred his writings, but was a genial conversationalist and not devoid of human sympathy. He had many friends, but had survived almost all of them. Nevertheless, to those who remained he appeared, in extreme old age, full of enjoyment, no doubt owing, in large measure, to his invariable health, for politically, during his last years, he was as isolated as Milton after the Restoration. He was the last survivor of a dead epoch. From: Unpopular Essays, 1950, chap. 12. http://russell-j.com/cool/411-1201.HTM</p>	<p>この死亡記事は、懐(いた)まれはしたが遅きにすぎた私(ラッセル)の死に際して、1962年6月1日にタイムズ紙に掲載されるであろう(あるいはされないのであろう)。同記事は、1937年のリスナー誌に、予言的に載せられたものである。(松下注：実際は、1936年8月号に掲載。ラッセルの記憶違いか?) ・・・前略、中略・・・ ラッセルの生涯は、そのあらゆる不従順な奔放さにもかかわらず、19世紀初期の貴族の反逆者たちをおもいださせるような、ある種の時代錯誤的な盲目一貫性があった。彼が残り続けたのは、極めて老いて、満ち足りた、そして、(とりたてて言う程のものではないが)それはそれとして、彼の行動を支配したのである。彼は、私生活においては、彼の著作を備つけていた「辛らつき」をまったく示さず、羨望よく談話をする人だったためであり、人間的同情心にも欠けていなかった。彼は、多くの友人、いとこ、いとこのほとんど誰よりも長生きをした。それにもかかわらず、同様に生き延びた友人たちの眼には、彼はその非常な高齢においても羨しみに満ちあふれているようにみえた。それは、羨しもなく、彼のあらゆる健康によるところが大きかった。というように、彼は、その晩年に、政治的には王政復古後にミルトン同様、孤立してしまっていたからである。ラッセルは、逝ける時代の最後の生存者であった。</p>	

<p>A7-17</p>	<p>But is there not, I said, 'a grave danger that the perusal of such literature may lead young men, ay, and young women too, into deadly sin? Can I look my fellow men in the face when I reflect that perhaps at this very moment some unwedded couple is enjoying unholy bliss as a result of acts from which I derive a pecuniary profit?'</p> <p>'Alas,' Dr. Mal'tako replied, 'there is, I fear, much in our holy religion upon the parable of the ninety-nine just men who needed no repentance, and caused less joy in Heaven than the one sinner who returned to the fold? Have you never studied the text about the Pharisee and the Publican? Have you not allowed yourself to extract the moral from the penitent thief? Have you never asked yourself what it was that was blameworthy in the Pharisees whom our Lord denounced while eating their lunch? Have you never wondered at the praise of a broken and contrite heart? Can you say honestly that your heart, before you met Mrs. Molyneux, was either broken or contrite? Has it ever occurred to you that one cannot be contrite without first sinning? Yet this is the plain teaching of the Gospels. And if you wish to lead men into the frame of mind which is pleasing to God they must first sin. Doubtless many of those who buy the literature that my friend's publisher distributes will afterwards repent, and if we are to believe the teachings of our holy religion, they will then be more pleasing to their Maker than the impeccably righteous, among whom hitherto you have been a notable example.'</p> <p>This logic confounded me, and I became perplexed in the extreme.</p> <p>From: Satan in the Suburbs, and Other Stories, 1953. http://russell-j.com/cool/451-0101.HTM</p>	<p>私(注:ボージョン氏。小説「郊外の悪魔」の登場人物で、福音の普及に関係した団体の事務長)は言った。もしもそういうた書物を購読する人があつたら、若くは若い女も、彼らを恐ろしい罪に導くかも知れない。容易ならぬ危険があるのではないだろうか? 仲間に加つてゐるまさにその時に、自分が金銭的利益を得た行為(注:猥褻本の販売)の結果として、おそろくどこかで結婚をしてゐる若い男女の間に、おそろくどこかで結ばれてゐると考えると、彼ら(仲間)の顔をもとに見ることができでしようか?」</p> <p>マラコ博士は応えた。「ああ、残念ながら恐らく、我々の神聖なる宗教(キリスト教)には、あなたが理解してゐないことが、たくさんあります。何ひとつ悔悟をする必要のない九十九人の正しい人間が、神のふところに帰つた一人の罪人よりも、天国では喜びを得ることが少ないという寓話を、よくよく考へたことがありでしようか?」</p> <p>ハリサイ人(注:古くはイサヤで預言の形式を重んじ、保守派の人々、転じて偽善者)や真蹟師(注:古代ローマの収税官吏:みづとりに)に関する原典を研究されたことはまづたくなかつたのでしうか? 悔い改めた盗人(の語)から教訓を得ませんでしたか? まづハリサイ人の福音を食ふながらがめた罪が何であつたか自問したこととはまづたくなりませんか? 打ちひしがれ罪を悔む心を讃美することを不思議に思つたことはまづたくなりませんか? モリヌー夫人(注:モリヌー大佐の未亡人)と会う前に、あなたの心が打ちひしがれてゐた、あるいは罪を悔んだといふことが正しく言ふことができまうか? まづ罪を犯さなくては罪を悔むことはできないといふことを、今まで思い浮かんだことはありませんか? さらにこれは福音書ではつきり教えてゐるところです。神を喜ばす心構へに人を導きたいと望むなら人間はまず罪を犯さなければなりません。疑いもなく、御の出版を悔ひあつてゐる本を買つた人々の多くは、あつたての罪を悔ひあつてゐる。そして、我々の神聖なる宗教の教えを信するならば、彼らの方が非の打ちどころのないまづつく人間よりも、造物主が気に入る者になるのです。あなたは、これまでは、まづつく人間の立派な権威であつたわけであらう。この論理は私を混乱させ、まづつかり困惑してしまつた。・・・いかなる隔離された情熱も、隔離された状態のままでは、(一種の)狂気である。正気とは、種々の狂気を総合(統合)したものである。正気として定着してよいだろう。いかなる支配的な情熱も(その情熱の対立を消滅せざる)といふ支配的な恐怖を引き起こす。いかなる支配的な恐怖も、時には明白かつ意識的な狂信の形で、時には無力にさせる腫瘍のために、時には夢の中にのみ現れる無意識あるいは意識下の恐怖のために、悪夢を引き起こす。危険な世界において正気を保持し、これに専ら自分の心の自由な恐怖の議會を招き、これにおいて種々の恐怖を順としたりあげ、他の全ての恐怖によつて、不合理であるとして要訣されるべきである。</p> <p>(意訳:「正気」といふのは、平凡かつ起伏のない感情の寄せ集めでできているものではない。それそれの情熱(強い感情)を一つ一つあげれば「狂気」に陥るかも知れないが、それらの情熱(+の狂気と-の狂気)をまとると、全体としてみれば、プラスマイナス零となる。そういった状態が「正気」といふのであらう。)</p> <p>私はおべつが使いの形而上学者達と議論を始めました。</p>	<p>死の直前に初めて神に悪態をついた人間は地獄に行くが、悪いことはばかりしてきて死に際し神に悔いたものは天国にいけるなどという、理不尽なイスラム教(あるいは逆のキリスト教)などの邪教を信じるものは地獄に行くが、キリスト教(逆のイスラム教)を信じれば天国にいけるなどという、理不尽。「全能」であるはずの神がなぜ「悪い」と想定する? 人間に悪いことをしないようにできないといふのか? 宗教や宗教家の偽善、ごまかし、知的能力のなさ。</p>
<p>A7-18</p>	<p>... Every isolated passion is, in isolation, insane; sanity may be defined as a synthesis of insanities. Every dominant passion generates a dominant fear, the fear of its non-fulfillment. Every dominant fear generates a nightmare, sometimes in the form of an explicit and conscious fanaticism, sometimes in a paralysing timidity, sometimes in an unconscious or subconscious terror which finds expression only in dreams. The man who wishes to preserve sanity in a dangerous world should summon in his own mind a Parliament of fears, in which each in turn is voted absurd by all the others. ...</p> <p>From: Nightmares of Eminent Persons, 1945, Introduction. http://russell-j.com/cool/46E-INTR01.HTM</p>	<p>(意訳:「正気」といふのは、平凡かつ起伏のない感情の寄せ集めでできているものではない。それそれの情熱(強い感情)を一つ一つあげれば「狂気」に陥るかも知れないが、それらの情熱(+の狂気と-の狂気)をまとると、全体としてみれば、プラスマイナス零となる。そういった状態が「正気」といふのであらう。)</p> <p>私はおべつが使いの形而上学者達と議論を始めました。</p>	
<p>A7-19</p>	<p>I began to argue with the metaphysical sycophants: 'What you say is absurd,' I expostulated. 'You proclaim that non-existence is the only reality. You pretend that this black hole which you worship exists. You are trying to persuade me that the non-existent exists. But this is a contradiction: and, however not the flames of Hell may become, I will never so degrade my logical being as to accept a contradiction.'</p> <p>At this point the President of the sycophants took up the argument: 'You go too fast, my friend,' he said. 'You deny that the non-existent exists? But what is this to which you deny existence? If the non-existent is nothing, any statement about it is nonsense. And so is your statement that it does not exist. I am afraid you have paid too little attention to the logical analysis of sentences, which ought to have been taught you when you were a boy. Do you not know that every sentence has a subject, and that, if the subject were nothing, the sentence would be nonsense? So, when you proclaim, with virtuous heat, that Satan - Who is the non-existent - does not exist, you are plainly contradicting yourself.'</p> <p>'You,' I replied, 'have no doubt been here for some time and continue to embrace somewhat antiquated doctrines. You prate of sentences having subjects, but all that sort of talk is out of date. When I say that Satan, Who is the non-existent, does not exist, I mention neither Satan nor the non-existent, but only the word 'Satan' and the word 'non-existent.' Your fallacies have revealed to me a great truth. The great truth is that the word 'not' is superfluous. Henceforth I will not use the word 'not.'</p> <p>From: Nightmares of Eminent Persons, 1945, Introduction. http://russell-j.com/cool/47T-PREF-01.HTM</p>	<p>「あなたがたの言つてゐることは馬鹿げている」と私はいさめました。「あなたがたは非存在の存在こそが唯一の実在だと言つたあなたがたが楽している。このブラック・ホール(black hole)は存在しているとあなたがたは偽つて言つた。あなたがたは、非存在(存在しないもの)が存在するといふことを私に説得しようとしている。だがこれは矛盾だ。それに地獄の炎がどんなに熱くなるうとも、私は矛盾を認めるほど、論理学上の存在を混淆させるようなことは決してしません。」</p> <p>ここでおべつが使いの代表が議論にわつてはいつてきました。あなたはせつちが過ぎる」と彼は言いました。「あなたは非存在が存在することを否定するのですか?」</p> <p>だが、あなたが存在を否定しようとするものは何ですか? もし非存在が無であるとするならば、それについての如何なる陳述も無意味となります。従つて、非存在が存在しないといふあなたの陳述も無意味といふことです。あなたが文章の論理的分析に余りにも少ししか注意を払わなかつたのではないかと私は思います。この事は、あなたが子供の時に教へられてゐるべきことでした。あなたは、あなたには主語があり、もし主語が無だとしたら、文は無意味となることは、ご存じではありませんか。そういうわけで、あなたが高潔なる熱情をもって悪魔・非存在なるもの・が存在しないと宣言するならば、明らかに矛盾したことを言つてゐます(自己矛盾)です。」</p> <p>私(ハンプロウスキー)は答えた。あなたは、疑いもなく、地獄に来てからしばらく経つていて、やがて古風な学説を受け入れ続けています。あなたは文章には主語があるなど、むだ口をたいてゐますが、そういう話を傳へられて、私が非存在である悪魔は存在しないといふ時、私は、悪魔や非存在そのものについて言つてゐるのではなく、ただ「悪魔(サタン)」という語、「非存在」という語に言及します。あなたの論議は、私に偉大なる真実を明らかにしてくれました。その偉大なる真実は、は、存在しない(否)。という語は必要ないといふことです。今後私は「-でない(否)」という語は必要ないことにします。今後私は「-でない(否)」という語は必要ないことにします。</p>	

		<p>A7-20</p> <p>Vanity is a motive of immense potency. Anyone who has much to do with children knows how they are constantly performing some antic, and saying "Look at me!" "Look at me!" is one of the most fundamental desires of the human heart. It can take innumerable forms, from buffoonery to the pursuit of posthumous fame. There was a Renaissance Italian princeling who was asked by the priest on his deathbed if he had anything to repent of. "Yes", he said, "there is one thing. On one occasion I had a visit from the Emperor and the Pope simultaneously, I took them to the top of my tower to see the view, and I neglected the opportunity to throw them both down, which would have given me immortal fame". History does not relate whether the priest gave him absolution. One of the troubles about vanity is that it grows with what it feeds on. The more you are talked about, the more you will wish to be talked about. The condemned murderer who is allowed to see the account of his trial in the press is indignant if he finds a newspaper which has reported it inadequately. And the more he finds about himself in other newspapers, the more indignant he will be with the one whose reports are meagre. Politicians and literary men are in the same case. And the more famous they become, the more difficult the press-cutting agency finds it to satisfy them. It is scarcely possible to exaggerate the influence of vanity throughout the range of human life, from the child of three to the potentate at whose frown the world trembles. Mankind have even committed the impety of attributing similar desires to the Deity, whom they imagine avid for continual praise.</p> <p>From : Human Society in Ethics and Politics, 1954.pt.2.chap.2: Politically Important Desires (Nobel Prize Acceptant Speech)  <a href="http://russell-j.com/cool/477-020201.HTM">http://russell-j.com/cool/477-020201.HTM</a></p>	<p>虚栄心は非常に大きな力を持っている人であれば、彼らは子供と多くの関わりを持っていて人の小公子(小者子)がいて、死の床で聖職者が「何ぞ懺悔しなければならぬことではないか(あるか)」と尋ねられた。彼は、次のように応えた。「はい、一つあります。私は、ある折に、皇帝と教皇との訪問を受けました。私の邸宅内の塔のつべんからの眺めを見せるために、お二人を塔のつべん内に案内しましたが、二人とも同時に自分勝手として在連の声を自分に与える(不滅の名声を得る)機会を見逃して(怠って)しまいました。」 歴史(書)は、その聖職者がその小公子に赦免を与えたかどうかは物語っていない。虚栄心の厄介なことの一つは、虚栄心がエサとするもの(を食べる)とともに虚栄心も成長して大きくなるというものである。話題にされればされるほど、ますます話題にされたがる。有罪を宣告された殺人犯は、新聞に掲載された自分の裁判記事を見ることを許され、もし報道の仕方が不適切なもの(注:ここでは内容よりも取り取りが小さい)をあげると、憤慨する。そして他のいろいろな新聞にも自分のことが載っているのを見つけたら見つけるほど、報道が貧弱であったその新聞に対して、彼はますます腹を立てる。政治家や文士も事情は同じである。彼ら有名になればなるほど、新聞切抜き業者は彼らを満足させることがますます難しくなることがわかる。3歳の幼児から、浪面、しかもつらさを示せば世界中が震え上がる(昔の)君主にいたるまで、人間生活の全領域に及ぶ虚栄心の影響力は、いくら誇張しても誇張し過ぎることがないほどである。人間は、同じような欲求が神にもあるとする不敬を犯しさえおし、神の不断の礼賛を望んでいると思いはれている(注:これは冗談)</p>			
★		<p>A7-21</p> <p>Some old people are oppressed by the fear of death. In the young there is a justification for this feeling. Young men who have reason to fear that they will be killed in battle may justifiably feel bitter in the thought that they have been cheated of the best things that life has to offer. But in an old man who has known human joys and sorrows, and has achieved whatever work it was in him to do, the fear of death is somewhat abject and ignoble. The best way to overcome it so at least it seems to me - is to make your interests gradually wider and more impersonal, until bit by bit the walls of the ego recede, and your life becomes increasingly merged in the universal life. An individual human existence should be like a river: small at first, narrowly contained within its banks, and rushing passionately past rocks and over waterfalls. Gradually the river grows wider, the banks recede, the waters flow more quietly, and in the end, without any visible break, they become merged in the sea, and painlessly lose their individual being. The man who, in old age, can see his life in this way, will not suffer from the fear of death, since the things he cares for will continue. And if, with the decay of vitality, weariness increases, the thought of rest will not be unwelcome, he should wish to die while still at work, knowing that others will carry on what he can no longer do and content in the thought that what was possible has been done.</p> <p>From: Portraits from Memory and Other Essays, 1956.  <a href="http://russell-j.com/cool/487-HOW_TO_GROW_OLD.HTM">http://russell-j.com/cool/487-HOW_TO_GROW_OLD.HTM</a></p>	<p>老人のなかには死の恐怖で憂鬱になる者もいる。若い人の場合は、この感情を正当化できるものがある。戦闘(戦争)で殺される恐れを抱く理由のある若者は、人生が提供される最高のものを顧みとらているという思いで、舌をしく感ずるものも、なにもでもであろう。しかし、人間の喜びと悲しみを知り、何であれ自分のなすべきことを全てなしたとげた老人の場合には、死の恐怖を顧することはいくらか卑しく恥ずべきことである。死の恐怖に打ち勝つ最良の方法は、自分も私にも、自分自身に、自分自身に、自分の関心(の対象)を次第に広くかつ非個人的なものにしていき、ついに自我の壁が少しずつ退いていき、自分の生命がだに宇宙の生命に溶け込んでいくようにすることである。個々の人間存在は、川のようなものであるべきである。最初は小さく、激しく、上手の岸に流れ流れていて、岩々を後に、渾を越えて、渾、次第に川幅は広がり、上手は後退し、水はより静か流れ、ついに波や流れは見えなくなり、海の中へ没入し、苦痛もなくその個的存在を失う。老年になって、このように人生を見られる人は、彼が好む事物が存在し続けるゆえに、死の恐怖に打ち勝てないで、若くして、仮に、生命力の衰退とともに、物憂さが増せば、休息の考えは思わべきものではないだろう。私は、私のものはや出来ないことを他人が引き継いでいることを知りつつ、自分が可能なことはやっていたという考えに満足して、いまだ仕事をしている間に死にたいものである。</p>			
★	○	<p>A7-22</p> <p>Wars, pogroms, and persecutions have all been part of the flight from boredom; even quarrels with neighbours have been found better than nothing. Boredom is therefore a vital problem for the moralist, since at least half the sins of mankind are caused by the fear of it.</p> <p>The Conquest of Happiness, 1930, chap. 4: boredom and excitement.  <a href="http://russell-j.com/beginner/HA14-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA14-030.HTM</a></p>	<p>戦争、虐殺、迫害は、すべて退屈からの逃避の一部(一逃避から生まれたもの)であり、隣人とのけんかさえ、何もないよりはましだと感じられた。</p> <p>それゆえ退屈は、人類の罪の少なくとも半分は退屈を恐れることに起因していることから、手リスト(道徳家)にとってきわめて重要な問題である。</p>	<p>國分功一郎「暇と退屈の倫理学」(朝日出版社 2011年10月刊)は、2011年度の「紀伊國屋じんぶん大賞」を受賞しており、よく読まれているようです。私も興味深く読むことができて、よく引用されるラッセルの次の言葉も同じ趣旨です。傑作(トラブル)の根本原因は、現代世界においては知的な(聡明な)人々が懐疑的でいっぱいである一方、愚かな人々が「確信過剰」である(cocksure)ということである。(The fundamental cause of the trouble is that in the modern world the stupid are cocksure while the intelligent are full of doubt.) この文章の少し前にも、こう書かれています。</p>	<p>「さてビジネスマンガ「生存競争」と言うとき、彼が言おうとしているのは、そういうことではない。「生存競争」というのは、本能的に些細な事柄をもったいつけるために見つけた不正確な言いまわしである。」</p>	<p>勝者がいれば敗者も必ず多数でできます。「よく「ウィン・ウィンの関係」を築くことの重要性を強調する人が少なくないですが、過去に経験によって、多数の犠牲者や敗者が出ることによって、自分をつかっていることに対する「虚無」や「免罪符」にもなっています。「勝ち組」とか「負け組」とか言う言葉を無神経な人が少なくないのも残念です。」</p>
		<p>A7-23</p> <p>Where there is delight in a process, there will be style, and the activity of production will itself have aesthetic quality. But when men assimilate themselves to machines and value only the consequences of their work, not the work itself, style disappears, to be replaced by something which to the mechanised man appears more natural, though in fact it is only more brutal.</p> <p>In praise of artificiality, Sept. 9, 1931. In: Mortals and Others, v.1 (1975)  <a href="http://russell-j.com/ARTIFICI.HTM">http://russell-j.com/ARTIFICI.HTM</a></p>	<p>(生産)過程に喜びがあるところにはスタイルがあり、生産活動は、それ自体、美的特質を持つに至るだろう。しかし人間が機械に同化し、仕事自体ではなく仕事の結果のみを価値あるものとするならば、スタイルは消滅、機械に同化した人間には(同化していない人間)よりも自然に思える、実際はたまたより野蛮なものが、それに取って代わる。</p>			
		<p>A7-24</p> <p>All these men have learnt from experience to believe what they already believed before they had experience, for most people learn nothing from experience, except confirmation of their prejudices. To learn anything genuinely from experience requires a kind of open-mindedness which is the essence of the scientific temper, though many men of science are somewhat lacking in it.</p> <p>From: The lessons of experience, Sept. 23, 1931. In: Mortals and Others, v.1 (1975)  <a href="http://russell-j.com/EXPERIENCE.HTM">http://russell-j.com/EXPERIENCE.HTM</a></p>	<p>これらの老政治家は皆、物事を経験する前に彼らが既に思いこんでいたことを信ずる(再確認)ことを経験から学んできたのである。というのは、大部分の人は、自分の偏見(手断)を再確認するだけで、経験から何も学ばないからである。経験から何ものかを学ぶためには、科学者気質の本質ともいえる一種の偏見のない広い心(聞かれた心)が必要である。ただし、科学者の多くも、この偏見のない広い心が欠けているが。</p>			
		<p>A7-25</p> <p>What people mean, therefore, by the struggle for life is really the struggle for success. What people fear when they engage in the struggle is not that they will fail to get their breakfast next morning, but that they will fail to outshine their neighbours.</p> <p>From: The Conquest of Happiness, 1930, chap. 3: competition  <a href="http://russell-j.com/beginner/HA13-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA13-010.HTM</a></p>	<p>それゆえ、人びとが生存競争という言葉で意味しているのは、実際は、成功のための競争にはかならない。この競争に参加しているとき、人びとが恐れているのは、明日の朝食にありつけないのではないが、ということではなく、隣人に勝る(勝つ)ことができないのではないが、ということである。</p>			
		<p>A7-26</p> <p><b>重複のため削除</b></p>				

A7-27	As for the learned professions, no outsider can tell whether a doctor really knows much medicine, or whether a lawyer really knows much law, and it is therefore easier to judge of their merit by the income to be inferred from their standard of life. As for professors, they are the hired servants of businessmen, and as such will less respect than is accorded to them in other countries.	知識階級について言えば、ある医者が本当に医学のことをよく知っているかどうか、あるいは、ある弁護士が本当に法律のことをよく知っているかどうかをどうも外部者にはさぐわかない。そこで、彼らの優秀さを判断するには、彼らの生活水準から推定される収入によるほうが容易である(とアメリカでは考えられている)。(アメリカにおいては)大学教授について言えば、彼らは実業家たちを金で雇われた使用人であり、そういうものとしてもっと(尊厳を)古い国々で与えられているほどの尊敬を受けていない。 。 出典：ラッセル『幸福論』第3章「競争」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA13-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA13-040.HTM</a>		長谷川三千子氏(埼玉大学名誉教授)はNHK経営委員になさなくないのではないか先日問題になりましたが、「自由新聞」社にも「一部首領のお気に入り」とのことで、菅首相は長谷川三千子氏は「日本を代表する哲学者」であり立派な人だと記者会見で言っていました。テレビで報道されるまで聞いたことがない人物だったのでネットで調べてみたところ、「安倍晋三総理大臣を求める民間有志の会」の代表幹事をしていたとのことで、菅首相や菅官房長官が長谷川氏をどう思うかがよくわかりました。菅官房長官は哲学のことはわからないと思われますが、そういった人がどうして長谷川氏が「日本を代表する哲学者」だと判断できるのでしょうか？
A7-28	The consequence of all this is that in America the professional man imitates the businessman, and does not constitute a separate type as he does in Europe. Throughout the well-to-do classes, therefore, there is nothing to mitigate the bare, undiluted fight for financial success. From quite early years American boys feel that this is the only thing that matters, and do not wish to be bothered with any kind of education that is devoid of pecuniary value.	以上のような結果アメリカでは、知的職業にたずさわる人は、実業家のまねをし、ヨーロッパにおけるように独自のタイプをなしていない。それゆえ、アメリカには、富裕階級のすべてにおいて、金銭的成功のための露骨な容赦ない闘いを繰り替るものは、何ひとつ存在しない。アメリカの青年たちは、ていついから経済的(金銭的)な成功のみが唯一重要な事であると感じているので、金銭的な価値のない教育にわずらわされることを望まない。 。 出典：ラッセル『幸福論』第3章「競争」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA13-050.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA13-050.HTM</a>	だ、以前のことですが、日本経済が比較的好調な時期に、日本の富裕層の父親が子供に百万単位のお金を渡して、株式を通して経済の勉強をさせている(また某高校でも、仮使のお金を生徒に割り当てることで、株式売買を通して、経済の学習をさせている)との紹介が、日経WB Sだったかでありました。結局バブルが弾けてしまいました。 アベノミクスということで、1、2年は比較的調子がいいかもしれないですが、3年後にはまたバブルが弾けてアベノ「リスク」だった、ということになるような気がします。 (それに、2020年のオリンピックまで、東京大地震も、南海トラフ大地震も、富士山の火噴発、のいずれも起こらないという前提でものを考えるのは危険ではないでしょうか？)	
A7-29	The competitive habit of mind easily invades regions to which it does not belong. Take, for example, the question of reading. There are two motives for reading a book: one, that you enjoy it; the other, that you can boast about it. It has become the thing in America for ladies to read (or seem to read) certain books every month; some read them, some read the first chapter, some read the reviews, but all have these books on their tables. They do not, however, read any masterpieces. There has never been a month when Hamlet or King Lear has been selected by the Book Clubs; there has never been a month when it has been necessary to know about Dante. Consequently the reading that is done is entirely of mediocre modern books and never of masterpieces.	競争的な精神の習慣は、本来競争のない領域にまで容易に侵入してくる。たとえば、読書の問題をとりあげてみよう。読書には二つの動機がある。ひとつは読書を楽しむこと、もうひとつは読書について自慢できることである。アメリカでは、成人女性が毎月何冊かの本を読むこと、あるいは、読んだふりをすることが流行している。それらの本を(すべて)読む人もいれば、第一章(だけ)を読む人もあるし、書評(だけ)を読む人もいるが、誰もそれらの本を机の上に置いている(ことでは共通している)。いわゆる「精読」「つんどく)」。しかしながら、彼女らは大作(古典的名作)はまったく読まない。「ハムレット」や「リア王」がブッククラブによって選ばれた月は一度もなかったし、ダンテについて知る必要があった月もなかった。それゆえ、読まれる本は、一なだけ読書は、すべて現代の二流の本ばかりであり、古典的名作であるとは決していない。 。 出典：ラッセル『幸福論』第3章「競争」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA13-050.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA13-050.HTM</a>	ベストセラーだと安心して読むとがよいですね。 自分で良書を見分けるには、多くの読書経験と自分の頭で考える訓練が必要ですが、ただ多くの本が読んでいるということで、	
A7-30	Altogether it will be found that a quiet life is characteristic of great men, and that their pleasures have not been of the sort that would look exciting to the outward eye. No great achievement is possible without persistent work, so absorbing and so difficult that little energy is left over for the more strenuous kinds of amusement, except such as serve to recuperate physical energy during holidays, of which Alpine climbing may serve as the best example.	全体的に見ると、静かな生活が偉大なひとの特徴であり、彼らの快楽はそれ自身は刺激的なものではなかった、ということである。偉大な事業は、粘り強い活動なしには達成されるものではなく、そういう活動(仕事)は、あまりにも注意を奪い、またあまりにも困難であるので、注意を必要とするような娯楽をするためのエネルギーはほとんど残らないのである。 例外は、休暇中に肉体的エネルギーを回復するのに役立つような娯楽であり、最もよい例は山登りであるだろう。 。 出典：ラッセル『幸福論』第4章「退屈と興奮」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA14-050.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA14-050.HTM</a>	休暇中に肉体的エネルギーを回復するのに役立つような娯楽として「山登り」(近 くの低い山ではなく、高い山に登ることはAlpine climbing)をあけていますが、余計に疲れるのことはないかと思う方がいるかも知れません。 ラッセルが言う「偉大な人」というのは肉体的労働ではなく、政治の世界の幅広い分野の「知的な偉大な人」が、(努力を使う人々)のことですので、アルパスなどの景色のよい高山(イギリスの場合は300mばかりの低いやまばかりです。気分転換になるとしたらウエールズのスノードン山くらいだろうと思われまゝ。 よって爽快な気分を導き合えば、肉体的な疲れはあつたとしても心地よいものであり、大きな気分転換になる、ということを知っていると思われまゝ。	
A7-31	If once a week employees were allowed to pull the employer's nose and otherwise indicate what they thought of him, the nervous tension for them would be relieved, but for the employer, who also has his troubles, this would not mend matters. What the fear of dismissal is to the employee, the fear of bankruptcy is to the employer.	もしも、一週に一度、被雇用者が雇用者の鼻をつまむことを許されるか、他の方法で雇用者のことをどう思っているかを伝えることができるならば、被雇用者は緊張は緩和されるだろう。しかし、自分もまた心配ごとをかかえている雇用者にとっては、これでは事態は改善されない。被雇用者が解雇を恐れているように、雇用者は破産を恐れている(「...」に比べて「解雇」に対応するものは、... ) 。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲勞」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA15-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA15-010.HTM</a>	心配の絶えな世の中ということですね。 支配、管理する者とされる者。されるよりした方がよいということで、「自由」競争で椅子取りゲームをすることになります。 身分制社会は嫌ですが、自由競争社会(機会均等半分は嘘、偽善)は強い者がより有利な社会です。理想的な社会ではありません。 理想的な社会などないと思えるのも安易です。多くの思想家が自由について論じています。サルトルもラッセルも両者とも同じタイトル「自由への道」(フランス語と英語の違いはあり)を書いており、ラッセルのものは昔、角川文庫ででていました。各書庫(仕事で毎月(あるいは新訳出版)ということになればよいのですが、	
A7-32	Now there are three reasons for which you may co-operate with man: because you love him, because you fear him, or because you hope to share the swag. These three motives are of differing importance in different regions of human co-operation: the first governs procreation, and the third governs politics.	ところで人と協力するには三つの理由がある。一つは相手を愛するからであり、一つは相手を恐るからであり、もう一つは不正な利得にあずかりたいと望むからである。これらの三つの動機は、人類の協力が必要とされる領域において、それぞれ異なる重要性を持つ。第一の動機は「生殖」を支配し、第三の動機は「政治」を支配する。 。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「臍病は有利」 <a href="http://russell-j.com/COWARD.HTM">http://russell-j.com/COWARD.HTM</a>	自分自身を反省してみ、権力や権限を持っている人に対して、どのような態度で対応(「協力!」)することが多いでしょうか？ ラッセルがあげた三つの協力のなかでは、第一目の理由が望ましいわけですが、勤め人(経済人)であれば、そうでない場合も少なくありません。特に政治の世界では第三の理由(不正な利得にあやがるため)から「協力」する場合も少ないとはいえないのですが、第二の理由から「協力」する場合がかなりあるのではないかと思われまゝ。	
A7-33	In the modern world there is hardly any leisure, not because men work harder than they did, but because their pleasures have become as strenuous as their work. The result is that, while cleverness has increased, wisdom has decreased because no one has time for the slow thoughts out of which wisdom, drop by drop, is distilled.	今の世の中には、時間のゆとりがほとんどないが、それは、昔よりも人々が忙しく働いているからではなく、楽しみを持つことが仕事同様に努力を要する事柄になってしまっているためである。その結果、人間は、それまでの領域に、知恵は減少してしまった。 。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「黙想の養道」 <a href="http://russell-j.com/MEDITATE.HTM">http://russell-j.com/MEDITATE.HTM</a>	ゆつくり考えることを許さない社会ですね。ゆつくり、ぼんやりしてたら、落ちこぼれるか、自分は落ちこぼれないと思っても落ちこぼれたらどっしり置かれてしまふ。な。が、そういうことを言っている人は孤立するどころなく無難ということであらう。 哲学なんかを研究していると言えば、「変わり者」というレッテルを貼られてしまふ。 とくに、成績をあげなくちゃ、実績を積みまくちゃ、怠惰はいけない、グローバル化に乗り遅れるな、小学校から英語教育を...、要因教育が重要などなど。 ...。気がついたら善場が近くなり...、自分が決めた人生を歩んできたのかと反省してもう遅い...。	
A7-34	But nowadays almost every young man has to begin with a very subordinate post in some vast organisation. His superiors seldom have the tolerance of the experienced schoolmaster and are likely to give promotion to the 'good' boy. Unfortunately docility is not a quality which is often found in the man capable of initiative or leadership.	しかし、今日の若者のほとんどは、巨大な組織の末端の地位から職業人生を始めなければならない。彼の上司が経験豊かな学校の先生が持っている寛容の精神の持ち主であるのは稀であり、組織の中の「良い」子に昇進の道を与えがちである。 不幸なことには、従順という性質は、創意(ニシアレイブ)と指導力を持った人間が持っていることは稀である。 。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「優等生について」 <a href="http://russell-j.com/BEING-G.HTM">http://russell-j.com/BEING-G.HTM</a>	自分自身を反省してみ、権力や権限を持っている人に対して、どのような態度で対応(「協力!」)することが多いでしょうか？ ラッセルがあげた三つの協力のなかでは、第一目の理由が望ましいわけですが、勤め人(経済人)であれば、そうでない場合も少なくありません。特に政治の世界では第三の理由(不正な利得にあやがるため)から「協力」する場合も少ないとはいえないのですが、第二の理由から「協力」する場合がかなりあるのではないかと思われまゝ。	ゆつくり考えることを許さない社会ですね。ゆつくり、ぼんやりしてたら、落ちこぼれるか、自分は落ちこぼれないと思っても落ちこぼれたらどっしり置かれてしまふ。な。が、そういうことを言っている人は孤立するどころなく無難ということであらう。 哲学なんかを研究していると言えば、「変わり者」というレッテルを貼られてしまふ。 とくに、成績をあげなくちゃ、実績を積みまくちゃ、怠惰はいけない、グローバル化に乗り遅れるな、小学校から英語教育を...、要因教育が重要などなど。 ...。気がついたら善場が近くなり...、自分が決めた人生を歩んできたのかと反省してもう遅い...。

	A7-35	Some fool, long ago - probably a Roman - said that to know how to command, a man must first learn how to obey. This is the opposite of the truth. The man who has learnt to obey will either have lost all personal initiative or will have become so filled with rage against the authorities that his initiative will have become destructive and cruel.	かなり昔、多分古代ローマの愚かな人間が、「人の上立つ人間はまず人に服従することを知らなければならぬ」と言っているが、裏腹はそれと全く逆である。人に従うことを覚えた人間は、自分の個人的創意を全部失うが、権力に対する怒りによっていっばいになり、破壊的かつ残忍な人間となる。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「優等生について」 <a href="http://russell-j.com/BEING-G-HTML">http://russell-j.com/BEING-G-HTML</a>		初井勝人NHK会長に与える言葉です。古代ローマの愚かな人間の現代版です。 初井勝人氏にこれまで常に上司や権力のある人間には絶対服従を誓い、部下に対しては絶対服従を求めてきたようです。こういった態度であれば、ものを考える必要が少なくなり、ついでに、初井氏には大脳皮質は不必要と思われる。 いいすぎ？
	A7-36	Since organisation is inevitable in the modern world, there is every way out of this trouble except to imbue the men in important positions with toleration for the vagaries of the young. When men have already become important there is, of course, no hope of improving them, since they will no longer listen to advice. Unfortunately, the improvement of the young is generally left to those who have already become old and important. I can only suggest that no school should have a head more than thirty years of age. But I hardly expect to see this admirable reform adopted	組織が現代社会において不可欠である以上、要職にある人たちが若者のとっぴな考えを大目に見る心を養わなければならない。この不幸がいつかなくなるまで、人は重要なポストにつくと若者の言葉に耳を傾けなくなるので、自分の考えを改める望みがなくなる。不幸なことに過例、若者の（資質や能力の）向上は、年をとり要職についた人たちの手で行なわれている。30歳以上の人間が学校教師にしてはけいけんではない。私に提案したい。しかし、この賞賛すべき改革案が採用されることはほとんどないだろうと思う。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「優等生について」 <a href="http://russell-j.com/BEING-G-HTML">http://russell-j.com/BEING-G-HTML</a>		裸の王様に対し側近は我儘・保身を第一とすると、多くの人が迷惑をこうむります。 あんなに大衆の下でよく我慢できた → どんどこでもやっていると → 優秀だ → ということでは役人（官僚）は鼻進んでいきます。しかしそういった裸の王様は虚言しないことにより、多くの人（部下）が迷惑を被るという側面があります。あの上司が、保身をせずに、裸の王様につきつかり言ってくれたならば、やはり「優等生であること」は、特に国の機関では偉くなるための必要条件です。 そこで先日、「ラッセルの言葉366」で配信した、ラッセルの次の格言（ひとし上司や権力者に従順な理由）が活きてきます。理由としては2と3が該当します。 「人と協力するには三つの理由がある。一つは相手を要するからであり、★一つは相手を恐れるからであり、★もう一つは不正な利得にあずかりたいと望むからである。これらの三つの動機は、人間の協力が必要なそれぞれの領域において、それぞれ異なった重要性を持つ。第一の動機は「生殖」を支配し、第三の動機は「政治」を支配する。」
	A7-37	There has been a great deal of study by psychologists of the operation of the unconscious upon the conscious, but much less of the operation of the conscious upon the unconscious. Yet the latter is of vast importance in the subject of mental hygiene, and must be understood if rational convictions are ever to operate in the realm of the unconscious.	無意識の意識への働きかけについては、これまで、心理学者による研究がなされてきてきているが、意識の無意識への働きかけについては、ほとんど無視されている。しかし、後者（意識の無意識への働きかけ）は、精神衛生の分野で非常に大きな重要性を持っており、もし理性的な確信が無意識の領域で（も）いつも働くべきであるとするならば、理解されなければならない。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲労」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA15-050-HTML">http://russell-j.com/beginner/HA15-050-HTML</a>	ラッセルは、無意識を無理やり押さえるために、無意識の世界に現在の意識を植え込もうと主張しているわけではありません。よい習慣（良い思考習慣も含む）をたくさん身につけることによって、不合理な無意識（ばくせんとした不安や心配も含む）が人間に悪い影響を与えないようにしようと言っています。	
	A7-38	My own belief is that a conscious thought can be planted into the unconscious if a sufficient amount of vigour and intensity is put into it. Most of the unconscious consists of what were once highly emotional conscious thoughts, which have now become buried. It is possible to do this process of burying deliberately, and in this way the unconscious can be led to do a lot of useful work. I have found, for example, that if I have to write upon some rather difficult topic the best plan is to think about it with very great intensity - the greatest intensity of which I am capable - for a few hours or days, and at the end of that time give orders, so to speak, that the work is to proceed underground. After some months I return consciously to the topic and find that the work has been done.	意識的な思考を無意識の中に植えつけることは可能である。私は信じている。無意識の大部分は、かつては非常に情緒的な意識的思考であったが、現在は意識下に埋め込まれてしまったものから成り立っている。この埋め込みプロセスを意図的にやってみることは可能であり、このようにして、無意識に有益な仕事をいろいろさせることができる。たとえば、私が苦しい話題について書かなければならぬとした場合、最良の方法は、その話題について非常に強固に、自分自身にできるだけ最大の強度（集中力）をもって数時間ないし数日間考え、その期間の最後に、いわば、この作業を地下で続行せよと命令する、というやり方である。何ヶ月か経過してから、その話題に意識的に立ち返ると、その作業はすでに終わっているのを見出す。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲労」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA15-050-HTML">http://russell-j.com/beginner/HA15-050-HTML</a>	現実を直視するのが怖くていやなものから目をそらしたり、考えないようにしたりするのは、避けるべきときに徹底的に考える習慣をつけられ、難しい問題を知らぬうちに解決策を思いつたりできるようなこと、というのが、ラッセルが経験から学んだことであり、皆さんも是非実践してみてください。	
	A7-39	The man who is courageous in any matter except physical danger is also thought ill of. Indifference to public opinion, for example, is regarded as a challenge, and the public does what it can to punish the man who dares to flout its authority. All this is quite opposite to what it should be. Every form of courage, whether in men or women, should be admired as much as physical courage is admired in a soldier.	肉体的な危険以外の事柄について勇氣のある男性は、それがどのような事柄であれ、良くは思われない。たとえば、世に無畏者と呼ばれる人、公衆の怒りに対抗して、権威をあえて馬鹿にした人を、世間は、あらゆる手段をつくして罰しようとする。これらはすべて、あるべき姿にまったく反することである。 （しかし）男女を問わず、あらゆる形の勇氣は、軍人において肉体的勇氣が称賞されるのと同様に、称賞されなければならない。 出典：ラッセル『幸福論』第5章「疲労」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA15-070-HTML">http://russell-j.com/beginner/HA15-070-HTML</a>		多数意見に従っておけば安心ということであくまで自分の頭で考え、自分で判断することとをしない人が少なくない。その深層心理は、多数意見に従っておけば間違っていることが後からわかってても、多くの人が間違っただのだからと、自分を簡単に許すことができるからかも知れません。他国と戦争になった時に、反戦の立場に立つと、「臆病者」よばわりされたり、非国民のレッテルを貼られたりします。戦争というのは極端な場合ですが、世間の多数意見に反対するときにはかなりのエネルギーや勇氣が必要です。しかし、残念ながら、日本社会はそういったものに対する寛容度が低いと言わざるをえません。
★	A7-40	It is not only in regard to amusements that men have grown passive, but also in regard to all those forms of skill and all those departments of knowledge in which they are not themselves experts. The old-fashioned farmer was weather-wise, whereas the modern man, if he wishes to form an opinion as to what the weather is going to be, reads the official weather forecast. I have sometimes had the impression that he cannot even tell whether it is wet or dry at the moment without the help of his newspaper. Certainly it is from his newspaper that he derives his opinions on politics and the state of the world and the need of a return to the rugged virtues of a former age. On most matters he does not trouble to have opinions at all, since he is convinced that they can safely be left to those whose special study or experience entitles them to speak with authority.	人間が受動的になったのは、娯楽面ばかりではなく、自分が専門家でないあらゆる技術と知識の形態においてそうである。昔の農民は天候に詳しく、現代人は明日の天気について自分の意見をもたないときには（新聞掲載の）公的な天気予報を読む。現代人は新聞を見なければ、「現在、雨が降っているか晴れているか」さえわからないらしい。印象を私は時々持つことがある（皮肉）。現代人はまじめに新聞を通して政治や世界情勢や昔の厳格な美德にもなる必要性について自分の意見をつくりあげる。現代人が大部分の事柄についてあえて自分の意見を持つとしないのは、特別な学識や経験を持つ人々の権威の保障を毛とに物を言ったほうが安全だと確信しているからである。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「我々は受動的過ぎるか？」 <a href="http://russell-j.com/PASSIVE-HTML">http://russell-j.com/PASSIVE-HTML</a>	テレビ局が街頭インタビューした時の受け答えは面白くないですね。テレビを見て多くの人を意識して、自分の本心を言わずに、多数意見と思われる模範的回答（解答ではなく）をする人が大部分のようです。	
	A7-41	We are told by psychoanalysis that the desire to escape from reality is a very bad thing, but to my mind they exaggerate and fail to make some necessary distinctions... But there are other forms of escape from reality which are wholly desirable. Mozart used to compose music in order to forget his duns and his debts by escaping into a world of phantasy. If he had followed the advice of eminent psychoanalysts, he would instead have drawn up a careful balance sheet of receipts and expenditures and set to work to devise economies by which the two could be made to balance. If he had done this, he would have lost his income, and we should have lost his music.	精神分析家は現実逃避は常に悪いものだと言うが、私には、それは誇張であり、ある種の重要な区別がなされていないように思われる。現実逃避は、それによって妄想を生み出したり、自分の仕事をなまけたりするような場合には、悪いものとなる。しかし、これは異なる。美しい形の現実逃避がある。モーツァルトは、想像の世界に逃げ込むことによって、借金取りと借金を忘れるために、よく作曲した。もしもモーツァルトが、著名な精神分析家たちの助言に従っていたならば、作曲をするかわりに、収入と支出からなる貸借対照表を作成し、収支のバランスをとることによって、節約の工夫をする仕事にとりかかっていたら、モーツァルトがそうしたならば彼自身は収入を失い、我々は彼の音楽を失ったであろう。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「現実逃避」 <a href="http://russell-j.com/FLIGHT-R-HTML">http://russell-j.com/FLIGHT-R-HTML</a>	ものは言いようですが、言葉尻をたらえるのはやはりよくないですね。現実逃避という言葉もそのひとつ。この言葉は否定的な意味合いで使われます。しかし何事もそうですが、絶対的に善いと悪いとかがないことはいくらでもあります。あとは余り考えずに、あらゆる場面にそのフレーズを使うという習慣はお互い注意が必要です。特に政治家はそういった傾向が強いですね。公益（国民の利益）よりも国家利益=支配層の利益では困る！」「私にふれたい」（間違っていたと自覚したらぶつけて欲しい！）、「公共の利益」（いかなる国民もなんらかの部分では少数者。あらゆる分野で少数者を切り捨てていけば、結局は国民のほとんどを切り捨てることになりかねない）、その他、言葉を「おまじない」のように使う人が多く居ります。TPOを考えて、常に言葉を選んで発言していただきたい、自分もそうしたいと思えます。	



*	o	A7-42	<p>The fact is that optimism is pleasant so long as it is credible, but when it is not, it is intensely irritating. Especially irritating is the optimism about our own troubles which is displayed by those who do not have to share them. Optimism about other people's troubles is a very risky business unless it goes with quite concrete proposals as to how to make the troubles disappear or grow less. A medical man has a right to be optimistic about your illness if he can prescribe a treatment which will cure it, but a friend who merely says, 'Oh, I expect you will soon feel better,' is exasperating.</p>	<p>楽観主義はそれが信頼できる間は気持ちがいいが一旦信頼できなくなればそれは人をひどくいらだたせる、というのが真実である。特に他人の悩みに対しては、コッポラに多い問題を共有しない人たちがその問題に対して示す楽観主義である。他人の問題（トラブル）をみて楽観的なことを言うことは、その問題の解決あるいは軽減のためかたがた具体的な提案を伴わないかぎり、非常に危険である。医師が患者の病状に対してそれを治す処方方を所望できるならば、楽観的なことを言う資格がある。しかし、「そのうち良くなるさ」などと言うだけの友人は、われわれは腹をたてる。</p> <p>出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「楽観主義について」 http://russell-j.com/OPTIMISM.HTM</p>	<p>安部首相が音頭をとり、財界などが囃し立てるアベノミクス消費税の値上げは必要だとしても、やる場合は、少なくとも食料品などは現行税率を置きあるいは非課税とすべきでした。それは技術的に難しいからというこで見送られたましたが、大企業は稼いでいる人間以外の多くの人が、やりくりが厳しくなっており、特に低所得者、生活保護世帯、年金生活者などにしわ寄せが来ています。</p> <p>現政府や財界人、大企業に稼いでいる人たちの基本的な発想は、強いもの（富める者）がより強くになれば（富めば）、いずれ弱いもの（貧しい者）にもそのおかげがいく、といったものです（亡き）中国の鄧小平と同じです）。</p> <p>ラッセルが言うように、「特に誰にだしいのはいつも後回しにされる人々の抱える問題を共有しない人たちが、その問題に対して示す楽観主義（そのうち低所得者層にも恩恵が行き渡るさ、など）です。</p> <p>表面上いくら丁寧にも国民のことを考えていると言っても、（たとえば原発は最小限にしてできるだけ自然エネルギーにしていくと言いはらさかんに海外に日本の原発や原発技術を売り込むようなことをしているようでは）慮しつづけます。</p> <p>「巧言令色鮮仁（こうげんれいしよくすくなじん）」 【意味】言葉巧みで、人から好かれようと愛想を振りまく者には、誠実な人間が少なく、人として最も大事な徳である仁の心が欠けているものだ。</p>
		A7-43	<p>In Europe there is no such obvious superiority of one country to another. It might therefore be expressed that travel would have the effect of broadening men's outlook, enlarging their sympathies, and increasing their knowledge of mankind. This effect is produced in those who travel in order to do some work which brings them into important relations with the inhabitants of the foreign countries in which they find themselves, but not in those who travel merely in order to travel.</p>	<p>ヨーロッパにおいては、ある国が別の国よりも明らかに優れているという主張は、ヨーロッパに多い。旅行は、人間の視野を拡大し、共感する力を強め、人類についての知識を増やすという効果をもつと言っようだろうか。この効果は、彼らが訪ずれる外国の住民との間に重要な関係を持たず仕事をするために旅行する人々に対しては生じますが、単に旅行のために旅行する人々に対しては生じない。</p> <p>出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「場所の移動について」 http://russell-j.com/IDO.HTM</p>	<p>海外旅行は、見聞を広めるための大変良い機会です。旅行は、人間の視野を拡大し、共感する力を強め、人類についての知識を増やすという効果をもつと言っようだろうか。この効果は、彼らが訪ずれる外国の住民との間に重要な関係を持たず仕事をするために旅行する人々に対しては生じますが、単に旅行のために旅行する人々に対しては生じない。</p> <p>出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「場所の移動について」 http://russell-j.com/IDO.HTM</p>
		A7-44	<p>Such people, if they are rich, stay at cosmopolitan hotels which are exactly alike in all the countries of the world and associate with such of their fellow-travellers as they already know at home. If they are poor, they usually travel in large gangs, with a manner who saves them from the necessity of even business contacts with the natives. They come home having experienced nothing except picture-postcards and the railway system.</p>	<p>旅行のための旅行をするこれらの人たちは、彼らもし裕福であれば、世界中どこへ行ってもまったく同じような国際的な高級ホテルに泊まり、母国で既に知っている旅行者仲間と交際する。彼らが貧乏であれば、通例、旅行先の現地の人々との事務的交渉さえ必要なくしてくれる（添乗員付きの）団体旅行をする。彼らは絵葉書と列車軌道以外何も経験せずに帰国する。</p> <p>出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「場所の移動について」 http://russell-j.com/IDO.HTM</p>	<p>むしろお金がない人のほうが、安上がりにも団体旅行を強いられる。</p> <p>お金があつていろいろ試してみる事ができる人は、毎回テーマをもって、あたらしい挑戦をするよと思われませんか？ ええ、お金があつても時間がない 余暇を有意義に過ごすよりも仕事が好きなのは、それはそれで幸せですが、家族はそう思っていないかも知れない。それに元気な時は、人生は長いと思っている（楽しみは老後に残しておこう）がもし、れないですが、しかし、いつの世の中も、人生一寸きは闇ですから・・・ ・・・時間健康（生命）貯めたお金をたのしいことに費やせる体力、健康は・・・</p>
		A7-45	<p>The habit of constant movement is destroying some things which had considerable value. The practice of reading for pleasure is dying out, especially as regards books that are not quite new. Knowledge of the seasons, and the intimate love of places in their detail that comes of remaining immovable throughout the year, are now almost confined to agricultural labourers. This has caused the poetry of the past, and the ways of feeling from which it sprang, to go dead.</p>	<p>（現代の）人間が常に動き回る習慣は、大きな価値を持つある種のものを壊しつつある。読書の習慣は死に絶えてつづつある。特に新刊本以外の古い本についてはそうである。現在では、農業に従事している人々のみが、一年中その土地から離れないことから生れる郷土の四季に関する知識や郷土の細部の事物に対する親密な愛情を持っている。これにより、昔の詩歌やそれらを生み出した感情は消え去ってつづつある。</p> <p>出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「場所の移動について」 http://russell-j.com/IDO.HTM</p>	<p>得るものがあれば失うものもある。日々新たな挑戦（取り組み）がなければ進歩はないが、失うものが大きすぎる場合は、時には進歩を受け入れないあるいは別の発展の道を選ぶことも大切となる。即物的になりすぎるのもよくない。四季折々の、四季を感じられる風物や食べ物があることは、幸せの要素のひとつとなつてきているが、いつでも入手したものが入手できるようなかわりに、大切な情緒の多くものが失われるとしたら、大切な情緒が失われた時はもう遅いということにならないように、物事は多面的に考える必要がある。</p> <p>早く結果を出すことばかり考える人間を大量生産しようという現代教育のありかた。成果主義、競争礼賛、格差の拡大への無関心、他者の痛みに対する無感覚。</p> <p>経済成長のために現在行われている諸施策がますます格差（経済格差、教育格差、非正規労働者の増加、その他いろいろ）を生み出すことにはほぼ確実だと思われても、知らない素振り。</p>
		A7-46	<p>Many valuable emotions, and much important thinking, can only grow up as the result of long periods of quiet. These elements in the emotional and philosophical outlook of the past are now decaying. On the other hand, the cruelty and madness which in former ages were generated by boredom and unendurable monotony are also growing less. Perhaps therefore there is gain on the balance. However that may be, the mental change is certainly profound, and still only half completed.</p>	<p>多くの価値ある情緒や重要な思考は、長い静かな時間の結果としてのみ生まれてくる。過去の情緒的及び哲学的な物の見方にあつたこの要素は、今や減りつつある。</p> <p>一方、過去において倦怠感と耐え難い単調さが生み出した残忍さと狂気もまた、減少しつつある。従って、差し引きの結果、多少得る方が勝つているだろう。</p> <p>けれども、事情がどうであろうとも、この物の見方の変化（心理的变化）は明らかに深刻であり、また今後進展するだろう。</p> <p>出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「場所の移動について」 http://russell-j.com/IDO.HTM</p>	<p>早く結果を出すことばかり考える人間を大量生産しようという現代教育のありかた。成果主義、競争礼賛、格差の拡大への無関心、他者の痛みに対する無感覚。</p> <p>経済成長のために現在行われている諸施策がますます格差（経済格差、教育格差、非正規労働者の増加、その他いろいろ）を生み出すことにはほぼ確実だと思われても、知らない素振り。</p>
		A7-47	<p>In these days, under the influence of democracy, the virtue of co-operation has taken the place formerly held by obedience. The old-fashioned schoolmaster would say of a boy that he was disobedient, the modern schoolmistress says of an infant that he is non-co-operative. It means the same thing....</p>	<p>今日では、民主主義の影響の下、「協力の美德」が服従の美德が以前確保していた場所を代わりに占めている。昔流儀の男性教師ならば、少年に対しあなたは反抗的だ（素直でない）と言つたろうが、現代女性教師（注：1930年当時）ならば、現代女性教師は「非協力的だ」と言つたろう。両者は同じことを意味している。</p> <p>出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「協力について」 http://russell-j.com/KYORYOKU.HTM</p>	<p>民主主義の名を借りた横暴。多数決で決めてよいこと、よくないことがある。</p> <p>全体の4/5が賛成すれば1/5を搾取する体制をつくつてよいといふことにはならない。麻生元首相が（ヒトラーのやり口を模倣せよといふ）いみじくも言つたようにヒトラーが政権をとつたのも、多数決という民主主義的な手続きをとつたものであり、国民（が選んだ代議士）が選んだものである。今の日本の国会も同様の状況にある。</p> <p>多数決の原理は、あくまでも少数意見を尊重することにある。ホースだけ意見、聞いたこととして多数の原理でほとんど決めていけば、いずれ国民も後悔する。時がくるであろう。教育においても、同じこと。生徒がユニークな意見を持つことは奨励されるべきことであるが、「協力の美德」が強調されすぎるきらいがある。できるだけ効率的に、「国民として必要な知識や技術を詰め込もう」としようと思えば・・・。</p>
		A7-48	<p>Adults who achieve anything of value have seldom been 'co-operative' children. As a rule, they have liked solitude: they have tried to slink into a corner with a book and have been happiest when they could escape the notice of their barbarian contemporaries. Almost all men who have been distinguished as artists, writers or men of science have in boyhood been objects of derision and contempt to their schoolfellows; and only too often the teachers have sided with the herd, because it annoyed them that a boy should be odd.</p>	<p>何らかの価値ある仕事を成し遂げる大人は、子供の頃ほとんど「協力的」ではない。一般的に言つて、彼らは孤独を愛し、本を抱えて教室の片隅にこもり移動し、野蛮な仲間（同時代人）の目を逃れることができた時が一番幸せな時であった。芸術家、作家、科学者として傑出した人たちのほとんどは、子供の頃、仲間からの嘲笑と軽蔑的（対象）であり、教師にとっては生徒が風変わりでは扱いくつたので、残念ながらもしばしば、教師も生徒仲間（群衆）の味方をする場合が多かった。</p> <p>出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「協力について」 http://russell-j.com/KYORYOKU.HTM</p>	<p>力がある者はたたいもいずれ台頭してきて成功するから厳しくしてもよいのだ、と思う人が少なくないかもしれない。しかし、ラッセルが「天才について」で言っている次の言葉をよく味わつたほうがよいであろう。</p> <p>「天才はつねに自分の道を切り開く」という、耳に心地よい説があるが、この説に力を得て、若い才能を迫害してもそれほど害にならないと、多くの人が考えられている。</p> <p>私たちが見聞している天才は、すべて環境にうち勝っているが、若くして挫折した天才は、（過去）はまったくない。」</p>

				A7-49	In their work they are happy because in the modern world science is progressive and powerful, and because its importance is not doubted either by themselves or by laymen. They have therefore no necessity for complex emotions, since the simpler emotions meet with no obstacles.	科学者は仕事の上で幸福であるが、その理由は、現代世界において科学は進歩的かつ強力であり、またその重要性は科学者自身にも一般人にも全く疑われないからである。それゆえ - 単純な感情は、障害物にぶちあたることがまったくないので -、科学者は複雑な感情を持つ必要がない。 出典：ラッセル『幸福論』第10章「今でも幸福は可能か？」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA21-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA21-020.HTM</a>	もちろん成果をあげられない科学者は幸福とはいえないかもしれませんが、社会的評価を気にしないで科学的研究そのものが楽しいのであれば、生活は厳しくても、仕事は幸福といえます。 現代では、サラリーマンとしての科学技術労働者が膨大な数にのぼっていますので、ラッセルが「科学者」という言葉でイメージするものと、現代人がその言葉でイメージする内容はかなり異なっているかもしれません。 ここでいう「科学者」は、現代においては少し限定して考えたほうがよさそう。現代においては、大量の科学技術労働者が存在しており、ビッグサイエンスの場合は共同研究が重要ですので、事情が大幅に変わっているように思われます。 また、時の政府や権力者の御用科学者は、持ち上げられることもあって、「尊敬」されることそれほど多くはないと思われます。ノーベル賞級の科学者でさえ、功を著して研究不正にあまり報賞しないことですので・・・。 「男らしく」(or女らしく)よりも「人間らしく」必要がある。		
				A7-50	The man of science has no need of a coterie, since he is thought well of by everybody except his colleagues. The artist, on the contrary, is in the painful situation of having to choose between being despised and being despicable. If his powers are of the first order, he must incur one or the other of these misfortunes - the former if he uses his powers, the latter if he does not.	科学者は同志を必要としない。同僚(研究競争相手)を除いて、すべての人から良く思われているからである。これに反して、芸術家は、軽蔑されるかあるいは卑屈になるか、いずれかを避ける必要がある。彼の才能が第一級の場合、彼は前者の不幸のどちらかを必ず招くことになる。才能を発揮すれば前者を招き、発揮しなければ後者を招く。 出典：ラッセル『幸福論』第10章「今でも幸福は可能か？」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA21-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA21-020.HTM</a>	ドファン・ダイブの男(Don Juan type)は、自分では非常に男らしくと信じているが、実際はマザー・コンプレックスの犠牲者である。子どもは過剰な母親のすべてを知っているが、いずれかを避ける必要はない。知事さへになる。それゆえに、子供は(母親について)自分に献身的で、子ども扱きの生活は持たず、人間生活に不可欠な自我(エゴ)の中心が欠けている女性という概念を持つことになる。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「女嫌いについて」 <a href="http://russell-j.com/HATE-W.HTM">http://russell-j.com/HATE-W.HTM</a>		
				A7-51	The Don Juan type, while it believes itself very manly, is really the victim of a mother complex. Children do not know their mother as a rule at all completely - their mothers keep their adult concerns away from the children's notice. Children thus get a conception of a woman wholly devoted to them, having no life apart from them, destitute of that core of egoism without which life is impossible.	明らかにナポレオンが若い時に貧困のため屈辱を受けていなければ、あれほど社会的にも好意的にもならなかったと思われ。ナポレオンが豚の幸に満足するように導かれていたら、人類にとって幸いだったであろう。多くの偉人の理論と実践(実践と理論)に見られる残酷な要素は、彼らの生涯(経歴)が、彼らには自覚されなかった、若い時になつた不幸に対する世間への復讐に他ならぬという事実に基づいている。 出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「子供は幸福であるべきか？」 <a href="http://russell-j.com/CHILDHAP.HTM">http://russell-j.com/CHILDHAP.HTM</a>	受けたい屈辱はいつまでも忘れない。権力がない時は、屈辱を甘受するしかないが、権力を持つたあかつきには、権力を行使すればのびのびと、必ずといってよいほど復讐をする。 少年少女向けの偉人伝では、ナポレオンはもっぱら「偉人」として描かれるが、実際は・・・。		
				A7-52	Certainly Napoleon would have been neither so snobbish nor so bellicose if he had not in his youth suffered humiliation through poverty. If Napoleon could have been induced to be satisfied with the happiness of the pig, it would have been well for mankind. The element of cruelty in both the practice and the theory of many great men is attributable to the fact that their career, unconsciously to themselves, is their revenge upon the world for what it made them suffer in youth.	良い人生(善い人生)とは、要にカブられ、知識によって導かれた人生のことである。			
				A7-53	The best life is one in which the creative impulses play the largest part and the possessive impulses the smallest. What I Believe, 1925, chap.2 <a href="http://russell-j.com/beginner/GOODLIFE.HTM">http://russell-j.com/beginner/GOODLIFE.HTM</a>	しかし、私が激しい情動を好まないことが、情動以外の何かが行為の原因たり得ると考えている、とされているのならば、私はそういふ主張を断然拒否する。私の期待する世界は、情動は強くても破壊的ではない世界、また、情動が情動として認められているので、それが自己をも他人をも欺くことにはならない世界である。そのような世界には、愛と友情があらうし、芸術や知識の追求が所を得るであろう。私には、より狂喜なものを望むひとごとを、満足させることはできそうにない。			
				A7-54	But if it is supposed that I dislike strong emotion, or that I think anything except emotion can be a cause of action, then I most emphatically deny the charge. The world that I should wish to see is one where emotions are strong but not destructive, and where, because they are acknowledged, they lead to no deception either of oneself or of others. Such a world would include love and friendship and the pursuit of art and knowledge. I cannot hope to satisfy those who want something more tigersh. Human Society in Ethics and Politics, 1954, Preface <a href="http://russell-j.com/cool/47T-PREF.HTM">http://russell-j.com/cool/47T-PREF.HTM</a>	知的な人間の道徳感情において、いわゆる「慈善」に関してほとんど変化したものは他にない。空腹の窮乏状態が偽りのものであれば、空腹にお金をめくむこと(善捨)を拒否することは困難であるが、善捨の行為は心地よいものではなく、また赤面を引き起こしがちである。つまり、そこには不可避的に、誰もが物を乞うる必要がないように社会は作られていなければならない、という反省がある。(従って、)善捨をすることに自分が満足を感じるどころか、自分たちは他人をこのような窮乏と屈辱的な状態にしてしまう体制で利益を得ていると感じ、社会的良心が痛むのを感じる。 出典：Bertrand Russell: On charity(Nov. 2, 1932. In: Mortals and Others, v.1 (1975) <a href="http://russell-j.com/CHARITY.HTM">http://russell-j.com/CHARITY.HTM</a>			
				A7-55	There are few ways in which the moral sentiments of intelligent people have changed more than as regards what is called 'charity'. It is difficult to refuse money to a beggar if his need seems genuine, but the act of giving is uncomfortable and inclined to cause a blush: there is inevitably the reflection that society ought to be so organized as to make it unnecessary for anyone to beg. So far from feeling self-satisfied because of giving, we feel our social conscience pricked because we profit by a system which reduces others to such want and humiliation.	「機会の均等」という麗い文句に安住してはならない。カスト地点に大きな差がある以上、「機会の均等」は最初から存在してはいない。今書かれている人は努力した人(あるいは先祖が努力した人)だということの都合のよい前提では、社会的弱者を救うことはできないし、そういった人々に対し説得力をもたない。 問題は、富(国民のすべての財産や総所得)の分配あるいは再分配の問題ではないか? 企業であれば(企業としての成長の糧は別にしておくとして、それ以外)利益を社員にどのように分配するか? 国家であれば税金をどのような割合で国民から徴収し、社会の進歩のためにどのようにお金を使うか? また困った人々(社会的弱者・経済的弱者)のためにどのようにお金を使うかという問題、つまり、国民の財産や国民総所得をどのように国民に使うか? また分配するかという問題に帰するのではないか? 最低賃金が低かったり、生活保護の水準が低かったり、生活保護を受ける資格がありながらいろいろな制約や障害から受給できていないという状況に対してどのような手を持つか? 生活保護をだまし取る一部の不心得者をなくすためという口実で、生活保護の認定を必要以上に厳しくしたりしているが、結局は弱者を堂々いじめることができる(弱い者いじめのための)「免許持」として使っていないか? 現代においては、困窮する人々の問題は、社会の富の分配のあり方が適切でないところから生じているのであり、そのような社会制度や社会体制の問題を棚上げにして、時々「24時間愛は地球を救う」といったような善行を放送して気分を高揚させていい気持ちになっているのは、偽善ではないか? そういった番組をやらなければ、やっとう方がよいと安易に考えていないか? そういったショーをやり高揚感が得られれば、普段は社会的弱者のことは忘れられる、という隠れた気持ちがありはしないか? 時々、慈善ショーではだめだと考える人は、やはり社会制度の根本的な改革が必要だと考えるはずだが・・・?			
★(巻頭?)	○			A7-53	The best life is one in which the creative impulses play the largest part and the possessive impulses the smallest. What I Believe, 1925, chap.2 <a href="http://russell-j.com/beginner/GOODLIFE.HTM">http://russell-j.com/beginner/GOODLIFE.HTM</a>				
	○			A7-54	But if it is supposed that I dislike strong emotion, or that I think anything except emotion can be a cause of action, then I most emphatically deny the charge. The world that I should wish to see is one where emotions are strong but not destructive, and where, because they are acknowledged, they lead to no deception either of oneself or of others. Such a world would include love and friendship and the pursuit of art and knowledge. I cannot hope to satisfy those who want something more tigersh. Human Society in Ethics and Politics, 1954, Preface <a href="http://russell-j.com/cool/47T-PREF.HTM">http://russell-j.com/cool/47T-PREF.HTM</a>				
★				A7-55	There are few ways in which the moral sentiments of intelligent people have changed more than as regards what is called 'charity'. It is difficult to refuse money to a beggar if his need seems genuine, but the act of giving is uncomfortable and inclined to cause a blush: there is inevitably the reflection that society ought to be so organized as to make it unnecessary for anyone to beg. So far from feeling self-satisfied because of giving, we feel our social conscience pricked because we profit by a system which reduces others to such want and humiliation.				

			<p>A7/C1-01</p> <p>Most of my books, I find on looking back over them, have myths to enforce the points. For instance, I turned up the following paragraph recently in 'The Impact of Science on Society': 'What I do want to stress is that the kind of lethargic despair which is now not uncommon is irrational. Mankind is in the position of a man climbing a difficult and dangerous precipice, at the summit of which there is a plateau of delicious mountain meadows. With every step that he climbs, his fall, if he does fall, becomes more terrible; with every step his weariness increases and the ascent grows more difficult. At last, there is only one more step to be taken, but the climber does not know this, because he cannot see beyond the jutting rocks at his head. His exhaustion is so complete that he wants nothing but rest. If he lets go, he will find rest in death.'</p> <p>Hope calls: 'one more effort - perhaps it will be the last effort needed.' Irony retorts: 'Silly fellow! Haven't you been listening to hope all this time, and see where it has landed you.' Optimism says: 'While there is life, there is hope.' Pessimism growls: 'While there is life, there is pain.' Does the exhausted climber make one more effort or does he let himself sink into the abyss? In a few years, those of us who are still alive will know the answer.'</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969 ] http://russell-j.com/beginner/AB31-310.HTM</p>	<p>私の著書のほとんどに、一歩ふり返って来てわかつたことであるが、要点を強調するためのつくり語が入っている。たとえば私は最近自著『社会に対する科学の権威』（The Impact of Science on Society, 1952）の中に次の一節を見つけた。</p> <p>「私が強調したいことは、現在珍らしくなくなっているこの気分の基礎は、たゞ不合理な事柄のせいだけにある。人類はいまや困難かつ危険な断崖絶壁を登っている人間（クライマー）の立場にある。頂上は心地よい草地が広がる台地となっている。一步一步登るにつれて、もし彼が躊躇すれば、それだけ恐ろしいことになる。歩進むごとに疲労は増し、登ることはますます困難になる。ついに、あと一歩を残すだけとなる。しかし彼はそのことを知らない。なぜなら、頭上突き出ている岩の先を見ることができないからである。疲労は極限に達し、彼が望むのは休息のみである。もし彼が手を離せば、死の休息を得るだろう。</p> <p>希望は叫ぶ。「もう一ふんばりだ。多分これが必要な最後の努力となるだろう。」 皮肉は言い返す。「愚か者！ お前はずっと希望のいうことを聞いてきたんじゃないか。その結果、どこにつれてこられたというのか。」 楽観は言う。「生命の間は希望はある。」 悲観は怒って言う。「生命のある限り苦痛がある。」</p> <p>疲労しきったこの登山家ははたしてもう一歩の努力をするのか、それとも、奈落の底に落ちるに身をまかせてしまふのか。その答えは、数年して、その時生き残っている者が知るであろう。</p>		
			<p>B1 社会思想</p>			
			<p>B 1 -01</p>	<p>世界が今渦中にある経済恐慌は、人間の力を越えた自然発生的な原因を持つものではない。それはたゞに人間の力と意志の不足、知識の欠如、貧乏、そして、貧乏を余りにも持ちすぎ、他の国はあまりにも富を持たな過ぎる。</p>	<p>[ n.091 : 我々の貯金から利益を得る者 ]</p>	
			<p>B 1 -02</p>	<p>経済の機構を再び正常にものとするには、個々の経済活動が常に利潤を生まなければならないという要請はもはや必須ではないことは明らかである。と私は考える。アメリカの西部やカナダでは、食料が（余って）腐っているのに、世界中の工業地帯では、飢えた失業者の群がひしめいている。食料は原料として、飢えた労働者に提供され、アメリカ西部の農民の商業を満たしたる労働に従事するならば、個々の資本家が利益をあげなくとも、世界は全体としてずっと豊かになるであろう。個人の利益という動機がある場合は通用しないことは明らかであり、組織化された社会の努力のみが、世界の経済状態を回復しうるであろう。</p>	<p>[ n.092 : 世界は発狂する？ ] 「米同時多発テロ」にはビックリしました。テロリズムは許されるものではなく、しっかりした対策をとる必要があります。しかし、同時にこのような事態を招いた米国のこれまでの中東政策、東南アジア政策（すなわち対外政策）の在り方も問われなければなりません。「自由を守るため、米国の国益を守るため」という理由で、他国民の自由を侵害してよいわけはありません。またたとえ強固な集団安全保障体制をつくっても、世界に大きな負荷の差がある限り、テロは根絶できないでしょう。テロ対策は米国だけでなく、日本も含め、世界全体の問題ですが、先進国の価値観を押しつけることだけは避けなければなりません。</p>	<p>バブル崩壊、リーマン・ショックなど、「強欲」資本主義の弊害が顕著に現れることに、反省が行われますが、2、3年もたてばすぐに忘れられてしまいます。幼い頃から競争（や利潤追求）を善とする哲学（考え方）に疑問をもたないような教育や競争が国や社会（あるいは家庭）によってなされておき、競争から離脱すれば社会から排除者（落ちこぼれ・敗者・弱者）としてレッテルが貼られてしまいます。政治・経済・日常生活すべてがグローバル化しつつある今日にあっては、いかなることも世界全体のなかで位置づけて考えない正しい判断や解決法は見いだせません。正面から「競争の哲学」を否定してもまたにも相手をしてもたえないので、ここはワークシェアリングやワーク・ライフ・バランスの重要性を強調するという方法がよさそうです。</p>
			<p>B 1 -03</p>	<p>（マルクス同様）正統派経済学者たちも、経済的な自利追求を（社会科学）における根本的動機とした点で問われている。ものに対する欲望も、権力と栄光とから隔てられている場合には、限りがあるものであり、それ相応な資産さえあれば、十分に充たすことができる。・・・本書で私が証明しようとするのは、ちょうど工科大学が物理学の根本概念であるのと同じ意味で、社会科学の根本概念は権力（広義）にあるということである。</p>	<p>[ 格言・警句集 n.108 : 権力衝動（社会科学の根本概念） ]</p>	
			<p>B 1 -04</p>	<p>・・・歴史は、この国とかがあつた国とが、特定の国の歴史としてではなく、文化の進歩の歴史として教えられるべきであり、人類全体の見地からして教えられるべきであり、自国だけを不当に強調して教えずに済ませない。いかなる国も例外なく悪いことをやってきたし、その大部分は馬鹿げた過ちであつたことを、子供たちに教える必要はありません。集団がヒステリックに興舞すると、どんなふうにも国民を愚かな行動に誘ひこんでいけるから、また、激昂する気狂い状態をも押し流されず、毅然たる態度をとる少数者をどのように迫害するか子供たちに教えるべきです。</p>	<p>[ 格言・警句集 n.114 : 歴史教育(1) ]</p>	<p>自国の戦争犯罪を認めることがなぜ「自虐史観」なのだろうか？ いずれの国も馬鹿げた犯罪行為を過去やってきた。それぞれの罪の程度に見合った評価をして非難することは、同じ犯罪を起さないと必要なことである。</p>
			<p>B 1 -05</p>	<p>・・・国家主義的な型の愛国心は、学校教育で教えられなければならない型の愛国心とはかけ離れたものであり、それが不幸にして陥りやすい集団ヒステリーの一形態だと言わなければならない。集団ヒステリーのような愛国心(怒た)に対し、知的にも道徳的にも防備を固めなければならない。国家主義は疑いもなく現代の最も恐ろしい悪魔である。</p>	<p>[ 格言・警句集 n.115 : 愛国心(2)教育における ]</p>	<p>郷土愛が延長した形の素朴な愛国心や文化的な愛国心と、国家主義的・政治的な愛国心を区別しないひとが多すぎないか？ 気がついた時にはひどいことになっていた、ということにならないためには、ラッセル曰く</p>
			<p>B 1 -06</p>	<p>・・・教師と対立したものととしての教育当は、このよきな長所を持たず子供たちに「愛国心」を言い換えられ、取るに足らぬ理由から自国を去る（=外国人）を殺したり殺されたりする心を教え込み、彼らが国のため（国益）と考えるものために子供たちを犠牲に犠牲にしている。権威は監督下にあるならば（子どもたちのために良かれと信じている人々の手の中のもの）であれば比較的無害であろうが、この結果を確保する方法はまったくわかっていない。</p>	<p>[ 格言・警句集 n.116 : 愛国心(3)教育 ]</p>	<p>「国家主義的な型の愛国心(教育)に対し、知的にも道徳的にも防備を固めなければならない」 （「国家主義・政治的」愛国心）対「郷土愛や（文化的）愛国心」 「国益追求」と「地球誌と調和する自国利益の確保」 「教育を国の発展に役立つ国民の養成を第一に考える教師及び権力者」対「一人ひとりの生きる力や想像力・個性の涵養を第一に考える教師及び社会」</p>
			<p>B 1 -07</p>	<p>我々の時代において新しいこと(の一つ)は、権力者たち、政府その他の権威を持つている人々が、自分たちの様々な偏見を民衆に押し付けることができる力が増した点である。</p>	<p>[ 格言・警句集 n.122 : 自由競争崇拜者達へ ]</p>	
			<p>B 1 -08</p>	<p>成功への技量を持たぬ人々にも権利はある。そしてこの種の技量の持ち主のみが成功を取める環境において、技量を持たぬ人々が自分たちの権利をいかに守るべきかという問題である。自由競争を正義の裏面のための手段であるという信念を放棄する以外に、この点の解決策はない。</p>	<p>[ 格言・警句集 n.122 : 自由競争崇拜者達へ ]</p>	

★	B 1-09	<p>Free competition, which was the watchword of nineteenth-century liberalism, had undoubtedly much to be said in its favour. It increased the wealth of the nations, and it accelerated the transition from handicrafts to machine industry; it tended to remove artificial injustice and realised Napoleon's ideal of opening careers to talent. It left, however, one great injustice unremedied - the injustice due to unequal talents. In a world of free competition the man whose Nature has made energetic and able grows rich, while the man whose merits are of a less competitive kind remains poor.</p> <p>[From: Success and failure (written in Jan. 11, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975. ) http://russell-j.com/JIYU-KYO.HTM</p>	<p>19世紀自由主義のスローガン(合言葉)であった「自由競争」は、疑いもなく支持すべき多くの長所を持っていた。「自由競争」は諸国民の富を増進させ、そこから機械工業への移行を加速した。即ち、人為的不正を取り除き、才能のある者にキャリア形成の道を開くというナポレオンの理想を実現した。しかしそれは一つの大きな不公平 - 即ち才能の不等性にもとづく大きな不公平を救済しなかった。自由競争の世界において、能力のある者は富を手にし、才能の乏しい者は貧乏のままとなる。</p>	<p>(Mコメント)「自由」も「平等」も、単独のスローガンとして使用する時、弊害が多い。資本主義社会は「自由」を、社会主義社会は「平等」をより価値の高いものとする。現在は資本主義社会が優勢となっているが、決して満足していく社会ではない。中間的形態として、北欧のような福祉社会・福祉国家の思想があるが、最近ではそれほど元気がない。21世紀を迎えるにあたり、米英あるは先進国中心でない、新しい(人類共通の)世界観・価値観を作り出せない限り、人類の未来は明るいとはいえない。新しい至福の千年が到来するか、それとも反省のない人類の終末の始まりか。</p> <p>[格言・警句集 n.125: 権力の公正な分配]</p>	
★	B 1-10	<p><b>削除 A6-23と重複</b></p>			
★	B 1-11	<p>Our militarists have successfully opposed the granting of votes to soldiers; yet in all the countries an attempt is made to persuade the civilian population that war-weariness is confined to the enemy soldiers. The daily toll of young lives destroyed becomes a horror almost too terrible to be borne; yet everywhere, advocacy of peace is rebuked as treachery to the soldiers, though the soldiers above all men desire peace.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2, chap. 1, 1968 ] http://russell-j.com/beginner/AB21-220.HTM</p>	<p>我が国の軍国主義者達は、兵士に投票権を与えることに反対し、成功しています。しかもあらゆる国において、戦争で疲弊しているのは敵側の兵士だけだと一般市民に思い込ませようとしています。殺害された若い人命の毎日の犠牲が、ほとんど耐え難いほどの恐怖となっています。しかし、あらゆるところで平和を擁護することは兵士たちへの裏切り行為として、はげしく非難されます。あらゆる人々のなかで、兵士たちはとりわけ平和を望んでいるのにもかかわらずです。</p>	<p>[格言・警句集n.128:ワイルソン大統領への公開書簡から]</p>	
★	B 1-12	<p>Take, for example, the behaviour of the British in India. To most English people it seems that Anglo-Indians have been struggling heroically to spread the light of civilisation in the face of obscurantism, intolerance and superstition. To almost everybody who is not British, the British appear in India as brutal tyrants, enjoying power and extracting tribute. If you wish to know how an Anglo-Indian feels, you must adopt the British point of view; whereas if you want to know what he does, you must adopt the point of view of the rest of the world. The same thing may be said of the doings of Americans in Haiti and Central America, and of imperialist doings generally.</p> <p>[From: As others see us (written in Mar. 23, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975. ) http://russell-j.com/AS-O-SEE.HTM</p>	<p>たとえば、インドでイギリス人がしていることについて考えてみる(注:ここは「感情」ではなく「感情」は誤った判断をする大きな原因でもあります。他国の理解においても同様のことが言え、我々はマスコミから多くの影響を受けますが、自分の気持ち(好き嫌い)にそった情報ばかりを得やすいという傾向があります。「愛」「好意」の反対は「憎しみ」「悪意」ではなく「無関心」です。「外見、人前及び国家や社会のような抽象的な対象」を理解するためには、できるだけ多くの視点で考え、総合判断をすることが大切だと思います。</p>	<p>[M] 他人を理解する鍵は「愛(情)」だという人がいます。ラッセルが言うように、「感情」は誤った判断をする大きな原因でもあります。他国の理解においても同様のことが言え、我々はマスコミから多くの影響を受けますが、自分の気持ち(好き嫌い)にそった情報ばかりを得やすいという傾向があります。「愛」「好意」の反対は「憎しみ」「悪意」ではなく「無関心」です。「外見、人前及び国家や社会のような抽象的な対象」を理解するためには、できるだけ多くの視点で考え、総合判断をすることが大切だと思います。</p>	
★	B 1-13	<p>I cannot share the hopes of the Bolsheviks any more than those of the Egyptian anchorites; I regard both as tragic delusions, destined to bring upon the world centuries of darkness and futile violence. The principles of the Sermon on the Mount are admirable, but their effect upon average human nature was very different from what was intended. Those who followed Christ did not learn to love their enemies or to turn the other cheek. They learned instead to use the Inquisition and the stake, to subject the human intellect to the yoke of an ignorant and intolerant priesthood, to degrade art and extinguish science for a thousand years. These were the inevitable results, not of the teaching, but of fanatical belief in the teaching. The hopes which inspire Communism are, in the main, as admirable as those instilled by the Sermon on the Mount, but they are held as fanatically, and are likely to do as much harm. Cruelty lurks in our instincts, and fanaticism is a camouflage for cruelty. Fanatics are seldom genuinely humane, and those who sincerely dread cruelty will be slow to adopt a fanatical creed. I do not know whether Bolshevism can be prevented from acquiring universal power. But even if it cannot, I am persuaded that those who stand up against it, not from love of ancient injustice, but in the name of the free spirit of Man, will be the bearers of the seeds of progress, from which, when the world's gestation is accomplished, new life will be born.</p> <p>[From: The Practice and Theory of Bolshevism, 1920, chap.1:What is hoped from Bolshevism. http://russell-j.com/cool/15T-1011.HTM</p>	<p>私はボルシェヴィキ(ロシア共産主義者と同じ希望を共有することはできない。エジプトの隠者の希望を共有できないのと同じである。私は、福音をなもて、世界に何の悪もない道、道徳と無益な暴力をもたらす、見られない悲劇的な妄想の産物と見ている。(キリスト教の)山上の垂訓(の教え)は立派であるが、それが平均的な人間に与えた影響は裏切されたものとは非常に違っていた。キリストになつた人々は敵を愛した。行なうべきこと)もう一方の類を向けたりすることを学ばなかった。彼らは、その代わりに学んだのは、宗教裁判や死刑の使用、人間の知性を無知で非寛容な僧侶たちの支配(くびき)に従属させること、また一千年にわたって芸術の品位を低下させ、科学を破壊させることであった。それは、キリストの教えそのものではなく、教えを熱狂的に信じたことによる不可逆的な結果であった。共産主義を鼓舞した希望は、概して、山上の垂訓によって教え込まれた希望と同じく立派なものである。しかし、共産主義の希望はかつてのキリスト教と同じように熱狂的に信ぜられており、同じように有害になりつつある。我々の本能には残酷さが潜んでおり、狂信は残酷さをかくすカマフラージュである。狂信主義者はめったに心から人間的であることはなく、残酷さを心から恐れる人はなかなか狂信的な信条を抱かないであろう。ボルシェヴィズム(ロシア共産主義)が世界的権力を握るのを阻止できるかどうか、私には判らない。しかし、たとえ阻止できなかったとしても、旧来の不正を好むためではなく、人間の自由な精神の名においてそれに反対して立ち上がった人々は、進歩の種子の運搬者となり、世界の産み月が満ちた時には、その種子から新しい生命が生まれるであろう。</p>		
★	B 1-14	<p>The threat to intellectual freedom is greater in our day than at any time since 1660; but it does not now come from the Christian Churches. It comes from governments, which, owing to the modern danger of anarchy and chaos, have succeeded to the sacrosanct character formerly belonging to the ecclesiastical authorities. It is the clear duty of men of science, and of all who value scientific knowledge, to protest against the new forms of persecution rather than to congratulate themselves complacently upon the decay of the older forms. And this duty is not lessened by any liking for the particular doctrines in support of which persecution occurs. No liking for Communism should make us unwilling to recognize what is amiss in Russia, or to realize that a regime which allows no criticism of its dogma must, in the end, become an obstacle to the discovery of new knowledge. Nor, conversely, should a dislike of Communism or Socialism lead us to condone the barbarities which have been perpetrated in suppressing them in Germany. In the countries in which men of science have won almost as much intellectual freedom as they desire, they should show, by impartial condemnation, that they dislike its curtailment elsewhere whatever may be the doctrines for the sake of which it is suppressed.</p> <p>[From: Religion and Science, 1935, chap.10: Conclusion. http://russell-j.com/cool/33T-1001.HTM</p>	<p>知的自由への脅威は、1660年以來(注:1660年に英国王政復古)どんな時代より、今日(注:本書は1935年出版)大きなものとなっている。だが、今日では、それはキリスト教会から生じているのではない。それは政府が生じているのであり、現代の無秩序と混乱から生じているために、以前、教会の権威に属していた神聖にして犯すべからざる性格を、政府が受け継いでいるのである。古い形態の衰退を自己満足で喜ぶより、迫害の新しい形態に反抗することこそ、科学者や科学的知識を愛するすべての者のあきらかな義務である。そしてこの義務は、迫害が与える(ような)いかなる特殊な教説を好むことによっても決して軽減されない。共産主義を好むために、ロシアにおいて何が障害であるか認めなければならないということであってならず、また、共産主義のドグマを批判することをおこなない体制が、結局、新知識発見の障害になっていることを理解しないようではない。また、逆に、共産主義や社会主義に対する嫌悪により、われわれをして、ドイツに於てそれらを抑圧するために行なわれてきた野蠻行為を容認させる結果になってもいけない。科学者がその置かれた知的自由をほとんど勝ち得ていながら、いかにそれが、いかに非難により、他国で、自由が抑圧される教説が何であろうとも、知的自由が奪われることを好まないことを示すべきである。</p>		

★	B1-15	<p>Woodrow Wyatt: Doesn't it very often happen that the person who wants the good things also wants power because he's rather vain?</p> <p>Bertrand Russell: Yes, it does very often happen, all because the sheer love of power outweighs the wish to get this or that done. That is why Lord Acton was quite right to say that power corrupts, because pleasure in the exercise of power is something that grows with experience of power. Take, for example, Cromwell. I have no doubt that Cromwell went into politics with entirely laudable motives because there were certain things he thought were extremely important to the country that he wanted to see done. But after he'd been in power for a certain length of time he just wanted power, and that is why on his deathbed he said that he was afraid he'd fallen from grace. Oh, certainly, yes. I think every person who shows much energy wants power. But I only want one sort of power. I want power over opinions..</p> <p>Woodrow Wyatt: Do you think that the power you've had over opinions has corrupted you?</p> <p>Bertrand Russell: Well, I don't know if it has. It's not for me to say that. I think other people will have to be the judge of that.</p> <p>From: Bertrand Russell Speaks His Mind, 1960. http://russell-j.com/cool/567-0601.HTM</p>	<p>&lt;質問は、ウッドロウ・ワイアット (BBCテレビ解説者兼労働党下院議員)による。&gt; ・ ・ ・ 前略 ・ ・ ・</p> <p>問 立派な事をやりたい (善行をなしたい) と思っている人、どちらかという虚栄心から権力を欲しがることもまた、しばしば起こるのではないですか？</p> <p>ラッセル はい、非常にしばしば起こります。それはみな、あれこれやりたいという願望 (思い) よりも、(混ぜ物のない) 全くの権力愛が勝るからです。アクトン卿 (1834-1902, 英国の歴史家) が「権力は腐敗する、なぜなら、権力をふるう喜びは権力を実際に経験する (実際に権力をふるう経験をする) につれて成長して大きくくなってゆくものだからである」と言ったのはまったく正しいというのは、そういう理由です。たとえば、クロムウェルの例をとってみましょう。クロムウェルが政界に身を投じた時、まったく立派な動機を持って「公正、公平」といって、なぜなら、そこには英国にとって、とても重要と彼が思う一定の事柄があり、それがなされるのを目にしたいと思ったからです。しかし、彼はある一定の期間、権力の座について以後、まづれもなく権力そのものを欲しがりました。そして、それが彼が最終に際して、自分は神の恩恵に背いたと思うようになった理由です。いや、誰かにそうですね。権力があふれている人で、権力を欲しがると思います。しかし、私の場合は、ただ一種類の権力が欲しいだけです。私は世論に影響を与える権力が欲しいと思います。</p> <p>問 世論に対してあなたがこれまで持ってきた権力のために、自分が腐敗したとお考えになりますか？</p> <p>ラッセル さあ、腐敗したかどうかは分かりません。それは私が言うべきことではありません。それはあり得る、私は私以外の他の人々が審判官でなければいけない、と思います</p>	
	B-16	<p>And the passion that has given driving force to democratic theories is undoubtedly the passion of envy. Read the memoirs of Madame Roland, who is frequently represented as a noble woman inspired by devotion to the people. You will find that what made her such a vehement democrat was the experience of being shown into the servants' hall when she had occasion to visit an aristocratic chateau.</p>	<p>民主主義理論に推進力を与えたのは、疑いもなく、'ねたみ'の情熱である。ロラン夫人 (フランス革命の時のジロント派指導者の一人) は、しばしば高貴な女性だとされているが、彼女の『回想録』を読んでみると、彼女をあれほど熱烈な民主主義者にしたのは、ある貴族の館を訪れた折に召使い部屋に案内された経験であったことがわかる。</p> <p>出典：ラッセル『幸福論』第6章「ねたみ」 http://russell-j.com/beginner/HA16-010.HTM</p>	<p>ねたみ (envy) と嫉妬とを混同する人が時々いるようです。</p> <p>ロラン夫人はフランス市民革命の時にギロチン台で処刑されましたが、次の言葉は有名なのでご存知の方も多いと思います。</p> <p>「自由よ、汝の名の下にいくに多くの罪が犯されたことか、 たどたどしかったロラン夫人は、「平民出身だったために貴族に受け入れられず、共和主義者になった。」とのこと。ラッセルは「彼女の『回想録』を読んでみると、彼女をあれほど熱烈な民主主義者にしたのは、ある貴族の館を訪れた折に召使い部屋に案内された経験である。貴族にたどたどしいことか、人民を苦しめる側にとつたかも知れないということか。」</p> <p>たとえて言えば、御用学者になれば、権力者の番犬になる人が少なくないということでしょうか、難しいところですね。恵まれた人々の足をひっぱり、みんな惨めになるだけなら、社会は全体としてもよくなりません。そうかといって、不正や不公平な状態をほっておくのもよくありません。従って、行き過ぎにならないように、少しづつ正していく必要があります。</p>
	B-17	<p>While it is true that envy is the chief motive force leading to justice as between different classes, different nations, and different sexes, it is at the same time true that the kind of justice to be expected as a result of envy is likely to be the worst possible kind, namely that which consists rather in diminishing the pleasures of the fortunate than in increasing those of the unfortunate.</p>	<p>ねたみが、異なる階級、異なる国家、また異なる性の間に、「公正、公平」をもたらす主な動因になっていることは事実であるが、同時に、ねたみの結果として期待される「公正、公平」は、最悪の種類のものになりがちであることも、また事実である。おなじ「公正、公平」であっても、不幸な人たちの楽しみを増すよりも、むしろ、幸運な人たちの楽しみを減らすようなものになりがちである。</p> <p>出典：ラッセル『幸福論』第6章「ねたみ」 http://russell-j.com/beginner/HA16-070.HTM</p>	
★	B-18	<p>Passions which work havoc in private life work havoc in public life also. It is not to be supposed that out of something as evil as envy good results will flow. Those, therefore, who from idealistic reasons desire profound changes in our social system, and a great increase of social justice, must hope that other forces than envy will be instrumental in bringing the changes about.</p>	<p>私生活に荒廃をもたらす情熱を、公生活にも同様の荒廃をもたらす。ねたみのような悪しきものからよい結果が生まれるとは考えられない。それゆえ、理想主義的な理由から、社会組織を根本的に変革し、社会正義を大幅に増やしたいと思う人は、ねたみ以外の力が改革の助け (手段) になることを、望まなければならぬ。</p> <p>出典：ラッセル『幸福論』第6章「ねたみ」 http://russell-j.com/beginner/HA16-070.HTM</p>	<p>公私をはっきりわけていても、私的な悪しき情熱が底にある場合は、公的な生活にも影響を与え、いつかほころびができるということですね。</p> <p>政治家はよく叩く対象を決めて、相手を罵倒し、選挙民 (一般大衆) をあおったりしますが、そういうやりかたからは良い結果が生まれない。従って、そういう政治家には同調しないように、気をつけましょう。たとえば、・・・</p> <p>マスコミは貴重な情報源ですので、大いに活用した方がよいと思います。しかし、そのためには、できるだけ多くの人がメサ・アリアテラを身につけなければなりません。そう考えている人も少なくないと思われます。</p> <p>しかし、それならどうして、日本では、カナダなどでさかんに行われている、具体例にもついていたメディア・アリアテラ教育がほとんどなされていないのでしょうか？</p> <p>「由らしむべし、知らしむべからず」が基本姿勢の為政者や文藝関係者が、公教育で自分たちの不利になるような教育をしようとは期待できません。そういつた人たちが政府を形成し、マスコミがそれに迎合したら、たとえば、(圍宮放送ではない) 公共放送のNHKまでもが政府その他の権力者のことを気にして、自己規制したいたら、大変です。</p> <p>お互いを互いを監視する社会 (監視する側、監視される側) 地方公務員が、介護対象の人のためたつたが勤務時間中にスーパでその人のために代わりに買い物をしている姿を見て、市役所に市の職員が勤務中に「さぼって」買い物をして、いたとの「告発」の被害をした人たちがいました。</p> <p>痴漢のぬめぬめ (致人死傷すれば、特定の個人を痴漢にしたてあけることはそれほど難しいことではなさそう)</p> <p>犯罪の死刑囚 (冤罪事件が少し多すぎるのではないかと、現在のところ、大部分の人たちは無念であるために、こうした運命がはきかかっているが、しかし、運命がほしいにそのやり方を完璧なものにするにつれ、この新手的社会的迫害の危険は増大していくだろう。</p> <p>出典：ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 http://russell-j.com/beginner/HA19-070.HTM</p>
★	B1-19	<p>After people leave school their knowledge of foreign countries, such as it is, is derived from the newspapers, and they will not buy a newspaper unless it flatters their prejudices. Consequently, the only knowledge they obtain is such as to confirm their pre-conceptions and passions.</p> <p>This is one of the great difficulties in the way of a sane conduct of international affairs, and I do not see how it is to be dealt with within the limits of nationalist democracy.</p>	<p>我々は学校を卒業すると、我々の外国に関する知識は、お寒いことであるが、新聞 (注：現代においては「マスコミ」) を通じてであり、新聞 (注：TVなどのマスコミ) が我々の外国に関する偏見を満足させない限り (偏見に迎合しない限り)、我々はその新聞を賢く (注：TVを見よう) としない。その結果、我々の外国についての知識は、我々の偏見と感情を強めるようなものに限定される。</p> <p>これは、国際問題を正業に扱っていく上での最大の困難の一つである。自国優先主義の民主主義の制限内において、国際問題をどのように処理していったらよいか、私にはわからない。(注：つまり、もっと国際主義的な観点が必要ということ)</p> <p>出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「他者の視点で見ること」 http://russell-j.com/AS-O-SEE.HTM</p>	
	B1-20	<p>Fear of immediate neighbours is no doubt less than it was, but there is a new kind of fear, namely the fear of what newspapers may say. This is quite as terrifying as anything connected with mediaeval witch-hunts. When the newspaper chooses to make a scapegoat of some perhaps quite harmless person, the results may be very terrible. Fortunately, as yet this is a fate which most people escape through their obscurity, but as publicity gets more and more perfect in its methods, there will be an increasing danger in this novel form of social persecution.</p>	<p>隣り近所を恐れることは、疑いもなく、以前よりは少なくなっているが、新しい形の恐れが現在存在している。すなわち、新聞 (松下注：現在で言えば、週刊誌やテレビなどのマスコミ) が何か書くかも知れないという恐れである。これは、中世の魔女狩りに結びついているものから多少は大膽なものである。新聞 (注：マスコミ) と読み替え) が、まったく無害かも知れない人間をスケープゴート (生け贖) にしようとしたら、その結果はまことに恐ろしいものになる可能性がある。幸いなことに、現在のところ、大部分の人たちは無念であるために、こうした運命がはきかかっているが、しかし、運命がほしいにそのやり方を完璧なものにするにつれ、この新手的社会的迫害の危険は増大していくだろう。</p> <p>出典：ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 http://russell-j.com/beginner/HA19-070.HTM</p>	<p>「由らしむべし、知らしむべからず」が基本姿勢の為政者や文藝関係者が、公教育で自分たちの不利になるような教育をしようとは期待できません。そういつた人たちが政府を形成し、マスコミがそれに迎合したら、たとえば、(圍宮放送ではない) 公共放送のNHKまでもが政府その他の権力者のことを気にして、自己規制したいたら、大変です。</p> <p>お互いを互いを監視する社会 (監視する側、監視される側) 地方公務員が、介護対象の人のためたつたが勤務時間中にスーパでその人のために代わりに買い物をしている姿を見て、市役所に市の職員が勤務中に「さぼって」買い物をして、いたとの「告発」の被害をした人たちがいました。</p> <p>痴漢のぬめぬめ (致人死傷すれば、特定の個人を痴漢にしたてあけることはそれほど難しいことではなさそう)</p> <p>犯罪の死刑囚 (冤罪事件が少し多すぎるのではないかと、現在のところ、大部分の人たちは無念であるために、こうした運命がはきかかっているが、しかし、運命がほしいにそのやり方を完璧なものにするにつれ、この新手的社会的迫害の危険は増大していくだろう。</p> <p>出典：ラッセル『幸福論』第9章「世論に対する恐れ」 http://russell-j.com/beginner/HA19-070.HTM</p> <p>週刊誌、イエロー・ペーパー (週刊誌により、巨悪がばかされることはあるが、しかし、週刊誌の記事は、読者が求めるからか、針小棒大な記事が多く・・・)</p> <p>オーム事件の時にマスコミによって犯人扱いされた河野さん</p>

B1/C1-01	<p>Throughout this period my winters were largely occupied with political questions. When Joseph Chamberlain began to advocate Protection, I found myself to be a passionate Free Trader. The influence which Hewins had exerted upon me in the direction of Imperialism and Imperialistic Zollverein had evaporated during the moments of crisis in 1901 which turned me into a Pacifist. Nevertheless in 1902 I became a member of a small dining club called 'The Coefficients', got up by Sidney Webb for the purpose of considering political questions from a more or less Imperialist point of view. It was in this club that I first became acquainted with H. G. Wells, of whom I had never heard until then. His point of view was more sympathetic to me than that of any other member. Most of the members, in fact, shocked me profoundly. I remember Amery's eyes gleaming with blood-lust at the thought of a war with America, in which, as he said with exultation, we should have to arm the whole adult male population. One evening Sir Edward Grey (not then in office) made a speech advocating the policy of the Entente, which had not yet been adopted by the Government. I stated my objections to the policy very forcibly, and pointed out the likelihood of its leading to war, but no one agreed with me, so I resigned from the club. It will be seen that I began my opposition to the first war at the earliest possible moment.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6: Principia Mathematica, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-160.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-160.HTM</a></p>	<p>この時期(注:1902~1910)を通して私は、毎年冬の期間、主として政治問題に専念していた。ジョゼフ・チェンバレン(Joseph Chamberlain, 1836-1914: 英国の政治家)が保護貿易(制度)を擁護しはじめた時、私は熱烈な自由貿易論者になっていた。(また)ヘヴィンズ(William Albert Samuel Hewins, 1865-1931)が私を帝国主義と帝国主義的関税同盟の方向に向かわせた影響(力)は、私を平和主義者へと転させた1901年の危機(参考:ラッセルの回顧)の時期の間に消えていった。</p> <p>それにもかかわらず私は、1902年に、政治問題を多かれ少なかれ帝国主義者の見地から検討することを目的にシドニー・ウェブによって創設された効果懸念会(Coefficients)という名の小さな食事会を立ち上げた。私が初めてH.G. ウェルズと知り合いになったのは、この会においてであり、その時まで一度も彼のことについて聞いたことはなかった。彼の物の見方は、他の会員の誰よりも私の立場でできるもの(気に入るもの)であった。事実会員の(意見の)大部分が私に強いフォックを与えた。私は、アメリカ(L.S. Amery, 1873-1955)が、「成人男子国民全員、武装させるべきである」と狂喜しつづけた時、アメリカとの戦争を思い、流血の欲望で、彼の眼が爛々と輝いていたのを記憶している。ある晩(の食事会の際で)エドワード・グレイ卿(当時まだ公職についていなかった)は、「協商政策」-この政策は政府によってまだ採用されていなかった-を擁護する演説を行なった(松下注: Tripple Entente 1891~1907年に英国、フランス、ロシアが相互に締結した協定にもとづき三國の協力関係で1917年のロシア革命まで存続)。私は「協商政策」に対する反対意見をきかめて強く存続し、その政策を採用することによって戦争にいたる可能性があると指摘したが、誰も私に賛成するものがいなかった。そこで私は、その会から脱退した。このことから、可能な限り最も早い時期に私が第一次世界大戦に反対し始めたことがわかるであろう。</p>			
B1/C1-02	<p>( B1/C1-01の続き )</p> <p>After this I took to speaking in defence of Free Trade on behalf of the Free Trade Union. I had never before attempted public speaking, and was shy and nervous to such a degree as to make me at first wholly ineffective. Gradually, however, my nervousness got less. After the Election of 1906, when Protection ceased for the moment to be a burning question, I took to working for women's suffrage. On pacifist grounds I disliked the Militants, and worked always with the Constitutional party. In 1907 I even stood for Parliament at a by-election, on behalf of votes for women. The Wimbledon Campaign was short and arduous. It must be quite impossible for younger people to imagine the bitterness of the opposition to women's equality. When, in later years, I campaigned against the first world war, the popular opposition that I encountered was not comparable to that which the suffragists met in 1907. The whole subject was treated, by a great majority of the population, as one for mere hilarity. The crowd would shout derisive remarks: to women, 'Go home and mind the baby', to men, 'Does your mother know you're out?' no matter what the man's age. Rotten eggs were aimed at me and hit my wife. At my first meeting rats were let loose to frighten the ladies, and ladies who were in the plot screamed in pretended terror with a view to disgracing their sex.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6: Principia Mathematica, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-160.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-160.HTM</a></p>	<p>( B1/C1-01の続き )</p> <p>この後私は、自由貿易連合のために「自由貿易擁護」の演説を始めた。私は以前一度も公開演説を試みたことがなく、最初は自分を含め無能者にして、まうほど「内蔵」の神経質であった。けれどももたいに私は、神経質でなくなっていく。1906年の選挙が終わり、保護貿易の問題が一時期下火になると私は婦人参政権のための活動に着手した。平和主義者としての立場から、私は主戦論者(好戦的な人種)を嫌い、いつも立憲主義的党と活動した。1907年に私は、国会議員補欠選挙の時、女性の選挙権を擁護して立候補さえもした。(ロンドン郊外の)ウィンプルドン地区における選挙戦は(選挙戦)期間が短く、また困難なものであった。いまの若い人々にとつて、男女平等に対する当時の反対の激しさを想像することはほとんど不可能であろう。のちに私は第一次世界大戦反対の運動をおこなったが、その時の一般大衆の抵抗は、1907年に婦人参政権論者が受けた一般大衆の抵抗の激しさに比べれば、比較にならないほど、より穏やかなものであった。婦人参政権に賛成する全々の問題は、大多数の民衆から、甚なる反対騒ぎのための話、聞いて扱われ、一般衆は、婦人(大人の女性)に向かつては、「家へ帰って赤ん坊の世話をしなさい!」とまた、男性に向かつては、その年齢に關係なく、「君がこつして外へ出ていることをお母さんは知っているかい?」というように、嘲笑的な言葉を大で叫んだものである。腐った卵が私をねらって投げつけられ、それが妻に命中した。私が参加した最初の集会の時、女性たちを驚かせるため鼠が放たれ、そうしてその謀略に加わっていた女性たちは、自分たちの性を辱めるために、故意に恐怖をよそめて叫び声をあげた。</p>			<p>(注:ラッセルは、1907年に、Wimbledon 選挙区より、婦人参政権、自由貿易論を主張し、全国婦人参政権協会連合会の推薦を受け、下院議員補欠選挙に自由党から立候補したが落選した。対立候補は保守党の大物 H. Chaplinであった。右欄上の写真は、その時の選挙用写真。)</p>
B1/C1-03	<p>I had been a passionate advocate of equality for women ever since in adolescence I read Mill on the subject. This was some years before I became aware of the fact that my mother used to campaign in favour of women's suffrage in the sixties. Few things are more surprising than the rapid and complete victory of this cause throughout the civilised world. I am glad to have had a part in anything so successful.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6: Principia Mathematica, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-180.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-180.HTM</a></p>	<p>この問題(注: 婦人参政権)に関するジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill, 1806-1873 / ミルはラッセルの名付け親)の著作を思春期に読んで以来、私は、男女同権の熱烈な擁護者であった。それは、私の母が1860年代に婦人参政権(女性参政権)のための運動をずつと行っていたという事実を知るようになる数年前のことであった。文明世界全体を通して、この大義(婦人参政権の主張)の急速かつ完璧な勝利以上に驚かすべきものは、他にほとんど見あたらない。それほど成功した事例に私も一定の役割を果たしたということは、嬉しいことである。</p>			
B1/C1-04	<p>During the summer of 1915 I wrote Principles of Social Reconstruction, or Why Men Fight as it was called in America without my consent. I had had no intention of writing such a book, and it was totally unlike anything I had previously written, but it came out in a spontaneous manner. In fact I did not discover what it was all about until I had finished it. It has a framework and a formula, but I only discovered both when I had written all except the first and last words. In it I suggested a philosophy of politics based upon the belief that impulse has more effect than conscious purpose in moulding men's lives. I divided impulses into two groups, the possessive and the creative, considering the best life that which is most built on creative impulses. I took, as examples of embodiments of the possessive impulses, the State, war and poverty, and of the creative impulses, education, marriage and religion. Liberation of creativeness, I was convinced, should be the principle of reform. I first gave the book as lectures, and then published it. To my surprise, it had an immediate success. I had written it with no expectation of its being read, merely as a profession of faith, but it brought me in a great deal of money, and laid the foundation for all my future earnings.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-090.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-090.HTM</a></p>	<p>1915年の夏、私は『社会再建の原理』という書名の本を、... -アメリカでは、私の同意なく「人はなぜ戦うのか」(Why Men Fight)というタイトルに変えられた本 - を執筆した。私には「社会再建の原理」のような本を書くつもりはなかった。そしてその本は私が以前書いたいかなる本とも、まったく趣きを異にして、自然(自発的かつ無意識的な)やり方で生み出されたものであった。事実、書き終えてしまうまで、それがどのようなものになるか、自分に全くわからなかった。その本には、1つの骨組みと(一定形式に表現された)信念、そしてこの後に書いてあるように、人間生活の形成において、意識的な目的よりも衝動の方がより影響力をもつという信念。)があったが、最初と最後の言葉を除いて、全部を書き終えてから、ようやく両者(骨組みと信念)に気がついたいたのである。その本の中に私が、時々の形成において、意識的な目的よりも衝動の方がより影響力をもつという信念を、示していた「政治哲学」を提示した。私は、衝動を、所有的衝動と創造的衝動の2つのグループに分け、最善の生活は大部分創造的衝動の上に築かれると考えた。私は、所有的衝動が異質化された要例として、国家戦争、貧困を、創造的衝動の要例として、教育、結婚、宗教をあげた。創造性の解放(発揮)が「改革の原理」であるべきであると、私は確信していた。私は、当初、この本を(数回の)講演用として献じたが、後になって出版した。驚いたことに、たちどころに成功をおさめた。私は、読まれるだろうという期待はまったくなして、ただ信念の告白として、本書を執筆したが、しかしこの本は、私に大金をもたらし、その後の私の所得の基礎をおいた。</p>			

B1/C1-05	<p>We travelled to China from Marseilles in a French boat called Portos. Just before we left London, we learned that, owing to a case of plague on board, the sailing would be delayed for three weeks. We did not feel, however, that we could go through all the business of saying goodbye a second time, so we went to Paris and spent the three weeks there. During this time I finished my book on Russia, and decided, after much hesitation, that I would publish it. To say anything against Bolshevism was, of course, to play into the hands of reaction, and most of my friends took the view that one ought not to say what one thought about Russia unless what one thought was favourable. I had, however, been impervious to similar arguments from patriots during the War, and it seemed to me that in the long run no good purpose would be served by holding one's tongue. The matter was, of course, much complicated for me by the question of my personal relations with Dora. One hot summer night, after she had gone to sleep, I got up and sat on the balcony of our room and contemplated the stars. I tried to see the question without the heat of party passion and imagined myself holding a conversation with Cassiopeia. It seemed to me that I should be more in harmony with the stars if I published what I thought about Bolshevism than if I did not. So I went on with the work and finished the book on the night before we started for Marseilles.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 3: China, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-010.HTM</a></p>	<p>私たち(ラッセルとドーラ)は、ポルト (Portos) という名前のフランス汽船に乗って、マルセイユから中国まで船旅をした。(しかし) ロンドンを離れる直前になって同船で伝染病(ペスト)が発生したために、出航が3週間延期されるといことがわかった。だが私たちは、お別れの言葉を二度言うようなことはしたくなかったのでパリに行き、そこで3週間を過ごした。この1ヶ月間中に私は、ロシアに関する著書(The Practice and Theory of Bolshevism)を書き終えた。そうして、大反響を呼んだ後、その本の出版を決定した。ポルシェヴィスム(ロシア共産主義)への反対意見を述べることは、当然のことながらロシア革命に反対する者(反動派)を利することであり、私の友人たちの多くは、ロシアについてはロシア(革命)に好意的なものでない限り自分の考えを言ってはならないという見方をしていた。けれども私は、第一次世界大戦期間中、愛国者たちからの同様の議論(注: 自国がたとえ間違っているとしても、自国の誤りを指摘することは敵国を利することになる。大英帝国万歳)に耐えたく(という経験がある)し、真面目に見ると、沈黙を伴うことによつては、いかなる良い目的も達成されないだろうと、私には思われた。私とドーラとの個人的関係の問題は、当然のことながら、事態をいっそう複雑にしていた。ある暑い夏の夜、彼女が寝てしまつてから私は起き上がり、ホテルの部屋のバルコニーに坐り、夜空の星を凝視した。私は、熱した党派的感情から離れて、冷静に問題を理解しようと努めた。そして、カシオペア座と語りあっている自分を想像した。私には、ポルシェヴィスム(ロシア共産主義)について私が考えていることを発表しなかりは、恥を感じる方がずっとまし、との諷刺を覚えているのだらうと思われた。そこで私は、執筆を続け、私たちガマルセイユに向かつて出発する前夜にその本を書き終えた。</p>	<p>注: 1920年にサイゴン港からフランスに向けて出航する郵船の言葉「ラッセルが乗船したのはこれと同じかあるいは似たような船であると思われる」</p>	
B1/C1-06	<p>My next piece of work was Power: A New Social Analysis. In this book I maintained that a sphere of freedom is still desirable even in a socialist state, but this sphere has to be defined afresh and not in liberal terms. This doctrine I still hold. The thesis of this book seems to me important, and I hoped that it would attract more attention than it has done. It was intended as a refutation both of Marx and of the classical economists, not on a point of detail, but on the fundamental assumptions that they shared. I argued that power, rather than wealth, should be the basic concept in social theory, and that social justice should consist in equalization of power to the greatest practicable degree. It followed that State ownership of land and capital was no advance unless the State was democratic, and even then only if methods were devised for curbing the power of officials. A part of my thesis was taken up and popularized in Burnham's Managerial Revolution, but otherwise the book fell rather flat. I still hold, however, that what it has to say is of very great importance if the evils of totalitarianism are to be avoided, particularly under a Socialist regime.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 5: Later Years of Telegraph House, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB25-060.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB25-060.HTM</a></p>	<p>私の次の著作は、『権力-新しい社会分析』であった。この本の中心は、「自由のための領域」を確保することは、社会主義国家においてさえいまだ望ましい問題であるが、それは自由主義の用語ではなく、新たに定義しなおす必要があると主張した。私は今なおこの信条を保持している。この本の主題は重要なものと思われ、実際に世の注目を引いている以上に、もっと多くの人々の注意をひいてほしいと願った。本書は、マルクスと古典派経済学者の両者に対する論駁を意図したものであり、細目については、両者が共有している基本的な仮定について、両者の誤りを指摘した。私は、「富よりもむしろ権力」(注: 政治的権力だけでなく広い意味)が社会理論における基本的な概念であるべきであり、社会正義は、実際に可能な最大限まで権力を平等化することにあると論じた。続いて、もし国家が民主的でないならば、土地と資本の国有はまったく前進とは言えず、また国家が仮に民主的であるとしても、役人(官制)の権力を抑制する方法がとられ、時にのみ前進と見える」と主張した。私の主題の一部は、バーナム「経営者革命」(注: Burnham's Managerial Revolution)の中にとりあげられ、普及した。しかし、それがなければ、この本はむしろ失敗に終わっていたと言ったほうがよいだろう。けれども、私は、もし、全体主義の言葉が回避されるべきものとするならば、特に社会主義政権においては、「権力」における私の主張はきわめて重要性を持っている、という考えを今なお抱いている。</p>		
B2 科学思想				
B2-01	<p>For the genuine man of science I have the highest possible respect. He is the one force in the modern world at once genuinely constructive and profoundly revolutionary. When the man of science is dealing with technical matters that do not touch upon the prejudices which he shares with the average man, he is more likely to be right than anyone else. But unfortunately very few men of science are able to retain their impartiality when they come to matters about which they feel strongly.</p> <p>[From: Are men of science scientific? (written in Feb. 24, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.)]  <a href="http://russell-j.com/KAGAKSHA.HTM">http://russell-j.com/KAGAKSHA.HTM</a></p>	<p>本物の科学者に対しては、私は最高度の尊敬を抱いている。本物の科学者は、現代世界において、真に建設的であると同時に、心底から革命的な一つの力である。科学者は、一般の人たちと同様持っている偏見に関係ない専門的な問題を扱っている場合は、他の誰よりもずっと正しい判断を下す傾向にある。だが、残念ながら、個人的に強い感情を抱いている問題に取り組み、場合、公平無私な立場を維持できる科学者がほとんどいない。</p>	<p>[n.090: 科学者は科学的か?]  科学のあらゆる分野において専門化がますます進んでいます。科学の発展のためには必要なことではありますが、弊害も少なくありません。そこで境界領域的な、また広域的な科学も多く生まれてきましたが、また十分とは言えません。科学者にもいろいろなタイプがいて、専門以外のことには口を余り、はさまるようになっている確信がもたれれば、あらゆることに意見を述べようとする「識者」もいます。専門力も謙虚さを失った科学者も不用であり、真の意味で「科学的な」科学者が増えてもらいたいものです。</p>	<p>学問研究の世界は専門化が極度に進んでおり、自分の専門で自分の専門に近い分野については知識や理解力、判断力はあるけれども、自分の専門以外についてはおぼろげな知識や判断力しか持ちあわせていない人が少なくありません(例: 原発、経済政策、歴史教育、その他)。そのことを自覚しているのならよいですが、「一つの分野を極めれば他の分野でも少し勉強すればかなりの見識を持つことができる」と勘違いしている人がけっこういます。そういう人が強い偏見のもと、テレビなどでいっしょの意見を言っているのを目撃すると、しらけます。政府が任命した学識経験者(特に首相を含めた閣僚が任命した「識者」)のなかにそういった人物がいると、しらけるだけでは、ますます、国民に実害が及びます。特に多額の資金が必要な big science においては、権力にたつてくような科学者は、十分な科学研究費を交付してもらえないのは難しい。</p>
B2-02	<p>In the days when science was persecuted by the Church, men of science were liberal and progressive; nowadays, when they are covered with honours and universally respected, they tend to be supporters of the status quo.</p> <p>[From: Success and Failure (written in Jan. 11, 1932 and pub. in Mortals and Others, v.1, 1975.)]  <a href="http://russell-j.com/JIYU-KYO.HTM">http://russell-j.com/JIYU-KYO.HTM</a></p>	<p>科学が教会の迫害を受けた時代の科学者達は寛大で進歩的であった。(これに対し)現代にあつては、科学者は名誉に包まれ、広く尊敬を受けており、彼らは通常体制擁護に回りがちである。</p>	<p>[n.104: 体制の擁護に回りがちな現代の科学者]</p>	<p>崇奉・名誉が与えられ、研究費を獲得できるのであれば、自分が属している組織や自分に力や研究資金を与えてくれる権力に従順になりやすい。原子力の研究開発(政府公認の原子力科学)に携わる研究者は、医薬品、武器(自衛隊用だけでなく海外で売りたいために)、その他いろいろ。ノーベル賞受賞者でさえ、(時に Big Science) 関係者は、権力に頼りて売らない人は益川さんなど、それほど多くなく、貴重な存在。</p>

	B2-03	<p>In studying the heavens, we are debarred from all senses except sight. We cannot touch the sun, or travel to it; we cannot yet walk round the moon, or apply a fool-rule to the Pleiades. Nevertheless, astronomers have unhesitatingly applied the geometry and physics which they found serviceable on the surface of the earth, and which they had based upon touch and travel. In doing so, they brought down trouble on their heads, which it was left for Einstein to clear up. It turned out that much of what we learned from the sense of touch was unscientific prejudice, which must be rejected if we are to have a true picture of the world.</p> <p>An illustration may help us to understand how much is impossible to the astronomer as compared with the man who is interested in things on the surface of the earth. Let us suppose that a drug is administered to you which makes you temporarily unconscious, and that when you wake you have lost your memory but not your reasoning powers. Let us suppose further that while you were unconscious you were carried into a balloon, which, when you come to, is sailing with the wind on a dark night—the night of the fifth of November if you are in England or of the fourth of July if you are in America. You can see fireworks which are being sent off from the ground, from trains, and from aeroplanes travelling in all directions, but you cannot see the ground or the trains or the aeroplanes because of the darkness. What sort of picture of the world will you form? You will think that nothing is permanent: there are only brief flashes of light, which during their short existence, travel through the void in the most various and bizarre curves. You cannot touch these flashes of light, you can only see them. Obviously your geometry and your physics and your metaphysics will be quite different from those of ordinary mortals. If an ordinary mortal were with you in the balloon, you would find his speech unintelligible. But if Einstein were with you, you would understand him more easily than the ordinary mortal would, because you would be free from a host of preconceptions which prevent most people from understanding him.</p> <p>From: The ABC of Relativity, 1925 <a href="http://russell-j.com/cool/22T-0101.HTM">http://russell-j.com/cool/22T-0101.HTM</a></p>	<p>(気球から祭りの夜を観測すれば)</p> <p>宇宙(天界)を研究する時には、見ることを除いて他のすべての感覚が締めたされます。太陽に触ることはできませんし、太陽まで行くこともできません。いまだ月を歩きまわるとはできませんし(注: 1969年にアポロ11号月面着陸)、ましてや、すばる星にもさしをあててみることもできません。それにもかかわらず、天文学者たちは、地球上で役立つことがわがっている幾何学と物理学とを、なんらためらうことなく(これまで)宇宙にあてはめて来ましたが、こともとその幾何学と物理学は、触ることに移動することに基礎を置いていました。そうすることによって、アインシュタインが描くまで、宇宙の種をみずからにもたらししました。けっきょく、私たちが触るという感覚から学んだ多くのことが、実は非科学的な偏見なのであって、そういう偏見は、真の世界像を得るためには拒否されなければならないということがはつきりしました。</p> <p>地球上のものごとくに興味を持っている人間にくらべ、天文学者が、五感のすべてを使えないことから、どれくらい困難をかかえているかを知るには、1つたにえが役に立とう。いま一時的に無意識になる薬をあなたが服用し、目覚めるときには記憶力を失って、推論する能力だけはありと仮定します。さらに、あなたが気が失っている間に気球に乗せられて、気づいたときには暗い夜空を—イギリスにいるならば11月5日の夜、アメリカならば7月4日*注の夜を—風を受けて漂っている、と仮定します。すると、あなたには、地上や汽車やあらゆる方向に進む飛行機から打ち上げられる花火が見えるはずですが、しかし、暗いので地上や汽車や飛行機は見えません。そういった場合、あなたはどんな種類の世界像を組み立てるのでしょうか？ 永続的なものはない、即ち、ただあるのはつかの間の閃光だけで、そのはかない存続期間中に、それらの閃光が非常に多様かつ奇怪なカーブを描いて虚空(宇宙空間)を移動すると考えることでしよう。あなたはこれらの閃光に触ることはできません。ただ見るだけができるだけです。明らかにあなたの幾何学、物理学、それらに形而上学は(地上に)通常の人間たちのそれとはまったく異なったものになるでしょう。かりに通常の人間があなたと気球に乗り合わせていても、あなたには彼のいうことを理解できないでしょう。しかしアインシュタインと一緒にいれば、あなたは普通の人もはるかにやすくアインシュタインの言うことがわかるでしょう。なぜなら(気球上の)あなたは、多くの人の理解を妨げているいくたの先入観から解放されているからです。</p> <p>*注: イギリスの11月5日は、Guy Fokes Day(1605年11月5日、議事堂を爆破し、ジームズ1世と議員の殺害を企てた旧教徒による火薬陰謀事件があったが、その首謀者ガイ・フォークスの奇怪な像をつくり、子どもたちが町内を引き回して夜焼き捨てるお祭り。)アメリカの7月4日は、Independence Day、つまり独立記念日(1776年)。いずれの日にも花火の打ち上げがある。</p>			
	B2-04	<p>Broadly speaking, we are in the middle of a race between human skill as to means and human folly as to ends. Given sufficient folly as to ends, every increase in the skill required to achieve them is to the bad. The human race has survived hitherto owing to ignorance and incompetence; but, given knowledge and competence combined with folly, there can be no certainty of survival. Knowledge is power, but it is power for evil just as much as for good. It follows that, unless men increase in wisdom as much as in knowledge, increase of knowledge will be increase of sorrow.</p> <p>From: The Impact of Science on Society, 1952, chap.7: Can a scientific society be stable? <a href="http://russell-j.com/cool/43T-0701.HTM">http://russell-j.com/cool/43T-0701.HTM</a></p>	<p>大ざっぱにいえば、我々(人類)は、手段についての人間の善い目的、目標があればこそ、手段の工夫が生きてくる。しかし、目的、目標に問題があれば、手段の工夫がよみずい事態を生じさせる。工夫がよみずい事態を生じさせる。すぐには達成できない大きな目的を達成するためには、より達成しやすい目標を立てる。その際、目標は目的を達成するための手段となる。より難しい目標を達成するためには、より実現しやすい目標を設定する。そのうちに高次な目的は忘れ去られ、小さな目標がいつのまにか目的化され、不適切な手段がとられるようになる。現実主義者の陥る危険が世にあふれている。</p> <p>原稿の再録(特) 特定秘密保護法、集団的自衛権・ 「政治的指導者たちの大部分は、自分たちは利己的欲求のために行動していると多くの人々を信じ込ませてその地位を得ている。そのような信念も、興奮の影響下では一層容易に受け入れられることはよく理解できる。ブラスバンド、集団祈禱、私刑(リンチ)の執行、そして戦争(注: ガンビツの招致、国会議員団による靖国集団参拝、マスコミによる集団リンチ、仮想敵国による国土侵略の恐怖、その他)と、段階を追って興奮は高まる。不合理を唱道する者たちは、どうやら、大衆を興奮状態においておけば自分たちに都合がよいように仮定をだますはずと、よい機会がでてくると思っているようである。(麻生元総理が推奨したナチスの手口)</p>			
	B2/C1-01	***				
	B3 戦争と平和					



*	○	<p>B3-01</p> <p>If we spent half an hour every day in silent immobility, I am convinced that we should conduct all our affairs, personal, national, and international, far more sanely than we do at present. Two minutes a year, on Armistice Day, are given to silence, and all the other minutes of the year to largely futile bustle. The proportion wrong; if the silence were longer, the bustle would be less futile. From: 'The decay of meditation' (written in Nov. 7, 1931 and pub. in 1975 in Mortals and Others, v.1, 1975. ] <a href="http://russell-j.com/MEDITATE.HTM">http://russell-j.com/MEDITATE.HTM</a></p>	<p>もし毎日30分間黙想し、じっとしていれば、我々は、個人的、國家的、国際的なものもそのものごとを現在よりももっと正常に取り扱って行けるだろうと私は確信している。第一次世界大戦の休戦記念日に、毎年2分間の黙想が捧げられるだけで、1年の残りの時間のほとんどはせわしげな活動に費やされる。この時間配分は間違っている。もしも静かにしている時間がもっと長ければ、そういった騒ぎも無益さがより減少するだろう。</p>	<p>日本の終戦の日(記念日にあらず)に読み替えてもらえればと思います。 8月は祝日がないので、来年から8月11日が「山の日は=記念日」ということで祝日になるそうです。8月11日にしたのは、夏休み期間中なので、この日をお休みしても、経済活動に悪影響がなさそうだからですが、それよりも、8月15日を「平和の日」とか「世界平和の日」にするのが優先すべきではないでしょうか？</p>	<p>第一次世界大戦を、8月15日の終戦記念日にしたほうがピンとくるでしょう。政治や福島原発は今でも頻りに報道されるので、まだ日本人にとって忘却の妃なたにはいっていませんが、神戸大地震などはテレビや新聞で関連記事が報道されない限り、被害にあった人以外は、すでに忘却の彼方にあります。3月19日夜のWBSでは、ニュースキャスターの小谷真生子が原爆が再稼働し、殆ど忘れており、呼び出しとれなく書いていました。財界のホステスと言われる由緒で、美人で感しよい女性ではありますが、財界人へのリップサービスで、しょうか。庶民や弱い人々の気持ちをさかかたさなようなことを時々、わざとで、しょうか、水、?と言います。*他人の命(—自分も被害者)に思っている)よりも、経済を優先して考える人達は、福島原発のような大事故がもう一度起こらなければ、原発を重視する考えを改めないだろうと思われま。</p> <p>国民の生命を守るというのなら、よいうが、領土を「絶対に」守る。東日本大震災を言う政治家には注がが必要、領土については、国によって考え方が違ふ以上、たとえ自分たちの主張が正しいとしても、「絶対に」という言葉(表現)で酔ってはいけない。本当に「絶対に」ということであれば、戦争も辞さないということになり、最初は小競り合いだったものが、エスカレートしていく、非難合戦終結することになる。政治家とともに「愛国心」に燃えた国民も同調し、政治家は国民の支持があるということ、なかなかひけなく、なってしまう。・・・。</p> <p>(「国民の生命を守る」と、呪文のように、オウム返しに、言い続ける最高司令官)その点、自衛隊の幕僚長? (最高司令官)は正直に言っている。「自衛隊の本務は、国民の生命を守ることではない。領土及び主権や利益を守るのが第一だ。」そう、それだからこそ、無人島であっても、自国の領土は「絶対に守る。」(=死守する。国民である自衛隊員に犠牲が出て守る)ということができる。無人島というのは、「人が住んでいない島」という意味のはず。それとも、最高権力者は、日本人の御霊が無人島という意味、その霊を守るためとでも言うのだろうか?)</p>
*	○	<p>B3-02</p> <p>It is useless to hope for lasting peace in the world until the relations between different national governments are regulated by law, that is to say, by a force stronger than any of the national governments, and able to enforce its decisions, however unpopular they may be with a section of the human race. You may say, if you please, that you prefer war, with all its horrors, to the surrender of one iota of national sovereignty. This is an intelligible position, though, to my mind, a mistaken one. But you cannot say, with any semblance of logic, that you are against war but in favour of the present system, according to which, in a dispute, every government is the ultimate judge in its own case. If war is ever abolished, it will have to be by the establishment of an international government possessed of irresistible armed forces. And if war is not abolished, civilization cannot survive. This is a painful dilemma for those whose patriotic feelings are stronger than their reasoning powers, but if it is not apprehended intellectually it will be disastrously proved by the march of events. From: Right and Might (written in early of 1930s and pub. in 1975 in Mortals and Others, v.1, 1975. ] <a href="http://russell-j.com/SEIGI.HTM">http://russell-j.com/SEIGI.HTM</a></p>	<p>* if you please (古風な使い方で)驚いたことに</p> <p>異なった国家政府間の関係が(国際)法によって規制されなければ、即ち、それが人類の一部にどれほど不人気であっても、いかなる国家政府より強力であり、自らの決定を強制できる力で規制されなければ、世界の永続的な平和を望むものは無益である。罵たことに、国家主権のほんのわずかも譲るくらいなら、戦争のあらゆる恐怖にもかかわらず、あえて戦争を選びたいと言われるかもしれない。私は誤った意見だと思うが、この立場は理屈としては考えられる。しかし、戦争には反対であるが、各国政府が紛争時にあっては自らの主権の最終的決定者であるシステムに賛成であるという意見は、いかなる論理の見せかけすらないことは確かである。もしも戦争が永久に廃絶されるべきであるならば、抵抗できない軍事を備えた国際的な政府の樹立以外には、不可能であろう。そして戦争の絶滅なしでは、文明は存続しない。論理的推論よりも愛国の感情的方が強い人にとっては、これは苦しいジレンマであるが、戦争廃絶の必要性が知的に理解されなければ、事態の進展によって、悲惨に立証されるであろう。</p>	<p>[ n.102 : 正義と武力]</p> <p>明治の始めに原簿置断をやったように、原「主権国家」置「世界連邦」が必要。各国には警察力だけ認めて、他国を攻撃する能力を剥奪し、強力な軍事は世界連邦政府に集中する必要がある。旧主権国家は世界連邦のなかの自治領のようなものであるから、それぞれの文化や個性は保たれる。</p> <p>(国家主権、特に、戦争を出来る権利を国際政府(あるいは世界連邦政府)に委ねたくないと思う人。「愛国心」にとられて(いる人)が少なくない。原簿置断により、各藩は戦争をする権利や軍事力を放棄したのと同様に、度「国」置「自治領」して世界連邦政府をつくり、軍事を集中させれば、国との戦争はなくなるが、そう考えない人が多い。戦争によって人類の(文明)がほろびるのが先か、国家間の戦争をなくすのが先か・・・?)</p>	<p>今、自民党は国会で大きな勢力を維持しており、マニエスタに掲げていなかったことも、自分たちの好きなように、いろいろな法律を通す力をもっています。憲法「改正」だけは、国民の直接投票という安全弁がありますが、憲法「解釈の変更」を内閣で決め、実質的な改正をしてしまえば、その安全弁も働きません。公明党も権力にしがみつきたいばかりに、本心は賛成ではなくても、解釈の変更(集団的自衛権の部分承認)に賛成すれば、いずれそれは拡充していき・・・。</p> <p>ラッセル曰く、「戦争廃絶の必要性が知的に理解されなければ、事態の進展によって、(このことは)悲惨に立証されるであろう」</p> <p>理性は情熱の奴隷である。そうであるからこそ、邪な情熱を持つことは周囲に大きな被害をもたらすし、善い情熱は周囲に大いなる恩恵をもたらす。</p> <p>戦争を防止するのに一番力になるのは、仮想敵国に対する、抑力になるような大規模な「武力」ではないだろう。ラッセルが指摘するように、戦争をしてはいけないという強い感情、情熱と、紛争にならないようにするための外交的努力が必要である。たとえ相手国が嫌いでなくても、いや嫌いだからこそ、そういった「努力」が必要となる。好きであれば「努力」とは感じられない。外交努力よりも前に、相手国が怒ることを承知の行動をとり、仮想敵国の恐ろしさを印象づけたりすれば、資本主義国でも社会主義国や共産主義国でも、体制の違いなく、喜んで採用される。日本やアメリカは「自由主義国」だから民主的だとは限らない</p>
*	○	<p>B3-03</p> <p>The first thought which naturally occurs to one who accepts this view is that it would be well if men were more under the dominion of reason. War, to those who see that it must necessarily do untold harm to all the combatants, seems a mere madness, a collective insanity in which all that has been known in time of peace is forgotten. If impulses were more controlled, if thought were less dominated by passion, men would guard their minds against the approaches of war fever, and disputes would be adjusted amicably. This is true, but it is not by itself sufficient. It is only those in whom the desire to think truly is itself a passion who will find the desire adequate to control the passions of war. Only passion can control passion, and only a contrary impulse or desire can check impulse. Reason, as it is preached by traditional moralists, is too lifeless, too little living, to make a good life. It is not by reason alone that wars can be prevented, but by a positive life of impulses and a passions antagonistic to those that lead to war. It is the life of impulse that needs to be changed, not only the life of conscious thought From: Principles for Social Reconstruction, 1916, chapt.1: the principles of growth <a href="http://russell-j.com/cool/10T-0101.HTM">http://russell-j.com/cool/10T-0101.HTM</a></p>	<p>以上の見解を受け容れる人間に当然ながら生じてくる第一の思ひは、人間がもっと理性の支配下にあればいいのだが、ということである。戦争は必然的にすべての戦闘員にはかり知れない危害を加えずにはいけないということを理解している人々にとつて、戦争は単なる狂気のまきり平和時に知られたすべてのことを忘れ去る一つの集団的狂気(精神異常)に思われる。種々の衝動がもしより多く統制されたら、また思考が情熱に支配されたりすることがより少なければ、人間は戦争熱が平くことに反対し、自らの生命を守るであらうし、あるいは幼少も平和に平和的に解決されるであらう。正しくは本意だが、それ自体で十分であるとはいえない。正しく思考しようとする欲望は、戦争の情熱を統制するにふさわしい、ということを見出す人々は、その人々自身の正しく思考しようとする欲望が、それ自体一つの情熱となっているような人々だけである。情熱のみが情熱を統制できるのであり、逆方向の衝動あるいは欲望のみが衝動を抑制しうるのである。伝統的なモラリストたちが説いた形での理性は、良い生活をつくり出すにはあまりに消極的であり、またあまりにも生氣を欠いている。戦争を阻止しうるのは、理性のみによるものではなく、戦争に導く衝動や情熱に反発することの積極的な衝動と情熱のある生活によってである。変える必要があるのは、意識的な思考の生活だけでなく、衝動の生活である。</p>	<p>邪な情熱を持つことは周囲に大きな被害をもたらすし、善い情熱は周囲に大いなる恩恵をもたらす。</p> <p>戦争を防止するのに一番力になるのは、仮想敵国に対する、抑力になるような大規模な「武力」ではないだろう。ラッセルが指摘するように、戦争をしてはいけないという強い感情、情熱と、紛争にならないようにするための外交的努力が必要である。たとえ相手国が嫌いでなくても、いや嫌いだからこそ、そういった「努力」が必要となる。好きであれば「努力」とは感じられない。外交努力よりも前に、相手国が怒ることを承知の行動をとり、仮想敵国の恐ろしさを印象づけたりすれば、資本主義国でも社会主義国や共産主義国でも、体制の違いなく、喜んで採用される。日本やアメリカは「自由主義国」だから民主的だとは限らない</p> <p>某首相は、国防予算はあまり増やさないと言いますが、兵器に関する三原則を「緩和」し、武器を海外にどんどん売って、景気刺激策に利用しようとしている。多くの国民もそれを知っているが知らないふりをしているのか・・・?</p>	
*	○	<p>B3-04</p> <p>An impulse, to one who does not share it actually or imaginatively, will always seem to be mad. All impulse is essentially blind, in the sense that it does not spring from any prevision of consequences. The man who does not share the impulse will form a different estimate as to what the consequences will be, and as to whether those that must ensue are desirable. This difference of opinion will seem to be ethical or intellectual, whereas its real basis is a difference of impulse. No genuine agreement will be reached, in such a case, so long as the difference of impulse persists. In all men who have any vigorous life, there are strong impulses such as may seem utterly unreasonable to others. Blind impulses sometimes lead to destruction and death, but at other times they lead to the best things the world contains. Blind impulse is the source of war, but it is also the source of science, and art, and love. It is not the weakening of impulse that is to be desired, but the direction of impulse towards life and growth rather than towards death and decay. From: Principles for Social Reconstruction, 1916, chapt.1: the principles of growth <a href="http://russell-j.com/cool/10T-0103.HTM">http://russell-j.com/cool/10T-0103.HTM</a></p>	<p>衝動といふものは、現象にあるいは想像の上でそれを共有していない者にとっては、常に狂気じみたものに見えるだろう。衝動はすべて、結果を予見することが生じるものではないという意味で本質的に盲目的である。衝動を共有しない者は、その結果が何であるか、また結果として生ずるにちがいないものが望ましいものであるかどうかといった点で異なるのが望ま下すであろう。この意見の相違は、倫理的あるいは知的な相違に思われるであろうが、その現実的な根拠において、それは衝動の相違である。このような場合、衝動の相違が持続するがざり、真の意見の一致はけつして達成されないであろう。</p> <p>なんらか精力的な生活を送っている人間はすべて、他人から見ればまったく非合理に思えるような、強い衝動を持っている。盲目的な衝動は、時に破壊や死を招く源であるが、また創造の最も偉大な源泉でもある。つまり盲目的な衝動は、戦争の源泉でもあるが、またそれは科学や芸術、恋愛、といったものの源泉でもある。望ましいものは衝動を弱めることではなく、衝動の方向が死と衰退へ向かうよりは、生命と成長の方向へ向かうである。</p> <p>西洋世界において、少年少女は、最も重要な社会的忠誠は、彼らが市民として所属する国家への忠誠であり、国家に対する義務は、政府の命令通りに行動することだと教えられる。この教養に疑問を抱かせないように、彼らは偽りの歴史や偽りの政治学や偽りの経済学を教えらる。彼らは自国の過失を責められるが、自国の過失は知らず、自国が関与してきた戦争は全て自衛のための戦争であり、他国が行った戦争は侵略戦争だと思ふように仕向けられる。予期に反して、自国が他国を征服するときは、文明を広めるために、道義的な光を射すために、高い道徳や精神、その他の同様に、道義的な光を広めるためにそうしたのだと信じるよう教育される。</p>	<p>自分の生命をかえりみずに、戦つてくれる兵隊を雇うが、いなくなると困るので、「愛国無罪」の感情を植え付けようとする。</p>	
*	○	<p>B3-04/05</p> <p>Throughout the Westen world boys and girls are taught that their most important social loyalty is to the State of which they are citizens, and that their duty to the State is to act as its government may direct. Let them should question this doctrine, they are taught false history, false politics, false economics. They are informed of the misdeeds of foreign States, but not of the misdeeds of their own state. They are led to suppose that all the wars in which their own State has engaged are wars of defence, while the wars of foreign States are wars of aggression. They are taught to believe that when, contrary to expectation, their own country does conquer some foreign country, it does so in order to spread civilization, or the light of the gospel, or a lofty moral tone, or prohibition, or something else which is equally noble. T From: Education and the Social Order, 1932, chap. 10: Patriotism in Education (George Allen and Unwin ed.) p.137.</p>	<p>自分生命をかえりみずに、戦つてくれる兵隊を雇うが、いなくなると困るので、「愛国無罪」の感情を植え付けようとする。</p>	<p>自分生命をかえりみずに、戦つてくれる兵隊を雇うが、いなくなると困るので、「愛国無罪」の感情を植え付けようとする。</p>	

★		B3-04/05-2	<p>There are three things that must be achieved before stability can be recovered: the first of these is a world government with a monopoly of armed force; the second is an approximate equality as regards standards of life in different parts of the world; the third is a population either stationary or very slowly increasing. I do not say that these three things will be achieved. What I do say is that unless they are, the present intolerable insecurity will continue.</p> <p>From: New York Times Magazine, Aug. 3, 1952. Repr. in 'Fact and Fiction, 1961, pt. 4, chap. 4: Three essentials for a stable world (George Allen and Unwin) p.235.</p> <p><a href="http://russell-j.com/beginner/STABLE-W.HTM">http://russell-j.com/beginner/STABLE-W.HTM</a></p>	<p>世界が安定を回復する以前に行われなければならないことが3つある。その第一は、武装軍隊を独占した世界政府の確立である。第二は、世界各地域の生活水準の向上と平等である。第三は人口抑制による人口安定あるいはゆるやかな増加が必要である。この3つが達成されるだろうと私は言っているのではない。私が言っているのは、この3つのいずれが欠けても不安定が生れる、ということである。</p>	<p>世界に大きな格差があるがぎり、戦争や紛争はなくすることはない。</p>	
★		B3-05	<p>Opponents of my recent activities in the campaign against H-bomb warfare have brought up what they consider to be an inconsistency on my part and have used statements that I made ten years ago to impair the force of the statements that I have made more recently. I should like to clear up this matter once for all.</p> <p>At a time when America alone possessed the atom bomb and when the American Government was advocating what was known as the Baruch Proposal, the aim of which was to internationalize all the uses of atomic energy, I thought the American proposal both wise and generous. It seemed to me that the Baruch scheme, if adopted, would prevent an atomic arms race, the appalling dangers of which were evident to all informed opinion in the Western World. For a time it seemed possible that the USSR would agree to this scheme, since Russia had everything to gain by agreeing and nothing to lose. Unfortunately, Stalin's suspicious nature made him think that there was some trap, and Russia decided to produce her own atomic weapons. I thought, at that time, that it would be worth while to bring pressure to bear upon Russia and even, if necessary, to go so far as to threaten war on the sole issue of the internationalizing of atomic weapons. My aim, then as now, was to prevent a war in which both sides possessed the power of producing world-wide disaster.</p> <p>Western statesmen, however, confident of the supposed technical superiority of the West, believed that there was no danger of Russia achieving equality with the non-Communist world in the field of nuclear warfare. Their confidence in this respect has turned out to have been mistaken. It follows that, if nuclear war is now to be prevented, it must be by new methods and not by those which could have been employed ten years ago.</p> <p>My critics seem to think that, if you have once advocated a certain policy, you should continue to advocate it after all the circumstances have changed. This is quite absurd. If a man gets into a train with a view to reaching a certain destination and on the way the train breaks down, you will not consider the man guilty of an inconsistency if he gets out of the train and employs other means of reaching his destination. In like manner, a person who advocates a certain policy in certain circumstances will advocate a quite different policy in different circumstances.</p> <p>From: Common Sense and Nuclear Warfare, 1959, Appendix II: Inconsistency?</p> <p><a href="http://russell-j.com/cool/53T-AP02.HTM">http://russell-j.com/cool/53T-AP02.HTM</a></p>	<p>水爆戦争反対運動における私の最近の活動に反対する人々私にはる矛盾(一貫性のなさ)だと彼らが考えるものを持ち出してきて、私が十年前に出した声明を、それより最近に私が行った(いくつかの)声明の説得力を傷つけるために用いています。私はこのさい、この問題をきっぱりと片付けておきたいと思えます。</p> <p>アメリカだけが原子爆弾を所有しており、すべての原子力利用を国際管理とすることを案出したバルーク案(注: 1946年6月14日に米国が国連原子力委員会に提出した案)として知られているものをアメリカ政府が提唱していた時期に、私はその提案を賛同かつ重大であると考えました。バルーク計画が採用されれば、西側世界の全ての事情のわかった人々にとってそのおそるべき危険性が明らかである、原子兵器(軍備)競争を阻止するであろう、と考えました。しばらくは、ソビエト連邦がこの計画に同意することが可能と思われました。ロシアは、同意することによってなるものこそあれ、それ以外の同意しないと考えたからです。不幸なことに、スターリンの猜疑心の強い性格は、何が嵐があるのではないかと彼に思わせ、ロシアは自国自身の原子兵器を製造する決意をしました。その当時、私は、原子兵器の国際管理の問題たひとつだけで、ロシアに圧力をかけて必要とあれば競争に訴えたと誓うことさえもやるだけの価値はあるだろうと考えました。現在と同じく、当時も、私の意図は、東西両陣営がともに全世界的なひろがりのある大惨事を生み出す力を有する競争を阻止することでした。けれども、西側の政治家たちは、西側の東側に対する想像上の「推定上の」技術的優越性を確信し、ロシアが核競争の分野で非共産主義世界と同等のものを成願する危険性はまったくないと信じこんでいました。この点での彼らの確信は、間違っていたということがわかりました。その結果は、もし核競争がいま阻止されるべきであるならば、新しい方法になされなければならないはず、それは10年前なら使用することが可能であった方法によってではない、ということでした。</p> <p>私を批判する人々は、一度ある政策を唱えたら、事情がすっかり変わってしまった後においても、その政策を唱え続けるべきだと考えているようです。これはまったくはかばかしています。ある目的地に行こうと車(注: 今なら電車)に乗った人が、途中で車が故障した場合、汽車から下りて、目的地に行きつくために別の乗物を用いたからといって、その人は一貫性のなさ(矛盾)という誤りをおかしたなどとは、あなたも考えないでしょう。同様、ある一定の事情においてある一定の政策を唱える人物は、異なる事情においてはまったく異なる政策を唱えることではない、ということでしょう。</p> <p>＜質問は、ウドロウ・ファイアット(BBCテレビ解説者兼労働党下院議員)による。＞ 「前略」。</p> <p>問 しかし、戦争をするというのは、人間性の一部ではありませんか。</p> <p>ラッセル さあ、(あなたが「人間性」と言う時)人間性がどういふものであると想定されているのか、私には分かりません。しかし、人間性は無限に順応性があります。人々が実感していないのはそのこと(事実)です。まあ、(たとえば)飼い犬と野性の狼とを比較すれば、狼によって何が可能か、お分かりになるでしょう。飼い犬は、聴力的で、気持のよい動物で、時々吠えたり、郵便足さんに噛みつくことがあるかも知れませんが、全体的に言って、申し分ありません。しかし一方、狼は全く別ものです。まあ、人間についても全く同じことが言えることだと思います。人間性というものが振られるかに従って、全く今までとは別のものになるでしょう。人間性は変えられないという考え方は全くはかばかたものだと私は考えます。</p> <p>問 しかし、確かに、我々は、長期間に渡って、人々に戦争をしないように説く仕事に取りくんできましたけれども、それにもかかわらず、あまり成功したとは言えませんね。</p> <p>ラッセル さあ、私たちは人々を説得しようとしてきませんでした。(してきたとは言いません)。わずかなことわざかな人々は説得しようとしてきませんが、多数の人々は説得(の努力)をしようとはしてきていません。</p>		
		B3-06	<p>Woodrow Wyatt: But isn't it a part of human nature to have wars?</p> <p>Bertrand Russell: Well, I don't know what human nature is supposed to be. But your nature is infinitely malleable, and that is what people don't realize. Now if you compare a domestic dog with a wild wolf you will see what training can do. The domestic dog is a nice comfortable creature, barks occasionally, and he may bite the postman, but on the whole he's all right, whereas the wolf is quite a different thing. Now you can do exactly the same thing with human beings. Human beings according to how they're treated will turn out totally different and I think the idea that you can't change human nature is so silly.</p> <p>Woodrow Wyatt: But surely we've been a long time at the job of trying to persuade people not to have wars, and yet we haven't got very far.</p> <p>Bertrand Russell: Well, we haven't tried to persuade them. A few, a very few, have tried to, but the great majority have not.</p> <p>From: Bertrand Russell Speaks His Mind, 1959.</p> <p><a href="http://russell-j.com/cool/56T-0601.HTM">http://russell-j.com/cool/56T-0601.HTM</a></p>	<p>Woodrow Wyatt: But surely we've been a long time at the job of trying to persuade people not to have wars, and yet we haven't got very far.</p> <p>Bertrand Russell: Well, we haven't tried to persuade them. A few, a very few, have tried to, but the great majority have not.</p> <p>From: Bertrand Russell Speaks His Mind, 1959.</p> <p><a href="http://russell-j.com/cool/56T-0601.HTM">http://russell-j.com/cool/56T-0601.HTM</a></p>		

	B3-07	<p>It is difficult , especially for those accustomed to power at home, to realize that the happy days of successful slaughter have been brought to an end. What has brought them to an end is the deadly character of modern weapons of war. The influence of weapons of war on social structure is no new thing. It begins at the dawn of history with the conflict between the horse and the ass , in which , ass was to be expected , the horse was victorious . The age of chivalry, as the word implies , was the age of the horse. It was gunpowder that put an end to this age. Throughout the Middle Ages , barons in their castles were able to maintain freedom against the central governments of their countries. When gunpowder was able to demolish their castles, the barons , though they made all the speeches in defence of freedom which are being repeated in our own day , were compelled to submit to the newly strengthened monarchies of Spain , France , and England. All this is familiar. What is new is the impossibility of victory. This new fact is so unpalatable that those in whom history has inspired a belief that the defeat of enemies is noble and splendid are totally unable to adapt themselves to the modern world . Fabre describes a collection of insects which had the habit of following their leader. He placed them on a circular disc which their leader did not know to be circular. They marched round and round until they dropped dead of fatigue. Modern statesmen and their admirers are guilty of equal and very similar folly.</p> <p>From: Fact and Fiction, 1961, part VI, chap.1.  <a href="http://russell-j.com/cool/57T_PT2-0101.HTM">http://russell-j.com/cool/57T_PT2-0101.HTM</a></p>	<p>殺戮を行って成功をおさめる幸福な時代（注：皮肉）はもう終わっていることを理解することは、特に本国で権力に置れている人々にとっては困難である。そうした時代を終わらせたのは、競争のための現代兵器の持つ恐ろしい性格である。兵器が社会構造（社会組織）に及ぼす影響は、まったく目新しいものではない。それは、歴史が始まった時、馬と口バとの争いで開始され、予想通り、この争いにおいては、馬が勝利した。騎士道の時代は、その言葉が含蓄しているように、馬の時代だった。馬の時代に終止符を打ったのは火薬であった。中世を通じて、自分の城を持っていた地方豪族たちは、自国の中央政府に対抗して自由を保持することができた。火薬が彼らの城を破壊できるように、今でも繰り返して囁かされている自由を守るためのあらゆる言葉を口にしたけれども、豪族たちは、新たに力を増したスペイン・フランス・英国の君主制に屈服せざるをえなくなった。こうしたことは全て周知の事実である。（現代において）新しいことは、勝利を得ることが不可能になったという事象である。この新しい事象は、非常に受け入れがたいものであり、敵を破ることは、気高く素晴らしいことであると歴史を学ぶことによって信じ込んでいる者たちは、現代世界に順応することがまったく不可能になってしまっている。ファブール（Jean Henni Fabre, 1823-1915, フランスの昆虫学者）は、自分たちのリーダーのあとを追う習性のある一群の昆虫のことを描写している。ファブールは、それが円形であることを知らないリーダーの昆虫とともに、それらの一群の昆虫を円盤の上に置いた。（その結果）彼らは円盤状をぐるぐる何層も回り、ついに疲労で死んでしまった。現代の政治家とその信奉者たちは、これと同等であるに似通った暴行を犯している。とにかくアメリカにおいて（米国の体制側）の権力を例証するとても興味深い事件は、クロウド・イーザリー（Claude Eatherly, 1918-1978）の事件である。彼は、広島に核弾を投下するための信号を送った。彼の事件は、また、現代世界においては、法律を破ることによってのみ兇悪な罪を犯すことを免れることができるという事象が、しばしば起こることを例証している。彼は、その爆弾がどのような効果をもたらすか告げられていなかった。そして、彼の行為の結果がわかった時、彼は全く恐れおののいた。彼は、核兵器の残酷さに注意喚起するために、また、もし彼がそうしなかったら、彼を押しつぶしてしまおうと罪を償うために、長年に渡り、多様な市民的不服従運動に献身した。米当局（政府・国防省その他）は、彼は気が狂った者として考えられるべきだと決定し、また、著しく政府（権力）に従順な精神病学者たちのグループが、その公式見解を裏書した（支持した）。イーザリーは、後悔したために、精神に異常があると証明された。（これに対し）、トルーマン（大統領）は後悔しなかったため、精神に異常があると証明されなかった。私は、彼の動機を説明するが、多数のイーザリーの声明文を読んできた。これらの声明文は、全く正常なものである。しかし、私自身を含めて、ほとんどすべての者が彼は気が狂ってしまったと信じたほど、虚偽の宣伝の方は大きかった。かなり最近になって、イーザリーの事件が一般に知られた。たまたま結集、ワシントン（政府）の司法長官がこれに介入し（仲裁に入り）、半年間、凶悪犯罪者用刑務所の監房（maximum security ward）に閉じこめられていたイーザリーは、その刑務所病院のある部門に移された。そこで、彼は、異例の特権を享受し、何ら新たな審問なしに、まもなく放免されると告げられていた。彼は解放されなかったが、当面（注：1961年時点）彼は、監禁を免れている。</p>		
	B3-08	<p>An extraordinarily interesting case which illustrates the power of the Establishment, at any rate in America, is that of Claude Eatherly, who gave the signal for the dropping of the bomb at Hiroshima. His case also illustrates that in the modern world it often happens that only by breaking the law can a man escape from committing atrocious crimes. He was not told what the bomb would do and was utterly horrified when he discovered the consequences of his act. He devoted himself throughout many years to various kinds of civil disobedience with a view to calling attention to the atrocity of nuclear weapons and to expiating the sense of guilt which, if he did not act, would weigh him down. The Authorities decided that he was to be considered mad, and a board of remarkably conformist psychiatrists endorsed that official view. Eatherly was repentant and certified; Truman was unrepentant and uncertified. I have seen a number of Eatherly's statements explaining his motives. These statements are entirely sane. But such is the power of mendacious publicity that almost everyone, including myself, believed that he had become a lunatic. Quite recently, as a result of publicity about Eatherly's case, the Attorney General in Washington intervened, and Eatherly, who had been locked up in the maximum security ward for half a year, was transferred to a section of the hospital where he enjoyed unusual privileges and had been told that he would be released without any fresh hearing in the near future. He was not released, but for the moment has escaped.</p> <p>From : Has Man a Future ? (1961 ) ,chap.4.  <a href="http://russell-j.com/cool/58T-0401.HTM">http://russell-j.com/cool/58T-0401.HTM</a></p>	<p>とて興味深い事件は、クロウド・イーザリー（Claude Eatherly, 1918-1978）の事件である。彼は、広島に核弾を投下するための信号を送った。彼の事件は、また、現代世界においては、法律を破ることによってのみ兇悪な罪を犯すことを免れることができるという事象が、しばしば起こることを例証している。彼は、その爆弾がどのような効果をもたらすか告げられていなかった。そして、彼の行為の結果がわかった時、彼は全く恐れおののいた。彼は、核兵器の残酷さに注意喚起するために、また、もし彼がそうしなかったら、彼を押しつぶしてしまおうと罪を償うために、長年に渡り、多様な市民的不服従運動に献身した。米当局（政府・国防省その他）は、彼は気が狂った者として考えられるべきだと決定し、また、著しく政府（権力）に従順な精神病学者たちのグループが、その公式見解を裏書した（支持した）。イーザリーは、後悔したために、精神に異常があると証明された。（これに対し）、トルーマン（大統領）は後悔しなかったため、精神に異常があると証明されなかった。私は、彼の動機を説明するが、多数のイーザリーの声明文を読んできた。これらの声明文は、全く正常なものである。しかし、私自身を含めて、ほとんどすべての者が彼は気が狂ってしまったと信じたほど、虚偽の宣伝の方は大きかった。かなり最近になって、イーザリーの事件が一般に知られた。たまたま結集、ワシントン（政府）の司法長官がこれに介入し（仲裁に入り）、半年間、凶悪犯罪者用刑務所の監房（maximum security ward）に閉じこめられていたイーザリーは、その刑務所病院のある部門に移された。そこで、彼は、異例の特権を享受し、何ら新たな審問なしに、まもなく放免されると告げられていた。彼は解放されなかったが、当面（注：1961年時点）彼は、監禁を免れている。</p>		

	B3-09	<p>B. THE DISPUTE</p> <p>When fighting began in the disputed regions, I thought at first, as did almost everybody in the West, that China was wholly in the wrong and had undoubtedly been the aggressor. I telegraphed to Prime Minister Nehru, with whom I had for long been on friendly terms, on November 8th, saying:</p> <p>'While I think you are entirely in the right over the boundary dispute with China I plead with you to accept cease fire to permit talks to begin. Alternative may be disastrous for India and world as a full-scale conflict may make negotiations impossible. I appeal as a lifetime friend of India to agree to Chou En-tai's offer while time permits otherwise world war may result.'</p> <p>It was indeed true that I had been a life-long friend of India. My great-great-grandfather had been Governor General of India (and his great-grandson, Viceroy) and when I was a little boy tales of him had seemed to me romantic and interesting. Very many years later, I was the President of the India League and worked for her freedom. On the other hand, again when I was a small boy, a party of Chinese in beautiful robes and pig tails had come to see my grandfather at Pembroke Lodge and stirred my curiosity and interest, and again, many years later, I became much interested in Chinese philosophy, especially in Chuang-tse, and after living and travelling in China for eight months I felt that I had many sympathetic Chinese friends and greatly admired the Chinese. When the Communist Revolution took place in China, I felt desolated, though I saw nothing good to uphold in Chiang Kai-shek. I thought that the brain-washing of which I read and the intensive destruction of old traditions and learning would destroy what I had found delightful and admirable in China. Now, after the last month, I do not feel at all sure of this. At any rate, though it seemed to me a forlorn hope - I then pinned my hope upon the Indians in whose many protestations of love of peace at any price I had largely believed - I felt that, having telegraphed to Mr Nehru, I had better try to get into some sort of touch with Prime Minister Chou En-tai, and I telegraphed to him, also, on November 8th.</p> <p>'May I appeal to you to prevent inflamed national passions from translating border disagreement into tragic major conflict. Could you begin cease fire and seek Indian agreement to follow suit so that talks may begin before major war engulfs the world. Respectfully, Bertrand Russell.'</p> <p>From: Unarmed Victory, 1963, chap. 3 http://russell-j.com/cool/60T_3FUNSO-01.HTM</p>	<p>B. 紛争 (中印国境紛争)</p> <p>(中国とインドとの国境の紛争地区において戦闘が始まった時(注: 1962年10月20日に始まった中印国境紛争のこと)私は、最初、西欧においてほとんど全ての人が考えたように、中国が全面的に悪く、疑いもなく中国は侵略者だと考えた。(そこで)私は長年の交友的関係にあったネール首相に(1962年)11月8日に打電し、次のように伝えた。</p> <p>中国との国境紛争について、あなたは全く正しいと私は考えますが、話し合いを始めるために、停戦を受け入れるように、私はあなたに嘆願します。停戦以外の代替案は、全面的な戦闘になれば交渉が不可能となりますので、インドと世界とにとって、悲惨なものとなります。私は生涯のインドの友として、續いている間に、- - きまないと世界戦争になるかも知れませんが、周恩来(首相)の提案に同意することを懇願します。</p> <p>私が生涯のインドの友であったことは、全く事実だった。私のひいひいおじいさんはインド総督をしていた(また、彼の孫息子の息子はインドの太守だった)。私が幼い時、彼の話は口マンチックで興味深いものだった。(その時から)ずっと後になって、(私は)インド運命論者となり、そしてインドの自由のために働いた。他方、また、私が少年だった時、美しい支那服(中国服)を着た并髪の中国人一行がペンブローク・ロッジに住む私の祖父を訪ねてきて、私の好奇心と興味、関心をかき立てた。そうして、また、それからずっと年月がたつてから、私は中国哲学者に王子(Chuang-tse/Chuang-tzu / 牧野氏は「老子」と誤訳)に喜ば興味を持ち、8ヶ月間中国に滞在旅行した後、私は多くの共感を抱く中国人の友人たちを得て、中国国民に基いた賞讃の念を抱いた。中国に共産主義革命が勃発した時、- - 蒋介石には支持に値するものは何もなかったが、- - 私は強く恨んだ。私が本で読んだ洗脳や古い伝統や学問の徹底的な破壊は、私が中国に見いだした喜ばしいものや称賛したいものを全て破壊するだろうと思った。先月以後、現任も、私はこのことが確かだとはいま一つ実感して、いない。とにかく、むなしい望みと思われたが、- - 私は当時、いかなる犠牲を払っても、平和を要するがゆえの多くの抗議をするインド人に希望を託していた。- - ネール氏(ネール首相)に電報をうち(らった後)、周恩来首相と一種の接触を試みたほうがよいと思い、同日の(1962年)11月8日にまた、周恩来首相に次のように打電したのである。</p> <p>私はあなたに対し、激え上がった国民的情熱が、国境に関する意見の不一致を悲劇的な大規模の戦闘に移行させるのを防ぐように、訴えます。中国が停戦を(まず)開始し、大戦争が世界をひと呑みにする前に、話し合いを開始できるように、(先に停戦した中国の)先例に従うように、インドの同意を求めていただけないでしょうか。</p> <p>敬 具 バートランド・ラッセル</p>			
--	-------	--	--	--	--	--

		B3-10	<p>This book went to press in the autumn of 1966, as I was preparing the International War Crimes Tribunal mentioned in it. At the Nuremberg War Crimes Trials, Chief Prosecutor Justice Jackson of the United States Supreme Court declared:</p> <p>"If certain acts and violations of treaties are crimes, they are crimes whether the United States does them or whether Germany does them. We are not prepared to lay down a rule of criminal conduct against others which we would not be willing to have invoked against us."</p> <p>There was, however, a moral ambivalence rooted in the nature of the Nuremberg trials and in the role of Justice Jackson. Nuremberg was a trial conducted by the victorious party over the defeated. Nuremberg was carried by a real-politik alliance of powers and yet, through the legalisms of force majeure, crept the voice of humanity, a voice crying out against the unconscionable criminality of the Nazi terror.</p> <p>I have called for an international War Crimes Tribunal to be held in 1967 because, once again, crimes of great magnitude have been taking place. Our tribunal, it must be noted, commands no State power. It rests on no victorious army. It claims no other than a moral authority.</p> <p>Over a period of years, an industrial colossus has attacked a small peasant nation. The Vietnamese revolution is part of an historical development through which exploited and hungry peoples are establishing their claim to the basic necessities of human life. The United States has shown itself determined to overwhelm with brute force this struggle for life. We have, on American authority, the fact that three million pounds of bombs have been falling daily on North Vietnam, involving an average of 650 sorties per week and tonnages in excess of those used during World War II and the Korean war. Beyond this, the armies of the United States have been using experimental weapons such as chemicals, gas, napalm, phosphorus, "lazy dog" fragmentation weapons and bacteriological devices.</p> <p>Who, in the West, is unaware of these facts, as they have been presented on film, on television and almost daily in our newspapers? Who among us has not seen the photographs, or read the statistics? Who among us can deny the David-and-Goliath character of this incredible Vietnamese struggle for national autonomy and social transformation? It is this awareness which provides the proper background to my call for a War Crimes Tribunal. I do not maintain that those who have been invited to serve as members of the Tribunal are without opinions about the war. On the contrary, it is precisely because of their passionate conviction that terrible crimes have been occurring that they feel the moral obligation to form themselves into a Tribunal of conscience, for the purpose of assessing exhaustively and definitively the actions of the United States in Vietnam. I have not invited to be just one must be without conviction. The authority of the Tribunal and its reputation for fairness follows from the character of its membership and the correctness of its procedures.</p> <p>From : War Crimes in Vietnam, 1967, Postscript. http://russell-j.com/cool/61T-POST01.HTM</p>	<p>本書は、1966年秋に印刷に回された。ちょうど本書の中で述べている国際戦争犯罪法廷（の開催）を準備している中である。ニュールンベルグ裁判の判決文に於いて、その首席検事をつとめていた米国最高裁判所のジャクソン判事は、以下のように、宣告した。</p> <p>「ある特定の行為や条約違反が犯罪であるとするならば、それをアメリカ合衆国が行おうと、ドイツが行おうと、善しく犯罪です。我々に対して起こされたくない。他者に対する犯罪行為（だけ）について規則を定めるつもりはありません。」</p> <p>けれども、ニュールンベルグ裁判の性質とジャクソン判事の役割には、倫理上矛盾する要素（相反する価値）が深く根をおろしていた。ニュールンベルグ裁判は、勝者が敗者を裁くという裁判であった。ニュールンベルグ裁判は、理想からではなく、現実政策の立場から連合した列強国が行ったものであり、しかも、不可抗力についての法律専門主義を通じて（注：あくまでも、法律を尊重すべきであり、権力に抵抗できなかったという言い訳は成り立たないという主張？）人間性を求める声、即ち、ナチスの恐怖という、非良心的な犯罪行為に抗議する叫び声、徐々に増していった。</p> <p>私は、国際戦争犯罪法廷を1967年に開廷するよう要請した。それは、またもや、重大な犯罪が行なわれたからである。これは特に銘記されなければならないが、この法廷は、いかなる国家権力も牽いていない。職務専らと見せられてもいない。倫理的権威以外の者は主張しない。</p> <p>1つの巨大な工業国が、長年に渡って、1つの小さな（国民の大部分が小作人である）農業国を攻撃してきたのである。ベトナムの革命も、ベトナムの歴史的な現象の一部であり、その発展を通じて、搾取され、飢え、民衆が人間としての生活のために最低限必要なものの要求を確立しようとしているのである。アメリカ合衆国は、ベトナム国民のこの生きるための闘いを、残忍な力で圧倒してしまおうと決意していることを自ら示している。アメリカ当局の発表によると、週平均650回の出撃が行われ、300万ポンドの爆弾が毎日北ベトナムに投下されており、第2次世界大戦と朝鮮戦争の間に使われた総トン数ははるかに上回る爆弾が投入された、という事実を我々は知っている。さらにそれに加えて、米軍は、化学兵器、毒ガス兵器、ナバーン弾、焼夷弾（フューード）という破壊兵器、生物兵器（注：細菌兵器など）といったような実験兵器を使ってきたのである。</p> <p>このような事実は、西欧において、映画、テレビ、それからほとんど毎日のように新聞紙上にあらわれているのに、それでも気がつかなかったという人間がいるだろうか。我々の間で、それらの写真を見なかったり、それらの統計を読まなかったりしたものがあるだろうか。民族自決と社会改造のための、この信がたいベトナムの闘いの性格が、羊飼いが羊をバラバラにするのと同じような闘いの性格と同じであることを、誰が否定することができようか。</p> <p>このような自覚こそが、私が戦争犯罪法廷を招請した正しい背景となっているのである。私は、この法廷の構成メンバーとして招請されている人々が、この戦争について、何の意見も持っていないなどとは思わない。それどころか、逆に、これらの人々は、まさに、恐ろしい犯罪行為が行なわれてきたことを確信しているために、ベトナムにおけるアメリカの行動を徹底的にまた決定的に評価するために、良心の「法廷」の一員になることを自分の道義的責務であると感しているのである。私は、偏見がないということと無知であるということを取り違えた（混同した）ことではない。また、正しくあるためには、信念をもってはならないなどというふうに信じたこともない。この「戦争犯罪法廷」の権威と公正であるとの評価は、まさに、法廷を構成している構成員の性格と、その審理手続きの正しさから出ているのである。</p>			
★		B3-11	<p>But I do remember the beginning of the Great War, and everybody's mood then was almost exactly what it is in a bad fog - one of hilarious and excited friendliness. In the first days there were very few who were saddened by the prospect of horrors to come. Light-hearted confidence was the order of the day in all the countries concerned.</p> <p>http://russell-j.com/MISHAPS.HTM</p> <p>* hiliarious (形) : 大変陽気な；浮かれ騒ぐ / order of the day 当時の風潮 (流行)</p>	<p>だが私は、第一次世界大戦が勃発した時のことをはっきり覚えていて、その時の世間人の気分（心理状態）は、まさにひどい霧に見舞われた時と同じであり、あがり、浮かれ騒ぎ、はしゃぎ合う気分（心理状態）であった。大戦勃発直後の何日かは、せまり来る恐怖を予想して悲しんだ人はほとんどいなかった。気楽な自信が、戦争関係国全てにおいて、時代の風潮であった。</p> <p>出典：ラッセル『アメリカン・エッセイ集』の中の「災難がうれいのはなぜか？」 http://russell-j.com/MISHAPS.HTM</p>	<p>第一次世界大戦直前まで、ラッセルの反戦運動に対しケンブリッジ大学（トリニティ・コレッジ）の関係者の多くはラッセルらの反戦署名運動に理解をせしめ、協力していましたが戦争が始まるやいなや、一夜にして主戦論一色になってしまいました。しかし、戦争による犠牲者が膨大な数になるにつれて、厭戦気分が広がり、ついには終戦となりましたが、数十万人の犠牲者が出でしまいました。戦争指導者は後（終戦）から命令を出しているだけであり、最前線の兵隊として戦う必要がないため、勇ましいことを言っていられます。</p>		
★		B3-12	<p>I have not confused an open mind with an empty one. I have not believed that to be just one must be without conviction. The authority of the Tribunal and its reputation for fairness follows from the character of its membership and the correctness of its procedures.</p> <p>From : War Crimes in Vietnam, 1967, Postscript. http://russell-j.com/cool/61T-POST01.HTM</p>	<p>私は、偏見がないということと無知であるということを取り違えた（混同した）ことではない。また、正しくあるためには、信念をもってはならないなどというふうに信じたこともない。この「戦争犯罪法廷」（注：いわゆるラッセル法廷）の権威と公正であるとの評価は、まさに、法廷を構成している構成員の性格と、その審理手続きの正しさから出ているのである。</p>			

	B3-**	<p>Schoenman's reports were of extreme importance since they contain not only first-hand observation but verbatim accounts given by victims of the war attested to both by the victims themselves and by the reliable witness present at the time the accounts were given. The reports also paved the way for the more formal investigations conducted in Indo-China by teams sent by the International War Crimes Tribunal. It was in part upon such reports as Schoenman's and of those of Christopher Farley who, in November, 1964, was the first member of the foundation to go to Vietnam to obtain first-hand impressions, that I base my attitude and statements in regard to the Vietnam war, as well as upon reports of other special investigators. Chiefly, however, I base my opinions upon the facts reported in the daily newspapers, especially those of the United States. These reports seem to have been published almost by chance since they appear not to have affected editorial policy.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap4:The Foundation,(1969) http://russell-j.com/beginner/AB34-240.HTM</p>	<p>R. シューマンの報告書はきわめて重要なものであった。なぜなら、彼の報告書には、直接見聞したものを収録しているにもかかわらず、証人たちの両者によって証立立てられた戦争犠牲者たちが語ったそのさまの談話(言葉)が収められているからである。その報告書はまた、フエトナム戦争犯罪国際法廷によって派遣されたチームには、Christopher Farley who, in November, 1964, was the first member of the foundation to go to Vietnam to obtain first-hand impressions, that I base my attitude and statements in regard to the Vietnam war, as well as upon reports of other special investigators. Chiefly, however, I base my opinions upon the facts reported in the daily newspapers, especially those of the United States. These reports seem to have been published almost by chance since they appear not to have affected editorial policy. というように見えたということであらう。また公表されてきたように思われる。</p>	<p>(松下注: 米国の「国益」の立場から、New York Times などの米国の報道機関は、ラッセルは「客観性の乏しい証人」をもとに「反米活動」していると批判した。それに対抗するためにラッセルは、New York Times 自らが日々報道してきた事実や証立を積み上げることによって、米軍の戦争犯罪を暴こうと努力したことをここでは言っている。)</p>	
	B3-**	<p>Occasionally I have been invited by the North Vietnamese to give my opinion about various developments in the war. They asked my advice as to the desirability of permitting Mr Harrison Salisbury, Assistant Managing Editor of the New York Times, to visit Hanoi as a journalist. Mr Salisbury had previously attacked me in his introduction to the Warren Commission's Report, in which he wrote of the Commission's "exhaustive examination of every particle of evidence it could discover". These comments were soon seen to be ridiculous, but I suspected that he would have great difficulty in ignoring the evidence of widespread bombardment of civilians in North Vietnam. I recommended that his visit was a risk worth taking, and was pleased to read, some weeks later, his reports from Hanoi, which caused consternation in Washington and probably lost him a Pulitzer Prize.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap4:The Foundation,(1969) http://russell-j.com/beginner/AB34-250.HTM</p>	<p>時々私は、北フエトナムの人々から、フエトナム戦争における多様な展開について意見を言うよう求められた。彼は、New York Times の Assistant Managing Editor であるハリソン・ソールズベリー氏(Harrison Evans Salisbury, 1908-1993)が新聞記者としてハノイを訪問することを許可することには好ましかどうか、私の助言を求めた。ソールズベリー氏はかつて、ウォーレン委員会報告書の紹介記事のなかで私を攻撃したことがあり、彼はそのおかげの中で、同委員会に「委員会が発見し得るあらゆる詳細な証拠をも網羅的に調べあげた」と書いていた。これらのコメントはその後間もなく馬鹿げたものであることがわかった。しかし、北フエトナムの一般市民に対する広範にわたる多様な証立を無視することには、私は当然ながら疑念を抱いているのではないかと疑った。ゆえに、私は、彼のハノイ訪問を引き受ける価値のあるリスクであると勧めた。そうして、それから何週間かして彼のハノイ報告(記事)を読んでもうれしく思った。彼のハノイからの報告はフエトナム政府(当局)を批判し、また、多様な証立が、彼がニューヨークに書を得る機会を失わせたであろう。</p>	<p>(注: ソールズベリーが2回目のピューリッツァ賞一賞の変質を遂げたのは、北フエトナムの一般市民に対するアメリカによる無差別の爆撃について新聞に書いてアメリカ政府を批判したため(またアメリカの愛国者たちを刺激したため)であらう、という意味/なお、ソールズベリーは、1955年に1回目のピューリッツァ賞を受賞している。1963年にジョージ・ボーク賞を受賞している。)</p>	
	B3-**	<p>The Tribunal, of which my Vietnam book told, caught the imagination of a wide public the world over. For four years I had been searching for some effective means to help make known to the world the unbelievable cruelty of the United States in its unjust attempt to subjugate South Vietnam. At the time of the Korean War I had been unable to believe in the allegations brought by Professor Joseph Needham and others charging the Americans with having used that war as a proving-ground for new biological and chemical weapons of mass destruction. I owe Professor Needham and the others my sincere apologies for thinking these charges too extreme. By 1963, I had become convinced of the justice of these allegations since it was clear that similar ones must be brought against the United States in Vietnam.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap4:The Foundation,(1969) http://russell-j.com/beginner/AB34-270.HTM</p>	<p>この国際法廷(ラッセル法廷)は、これについてはフエトナムに関する私の著書に書いてあるが、全世界にわたって広く一般の関心をひきつけた。南フエトナムを服従させるにせよ、その半信半疑なるにせよ、この国を信じられないほどの残酷さを広く世界に知らせる助けとなる何らかの効果的な手段はないか、私は4年間にわたって探し求めていた。朝鮮戦争当時、私は、アメリカ人が大量破壊の新しい生物、化学兵器の試験場(実験場)となし、朝鮮戦争を利用したと、米国の歴史家、ジョセフ・ニードハム教授(Joseph Terence Montgomery Needham, 1900-1995、英国の生化学者で中国科学史の権威)やその他の人々の主張(申し立て)を信ずることができなかった。私は、そのような非難を種々多岐と考えていたことに対して、ジョセフ・ニードハムやその他の人々々に心からお詫言をしなければならぬ。1963年にいたって、私はそれらの主張が正しかったことを確信するようになった。というのは、それと同様の主張(申し立て)がフエトナム(戦争)における米国(の行為)に対してなされなければならないことが明らかだったからである。</p>		
	B3-**	<p>In the summer of 1966, after extensive study and planning, I wrote to a number of people around the world, inviting them to join an International War Crimes Tribunal. The response heartened me, and soon I had received about eighteen acceptances. I was especially pleased to be joined by Jean-Paul Sartre, for despite our differences on philosophical questions I much admired his courage. Vladimir Dedjier, the Yugoslav writer, had visited me earlier in Wales, and through his wide knowledge of both the Western and Communist worlds proved a valuable ally. I also came to rely heavily on Isaac Deutscher, the essayist and political writers whom I had not seen for ten years. Whenever there were too many requests for television and other interviews about the Tribunal, I could rely on Deutscher in London to meet the press and give an informed and convincing assessment of world affairs and of our own work. I invited all the members to London for preliminary discussions in November, 1966, and opened the proceedings with a speech to be found at the end of this chapter. It seemed to me essential that what happening in Vietnam should be examined with scrupulous care, and I had invited only people whose integrity was beyond question. The meeting was highly successful, and we arranged to hold the public sessions of the Tribunal over many weeks in the following year, after first sending a series of international teams to Indo-China on behalf of the Tribunal itself.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap4:The Foundation,(1969) http://russell-j.com/beginner/AB34-280.HTM</p>	<p>1966年の夏、広範囲にわたる調査研究及び企画立案のもと、私は全世界の多くの人々に手紙を書き、フエトナム戦争犯罪国際法廷への参加を要請した。私はその反応に元気づけられた。特にうれしかったのは、ジャン・ポール・サルトルが参加してくれたことであつた。なぜならば、哲学上の問題で私たちは意見を異にしていたけれども、私は彼の勇気を大いに称賞していたからである。ユーゴスラヴィアの作家、イザック・デューチャー(Isaac Deutscher, 1914-1990.11.30: ユーゴスラヴィアの政治家、歴史家、ウラジミール・デティエ(?) ) はだいぶ前に、ウエールズに私を訪ねて来たことがあつた。彼の西側世界と共産世界との両方の世界に関する幅広い知識から、彼は貴重な盟友であることがわかつた。これはまた、薩摩島で政治関係の著作家でもあるイザック・ドイッチャー(Isaac Deutscher, 1907-1967.8.19: イギリスの歴史学者、ジャーナリストで、トロツキー伝で有名) - 彼とは10年間会っていないが、をかなり頻りにするようになっていた。国際法廷に関心があり、多くのテレビやラジオ以外の、国際法廷にヒューの申し込みがあるときはいつも、ロンドンにいるドイッチャーに頼んで記者会見を聞いてもらい、世界的な問題やわれわれ自身の活動について、詳しい情報に基づいた、説得力のある評価を与えてもらうことができた。私は1966年11月、国際法廷のメンバー全員を手厚い招待状を送るためにロンドンに招き、そして東京に拠点を置く事業説をわざわざに議事を開始した。フエトナムで現に起こっていることを細心の注意を払って調査することは、不可欠のことであると思われた。それで私は、疑いもなく誠実だと思われた人々を招待した。それらは、大抵は大成功であつた。そして、私たちは、翌年、何週間も長期にわたって国際法廷の公開セッションを開催する準備を行った。</p>		
★	B3/C1-01	<p>In the autumn of 1899 the Boer War broke out. I was at that time a Liberal Imperialist, and at first by no means a pro-Boer. British defeats caused me much anxiety, and I could think of nothing else but the war news. We were living at The Milltanger, and I used most afternoons to walk the four miles to the station in order to get an evening paper. Alys, being American, did not have the same feelings in the matter, and was rather annoyed by my absorption in it. When the Boers began to be defeated, my interest grew less, and early in 1901 I became a pro-Boer.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5: First marriage, 1967 http://russell-j.com/beginner/AB15-220.HTM</p>	<p>1899年の秋、ボーア戦争が勃発した。当時私は、自由主義的帝国主義者(a Liberal Imperialist)であり、当初はまったボーア人(Boer)に味方しなかつた。(注: Liberal Imperialist: 19世紀後半の自由主義的帝国主義)市場を開かない国は、力によって開国させ、自由と文明を世界に広める。ブッシュ大統領とトランプ首相は、現代における新自由主義的帝国主義者と標榜されていた)。英国の敗戦が大変心配で、私に、戦争のために、戦争を止めるには何者かをすることができなかつた。私たちは、ミルハンガで暮らしていたので、大抵は、午後夕刊を手に入れるために、私はいつも4マイルの距離を駅まで歩いた。アリスは、アメリカ人であつたので、この問題について、私と同じ感情を共有して、おらず、私が夢中になっているので、かまひいららして、ボーア人が負けはじめる、私の関心は、だに薄くなっていき、そうして1901年の初めには、私は、ボーア人の味方になっていた。</p>	<p>* Bore War, 1899-1902: ブール戦争とも言う、アフリカ大陸南部にあったトランスヴァール共和国とオランダ自由国に対するイギリスの侵略戦争。後にイギリス首相となるウイントン・チャーチル(1874-1965)も補償となつたが脱走したとのこと。英国はボーア人の住む両国を占領して植民地とし、1910年に、南アフリカ連邦を建国/右写真: ボーア戦争記念切手)</p>	

★		B3/C1-02	<p>The period from 1910 to 1914 was a time of transition. My life before and my life after 1914 were as sharply separated as Faust's life before and after he met Mephistopheles. I underwent a process of rejuvenation, inaugurated by Ottoline Morrell and continued by the War. It may seem curious that the War should rejuvenate anybody, but in fact it shook me out of my prejudices and made me think afresh on a number of fundamental questions. It also provided me with a new kind of activity, for which I did not feel the staidness that beset me whenever I tried to return to mathematical logic. I have therefore got into the habit of thinking of myself as a non-supernatural Faust for whom Mephistopheles was represented by the Great War.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:Tje First War, 1968] http://russell-j.com/beginner/AB21-010.HTM</p>	<p>1910年から1914年までの期間は、(私にとって) 過渡期であった。私の人生は、1910年以前と1914年以後とでは、メフィストフェレスに会った前後のファウストの生涯(人生)と同様、はつきり区別されるものであった。私は、オットリン・モレル夫人によって始められ、第一次世界大戦によって継続された、若返り(回春)の過程を経験した。戦争が人を若返らせるとは奇妙に思われるかもしれないが、事実として、第一次世界大戦は私の偏見を払い、新しい多岐にわたる根本的な問題についてあらためて考え直させてくれた。第一次大戦は、また、私に新しい種類の活動も与えてくれた。この新しい活動に対しては、数理論理学の世界に戻ろうとするときに何時も私につきまとったあの新鮮みのない(呆気な)感覚を覚えずに、それゆえに、いつも自分自身を、超自然的存在でないファウスト博士であり、(ファウスト博士にとつての)メフィストフェレスに相当するものは(自分にとつては)第一次世界大戦である、と考える習慣(習慣)が身に付いた。</p> <p>(注目の月曜の朝(1914年8月3日)、私はロンドンに行くことに決めた。私は、モレル夫妻とロンドンのベッドフォード・スクエアで昼食を共にした。そして、オットリン・モレルが私の考え方を全く同じであることがわかった。彼女は、下院で平和演説をするというスフィリップの決意に賛成した。私は、エドワード・グレイ卿の演説を聞きたいと思い、下院まで出かけたが、群衆があまりに多く、院内に入れなかった。けれども、私は、フィリップ・モレルが、演説をうまくやりとげたことがわかった。私は、その日の夕方、ロンドンのいろいろな通りを、特にトラファルガ(塔の近辺)を歩きまわり、種々な場所に注目し、通りすぎる人々の感情に対し自分の感性を敏感にし、(感性を研ぎ澄ませて)、過ごした。この日とそれに続く何日間、驚いたことに、一般の(平均的な)男女が、戦争が起こりそうなことを善んとしているのを発見した。私は愚かにもほとんど、この平和主義者が主張するように、戦争は、専制的な権謀術数に長けた政府によって、嫌が(気の進まない)民衆に押しつけられるものであると想像していた。エドワード・グレイ卿は、戦争が起こったら、我々英国民にフランスを交還させるべく、ひそかに手を打っており、そのことを一般国民に知らせないようにするため、預言者周旋に専らついていた。グレイ卿がいかに国民をたまたてきたか、国民が知ったら、さぞかし立腹するだろうと、蒸気に想像していた。しかし怒るかわりに、国民は自分たちにも倫理的責任の一端を担わなくてはならぬと、感服したのである(注:言うまでもなく、皮肉)</p>		
★	○	B3/C1-03	<p>On the Monday morning I decided to go to London. I lunched with the Morrells at Bedford Square, and found Ottoline entirely of my way of thinking. She agreed with Philip's determination to make a pacifist speech in the House. I went down to the House in the hope of hearing Sir Edward Grey's famous statement, but the crowd was too great, and I failed to get in. I learned, however, that Philip had duly made his speech. I spent the evening walking round the streets, especially in the neighbourhood of Trafalgar Square, noticing cheering crowds, and making myself sensitive to the emotions of passers-by. During this and the following days I discovered to my amazement that several men and women were delighted at the prospect of war. I had fondly imagined, what most pacifists contended, that wars were forced upon a reluctant population by despotic and Machiavellian governments. I had noticed during previous years how carefully Sir Edward Grey lied in order to prevent the public from knowing the methods by which he was committing us to the support of France in the event of war. I naively imagined that when the public discovered how he had lied to them, they would be annoyed; instead of which, they were grateful to him for having spared them the moral responsibility.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:Tje First War, 1968] http://russell-j.com/beginner/AB21-020.HTM</p>	<p>戦争がもたらす惨禍の予想で私は、恐怖でいっぱいになった。しかし、私より恐怖で満ちたのは、戦争による大産殺の予想は、英国民のほぼ90パーセントにとつて、快いものである。(注:私は、人間性についての見方を修正しなければならなかった。当時、私は、精神分析については全く無知であったが、人間の情念(様々な感情)について、精神分析家の考えに似通った見方に、独力で到達した。私は、第一次大戦に対して、大衆(一般の人々の)感情を理解しようとする努力をしているうちに、このような見解に到達したのである。それまで私は、親が自分の子供を愛するのは、まったくありふれたことであると思っていたが、第一次大戦により、これはごくまれな例外であると思うようになった。大部分の人は、他の何よりもお金を好むと思っていたが、お金よりも破壊の方をより好むということがわかった。知識人というものはしばしば真理を愛するものと想像していたが、人気よりも真理の方を好むものはその一割にも満たないことがわかった)</p>		
		B3/C1-04	<p>... The prospect filled me with horror, but what filled me with even more horror was the fact that the anticipation of carnage was delightful to something like ninety per cent of the population. I had to revise my views on human nature. At that time I was wholly ignorant of psycho-analysis, but I arrived for myself at a view of human passions not unlike that of the psycho-analysts. I arrived at this view in an endeavour to understand popular feeling about the War. I had supposed until that time that it was quite common for parents to love their children, but the War persuaded me that it is a rare exception. I had supposed that most people liked money better than almost anything else, but I discovered that they liked destruction even better. I had supposed that intellectuals frequently loved truth, but I found here again that not ten per cent of them prefer truth to popularity.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:Tje First War, 1968] http://russell-j.com/beginner/AB21-040.HTM</p>	<p>このような森中、私は自分の愛国心によってひどく苦しめられた。マルヌの戦い(第一次世界大戦初期の1914年9月5-12日、フランスのマルヌ河畔で行われた独仏の戦いで、フランスが勝利した。)以前の、ドイツの数々の成功(勝利)は、私にとつて、大変恐ろしいものであった。私は、いかなる退役した陸軍大佐にもおとらなくらい難題にドイツの敗北を助けた。(祖国)英国に対する愛情は、私のもっている感情のなかで最も強いものであるといつてよいが、そのため、そのような時期において、愛国心が沸いてきたらそれをわきに追いやるといふ、困難な自制の努力をして、それにもかかわらず私は何となく、私には、愛国心というものが、一瞬たりとも疑いを持たなかった。私は、大戦以前には、時々懐疑主義に陥つて無力になったり、時々冷笑的になったり、それ以外の時には無関心になったりしたが、第一次大戦が勃発した時には、あなたが神の声を聞いたかのように感じ、私の抗議がどんなに無益なものであるとしても、戦争に抗議することは私の役割(責務)であると理解していた。私の人間としての全ての本質が関係していった。(第一に)真理を愛するものとして、全文戦国の(自国本位の)国家宣伝にもかかわさせられた。第二に(文明を愛するものとして、野蠻への復讐にぞつとさせられた。第三に)若年者に対する親としての感情を損なわれたものとして、青年に対する大産殺に心を苦しめた。(第一次)大戦に反対しても、自分にとって良いこと(自分の利益になること)はほとんど出てこなかったらうと思った。個性と各々のためをいふことも、足下をすくわれない女は、しっかりと(自分の足で)立っていることを示すべきであると思つた。</p>	<p>(注:世界大戦になれば、大量殺戮が起こることは、理屈では理解していないが、非道な敵国の侵略を防ぐためにはちゅうちょしてはならないといふ、それの国々の人々も、無業職下に進念を思い私あうとする。戦争が終わり、戦争の肉体があきらかになると、このように大変なことになるとは予想していないが、戦後初めて気づいたかのごとく、自己欺瞞に陥るといふのがラッセルの言いたいことであろう。)*バトナム戦争も、イラク戦争も、・・・)</p>	
★		B3/C1-05	<p>In the midst of this, I was myself tortured by patriotism. The successes of the Germans before the Battle of the Marne were horrible to me. I desired the defeat of Germany as ardently as any retired colonel. Love of England is very nearly the strongest emotion I possess, and in appearing to set it aside at such a moment, I was making a very difficult renunciation. Nevertheless, I never had a moment's doubt as to what I must do. I have at times been paralysed by scepticism, at times I have been cynical, at other times indifferent, but when the War came I felt as if I heard the voice of God. I knew that it was my business to protest, however futile protest might be. My whole nature was involved. As a lover of truth, the national propaganda of all the belligerent nations sickened me. As a lover of civilisation, the return to barbarism appalled me. As a man of thwarted parental feeling, the massacre of the young wrung my heart. I hardly supposed that much good would come of opposing the War, but I felt that for the honour of human nature, those who were not swept off their feet should show that they stood firm.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968] http://russell-j.com/beginner/AB21-050.HTM</p>	<p>このような森中、私は自分の愛国心によってひどく苦しめられた。マルヌの戦い(第一次世界大戦初期の1914年9月5-12日、フランスのマルヌ河畔で行われた独仏の戦いで、フランスが勝利した。)以前の、ドイツの数々の成功(勝利)は、私にとつて、大変恐ろしいものであった。私は、いかなる退役した陸軍大佐にもおとらなくらい難題にドイツの敗北を助けた。(祖国)英国に対する愛情は、私のもっている感情のなかで最も強いものであるといつてよいが、そのため、そのような時期において、愛国心が沸いてきたらそれをわきに追いやるといふ、困難な自制の努力をして、それにもかかわらず私は何となく、私には、愛国心というものが、一瞬たりとも疑いを持たなかった。私は、大戦以前には、時々懐疑主義に陥つて無力になったり、時々冷笑的になったり、それ以外の時には無関心になったりしたが、第一次大戦が勃発した時には、あなたが神の声を聞いたかのように感じ、私の抗議がどんなに無益なものであるとしても、戦争に抗議することは私の役割(責務)であると理解していた。私の人間としての全ての本質が関係していった。(第一に)真理を愛するものとして、全文戦国の(自国本位の)国家宣伝にもかかわさせられた。第二に(文明を愛するものとして、野蠻への復讐にぞつとさせられた。第三に)若年者に対する親としての感情を損なわれたものとして、青年に対する大産殺に心を苦しめた。(第一次)大戦に反対しても、自分にとって良いこと(自分の利益になること)はほとんど出てこなかったらうと思った。個性と各々のためをいふことも、足下をすくわれない女は、しっかりと(自分の足で)立っていることを示すべきであると思つた。</p>		

★		B3/C1-06	<p>Every Christmas throughout the War I had a fit of black despair, such complete despair that I could do nothing except sit idle in my chair and wonder whether the human race served any purpose. At Christmas time in 1914, by Ottoline's advice, I found a way of making despair not unendurable. I took to visiting destitute Germans on behalf of a charitable committee to investigate their circumstances and to relieve their distress if they deserved it. In the course of this work, I came upon remarkable instances of kindness in the middle of the fury of war. Not infrequently in the poor neighbourhoods landladies, themselves poor, had allowed Germans to stay on without paying any rent, because they knew it was impossible for Germans to find work. This problem ceased to exist soon afterwards, as the Germans were all interned, but during the first months of the War their condition was pitiable. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-070.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-070.HTM</a></p>	<p>第一次大戦の期間中、クリスマスを迎えることに私は、発作的な暗い絶望感に襲われた。それは、ただ無為に椅子に坐っているだけで何もすることができず、人類が何の役に立つものかどうか疑うほどの、(一抹の光もないような)完璧な絶望(感)であった。1914年のクリスマスの時期に、オットリンの助言で、この絶望感を堪え難いものしない方法を見つけた。(すなわち)私は、慈善委員会を代表してひどく貧しいドイツ人を訪問し、その境遇を調査し、必要があれば彼らを露地から救済するという仕事にとりかかった。この仕事をしているうちに、激しい戦争の最中に、注目すべき思いやり(親切)のいろいろな実例に遭遇した。稀なことではないが、貧しい人たちの住んでいる近隣で、女家主たちは、自分たち自身も付いては居ないが、まったく家賃をとらずに、彼らを住まわせてあげていた。なぜなら、彼女たちは、(英国と戦争状態にある)ドイツ人が職を見つけることは不可能である、ということがわかっていたのである。この問題は、ドイツ人が、このことを押除されてしまったので、その後まもなく消えてしまった。しかし、第一次大戦の最初の数ヶ月間は、ドイツ人の境遇は非常に惨めなものであった。</p>	<p>(松下注：この時の経緯も、「幸福論」の執筆に反映されることになる。絶望に陥った時はよくよく考えても覆われぬ、何かが有益だと思われるような行動)を試みるのが一番である。)</p>		
		B3/C1-07	<p>By this time my relations with the Government had become very bad. In 1916, I wrote a leaflet which was published by The No Conscription Fellowship about a conscientious objector who had been sentenced to imprisonment in defiance of the conscience clause. The leaflet appeared without my name on it, and I found rather to my surprise, that those who distributed it were sent to prison. I therefore wrote to The Times to state that I was the author of it. I was prosecuted in the Mansion House before the Lord Mayor, and made a long speech in my own defence. On this occasion I was fined £100. I did not pay the sum, so that my goods at Cambridge were sold to a sufficient amount to realise the fine. Kind friends, however, bought them in and gave them back to me, so that I felt my protest had been somewhat futile. At Trinity, meanwhile, all the younger Fellows had obtained commissions, and the older men naturally wished to do their bit. They therefore deprived me of my lectureship. When the younger men came back at the end of the War I was invited to return, but by this time had no longer any wish to do so. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-250.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-250.HTM</a></p>	<p>この頃には、私と英国政府との関係は、非常に悪化していた。1916年に、私は、良心的兵役拒否を認める事項があるにも関わらず、禁固刑の判決を受けたある良心的兵役拒否者に関するリーフレット、ラッセル注：その全文はpp.76-78に載っている) - このリーフレットは徴兵反対協会によって出版された。 - を執筆した。そのリーフレットは私の名前を載せずに発行された。そうしてそのリーフレットを配布した人たちが発覚されたことを知り、非常に驚いた。私は、タイムズ紙に、そのリーフレットの著者は自分であると書いて送った。私は、ロンドン市長(注：大口ロンドンの首長ではなく、City of London の市長)公邸で、市長の前で起訴され、私は自分の弁護のため、長い演説を行なった。この時私は、巨額の罰金刑が科された。私はその金額を支払わなかった。そのために、その罰金額を満了するまでケンブリッジ大学(の自分の居室)にある私の持ち物が売られた。けれども、親切な友人たちが、それを買い取り、私に返してくれたので、私の抵抗もやや無駄になってしまったと感じた。とかくするうちにトリニティ・コレッジでは、若いフェロー(特別研究員)たちは全員、将校任命の辞令をもらい、また年配のフェローたちも、当然のこととして、その責務を果たすことを望んだ。彼ら(年配のフェローたち)は、私から講師の職を奪いとった。第一次世界大戦が終わり、若い人たちが(=若いフェローたち)がトリニティ・コレッジに戻ってくると、コレッジに復帰するよう要請されたが、この頃には、もう私には戻りたいという願望はまったくなくなっていた。</p>	<p>(訳注： pamphlet 'Rex v. Bertrand Russell: Report of the Proceedings Before the Lord Mayor at the Mansion House Justice Room, 5 June 1916')。</p>		
★		B3/C1-08	<p>The War of 1914-18 changed everything for me. I ceased to be academic and took to writing a new kind of books. I changed my whole conception of human nature. I became for the first time deeply convinced that Puritanism does not make for human happiness. Through the spectacle of death I acquired a new love for what is living. I became convinced that most human beings are possessed by a profound unhappiness venting itself in destructive rages, and that only through the diffusion of instinctive joy can a good world be brought into being. I saw that reformers and reactionaries alike in our present world have become distorted by cruelties. I grew suspicious of all purposes demanding stern discipline. Being in opposition to the whole purpose of the community, and finding all the everyday virtues used as means for the slaughter of Germans, I experienced great difficulty in not becoming a complete Antinomian. But I was saved from this by the profound compassion which I felt for the sorrows of the world. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-330.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-330.HTM</a></p>	<p>1914年から1918年までの第一次世界大戦は、私のあらゆるものを変えてしまった。私は学究的であること(大学人である)ことをやめ、新しい性格の本の執筆を始めた(注：人間性についての私の考え(理解)も一変した。ピュリタニズム(清教徒主義)は人間の幸福のためになるものではないと初めて心から確信するようになった。注：ラッセルが学んだトリニティ・コレッジはピューリタニズム発祥の地) (大戦による)死の(目を覆う)光景を通して、生きとし生けるもの全てに対する新しい愛を手に入れた。また、大部分の人間は破壊的な怒りには口舌を与えるような深い不幸にとりつかれており、本能的な喜びを(多くの人に)広めることによってのみ、良い世界をまたたすことができると深く確信するようになった。現代世界の改革者も反動主義者も同様、連々の残酷な行為によって、至った考えを持つようになっていると思った。厳しい規律を要求するようあらゆる目的や集団に反対し、疑いを持つようになった。私は共同社会のあらゆる目的に反対し、日常の(ありふれた)美德が(敵国)ドイツ人殺戮の手段として利用されているのを発見し、完全に無律法主義者(立法廃棄論者)にならないことは非常に困難であると経験して思った。しかし、私は、世界の不幸に反対して感じた深い同情(憐憫の情)によって、この危機から救われた。</p>	<p>(注)1916年に、Justice in War Time と The Principles of Social Reconstruction を出版。それ以前は、哲学の入門書 The Problems of Philosophy, 1912 以外、一般の人が興味を持ちそうな popular books は書いてこなかった。)</p> <p>(吉田) [1914年から1918年までの第一次世界大戦の結果、世界の中心はアメリカに移りました。大戦を始めたヨーロッパ諸国は、勝者も敗者も後退もしくは滅びます。20世紀の先進国間の総力戦は、勝者にさえ利益のない戦争だったのです。自らを導くほどの戦争を、国民の支持のもと、先進国指導者が起こすことがある。ラッセルが後に核兵器廃絶運動を起した背景には、この経緯に基づいた人間戦があったのかもしれない。</p>		



★子備	B3/C1-09	<p>This attitude, however, had become unconsciously insincere. I had been able to view with reluctant acquiescence the possibility of the supremacy of the Kaiser's Germany: I thought that, although this would be an evil, it would not be so great an evil as a world war and its aftermath. But Hitler's Germany was a different matter. I found the Nazis utterly revolting - cruel, bigoted, and stupid. Morally and intellectually they were alike odious to me. Although I clung to my pacifist convictions, I did so with increasing difficulty. When, in 1940, England was threatened with invasion, I realized that, throughout the First War, I had never seriously envisaged the possibility of utter defeat. I found this possibility unbearable, and at last consciously and definitely decided that I must support what was necessary for victory in the Second War, however difficult victory might be to achieve, and however painful in its consequences.</p> <p>This was the last stage in the slow abandonment of many of the beliefs that had come to me in the moment of 'conversion' in 1901. I had never been a complete adherent of the doctrine of non-resistance; I had always recognized the necessity of the police and the criminal law, and even during the First War I had maintained publicly that some wars are justifiable. But I had allowed a larger sphere to the method of non-resistance or, rather, non-violent resistance than later experience seemed to warrant. It certainly has an important sphere, as against the British in India. Gandhi led it to triumph. But it depends upon the existence of certain virtues in those against whom it is employed. When Indians lay down on railways, and challenged the authorities to crush them under trains, the British found such cruelty intolerable. But the Nazis had no scruples in analogous situations. The doctrine which Tolstoy preached with great persuasive force, that the holders of power could be morally regenerated if met by non-resistance, was obviously untrue in Germany after 1933. Clearly Tolstoy was right only when the holders of power were not ruthless beyond a point, and clearly the Nazis went beyond this point. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 5: Later Years of Telegraph House, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB25-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB25-030.HTM</a></p>	<p>けれども、この態度(注:「良心的兵役忌避」)は、知らず知らずのうちに、誠意のないものになっていった。(第一次大戦の時)私はカイゼル(ドイツ皇帝ヴィルヘルム)が1918年1919-1941)のドイツによる覇権の可能性を本意ながらも承認するという考えを持つこともできた。即ちたとえそれが悪だとしても、世界戦争とそれによってひきおこされるものほど大きな害悪ではないだろうと考えた。しかし、このドイツは強権だった。つまり、裏切られ、快であり、残虐で頑迷で愚劣だということがわかった。道徳的にも知的にも、同様に、憎むべき存在であった。私は、平和主義者としての信念を固守していたが、そうすることの困難さががたいに増していった。1940年に英国が侵略の脅威を受けた時、第一次大戦の陣中(はまた)に死んだこと、完全なる敗北の可能性というものを心に描いていなかった、ということを実感した。このような可能性は堪えられないと思つた。そしてついに第二次大戦においては、勝利を達成することがいかに困難なものであっても、そしてその結果がいかに苦痛なものであろうとも、勝利のためには必要なことは全て支持しなければならない、という決意を、意識的に、そしてはっきりと決意した。</p> <p>これが1901年の「回心」に際して私が持つにいたつた多くの信念を、徐々に放棄していく最後の段階であった。私は、無抵抗の信条を完全に固執してきたわけではなく、決してなかった。即ち私は常に、警察と刑法の必要性を認識していた。第一次大戦中においてさえ、戦争の中には正当化できるものもあるということを公に主張していた。けれども、その後の経験が容認する以上に、無抵抗という手段、あるいはむしろ暴力による抵抗という手段に大きな幅を許容していた。非暴力による抵抗は確かに重要な役割をもっている。たとえばカンジーが反英国闘争においてインドを勝利に導いたようにである。しかしながら、それは、その無抵抗手段、もしくは非暴力抵抗手段が適用されるその相手に対して何らかの権威がなければならないことがわかっていく。インドが鉄道総局に身をつぐみ、殺されようとして当肩に挑んだ時、英国人はそのような残虐な行為はとて堪えられないと考えた。しかしナチスはそれと類似の状況にあつても何のためらいも示さなかった。トルストイは、権力の保持者も無抵抗を回復し、道徳的に再生させられるだろうということを、非常に偉大な説得力をもって説いたが、1933年以降のドイツに対してはそれは明らかに真理ではなかった。トルストイは、権力の保持者がある点を越えてまで冷酷ではないという場合にのみ正しい。しかし、ナチスの冷酷さはこの限界点をはるかに越えていた。</p> <p>私は、物事を誇張したいとは思わない。1932年から1940年までの間、(戦争と平和の問題に関する)私の意見は徐々に変わっていったが、それは大変革というふうなものではなかった。それは量的な変化及び強硬な変化に過ぎなかった。私は、無抵抗の信念を絶対的なものとして掲げたことはなかったし、今や絶対的に拒否することもしなかった。しかし、第一次大戦に反対したことと第二次大戦を支持したこととの間にある実際上の相違は、事実存在した。戦争と平和の問題に関する自分の意見が、理論的な真性をほとんど覆い隠してしまうほど非常に大きかった。</p> <p>私は、自分の理性には全般的に確信を持っていたが、自分の感情は不承不承理性に逼促した。第一次大戦に反対した時は、(自己に分裂はなく)自分の全精力がぎらぎらまわっていた。一方、第二次大戦に賛成(支持)した時の自己は分裂していた。</p> <p>私が1914年から1918年までの間(第一次世界大戦中)に持っていたのと同程度の「意見と感情の一致(調和)」というものを、1940年以後は一度もまた回復していない。そのような一致を以前自分に許した時は、科学的な知性が正当化する以上、自分自身に対し、一つの信条を容認させたのだと思う。科学的知性が導くところどこまでもそれに従うということが、私には常に、自分にとって、道徳的教訓のうちで最も肝要であると思われた。そうして私は、深い精神的洞察力と自分で考えていたものを失うことが伴う時ですら、この教訓に従つたのである。</p>	
	B3/C1-10	<p>I do not wish to exaggerate. The gradual change in my views, from 1932 to 1940, was not a revolution; it was only a quantitative change and a shift of emphasis. I had never held the non-resistance creed absolutely, and I did not now reject it absolutely. But the practical difference, between opposing the First War and supporting the Second, was so great as to mask the considerable degree of theoretical consistency that in fact existed.</p> <p>Although my reason was wholly convinced, my emotions followed with reluctance. My whole nature had been involved in my opposition to the First War, whereas it was a divided self that favoured the Second. I have never since 1940 recovered the same degree of unity between opinion and emotion as I had possessed from 1914 to 1918. I think that, in permitting myself that unity, I had allowed myself more of a creed than scientific intelligence can justify. To follow scientific intelligence wherever it may lead me had always seemed to me the most imperative of moral precepts for me, and I have followed this precept even when it has involved a loss of what I myself had taken for deep spiritual insight. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 5: Later Years of Telegraph House, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB25-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB25-040.HTM</a></p>	<p>私は、自分の理性には全般的に確信を持っていたが、自分の感情は不承不承理性に逼促した。第一次大戦に反対した時は、(自己に分裂はなく)自分の全精力がぎらぎらまわっていた。一方、第二次大戦に賛成(支持)した時の自己は分裂していた。</p> <p>私が1914年から1918年までの間(第一次世界大戦中)に持っていたのと同程度の「意見と感情の一致(調和)」というものを、1940年以後は一度もまた回復していない。そのような一致を以前自分に許した時は、科学的な知性が正当化する以上、自分自身に対し、一つの信条を容認させたのだと思う。科学的知性が導くところどこまでもそれに従うということが、私には常に、自分にとって、道徳的教訓のうちで最も肝要であると思われた。そうして私は、深い精神的洞察力と自分で考えていたものを失うことが伴う時ですら、この教訓に従つたのである。</p>	
	B3/C1-11	<p>Throughout the forties and the early fifties, my mind was in a state of confused agitation on the nuclear question. It was obvious to me that a nuclear war would put an end to civilisation. It was also obvious that unless there were a change of policies in both East and West a nuclear war was sure to occur sooner or later. The dangers were in the back of my mind from the early 'twenties. But in those days, although a few learned physicists were appreciative of the coming danger, the majority, not only of men in the streets, but even of scientists, turned aside from the prospect of atomic war with a kind of easy remark that 'Oh, men will never be so foolish as that'. The bombing of Hiroshima and Nagasaki in 1945 first brought the possibility of nuclear war to the attention of men of science and even of some few politicians. A few months after the bombing of the two Japanese cities, I made a speech in the House of Lords pointing out the likelihood of a general nuclear war and the certainty of its causing universal disaster if it occurred. I forecast and explained the making of nuclear bombs of far greater power than those used upon Hiroshima and Nagasaki, fusion as against the old fission bombs, the present hydrogen bombs in fact. It was possible at that time to enforce some form of control of these monsters to provide for their use for peaceful, not war like, ends, since the arms race which I dreaded had not yet begun. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-030.HTM</a></p>	<p>1940年代と1950年代の初期を通して、私の精神状態は、核の問題に関して混乱と動揺の状態にあつた。私にとって、核戦争が起るとは、人類の文明に終焉をもたらすだろう、ということでは明らかだと思われた。もし東西の両陣営に政策の変化がなければ、遅かれ早かれ核戦争は確実に起こることともまた明らかだと思われた。そうした危険の認識は、実は1920年代の初期から私の頭の片隅にあつた。松本下子、ラッセルはThe ABC of Atoms, 1925及びThe ABC of Relativity, 1925の著者であることに注意。しかし、当時は、少数の学識のある物理学者たちは来るべき危険についての鑑識眼を持っていたが、大多数の人々は、街頭の人々だけでなく、科学者たちでさえも、「人間はそれほど馬鹿ではないだろう」となど、気楽に言いつつ、原子力戦争(核戦争)の見通しから目を逸らして来た。</p> <p>1945年の広島と長崎への原爆投下は、初めて科学者と少数の政治家たちの注意を核戦争の可能性に向けさせた。日本のこの二つの都市への原爆投下の2、3ヶ月後に、私は、英首相会談の際で演説をし、全面的核戦争が起る可能性があること、そしてもし核戦争が起れば、全世界に惨害をもたらすことはまちがいないことを指摘した。(松本下注:1945年11月28日に演説)。私は、広島と長崎に投下された原爆よりもはるかに強力な核爆弾、すなわち従来の原子核分裂方式ではなく核融合方式の爆弾つまり事実上現在の水素爆弾が製造されたことを、得し、説明し、また、あの当時であつたら、私が恐れていた軍拡競争はまだ始まっていなかったで、このような怪物を、戦争目的ではなく平和目的のために使用するようある種の統制を強いることもできた。・・・。</p>	

<p>B3/C1-12</p>	<p>Against this careless attitude I, like a few others, used every opportunity that presented itself to point out the dangers. It seemed to me then, as it still seems to me, that the time to plan and to act in order to stave off approaching dangers is when they are first seen to be approaching. Once their progress is established, it is very much more difficult to halt it. I felt hopeful, therefore, when the Baruch Proposal was made by the United States to Russia. I thought better of it then, and of the American moves in making it, than I have since learned to think, but I still wish that the Russians had accepted it. However, the Russians did not. They exploded their first bomb in August, 1949, and it was evident that they would do all in their power to make themselves the equals of the United States in destructive - or, politely, defense - power. The arms race became inevitable unless drastic measures were taken to avoid it. That is why, in late 1948, I suggested that the remedy might be the threat of immediate war by the United States on Russia for the purpose of forcing nuclear disarmament upon her. I have given my reasons for doing this in an Appendix to my Common Sense and Nuclear Warfare. My chief defence of the view I held in 1948 was that I thought Russia very likely to yield to the demands of the West. This ceased to be probable after Russia had a considerable fleet of nuclear planes. This advice of mine is still brought up against me. It is easy to understand why Communists might object to it. But the usual criticism is that I, a pacifist, once advocated the threat of war. It seems to cut no ice that I have reiterated ad nauseum that I am not a pacifist, that I believe that some wars, a very few, are justified, even necessary. They are usually necessary because matters have been permitted to drag on their obvious evil way till no peaceful means can stop them. Nor do my critics appear to consider the evils that have developed as a result of the continued Cold War and that might have been avoided, along with the Cold War itself, had my advice to threaten war been taken in 1948. Had it been taken, the results remain hypothetical, but so far as I can see it is no disgrace, and shows no 'inconsistency' in my thought, to have given it. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-040.HTM</a></p>	<p>このような不注意な態度に抵抗して - 他の少数の人間と同様に私はあらゆる機会を利用して核戦争の脅威(危険)を指し示す。それは、私が「冷戦」を指し示す。私が、迫りつつある危険を防ぐために計画をねり行動すべき時は、核戦争の脅威が迫りつつあることに最初に気がついた時である。その後、核戦争の脅威の進行がひとたひ定着してしまえば、その進行を止めることはよりいっそう難しくなる。その結果、冷戦が「冷戦」の計画(Baruch Proposal/Baruch Plan)をした時望みがもてると思った。当時私は、その提案を良いと思ったし、その提案をした米国の動機も良いと思った。後にはそれは良くはないと思うようになった。しかし、それでもなお私は、冷戦がその進展をあの時待たせてくれていたことがあったと思っている。けれどもソ連はその提案を受け入れなかった。ソ連は、1949年8月に(ソ連として)最初の原爆を爆発させた。また、破壊力においてあるいは上品に言えばその防衛力において、米軍に同等になるために全力を尽くすであろうことは明らかであった。軍備競争は、それを促進するための根本的な方策が講じられないかぎり、避けられないものとなった。それが、1948年暮れに、核軍備競争をソ連に強制するためにアメリカがソ連に対し、即時開戦の脅威を与える(与えて核を崩壊させる)「矯正策を私が示唆した理由である。私は、このような方策をとる理由を、'常道'と核戦争'の付録にいくつかがあっている。私が1948年に抱いたこの見方についての主な弁解(理由)は、ソ連は西側の要求を受け入れる可能性がかなりあると当時私は考えていたということである。しかし、ソ連が核兵器を搭載した飛行機を種々なかなりの規模の部隊をもつようになってきた。その可能性もなくなった。私がこうした助言をしたことが、いままお持ち出されては私を非難する材料として使われている。共産主義国がそのような助言に反対する理由は理解しやすい。けれども私に反対するよくある非難は、私は平和主義者でもなかつた。ソ連を戦争で脅かすこと、指導しようとした。私は、平和主義者ではなく、ごくまれではあるが、戦争のうちに正当化されるものや、必要でさえあるものもあると信じていることを、いくら繰り返す言っても、何の効きもなしである。いるべきである。平和的手段ではまったく止められなくなるまで、明らかに悪い方向に引き進まれてきたことから、ある種の戦争は通常必要である。そして私を批判する者は、'冷戦'継続の結果として増大した諸悪(松田注)とえば、後戻りできないほど大規模な産糧組合動員が出来上がった。ソ連など、1948年暮れ、核戦争の脅威がますます私の助言が採用されていたならば、冷戦そのものと共に、回避することができたであろう諸悪について、考慮してはいない。思われる。もし私の意見が採用されていたとしても、その結果はあくまでも非難にすぎない。私は、自分の見方が私の見るかぎり、その助言をしたという事は、決して私にとって恥辱ではないし、また私の思想の「矛盾」を表わすものでも決してないのである。</p>	<p>ラッセル自身、自分のことを「平和主義者」と自称することがあった。しかしそれは、自然科学の分野で使われるのと同じ意味での「絶対、平和主義者」でももちろんない。自国の領土にヒトラーやスターリンの軍隊が侵略してきても戦わないような「絶対」を意味してない。だから「ラッセルは平和主義者なのに、たとえ相手がヒトラーだとしても、反感の立場を変えるのは間違っている(要諦だ! ぶれてはいない)。」といった非難はあたらなない。松元雅和氏は「平和主義とは何か 政治哲学で考える戦争と平和」(中公新書)で、ラッセルを「平和優先主義者」と規定して「大部分の人間は平和を優先する」といったチャチャを入れるのには関心しない。私も松元氏の考えに共感はいく。ただ、考えてみれば社会科学において「○○主義」というのは、「絶対的」な「○○主義」意味しない。それは、言葉尻をとらえて「大部分の人間は平和を優先する」といったチャチャを入れるのとは違う。松元氏も、最近の日本では「ぶれない」ことを自覚する政治家が少なくないが、間違っていないと気づいたらその間違いを認めて「ぶれてはいない」。</p>
<p>B3/C1-13</p>	<p>None the less, at the time I gave this advice, I gave it so casually without any real hope that it would be followed, that I soon forgot I had given it. I had mentioned it in a private letter and again in a speech that I did not know was to be the subject of dissection by the press. When, later, the recipient of the letter asked me for permission to publish it, I said, as I usually do, without consideration of the contents, that if he wished he might publish it. He did so. And to my surprise I learned of my earlier suggestion. I had, also, entirely forgotten that it occurred in the above-mentioned speech. Unfortunately, in the meantime, before this incontrovertible evidence was set before me, I had hotly denied that I had ever made such a suggestion. It was a pity. It is shameful to deny one's own words. One can only defend or retract them. In this case I could, and did, defend them, and should have done so earlier but from a fault of my memory upon which from many years' experience I had come to rely too unquestioningly. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-050.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-050.HTM</a></p>	<p>それにもかかわらず私は、その助言をした時は、それが実際に行われるという確信も全く持たずに、その助言を行なった。私は、その考えを私信に書き、また演説でも - どの演説だったか覚えていない - 述べたが、その演説は新聞によってあれこれと味味(解剖)される問題となった。後になつて、その手紙の宛先が、それを出版してしまつてほしいと私に頼んで来た。私は、いつかのように、その内容のことは少しも考えず、そのようになら出版してもかまわないと言つてやつた。それでその人は、出版をした。そして私は、自分が先になつて「示唆」をしたことに気が付いた。もうと早くそうすべきだった。長年の経験に基づく自分の記憶の誤りにより、あまりにも自分の記憶に信頼を置きすぎるようになっていたのである。</p>	<p>それにもかかわらず私は、その助言をした時は、それが実際に行われるという確信も全く持たずに、その助言を行なった。私は、その考えを私信に書き、また演説でも - どの演説だったか覚えていない - 述べたが、その演説は新聞によってあれこれと味味(解剖)される問題となった。後になつて、その手紙の宛先が、それを出版してしまつてほしいと私に頼んで来た。私は、いつかのように、その内容のことは少しも考えず、そのようになら出版してもかまわないと言つてやつた。それでその人は、出版をした。そして私は、自分が先になつて「示唆」をしたことに気が付いた。もうと早くそうすべきだった。長年の経験に基づく自分の記憶の誤りにより、あまりにも自分の記憶に信頼を置きすぎるようになっていたのである。</p>
<p>B3/C1-14</p>	<p>I had known Berlin well in the old days, and the hideous destruction that I saw at this time shocked me. From my window I could barely see one house standing. I could not discover where the Germans were living. This complete destruction was due partly to the English and partly to the Russians, and it seemed to me monstrous. Contemplation of the less accountable razing of Dresden by my own countrymen sickened me. I felt that when the Germans were obviously about to surrender that was enough, and that to destroy not only 135,000 Germans but also all their houses and countless treasures was barbarous. I felt the treatment of Germany by the Allies to be almost incredibly foolish. By giving part of Germany to Russia and part to the West, the victorious Governments ensured the continuation of strife between East and West, particularly as Berlin was partitioned and there was no guarantee of access by the West to its part of Berlin except by air. They had imagined a peaceful co-operation between Russia and her Western allies, but they ought to have foreseen that this was not a likely outcome. As far as sentiment was concerned, what happened was a continuation of the war with Russia as the common enemy of the West. The stage was set for the Third World War, and this was done deliberately by the utter folly of Governments. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-070.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-070.HTM</a></p>	<p>私は、昔のベルリンをよく知っていた。それで、この時見たベルリンの壊つたとするよう見えるも恐ろしい破壊(の光景)は、とてもショッキングだった。ほとんどの破壊の怒りは、立っている家はほとんど一軒も見あたらなかった。(また)ドイツ人が住んでいるところを見つけて出すこともできなかった。この徹底的な破壊は、一部は英国人(軍)が行い、一部はソ連人(軍)が行ったものであって、極悪非道な行為だと怒られた。(ベルリンの破壊よりも)ソ連の完全破壊(抹消)を熟視し、私は胸が無くなった。私は、ドイツが明らかに降伏しようとしていたのであるからそれで十分だと思つても、135,000人のドイツ人(注: ドレスデン市民)を殺害して、ドイツの遺産をほとんど無数の財産を破壊することは野蛮行為であると思つた。私は、連合国によるドイツの取り扱いはほとんど信じがたいほど愚かであると思つた。勝利をおさめた国々の政府は、ドイツの一部をロシアに与え、一部を西側に与えることによつて、特に、ベルリンが分割され、西側はベルリン(西側の)一部はベルリンにアクセスするは空路によるほか何の保証もなかった。東西南北の争いの継続を確かなものにした。彼らは、ロシアと西側の同盟国の間の平和的協力を想像していた。しかし、そんな結果は起こることもないことを予言すべきだった。感情面でも、実際に起こつたのは、西側諸国の共通の敵としてのロシアとの戦いの継続ということであった。第三次世界大戦のための舞台が準備された。そしてそれは、諸政府の全く愚かな行為によつて念入りなされたのであつた。</p>	<p>私は、昔のベルリンをよく知っていた。それで、この時見たベルリンの壊つたとするよう見えるも恐ろしい破壊(の光景)は、とてもショッキングだった。ほとんどの破壊の怒りは、立っている家はほとんど一軒も見あたらなかった。(また)ドイツ人が住んでいるところを見つけて出すこともできなかった。この徹底的な破壊は、一部は英国人(軍)が行い、一部はソ連人(軍)が行ったものであって、極悪非道な行為だと怒られた。(ベルリンの破壊よりも)ソ連の完全破壊(抹消)を熟視し、私は胸が無くなった。私は、ドイツが明らかに降伏しようとしていたのであるからそれで十分だと思つても、135,000人のドイツ人(注: ドレスデン市民)を殺害して、ドイツの遺産をほとんど無数の財産を破壊することは野蛮行為であると思つた。私は、連合国によるドイツの取り扱いはほとんど信じがたいほど愚かであると思つた。勝利をおさめた国々の政府は、ドイツの一部をロシアに与え、一部を西側に与えることによつて、特に、ベルリンが分割され、西側はベルリン(西側の)一部はベルリンにアクセスするは空路によるほか何の保証もなかった。東西南北の争いの継続を確かなものにした。彼らは、ロシアと西側の同盟国の間の平和的協力を想像していた。しかし、そんな結果は起こることもないことを予言すべきだった。感情面でも、実際に起こつたのは、西側諸国の共通の敵としてのロシアとの戦いの継続ということであった。第三次世界大戦のための舞台が準備された。そしてそれは、諸政府の全く愚かな行為によつて念入りなされたのであつた。</p>

★	B3/C1-15	<p>I thought the Russian blockade was foolish and was glad that it was unsuccessful owing to the skill of the British. At this time I was persona grata with the British Government because, though I was against nuclear war, I was also anti-Communist. Later I was brought around to being more favourable to Communism by the death of Stalin in 1953 and by the Bikini test in 1954; and I came gradually to attribute, more and more, the danger of nuclear war to the West, to the United States of America, and less to Russia. This change was supported by developments inside the United States, such as McCarthyism and the restriction of civil liberties.</p> <p>I was doing a great deal of broadcasting for the various services of the BBC and they asked me to do one at the time of Stalin's death. As I rejoiced mightily in that event, since I felt Stalin to be as wicked as one man could be and to be the root evil of most of the misery and terror in, and threatened by, Russia, I condemned him in my broadcast and rejoiced for the world in his departure from the scene. I forgot the BBC susceptibilities and respectabilities. My broadcast never went on the air.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-080.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-080.HTM</a></p>	<p>対ソ封じ込め政策は愚かなことだと思った。そしてそれが英国の外交手腕(のまさき)のせいでは成功しなかったのかもしれないと思った。その頃私は、政府に反対していたが共産主義にも反対していたので、英国政府にとって好ましい人物(persona grata)であった。しかし、私は1953年のスターリンの死及び(米軍による)1954年のビキニ水爆実験によって、以前より共産主義に好意的になった。そしてこの変化は、アメリカ国内の発展によって、アメリカ(合衆国)のせいにするようになっている。このような変化は、マッカーシズム(注:米国内の「赤狩り」)や「黒人などに対する」市民権の制限のような、米国内事情の進展によって裏付けられていた。</p> <p>私は当時BBC(英国放送協会)の権威ある放送サービス(部門)のために、非常に多くの放送番組に出演していた。BBCは、スターリンの死に際し、私に番組出演を依頼して来た。私は、スターリンは人間としてあり得る限り最も邪悪な存在であり、ロシア内に存するまたロシアによって脅威を与えられた、平和と恐怖の大部分の根拠地と思っていたので、出演依頼をとても嬉しい思い、放送番組でスターリンを非難し、彼が姿を消した(舞台から去った)ことを世界のために喜んだ。私は、BBCの放送コード(放送できる許容範囲)や品行方正きを忘れていた。それでは私の放送番組は自由に放送されなかった。</p>	
	B3/C1-16	<p>I proposed in these lectures to consider how we could combine that degree of individual initiative which is necessary for progress with the degree of social cohesion that is necessary for survival. This is a large subject, and the remarks that I shall make upon it here are no more than annotations on the lectures and sometimes expansions of subjects that have interested me since writing the book.</p> <p>The problem comes down, in my view, to the fact that society should strive to obtain security and justice for human beings and, also, progress. To obtain these it is necessary to have an established framework, the State, but, also, individual freedom. And in order to obtain the latter, it is necessary to separate cultural matters from the Establishment. The chief matter in which security is desirable now is security of nations against hostile enemies, and to achieve this a world government must be established that is strong enough to hold sway over national governments in international matters.</p> <p>Since no defence is possible for a single nation against a more powerful nation or a group of such nations, a nation's safety in international matters must depend upon outside protection.</p> <p>Aggression against a single nation by another nation or group of nations must be opposed by international law and not left to the willful initiative of some warlike State. If this is not done, any State may at any moment be totally destroyed. Changes in weapons may frequently alter the balance of power. It happened, for example, between France and England in the fifteenth century when the Powers ceased to defend castles and came to depend upon moving armies with artillery. This put an end to the feudal anarchy which had until then been common. In like manner, nuclear weapons must, if peace is to exist, put an end to war between nations and introduce the practical certainty of victory for an international force in any possible contest. The introduction of such a reform is difficult since it requires that the international Power should be so armed as to be fairly certain of victory in warfare with any single State.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-110.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-110.HTM</a></p>	<p>私は一連の演義の中で、人類の進歩のために必要な「各個人の創意(自発性)の度合い」と「社会が生き残るために必要な社会的結合の度合い」とをどのように(どのような割合で)結合させることができるか検討すべきだということをも提言した。これは大きな問題であり私自身もこの問題について述べようとするには、その連続演義に対する注釈に他ならないし、その本(Authority and the Individual)を執筆後に私の関心をひいた(関連する)諸問題について時々に行った演義にすぎない。私の考えでは、問題は、社会は人間的に安全と正義を確保し、そして進歩することを達成するために、努力しなければならない、ということに帰着する。そのためには、国家という一つの確立された体制をもつ必要であるとともに、「個人の自由」ももつ(保持する)必要がある。そして、個人の自由(後者)を確保するには、文化的諸問題を既存の体制(支配体制)から取り離す必要がある。現在、安全と正義を望まれる最も主要な問題は、敵国から国の安全を守ることであり、それを達成するためには、国際的な問題に關しては、諸国政府を支配するに足るだけの強力な世界政府が確立されなければならない。</p> <p>単一の国家が、その国家よりも強大な国ある国、国家集団から自国を防衛することは不可能であることから、国際的な問題における一國の安全は、外部の保護に依存しなければならない。一國に対する他国もしくは他の国家集団による侵略は、国際法によって阻止されなければならない。また一部の好戦国の勝手気ままな主権主張にまかされてはならない。もしこのことがなされなければ、いかなる国家もいかなる時においても、完全に破壊される可能性がある。</p> <p>武器(兵器)が変わることによって、しばしば力の均衡が壊れる可能性がある。例えば15世紀に、強国が城を守るのをやめ、移動する砲兵隊に取って代わった時、フランスと英国の間のバランスが崩れた。これが、それまで広く行き渡っていた封建主義時代の無政府状態(注: 国を超える)と無法状態であること。に終止符を打った。それは同時に、もし平和が存在せず、そして砲兵隊は、国家間の競争に終止符を打ち、いかなる争いも起こらうとも、国際的な勢力に對し、実際の勝利の確実性をもたらさなければならない(注: 同時に世界政府がなければならない)と主張していることに注意。(ただし)そのような改革を実現させるということは、容易なことではない。なぜなら、(唯一)国際的権力がいかなる一國との競争においてもかなり確実に勝利を得られるほどの軍力を備えておかなければならない、ということが必要とされるからである。</p>	
★	B3/C1-17	<p>... This is admitted when it is an enemy who is tried, as in the Nuremberg Trials. It was widely admitted that the Nuremberg prisoners would not have been condemned if they had been tried by Germans. The enemies of the German Government would have punished with death any soldier among themselves who had practised the sort of civil disobedience the lack of which among Germans they pleaded as an excuse for condemning Germans. They refused to accept the plea made by many of those whom they condemned that they had committed criminal acts only under command of those in superior authority. The judges of Nuremberg believed that the Germans should have committed civil disobedience in the name of decency and humanity. This is little likely to have been their view if they had been judging their own countrymen and not their enemies. But I believe it is true of friend as well as foe. The line between proper acceptable civil disobedience and unacceptable civil disobedience comes, I believe, with the reason for it being committed - the seriousness of the object for which it is committed and the profundity of the belief in its necessity.</p> <p>* unacceptable  <a href="http://eije.weblio.jp/content/unacceptable">http://eije.weblio.jp/content/unacceptable</a>      [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-160.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-160.HTM</a></p>	<p>このことは、ニュールンベルグ軍事裁判の時のように裁かれる者が敵側である場合は特にそうである。ニュールンベルグ裁判の刑事被告人も、もし彼らがドイツ人によって裁かれていたら、有罪の宣告を受けるようなことはなかったであろうと広く一般に認められた。ドイツ政府の裁判(注: 連合国側)は、ドイツ人の間人政府に対する不服従行為をしなかったことを(ドイツ人)有罪の宣告をする理由(弁解)として申し立てたが、もしそのような不服従行為をする兵士が自分たちの側(味方)にいたとしたらその者を(軍法会議にかけて)死刑にしてしまったことだろう。彼ら(兵士)が有罪の宣告をした多くはドイツ人は、そのような犯罪行為はただ上官の命で行ったに過ぎないと抗弁したが、彼らはその抗弁を受けつけようとしなかった。ニュールンベルグ裁判の判事たちは、ドイツ人たちはドイツ政府に対する不服従行為を人間性の品位と人運の名において行らざるべきであったという信念を持っていて、しかしもし彼らが自分たちの国を裁いているのであって、敵国人を裁いているのではなかったとしたら、そういうふうには考えなかったであろう。しかし私は、味方であろうと敵であろうと、そのこと(敵には厳しく、味方には優しいこと)は道理であると思える。私は私自身も、これによれば、政府に対する不服従行為でも、それが認められるべき行為であるか、認められない行為であるかは、いかなる理由で行なわれたかのその理由によって、即ち、それが行なわれたその目的の重大さ及びその行為の必要性に対する愚念の深さによって決まるのである。</p> <p>もし人類が生き残るべきであるならば、科学競争を引き起こす力を最高位の権威のある国家(supreme State)だけに集中してもたせなければならないだろう。しかしこういって考えた人間精神の習性に相容れないものであるため、現在のところ、大多数の人々は、類絶の危険をおかす方を好むだろう。これは現代(我が)の最大の危険である。この危機に邁んで世界政府の樹立が間に合うかどうかは、現代における最大の問題である。</p>	
	B3/C1-17/18	<p>If mankind is to survive, the power of making scientific war will have to be concentrated in a supreme State. But this is so contrary to men's mental habits that, as yet, the great majority would prefer to run the risk of extermination. This is the supreme danger of our age. Whether a World Government will be established in time or not is the supreme question.</p> <p>The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969, chap.1: Return to England.  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-210.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-210.HTM</a></p>		

B3/C1-18	<p>Even then, in the relatively early days of the struggle against nuclear destruction, it seemed to me almost impossible to find a fresh way of putting what I had already, I felt, said in so many different ways. My first draft of the broadcast was an anaemic product, pulling all the punches. I threw it away at once, girded myself up and determined to say exactly how dreadful the prospect was unless measures were taken. The result was a distilled version of all that I had said theretofore. It was so light packed that anything that I have since said on the subject can be found in it at least in essence. But the BBC still made difficulties, fearing that I should bore and frighten many listeners. They asked me to hold a debate, instead, with a young and cheerful footballer who could offset my grim forebodings. This seemed to me utterly frivolous and, showed so clearly that the BBC Authorities understood nothing of what it was all about that I felt desperate. I refused to accede to their pleadings. At last, it was agreed that I should do a broadcast in December by myself. In it, as I have said, I stated all my fears and the reasons for them. The broadcast, now called 'Man's Peril', ended with the following words:</p> <p>'There lies before us, if we choose, continual progress in happiness, knowledge, and wisdom. Shall we, instead, choose death, because we cannot forget our quarrels? I appeal, as a human being to human beings: remember your humanity, and forget the rest. If you can do so, the way lies open to a new Paradise; if you cannot, nothing lies before you but universal death.'</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 2: At home and abroad, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB32-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB32-150.HTM</a></p>	<p>核兵器による破壊に対する「闘い」の比較的初期のその時でさえ、私が既に非常に多様な方法で発言したと懸っていた事柄について新しい表現方法を発明しようとしたことはほとんど不可能のように思われた。私の最初の放送原稿は、生氣のないものであり、力がまったく入っていないものであった。私は直ちにその原稿を捨て去り、身を引き締め、もし対策（方策）がとられなければ「将来の見通しは」いかに恐ろしいものであるかを精確に述べる決意をした。その結果は、私がそれまでに述べてきたこと全てを精選・洗練したもので（蒸留し余分なものを一切とりざつたもの）となった。その新しい原稿には非常にぎつしり詰め込んだため、その問題（核兵器による破壊）について私がそれまで発言していたよりも、少なくともそれらのエッセンスは、見つけ出すことができる。しかしBBC（英国放送協会）は、それでもなお私が多くの（BBCラジオ）聴取者を退屈させたりビョクリさせたりするのではないかと恐れ難色を示した。BBCは、その代わりとして、私のそつとするような予感を軽減してくれる、若くそして陽気なサッカー選手（注：英国では football といえはサッカーのこと）と番組でディベート（対論）するよう、依頼して来た。これは私にはまったくくまじめな態度だと思われることも、BBC当局は私が絶望を感しているものがあったい何であるがまったく理解していないということを明確に示していた。私はBBCの申し開きに同意することを拒否した。（そして）とうとう彼らは、私が12月(1954年)に私が単独で放送番組で話すことに同意した。その放送で私は、前述のように、私が人類の運命について抱いている恐れのすべてとそのような恐れを抱く理由について述べた。現在「人類の危機（Man's Peril）」と呼ばれているその放送を、私は次の言葉で締めくくった。</p> <p>「もし我々が選ぶならば、我々の前途には、幸福、知識、知恵における絶えざる進歩が備わっている。我々は、痛めつけられなければならない、それらの代りに死を選ぶだろう。私は、人類（同胞である全ての人間）に対し、一人の人間として訴える。「あなたがたの人間性を思い出し、それ以外のことを忘れよう。それができれば、新しい天国への道は開かれていく。しかしそれができなければ、未来には全体的破壊（人類の絶滅）以外ないだろう。」</p> <p>問題は、その仕事（科学者会議の開催のための準備作業）をどのように遂行したらよいか、その様な会議をどこで開催したらよいか、それからとりわけ開催のための財源の裏づけをどうすれば得られるか、ということであった。私は、この会議はいかなる既成の団体の主義・主張にも縛られるべきではなく、完全に中立かつ自立したものであるべきだと確信していた。そして私以外の他の計画立案者も同様に考えた。けれども私たちは、英国では、仮に可能としても、自分から進んでその会議開催のために資金を提供しようとする者は個人にしては団体にして一人も発見できなかった。また、紐づきでない自発的な支援者を見つけることはまったく不可能であった。そのすこし前、私はアメリカ在住のサイラス・イートン（Cyrus Eaton）から、私になそうとしていることに賛成する温かい手紙を受け取っていた。彼は資金援助を申し出てくれていた。ギリシアの海運界の大立者アリステリス・オナシス（Aristotle Onassis、1906年-1975年3月15日）もまた、もし会議をモントナ、カルロで開くならば資金援助をすと申し出ていた。サイラス・イートンは今度は、もしその会議を自分の出生地である（カナダの）ノヴァ・スコシアのバグウォッシュ村で開くという条件で自分の申し出を確約した。彼は以前この会議と性質をまったく異にしているわけではない（一や似ている）他の異なった種類の会議をそこで何度か開催したことがあった。私たちはイートンの示した条件に同意した。</p>		
B3/C1-19	<p>The problem was how the work was to be carried out and where such a conference should be held and, above all, how it could be financed. I felt very sure that the conference should not be bound by the tenets of any established body and that it should be entirely neutral and independent, and the other planners thought likewise. But we could find no individual or organisation in England willing, if able, to finance it and certainly none willing to do so with no strings attached. Some time before, I had received a warm letter of approbation for what I was doing from Cyrus Eaton in America. He had offered to help with money. Aristotle Onassis, the Greek shipping magnate, had also offered to help if the conference were to take place at Monte Carlo. Cyrus Eaton now confirmed his offer if the conference were to be held at his birthplace, Pugwash in Nova Scotia. He had held other sorts of conferences there of a not wholly dissimilar character. We agreed to the condition.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 2: At home and abroad, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB32-320.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB32-320.HTM</a></p>	<p>問題は、その仕事（科学者会議の開催のための準備作業）をどのように遂行したらよいか、その様な会議をどこで開催したらよいか、それからとりわけ開催のための財源の裏づけをどうすれば得られるか、ということであった。私は、この会議はいかなる既成の団体の主義・主張にも縛られるべきではなく、完全に中立かつ自立したものであるべきだと確信していた。そして私以外の他の計画立案者も同様に考えた。けれども私たちは、英国では、仮に可能としても、自分から進んでその会議開催のために資金を提供しようとする者は個人にしては団体にして一人も発見できなかった。また、紐づきでない自発的な支援者を見つけることはまったく不可能であった。そのすこし前、私はアメリカ在住のサイラス・イートン（Cyrus Eaton）から、私になそうとしていることに賛成する温かい手紙を受け取っていた。彼は資金援助を申し出てくれていた。ギリシアの海運界の大立者アリステリス・オナシス（Aristotle Onassis、1906年-1975年3月15日）もまた、もし会議をモントナ、カルロで開くならば資金援助をすと申し出ていた。サイラス・イートンは今度は、もしその会議を自分の出生地である（カナダの）ノヴァ・スコシアのバグウォッシュ村で開くという条件で自分の申し出を確約した。彼は以前この会議と性質をまったく異にしているわけではない（一や似ている）他の異なった種類の会議をそこで何度か開催したことがあった。私たちはイートンの示した条件に同意した。</p>		
B3/C1-20	<p>Another disappointing TV occasion was a BBC discussion of nuclear matters by Mrs Roosevelt, Lord Boothby, Mr Gaitskell, and myself. I was horrified to hear Mrs Roosevelt enunciate the belief that it would be better, and that she would prefer, to have the human race destroyed than to have it succumb to Communism. I came away thinking that I could not have heard aright. Upon reading her remarks in the next morning's papers I had to face that fact that she really had expressed this dangerous view.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 3: Trafalgar Square, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-110.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-110.HTM</a></p>	<p>・・・もう一つの、失望を抱かせたテレビ関係の出来事は、ルーズヴェルト夫人（米大統領夫人）、ブライス・ブービー、ゲイツケル氏（英国労働党首）と私の4人で、核問題に関して論じあった、BBCの番組（注：Prospects of Mankind 視聴—ダウンロードに少し時間がかかります！）であった。ルーズヴェルト夫人は、共産主義に屈服するよりは人類を被滅させた方がましであり、彼女自身その方を好むという言葉を述べたが、それを見て私はそつとした。私は正確に聞き取らなかったのかも知れないと思いつつスタジオを去った。しかし、翌朝の新聞で彼女の言ったことを読み、彼女が実際にこの危険な見方を述べたという事実と直面せざるを得なかった。</p>		

<p>B3/C1-21</p>	<p>American philosopher named Sidney Hook at this time that was one which both of us found difficult to conduct on logical lines. He was a Menshevik who had become apprehensive of Russia ruling the world. He thought this so dreadful that it would be better the human race should cease to exist. I combated this view on the ground that we do not know the future, which, so long as Man survives, may be immensely better than the past. I instanced the times of Genghiz Khan and Kublai Khan, separated by only a generation, but one horrible, the other admirable. But there were plenty of contrary instances that he could have adduced, in view of which a definite decision was impossible. I maintained, however, that any chance of a better world depended upon hope, and was on this account to be preferred. This was not a logical argument, but I thought that most people would find it convincing. Several years later, Hook again attacked me publicly, but this time in such a manner that no comment from me was necessary. It amused me, however, that for his defence of 'freedom' and his attack on my views on Vietnam, he chose as his vehicle a journal later admitted to be financed by the Central Intelligence Agency [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 3: Trafalgar Square, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-120.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-120.HTM</a></p>	<p>その頃、私は、シドニー・フック(Sidney Hook, 1902-1989)という名前の米国の哲学者と論争を行った。両者ともこの論争において、確信を強めること困難なということがわかった。彼はメンシェビキ(注：ロシア社会民主労働党が分裂して形成された、社会主義右派)であり、ロシアが世界を支配するのではないかと恐れるようになっていた。彼はそうならば非常に恐ろしいと考えたので、それよりもむしろ人類は滅んでしまった方がましだと考えた。私は、将来のとはわからないし、人類が生きのびれば(いったんロシアが世界を制覇したとしても)過去におけるよりはるかに良くなるかも知れない(可能性がある)という理由から、彼のそうした見方と戦った。私はチンギス・カン(注：モンゴル帝国初代皇帝、1162?-1227; 在位は1206-1227)とクビライ・カン(注：モンゴル帝国第5皇帝、元の初代皇帝、1216-1294、在位1260-1294)の時代を例に引いた。両者の統治期間の、たたりはわずかに一代(約三半世紀)のちがいにすぎなかったが、一方(前者)はまことに恐ろしく、他方(後者)は称賛に値した。けれども彼が引用することの出来た反例も沢山あった。それを考慮すると決定的な結論を下すことは不可能だった。けれども、私は、より良い世界へのいかなるチャンスも希望を持ってこそ見出せるのであり、それゆえ、希望を持つ方を選択すべきであると主張した。もちろんこれは論理的な議論とはいえなかったが、大部分の人々がそのように考えることが説得力があると思つたらうと私は考えた。数年後、フックは我々公然とを攻撃した。しかしこの時は、私が何もコメントする必要がないうなし方で攻撃がなされた。けれども、'自由'を防衛し、フエトナムに関する私の見解を攻撃するために、彼がその手段としてCIA(米中央情報局)が資金を提供していたことが後に認められた雑誌「New Leader」のこの号を選んで(とどろき)面白かった。</p>	<p>(原著注：New Leader 誌は、中国に反対する論文を掲載することで蒋介石政府から三千ドル受け取った。同誌はその後、「詐欺の犠牲」、世界の共産主義者の報復に関する研究」という本の出版準備をし、そして米政府から、秘密裏に一万二千ドルの支払いを受けた。CIA(米中央情報局)が米国会議編出小委員会に、図書出版のための支出額を9万ドルから19万5千ドルに増額することを要求した時、CIAは立法府議員連に対して、その資金は、「CIA自身の活動の明細を述べるための」、また「強力な反共主義の内容を有するための」図書(の出版)に使われることを確言した。「ニューヨーク・タイムズ紙」1964年5月3日付より)</p>		
<p>B3/C1-22</p>	<p>... In December, 1959, I had read Neville Shute's On the Beach and I attended a private viewing of its film. I was cast down by the deliberate turning away it displayed from the horrible, harsh facts entailed by nuclear war - the disease and suffering caused by poisoned air and water and soil, the looting and murder likely among a population in anarchy with no means of communication, and all the probable evils and pain. It was like the prettified stories that were sometimes told about trench warfare during the First World War. Yet the film was put out and praised by people who meant to make the situation clear, not to belittle the horror. I was particularly distressed by the fact that I myself had praised the film directly after seeing it in what I came to think the mistaken opinion that a little was better than nothing. All that sort of thing does, I came to think, is to make familiar and rob of its true value what should carry a shock of revulsion. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3, chap. 3:Trafalgar Square, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-130.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-130.HTM</a></p>	<p>・・・私はネビル・シュートの「渚にて」を読み、(その後)その映画の試写会に出席した。その映画は核戦争に(必然的に伴う)恐ろしく残酷な事実から、即ち汚染された空気がや土壌によって引き起こされる病気や苦痛(通信手段のまったくない無政府状態において住民の間に起こりそうな時疫や殺人、また、起こる可能性のあるあらゆる災害や苦しみ)から、故意に目をそらすようとしていたので、私はがっかりさせられた。その映画は第一次世界大戦中の重傷者について時折語られていたところの美化された物語に似ていた。しかもなお、その映画は公開上映され、核戦争の恐怖を小さくみせようとすることなく、現状をはつきりさせようと思う人々から大いに賞賛された。私自身もその映画を見た直後は、少しでもよいところがあればよかったくないよりましだという後に間違っていると思うようになった意見のもと賞賛した事実によって、私は非常に苦しめられた。その様なことは全て、電撃的な嫌悪感をもたらすべきことについてありふれたことのような感じをもたせるとともに、そのような嫌悪感が持つ真の価値を剥ぎ取ってしまうと私は考えるようになった。(1961年)8月6日の「ヒロシマ・デー」に、百人委員会は2つの集会を開く準備をした。(午前中は)ロンドンの官庁街ホワイトホールにある大戦戦没者記念碑(注：西大戦が対象)に花輪を献げる儀式であり、午後はマーブル・アーチ(Marble Arch)のヴィクトリア女王を記念した大理石の門)を行なわれる演説会であった。前者は厳粛に行われた。我々は広島島の原爆(投下)の状況を、一般の人々に、思い起こさせたいと願った。我々はまた英国人の戦没者を追悼すること(注：commemorateなので、「追悼する」というよりは、「記念する」の方がより妥当な訳か?)によって、彼らの死を無駄にさせないことが現在生きている者の責務であるといふことに、一般の注意を喚起できるかもしれないと考えた。我々は午後の演説においてこの見解を支持したと思った。けれども、(英国人の)多くの人々にとっては、広島や長崎原爆で亡くなった者と第二次大戦で日本人と戦って亡くなった者とをひとまとめにとり扱うことは冒濫的行為であった。これと同じ考えをもつ人々の多くが、(独立戦争で英国と戦った)ワシントン将軍や(第二次ボア戦争のとき英国と戦った)スマッツ将軍の銅像が社会的榮譽の公的英誉の場所を与えられることに反対して対峙するかどうかは疑問である。</p>	<p>「無いより(少しでも)有ったほうがまし」という考え方は一見いいようで無いよりも悪い場合がおおおに於てある、ということ。</p>		
<p>B3/C1-23</p>	<p>On August 6th, 'Hiroshima Day', the Committee of 100 arranged to have two meetings: a ceremony in the meeting of laying a wreath upon the Cenotaph in Whitehall and, in the afternoon, a meeting for speeches to be made at Marble Arch. The former was carried out with dignity. We wished to remind people of the circumstances of the nuclear bomb at Hiroshima. We also thought that, in commemorating the British dead, we might call attention to the fact that it was up to the living to prevent their deaths from going for nothing. We hoped in the afternoon's speeches to support this point of view. To many people, however, to bracket the deaths at Hiroshima and Nagasaki with the deaths of those who fought the Japanese in the Second War was blasphemous. It is doubtful if many of these same people object to the statue of General Washington or of General Smuts being given places of public honour. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3, chap. 3:Trafalgar Square, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-210.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-210.HTM</a></p>	<p>(原著注：New Leader 誌は、中国に反対する論文を掲載することで蒋介石政府から三千ドル受け取った。同誌はその後、「詐欺の犠牲」、世界の共産主義者の報復に関する研究」という本の出版準備をし、そして米政府から、秘密裏に一万二千ドルの支払いを受けた。CIA(米中央情報局)が米国会議編出小委員会に、図書出版のための支出額を9万ドルから19万5千ドルに増額することを要求した時、CIAは立法府議員連に対して、その資金は、「CIA自身の活動の明細を述べるための」、また「強力な反共主義の内容を有するための」図書(の出版)に使われることを確言した。「ニューヨーク・タイムズ紙」1964年5月3日付より)</p>			

★	B3/C1-24	I had become so tired by the folly of some of the leading members of the Committee of 100 during the events of September and by the growing dissipation of the Committee's policies that, early in January, I resigned from the Main Committee in London. I did not wish, however, to go into these reasons in my public resignation. I based it upon the equally valid and conclusive reason that my increasing absences in Wales prevented me from participating usefully in the work of the Main Committee. I still have great sympathy with the early aims and actions of the Committee, and I should support any recrudescence of them if they seemed to me to stand any chance of success. Mass civil disobedience still seems to me one of the most effective ways of attacking present international policies which remain as bad as they were then, if not worse. The British Government, meanwhile, had its own plans for what to do in the event of nuclear war. What these plans were we learned, in part, from an organisation which called itself 'Spies for Peace'. This organisation had succeeded in ascertaining the secret plans of Authority to be put into force on the outbreak of war. Britain was to be divided into a number of regions, each with its own government, each with autocratic power, each composed of a pre-arranged corps of officials who were to live in supposed safety in underground 'Regional Seats of Government' and decide (so far as the enemy allowed) what was to be done for the rest of us, and, in particular, what was to be done about fall-out if and while we remained alive. It was feared that possibly the prospect of such measures might not please the populace, and must therefore be kept secret. 'Spies for Peace' had discovered some of the documents involved, and were anxious to publish them. They had no funds, and appealed to me. I gave them £50 with my blessing. As soon as possible the documents were published, and copies were distributed among the Aldermaston marchers. Unfortunately (as I felt) the leaders of CND were shocked that secret methods should be employed by pacifists. They did what they could to impede the spread of knowledge which the 'Spies' had sought to secure. A fresh batch of documents which they had secured was taken to the editor of a leading pacifist journal under the impression that he would publicise their information. But he, horrified by the disclosures and the retribution their publication would undoubtedly call down, sent the documents to the mother of one of the 'Spies' and she, fearing a police raid, burnt them. So died our hope of learning Government plans for governmental salvation and the succour of such members of the public as might be allowed to live. This bitter blow to the clarification of our position and to a great impetus to work for peace was dealt by well-meaning and not unknowledgeable pacifists. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3, chap. 3:Trafalgar Square, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-390.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-390.HTM</a>	その間に英国政府は、核戦争が(万一)起こったらどうするかということについて独自の計画を立てていた。その計画が独自に計画としてあるか、その計画についてわれわれは「平和のためのスパイ(Spies for Peace)」と自称する組織から知った。この組織は、戦争が勃発したとき実行される政府当局の秘密計画を突き止めることに成功していた。(それによると)英国は多々の地域に分かれ、各地域が独自の政府をもつ。各政府が独裁的権力をもち、各政府は事前に手配された官公吏の一派(彼等は地下の地方政府所在地(Regional Seats of Government))と呼ぶところで安全に生活すると想定されている。--から編成されてあり、我々のうちの生き残りをどうするかということ(彼等の許しのある限り)決めねばならぬことが生じていたとしたら、原水爆の放射能をどう処理するかを決めるということになっていた。多分そのような方法がとられることになるかもしないという予想は一般大衆を驚はせるものではなく、それゆえ秘密は保持されなければならないと考えられた。この「平和のためのスパイ」組織は、の秘密計画の関連文書は何点か発見しており、それを出版したがっていた。(しかし)彼らは資金をもっていなかった。そこで私に訴えてきた。私は彼らにあげるつもりで50ポンドを選んだ。可能な限り早急にその文書は出版され、オルダスターマストン平和行進に参加した人々の間に配布された。	不幸にも(そう私は感じたが)、CNDの幹部たちは、秘密の手段が平和主義者たちによってとられたことに衝撃を受けた。彼らは「平和のためのスパイ」が手にいれようとしていた情報(知識)が広まるのを妨げることでできることは何でもやった。「平和のためのスパイ」が手に入れた新しい一まとめの文書が、発表されるだろうという思いのもと、平和主義の立場に立つ代表的な新聞の主筆に選ばれた。しかし、彼はそれらの文書を「秘密」として発表し、また発表によって疑い深い罰を受けることを恐れた文書を「平和のためのスパイ」のメンバーの母親に送った。そして、その母親は、警察の捜索を恐れてその文書を燃やしてしまっした。そのようにして、政府による救助計画及び生き残ることを許さる種族の援助(の内容)について知ろうとした私の望みは絶たれてしまった。我々の立場を明確にし、平和活動を促進しようとすることに對する手痛い一撃が、よい意味での、また無知でもない平和主義者たちによって加えられたのである。		
	B3/C1-25	The nuclear peril represented a danger which was likely to last as long as governments possessed nuclear weapons, and perhaps even longer if such destructive objects get into private hands. At first I imagined that the task of awakening people to the dangers should not be very difficult. I shared the general belief that the motive of self-preservation is a very powerful one which, when it comes into operation, generally overrides all others. I thought that people would not like the prospect of being fried with their families and their neighbours and every living person that they had heard of. I thought it would only be necessary to make the danger known and that, when this had been done, men of all parties would unite to restore previous safety. I found that this was a mistake. There is a motive which is stronger than self-preservation: it is the desire to get the better of the other fellow. I have discovered an important political fact that is often overlooked, as it had been by me; people do not care so much for their own survival - or, indeed, that of the human race - as for the extermination of their enemies. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3, chap. 4:The Foundation, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-010.HTM</a>	核(兵器)の危険は、各国政府が核兵器を保持する間継続し、そのような危険(な状態)を、また、もしそのような破壊力のある物体(大量破壊兵器)が個人の手に渡ればもつと長いに及ぶような危険(な状態)を表現していた。最初私は一般の人々をそうした危険に自覚させる仕事は非常に困難な仕事だとは思っていたが、私は一般の進歩と同様に、自己保存の本能は非常に強力なものであって、それが働けば通常他の全てのものを圧倒すると信じていた。敵の人間は、自分の家族や隣人たちとその消息について聞きたいことのあるまで、待っている。そして、この間に核兵器によって(壊かれてしまう)という予想を好まないだろうと私は考えた。そして、核の危険を一般に知らせることだけが必要であり、知らせ終えればいかなる党派に属する人でも以前の安全を回復するために結束するだろう、と私は考えた。ところがその間に聞きたいことがなくなった。自己保存の本能よりもっと強い本能があるのである。それは他人間よりも優越したいという欲望である。私は-私自身も見過ごしていたことであるが-しばしば見過されているある重要な政治的事実があることに気がついた。即ち、人々は自分たちが生き残ることを-あるいは、事業はそれどころか人類の生き残ることを-自分の敵を絶滅させることほど心配しないという事実である。	私は最初に、理性に訴える方法を試みた。即ち、核兵器の危険をバスター(黒死病)と比較した。ただし、それは「とにかくそのとおりだ」と言っただけで、しかも何もなかった。特定の集団に注意喚起を試みた。その結果は限定的ではあったが、社会一般や各国政府に対してはほとんど効果はなかった。次に私は、大規模なデモ行進による大衆アピールを試みた。それがこう言った。このようなデモ行進は迷惑だ！その後、政府に対する一般市民の不服従運動という方法を試みた。しかしその方法もまた成功しなかった。こうした方法は全て現在でも行われており、私はそのごとくを、実行可能でさえあれば支持する。しかしそれらは、部分的な効果しかもたらさないであろう。時が来ると、即ち、人々は自分たちが生き残ることを、双方同時にアピールするという新しい試みを行っている。私は生きているかぎり、その探索を続けるだろう。そして、きっと、その仕事を他の人たちに託してもらわなければならないだろう。しかし、人類が自らを保存する価値があると考えるかどうかは、依然として疑問のままである。		
★	B3/C1-26	I tried first the method of reason: I compared the danger of nuclear weapons with the danger of the Black Death. Everybody said, 'How true,' and did nothing. I tried alerting a particular group, but though this had a limited success, it had little effect on the general public or Governments. I next tried the popular appeal of marches of large numbers. Everybody said, 'These marchers are a nuisance'. Then I tried methods of civil disobedience, but they, too, failed to succeed. All these methods continue to be used, and I support them, all when possible, but none has proved more than partially efficacious. I am now engaged in a new attempt which consists of a mixed appeal to Governments and public. So long as I live, I shall continue the search and in all probability I shall leave the work to be continued by others. But whether mankind will think itself worth preserving remains a doubtful question. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969, chap.4: The Foundation <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-010.HTM</a>	核(兵器)の危険は、最初に、理性に訴える方法を試みた。即ち、核兵器の危険をバスター(黒死病)と比較した。ただし、それは「とにかくそのとおりだ」と言っただけで、しかも何もなかった。特定の集団に注意喚起を試みた。その結果は限定的ではあったが、社会一般や各国政府に対してはほとんど効果はなかった。次に私は、大規模なデモ行進による大衆アピールを試みた。それがこう言った。このようなデモ行進は迷惑だ！その後、政府に対する一般市民の不服従運動という方法を試みた。しかしその方法もまた成功しなかった。こうした方法は全て現在でも行われており、私はそのごとくを、実行可能でさえあれば支持する。しかしそれらは、部分的な効果しかもたらさないであろう。時が来ると、即ち、人々は自分たちが生き残ることを、双方同時にアピールするという新しい試みを行っている。私は生きているかぎり、その探索を続けるだろう。そして、きっと、その仕事を他の人たちに託してもらわなければならないだろう。しかし、人類が自らを保存する価値があると考えるかどうかは、依然として疑問のままである。	私は最初に、理性に訴える方法を試みた。即ち、核兵器の危険をバスター(黒死病)と比較した。ただし、それは「とにかくそのとおりだ」と言っただけで、しかも何もなかった。特定の集団に注意喚起を試みた。その結果は限定的ではあったが、社会一般や各国政府に対してはほとんど効果はなかった。次に私は、大規模なデモ行進による大衆アピールを試みた。それがこう言った。このようなデモ行進は迷惑だ！その後、政府に対する一般市民の不服従運動という方法を試みた。しかしその方法もまた成功しなかった。こうした方法は全て現在でも行われており、私はそのごとくを、実行可能でさえあれば支持する。しかしそれらは、部分的な効果しかもたらさないであろう。時が来ると、即ち、人々は自分たちが生き残ることを、双方同時にアピールするという新しい試みを行っている。私は生きているかぎり、その探索を続けるだろう。そして、きっと、その仕事を他の人たちに託してもらわなければならないだろう。しかし、人類が自らを保存する価値があると考えるかどうかは、依然として疑問のままである。		
★全体	B3-2 R-E宣言 B3-2 R-E01 B3-2 R-E02	The Russell-Einstein Manifesto, issued in London, 9 July 1955 <a href="http://russell-j.com/RUSSELL-EINSTEIN.HTM">http://russell-j.com/RUSSELL-EINSTEIN.HTM</a> IN the tragic situation which confronts humanity, we feel that scientists should assemble in conference to appraise the perils that have arisen as a result of the development of weapons of mass destruction, and to discuss a resolution in the spirit of the appended draft. We are speaking on this occasion, not as members of this or that nation, continent, or creed, but as human beings, members of the species Man, whose continued existence is in doubt. The world is full of conflicts; and, overshadowing all minor conflicts, the titanic struggle between Communism and anti-Communism.	ラッセル=アインシュタイン宣言(1955年7月9日発表) 人類が直面している悲劇的な状況の中、科学者による会議を召集し、大量破壊兵器の開発によって生ずる危機について評価し、ここに添えられた草案の精神において(最後にあげた)決議について討議すべきである。我々科学者は懸念している。 この機会に発言しているのは、特定の国民や大陸や信条の一派としてではなく、存続が危ぶまれている人類、即ち「ヒト」という種の一員としてである。世界は紛争に満ちている。そうして、全ての小規模な紛争の上に影を投げかけているのは、共産主義と反共産主義との巨大な戦いである。	ラッセル=アインシュタイン宣言(1955年7月9日発表) 人類が直面している悲劇的な状況の中、科学者による会議を召集し、大量破壊兵器の開発によって生ずる危機について評価し、ここに添えられた草案の精神において(最後にあげた)決議について討議すべきである。我々科学者は懸念している。 この機会に発言しているのは、特定の国民や大陸や信条の一派としてではなく、存続が危ぶまれている人類、即ち「ヒト」という種の一員としてである。世界は紛争に満ちている。そうして、全ての小規模な紛争の上に影を投げかけているのは、共産主義と反共産主義との巨大な戦いである。		

B3-2 R-E03	Almost everybody who is politically conscious has strong feelings about one of more of these issues, but we want you, if you can, to set aside such feelings and consider yourselves only as members of a biological species which has had a remarkable history, and whose disappearance none of us can desire.	政治的な関心の高い人々のほとんどは、こうした問題のいずれかに強い感情を抱いている。しかしできるならば、そのような感情から離れて、すばらしい歴史を持ち、私たちの唯一人としてその消滅を望むべきでない生物学的上の種の成員として反省してもらいたい。			
B3-2 R-E04	We shall try to say no single word which should appeal to one group rather than to another. All, equally, are in peril, and, if the peril is understood, there is hope that they may collectively avert it.	私たちは、一方の陣営に対し、他の陣営に対するよりも強く訴えるような言葉は、言っても使わないように心がけよう。すべての人がひとしく危険にさらされておられ、この危機が理解されれば、全ての陣営がその危険を回避する望みがある。			
B3-2 R-E05	We have to learn to think in a new way. We have to learn to ask ourselves, not what steps can be taken to give military victory to whatever group we prefer, for there no longer are such steps; the question we have to ask ourselves is: what steps can be taken to prevent a military contest of which the issue must be disastrous to all parties?	私たちは新たな思考法を学ぶ必要がある。私たちが自問しなければならないのは、私たちがいずれの陣営を好むも自分の好む陣営に軍事的勝利をもたらすためのいかなる手段(処置、方法)をとればよいかということではない。なぜならそうした手段はもはや存在しないからである。私たちが自問すべきは、双方に悲惨な結末をもたらすにちがいない軍事的な争いをいかなる手段をとれば防止できるかである。			
B3-2 R-E06	The general public, and even many men in positions of authority, have not realized what would be involved in a war with nuclear bombs. The general public still thinks in terms of the obliteration of cities. It is understood that the new bombs are more powerful than the old, and that, while one A-bomb could obliterate Hiroshima, one H-bomb could obliterate the largest cities, such as London, New York, and Moscow.	一般の人々、そして権威ある地位にある多くの人々でさえも、核戦争によっていかなる事態が発生するか、未だ認識していない。一般の人々はいまでも都市が抹殺されるくらいにしか考えていない。(たしかに)新型爆弾が旧型爆弾よりも強大だということ、原子爆弾なら1発で広島を抹殺できる(た)に対し、水爆なら1発でロンドンやニューヨークやモスクワのような巨大都市を抹殺できるだろうことは、一般に理解されている。			
B3-2 R-E07	No doubt in an H-bomb war great cities would be obliterated. But this is one of the minor disasters that would have to be faced. If everybody in London, New York, and Moscow were exterminated, the world might, in the course of a few centuries, recover from the blow. But we now know, especially since the Bikini test, that nuclear bombs can gradually spread destruction over a very much wider area than had been supposed.	水爆戦争になれば大都市は消滅するだろうことは疑問の余地がない。しかしこれは、私たちが直面しなければならない小さな悲惨事の1つである。仮にロンドン、ニューヨーク、モスクワのすべての市民が絶滅したとしても、2、3世紀のあいだには世界は打撃から回復するかもしれない。しかしながら今や私たちは、とくにその実験が、核爆弾はこれまで想像されていたよりもはるかに広範囲にわたってしだいに破壊力を拡大できることを理解している。			
B3-2 R-E08	It is stated on very good authority that a bomb can now be manufactured which will be 2,500 times as powerful as that which destroyed Hiroshima. Such a bomb, if exploded near the ground or under water, sends radio-active particles into the upper air. They sink gradually and reach the surface of the earth in the form of a deadly dust or rain. It was this dust which infected the Japanese fishermen and their catch of fish. No one knows how widely such lethal radio-active particles might be diffused, but the best authorities are unanimous in saying that a war with H-bombs might possibly put an end to the human race. It is feared that if many H-bombs are used there will be universal death, sudden only for a minority, but for the majority a slow torture of disease and disintegration.	ごく信頼できる権威筋によると、現在では広島を破壊した爆弾の2500倍も強力な爆弾を製造できるとある。もしそのような爆弾が地上近くまたは水中で爆発すれば、放射能をもった粒子が上空へ吹き上げられる。そしてそれらの粒子は、死の灰または雨(いわゆる「黒い雨」)の形で徐々に落下してきて、地球の表面に降下する。日本漁師とその漁獲物を汚染したのは、この死の灰であった。そのような死をもたらす放射能に汚染された粒子がどれほど広く拡散するのかわからない。しかし最も権威ある人々は一致して水爆による戦争は実際に人類に終末をもたらす可能性があることを指摘している。もし多数の水爆が使用されるならば、全般的な死滅、即死するものはほんのわずかだが、大部分のものは長い間病気の苦しみを味わい、肉体は崩壊してゆく、という恐れがある。			
B3-2 R-E09	Many warnings have been uttered by eminent men of science and by authorities in military strategy. None of them will say that the worst results are certain. What they do say is that these results are possible, and no one can be sure that they will not be realized. We have not yet found that the views of experts on this question depend in any degree upon their politics or prejudices. They depend only, so far as our researches have revealed, upon the extent of the particular experts' knowledge. We have found that the men who know most are the most gloomy.	著名な科学者や権威者たちや軍事戦略の権威者から、多く警告が発表されている。(にちがわず)戦争の結果が必ず起こるとは、だれも言おうとしない。彼らが言っているのは、このような結果が起こる可能性があるということ、そしてだれもそういう結果が実際起こらないとは断言できないということである。この問題についての専門家の見解がその政治的立場や偏見に少しも左右されなかったということは、今まで見たことがない。私たちの調査で明らかになったが、それらの見解はただそれぞれの専門家の知識の範囲にもとづいているだけである。一番よく知っている人が一番暗い見通しをもっていることとわかった。			
B3-2 R-E10	Here, then, is the problem which we present to you, stark and dreadful and inescapable: Shall we put an end to the human race, or shall mankind renounce war? People will not face this alternative because it is so difficult to abolish war.	さて、ここに私たちが皆さんに提出する問題、きびしく恐ろしく、そして避けることのできない問題がある。即ち、私たちは人類に絶滅をもたらすか、それとも人類が戦争を放棄するか? 戦争を廃絶することはあまりにも困難であるという理由で、人々はこの二者択一という問題を面と向かってとり上げようとしないうらう。	格言・警句集n.126:戦争廃絶と国家主権の制限(付言) 核戦争の危険を除去するためには、戦争の廃絶をしなければならぬ。そのためには、「交戦権」という国家主権を制限し、世界連邦政府を樹立する以外にない、というのがラッセル及びアインシュタインの信念でした。それは、ラッセル・アインシュタイン宣言の精神でもあり、宣言に明確に書かれています。しかし日本では、集団的自衛権を機能・保障させることを目的に、交戦権を認めるように憲法改正をしようとする動きが強まっており、その考え方を国民に浸透させるための愛国心教育や歴史教育が強調され……。		
B3-2 R-E11	The abolition of war will demand distasteful limitations of national sovereignty. But what perhaps impedes understanding of the situation more than anything else is that the term 'marking' feels vague and abstract. People scarcely realize in imagination that the danger is to themselves and their children and their grandchildren, and not only to a dimly apprehended humanity. They can scarcely bring themselves to grasp that they, individually, and those whom they love are in imminent danger of perishing agonizingly. And so they hope that perhaps war may be allowed to continue provided modern weapons are prohibited.	戦争の廃絶は国家主権に不快な制限を要求するであろう。しかし、おそらく他のなにものにもまして事態の理解をさまたげているのは、「人類」という言葉が抽象的であり、抽象的だと感じられる点にあるだろう。危険は単にぼんやり感知される人類に対してだけではなく、自分自身や自分の子どもと孫たちに対して存在するのだが、人々はそれを想像力を働かせることによつて認識することは、ほととできず、人々を個人として、人々を個人として、自分自身の愛する者たちが、苦しみもたえながら死滅するという、切迫した危険状態にあるということをはとんと理解していない。そうして人々は、近代兵器さえ禁止されるなら戦争は継続してもかまわないだろうと、思っている(希望的観測をしている)と察している。			
B3-2 R-E12	This hope is illusory. Whatever agreements not to use H-bombs had been reached in time of war, they would no longer be considered binding in time of war, and both sides would set to work to manufacture H-bombs as soon as war broke out, for, if one side manufactured the bombs and the other did not, the side that manufactured them would inevitably be victorious.	この思い(希望)は幻想である。たとえ水爆を使用しないといういかなる協定が「平時(平和時)」に結ばれていたとしても、戦時にはそのような協定はもはや拘束とは考えられず、戦争が起こるやいなや双方とも水爆の製造にとりかかるであろう。なぜなら、もし一方が水爆を製造して他方が製造しないとすれば、水爆を製造した側はかならず勝利するにちがいないからである。			
B3-2 R-E13	Although an agreement to renounce nuclear weapons as part of a general reduction of armaments would not afford an ultimate solution, it would serve certain important purposes. First, any agreement between East and West is to the good in so far as it tends to diminish tension. Second, the abolition of thermo-nuclear weapons, if each side believed that the other had carried it out sincerely, would lessen the fear of a sudden attack in the style of Pearl Harbour, which at present keeps both sides in a state of nervous apprehension. We should, therefore, welcome such an agreement though only as a first step.	軍備の全面的削減の一環としての核兵器放棄に関する協定は、最終的な解決には結びつかないが、一定の重要な役割を果たすだろう。第一に、およそ東西間の協定は、緊張緩和を自指すかぎり、いかなるものであっても有益である。第二に、熱核兵器の廃棄は、もし相手方がこれを誠実に実行していることを双方が信じていれば、現在双方を神経質的な不安状態に陥れ入れている異様過激の奇襲攻撃の恐怖を減らすことにならう。したがって、このような協定は、第一歩ではあるが、そのような協定は歓迎すべきである。			

				B3-2 R-E14	Most of us are not neutral in feeling, but, as human beings, we have to remember that, if the issues between East and West are to be decided in any manner that can give any possible satisfaction to anybody, whether Communist or anti-Communist, whether Asian or European or American, whether White or Black, then these issues must not be decided by war. We should wish this to be understood, both in the East and in the West.	大部分の人間は感情においては中立ではない。しかし人類として、私たちは次のことを忘れてはならない。すなわちもし東西の問題が何らかの方法で解決され、誰もが共産主義者であろうと反共産主義者であろうとアジア人であろうとヨーロッパ人であろうと、またアメリカ人であろうと、また白人であろうと黒人であろうと—何らかの可能な満足を得られなくてはならないとすれば、それらの問題は戦争によって解決してはならない。私たちは、東側においても西側においても、このことが理解されることを望んでいる。			
				B3-2 R-E15	There lies before us, if we choose, continual progress in happiness, knowledge, and wisdom. Shall we, instead, choose death, because we cannot forget our quarrels? We appeal as human beings to human beings: Remember your humanity, and forget the rest. If you can do so, the way lies open to a new Paradise; if you cannot, there lies before you the risk of universal death.	私たちの前には、もし私たちがそれを選ぶならば、幸福と知識の絶えまない進歩がある。私たちの争いを忘れること— we cannot forget our quarrels? We appeal as human beings to human beings: Remember your humanity, and forget the rest. If you can do so, the way lies open to a new Paradise; if you cannot, there lies before you the risk of universal death.			
				B3-2 R-E15	Resolution:  WE invite this Congress, and through it the scientists of the world and the general public, to subscribe to the following resolution: "In view of the fact that in any future world war nuclear weapons will certainly be employed, and that such weapons threaten the continued existence of mankind, we urge the governments of the world to realize, and to acknowledge publicly, that their purpose cannot be furthered by a world war, and we urge them consequently, to find peaceful means for the settlement of all matters of dispute between them."	決議:  私たちはこの会議(後のバグウォッシュ会議)を招請し、その会議を通じて世界の科学者たちおよび一般大衆に、以下の決議に署名するよう勧める。  「将来の世界戦争においてはかならず核兵器が使用されるであろうとして、そしてそのような兵器が人類の存続をおびやかしているという事実からみれば、世界の諸政府に、彼らの目的が世界戦争によって促進されないことを自覚し、このことを公然とみとめるよう勧告する。したがってまた、私たちは彼らに、彼らのあいだのあらゆる紛争問題の解決のための平和的な手段をみいだすよう勧告する			
				B3-2 R-E15	Max Born Percy W. Bridgman Albert Einstein Leopold Infeld Frederic Joliot-Curie Herman J. Muller Linus Pauling Cecil F. Powell Joseph Rotblat Bertrand Russell Hideki Yukawa	M. J. ボルン教授(ノーベル物理学賞) P. W. ブリッジマン教授(ノーベル物理学賞) A. アインシュタイン教授(ノーベル物理学賞) L. インフェルト教授(ノーベル物理学賞) F. ジョリオ・キュリー教授(ノーベル化学賞) H. J. ムラー教授(ノーベル生理学・医学賞) L. ポーリング教授(ノーベル化学賞) C. F. パウエル教授(ノーベル物理学賞) J. ロートブラット教授 B. ラッセル(ノーベル文学賞) 湯川秀樹教授(ノーベル物理学賞)			
				B3-2C-01	Meantime, as I assessed the response that my broadcast had achieved and considered what should be done next, I had realised that the point that I must concentrate upon was the need of co-operation among nations. It had occurred to me that it might be possible to formulate a statement that a number of very well-known and respected scientists of both capitalist and communist ideologies would be willing to sign calling for further joint action. Before taking any measures, however, I had written to Einstein to learn what he thought of such a plan. He had replied with enthusiasm, but had said that, because he was not well and could hardly keep up with present commitments, he himself could do nothing to help beyond sending me the names of various scientists who, he thought, would be sympathetic. He had begged me, nevertheless, to carry out my idea and to formulate the statement myself. This I had done, basing the statement upon my Christmas broadcast, 'Man's Peril'. I had drawn up a list of scientists of both East and West and had written to them, enclosing the statement, shortly before I went to Rome with the Parliamentarians. I had, of course, sent the statement to Einstein for his approval, but had not yet heard what he thought of it and whether he would be willing to sign it. As we flew from Rome to Paris, where the World Government Association were to hold further meetings, the pilot announced the news of Einstein's death. I felt shattered, not only for the obvious reasons, but because I saw my plan falling through without his support. But, on my arrival at my Paris hotel, I found a letter from him agreeing to sign. This was one of the last acts of his public life.  From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 2: At home and abroad, 1969] http://russell-j.com/beginner/AB32-190.HTM	その間、私は、自分の放送がなした反響を評価し、次に何をなすべきかを考えた時、私が力を傾注すべき要点は、国家間の協力が必要であるということをはつきり理解した。数多くの非著名な著名な科学者が、資本主義のイデオロギーをもつ者も共産主義のイデオロギーをもつ者も、両者とも進んでさらなる共同行動への呼びかけに署名してくれそうな声明(文)を作成することが可能であるかもしれないという考えが私の頭に浮かんだ。けれども私は、そのための何らかの方法を講ずる前に、アインシュタイン博士はそのような計画をどう思うか知りたくて、手紙を書いた。彼は、熱意を込めた返事をくれたが、返事の手紙には、自分は健康があまりすぐれず、当面ほとんど関与することができず、共働してくれると自分が思う多様な科学者の名前をあげる以上は、何れも役に立つことはできそうもないと書かれていた。それにもかかわらず、彼は、私の考えを実行にうつすこと、また私自身で声明(文)を作成してほしいと懇願してきた。(そこで私は私のクリスマス放送「人類の危機(Man's Peril)」をもとにしてその声明(文)「ラッセル・アインシュタイン宣言」を作成した。 私は、(アインシュタイン推薦のリストをもとに)東西両陣営の科学者のリストを作成した。そして、世界政府推進の(英蘭の)国会議員たちとローマに行く直前に、それらの科学者たちにその声明(文)「注:ラッセル・アインシュタイン宣言」を同封し手紙を送った。もちろん、アインシュタインにも同意を得るために同じ声明(文)を送った。しかし、彼がそれについてどう考えるかまだ返事がなく、また、快く(進んで)署名してくれるかどうかとも聞いていなかった。私たちが一行が、ローマから世界政府協会の次の集會が開かれることになっていたパリに飛行機で向かっていた時、その機内でアインシュタイン逝去のニュースが機長によってアナウンスされた。私は、身も心も打ち砕かれたように感じた。それは、彼を失った悲しみという明白な理由からだけではなく、また、彼の支持なくしては計画が失敗(頓挫)することを理解していたからであった。しかし、私がパリのホテルに到着すると、署名に同意するというアインシュタインからの手紙が届いているのを発見した。これは、彼の公的な生涯での最後の仕事のひとつとなった。			



	B3-2C-02	<p>June came and still all the replies to my letters to the scientists had not been received. I felt that in any case some concrete plan must be made as to how the manifesto should be publicised. It seemed to me that it should be given a dramatic launching in order to call attention to it, to what it said and to the eminence of those who upheld it. After discarding many plans, I decided to get expert advice. I knew the editor of the Observer slightly and believed him to be liberal and sympathetic. He proved at that time to be both. He called in colleagues to discuss the matter. They agreed that something more was needed than merely publishing the fact that the manifesto had been written and signed by a number of eminent scientists of varying ideologies. They suggested that a press conference should be held at which I should read the document and answer questions about it. They did far more than this. They offered to arrange and finance the conference with the proviso that it not become, until later, public knowledge that they had done so. It was decided finally that the conference should take place on July 9th (1955). A room was engaged in Caxton Hall a week before. Invitations were sent to the editors of all the journals and to the representatives of foreign journals as well as to the BBC and representatives of foreign radio and TV in London. This invitation was merely to a conference at which something important of world-wide interest was to be published. The response was heartening and the room had to be changed to the largest in the Hall. It was a dreadful week. All day long the telephone rang and the doorbell pealed. Journalists and wireless directors wanted to be told what this important piece of news was to be. Each hoped, apparently, for a scoop. Three times daily someone from the Daily Worker rang to say that their paper had not been sent an invitation. Daily, three times, they were told that they had been invited. But they seemed to be so used to being cold-shouldered that they could not believe it. After all, though they could not be told this, one purpose of the manifesto was to encourage co-operation between the communist and the non-communist world. The burden of all this flurry fell upon my wife and my house-keeper. I was not permitted to appear or to speak on the telephone except to members of the family. None of us could leave the house. I spent the week sitting in a chair in my study trying to read. At intervals, I was told later, I muttered dismally, 'This is going to be a damp squib'. My memory is that it rained during the entire week and was very cold.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 2: At home and abroad, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB32-220.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB32-220.HTM</a></p>	<p>(1955年)6月となったが、科学者たちに送った私の手紙に対する返事は、また全く届いていないわけではなかった。いずれにせよ、その声明(文)をどのように公表すべきかについて何らかの具体的な計画を立てなければならないと思った。その声明(文)について、即ち、その声明(文)の趣旨とそれを支持した人々が卓越した人々であることについて、一般の注意を喚起するために劇的なスタート(奇蹟)を行わなければならないと断じて、多くの計画を捨てた後、専門家の助言を得ることを決意した。私は、オブザーヴァー紙の編集主幹を少し知っており、彼はリベラルでありかつ私に好意を持っていると信じていた。彼はそのとりの人(リベラルかつラッセルに好意的)であることがわかった。彼はまずその困難について議論するために、同僚たちを集めてくれた。彼らは、その声明(文)が書かれた様々な信条を持つ多数の著名な科学者たちが署名したという事実を単に公表するだけでなく、それ以上の物力をなす必要があるということで見解が一致した。彼等は私が記者会見を開く(声明(文)を質問に答えることを提案した)の趣旨には彼らはその提案以上のことをしてくれた。彼等は、記者会見が終わるまで(この件が一段落するまで / not until later)自分たちがそうしたことをごく一般に知らせないという条件で、この会議を準備し、経費を負担することを申し出てくれた。最終的にこの記者会見を1955年7月9日に開くことが決定された。(記者会見の)一週間前にロンドンのキャクソン・ホール(Caxton Hall)の一室が予約された。記者会見への招待状が、BBCをはじめロンドンの外国のラジオやテレビの代表はもとより、全ての新聞社の編集主幹及び各国新聞社の代表に送られた。招待状には、ただ世界的関心事のある重要なことが発表される記者会見が開かれるということだけが書かれていなかった。その反省は我々を鼓舞するものであり、予約した部屋をそのホールのなかで一番広い部屋に変更しなければならなかった。</p> <p>発表後の一週間は、すまじいものとなった。一日中、電話は鳴りっぱなしであり、戸口のベルも鳴り響いた。ジャーナリストもラジオのディレクターも、この重要なニュースの内容を知りたがった。彼の誰もがスクラムしたたがっているようであった。オブザーヴァー紙の誰かが、毎日3回ずつ電話をかけてきて、本紙には招待状が来ていないと言った。そうして毎日3回ずつ、黄紙も招待されていると告げられた。それでもその新聞は、いつもあまりにも冷淡で送っていた。それを信じたことができなかった。結局、彼等記者には知らされなければならぬ、その声明の目的の一つは、共産主義世界と非共産主義世界との間の協力を促進することであった。こうした大騒ぎの全ての負担が、私の妻とハフスキーパーの上にとりかかっていた。私は、家族の者以外に顔をみせたり、電話で話したりすることを許されなかった。我々は誰一人、家から出ることができなかった。私は、その週は、自分の書斎で本を読みながら椅子に坐って過した。あとで聞かれたことであるが、その週の初め、私はときどき、曇っつつ、こっぴどくやっていたそうである。「こんなことではせつなかの、花火も遅ってしまっ。私の記憶では、その週はずっと雨が振っており、非常に寒かった。</p>		
	B3-2C-03	<p>The worst aspect of the affair was that not long before this I had received a letter from Joliot-Curie saying that he feared that, after all, he could not sign the manifesto. I could not make out why he had changed. I begged him to come to London to discuss the matter, but he was too ill. I had been in constant touch with Dr E. H. S. Burhop in order that the manifesto should not in any way offend those of communist ideology. It was largely due to his efforts that the night before the conference was scheduled to take place Monsieur Biquard came from Paris to discuss with Burhop and myself Joliot-Curie's objections. Monsieur Biquard has since taken Joliot-Curie's place in the World Federation of Scientific Workers. They arrived at 11.30 p.m. Sometime after midnight we came to an agreement. The manifesto could not be changed from the form it had had when Einstein had signed it and, in any case, it was too late to obtain the agreement of the other signatories to a change. I suggested, therefore, that Joliot-Curie's objections be added in footnotes where necessary and be included in my reading of the text the following morning. I had hit upon this scheme in dealing with an objection of one of the Americans. Joliot-Curie's emissary at last agreed to this and signed the manifesto for him, as he had been empowered to do if an agreement could be reached.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 2: At home and abroad, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB32-230.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB32-230.HTM</a></p>	<p>最悪の局面(事態)は、その記者会見の少し前に、結局のところ、声明文に署名できないかもしれないと書かれたジョリオ・キュリーからの手紙を受け取ったことであった。彼がなぜ心変わりしたのか、その理由を推し量ることができなかった。私はこの問題を議論するために、彼にロンドンに来てくれるよう懇願したが、彼の病気が重すぎ、実現しなかった。私は、声明(文)が共産主義の信条を持った人々の感情をいかなる点においても害することのないように、素に E. H. S. パーロップ博士との接触を保っていた。記者会見が開かれる予定になっていた日の前夜に、ジョリオ・キュリーの反対意見について、パーロップ博士及び私と議論するために、ピカル氏(注: Pierre Biquard, 1901-1992。フランスの物理学者)がパリからやって来たのは、多分にパーロップ博士の努力に負うものであった(参考: E.H.S.パーロップ「アイシユタイン・ラッセル声明起草のころ」)。ピカル氏はずっと世界科学者連盟(注: World Federation of Scientific Workers: 1947年設立。スウェーデンの民間機関)でジョリオ・キュリーに代わって会長をつとめていた。ピカル氏とパーロップ博士の二人は、夜11時30分に到着した。そして真夜中12時を少しまわった頃、私たちは合意に達した。声明(文)は、アインシュタインが署名した時の形式を変えるわけにはいかなかった。それに、いずれにせよ、他の署名者たちに、声明(文)の修正について同意を求めるには時間的過ぎた。そこで私は、ジョリオ・キュリーが異議ありとする点には必要に応じてコメントを脚注に加え、かつ、翌朝私が声明(文)のテキストを読みあける時に説明することを提案した。私は、アメリカ人の署名者たちの一人の反対意見を取り扱うのに、そのやり方を思いついていた。ジョリオ・キュリーの使者(ピカル氏)も最終的にこの案に賛成し、一代理で署名する権限を与えられていたので、ジョリオ・キュリーに代わって声明(文)に署名した。</p>		

	B3-2C-04	<p>The hall was packed, not only with men, but with recording and television machines. I read the manifesto and the list of signatories and explained how and why it had come into being. I then, with Robtlat's help, replied to questions from the floor. The journalistic mind, naturally, was impressed by the dramatic way in which Einstein's signature had arrived. Henceforth, the manifesto was called the Einstein-Russell (or vice versa) manifesto. At the beginning of the meeting a good deal of scepticism and indifference and some out and out hostility was shown by the press. As the meeting continued, the journalists appeared to become sympathetic and even approving, with the exception of one American journalist who felt affronted for his country by something I said in reply to a question. The meeting ended after two and a half hours with enthusiasm and high hope of the outcome of the call to scientists to hold a conference.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 2: At home and abroad, 1969]</p> <p><a href="http://russell-j.com/beginner/AB32-250.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB32-250.HTM</a></p>	<p>・・・。会場は、人間だけでなく、録音機器や放送機材でキーボード一語め状態であった(右上手真狐大蔵の出演)。 The Life of Bertrand Russell in Pictures and in His Own Words, 1972)。 私は、声明(文)及び署名者のリストを読みあげ、そうしてその声明(文)がどのようにして、またいかなる理由でできたか、説明した。続いて私は、ロートブラットの補佐のもと、会場からの質問に答えた。当然のことながら新聞記者の心(ジャーナリスト魂)は、アインシュタインの署名が私(ラッセル)のもとに属した劇的な方法(道のり)に深い印象を受けた。それ以後、声明(文)はアインシュタイン・ラッセル声明(あるいはその逆のラッセル・アインシュタイン声明)と名づけられた。記者会見が始まった当初は、新聞社側からは、かなり懐疑的な見方や冷淡な態度(無関心な態度)が、また数人の記者からは徹底的な敵意も伺われた。記者会見が続けられていくうちに、あるアメリカ記者を除いて、新聞記者たちはだいたい好意的になり、同意をえるようになったようであった。アメリカ人は、私が彼からの質問に対して私が答えなことで、自分の母国アメリカが侮辱されたと感じたのだった。その記者会見は、(核廃絶のための)会議を開催しようとする科学者への呼びかけの成果を多に期待しつつ、感激とともに、2時間半で終了した。</p>		
	B3-2C-05	<p>But worse was to come. I learned that I had omitted Professor Max Born's name from the list of signatories, had, even, said that he had refused to sign. The exact opposite was the truth. He had not only signed but had been most warm and helpful. This was a serious blunder on my part, and one that I have never stopped regretting. By the time that I had learned of my mistake it was too late to rectify the error, though I at once took, and have since taken, every means that I could think of to set the matter straight. Professor Born himself was magnanimous and has continued his friendly correspondence with me. As in the case of most of the other signatories the attempt and achievement of the manifesto took precedence over personal feelings.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 2: At home and abroad, 1969]</p> <p><a href="http://russell-j.com/beginner/AB32-260.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB32-260.HTM</a></p>	<p>しかしそれよりもっと悪い事態が起こった。私は新聞を読んで、マックス・ボルン教授(Max Born, 1882年、1970年1月5日、ドイツ生まれのイギリスの理論物理学者で、1924年、ノーベル物理学賞受賞)の名前を署名者名簿から落としていたことが、また彼が署名することを断わったとさえ言ったことがわかった。事実はまったく逆であった。彼は署名したばかりでなく、最も熱心でありかつ大いに助けになった。これは私の大失態であり、後悔の念が消えること、これまで泳いでなかった。私が自分の間違いを知った時には、誤りを訂正するにはすでに遅すぎたが、自分としてはこの件を正すために考えつくあらゆる手段を即座にまたその後もずっと講じてきている。ボルン教授自身はとて莫大の人であり、ずっと親しく私と交信を続けてくれている。彼以外の大部分の他の署名者たちもそうであるが、ボルン教授のそれと同様、この声明書のとて達成が、個人的な感情よりも優先したのである。</p>		
	B4				
	B4-1	<p><b>削除 B4-4に 統合化!</b></p>	<p>哲学と無縁の人は、常識、年齢または国籍による習慣的信念、あるいは(慎重な理性の協力または同意なしに)自分の心に生い育ってきた価値等に由来する)偏見にとらわれて生涯を過ごさなければならない。哲学は明確で合理的で明白なものとなつてしましやす。ありふれた対象は問題を呼び起こすことなく、未知の可能性は軽蔑的に拒否される。</p>		<p>哲学者、いや哲学者研究者でさえ、多くの偏見にとらわれて生涯を送る。大学勤務のサラリーマン的な、確信過剰(cocksure)な哲学者や哲学者研究者も、自分の専門としていることに関してはできるだけ客観的に、偏見にできるだけとらわれないように思案をするが、その分野、領域以外の偏見でいっぱい、ということにめずらしくない。</p> <p>哲学は、科学のような誰も認める回答を与えることができない。人間を多くの偏見や先入観から解放し、思考を豊かなものにすることができる。また、科学は、目的や価値については何も語ることはできないが、哲学は、目的や価値についても思索をうながし、科学が提供する成果や技術的成果を有効に活用することにあたって、一定の役割を果たすことが可能である。</p>
	B4-02	<p>McTaggart was a Hegelian, and at that time still young and enthusiastic. He had a great intellectual influence upon my generation, though in retrospect I do not think it was a very good one. For two or three years, under his influence, I was a Hegelian. I remember the exact moment during my fourth year when I became one. I had gone out to buy a tin of tobacco, and was going back with it along Trinity Lane, when suddenly I threw it up in the air and exclaimed: 'Great God in boots! - the ontological argument is sound!</p> <p>Although after 1898 I no longer accepted McTaggart's philosophy, I remained fond of him until an occasion during the first war, when he asked me no longer to come and see him because he could not bear my opinions. He followed this up by taking a leading part in having me turned out of my lectureship.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 3: Cambridge, 1967]</p> <p><a href="http://russell-j.com/beginner/AB13-130.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB13-130.HTM</a></p>	<p>マクタガートは、ヘーゲリアンであり、その当時はまだ若くて熱狂的な性格であった。彼は当時の我々の世代に大きな知的影響力をもっていたが、ふり返ってみると、その影響力は、非常によいものであったとは思わない。2、3年の間、彼の影響のもと私はヘーゲリアンであった。大学4年生の時、私もヘーゲリアンの一人になったままだにその論議をおぼえている。私はタバコ(の葉)を一躍買いに外出していたが、それを持ってトリニティ小路を通って戻りつつあったその時、突如として私はそれを空中に放り投げた。こう叫んだ。『そのとおりだ! その存在論的議論は正しい!』(松下注: Great God in boots! ほどのようなニュアンスでしょうか?)</p> <p>1898年以後私はもはやマクタガートの哲学を受け入れなかったが、第一次世界大戦中に私の意見にはがまんがならないので、今後はもう会いに来ないようにと彼が告げた。その時まで私はずっと彼が好きであった。このように私を拒絶したことに続いて、彼は私をトリニティ・コレッジの講師職から追放することに指導的役割を果たした。</p>		
★	B4-03	<p>I's there any knowledge in the world which is so certain that no reasonable man could doubt it? This question, which at first sight might not seem difficult, is really one of the most difficult that can be asked. When we have realized the obstacles in the way of a straightforward and confident answer, we shall be well launched on the study of philosophy -- for philosophy is merely the attempt to answer such ultimate questions, not carelessly and dogmatically, as we do in ordinary life and even in the sciences, but critically after exploring all that makes such questions puzzling, and after realizing all the vagueness and confusion that underlie our ordinary ideas.</p> <p>From: The Problems of Philosophy, chap. 1 (1912)</p>	<p>合理的な人間なら誰でも疑うことができないほどの確実な知識というものが、この世にあるであろうか。この問いは、一見難しくないようだが、思われるかもしれないが、実はあらゆる問いのなかでも、最も困難な問いの一つである。この問いに真っ向から、確信のある答えを得ようとする途上でぶつかるさまざまな障害に気がついたら、われわれは並派に哲学の研究をはじめたことになる。なぜなら、哲学とはそういう究極的な問いを扱うようとする試みにかがならず、(哲学とは)日常生活において、さらには科学においてさえやるように、不注意に独断的な仕方によって答えるのではなく、その問題を紛糾させながらも、かつ、すべての事情をしっかりと捉え、日常的観念のうちにひそんでいるすべてのあいまいさや疑念を自覚したのちに、批判的に答えようとする試みだからである。</p>		<p>何を、どういったことを「あいまい」とがながえるか、「あいまいさ」の自覚、が人によって異なる。日常言語があいまいだからというところで、日本人なら日本語の分析を、英語圏民なら英語の分析をしてあいまいさをなくす努力をするだけで、それが哲学的営為だとする哲学者(グループ)もある。しかし、それは出発点(基礎作業)にすぎない。そういった人は、ワイトゲンシュタイン礼賛者に多い?</p>

★	B4-04	<p>The value of philosophy is, in fact, to be sought largely in its very uncertainty. The man who has no tincture of philosophy goes through life imprisoned in the prejudices derived from common sense, from the habitual beliefs of his age or his nation, and from convictions which have grown up in his mind without the co-operation or consent of his deliberate reason. To such a man the world tends to become definite, finite, obvious; common objects rouse no questions, and unfamiliar possibilities are contemptuously rejected. As soon as we begin to philosophize, on the contrary, we find, as we saw in our opening chapters, that even the most everyday things lead to problems to which only very incomplete answers can be given. Philosophy, though unable to tell us with certainty what is the true answer to the doubts which it raises, is able to suggest many possibilities which enlarge our thoughts and free them from the tyranny of custom. Thus, while diminishing our feeling of certainty as to what things are, it greatly increases our knowledge as to what they may be; it removes the somewhat arrogant dogmatism of those who have never travelled into the region of liberating doubt, and it keeps alive our sense of wonder by showing familiar things in an unfamiliar aspect.</p> <p>From: The Problems of Philosophy, chap. 15 ( 1912) http://russell-j.com/R601.HTM</p>	<p>( 生松訳 )</p> <p>哲学の価値は、実際上、多くはまさにその不確実性のなかに求めるべきものである。哲学の素養のない人は、常識、あるいは年齢または国籍による習慣的信念、あるいは慎重な理性の協力または同意なしに自分の心に生じ育ってきた確信等によって由来する偏見にとらわれて生涯を送る。そのようにならなければ、世界は明確で有限でなかなたてしまし易い、ありふれた対象は問題を呼び起こすことなく、未知の可能性は軽蔑的に拒否される。ところが反対に、我々が哲学的思索を始めるや否や、始めの方の常識で見えたように、我々は全く日常的な事物でも極めて不完全な答えしか答えられないよう、多岐に亘って疑いをもつのである。ことを知るのである。哲学は、それが提出する疑問に対して真の答えが何であるかを確実性をもって教えることはできないが、我々の思考を拡大し、習慣の専制から思考を解放する多くの可能性を示唆することはできる。従って事物が何であるかという点について、我々の確実性の感度を低減させるのではあるが、事物がなんであるかという知識は大いに増大させてくれる。それは人を自由にする懷疑の領域に足を踏み入れたことのない人々のいささか寡大な独断論を除去し、普段なら親しんでいるものを見慣れない垣根において示すことによつて、我々の驚異感を生き生きと維持してくれる。</p> <p>(哲学の倫理的中率性)</p> <p>哲学において、倫理的中率性はこれまでつたに追求されます。またほとんど達成されてこなかった。人々は自分た望みを抱き出し、それを関連させて諸哲学、諸哲学者たちを評価してきた。善悪の観念が世界を理解する鍵を与えてくれるにちがいないという信念は、個別科学の世界から追い出される。哲学者に選ばれるようになつた。しかし、その最後の選別所からさえも、もしいつまでも。しかし、その最後の選別所からさえも、もしいつまでも。幸福は、それを直接追いかけられる人たちによつては最もよく手に入れられるものではない、とはよく言われることである。これは、善についても真理であると思われる。ともが、思想においても、善悪を求めて専断論を知らず求める人たちのほうが、世界を自分の望みという歪んだ鏡像物を通して眺める人たちよりも、より善を実現する見込みがありそうである。</p>	<p>つまり、「自分の頭で考えることがめんどくさい」と思う人が多い。自分の頭で考えるためには、不明な点はいろいろ自分で調べたり、( 複雑なし ) 論理的に考える必要がありますが、現代人は多忙だったり、多忙でなくても、他のものも楽しいことに時間を使いたいと思う人が多いということですね。</p>	
★	B4-05	<p>In philosophy, hitherto, ethical neutrality has been seldom sought and hardly ever achieved. Men have remembered their wishes, and have judged philosophies in relation to their wishes. Driven from the particular sciences, the belief that the notions of good and evil must afford a key to the understanding of the world has sought a refuge in philosophy. But even from this last refuge, if philosophy is not to remain a set of pleasing dreams, this belief must be driven forth. It is a commonplace that happiness is not best achieved by those who seek it directly; and I would suggest that the same is true of the good. In thought, at any rate, those who forget good and evil and seek only to know the facts are more likely to achieve good than those who view the world through the distorting medium of their own desires.</p> <p>From: Our Knowledge of the External World, 1914, chap. 1) http://russell-j.com/R601.HTM</p>	<p>第一次世界大戦の最後の数ヶ月の間に、当時18歳になったばかりの彼の下の息子( 次男 ? ) が戦死した。これは彼にとってたえがたい深い悲しみであり、彼が自分の仕事を続けることができたのは、彼の道徳観( 精神的抑制) 的な努力があったこと、その可憐なことであった。息子が死んだ苦痛は、彼の思想を哲学に向けさせ、単なる機械論的な宇宙を信することから抜け出す道を探索させることに、非常に大きな関係があった。彼の哲学は非常にわかりにくく( 明確ではなく )、私がどうしても理解できなかったことが多くあった。彼がカントにカントを信じていたが、私はカントをよく思っていないかった。そして、彼が独自の哲学を展開しはしめるにあたって、ヘルグソンの影響をかなり受けた。彼は、宇宙における統一の様相に印象づけられており、この統一の様相があるからこそ科学的推論が正当化されると考えていた。彼は物質から( カントの ) 純粋理性がはたして私たち2人のうちどちらがより正しいか決めることができたが、私は疑わしく思つた。ホフマンの物の見方を好む人々は、彼が普通の人に慰めをもたせようとしたが、私は哲学者に不快をもたせようとした。と言うかもしれない。私の見解に好意をもつ人々は、カントは哲学者を喜ばせたが、私は普通の人を喜ばせたと言い返すかもしれない。しかしそれはどうであれ、お互いの情交は最後まで変わらなかったが、私たちは別々の道歩んだ。</p> <p>本書『心の分析』は、私としたところ互いに両立しないようにみえるかも知れないが私自身は共鳴点を見出している。心理学における傾向と物理学における傾向という2つの異なる傾向を調和させようとする試みから産まれたものである。</p> <p>一方において、多くの心理学者、特に行動主義学派の人々は、形而上学上の問題としてではないとしても、方法上の問題として、本質的に唯物論的立場に属するものを採用しようとする傾向がある。彼らは、心理学をますます生理学や外部の観察に依存させ、そして精神よりも物質をとりと信じている。このこと、できないものである。考える傾向がある。一方、物理学者たち、特にアインシュタインや他の相対性理論の代表者たちは、「物質」をますます物質的ではないものにしてきている。彼らの( 考える ) 世界は「出来事 ( events ) から成っており、「物質」はそれらが論理的構築し、して導き出されるものである。たとえば、エイントン教授の『空間、時間、及び重力』( Space, Time and Gravity [ Cambridge University Press, 1920 ] ) を読む者は誰でも、古風な唯物論は現代物理学からは支持を受けられないことが分るのである。行動主義者たちの物の見方のなかで、外観的価値のあるものは、物理学が現存する最も基本的な科学であるという感情であると私は考える。しかし、もし一そしてこれが事実だと思われれば、物理学者が物質の存在を想定していないのであれば、この立場を唯物論的ということはできない。</p> <p>心理学の唯物論的傾向を物理学の反唯物論的傾向と調和させることができると私に思われる考えは、ウィリアム・ジェイムズおよびアメリカの新実在論者たちの考えである。これによると、世界を作っている「素材」( stuff ) は心的でも物的でもなく、「中性的な素材」であつて、両者は心的なものも物的なものもどちらもこれらから構成されるのである。私は本書において、心理学が扱う現象に関して、この考えをある程度まで詳しく述べようと思つた。</p>	<p>哲学はいろいろな意味に使われており、立場によってまったく違う内容をもっています。ここでは、あくまでも「理論」哲学のことを言っており、人生観や世界観や通俗哲学( 経営の哲学とかあらゆるものに冠せられる○○の哲学 ) や社会哲学等は対象外です。</p> <p>日本でも理論哲学は育つてきていると思われませんが、巷でよく売れている哲学の本の大部分は、理論哲学というよりも、独自の観念論や倫理哲学や社会哲学といったものが大部分です。日本の書店はそういった本であふれているために、多くの人が哲学に対して間違つたイメージを持ってしまっていると思われませんが、いかがでしょうか？ また、英語圏では分析哲学が主流で、特に英米では哲学と言ったら分析哲学関係のものだそうですが日本の哲学者や哲学好きな読者はどれだけそういう事実を知つてるでしょうか？</p> <p>後悔しないような、自分なりの努力を続けることが重要。努力したのに報われなかったという後悔をしないような態度での、日々の取り組みが重要。</p>	
	B4-06	<p>In the last months of the war his younger son, who was only just eighteen, was killed. This was an appalling grief to him, and it was only by an immense effort of moral discipline that he was able to go on with his work. The pain of this loss had a great deal to do with turning his thoughts to philosophy and with causing him to seek ways of escaping from belief in a merely mechanistic universe. His philosophy was very obscure, and there was much in it that I never succeeded in understanding. He had always had a leaning towards Kant, of whom I thought ill, and when he began to develop his own philosophy he was considerably influenced by Bergson. He was impressed by the aspect of unity in the universe, and considered that it is only through this aspect that scientific inferences can be justified. My temperament led me in the opposite direction, but I doubt whether pure reason could have decided which of us was more nearly in the right. Those who prefer his outlook might say that while he aimed at bringing comfort to plain people I aimed at bringing discomfort to philosophers; one who favoured my outlook might retort that while he pleased the philosophers, I amused the plain people. However that may be, we went our separate ways, though affection survived to the last.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5: First marriage, 1967 http://russell-j.com/beginner/AB15-080.HTM</p>	<p>本書『心の分析』は、私としたところ互いに両立しないようにみえるかも知れないが私自身は共鳴点を見出している。心理学における傾向と物理学における傾向という2つの異なる傾向を調和させようとする試みから産まれたものである。</p> <p>一方において、多くの心理学者、特に行動主義学派の人々は、形而上学上の問題としてではないとしても、方法上の問題として、本質的に唯物論的立場に属するものを採用しようとする傾向がある。彼らは、心理学をますます生理学や外部の観察に依存させ、そして精神よりも物質をとりと信じている。このこと、できないものである。考える傾向がある。一方、物理学者たち、特にアインシュタインや他の相対性理論の代表者たちは、「物質」をますます物質的ではないものにしてきている。彼らの( 考える ) 世界は「出来事 ( events ) から成っており、「物質」はそれらが論理的構築し、して導き出されるものである。たとえば、エイントン教授の『空間、時間、及び重力』( Space, Time and Gravity [ Cambridge University Press, 1920 ] ) を読む者は誰でも、古風な唯物論は現代物理学からは支持を受けられないことが分るのである。行動主義者たちの物の見方のなかで、外観的価値のあるものは、物理学が現存する最も基本的な科学であるという感情であると私は考える。しかし、もし一そしてこれが事実だと思われれば、物理学者が物質の存在を想定していないのであれば、この立場を唯物論的ということはできない。</p> <p>心理学の唯物論的傾向を物理学の反唯物論的傾向と調和させることができると私に思われる考えは、ウィリアム・ジェイムズおよびアメリカの新実在論者たちの考えである。これによると、世界を作っている「素材」( stuff ) は心的でも物的でもなく、「中性的な素材」であつて、両者は心的なものも物的なものもどちらもこれらから構成されるのである。私は本書において、心理学が扱う現象に関して、この考えをある程度まで詳しく述べようと思つた。</p>		
	B4-07	<p>This book has grown out of an attempt to harmonize two different tendencies, one in psychology, the other in physics, with both of which I find myself in sympathy, although at first sight they might seem inconsistent. On the one hand, many psychologists, especially those of the behaviourist school, tend to adopt what is essentially a materialistic position, as a matter of method if not of metaphysics. They make psychology increasingly dependent on physiology and external observation, and tend to think of matter as something much more solid and indubitable than mind. Meanwhile the physicists, especially Einstein and other exponents of the theory of relativity, have been making "matter" less and less material. Their work consists of "events," from which "matter" is derived by a logical construction. Whoever reads, for example, Professor Eddington's Space, Time and Gravitation ( Cambridge University Press, 1920 ), will see that an old-fashioned materialism can receive no support from modern physics. I think that what has permanent value in the outlook of the behaviourists is the feeling that physics is the most fundamental science at present in existence. But this position cannot be called materialistic, if, as seems to be the case, physics does not assume the existence of matter.</p> <p>The view that seems to me to reconcile the materialistic tendency of psychology with the anti-materialistic tendency of physics is the view of William James and the American new realists, according to which the "stuff" of the world is neither mental nor material, but a "neutral stuff," out of which both are constructed. I have endeavoured in this work to develop this view in some detail as regards the phenomena with which psychology is concerned.</p> <p>From: The Analysis of Mind, 1921, preface. http://russell-j.com/cool/161-PREF.HTM</p>	<p>本書『心の分析』は、私としたところ互いに両立しないようにみえるかも知れないが私自身は共鳴点を見出している。心理学における傾向と物理学における傾向という2つの異なる傾向を調和させようとする試みから産まれたものである。</p> <p>一方において、多くの心理学者、特に行動主義学派の人々は、形而上学上の問題としてではないとしても、方法上の問題として、本質的に唯物論的立場に属するものを採用しようとする傾向がある。彼らは、心理学をますます生理学や外部の観察に依存させ、そして精神よりも物質をとりと信じている。このこと、できないものである。考える傾向がある。一方、物理学者たち、特にアインシュタインや他の相対性理論の代表者たちは、「物質」をますます物質的ではないものにしてきている。彼らの( 考える ) 世界は「出来事 ( events ) から成っており、「物質」はそれらが論理的構築し、して導き出されるものである。たとえば、エイントン教授の『空間、時間、及び重力』( Space, Time and Gravity [ Cambridge University Press, 1920 ] ) を読む者は誰でも、古風な唯物論は現代物理学からは支持を受けられないことが分るのである。行動主義者たちの物の見方のなかで、外観的価値のあるものは、物理学が現存する最も基本的な科学であるという感情であると私は考える。しかし、もし一そしてこれが事実だと思われれば、物理学者が物質の存在を想定していないのであれば、この立場を唯物論的ということはできない。</p> <p>心理学の唯物論的傾向を物理学の反唯物論的傾向と調和させることができると私に思われる考えは、ウィリアム・ジェイムズおよびアメリカの新実在論者たちの考えである。これによると、世界を作っている「素材」( stuff ) は心的でも物的でもなく、「中性的な素材」であつて、両者は心的なものも物的なものもどちらもこれらから構成されるのである。私は本書において、心理学が扱う現象に関して、この考えをある程度まで詳しく述べようと思つた。</p>		

★	B4-08	<p>In investigating memory-beliefs, there are certain points which must be borne in mind. In the first place, everything constituting a memory-belief is happening now, not in that past time to which the belief is said to refer. It is not logically necessary to the existence of a memory-belief that the event remembered should have occurred, or even that the past should have existed at all. There is no logical impossibility in the hypothesis that the world sprang into being five minutes ago, exactly as it then was, with a population that "remembered" a wholly unreal past. There is no logically necessary connection between events at different times; therefore nothing that is happening now or will happen in the future can disprove the hypothesis that the world began five minutes ago. Hence the occurrences which are CALLED knowledge of the past are logically independent of the past; they are wholly analysable into present contents, which might, theoretically, be just what they are even if no past had existed.</p> <p>I am not suggesting that the non-existence of the past should be entertained as a serious hypothesis. Like all sceptical hypotheses, it is logically tenable, but uninteresting. All that I am doing is to use its logical tenability as a help in the analysis of what occurs when we remember.</p> <p>From: <i>The Analysis of Mind</i>, 1921, chap. 9:Memory.  <a href="http://russell-j.com/cool/16T-0901.HTM">http://russell-j.com/cool/16T-0901.HTM</a></p>	<p>(世界 5 分前創造仮説)  記憶・信念について詳しく調査研究する際に、心に留めておかなければならない重要な点がある。その要点は、記憶・信念を構成するすべてのものは、いま起こっているものであって、その信念が言及していると言われる過去の時に起こったのではないということである。想起される出来事が起こったということとは、あるいは、そもそも過去が存在したということではない。過去を想起することとは、論理的に必然的なことではない。世界は五分前に、正確にその時そつあった通りに、まったく異なる過去を「想起する」。全住民とともに、突然存在し始めたという仮説に、いかなる論理的不可可能性もない。異なる過去に起こる出来事の間に論理的必然的な関係はない。それゆえ、いま起こっている、あるいは、未来に起こるであろう、いかなることも、世界が五分前に始まったという仮説を反証することはできない。従って、過去の知識とよばれる出来事は、過去とは論理的に独立である。それらの出来事は現在の内容に完全に分析されるのであり、そしてその現在の内容も、理論的には、かりに過去が存在しなかったとしても、ちょうど現にあるようなものであるかも知れないのである。</p> <p>私は、過去の非存在をまじめな仮説として受け入れるべきだと示唆しているわけではない。すべての懐疑論的仮説と同様に、それは論理的には主張することができ、興味のあるものではない。私がしようとしていることは、論理的にそれが主張できるといつことをわれわれが想起するときに起こることを分析する際の助けとして用いることだけである。</p> <p>科学の聖典として最も正典として(規範的なものとして)認められた形で、物理学(生理学を含む)の中に具体的に表現されている。物理学は我々に次のことを保証している。即ち、「対象物の知識」とは、対象物から出る(始まる)長い因果の連鎖の終端における出来事であり、せいぜい非常に重要な意味を帯びている。対象物から出る(始まる)対象物(自体)とは似ているとは思えないものである。我々は、素朴实在論 - 即ち、事物は見える通りのものであるという学説 - から出発する。草は緑色をしており、石は固く、雪は冷たいと思っている。しかし、物理学によれば、草の緑の固さ、雪の冷たさというものは、われわれが経験から知っている緑や固さや冷たさとは異なる、それとは異なるものである。観察者は、自分では石を観察していると思っている時、実際は、物理学を信すべきとすれば - 彼自身に対する石の影響を観察しているのである。そうだとすると、科学は、それ自身と離れているように思われる。つまり科学は、最大限客観的であろうとする時、裏に反して主観に陥ってしまっていることがわかる。素朴实在論から物理学が導かれるが、その物理学に従って考えると、物理学が真なら、素朴实在論は偽だということになる。すると素朴实在論は、それが真であるなら、同時にそれは偽であるような代物ということになるのである。結局、素朴实在論は偽である。ここから考えると、行動主義者は外的世界について観察を記録していると思っても、実は、自分自身の中で起こっていることを記録しているのである。</p>		
★	B4-09	<p>Scientific scripture, in its most canonical form, is embodied in physics (including physiology). Physics assures us that the occurrences which we call "perceiving objects" are at the end of a long causal chain which starts from the objects, and are not likely to resemble the objects except, at best, in certain very abstract ways. We all start from "naïve realism", i. e. the doctrine that things are what they seem. We think that grass is green, that stones are hard, and that snow is cold. But physics assures us that the greenness of grass, the hardness of stones, and the coldness of snow, are not the greenness, hardness, and coldness that we know in our own experience, but something very different. The observer, when he seems to himself to be observing a stone, is really, if physics is to be believed, observing the effects of the stone upon himself. Thus science seems to be at war with itself: when it most means to be objective, it finds itself plunged into subjectivity against its will. Naïve realism leads to physics, and physics, if true, shows that naïve realism is false. Therefore naïve realism, if true, is false; therefore it is false. And therefore the behaviourist, when he thinks he is recording observations about the outer world, is really recording observations about what is happening in him.</p> <p>From: <i>An Inquiry into Meaning and Truth</i>, 1940, Introduction.  <a href="http://russell-j.com/cool/37T-1TRO02.HTM">http://russell-j.com/cool/37T-1TRO02.HTM</a></p>	<p>科学の聖典として最も正典として(規範的なものとして)認められた形で、物理学(生理学を含む)の中に具体的に表現されている。物理学は我々に次のことを保証している。即ち、「対象物の知識」とは、対象物から出る(始まる)長い因果の連鎖の終端における出来事であり、せいぜい非常に重要な意味を帯びている。対象物から出る(始まる)対象物(自体)とは似ているとは思えないものである。我々は、素朴实在論 - 即ち、事物は見える通りのものであるという学説 - から出発する。草は緑色をしており、石は固く、雪は冷たいと思っている。しかし、物理学によれば、草の緑の固さ、雪の冷たさというものは、われわれが経験から知っている緑や固さや冷たさとは異なる、それとは異なるものである。観察者は、自分では石を観察していると思っている時、実際は、物理学を信すべきとすれば - 彼自身に対する石の影響を観察しているのである。そうだとすると、科学は、それ自身と離れているように思われる。つまり科学は、最大限客観的であろうとする時、裏に反して主観に陥ってしまっていることがわかる。素朴实在論から物理学が導かれるが、その物理学に従って考えると、物理学が真なら、素朴实在論は偽だということになる。すると素朴实在論は、それが真であるなら、同時にそれは偽であるような代物ということになるのである。結局、素朴实在論は偽である。ここから考えると、行動主義者は外的世界について観察を記録していると思っても、実は、自分自身の中で起こっていることを記録しているのである。</p>	<p>個々の哲学者の思想は、その哲学者の思想の発展・展開の歴史の形で、あるいは哲学者間の相互影響という観点で、記述され、説明されることが多い。つまり、個々の固有・特有の時代に生きた一人の人間の思想ではなく、あたかも時代を超えた真空状態で、思想が形成されたかのような記述や説明が多い。個々の哲学者は時代の産物という側面もある。時代から影響を受けるとともに、(力のある哲学者の場合は)時代に影響を与えた、というように両側面から見る必要がある。というラッセルの指摘。その思いが「西洋哲学史」として結果し、今でも世界中で読み継がれている。ラッセルのやり方を気に入らない哲学者や哲学研究者は、ラッセルの哲学史は「読み物」であり、独断的な決め付けが多いと非難するが、無味乾燥かつオリジナルの乏しい論文を書くことが学術的だと考える人は、大学でのみ生き残ることができる。哲学研究者であつても哲学者とは、この言い過ぎだろうか？</p>	
	B4-10	<p>There are many histories of philosophy, but none of them, so far as I know, has quite the purpose that I have set myself. Philosophers are both effects and causes: effects of their social circumstances and of the politics and institutions of their time; causes (if they are fortunate) of beliefs which mould the politics and institutions of later ages. In most histories of philosophy, each philosopher appears as in a vacuum; his opinions are set forth unrelated except, at most, to those of earlier philosophers. I have tried, on the contrary, to exhibit each philosopher, as far as truth permits, as an outcome of his milieu, a man in whom were crystallized and concentrated thoughts and feelings which, in a vague and diffused form, were common to the community of which he was a part.</p> <p>From: <i>A History of Western Philosophy</i>, 1945, preface.  <a href="http://russell-j.com/cool/38T-PREF.HTM">http://russell-j.com/cool/38T-PREF.HTM</a></p>	<p>我々が「哲学的」(philosophical)と呼んでいるところの「人生や世界に関する諸概念は、2つの要因から派生したものである。1つは、過去から受け継がれてきた宗教的・倫理的諸概念という要因であり、もう1つは、最も広義の意味で「科学的」(scientific)と呼んでよい種類の研究という要因である。個々の哲学者は、これら2つの要因が彼らの哲学体系に入りこむ割合に関して、非常に相違があったが、とにかく、それらの2つがともに存在していることが、哲学を特徴づけているのである。</p> <p>「哲学」という語は、ある者は広義の意味で、ある者は狭義の意味で、というように、これまで多様な意味で使われてきた。私はそれを非常に広い意味で使うことを提案する。これからその説を語らう。</p> <p>私がその言葉で理解したいところの「哲学」は、神学と科学との中間に位置するものである。神学と同様に、哲学も、これまで明確な知識を主張し得なかったような事柄に、関する思弁から成り立っている。しかし、また、科学と同様に、伝統という権威であれ、啓示という権威であれ、とにかく権威というものに訴えるよりは、人間の理性に訴えるものである。すべての明確な知識は、科学に属すると、私は主張せざるを得ない。明確な知識をこえる事柄に、関するすべての思弁は、神学に属している。しかし、神学と科学の間には、この面々からの攻撃にさらされている未踏の領域がある。この未踏の領域が哲学である。思弁的な人々にとつて最も興味ある問題のほとんど全ては、科学が解答を与えないようなものであり、神学者たる者の自信に満ちた解答をいうものは、もはや過去(前世紀)に於て持て得たような説得力を有していないように思われる。</p>		
	B4-11	<p>The conceptions of life and the world which we call 'philosophical' are a product of two factors: one, inherited religious and ethical conceptions; the other, the sort of investigation which may be called 'scientific', using this word in its broadest sense. Individual philosophers have differed widely in regard to the proportions in which these two factors entered into their systems, but it is the presence of both, in some degree, that characterizes philosophy. 'Philosophy' is a word which has been used in many ways, some wider, some narrower. I propose to use it in a very wide sense, which I will now try to explain.</p> <p>Philosophy, as I shall understand the word, is something intermediate between theology and science. Like theology, it consists of speculations on matters as to which definite knowledge has, so far, been unascertainable; but like science, it appeals to human reason rather than to authority, whether that of tradition or that of revelation. All definite knowledge - so I should contend - belongs to science; all dogma as to what surpasses definite knowledge belongs to theology. But between theology and science there is a No Man's Land, exposed to attack from both sides; this No Man's Land is philosophy. Almost all the questions of most interest to speculative minds are such as science cannot answer, and the confident answers of theologians no longer seem so convincing as they did in former centuries.</p> <p>From: <i>A History of Western Philosophy</i>, 1945, Introduction  <a href="http://russell-j.com/cool/38T-0101.HTM">http://russell-j.com/cool/38T-0101.HTM</a></p>	<p>我々が「哲学的」(philosophical)と呼んでいるところの「人生や世界に関する諸概念は、2つの要因から派生したものである。1つは、過去から受け継がれてきた宗教的・倫理的諸概念という要因であり、もう1つは、最も広義の意味で「科学的」(scientific)と呼んでよい種類の研究という要因である。個々の哲学者は、これら2つの要因が彼らの哲学体系に入りこむ割合に関して、非常に相違があったが、とにかく、それらの2つがともに存在していることが、哲学を特徴づけているのである。</p> <p>「哲学」という語は、ある者は広義の意味で、ある者は狭義の意味で、というように、これまで多様な意味で使われてきた。私はそれを非常に広い意味で使うことを提案する。これからその説を語らう。</p> <p>私がその言葉で理解したいところの「哲学」は、神学と科学との中間に位置するものである。神学と同様に、哲学も、これまで明確な知識を主張し得なかったような事柄に、関する思弁から成り立っている。しかし、また、科学と同様に、伝統という権威であれ、啓示という権威であれ、とにかく権威というものに訴えるよりは、人間の理性に訴えるものである。すべての明確な知識は、科学に属すると、私は主張せざるを得ない。明確な知識をこえる事柄に、関するすべての思弁は、神学に属している。しかし、神学と科学の間には、この面々からの攻撃にさらされている未踏の領域がある。この未踏の領域が哲学である。思弁的な人々にとつて最も興味ある問題のほとんど全ては、科学が解答を与えないようなものであり、神学者たる者の自信に満ちた解答をいうものは、もはや過去(前世紀)に於て持て得たような説得力を有していないように思われる。</p>		

	<p>B4-12</p> <p>That scientific inference requires, for its validity, principles which experience cannot render even probable, is, I believe, an inescapable conclusion from the logic of probability. For empiricism, it is an awkward conclusion. But I think it can be rendered somewhat more palatable by the analysis of the concept of "knowledge" undertaken in Part II. "Knowledge", in my opinion, is a much less precise concept than is generally thought, and has its roots more deeply embedded in unverbilized animal behaviour than most philosophers have been willing to admit. The logically basic assumptions to which our analysis leads us are psychologically the end of a long series of refinements which start from habits of expectation in animals, such as that what has a certain kind of smell will be good to eat. To ask, therefore, whether we "know" the postulates of scientific inference, is not so definite a question as it seems. The answer must be: in one sense, yes, in another sense, no; but in the sense in which "no" is the right answer we know nothing whatever, and "knowledge" in this sense is a delusive vision. The perplexities of philosophy are due, in a large measure, to their unwillingness to awaken from this blissful dream.</p> <p>From : Human Knowledge, its scope and limits, 1948, introduction, <a href="http://russell-j.com/cool/397-0102.HTM">http://russell-j.com/cool/397-0102.HTM</a></p>	<p>科学的推理はそれが正当であるためには経験によって確からしむとさえ言えない諸原理を必要とするという、とて哲学の論理が、の不確かな結論であると私は信じている。それは、経験論(経験主義)にとっては、やっかひな結論である。しかし、私は、この結論は本書の第二部で行う「知識」の概念の分析によってもう少し快適な(一味の良い)ものにする事ができると考える。「知識」は、私の意味では一般に考えられている「知」よりも正確な意味を持つ。大部分の哲学者が進んで認めようとしてきた以上に、言語化されない動物の行動のなかにずっと深く根をおろしているものである。我々の分析が深くどこかの論理的に基本的な諸假定は、心理学的には、ある種の臭いをもったのは食べられる、というふうな動物に与えられる暗示の習慣から出発する。一連の長い洗練過程の終端に存在するものである。それゆえ、我々が科学的推理の要請(基本假定)を「知っている」かどうかを問うことは、見かけほど確定的な問題ではない。その答は、ある意味では我々が知っており、ある意味では知らない、といったものに違いない。しかし「知らない」というのが正しい筈とするならば、その意味においては、我々は、何であれ何も知らないものであり、この意味では「知識」は幻滅である。哲学者たちが困惑するのは、かなりの程度まで、彼らが幸福な夢から覚めたがらないためである。</p>	
	<p>B4-13</p> <p>What are the philosophers doing when they are at work? This is indeed, an odd question, and we might try to answer it by first setting out what they are not doing. There are, in the world around us, many things which are understood fairly well. Take, for instance, the working of a steam engine. This falls within the fields of mechanics and thermo-dynamics. Again, we know quite a lot about the way in which the human body is built and functions. These are matters that are studied in anatomy and physiology. Or, finally, consider the movement of the stars about which we know a great deal. This comes under the heading of astronomy. All such pieces of well defined knowledge belong to one or other of the sciences. But all these provinces of knowledge border on a circumambient area of the unknown. As one comes into the border regions and beyond, one passes from science into the field of speculation. This speculative activity is a kind of exploration, and this, among other things, is what philosophy is. As we shall see later, the various fields of science all started as philosophic exploration in this sense. Once a science becomes solidly grounded, it proceeds more or less independently, except for borderline problems and questions of method. But in a way the exploratory process does not advance as such, it simply goes on and finds new employment. At the same time we must distinguish philosophy from other kinds of speculation. In itself philosophy sets out neither to solve our troubles nor to save our souls. It is, as the Greeks put it, a kind of sightseeing adventure undertaken for its own sake. There is thus in principle no question of dogma, or rites, or sacred entities of any kind, even though individual philosophers may of course turn out to be stubbornly dogmatic. There are indeed two attitudes that might be adopted towards the unknown. One is to accept the pronouncements of people who say they know, on the basis of books, mysteries of other sources of inspiration. The other way is to go out and look for oneself, and this is the way of science and philosophy. Lastly, we may note one peculiar feature of philosophy. If someone asks the question what is mathematics, we can give him a dictionary definition, let us say the science of number, for the sake of argument. As far as it goes this is an uncontroversial statement, and moreover one that can be easily understood by the questioner though he may be ignorant of mathematics. Definitions may be given in this way of any field where a body of definite knowledge exists. But philosophy cannot be so defined. Any definition is controversial and already embodies a philosophic attitude. The only way to find out what philosophy is, is to do philosophy. To show how men have done this in the past is the main aim of this book.</p> <p>From : Wisdom of the West, 1959, prologue, <a href="http://russell-j.com/cool/557-PROLOG1.HTM">http://russell-j.com/cool/557-PROLOG1.HTM</a></p>	<p>哲学者は、仕事中に何をやっているのであろうか?。これは実に変な質問である。そこでまず、仕事中の哲学者がやっていないことは何かについて着手することによって、その質問に対し、解答を試みてもよいだろう。私たちの周りの世界には、私達がよく理解していることがたくさんある。たとえば、蒸気機関の働きを考えてみるがよい。これは機械工学(機械学)と熱力学の分野に属することである。さらにまた、人体がどのように造られ、どのような働きをするかについても、私たちはかなり多くのことを知っている。これは解剖学と生理学で研究される問題である。あるいは最後に、星の動きのような、多くのこのわかっているものも考えてみるといい。これは天文学の表題のもとにある(扱われる)ものである。こういった、境界のはっきりした(十分に定義された)知識は全て、諸科学のなかのいずれかに属するものである。</p> <p>だが、これらの知識の分野(領域)の全ては、それらの周囲をとり巻く未知のものに隣接している。境界領域に入り込み、さらにそれを踏まえ、科学から思弁の領域へと移っていく。この脱身活動も一種の研究であり、これは、とりわけ、哲学本来のものである。後で分かるように、科学の多くの分野はみな、この意味での哲学的探究として出現したものである。ひとたび一つの科学が、しっかりと基礎が確立すると、それは、境界領域の問題と方法の問題とを除けば、多かれ少なかれ、進みかたを定める。しかし、ある意味で、この探究過程は、そういうもの(吉田の姿のまま)として進むものではない。それはただ進み続け、そして新たな仕事を見つけて出すのである。</p> <p>同時に私たちは、哲学とその他の各種の思弁とを、区別しなければならない。本来、哲学は、私たちの悩みを解決しようとするものでもなければ、私たちの魂を救おうとするものでもない。哲学とは、ギリシヤ人が言っているように(その目的のためでなく、そのもののために行われる)一種の冒險的な観光旅行である。このように従って、本来的には、原則として、ドグマ(独断的な意見や教義)の問題も、儀式も、いかなる種類の聖なる実体もない。たとえ個々の哲学者が確かに手に負えないほど、ドグマ的であることがわかったとしても、である。実際、未知なものに対して取りうる態度には2つある。1つは、書籍や神祕に聞いて、あるいはその他の霊の根源に基いて、自分が知っていると言っている人たちの意見(見解)を、(そのまま)受け入れるやりかたである。今1つは、出ていって、みずから探究するやりかたで、これが科学と哲学の方法である。</p> <p>最後に、哲学の固有な特徴を1つあげてよいだろう。誰かに、数学とは何かと質問された場合、私たちは、たとえば、それは数の科学だという辞書の定義を、議論の種として与えることができる。これは、議論に関するがざり、今さら議論の余地のない陳述であり、その上、質問者が数学を知らなくともすぐ理解することができる。定義は、このように、ひととまりの明確な知識の存在する分野なら、いかなる分野についても、与えることができる。しかし、哲学は、このように定義することはできない。いかなる定義にも、議論の余地があり、定義(の提示は)は既に1つの哲学的態度の境界である。哲学とは何か、という問いを見、出す方法、哲学を実践することである。人ひとが従来このことをどのようにやってきたを示すことが本書の主要目的である。</p>	
<p>*</p>	<p>B4/C1-01</p> <p>I was invited to give the Lowell lectures in Boston during the spring of 1914, and concurrently to act as temporary professor of philosophy at Harvard. I announced the subject of my Lowell lectures, but could not think of anything to say. I used to sit in the parlour of 'The Beetle and Wedge' at Moultsford, wondering what there was to say about our knowledge of the external world, on which before long I had to deliver a course of lectures. I got back to Cambridge from Rome on New Year's Day 1914, and, thinking that the time had come when I really must get my lectures prepared, I arranged for a shorthand typist to come next day, though I had not the vaguest idea what I should say to her when she came. As she entered the room, my ideas fell into place, and I dictated in a completely orderly sequence from that moment until the work was finished. What I dictated to her was subsequently published as a book with the title Our Knowledge of the External World as a Field for Scientific Method in Philosophy.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 7 : Cambridge Again, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB17-120.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB17-120.HTM</a></p>	<p>私は、1914年の春に米国ボストンにおいて、ローウエル記念講義を行うとともに(注：Abbott Lawrence Lowell, 1858-1943)当時ハーバード大学哲学部第一アールードで哲学の短期非常勤講師を務めるようにとの招聘を受けた。私は、ローウエル記念講義の主題を公表したが、何を話したらよいかまったく思いつかなくなるまで時間が過ぎた。私は、(テムズ川上流にある)マールスフローアの「The Beetle and Wedge」の1914年1月1日の新年会に、外部世界に関する人間の知識。--このテーマで近い内に一連の講義をしなければならなかった。--近づいて、話すべきこととして何かあるだろうかと思案した。私は、1914年の元旦にローウエル記念講義に戻った。そして、本当に意の準備をしなければならぬ時期が来たと思ったので、その翌日に速記タイピストに来てもらうよう手配した。ただし、彼女が来たとき何を言うか、その時はまったく何の考えも持たずあわてていなかった。彼女が部屋に入ってきた時に、私の考えははかばか定まった。そしてその瞬間から仕事を始めるまで完全に順序とした順序で、口述した(注：このように、口述したものを速記タイピストに打たせ、ほとんど修正しないで出版するやり方は、専門書ではないいわゆる「popular books」の大部分に以後採用されるようになる)。私が彼女に口述したものは、後に単行本として、「哲学の科学的方法の適用分野としての、外界についての知識」(1914)という書名で出版された。</p>	

★		B4/C1-02	<p>I was pleased to be writing this history because I had always believed that history should be written in the large. I had always held, for example, that the subject matter of which Gibbon treats could not be adequately treated in a shorter book or several books. regarded the early part of my History of Western Philosophy as a history of culture, but in the later parts, where science becomes important, it is more difficult to fit into this framework. I did my best, but I am not at all sure that I succeeded. I was sometimes accused by reviewers of writing not a true history but a biased account of the events that I arbitrarily chose to write of. But to my mind, a man without a bias cannot write interesting history if, indeed, such a man exists. I regard it as mere humbug to pretend to lack of bias. Moreover, a book, like any other work, should be held together by its point of view. This is why a book made up of essays by various authors is apt to be less interesting as an entity than a book by one man. Since I do not admit that a person without bias exists, I think the best that can be done with a large-scale history is to admit one's bias and for dissatisfied readers to look for other writers to express an opposite bias. Which bias is nearer to the truth must be left to posterity. This point of view on the writing of history makes me prefer my History of Western Philosophy to the Wisdom of the West which was taken from the former, but ironed out and tamed although I like the illustrations of Wisdom of the West.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 6: America, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB26-080.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB26-080.HTM</a></p>	<p>私は喜んでこの哲学史を書いていた。なぜなら私は、歴史は細くしないで書かれるべきだとずっと信じていたからである。たとえば、ギボン(Eduard Gibbon, 1737-1794)というキリストの歴史家で『ローマ帝国衰亡史』の著者が扱っている主題は、『ローマ帝国衰亡史』よりも簡略な本や、数冊の本で扱っても十分ではないだろう、という考えを私はいつも抱いていた。『西洋哲学史』の前半は、文化の歴史という観点で書かれた。しかし、科学が重要になるところ、後半においては、このわく組みにピッタリあてはめることは、一段と難しい仕事であった。私は最善をつくしたが、成功したかどうかは確信がもてない。</p> <p>私は時々批評家から、私は真実の歴史を書かず、書こうと強制的に書いた(歴史上の)出来事(出来事)を説明している、と非難された。しかし私の考えでは、何らの先入観(偏見)をもっていない人間は - もしかりにほんとうにそのような人間が存在するとして - 興味深い歴史など書くことができないだろう。私は、先入観(偏見)がないとすることは、単なる「べき」にすぎないことを、さらに言えば、本というものは、他のいかなる著作同様、そのよって立つ観点とともに、考えられるべきものである。これが、多数の著者による論文集が、一人の著者の本よりも、一つの統一性としてより面白くないものになりがちな理由である。私は先入観(偏見)を持たない人間は存在しないと信じているので、大規模の歴史と取り組むにあたっては、先入観(偏見)を認めることは、まず人間の先入観(偏見)を認め、不満な読者のためには反対の先入観(偏見)を表明している他の著者を探してやることである、と考える。どちらの先入観(偏見)がより真に近いかは後述にゆだねなければならない。歴史(叢)執筆に関するこのような観点から、私は『西洋の知恵』よりも『西洋哲学史』(注:両方ともラッセルの著作)の方を好む。『西洋の知恵』は『西洋哲学史』をもとにして執筆したものである。しかし『西洋の知恵』の中にあげてある(ラッセルの)議論は、好きではあるけれども、(多数の関係で)議論のあるところは調整するとともに表現を和らげている。</p> <p>私たちは、アメリカ時代の最後をプリンストンで過ごした。プリンストンでは、湖畔に建てた小さな家を手に入れた。プリンストン滞在中、アインシュタインとエタノールをかなり知るようになった。私は、週に一度アインシュタインの家を訪ね、彼やゲーデルやパワリと議論した。議論はいくつかの点で期待を裏切ることであった。というのは、この3人もユダヤ人で、亡命者で、世界市民のつもりであったが、形而上学に対するトイツの先入観をもっており、お互い最大限努力したにもかかわらず、議論を展開する共通の前提に到達することがなかった(訳注:ゲーデルはユダヤ人ではないらしい。ただし、サルトルが「ユダヤ人」(岩波新書)で指摘するように、「ユダヤ人」の定義は難しそうだ)。ゲーデルは、結局、純粋のプロト主義者であることがわかった。そして明らかに、永遠の「否定(not)」が天国には保存されており、有徳な論理学者は死後(来世)に天国で永遠の「否定」に出会うことを期待できると信じていた(参考:否定神学)。</p> <p>プリンストンの社会はきわめて心地よいものであり、全体的に見て私がアメリカで出会った他のどの社会集団よりも心地よいものであった。</p>		
		B4/C1-03	<p>The last part of our time in America was spent at Princeton, where we had a little house on the shores of the lake. While in Princeton, I came to know Einstein fairly well. I used to go to his house once a week to discuss with him and Gödel and Pauli. These discussions were in some ways disappointing, for, although all three of them were Jews and exiles and, in intention, cosmopolitans, I found that they all had a German bias towards metaphysics, and in spite of our utmost endeavours we never arrived at common premisses from which to argue. Gödel turned out to be an unadulterated Platonist, and apparently believed that an eternal 'not' was laid up in heaven, where virtuous logicians might hope to meet it hereafter. The society of Princeton was extremely pleasant, pleasanter, on the whole, than any other social group I had come across in America.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 6: America, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB26-090.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB26-090.HTM</a></p>	<p>私たちは、アメリカ時代の最後をプリンストンで過ごした。プリンストンでは、湖畔に建てた小さな家を手に入れた。プリンストン滞在中、アインシュタインとエタノールをかなり知るようになった。私は、週に一度アインシュタインの家を訪ね、彼やゲーデルやパワリと議論した。議論はいくつかの点で期待を裏切ることであった。というのは、この3人もユダヤ人で、亡命者で、世界市民のつもりであったが、形而上学に対するトイツの先入観をもっており、お互い最大限努力したにもかかわらず、議論を展開する共通の前提に到達することがなかった(訳注:ゲーデルはユダヤ人ではないらしい。ただし、サルトルが「ユダヤ人」(岩波新書)で指摘するように、「ユダヤ人」の定義は難しそうだ)。ゲーデルは、結局、純粋のプロト主義者であることがわかった。そして明らかに、永遠の「否定(not)」が天国には保存されており、有徳な論理学者は死後(来世)に天国で永遠の「否定」に出会うことを期待できると信じていた(参考:否定神学)。</p> <p>プリンストンの社会はきわめて心地よいものであり、全体的に見て私がアメリカで出会った他のどの社会集団よりも心地よいものであった。</p>		
★		B4/C1-04	<p>My defence for writing stories, if defence were needed, is that I have often found fables the best way of making a point. When I returned from America in 1944, I found British philosophy in a very odd state, and, it seemed to me, occupied solely with trivialities. Everybody in the philosophical world was babbling about 'common usage'. I did not like this philosophy. Every section of learning has its own vocabulary and I did not see why philosophy should be deprived of this pleasure. I therefore wrote a short piece containing various fables making fun of this cult of 'common usage', remarking that what the philosophers really meant by the term was 'common-room usage'. I received a letter when this was published from the arch offender saying that he approved, but that he could not think against whom it was directed as he knew of no such cult. However, I noticed that from that time on very little was said about 'common usage'.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-300.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-300.HTM</a></p> <p>* babble (v): (小見などがわがわがからぬ)片言を言う、べちゃくちゃしゃべる; たわいもないおしゃべりする</p>	<p>私が小説を書くことに対する弁明は、もし弁明が必要とするならばだが、要點(自分が伝えたいこと)をわかってもらうためには、寓話(寓話)が最良の方法であることにしばしば気付いた(発見した)ということである。1944年にアメリカから帰国した時、私は、英国哲学が非常におかしな状態にあることに気付いた。また、英国哲学は専らとるにたらないことばかりに注意を集中しているように思われた。英国哲学界の誰もが、「日常的な用法」(通常の用法、'common usage')について、無駄なおしゃべり(論議)を続けていた。このような哲学を私は好まなかった。学問のあらゆる部門がそれぞれ特有の語彙(用語集)を持っている。なぜ哲学だけがこの楽しみを奪いとられないわけにならないの、理解できなかった。そこで私は、この「日常的な用法」礼賛をからかった多くの寓話を織り込んだ。短い評論を書き(松下注:「日常的な用法」礼賛) the cult of common usage は、みずず書房から出されている「ラッセル自伝的思想」に収録されている。)、こう批評した。「日常的な用法」(common usage)は、言葉で哲学者たちが本当に意味しているのは、談話室での言葉使用法('common-room-usage')である」と。この評論が発表された時、その「日常的な用法」の主犯から手紙を受け取った。手紙には、私の意見に賛成する、しかしそのような「日常的な用法」礼賛者は一も知らない、私の反論が誰に向けられているのかわからないと書かれていた。けれども、その時以後、「日常的な用法」に注意を払う者がほとんどいなくなったことに気付いた。</p>		
		B5	<p>数学基礎論、論理学</p>			

B5-01	<p>At the age of eleven, I began Euclid, with my brother as my tutor. This was one of the great events of my life, as dazzling as first love. I had not imagined that there was anything so delicious in the world. After I had learned the fifth proposition, my brother told me that it was generally considered difficult, but I had found no difficulty whatever. This was the first time it had dawned upon me that I might have some intelligence. From that moment until Whitehead and I finished Principia Mathematica, when I was thirty-eight, mathematics was my chief interest, and my chief source of happiness. Like all happiness, however, it was not unalloyed. I had been told that Euclid proved things, and was much disappointed that he started with axioms. At first I refused to accept them unless my brother could offer me some reason for doing so, but he said: "If you don't accept them we cannot go on," and as I wished to go on, I reluctantly admitted them pro tem (=pro tempore). The doubt as to the premisses (premises) of mathematics which I felt at that moment remained with me, and determined the course of my subsequent work.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB11-290.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB11-290.HTM</a></p>	<p>11歳の時私は、兄を先生にして、ユークリッド幾何学を学習し始めた。これは私の生涯において非常に重要な出来事の一つであり、初恋と同様に絶頂的であった。この世にこのように素晴らしいものがあるとは、私はそれまで想像したことなかった。私が第5公準を学んでから、兄はこれは非常に難しいと一般には考えられていると言ったが、私は少しも難しいとは思わなかった。これは、私が何年かの知識を持つまで、私が現れた最初であった。この時から私が38歳の年にホワイトヘッドとプリンキピア・マテマティカ(数学原理)を完成するまで、数学が私の主な関心事であり、主な幸福の源であった。けれども、幸福といわれるもの全てがそうであるように、純粋な幸福というわけではなかった。私はユークリッドで始まるような事柄を証明したと聞いていたが、兄が(証明なしで)公理からスタートしたので、私は大変失望した。最初私は、もし兄がそれらの理由を説明できないならばそれらの公理を受け入れることはできないといったが、兄は、「もしお前がそれを受け入れなければならぬならば、それはできない」と言った。私は数学の学習を続けたかったので、気が進まなかったが一時的に認めることとした。その時感した数学の前提に関する疑問が私に残ることになった。(松下注:ここではユークリッド幾何学が、5つの公準=前提から出発していることをいっている。)そうしてそれがその後の私の勉強の方向を決定した。</p>	
B5-02	<p>Great difficulties are associated with the null-class, and generally with the idea of nothing. It is plain that there is such a concept as nothing, and that in some sense nothing is something. In fact, the proposition nothing is not nothing is undoubtedly capable of an interpretation which makes it true—a point which gives rise to the contradictions discussed in Plato's Sophist. In Symbolic Logic the null-class is the class which has no terms at all; and symbolically it is quite necessary to introduce some such notion. We have to consider whether the contradictions which naturally arise can be avoided.</p> <p>[From: The Principles of Mathematics, 1903, Chap. VI, Classes; §73]  <a href="http://fair-use.org/bertrand-russell/the-principles-of-mathematics/§73">http://fair-use.org/bertrand-russell/the-principles-of-mathematics/§73</a></p>	<p>「空集合」に関して、また一般的に「無」の概念に関して、非常に大きな困難がある。「無」のような概念が存在すること、またある意味で「無」は何かあるものであることは明かである。事実に「無は存在しないものではない」という命題は、疑いもなく、それを真とする解釈が可能であり、その解釈はプラトンの『ソフィスト』で議論された矛盾を生ずる問題を生ずる。記号論理学においては、「空集合」とはまったく存在を含まない集合である(これをともいう)。また、記号論理学において(記号論理学において?)、そういったような概念を導入することは是非必要である。(そうして)我々は当然のごとく生ずる矛盾を避ける事ができるかどうか、よく検討しなければならぬ。</p>	那須さん(2013.10.13)
B5-03	<p>... During my fourth year I read most of the great philosophers as well as masses of books on the philosophy of mathematics. James Ward was always giving me fresh books on this subject, and each time I returned them, saying that they were very bad books. I remember his disappointment, and his painstaking endeavours to find some book that would satisfy me. In the end, but after I had become a Fellow, I got from him two small books, neither of which he had read or supposed of any value. They were Georg Cantor's Mannichfaltigkeitslehre, and Frege's Begriffsschrift. These two books at last gave me the gist of what I wanted, but in the case of Frege I possessed the book for years before I could make out what it meant. Indeed, I did not understand it until I had myself independently discovered most of what it contained.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 3; Cambridge, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB13-230.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB13-230.HTM</a></p>	<p>... 大学4年のとき私は、多数の数理哲学の本とともに大部分の偉大な哲学者の著書を読んだ。ジェームズ・ワード(James Ward, 1843-1925)は、数理哲学の新しい本をいつも私に貸してくれた。そうして、それらの本を彼に返却するとき、私はいつも大変ひどい本でしたと答えた。彼のその時の理解が、私が得たその本を見つけたために骨身を惜しまずに努力している姿を、私は覚えている。そしてついに、私が特別研究員になった後のことであるが、私は彼から2冊の小さな本 - - 彼自身は、それらの本を読んでいなかったし、またそれは「原書をもとに思っていないから」 - - をもらった。その2冊とは、ゲオルク・カントール(Georg Cantor, 1845-1918)の「超限集合論(Mannichfaltigkeitslehre, 1883)」とフレーゲ(Gottlob Frege, 1848-1925)の「概念記法(Begriffsschrift, 1879)」であった。この2冊の本は、私が求めていた要点をついに与えてくれた。しかしフレーゲの本の場合は、そこに書かれている内容をずっと理解できないまま、何年も所有していた。事実、私は、その本に含まれている内容の大部分を、(フレーゲの本を読まずに)自分で理解するまでは、フレーゲの本に書かれている意味内容を理解できなかった。</p>	
B5-04	<p>... Couturat was for a time a very ardent advocate of my ideas on mathematical logic, but he was not always very prudent, and in my long duel with Poincare I found it sometimes something of a burden to have to defend Couturat as well as myself. His most valuable work was on Leibniz's logic. Leibniz wished to be thought well of, so he published only his second-rate work. All his best work remained in manuscript. Subsequent editors, publishing only what they thought best, continued to leave his best work unpublished. Couturat was the first man who unearthed it. I was naturally pleased, as it afforded documentary evidence for the interpretation of Leibniz which I had adopted in my book about him on grounds that, without Couturat's work, would have remained inadequate.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5; First marriage, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB15-170.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB15-170.HTM</a></p>	<p>クーチュラは、一時期私の数理論理学の種々のアイデア(思想・見解)の非常に熱心な擁護者であったが、いつも非常に思慮深いというわけではなかった。そういうわけに、私の長いがアンカ(Jules Henri Poincaré, 1854-1912)との論争において、自分自身だけでなくクーチュラをも弁護しなければならないということは、時々いくらか重荷となった。彼の最も価値のある著作は、ライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716)の論理学に関するものであった。ライプニッツは、良く思われないと望んだ。そこで彼は、二流の著作しか出版しなかった。彼の最良・最高の著作はすべて原稿のままであった。(ライプニッツ死後)彼の著作を扱った編纂者たちも、自分たちが最良・最高と考えたものだけを出版し、彼の最良・最高の著作(印刷)を扱った編纂者も、ライプニッツの最高の著作を発掘し、世に紹介した最初の人であった。私は当然のごとく嬉しく思った。なぜなら、クーチュラの著作がなかったら不十分なままであったであろう(弱い)根拠のもとで、ライプニッツに関する自分の著書(A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz, 1900)の中で採用したライプニッツ解釈を支持する証拠資料を、クーチュラの著書が提供してくれたからである。その頃私は、マクガート(McTaggart, John McTaggart Ellis, 1866-1925, 英国の哲学者)とスタウト(Stout, George Frederick, 1860-1949, 英国の哲学者)に、哲学者によって扱われていたドイツ観念論の「過剰(浴槽)」から抜け出しつつあった。この(脱出)過程において私は、当時頻りに会っていたムーア(George E. Moore, 1873-1950, 英国の哲学者)から非常に助けられた。感銘的境界が実在しないこと、そして「凡て皆手」といったような物の実在を再び信ずることができ、ことに私はひどく興奮した。しかし、(問題のいろいろな側面の内)私にとって最も興味があったのは、論理学の側面であった。関係が実在する(現実的なものである)と考え、これは非常に面白いことであった。そして私は、論理は主語-述語(主辞-置辞)からなるという考え方が形而上学の上に及ぼす甚大な影響(結果)を発見することに興味をもった。偶然の事情で、私はライプニッツを読むことになった。というのは、ライプニッツに関する講義はなされなければならないが、(従来の)マクガート・ト・デイ・コレジは私にこの科目だけマクガートに代わって担当するよう依頼してきたのである。ライプニッツに関する調査研究と批評の中で、主にムーアの手引きにより、私が導かれた論理学に関する新しい見方を例証する機会を見つけたのである。</p>	
B5-05	<p>... I was at this time beginning to emerge from the bath of German idealism in which I had been plunged by McTaggart and Stout. I was very much assisted in this process by Moore, of whom at that time I saw a great deal. It was an intense excitement, after having supposed the sensible world unreal, to be able to believe again that there really were such things as tables and chairs. But the most interesting aspect of the matter to me was the logical aspect. I was glad to think that relations are real, and I was interested to discover the dire effect upon metaphysics of the belief that all propositions are of the subject-predicate form. Accident led me to read Leibniz, because he had to be lectured upon, and McTaggart wanted to go to New Zealand, so that the College asked me to take his place so far as this one course was concerned. In the study and criticism of Leibniz I found occasion to exemplify the new views on logic to which, largely under Moore's guidance, I had been led.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5; First marriage, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB15-180.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB15-180.HTM</a></p>	<p>その頃私は、マクガート(McTaggart, John McTaggart Ellis, 1866-1925, 英国の哲学者)とスタウト(Stout, George Frederick, 1860-1949, 英国の哲学者)に、哲学者によって扱われていたドイツ観念論の「過剰(浴槽)」から抜け出しつつあった。この(脱出)過程において私は、当時頻りに会っていたムーア(George E. Moore, 1873-1950, 英国の哲学者)から非常に助けられた。感銘的境界が実在しないこと、そして「凡て皆手」といったような物の実在を再び信ずることができ、ことに私はひどく興奮した。しかし、(問題のいろいろな側面の内)私にとって最も興味があったのは、論理学の側面であった。関係が実在する(現実的なものである)と考え、これは非常に面白いことであった。そして私は、論理は主語-述語(主辞-置辞)からなるという考え方が形而上学の上に及ぼす甚大な影響(結果)を発見することに興味をもった。偶然の事情で、私はライプニッツを読むことになった。というのは、ライプニッツに関する講義はなされなければならないが、(従来の)マクガート・ト・デイ・コレジは私にこの科目だけマクガートに代わって担当するよう依頼してきたのである。ライプニッツに関する調査研究と批評の中で、主にムーアの手引きにより、私が導かれた論理学に関する新しい見方を例証する機会を見つけたのである。</p>	





	B5-09	<p>Philosophers and bookish people generally tend to live a life dominated by words, and even to forget that it is the essential function of words to have a connection of one sort or another with facts, which are in general non-linguistic. Some modern philosophers have gone so far as to say that words should never be confronted with facts but should live in a pure, autonomous world where they are compared only with other words. When you say, "the cat is a carnivorous animal," you do not mean that actual cats eat actual meat, but only that in zoology books the cat is classified among carnivora. These authors tell us that the attempt to confront language with fact is "metaphysics and is on this ground to be condemned. This is one of those views which are so absurd that only very learned men could possibly adopt them. What makes it peculiarly absurd is its blindness to the position of language in the world of fact. Language consists of sensible phenomena just as much as eating or walking, and if we can know nothing about facts we cannot know what other people say or even what we are saying ourselves. Language, like other acquired ways of behaving, consists of useful habits and has none of the mystery with which it is often surrounded. There is nothing new in the superstitious view of language, which has come down to us from pre-historic ages: "Words from the earliest times of which we have historical records, have been objects of superstitious awe. The man who knew his enemy's name could, by means of it, acquire magic powers over him. We still use such phrases as "in the name of the Law." It is easy to assent to the statement "in the beginning was the Word". This view underlies the philosophies of Plato and Carnap and of most of the intermediate metaphysicians (An Inquiry into Meaning and Truth, page 23). From: My Philosophical Development, 1959, chap. 13: Language. <a href="http://russell-j.com/cool/54T-1301.HTM">http://russell-j.com/cool/54T-1301.HTM</a></p>	<p>哲学者や書物愛読者 (読書家) は一般的に、言葉によって支配される生活を送る傾向がありました。一般的に、非言語的であることの事実と何らかの関聯を有することは、言語的・本質的な機能であるということをおぼろげに忘れる傾向さえある。現代の哲学者のなかには、言葉は決して事実とつきあわせてはならず、純粋な (言葉以外のものとは異なる) 自律的な世界に生きるべきであり、他の言葉とのみ比較されるべきだとまで言う者もいる。(たとえば)「猫は肉食動物である」と言うとき、それは、現実の猫が現実の肉を食べるということを意味しているのではなく、動物学の本では猫は肉食動物の中に分類されている、ということの意味するにすぎない (というしだいで) である。こう考えている書物愛読者は、言語と事実とつきあわせる試みを「形而上学」であり、それゆえ非難されるべきであると我々に告げる。これは、きわめて馬鹿げた見解であり、恐らく、非常に学問のある者だけが採用できる見解であろう。それを特に馬鹿げたものにしてしているのは、事実の世界における言語の位置に盲点があることである。言語は、食べたり歩いたりする、と全く同様に、知覚できる現象から成り立っている。もし、我々 (人間) が事実について何も知りえないとしたならば、我々は他人の言うことを知りえないはずであるし、また、自分自身が何を言っているかも知ることができないはずである。言語は、他の獲得された他の行動様式と同様、有用な習慣から成り立っており、しばしばそれに取り囲まれている神秘性をまったく持っていない (のである)。言語に関する迷信的な見解には何の新しい点もない。それは有史以前の時代から我々に伝えられてきたものである。</p> <p>「我々が歴史的記録を有する最古の時代以来、言葉は迷信的な魔術の対象であった。敵の名を知っている者は、それにより敵に対する魔力を手に入れることができた。そして今でもなお、我々は「法律の名において」というような句で用いている。「はじめて言葉ありき」といふ主張に同意することは容易である。この見解は、ヘラクリトスとカルナップおよびその間に出た大多数の形而上学者たちの、哲学の根柢をなしている。」 (『意味と真理の研究』, p.23)</p> <p>「私の堅持のこの変化において、失われたものがあった。 (私にとって) 得られたものもなかった。失われたものは、不完全性と確定性 (最終的な結論) と確定性を見つけて希望であった。得られたものは、私の嫌いなあるいくつかの真理への新たな服従であった。けれども、以前のいくつかの信念の放棄は決して完全なものではなかった。(それらもいくつかの) いくつかのものは私にもとに押し込まれ、押し付けられている。(即ち、) 私は今でも、真理は事実への関係に依存しており、しかも一般的に言って、事実是非人間的なものであると考えている。(また) 私は今でも、人間は宇宙的にはとくに足りないものであり、こと今 (今という時間とこの場所) によって定められずに宇宙を公平に見渡すことである。『存在者』(注: 神あるいは絶対者、そういうものがあるとして - ならば、恐らく、書物の終りに近くにつける脚注以外では、人間についてほとんど言及しないであろう) と考えている。しかし、私はもはや、人間の要素の存在する場所からそれら (人間の要素) を遠く引き離すことを望まない。私はもはや、知性、感覚、そして、我々、プラトンのイデアの世界のみが「真実の世界」に近づくことができる、という感じ (感覚的意見) はもっていない。私は以前は、感覚や、感覚の上にすぎられた思想を、ひとつか年級に専念。そこから我々人間は、感覚から解放された。感覚に束縛されない。思考によって自由になることができる (一自由とされる) と考えていた。現在ではまったくそのような感じ (感覚的意見) は持っていない。(現在では) 感覚と、感覚の上に乗られた思想を、半端な格好で、決してなく、怒りとして考えている。人間は不完全であるけれども、怒りとして、ツツの単子のように、真を映し出すことができる、と私は考える。そうして、自分を物に歪めたいとすることから出来る限り努めることが、哲学者の義務である、と考える。しかし、我々人間の本質から、そういう歪曲は不可避であるとはっきり認めることもまた、哲学者の義務である。そういう歪曲のうちで最も根本的なものは、我々人間は世界をこと今 (今という時間とこの場所) の見地から見るのであり、有神論者が神に輝くような広い公平さで見ることではない、ということである。そのような公平な見方に達することは我々人間には不可能であるが、それに向ってある確率でなにか一定の距離を歩むことはできる。そうして、この目標への道案内をすることこそ哲学者の最高の義務なのである。</p>			
	B5-10	<p>In this change of mood, something was lost, though some thing also was gained. What was lost was the hope of finding perfection and finality and certainty. What was gained was a new submission to some truths which were to me repugnant. My abandonment of former beliefs was, however, never complete. Some things remained with me, and still remain: I still think that truth depends upon a relation to fact, and that facts in general are non-human: I still think that man is cosmically unimportant, and that a Being, if there were one, who could view the universe impartially, without the bias of here and now, would hardly mention me, except perhaps in a footnote near the end of the volume; but I no longer have the wish to thrust out human elements from regions where they belong. I have no longer the feeling that intellect is superior to sense, and that only Plato's world of ideas gives access to the 'real' world. I used to think of sense, and of thought which is built on sense, as a prison from which we can be freed by thought which is emancipated from sense. I now have no such feelings. I think of sense, and of thoughts built on sense, as windows, not as prison bars. I think that we can, however imperfectly, mirror the world, like Leibniz's monads; and I think it is the duty of the philosopher to make himself as undistorting a mirror as he can. But it is also his duty to recognize such distortions as are inevitable from our very nature. Of these, the most fundamental is that we view the world from the point of view of the here and now, not with that large impartiality which theists attribute to the Deity. To achieve such impartiality is impossible for us, but we can travel a certain distance towards it. To show the road to this end is the supreme duty of the philosopher. From: My Philosophical Development, 1959, chap. 17: Language. <a href="http://russell-j.com/cool/54T-1301.HTM">http://russell-j.com/cool/54T-1301.HTM</a></p>	<p>「私の堅持のこの変化において、失われたものがあった。 (私にとって) 得られたものもなかった。失われたものは、不完全性と確定性 (最終的な結論) と確定性を見つけて希望であった。得られたものは、私の嫌いなあるいくつかの真理への新たな服従であった。けれども、以前のいくつかの信念の放棄は決して完全なものではなかった。(それらもいくつかの) いくつかのものは私にもとに押し込まれ、押し付けられている。(即ち、) 私は今でも、真理は事実への関係に依存しており、しかも一般的に言って、事実是非人間的なものであると考えている。(また) 私は今でも、人間は宇宙的にはとくに足りないものであり、こと今 (今という時間とこの場所) によって定められずに宇宙を公平に見渡すことである。『存在者』(注: 神あるいは絶対者、そういうものがあるとして - ならば、恐らく、書物の終りに近くにつける脚注以外では、人間についてほとんど言及しないであろう) と考えている。しかし、私はもはや、人間の要素の存在する場所からそれら (人間の要素) を遠く引き離すことを望まない。私はもはや、知性、感覚、そして、我々、プラトンのイデアの世界のみが「真実の世界」に近づくことができる、という感じ (感覚的意見) はもっていない。私は以前は、感覚や、感覚の上にすぎられた思想を、ひとつか年級に専念。そこから我々人間は、感覚から解放された。感覚に束縛されない。思考によって自由になることができる (一自由とされる) と考えていた。現在ではまったくそのような感じ (感覚的意見) は持っていない。(現在では) 感覚と、感覚の上に乗られた思想を、半端な格好で、決してなく、怒りとして考えている。人間は不完全であるけれども、怒りとして、ツツの単子のように、真を映し出すことができる、と私は考える。そうして、自分を物に歪めたいとすることから出来る限り努めることが、哲学者の義務である、と考える。しかし、我々人間の本質から、そういう歪曲は不可避であるとはっきり認めることもまた、哲学者の義務である。そういう歪曲のうちで最も根本的なものは、我々人間は世界をこと今 (今という時間とこの場所) の見地から見るのであり、有神論者が神に輝くような広い公平さで見ることではない、ということである。そのような公平な見方に達することは我々人間には不可能であるが、それに向ってある確率でなにか一定の距離を歩むことはできる。そうして、この目標への道案内をすることこそ哲学者の最高の義務なのである。</p>			
	B5/C1-01	<p>Meanwhile Alys was more unhappy than I was, and her unhappiness was a great part of the cause of my own. We had in the past spent a great deal of time with her family, but I could no longer endure her mother, and that we must therefore leave Fernhurst. We spent the summer near Broadway in Worcestershire. Pain made me sentimental, and I used to construct phrases such as "Our hearts build precious shrines for the ashes of dead hopes". I even descended to reading Maeterlinck. Before this time, at Grantchester, at the very height and crisis of misery, I finished The Principles of Mathematics. The day on which I finished the manuscript was May 23rd. At Broadway I devoted myself to the mathematical elaboration which was to become Principia Mathematica. By this time I had secured Whitehead's cooperation in this task, but the unreal, insincere, and sentimental frame of mind into which I had allowed myself to fall affected even my mathematical work. I remember sending Whitehead a draft of the beginning, and his reply: "Everything, even the object of the book, has been sacrificed to making proofs look short and neat." This defect in my work was due to a moral defect in my state of mind. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6: Principia Mathematica, 1967 <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-110.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-110.HTM</a></p>	<p>その間、アリスは私以上に不幸であり、また、彼女が不幸であることが私自身の不幸の原因の大きな部分だとしていた。私たちが夫婦は、過去きわめて多くの時間、彼女の家族と一緒に過ごした。しかし、私は彼女にもうこれ以上彼女の母にがまんができないので、ブロードウェイ (Broadway) を去らなければならぬと告げた。私たちは、その年 (1902年) の夏を、ブロードウェイにある「ロードウェイ」 (Roadway) に渡った。私は心癒のため感傷的になり、「我々の心は、死せる希望の塵埃のために立派な霊廟を建てる (Our hearts build precious shrines for the ashes of dead hopes)」 (『良い訳があったらご教授ください!』) といったような文句を多く作った。メーテルリンクの作品を讀むまいとして、注: フラセルは「注: 神祕主義を信じないため、そのような表現になっていると思われる)。この頃以前に、グランチェスターにおいて、私は、悲惨の頂点と危機のうちに、「数学の原理」 (The Principles of Mathematics) を書き上げた。原稿を書き終えたのは、(1902年) 5月23日。フレイブルが5月30日の朝、1日、ことであった。ブロードウェイでは、後に「プリンキピア・マテマティカ」になる、数学の精密化に専念した。それまでは、この仕事でホワイトヘッドの協力を得ていたが、自分自身なるがままにして、非現実的で、不誠実で、感傷的な自分が私のこの数学の仕事に対してさえ見えさせていた。私は、草稿の初めの部分をホワイトヘッドに送ったこと、また「すべてが、この本の目的さえも、証明を簡単にできんとしたものに見えるようにするために、犠牲にされている。」という返事を取ったことを記憶している。私の仕事上のこの欠点は、當時の私の精神状態における道徳的欠陥によるものであった。</p>			

		B5/C1-02	<p>... I was trying hard to solve the contradictions mentioned above. Every morning I would sit down before a blank sheet of paper. Throughout the day, with a brief interval for lunch, I would stare at the blank sheet. Often when evening came it was still empty. We spent our winters in London, and during the winters I did not attempt to work, but the two summers of 1903 and 1904 remain in my mind as a period of complete intellectual deadlock. It was clear to me that I could not get on without solving the contradictions, and I was determined that no difficulty should turn me aside from the completion of Principia Mathematica, but it seemed quite likely that the whole of the rest of my life might be consumed in looking at that blank sheet of paper. What made it the more annoying was that the contradictions were trivial, and that my time was spent in considering matters that seemed unworthy of serious attention. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6: Principia Mathematica, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-130.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-130.HTM</a></p>	<p>・・・当時(注:1903年~1904年)私は、前述したパラドクス(論理的矛盾)を解決しようと懸命に努力していた。毎朝、私は、1枚の白紙の前に坐った。連中に短い昼食の時間があるだけで、後はずっと1日中、その白紙をみつめていた。しばしば、夕方になっても、紙は依然として白紙のままであった。その2年間の冬は、私たちはロンドンで過ごした。冬の期間、私は、全然仕事をしようしなかった。しかし、1903年と1904年の2度の夏は、完全な知的行き詰まりの時期として、私の記憶に残っている。パラドクスを解決しないことには先に進めないことは明らかであった。そこで、いかなる困難があっても「プリンキピア・マテマティカ」の完成は必ずしもと決まっていた。しかし、私のその後の人生のすべては、あの白紙のみを見つめることに費やされることはまったくありそうなどたと思われた。さらに一層私をいらぬものは、そのパラドクスは取るにたらないものであり、私の貴重な時間が、さしあな注意を私に払いしないと思われるような事柄について考えることに費やされるということであった。</p>		
★		B5/C1-03	<p>In 1905 things began to improve. Alys and I decided to live near Oxford, and built ourselves a house in Bagley Wood. (At that time there was no other house there.) We went to live there in the spring of 1905, and very shortly after we had moved in I discovered my Theory of Descriptions, which was the first step towards overcoming the difficulties which had baffled me for so long. Immediately after this came the death of Theodore Davies, of which I have spoken in an earlier chapter. In 1906 I discovered the Theory of Types. After this it only remained to write the book out. Whitehead's teaching work left him not enough leisure for this mechanical job. I worked at it from ten to twelve hours a day for about eight months in the year, from 1907 to 1910. The manuscript became more and more vast, and every time that I went out for a walk I used to be afraid that the house would catch fire and the manuscript get burnt up. It was not, of course, the sort of manuscript that could be typed, or even copied. When we finally took it to the University Press, it was so large that we had to hire an old four-wheeler for the purpose. Even then our difficulties were not at an end. The University Press estimated that there would be a loss of £600 on the book, and while the syndics were willing to bear a loss of £300, they did not feel that they could go above this figure. The Royal Society very generously contributed £200, and the remaining £100 we had to find ourselves. We thus earned minus £50 each by ten years' work. This beats the record of Paradise Lost. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6: Principia Mathematica, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-140.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-140.HTM</a></p>	<p>1905年になって、事態は好転しはじめた。アリスと私は、オックスフォードの近くに住むことを決め、バグレイ・ウッドに自分たちの家を建てた。(その当時、そのあたりには一軒も家が建っていないかった。) 私たちは、1905年の春、そこに移り住み、入居してすぐに私は「記述理論」を発見した。記述理論は、長い間私を困惑させた(私の研究の進展を阻んでいた)諸困難の克服への第一歩であった。この発見の直後には、テオドール・デービスの死があったが、それについては前の方の章で述べている。1906年に私は「タイプ理論」を発見した。あとやらなければならぬことは、(本として出版するために)詳細に書き上げるだけであった。ホワイットヘッドは学生の教師で忙しく、この機械的な仕事をすることができなかった。(そこで)私は、1907年から1910年まで、毎日10時間から12時間、毎年約8ヶ月間、この(執筆の)仕事にあたった。原稿(の量)は、しだいに膨大になっていき、散歩に出るたびに、家が火事になって原稿が焼失してしまわぬかと、いつもの心配であった。その原稿は、当然ながら、タイプライターで打つたり、また複写させることもできなかった(注:ほとんど論理記号の羅列であったため)。原稿ができて、最後にそれをケンブリッジ大学出版部にもっていく時、あまりに膨大なため、運輸用旧式の四輪馬車を雇わなければならなかった。困難はそれで終わらなかった。大学出版部は、その本の刊行によって(出版に要した費用と売り上げ利益の差は)差し引き600ポンドの損失があるだろうと見積もった。ケンブリッジ大学の特別評議委員会の委員たちは、300ポンドの欠損は喜んで負担するが、それ以上大学が負担することはできないだろうと考えた。英国学士院は、最大にも200ポンドを寄付してくれたが、残りの100ポンドは私たち二人で工面しなければならなかった。私たちは、このようにして、10年間の労働によって、一人あたりマイナス50ポンドずつかせぎ出した(注:10年間共同作業をやった結果、利益を得るところから一人あたり50ポンドの負債を負うことになってしまったということ)。これは、ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-1674: イギリスの詩人)のパラダイス・ロスト(失楽園)の記録を破っている。</p>		
		B5/C1-04	<p>The strain of unhappiness combined with very severe intellectual work, in the years from 1902 till 1910, was very great. (See my letters to Lucy on pp.167ff.) At the time I often wondered whether I should ever come out at the other end of the tunnel in which I seemed to be. I used to stand on the footbridge at Kennington, near Oxford, watching the trains go by, and determining that tomorrow I would place myself under one of them. But when the morrow came I always found myself hoping that perhaps Principia Mathematica would be finished some day. Moreover the difficulties appeared to me in the nature of a challenge, which it would be pusillanimous not to meet and overcome. So I persisted, and in the end the work was finished, but my intellect never quite recovered from the strain. I have been ever since definitely less capable of dealing with difficult abstractions than I was before. This is part, though by no means the whole, of the reason for the change in the nature of my work. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6: Principia Mathematica, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-150.HTM</a></p>	<p>1902年から1910年までの間、非常に難しい知的な仕事と結び合わさって、不幸であることによる緊張(疲勞)は、とても大きなものであった(ラッセル注: pp.211 - 212 にわたって載せてある私のルーシー宛の手紙を参照)。その頃私は、自分が入りこんでいると思われるトンネルのもう一方の先(出口)からはたして抜け出すことができるかどうか、しばしば思案した。私はよく、オックスフォード近くのケンントン(Kennington 前ページの地図参照)にある歩道橋の上に立ち、通過する汽車を眺め、明日こそは汽車の下に身を投げたそうと決意した。しかし、翌日になるといつも、多分「プリンキピア・マテマティカ」は必ず完成するだろうと望んでいる自分を見出した。さらに、その困難は、私に対する挑戦状であり、それに立ち向かって克服しないのは臆病だろうと思われた。そこで私は中断せずにその仕事を続け、遂に完了した。しかし、私の知性は、緊張から完全に回復することは決してなかった。私は、それ以来、難しい抽象的な問題を扱う能力は、以前よりずっと衰えてしまった。これは、- - 決して全ての理由ではないが - - 私の仕事の性質が変化した理由の1つであった</p>		

<p>B5/C1-05</p>	<p>He was an Austrian, and his father was enormously rich. Wittgenstein had intended to become an engineer, and for that purpose had gone to Manchester. Through reading mathematics he became interested in the principles of mathematics, and asked at Manchester who there was who worked at this subject. Somebody mentioned my name, and he took up his residence at Trinity. He was perhaps the most perfect example I have ever known of genius as traditionally conceived, passionate, profound, intense, and dominating. He had a kind of purity which I have never known equalled except by G. E. Moore. I remember taking him once to a meeting of the Aristotelian Society, at which there were various fools whom I treated politely. When we came away he raged and stormed against my moral degradation in not telling these men what fools they were. His life was turbulent and troubled, and his personal force was extraordinary. He lived on milk and vegetables, and I used to feel as Mrs Patrick Campbell did about Shaw: 'God help us if he should ever eat a beetsteak.' He used to come to see me every evening at midnight, and pace up and down my room like a wild beast for three hours in agitated silence. Once I said to him: 'Are you thinking about logic or about your sins?' 'Both', he replied, and continued his pacing. I did not like to suggest that it was time for bed, as it seemed probable both to him and me that on leaving me he would commit suicide. At the end of his first term at Trinity, he came to me and said: 'Do you think I am an absolute idiot?' I said: 'Why do you want to know?' He replied: 'Because if I am I shall become an aeronaut, but if I am not I shall become a philosopher.' I said to him: 'My dear fellow, I don't know whether you are an absolute idiot or not, but if you will write me an essay during the vacation upon any philosophical topic that interests you, I will read it and tell you.' He did so, and brought it to me at the beginning of the next term. As soon as I read the first sentence, I became persuaded that he was a man of genius, and assured him that he should on no account become an aeronaut. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB22-070.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB22-070.HTM</a></p>	<p>彼はオーストリア人であり、また彼の父親は大富豪であった。ワイトゲンシュタインは、技術者になろうと考えていて、その目的のためにマンチエスター（大学）に行っていた（で勉強していた）。数学（の本）の読書を通して彼は数学の原理に興味を持つようになった。そこでマンチエスター大学で、数学の原理について研究している者はいないが尋ねた。誰かが私の名前に言及した。それで彼はトリニティ・コレッジに住所を定めた。彼は、情熱的で、深遠であり、強烈で、抜きん出ており、おそらく私が今まで知りえた人間のなかで、伝統的に思い描かれてきた天才の最も完璧な実例であったであろう。彼には一種の純粋さがあり、それと匹敵するものはG. E. ムーア以外にない。私は、一度彼をアリストテレス学会（英国哲学会）の会合に連れていった時のことを記憶している。その会合には、多くの愚劣な連中が出席していたが、私は彼らに対し丁寧な応待をした。私たちがその場を離れた後、彼は激怒し、彼らがいかに愚かであるか、彼らに言ってもやらなかったのは道徳的墮落だと、私に怒鳴り散らした。彼の人生は波乱にとんでおり、困難なものであった。また彼の精神力（personal force）は、並はずれていた。彼はミルクと野菜だけで生活していた。ミセス・パトリック・キャンパベル（注：Mrs. Patrick Campbell, 1865-1940：英国の著名な舞台女優）がバーナード・ショーについて「彼がビーフステーキを食べてくれたらどれだけ救われることが！」と感じたように、私はワイトゲンシュタインに対し、同様の感情を抱いた。（注：肉を主食とする食事は、健康に悪影響を及ぼす。肉を主食としない肉を無理やりたべないようにしているため、欲求不満がたまつて残酷になる、といった思ひが。）。彼は、毎晩のように深夜午前零時(at midnight)に私に会いに来て、興奮しているが何も言わず静黙のようになり、時節、部屋の中を行ったり来たりした。ある時は彼に「あなた、あなたは、論理学について考えているのか、それとも自分自身の罪について考えているのか?」「両方です」と彼は応え、彼はなおも行ったり来たりし続けた。私は彼にもう就寝する時間だと言いたくなかった。というのは私のそばを離れると彼は自殺するかもしれないと、多分私にも彼にも、思われたからである。トリニティ・コレッジに来てからの最初の学期の終わりに、彼は私のところに来て来てこう言った。「あなたは、私のことをまったくの馬鹿だと思いませんか?」私は言った。「どうしてあなたはそんなことを知りましたか?」「彼はあなた、私もそうだとしたら私は飛行士になります。もしそうでなかったら哲学者になります。」そこで私は彼にこう言った。「いや、あなたがまったくの馬鹿かどうか私にはわかりません。しかし、もしあなたが休暇中に、何でもいでもいいが、あなたが興味を持つ哲学上の問題について論文を書いてくれたら、それを読み、あなたが馬鹿かどうかをあなたに言います。」彼はその通りにした。そしてその論文を次の学期の初めに私のところにもって来た。私はその最初の一文を読み、やがて彼が天才であることを確信するにいたった。そして、彼はどんなことがあっても飛行士にならばきではないと諦念させた。数学は、正しく見れば、真理を持っているばかりではなく、最高の美を持っている。それは彫刻の美のように冷たく厳しい美しさであり、我々人間の弱々しい天性に訴えるものも、絵画や音楽のもつ鈍重たる飾りもなく、しかも極めて純粹であり、最高の芸術のみが示すことができる厳格な完璧さに満ちた美である。最高の優雅さのしるしであるところの、真の歓喜、精神の高揚、人間を超えた存在の一部であるという感じ、詩の中と同じくらい確かに、数学の中にも見出すことができる。</p> <p>(江森訳) 数学は真理を持っているばかりではなく、最高の美を持っている。それは彫刻の美のように冷たく厳しい美しさであって、我々の弱々しい天性に訴えるものもなく、絵画や音楽のもつ鈍重たる飾りもなく、しかも気高く純粹で、最大の芸術のみが示しうる厳格な完成に満ちている。最高の優雅さのしるしであるところの、真の喜び、精神の高揚、人間でありながら人間を超えた存在の一部であるという感じ、それらは詩の中と同じくらい確かに、数学の中にも見出されうる。</p> <p>『神秘主義と論理』/ハートランド・ラッセル著；江森巳之助訳。-みすず書房』 『数学の研究』</p>			
<p>B5/C1-06</p>	<p>Mathematics, rightly viewed, possesses not only truth, but supreme beauty - a beauty cold and austere, like that of sculpture, without appeal to any part of our weaker nature, without the gorgeous trappings of painting or music, yet sublimely pure, and capable of a stern perfection such as only the greatest art can show. The true spirit of delight, the exaltation, the sense of being more than Man, which is the touchstone of the highest excellence, is to be found in mathematics as surely as poetry. "The Study of Mathematics" In: Mysticism and Logic And Other Essays, 1918.</p>		<p>(吉田) [数学は真理を]模倣に見える物に単純な構造が宿っている事に気づく時、人はそれを美しいと感じます。この美は、ヒトの生理的欲求に満足しないので、冷たい美であると感じられます。世界で最も模倣な物は、世界そのものである宇宙です。宇宙を記述する言語は、数学です。ですから、数学を最小限の前提から構築すれば、最高の美が得られます。「プリンキピア・マテマティカ」はこの美を旨指しました。</p>		
<p>B6 その他</p>					
<p>B6-01</p>	<p>but the more uninteresting the work becomes, the more possible it is to get it performed by a machine. The ultimate goal of machine production - from which, it is true, it is as yet far removed - is a system in which everything uninteresting is done by machines, and human beings are reserved for the work involving variety and initiative.</p>	<p>しかし、仕事がつまらないものになればなるほど、ますます機械にやらせることが可能になってくる。機械生産の究極(最終)目標は、- 確かに、いまだその目標からはほど遠いが - 面白くないことはすべて機械にまかせ、人間には変化とイニシアティブ(創意)を要する仕事が取っておかれる、といったシステムである。</p> <p>出典：ラッセル『幸福論』第10章「今でも幸福は可能か?」 <a href="http://russell-j.com/beginner/HA21-050.HTM">http://russell-j.com/beginner/HA21-050.HTM</a></p>	<p>そういう意味では、ロボット研究やその実用化に期待しています。しかし、特に、米国ではロボットの軍事利用がさかんになっており、「悪いことはしなくても利益をあげることができることを示す」ことを社是にしていた Google までが軍事用ロボットを研究していた企業などをとんとん買収はじめています。日本でも少しずつ、ロボットの軍事利用が進んでいくと思われ、歯止めが必要ですが、米国では戦争を請け負う企業まで出てきており、アメリカ国民の犠牲をすくなくして、敵を大量に殺せるということでロボットの活用をめざしています。ロボットによる代理戦争を描いたSFがまったくの空想でなくなっていくと予想されます。</p>		

	B6-02	In taking to agriculture mankind decided that they would submit to monotony and tedium in order to diminish the risk of starvation. When men obtained their food by hunting, work was a joy, as one can see from the fact that the rich still pursue these ancestral occupations for amusement. But with the introduction of agriculture mankind entered upon a long period of meanness, misery, and madness, from which they are only now being freed by the beneficent operation of the machine.	農業を始めたとき、人類は、餓死する危険を減らすためには単調さも退屈も甘受しよう、と決意した。人間が狩猟によって食物を得ていた頃は、労働(仕事)は喜びであった。そのことは、裕福な人間がいまだにこの先祖伝来の仕事を娯楽として追求していることから明らかである。しかし、農業の導入とともに、人類は卑しさと不幸と狂気の長い時代にはいった。人類はいまはじめて、機械の恩恵をもたらす働きをよそよそしく受け取らなければならない。『幸福論』第10章「今でも幸福は可能か?」 http://russell-j.com/beginner/HA21-050.HTM	狩猟生活において、獲物はいつも手に入るわけではない。農業の場合も、自然災害によって壊滅的な打撃を受けることはあるが、狩猟生活よりはずっと安定感がある。そこで生活の安定感を得るために、人類は、農業労働の単調さ・退屈を甘受するようになっていった。しかし、機械の活用によってそういった単調さから解放されつつある。農業における創造性・ものを創りだす幸福感を持てるようになりつつある。(しかし、そこにTPPなどにより、過当競争を持ち込むようになれば、弱肉強食となり、	
	B6-03	It is all very well for sentimentalists to speak of contact with the soil and the ripe wisdom of Hardy's philosophic peasants, but the one desire of every young man in the countryside is to find work in towns where he can escape from the slavery of wind and weather and the solitude of dark winter evenings into the reliable and human atmosphere of the factory and the cinema. Companionship and cooperation are essential elements in the happiness of the average man, and these are to be obtained in industry far more fully than in agriculture.	感傷的な人たちが、大地との接触とか、トマス・ハーディの小説に登場する沈着冷静な農夫たちの円熟した知恵とかをあれこれ言うのは大いに結構であるが、地方にいるすべての青年の願いはひとつ、町で仕事をを見つけることであり、そこでは、風や天候への隷属や暗い冬の夜の孤独から逃げて、工場や映画館とかといった類りがいのある人間的な雰囲気にならなうことができるのである。「仲間とのつきあい」や「他人との協力」は、普通の人間の幸福における不可欠の要素である。そしてこの二つは、農業より工業において、より充実した形で得られるのである。『幸福論』第10章「今でも幸福は可能か?」 http://russell-j.com/beginner/HA21-050.HTM	昔と異なり、現在ではマスコミやネットが発達したために、田舎にいても、世界中から珍しい情報を得たり、学習したり、楽しんだりできるようになりました。しかし、情報はいろいろ得ることができたとしても、実体験できるわけではないし、交友範囲は田舎の場合は限定されてしまいます。『幸福論』は1930年に書かれたものなので、例えば話は書き直すと、世界中から珍しいものを想像してみようとするのは、単調さを避け華やかさをもとめるのはいつの時代も同じということでしょうか。田舎のほうがゆとりたりした自然のなかで暮らせますが、若者は隠居生活をするわけではなく、いろいろ新しい冒険をしてみたいので・・・。	
★	B6-04	The man who is engaged in experiments with a view to some great scientific discovery or invention is not blamed afterwards for the poverty that he has made his family endure, provided that his efforts are crowned with ultimate success. If, however, he never succeeds in making the discovery or the invention that he was attempting, public opinion condemns him as a crank, which seems unfair, since no one in such an enterprise can be sure of success in advance.	何らかの偉大な科学的な発見や発明をしようとする実験に従事している人は、家族に貧乏を耐えさせたとしても、その努力が最後の成功で報いられる(名誉を与えられる)ならば、後に非難されることはない。しかしながら、もしも彼が試みている発明や発見に成功しない、世間は彼から何を望むのかと尋ね、(自分の家族が犠牲になっていることを)強く非難する。(しかし、それは不公平であると思われる。なぜなら、そういう企てをする場合、だれも、前もって成功を確信することはできないからである。注:即ち、成功して書められた人も、成功しない可能性があるため。) 出典:ラッセル『幸福論』第11章「熱意」 http://russell-j.com/beginner/HA22-060.HTM	世間は成功者や競争の勝利者を褒め称え、失敗した者や競争の敗者に冷たい。競争を奨励しなければ人類は繁栄できないからとて、もう言うのであろうか。しかし、他人に対してはそういう冷たい態度をとると、肉親や親しい友人であればそのような態度はとれず、とれないだろう。自己利益・公益追求社会と共存・共栄・地球益を求める社会との違いか? 競争があれば「必ず」勝者が存在する。だから、努力すれば必ず成功する・報われるという幻想をいだいてしまう。敗者のほうが圧倒的に多いはずだが、支配統治・管理する立場にいる者は、競争を礼賛する。能下のもが競争してくれたほうが自分の利益が増えるからである。組織の利益が自分の利益に直結するからである。	
	C ラッセル 自伝				
★	C 1-01	My father and mother were dead, and I used to wonder what sort of people had been. In solitude I used to wander about the garden, alternately collecting birds' eggs and meditating on the flight of time. If I may judge by my own recollections, the important and formative impressions of childhood rise to consciousness only in fugitive moments in the midst of childish occupations, and are never mentioned to adults. I think periods of browsing during which no occupation is imposed from without are important in youth because they give time for the formation of these apparently fugitive but really vital impressions. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB11-050.HTM	父と母は亡くなったので私はよく両親はどんな人たちだったろうかと思めぐらしものである。孤独の中私は、一人でしばしば庭歩きまわり、交互に鳥の卵を集めたり、とんとん歩きまわってゆく時間について瞑想したりしたが、自分自身でこの記憶を呼び起こすのは、ほとんど偶然である。幼少時代の重要な人格を形成する印象(感情)は、子供らしく何かに夢中になっていた最中のほんの一瞬だけ意識にのぼってくるにすぎないし、またそれは決して大人には話さないものである。どんなことでも外部から強いる必要はない。むしろ、むしろ、むしろ、むしろ、むしろを観察する)幼少時代は、若い時代のうちでも重要な時期であると私は思う。なぜなら、その時期は、こうした見たいは一瞬であるが、しかしそれは(生涯消えることのない)必要不可欠な印象を形成する時間を与えるからである。	(松下メモ)邦訳文を読んでいて、理解できなかったり、論理的におかしいと思えば、ほぼ翻訳だろうと思っていよう。しかし問題なのは、日本語として自然に読めず、誤訳している場合がある。日高訳にはそういう箇所が非常に多いのでやっかいである。たとえば、上記の文章でいえば、最後のところであるが、日高氏は「何故ならば、その時期は、こうした明かにとりとめのない、しかも実は生涯消えることのない絶対的に重要な印象を形成する時代だからである。」と訳して恐ろしいが、誤訳とまではいえないかも知れないが、下線を引いたところは、「見た目には一瞬(のこと)であるが、しかし・・・」と訳すべきところだろう。	幼い子供が、誰からも強制されることなく、何かに夢中になっている時間の貴重さ、美しい文章と不思議さが、・・・? 「三つ子の魂百まで」という諺がありますが、幼少時代の体験や経験は、普通人が思うよりも、のちのちまで影響を与えるので、重視する必要があるということですね。民主主義の時代にあっても、権力者や保守主義者たちは、あまり悪いもたない幼少期に上に立つ者に都合のよい即ち権力者に従順な、道徳感や感性をもった国民をつくりたいと、(自覚はしていないかも知れないですが)本能的に思っているのではないのでしょうか?
○	C 1-02	As a mother and a grandmother she was deeply, but not always wisely, solicitous. I do not think that she ever understood the claims of animal spirits and exuberant vitality. She demanded that everything should be viewed through a mist of Victorian sentiment. I remember trying to make her see that it was inconsistent to demand at one and the same time that everybody should be well housed, and yet that no new houses should be built because they were an eye-sore. To her each sentiment had its separate rights, and must not be asked to give place to another sentiment on account of anything so cold as mere logic. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB11-070.HTM	彼女は母としてまた祖母として、深く気を遣ったがその気遣いは、常に賢明であるとは言えなかった。祖母は、動物的生気や清き溢れる生命力の要求といったようなものを理解してはいなかったように思う。祖母は、一切をヴィクトリア朝の感傷という霧(や雲)をおして眺めることを要求した。私は、全ての人が良い住居を与えられるべきだということ、にもかかわらず自ずからという理由で新しい家屋は一軒も建ててはならないということを一に同時に要求することは論理が一貫していない、ということに祖母に理解させようとしたことを記憶している。祖母にとっては、いずれの感情もそれぞれの権利をもっており、単なる論理のような非常に冷たい何らかの理由で、他の感情に席を譲るよう求められはならなかった。	そう、論理的に矛盾したことを言っても平気な人は少なくない。	自分の言動が矛盾している場合、関係する物事や主張のなかで何を優先するか考え(優先順位をつけ)、その主張を実現するためには、その他のものをどう扱えばいいか、論理的に再考してみる必要がある。通常、我々は、考えるのがめんどくさい(考えるよりもっと楽しいことをしたい)ということから、中途半端なままにしてしまう。しかし、自分が大事だと思っていることが危険にさらされて初めて、まともにも反省するようになる。原発、集団的自衛権、秘密保護法、格差の拡大を助長し企業を優先する様々な施策・・・。
★	C 1-03	After I reached the age of fourteen, my grandmother's intellectual limitations became trying to me, and her Puritan morality began to seem to me to be excessive; but while I was a child her great affection for me, and her intense care for my welfare, made me love her and gave me that feeling of safety that children need. I remember when I was about four or five years old lying awake thinking how dreadful it would be when my grandmother was dead. When she did in fact die, which was after I was married, I did not mind at all. But in retrospect, as I have grown older, I have realized more and more the importance she had in moulding my outlook on life. Her fearlessness, her public spirit, her contempt for convention, and her indifference to the opinion of the majority have always seemed good to me and have impressed themselves upon me as worthy of imitation. She gave me a Bible with her favourite texts written on the fly-leaf. Among these was "Thou shalt not follow a multitude to do evil." Her emphasis upon this text led me in later life to be not afraid of belonging to small minorities. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] http://russell-j.com/beginner/AB11-080.HTM	14歳以後、祖母の「知的な限界」が私にはとても耐えがたいものになり、また祖母の清教徒的の道徳観は私には度を越しているように思えるようになった。しかし私が子供の時は、彼女は私に対し大きな愛情を注ぎ、私の幸福を願って熱心に世話をしてくれたので、私は祖母に愛情を抱くとともに、子供が必ず持つべき心算を感得することがあった。私が4歳から歳の頃頭をきままして寝ころんでいて、もし祖母が亡くなったらどんなに恐ろしいことだろうと考えていたのを覚えている。だが私が結婚した後、実際に祖母が亡くなった時、私は彼女の死を少しも気にしなかった。しかし振り返ってみると、反省するにつれ私の人生観を形成する上で祖母がしめる重要性をせいに認認するようになった。祖母の恐れを知らない勇氣、公共心、因襲の輕蔑、多数意見に対する無関心は、いつも私には善いことだと思わされたし、模倣する価値のあることだと強く印象づけられた。祖母の見聞の海(自伝)に(祖母)が「リリ」の文句をいくつか書いた聖書を私にくれた。その中に次の文句があった。「汝、群衆に従いて悪を為すなかれ」祖母がこの聖句を強調してくれたことは、後になって私が小さなエイノリディに属することを恐れさせないよう導いてくれた。		

	C1-104	<p>Many of my most vivid early memories are of humiliations. In the summer of 1877 my grandparents rented from the Archbishop of Canterbury a house near Broadstairs, called Stone House. The journey by train seemed to me enormously long, and after a time I began to think that we must have reached Scotland, so I said: 'What country are we in now?' They all laughed at me and said: 'Don't you know you cannot get out of England without crossing the sea?' I did not venture to explain, and was left overwhelmed with shame. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB11-170.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB11-170.HTM</a></p>	<p>最も鮮明な、幼い時の私の記憶の多くは、恥かしい思い出(記憶)である。1877年の夏(ラッセル5歳)、祖父母はカンタベリー近郊のブロードスターズにあるストーン・ハウスと呼ばれる一軒の家を借りた。そこへゆく汽車の旅は私にはとても長いものと思われた。しばらくして私はスコットランドに到着したに違いないと考えはじめたので、次のように言った。 祖父母たちはみんな私のことを笑って言った。 「海を渡らなくては英国から外に出られないということを知らなかったの?」とはしなかった。(松下注:言うまでもなくラッセルは、言いたいのは、英国は、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドおよび植民地だった自治領から構成されており、スコットランドは狭義の意味では、イングランドとは別の国のはずだということ。そして恥ずかしい気持ちでいっぱいになった。) 私は非常に早く目が覚め、朝を寝る中に出ていたのが見えた。ある時、金星を森の中のランタン(角灯)と見まちがえた。たいていの朝、日の出を見たり、4月の晴れた日には時々家から飛び出して、朝食前に長い散歩をよくした。日没(夕陽)が大地を赤く染め、雲を黄金色に染めるのを見まもった。風の音に耳を傾け、雷の稲光りに歓喜した。(右下写真: Pembroke Lodge の庭から西方を望む、松下1980年撮影) 幼少時代を通じて、孤独感がしだいに増すとともに、誰か語り合うことのできる人間に会うことについて(会えないのではなかったかという虚無感がたいへん強くて)。(そうして)自然と本と後には数学が、私が完全に意気消沈するのを救ってくれた。</p>	<p>* 松下注1: イギリス国教会とその世界的組織である聖公会(アングリカン・コミュニオン)の最上席の聖職者。 ***** (松下感想) 親からみた場合、子供の発言は、時に想像力豊かに見えたり、幼く見えたりする。親も自己中心的なところや先入観があり、「子供のことだから...」と聞きかと思つたり、「子供は(そのようなこと)で嘘をつかない。」と信じていたりして、自分の都合の良い解釈をしたりする。ラッセルの場合も同じであり、親が想像する以上に知的に早熟であるとともに、周囲の大人には理解されない子供らしい感受性も持っていた。それゆえ、しだいに内省的になっていくことになる。</p>	
	C1-105	<p>In the morning I woke very early and sometimes saw Venus rise. On one occasion I mistook the planet for a lantern in the wood. I saw the sunrise on most mornings, and on bright April days I would sometimes slip out of the house for a long walk before breakfast. I watched the sunset turn the earth red and the clouds golden. I listened to the wind, and exulted in the lightning. Throughout my childhood I had an increasing sense of loneliness, and of despair of ever meeting anyone with whom I could talk. Nature and books and (later) mathematics saved me from complete despondency. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB11-210.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB11-210.HTM</a></p>	<p>幼少時代を通じて、孤独感がしだいに増すとともに、誰か語り合うことのできる人間に会うことについて(会えないのではなかったかという虚無感がたいへん強くて)。(そうして)自然と本と後には数学が、私が完全に意気消沈するのを救ってくれた。</p>		
	C1-106	<p>The years of adolescence were to me very lonely and very unhappy. Both in the life of the emotions and in the life of the intellect, I was obliged to preserve an impenetrable secrecy towards my people. My interests were divided between sex, religion, and mathematics. I find the recollection of my sexual preoccupation in adolescence unpleasant. I do not like to remember how I felt in those years, but I will do my best to relate things as they were and not as I could wish them to have been. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB12-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB12-010.HTM</a></p>	<p>青年期の数年間の私は、とても孤独であり、不幸であった。感情生活においても、知的生活においてもラッセル家の人の関心は、性と宗教と数学の間にわかれた。私は、青年期に性に没頭したことを想い出すと不愉快になる。あの頃私が、どういふふうに感じていたかを思い出したくない。しかし、こういうふうであればよかったといった希望的なことは、この頃、事実あった通りを以下述べるよう最善を尽くしてみよう。</p>		
	C1-107	<p>I came upon Shelley by accident. One day I was waiting for my Aunt Maude in her sitting-room at Dover Street. I opened it at Alastor, which seemed to me the most beautiful poem I had ever read. Its unreality was, of course, the great element in my admiration for it. I had got about half-way through when my Aunt arrived, and I had to put the volume back in the shelf. I asked the grown-ups whether Shelley was not considered a great poet, but found that they thought ill of him. This, however, did not deter me, and I spent all my spare time reading him, and learning him by heart. Knowing no one to whom I could speak of what I thought or felt, I used to reflect how wonderful it would have been to know Shelley, and to wonder whether I should ever meet any live human being with whom I should feel so much in sympathy. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 2, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB12-050.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB12-050.HTM</a></p>	<p>私は偶然シェリーに出会った。ある日私は、ドーヴァー・ストリートにあるモントおばさんの家の居間で、彼女を待たせられたところにあるシェリーの詩の本を手に取って開いたら、「アラスター」または孤独の歌、のところに当たった。それは、私がかかつて読んだものなかで、最も美しい詩だと思われた。もちろん、その詩(アラスター)の非現実性は、私がアラスターを賞美する最大の要素であった。おばさんは家に集まるときは、しばしば手紙を読んだりしたが、私はその本を書棚にもどさなければならなかった。私は、大人たちにシェリーを偉大な詩人と考えられないかどうか尋ねたが、彼らはシェリーをよく思っていないことがわかった。けれども私は、このことで躊躇せず、私は暇な時はいつもシェリーを読んでも、睡眠しただけで通った。私は、自分考えたり感じたことを話さることができる相手は誰もいなかった。私はしばしば、シェリーを知るといふことが何と素晴らしいことだろうか。また、現在生きている人でこんなに共感できる人とはたしてめぐり逢えるものだろうかと思つた。</p>		
	C1-108	<p>Just before my sixteenth birthday, I was sent to an Army crammer at Old Southgate, which was then in the country. I was not sent to in order to crammer for the Army, but in order to be prepared for the scholarship examination at Trinity College, Cambridge. Almost all of the other people there, however, were going into the Army, with the exception of one or two reprobates who were going to take Orders. Everybody, except myself, was seventeen or eighteen, or nineteen, so that I was much the youngest. They were all of an age to have just begun frequenting prostitutes, and this was their main topic of conversation. The most admired among them was a young man who asserted that he had had syphilis and got cured, which gave him great kudos. They would sit round telling bawdy stories. Every incident gave them opportunities for improper remarks. Once the crammer sent one of them with a note to a neighbouring house. On returning, he related to the others that he had rung the bell and a maid had appeared to whom he had said: 'I have brought a letter' (meaning a French letter) to which she replied: 'I am glad you have brought a letter.' When one day in church a hymn was sung containing the line: 'Here I'll raise my Ebenezer,' they remarked: 'I never heard it called that before!' [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 2, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB12-090.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB12-090.HTM</a></p>	<p>16歳の誕生日を迎える直前、私は、当時田舎にあったオールド・サウスゲートの陸軍のクラマー(受験準備のための学校)に入學させられた。私がそこにやられたのは、陸軍に入るための受験準備が目的ではなく、ケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジの奨学生資格試験(準備)のためであった。けれども、聖職につこうとする1/2の地類行き'の者を除いて、ほとんど全員が、陸軍に入ろうとしていた。私を除いた全員が、17か、18か、19歳)であったので私が最年少であった。彼らは皆、ちょうど完備のころに頻りに遊いはじめ年頃であり、売春婦連中が彼らの会話の主な話題であった。彼らのうなかで最も賞賛されていたのは、以前梅毒にかかったが治つたと主張していた青年であり、そのことは、彼に大なる栄光を与えた。彼らは車座に座り、猿談をするのを習慣にしていた。どんな出来事も、彼らは淫らな話をする機会にしてみました。ある時、その受験準備校(の教師)が、彼らのうちの一人に、一枚の書き付けをもたせ、隣の家に届けさせた。戻つて来た彼は、みんなにベルを鳴らしたら女中が出て来たので、彼女に彼が「手紙(letterはフランス語で「コンドーム」の意味もある)を持って来ました。」と言つたら、それに対して彼女は、「あなたが手紙を持って来てくださり、私は嬉しい。もちろん彼女がフランス語の'letter'には「コンドーム」の意味もあることは知らないであらう。」と答えた、と語つた。</p>	<p>* 日高一輝氏は、「手紙(フランス語で手紙を意味する)を持って来ました。」と訳されているが、これでは何が可笑しいかわからない。「研究社新英和大辞典」によれば、French letter というのは、口語で、コンドームのことを言うことである。)</p>	
	C1-109	<p>I was upheld by the determination to do something of importance in mathematics when I grew up, but I did not suppose that I should ever meet anybody with whom I could make friends, or to whom I could express any of my thoughts freely, nor did I expect that any part of my life would be free from great unhappiness. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 2, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB12-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB12-150.HTM</a></p>	<p>私は、大人になったら数学で何か重要なことをなそうという決意によって、精神的に支えられた。しかし、私は、(心から)親しくなれる相手、即ち、いかなる思想であれ、自由に私の考えを述べることができ、相手にめぐり逢えるなどとは思わなかった。また、私の人生の期間でも、大きな不幸からまぬがれることができるだろうとは期待してもいなかった。</p>		

C1-10	<p>From my first moment at Cambridge, in spite of shyness, I was exceedingly sociable, and I never found that my having been educated at home was any impediment. Gradually, under the influence of congenial society, I became less and less solemn. At first the discovery that I could say things that I thought, and be answered with neither horror nor decision but as if I had said something quite sensible, was intoxicating. For a long time I supposed that somewhere in the university there were really clever people whom I had not yet met, and whom I should at once recognize as my intellectual superiors, but during my second year, I discovered that I already knew all the cleverest people in the university. This was a disappointment to me, but at the same time gave me increased self-confidence.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 3:Cambridge, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB13-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB13-150.HTM</a></p>	<p>ケンブリッジ大学時代の最初（の瞬間）から、私は、恥がしがり屋であったにもかかわらずとても社交的であった。そして私が（学校にいて）家庭ですべて教育を受けてきたことは何ら障害にならないことがわかった。しだいに私は、気の合った者同士につきあいの影響のもと、しだいに生真面目でなくなった。自分の考えたことを言うことができ、またそれが怖がられもせず、あざけりもされず、あたかもかなり分別あることを言ったかのように応答されることを発見し、私は最初は、興奮した。長い間私は、まだ会ったことがなくあはれずに私よりも知的に優れていることがわかるような、本当に頭の良い人達がこの大学のどこかにいるだろうと想像していた。しかし学部2年生の時点で、彼らも頭がいい人達をすべて知りつくしてしまったことがわかった。それで私は失望すると同時に、自信が増した。</p>	
C1-11	<p>The greatest happiness of my time at Cambridge was connected with a body whom its members knew as 'The Society', but which outsiders if they knew of it, called 'The Apostles'. This was a small discussion society, containing one or two people from each year on the average, which met every Saturday night. It has existed since 1820, and has had as members most of the people of any intellectual eminence who have been at Cambridge since then. It is by way of being secret, in order that those who are being considered for election may be unaware of the fact. It was owing to the existence of The Society that I so soon got to know the people best worth knowing, for Whitehead was a member, and told the younger members to investigate Sanger and me on account of our scholarship papers. With rare exceptions, all the members at any one time were close personal friends. It was a principle in discussion that there were to be no taboos, no limitations, nothing considered shocking, no barriers to absolute freedom of speculation. We discussed all manner of things, no doubt with certain immaturity, but with a detachment and interest scarcely possible in later life. The meetings would generally end about one o'clock at night, and after that I would pace up and down the cloisters of Neville's Court for hours with one or two other members. We took ourselves perhaps rather seriously, for we considered that the virtue of intellectual honesty was in our keeping. Undoubtedly, we achieved more of this than is common in the world, and I am inclined to think that the best intelligence of Cambridge has been notable in this respect. I was elected in the middle of my second year, not having previously known that such a society existed, though the members were all intimately known to me already.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 3:Cambridge, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB13-250.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB13-250.HTM</a></p>	<p>私のケンブリッジ時代における最大の幸福は、会員の間では、ザ・ソサエティ（The Society / 学会）という名で知られていた。この会のことを知っている外部の人たちは、使徒(会) (The Apostles)と呼んでいた。ある団体に結びついていて、（注：以下「使徒会」という訳語をあてます。）使徒会は、小規模の討論会（討論を目的としたグループ）であり平均して各年（毎年）を言わずに入会しており、毎週土曜夜に会合をもっていた。使徒会は1820年以降存在しており、創設以来、ケンブリッジ大学の人間で、何らかの分野において知性に優れている人は、ほとんど会員になっていた。使徒会は秘密ということになって、それが、それは、金銭的（経済）上にならないうることに当該人物が気づかないようにするためである。私がそのように早く、最も知り合いになる価値のある人々を知るにいたったのは、この使徒会の存在のおかげであり、（また）ホフド・ヘットが会員であり、彼が若い会員たちをランガーと命題論文を共同執筆することを研究した方がいいて、離れていたからである。ごくまれな例外を除いて、会員はすべて、いずれかの時期、個人的に親密な友人であった。議論にあたっての原則は、何のタブーも設けないこと（どのような主題や事柄も議論の対象となること、何の制限も設けないこと、どんなことを言わずに自由に行ける）である。我々はあらゆる種類の事柄を論じあつた。もちろん疑いもなく未熟さはあったが、（会を離れた）後にはほとんど不可能な公平さを確保をもって議論を行った。例を挙げると、深夜1時頃に終わった。そして、そのあと私はいつも、ほかの2人の他の会員とともに、ネヴィルズ・コート（Neville's Court）の回廊を行ったりきたり、数時間歩いたものである。我々は、たぶん、自分自身に対してかなり厳格であったように思う。なぜならば、知的誠実という徳性は、自分たちが保持すべきもの（守るべきもの）であると考えたからである。疑いもなく我々はこの徳（性）を、世間平均以上に、成就しており、そして私は、ケンブリッジ大学の最良の知性は、この点において顕著であり続けたと考えたい。私は第2学年の中頃にこの会員に選ばれた。だが、その時点で、私が存在するとは全然知らなかったが、会員は皆すでに私と親しい関係にあった。</p>	
C1-12	<p>The one habit of thought of real value that I acquired there was intellectual honesty. This virtue certainly existed not only among my friends, but among my teachers. I cannot remember any instance of a teacher resenting it when one of his pupils showed him to be in error, though I can remember quite a number of occasions on which pupils succeeded in performing this feat. Once during a lecture on hydrostatics, one of the young men interrupted to say: 'Have you not forgotten the centrifugal forces on the lid?' The lecturer gasped, and then said: 'I have been doing this example that way for twenty years, but you are right.'</p> <p>It was a blow to me during the War to find that, even at Cambridge, intellectual honesty had its limitations. Until then, wherever I lived, I felt that Cambridge was the only place on earth that I could regard as home.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 3:Cambridge, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB13-340.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB13-340.HTM</a></p>	<p>私がケンブリッジで身につけた真に価値ある一つの思考習慣は、知的誠実というものであった。この美德は、単に友達の間にのみならず、教師たちの間にも普遍的に存在していた。私は、学生の誰かが先生の誤りを指摘した時に憤慨した教師の実例を一つも思い出せないが、学生がこのような手柄をなすことには成功した機会はいくつもある。ある時、流体力学（hydrostatics）の講義中に若い学生が「先生、蓋（lid）に遠心力（centrifugal forces）を忘れてはいませんか？」と。その講師は驚いて息を止め、そうしてこう言った。「・・・私は20年間この例をそういう風に扱ってきた。しかし君の方が正しい」と。</p> <p>第一次世界大戦中、ケンブリッジ大学においてさえ、知的誠実さに限界があることを発見したのには、私にとって打撃であった。それまでは私は、どこに往んでいようと、ケンブリッジ大学だけがこの地上において安眠所（我が家）とみなせる唯一の場所であると感じていた。</p>	
C1-13	<p>It was only after breakfast, and then with infinite hesitation and alarm, that I arrived at a definite proposal, which was in those days the custom. I was neither accepted nor rejected. It did not occur to me to attempt to kiss her, or even take her hand. We agreed to go on seeing each other and corresponding, and to let time decide one way or the other.</p> <p>All this happened out-of-doors, but when we finally came in to lunch, she found a letter from Lady Henry Somerset, inviting her to the Chicago World's Fair to help in preaching temperance, a virtue of which in those days America was supposed not to have enough. Alys had inherited from her mother an ardent belief in total abstinence, and was much delighted to get this invitation. She read it out triumphantly, and accepted it enthusiastically, which made me feel rather small, as it meant several months of absence, and possibly the beginning of an interesting career.</p> <p>When I came home, I told my people what had occurred, and they reacted according to the stereotyped convention. They said she was no lady, a baby-snatcher, a low-class adventuress, a designing female taking advantage of my inexperience, a person incapable of all the finer feelings, a woman whose vulgarity would perpetually put me to shame. But I had a fortune of some £20,000(pound) inherited from my father, and I paid no attention to what my people said. Relations became very strained, and remained so until after I was married.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 4:Engagement, 1967]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB14-120.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB14-120.HTM</a></p>	<p>私が、その当時の慣習に従って、はつきりとして求婚するにいたったのは、実際のない躊躇と心配のあつく、ようやく朝食の後のことであった。プロポーズは、承諾もされなかつたし、拒絶もされなかつた。私は、彼女にキスをしようとも、また手を握ろうとさえしなかつた。お互い、継続して会い続け、文通を引き続き行うことで合意し、結婚するかどうかは、時（間）に解決させることにした。</p> <p>すべてこうしたことは屋外での出来事であったが、私たちがついには朝食のため戻って来た時、彼女は、・・・婚約する教の支援をしようとするため、彼女が「ウィグ（Wig）国博覧会（Chicago World's Fair）に招待する」と・・・レディ・ヘンリー・サマセット（Lady Henry Somerset, 1851-1921）からの手紙を見つけた。禁酒の美德は、当時のアメリカでは、十分に普及してはいないと考えられていた。アリスは、母親から強烈な絶対禁酒の信念を受け継いでおり、この招待に非常に大得意であった。彼女は勝ち誇ったようにその手紙を読み上げ、熱狂的にその招待を承諾した。そのことで私は、かなり肩身の狭い思いをした。というのは、それは数ヶ月間の彼女の不在と彼女の興味あるキャリアの開始であろうことを意味したからである。</p> <p>自宅(Pembroke Lodge)に戻ってから、私は、一部始終を家族に話した。すると彼らは、型にはまった因襲に従い、反応した。彼女は、俗っぽい、下層階級のやせ細い、私の夫熟につけいるような女だ、作法知らずのために私（ラッセル）を生恥がしめるような女だ、と。しかし私は父から相続した約2万ポンド（現在の物価に換算すると、4〜5億円の財産）をもっていたので、関係は非常に緊張したものとなり、それは私の結婚後まで続いた。</p>	

C1-14	<p>At this time I kept a locked diary, which I very carefully concealed from everyone. In this diary I recorded my conversations with my grandmother about Alys and my feelings in regard to them. Not long afterwards a diary of my father's, written partly in shorthand (obviously for purposes of concealment), came into my hands. I found that he had proposed to my mother at just the same age at which I had proposed to Alys, that my grandmother had said almost exactly the same things to him as she had to me, and that he had recorded exactly the same reflections in his diary as I had recorded in mine. This gave me an uncanny feeling that I was not living my own life but my father's over again, and tended to produce a superstitious belief in heredity.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 4: Engagement, 1967  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB14-130.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB14-130.HTM</a></p>	<p>この頃私は、鍵付きの日記帳をつけており、誰にも見つからないように、非常に注意深く隠していた私は、この日記に、アリスについての会話や私の気持ちなどを、手短かに書いておいた。そして、父がアリスにプロポーズしたのとちょうど同じ年齢の時に、母にプロポーズしたことを祖母が私に言ったのとほぼ同じことを父に言ったことを、それから私が日記に記録したのと全く同じ感想や意見を父が日記に記録していた。このことを発見した私は自分自身で人生を生きているのではなくて、父の人生をもう一度くり返して生きているのだという不思議な感情を私に与え、遺伝に対する迷信的な信念を生じさせがちであった。</p>	<p>松下注：'a locked diary: 1890-1894' は、The Collected Papers of B. Russell, v.1: Cambridge Essaysの pp.41-67 に収録されている。)</p>
C1-15	<p>Neither she nor I had any previous experience of sexual intercourse when we married. We found, as such couples apparently usually do, a certain amount of difficulty at the start. I have heard many people say that this caused their honeymoon to be a difficult time, but we had no such experience. The difficulties appeared to us merely comic, and were soon overcome. I remember, however, a day after three weeks of marriage, when, under the influence of sexual fatigue, I hated her and could not imagine why I had wished to marry her. This state of mind lasted just as long as the journey from Amsterdam to Berlin, after which I never again experienced a similar mood.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5: First marriage, 1967  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB15-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB15-010.HTM</a></p>	<p>私たちが結婚したとき、彼女も私も、婚前に一度もセックスがなかった。私どもは、セックスを経験したことのない夫婦が明らかに常にそうであるように、セックスの開始にあたってある程度の困難を経験した。私は、多くの人たちが性的未経験が新婚旅行を試験の時(楽しくないもの)にした、と話しているのを聞いたことがあるが、私たちの場合はそのような経験はしなかった。なかなか難しくはあったが(初夜における)困難さは、私たちに、単に滑稽に感じられただけであり、何も克服しなかった。しかし私は、結婚して3週間たったある日、性的疲労に影響され、彼女が嫌になり、どうして彼女と結婚したいなどと思うようになったのかからななを、それを前置きして人生をどう生きたいかなんて、どうアムステルダムからベルリンへ行く旅の間にずっと続いたが(訳注：1月～3月、ラッセルは、ベルリン大学で経済学を学ぶために、アリスとともにドイツに旅行)それ以後は、二度とそのような気分は経験しなかった。</p>	
C1-16	<p>We had decided that during the early years of our married life, we would see a good deal of foreign countries, and accordingly we spent the first three months of 1895 in Berlin. I went to the university where I chiefly studied economics. I continued to work at my Fellowship dissertation. We went to concerts three times a week, and we began to know the Social Democrats, who were at that time considered very wicked.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5: First marriage, 1967  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB15-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB15-020.HTM</a></p>	<p>私たちは、結婚生活の初めの何年かを、多くの外国の国々を見てまわろうと心に決めていた。そこで、私たちは、1895年の最初の3ヶ月間をベルリンで過ごした。私はベルリン大学に行つた。そこで主として経済学を研究した。(訳注：この研究の成果は、ラッセルの最初の著作 German Social Democracy として出版された。)また、大学特別研究員の資格をとるための(数学に関する)学位論文の執筆作業も続けた。私たちは、週3回音楽会に行き、それから私たちは、ドイツ社会民主党員たちと知り合うようになったが、彼らは当時とても悪悪な人間であると考えられていた。</p>	
C1-17	<p>During this time my intellectual ambitions were taking shape. I resolved not to adopt a profession, but to devote myself to writing. I remember a cold, bright day in early spring when I walked by myself in the Tiergarten, and made projects of future work. I thought that I would write one series of books on the philosophy of the sciences from pure mathematics to physiology, and another series of books on social questions. I hoped that the two series might ultimately meet in a synthesis at once scientific and practical. My scheme was largely inspired by Hegelian ideas. Nevertheless, I have to some extent followed it in later years, as much at any rate as could have been expected. The moment was an important and formative one as regards my purposes.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5: First marriage, 1967  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB15-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB15-030.HTM</a></p>	<p>この時期に私の知的野望が形成されつつあった。私は、職業をもたないで、著述に専念しようとした。(松下注：ラッセルは、亡き父から2万ポンド=約40万円の遺産を相続したので、このような決心ができたのであると思われる。)私は、初春のある寒い晴天の日に、一人で動物園(訳注：the Tiergarten は、ベルリン動物園のことであると想像される)の中に散歩している時に、将来の仕事の構想を立てたことを記憶している。私は、純粋数学から生理学までの自然科学の原理に関する一連の著作と、社会科学問題に関する別系統の一連の著作を執筆しようとした。私は、これら2つの著作は、最終的には、科学的であると同時に、実際的なものに統合化できるだろうと思った。私の計画は、ヘーゲルの考えから大きな示唆をうけていた。(ヘーゲルは、しかし大きく推して、それでもやはり後年、一とかく見込みのあるが、それは、ある程度までその計画に従った。私の(研究上の)目的とするところに關しては、その時は、重要な時期であり、形成期であった。</p>	
C1-18	<p>By this time, it was becoming necessary to think in earnest about my Fellowship dissertation, which had to be finished by August, so we settled down at Fernhurst, and I had my first experience of serious original work. There were days of hope alternating with days of despair, but at last, when my dissertation was finished, I fully believed that I had solved all philosophical questions connected with the foundations of geometry. I did not yet know that the hopes and despairs connected with original work are alike fallacious, that one's work is never so bad as it appears on bad days, nor so good as it appears on good days. My dissertation was read by Whitehead and James Ward, since it was in part mathematical and in part philosophical. Before the result was announced, Whitehead criticised it rather severely, though quite justly, and I came to the conclusion that it was worthless and that I would not wait for the result to be announced. However, as a matter of politeness I went to see James Ward, who said exactly the opposite, and praised it to the skies. Next day I learned that I had been elected a Fellow, and Whitehead informed me with a smile that he had thought it was the last chance anyone would get of finding serious fault with my work.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5: First marriage, 1967  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB15-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB15-040.HTM</a></p>	<p>この頃には、フェローシップ(特別研究員資格)取得の期限が迫っていた。私の学位論文は、8月までに完成しなくてはならなかった。- - について真剣に考えることが必要となりつつあった。そこで私たちは、フアンハーストに着ち着いた。そうしてはじめて私は、オリジナルな(独創性のある)仕事に真剣にとり組む経験もした。絶望の日々に代わって、希望の日々が続いた。そしてついに論文が完成した時私は、幾何学の基礎と関連があるあらゆる哲学上の諸問題を解決したと確信した。(当時)まだ私は、オリジナルな仕事に関連して、希望をもったり、絶望したりすることは、どちらも同じように誤りであり、(個人の仕事というものは、悪い日に良く見える、そんな悪いものでは決してない、良い日に良く見えるほど、それほど良いものでもない、ということに気がついていなかった。私の学位論文は、- - 論文は一部数学に関連し、一部哲学に関連していたので、- - ホフマンとジェームズ・ワードによって査読を1された。その結果が発表される前に、ホワイトヘッドは、- - まったく公正ではなかったが、- - 私の論文をかなり厳しく批評した。それで私は、論文は価値がないものであり、結果が発表されるのを待つのはやめよう、決心した。しかしながら、私は、後援のため、ワードに会いに行つた。すると彼は、ホワイトヘッドと全く正反對のことを言い、私の論文をほめちぎった。翌日、フェロー(大学特別研究員)に選ばれたことを知った。そうして、ホワイトヘッドが微笑をうかがべながら、この論文が、私の研究論文のなかに重大な関連性を誰かが発見できる最後の機会となるだろうと思った、と言った。</p>	
C1-19	<p>With my first marriage, I entered upon a period of great happiness and fruitful work. Having no emotional troubles, all my energy went in intellectual directions. Throughout the first years of my marriage, I read widely, both in mathematics and in philosophy. I achieved a certain amount of original work, and laid the foundations for other work later. I travelled abroad, and in my spare time I did a great deal of solid reading, chiefly history. After dinner, my wife and I used to read aloud in turns, and in this way we ploughed through large numbers of standard histories in many volumes.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5: First marriage, 1967  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB15-050.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB15-050.HTM</a></p>	<p>最初の結婚とともに、私は非常に幸福かつ爽やかな仕事のできる時期に入った。感情(情緒)の上でのトラブルはまったくなく、私のエネルギーは知的仕事の方に注がれた。結婚の初期の時期を通して、数学と哲学の両方にわたって幅広く読書をした。私は、ある一定量のオリジナルな研究を成し遂げ、後年進める他の研究への基礎を築いた。海外旅行をし、時間のある時は、主として歴史関係の本を朗読した。妻と私は、夕飯の後に、交互に朗読するのを習慣とし、私たちが、そのようにして、おびただしい数の標準的な数々の多い歴史書をこつこつと読んだ。このようにして読んだ最後の歴史書は、グレゴロウィウス(ローマ市史)(全8巻)であったように思う。この時期は、私の生活のなかで、知的に最も爽やかな時期であり、それを可能にしてくれた最初の妻に、恩があり感謝している。</p>	

	C1-20	<p>My lectures on German Socialism were published in 1896. This was my first book, but I took no great interest in it, as I had determined to devote myself to mathematical philosophy. I re-wrote my Fellowship dissertation, and got it accepted by the Cambridge University Press, who published it in 1897 under the title An Essay on the Foundations of Geometry. I subsequently came to think this book much too Kantian, but it was fortunate for my reputation that my first philosophical work did not challenge the orthodoxy of the time. It was the custom in academic circles to dismiss all critics of Kant as persons who had failed to understand him, and in rebutting this criticism it was an advantage to have once agreed with him. The book was highly praised, far more highly in fact than it deserved. Since that time, academic reviewers have generally said of each successive book of mine that it showed a falling-off.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5: First marriage, 1967  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB15-120.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB15-120.HTM</a></p>	<p>ドイツ社会主義についての私の講義は、1896年（ラッセル24歳）に出版された。これは、私の最初の著書（注：Geometric Philosophy / 哲学 - 可算性、ドイツ社会主義、）であったが、私は数理哲学に専念しようとして決心していたので、この著作に大きな関心をもたなかった。私は、特別研究員資格取得のための学位論文を書き直し、ケンブリッジ大学出版部に引きつけてもらい、1897年に、『幾何学基礎論』(Foundations of Geometry) という書名で出版した。後に私は、この本はあまりにカントよりであると考えるようになったが、私の最初の哲学に関する著作が、当時の正統派に対し異議を唱えなかったということは、私の名声のためには喜ばしいことだった。カントを批判する者すべて、カントを理解し損ねたものとして簡単に片付けてしまうのが、当時の学界（英国哲学会 / 学者仲間）の慣例であった。また、こうした批判に反駁をあげせるにあたって、私が以前カント（Immanuel Kant, 1724-1804）に賛成していたことがあるという事実は、「何かと好都合」であった（注：皮肉です）。この本は、実際のところ、その価値以上に、高く賞賛された。それ以後、学界の批評家たちは、一般的に言って、その後続けて出版した私の著書について、「（以前の著作よりも）質が低下している」と言ったものである。</p>	<p>* M. ピーターセン『実践 日本人の英語』（岩波新書j0.67説明）：「～」を改めて指摘しておく。「challenge」目的語には「～を挑戦する、や～に異議を唱える」などの意味はあるが、「～に挑戦する」という意味は無い。</p>		
★	C1-21	<p>We spent two successive autumns in Venice, and I got to know almost every stone in the place. From the date of my first marriage down to the outbreak of the first war, I do not think any year passed without my going to Italy. Sometimes I went on foot, sometimes on a bicycle, once in a tramp steamer calling at every little port from Venice to Genoa. I loved especially the smaller and more out-of-the-way towns, and the mountain landscapes in the Apennines. After the outbreak of the war, I did not go back to Italy till 1949.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 5: First marriage, 1967  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB15-190.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB15-190.HTM</a></p>	<p>私たち（私とアリス）は、2年続けて、ヴェニス（Venezia ベネチア）で秋を過ごした。そして私は、ヴェニスの隅から隅まで知り尽くした（道路の敷石という敷石のほとんど全てを知りつくすほどになった）。初編（1894年）の目次から第一回まで、1914年までの間、イタリアに行かなかつた年はなかつたように思う。時には徒歩で、時には自転車で行った。一度はヴェニスからゼノヴァ（Genova ジェノヴァ）までの全ての小さな港に寄港する不定期貨物船で旅行した。私は特に、より小さくまがり角の多いところにある町や、イタリアを縦断するアペニン山脈の山並み（眺望）を愛した。第一次大戦勃発後は、1949年まで、私はイタリアに戻らなかった。</p>			
★	C1-22	<p>At the end of those five minutes, I had become a completely different person. For a time, a sort of mystic illumination possessed me. I felt that I knew the thoughts of everybody that I met in the street, and though this was, no doubt, a delusion, I did in actual fact find myself in far closer touch than previously with all my friends, and many of my acquaintances. Having been an Imperialist, I became during those five minutes a pro-Boer and a Pacifist. Having for years cared only for exactness and analysis, I found myself filled with semi-mystical feelings about beauty, with an intense interest in children, and with a desire almost as profound as that of the Buddha to find some philosophy which should make human life endurable. A strange excitement possessed me, containing intense pain but also some element of triumph through the fact that I could dominate pain, and make it, as I thought, a gateway to wisdom. The mystic insight which I then imagined myself to possess has largely faded, and the habit of analysis has reassessed itself. But something of what I thought I saw in that moment has remained always with me, causing my attitude during the first war, my interest in children, my indifference to minor misfortunes, and a certain emotional tone in all my human relations.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 6: Principia Mathematica, 1967  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB16-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB16-040.HTM</a></p>	<p>そうした内省の5分間が過ぎた時、私はまったく違った人間になっていた。しばらくの間、一種の神秘的な啓示が私を捉えた。私は「誰でも分かること」を人々の心の奥の奥に感じることができるようになった。それはもちろん錯覚ではあるが、しかし実際に、友人すべて及び知人の多くの人の心に、以前よりもずっと親密に触れあえるのがわかった。それ以前は帝国主義者であったが、その5分間の間に、ボエア人の味方になり平和主義者となった。長年の間、正確さと「分析」のみを好んできたが、（5分の内省の後）美に対する半ば神秘的な感情、子供に対する強い関心、また、（苦しむ）人生を堪えることができる何らかの哲学を見いだしたいという執念（ブッダ）の場合と同じような深い望みに満たされている自分を見つけた。不思議な興奮が私を捉えた。それは、大きな苦痛が内に含まれてはいたが、また同時に、自分は苦痛を支配することができる、その苦痛を觀賞への門とすることができる。 - - 私はその時そう思ったのであるが、 - - という事実は、一種の勝利感すら含まれていた。その時たしかに自分は所持していると思った神秘的な洞察力もその後かなり色あせ、分析の習慣が再び自己主張し始めた。しかしあの瞬間に確かに自分が悟ったと思うことの端つかは、いつも心の底に残り、それが、第一次世界大戦中の私の態度、子供への興味、小さな不幸に対する無頓着、及び私の人間関係すべてにおけるある感動しやすい情動的傾向を私にもたらしたのである。</p>	<p>【回心】  松下注：ここでは「理論的な、平和主義者ではなく、「情動的な、平和主義者の意味。ラッセルは後にヒットラーを打倒するために、第2次世界大戦を支持したことから、平和主義者として一貫していないと非難された。それに対しラッセルは、防衛のための戦争の中にはやむを得ないものもあることから、「自分は理論的な絶対平和主義者であったことは一度もない」と弁明した。しかしアメリカに続いてソ連も核兵器を保有するようになってからは、特に1953年のピキニの水爆実験以後は、いかなる小規模な戦争も核戦争に発展する可能性があるということと、現実的な平和「主義者」として、死ぬまで反戦、反核活動に尽力した。</p>		
	C1-23	<p>What at first attracted me to Lawrence was a certain dynamic quality and a habit of challenging assumptions that one is apt to take for granted. I was already accustomed to being accused of undue slavery to reason, and I thought perhaps that he could give me a vivifying dose of unreason. I did in fact acquire a certain stimulus from him, and I think the book that I wrote in spite of his blasts of denunciation was better than it would have been if I had not known him.</p> <p>But this is not to say that there was anything good in his ideas. I do not think in retrospect that they had any merit whatever. They were the ideas of a sensitive would-be despot who got angry with the world because it would not instantly obey. When he realised that other people existed, he hated them. But most of the time he lived in a solitary world of his own imaginings, peopled by phantoms as fierce as he wished them to be. His excessive emphasis on sex was due to the fact that in sex alone he was compelled to admit that he was not the only human being in the universe. But it was so painful that he conceived of sex relations as a perpetual fight in which each is attempting to destroy the other.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-150.HTM</a></p>	<p>最初、私がロレンスに惹きつけられたのは、彼のある種の機能的な性格（特質）や、人が当然のことと考えがちな仮定（懐疑）に挑戦する彼の習慣であった。私はすでに、不当に（必要以上に）理性的な奴隷になっていると非難されるのに割れていた。そして、彼は私に活気を与える一服の刺激を彼から受けた。また、彼を知らずに書いた本の出来よりも、彼からの猛烈な非難にもかかわらず書いた本の出来の方がよくなったと思う。</p>			
	C1-24	<p>I did not know in the first days how serious was my love for Colette. I had got used to thinking that all my serious feelings were given to Ottoline. Colette was so much younger, so much less of a personage, so much more capable of frivolous pleasures, that I could not believe in my own feelings, and half supposed that I was having a light affair with her.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-210.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-210.HTM</a></p>	<p>最初、私がロレンスに惹きつけられたのは、彼のある種の機能的な性格（特質）や、人が当然のことと考えがちな仮定（懐疑）に挑戦する彼の習慣であった。私はすでに、不当に（必要以上に）理性的な奴隷になっていると非難されるのに割れていた。そして、彼は私に活気を与える一服の刺激を彼から受けた。また、彼を知らずに書いた本の出来よりも、彼からの猛烈な非難にもかかわらず書いた本の出来の方がよくなったと思う。</p>			



C1-25	<p>When the War was over, I saw that all I had done had been totally useless except to myself. I had not saved a single life or shortened the War by a minute. I had not succeeded in doing anything to diminish the bitterness which caused the Treaty of Versailles. But at any late I had not been an accomplice in the crime of all the belligerent nations, and for myself I had acquired a new philosophy and a new youth. I had got rid of the don and the Puritan. I had learned an understanding of instinctive processes which I had not possessed before, and I had acquired a certain poise from having stood so long alone. In the days of the Armistice men had high hopes of Wilson. Other men found their inspiration in Bolshevik Russia. But when I found that neither of these sources of optimism was available for me, I was nevertheless able not to despair. It is my deliberate expectation that the worst is to come, but I do not on that account cease to believe that men and women will ultimately learn the simple secret of instinctive joy.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1: The First War, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-350.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-350.HTM</a></p>	<p>第一次世界大戦が終わった時、自分がそれまでやってきたことは、自分自身に対して以外、まったく何の役にも立たなかったことがわかった。私はまったく一人の人間の生命を救うことさえも、また戦争を一分たりも短縮することもできなかった。ヴェルサイユ条約をもたす原因となった敵意 (bitterness) を減らすためにいかなることもなすことに成功しなかった。しかし、ともかくも私は、すべてので難儀がなされた罪の状況で生かされた。新しい人生観 (philosophy) と新しい青春を得た。私は、大学教師であることと厳格な人間 (ビューリタン) であることから解放された。以前はまったくもっていなかった本能的なプロセス (本能が働くプロセス?) を理解することについて学んだ。また、非難に強い態度を立てたことから (独自の立場を貫いたことから)、ある種の心の平静さ身に着けた。休戦期間中、人々はアメリカのウィルソン大統領に大いに期待を抱いた。他の人々は、ボルシェヴィキ・ロシア (革命ロシア) に悪感を見出した。しかし、これら二つの独裁主義の派のいずれも、私にとつて、何の役にも立たないことがわかった時に、それにもかかわらず、絶望に陥らないことができた。今後、最悪の事態がやってくるだろうということは、慎重に検討した上で私の予想である (ラッセル注)。この部分は、1931年に書いたものである (松下注)。勝利した連合国は、支払う不可能な賠償金をドイツに課した。当初期待された国際連盟も、アメリカは国内の反対が強く加盟せず、弱体であり、ラッセルは第一次世界大戦よりも残酷な世界大戦が起るだろうと予測した。しかし、私はそのことを理由に人間 (の男女) は、究極的には本能的な喜びの単純な秘訣を学ぶだろうという信念を捨てておかない。</p>			
c1-26	<p>From a financial point of view also the ending of the War was very advantageous to me. While I was writing Principia Mathematica I felt justified in living on inherited money, though I did not feel justified in keeping an additional sum of capital that I inherited from my grandmother. I gave away this sum in its entirety, some to the University of Cambridge, some to Newnham College, and the rest to various educational objects. After parting with the debentures that I gave to Eliot, I was left with only about £100 a year of unearned money, which I could not get rid of as it was in my marriage settlement. This did not seem to matter, as I had become capable of earning money by my books. In prison, however, while I was allowed to write about mathematics, I was not allowed to write the sort of book by which I could make money. I should therefore have been nearly penniless when I came out but for the fact that Sanger and some other friends got up a philosophical lectureship for me in London. With the end of the War I was again able to earn money by writing, and I have never since been in serious financial difficulties except at times in America.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 2: Russia, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB22-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB22-010.HTM</a></p>	<p>金銭上 (家計上) の観点から言っても、終戦は非常に好都合であった。「プリンキピア・マテマティカ」を書いている間は、(利益がでない純粋にアカデミックな意義のある仕事をしている間は) 父の遺産で生活をたてていくことは正当化されると思っていたが、さらに祖母が遺してくれた資産も自分のものにするには正しくないと感じた。そこでその金額に相当するお金は全て寄付することとし、一部はケンブリッジ大学 (本部)、一部は (ケンブリッジ大学・ニューナム・カレッジ) には種々の教育目的のために寄付した。そうして「社債」を、エリオットにあげ、手放して以後、私の手許に残った不労所得は、年約百ポンドだけになった。それだけは私の「婚姻継続的不動産処分 (marriage settlement) のためのものであったので、なくすることができなかった。</p> <p>このこと (収入は年100ポンドのみという状態) は、    - - 私は著作でお金を稼げるようになっていたので、    - - たいした事だとは思わなかった。けれども、刑務所内においては、数学に関する著作は許されていたが、お金を得られるような本を書くことは許されなかった。そのためにも、し、チャールズ・サンガーや何人かの他の友人が私にロンドンにおける哲学の講師 (講演者) の仕事を世話してくれなかったら、私が出所してきた時は、ほとんど一文無しの状態になっていたであろう。終戦とともに私は再び執筆で収入を得ることができるようになった。以後、    - - 滞米時に時々経済的に苦しい時はあったが、それ以外には、深刻な経済的な困難に陥ることはまったくなかった。(注: 1939年にカリフォルニア大学の客員教授をやめてハーンズ財団に雇われる1940年未までは経済的に困窮した。</p>	<p>(注: トリニティ・コレッジではなく、なぜ女子校のニューナム・コレッジ (ニューナム・コレッジ) に寄付したのが不詳。祖母が、亡き母の關係だろうか)    (注: marriage settlement: 不動産譲渡の性質をもった継承的不動産処分。婚姻することを条件として婚姻の前に婚姻当事者の双方または一方、あるいは両親や親族が設定するもの (『研究社新英和大事典』より) 参考: イギリス不動産法の単純化と土地移転の簡易化)</p>		
c1-27	<p>Astrakhan seemed to me more like hell than anything I had ever imagined. The town water-supply was taken from the same part of the river into which ships shot their refuse. Every street had stagnant water which bred millions of mosquitoes; every year one third of the inhabitants had malaria. There was no drainage system, but a vast mountain of excrement at a prominent place in the middle of the town. Plague was endemic. There had recently been fighting in the civil war against Denikin. The flies were so numerous that at meal-time a table-cloth had to be put over the food, and one had to insert one's hand underneath and snatch a mouthful quickly. The instant the table-cloth was put down, it became completely black with flies, so that nothing of it remained visible. The place is a great deal below sea-level, and the temperature was 120 degrees in the shade.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 2: Russia, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB22-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB22-150.HTM</a></p>	<p>アストラハン (ロシア語: Астрахань、アーストラハニ: Astrakhan / フォルガ川下流域デルタに位置するアストラハン地方の首都でカスピ海岸から約90kmのところにある。) は、私がそれまでに想像したいかなるものよりもひどい地獄のようなところであると思われた。その町の船からは、アストラハンに入ってくる船舶が廃棄物を捨てる川の場所と同じところからとられていた。どの通りにも腐敗した泥水がたまり、それが何百万という蚊を繁殖させた。毎年、住民の三分の一がマラリアにかかった。下水道システム (排水処理システム) がまったくなく、街の真ん中の目立つ場所に、排泄物 (糞便) の山ができていた。ペスト (ガ風土病) のように流行していた。我々がアストラハンに到着した少し前に、デニキン (Anton Ivanovich Denikin, 1872-1947: ロシア反革命軍の指導者に叛逆する内乱が起る) 職團が行っていた。横がとてつなく、さき、飛んでいたために、食事時には、食べ物の上にテーブルクロスをかけ、そうしてテーブルクロスの上に手を入れて、一口分の食べものをすばやく取り出さなければならなかった。テーブル、クロスが落ちるやいなや、横がたかって完全に真黒に、そのたも食べ物は何一つ見えなかった。アストラハンの土地は、海面よりもかなり低く、気温は日陰でも華氏120度 (注: 摂氏になおすと48.9度) もあった。</p>	<p>(注: 日高氏は、「プラーグ」では風土病がはやっていた。その少し前、デニキンに叛逆する内乱が勃発して、プラーグで戦闘が行われていたのだった。」と訳されているが、ここではアストラハンでの出来事を話しているものであり、「Plague」は地名ではなく、ペストのこと)</p>		

<p>C1-28</p>	<p>... By the time we finally got home, I was very ill indeed. Before I had time to realise what was happening, I was delirious. I was moved into a German hospital, where Dora nursed me by day, and the only English professional nurse in Peking nursed me by night. For a fortnight the doctors thought every evening that I should be dead before morning. I remember nothing of this time except a few dreams. When I came out of delirium, I did not know where I was, and did not recognise the nurse. Dora told me that I had been very ill and nearly died, to which I replied: 'How interesting', but I was so weak that I forgot it in five minutes, and she had to tell me again. I could not even remember my own name. But although for about a month after my delirium had ceased they kept telling me I might die at any moment, I never believed a word of it. The nurse whom they had found was rather distinguished in her profession, and had been the Sister in charge of a hospital in Serbia during the War. The whole hospital had been captured by the Germans, and the nurses removed to Bulgaria. She was never tired of telling me how intimate she had become with the Queen of Bulgaria. She was a deeply religious woman, and told me when I began to get better that she had seriously considered whether it was not her duty to let me die. Fortunately, professional training was too strong for her moral sense. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 3: China, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-090.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-090.HTM</a></p>	<p>・・・。私たちがかようなやく家に悪く運には、私は正に重病になっていった。私に向か起こっているのが認識できる時がくるまで、私はずっと意識がなかった。私はドイツ人経営の病院に運ばれ、その病院では、昼間はドーラが私を看護し、夜は北京にたった一人しかいなかった専門の英国人看護婦が私を看護した。2週間の間、医師団は毎晩、朝までには私は死ぬだろうと考えた。私は、この時のことは、この夢を覚醒して思い出さない。看護婦を説いた時私は、自分がどこにいるのかわからなかったし、その看護婦のことも誰なのか認識できなかった。ドーラは、私がずっと危篤状態に死にそうな状態であった、と語った。それに対し、私は「それは大変面白い」と応じた。しかし私は非常に弱っていたので、5分後にはそれを忘れてしまし、彼女はまたも同じやりとりを繰り返さなければならなかった。私は自分の名前すら思い出せないほどだった。そのような不安状態が終つてからも、一ヶ月間は、いつ死ぬかもしれない状態だと続け続けた。私は彼女の言うことは、いつも信じていなかった。私のために見付けにくれた看護婦は、専門職としてかなり抜きん出ており、第一次世界大戦中はセルビアの病院で看護婦長を務めていた。その病院は全てドイツ人に占領され、看護婦たちはブルガリアに移された。彼女は、ブルガリア王妃とどんなに親しい関係になったかということをも、まったく疲れをみせず、私に語った。彼女は深い宗教心を持った女性であった。そして、彼女は私が快方に向かう時、私を死なせることが彼女の責務ではないのかどうか真剣に考えた。と私に話してくれた。彼女の職業的訓練が、彼女の道徳よりもずっと強力であったことは、私にとって幸運だった。</p>	<p>松下注：キリスト教徒としては、反キリスト教徒で無神論者のラッセルを助けずに死なせよべきだが、専門職としての看護婦としてはラッセルを助けよべきであったので、どちらを優先すべきか迷ったという意味。</p>
<p>C1-29</p>	<p>All through the time of my convalescence, in spite of weakness and great physical discomfort, I was exceedingly happy. Dora was very devoted, and her devotion made me forget everything unpleasant. At an early stage of my convalescence Dora discovered that she was pregnant, and this was a source of immense happiness to us both. Ever since the moment when I walked on Richmond Green with Alys, the desire for children had been growing stronger and stronger within me, until at last it had become a consuming passion. When I discovered that I was not only to survive myself, but to have a child, I became completely indifferent to the circumstances of my convalescence, although, during convalescence, I had a whole series of minor diseases. The main trouble had been double pneumonia, but in addition to that I had heart disease, kidney disease, dysentery, and phlebitis. None of these, however, prevented me from feeling perfectly happy, and in spite of all gloomy prognostications, no ill effects whatever remained after my recovery. Lying in my bed feeling that I was not going to die was surprisingly delightful. I had always imagined until then that I was fundamentally pessimistic and did not greatly value being alive. I discovered that in this I had been completely mistaken, and that life was infinitely sweet to me. Rain in Peking is rare, but during my convalescence there came heavy rains bringing the delicious smell of damp earth through the windows, and I used to think how dreadful it would have been to have never smelt that smell again. I had the same feeling about the light of the sun, and the sound of the wind. Just outside my windows were some very beautiful acacia trees, which came into blossom at the first moment when I was well enough to enjoy them. I have known ever since that at bottom I am glad to be alive. Most people, no doubt, always know this, but I did not. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 3: China, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-100.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-100.HTM</a></p>	<p>私は、回復期の全期間を通して、弱々しく、肉体的には非常に不快であったにもかかわらず、きわめて幸福だった。ドーラは非常に献身的で、無條件なことはすべて忘れさせてくれた。私の回復の初期の頃、ドーラは自分が妊娠していることを発見した。そうしてそれは、私たち二人にとって計り知れない幸福の源泉であった。アリス(初婚相手)とリッチモンド・グリーンを散策した時以来、子供がほしいという私の願望は日増しに強まってゆき、とうとう心を病めるまで、すばらしいものになっていた。私は、自分が生き残っただけでなく、子供を持つことにも、気がわくと、回復期間中、もろもろの一連の軽い病気を併発していたにもかかわらず、自分が回復の途上にあるということにはまったく無頓着になった。主要な病気は、両側肺炎であったが、それに加えて、心臓病、腎臓病、赤痢、腸炎も併発していた。けれども、そのいずれも、私の申し分のない幸福感を妨げることはなかった。そうして、これらあらゆる陰鬱な徴候にもかかわらず、回復後は、いかなる悪い影響も後に残らなかった。それは死なないということを感じながらベットに横たわっていることは、驚くほど愉快なことであった。その時まで私は、自分は根本においては悲観的な人間であり、生きていくことに大きな価値を置いていないと常に想っていた。しかしそのような考えをすることは完全な間違いであり、人生は無限に甘美なものであるという信念を確立した。北京では雨はまれにしか降るのだが、回復期間中、大雨が降り、それが湿った大地の快い香りを窓を通して運んできた。そうしてもし二度とこの香りをかくことがなかったとしたら、何と恐ろしいことだろう。と私はよく思った。私は、太陽の光にもまた風の音にも、これと同様の感情を抱いた。私の病室の窓のちようど外側に、何本かの非常に美しいアカシアの木が立っており、私が良くなって癒やされるようになったその最初の時に、いっせいに開花した。その時以来私は、生きていくことは楽しいということを中心に感からわかるようになった。大部分の人々には、疑いもなくいつまでもそのことがわがわがしているのに、私にはわからなかったのである。</p>	
<p>C1-30</p>	<p>We made a ten hours' journey in great heat from Kyoto to Yokohama. We arrived there just after dark, and were received by a series of magnesium explosions, each of which made Dora jump, and increased my fear of a miscarriage. I became blind with rage, the only time I have been so since I tried to strangle FitzGerald. I pursued the boys with the flashlights, but being lame, was unable to catch them, which was fortunate, as I should certainly have committed murder. An enterprising photographer succeeded in photographing me with my eyes blazing. I should not have known that I could have looked so completely insane. This photograph was my introduction to Tokyo. I felt at that moment the same type of passion as must have been felt by Anglo-Indians during the Mutiny, or by white men surrounded by a rebel coloured population. I realized then that the desire to protect one's family from injury at the hands of an alien race is probably the wildest and most passionate feeling of which man is capable. My last experience of Japan was the publication in a patriotic journal of what purported to be my farewell message to the Japanese nation, urging them to be more chauvinistic. I had not sent either this or any other farewell message to that or any other newspaper. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 3: China, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-150.HTM</a></p>	<p>私たちは、猛暑のなが京都から横浜まで(東海道線で)10時間の旅をした。暗くなってすぐの頃、横浜に到着した。そして私たちはカメラマンたちが連続的にマグネシウムの爆発音で迎えられた。マグネシウムが一回爆発することにドーラはとび上がったので、流産するのではないかと心配が増した。私は怒りで我を失った。私がそんなふうになったのは、かつてフィッツジェラルドの首を絞めて殺しようとした時以来、この時だけであった。私は、フラッシュライト(閃光灯)をもって、男性カメラマンたちを追いかけたが、びっこをひいていたためにつかまえることができなかった。私は間違いなく殺人をおかしたであろうから、そのことは幸いであった。一人の冒険心のあるカメラマンが、怒りで眼が腫れどして私の写真を撮ることに成功した。私がそのような完璧に狂気に達して見えるようになるなどは、この写真がなければいっせ知らなかったことである。この写真で私は東京に紹介された。あの時の私の感情は、インド暴動(注: Mutiny 1857年のインドのベンガル地方のインド人、傭兵が英国支配に対して起こした反乱)に際して、インドに在の英国人がもつたにちがいない感情 - すなわち有色人種の叛徒にとり囲まれた時の白人の感情 - と同じ種類のものであった。その時は、異人種の手によって首を絞めるところから自分の家族を守りたいという欲求は、人間が持つことのできる感情のうちで最も荒々しく情熱的なものであろうと実感した。日本での私の最後の体験は、日本国民への私のお別れのメッセージとして、日本人はもつと愛国的になれという題目のものを愛国的新聞に掲載してほしいとの依頼であった。私はこの依頼のメッセージは、もちろん、他のどんなメッセージも、この愛国的な新聞あるいはその他のいかなる新聞にも送らなかつた。</p>	

<p>C1-31</p>	<p>It must not be supposed that life during these six years on the autumn of 1921 to the autumn of 1927 was all one long summer idyl. Parenthood had made it imperative to earn money. The purchase of two houses had exhausted almost all the capital that remained to me. When I returned from China I had no obvious means of making money, and at first I suffered considerable anxiety. I took whatever odd journalistic jobs were offered me: while my son John was being born, I wrote an article on Chinese pleasures in fireworks, although concentration on so remote a topic was difficult in the circumstances.</p> <p>In 1922 I published a book on China, and in 1923 (with my wife Dora) a book on The Prospects of Industrial Civilization, but neither of these brought much money. I did better with two small books, The A.B.C. of Atoms (1923) and The ABC of Relativity (1925), and with two other small books, Icarus or The Future of Science (1924) and What I Believe (1925). In 1924 I earned a good deal by a lecture tour in America. But I remained rather poor until the book on education in 1926. After that, until 1935, I prospered financially, especially with Marriage and Morals (1929) and The Conquest of Happiness (1930). Most of my work during these years was popular, and was done in order to make money, but I did also some more technical work. There was a new edition of Principia Mathematica in 1925, to which I made various additions; and in 1927 I published The Analysis of Matter, which is in some sense a companion volume to The Analysis of Mind, begun in prison and published in 1921.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 4: Second Marriage, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB24-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB24-030.HTM</a></p>	<p>1921年の秋から1927年の秋までの6年間の生活全てが一つの長いロマンチックな物語(夏の田園詩)だったと思ってしまうのは、お金をつかって、儲かろうとするというところを不可避なものとした。二軒の家の購入によって、私に残っていた資産のほぼ全てを使い尽くしてしまった。中国から戻った時、私は金を稼ぐはつきりした手段をまったく持っていなかった。それで当初は、かなり心配でなかった。豊饒の新開拓地帯のブーネーリ(ブライズワック)の仕事は、どのようなものでも引き受けた。息子ジョンが生まれようとしていた頃、中国人の娯楽としての花火大会に関する記事をつづいたが、そのような状況において、(そういつた)まったたくかけ離れた話題に精神を集中することは困難である。</p> <p>1922年に中国に関する著書(The Problem of China)を、1923年に(妻のドーラと共著で)『産業文明の前途』(The Prospects of Industrial Civilization)を出したが、どちらもたいしてお金にならなかった。それよりもよく売れたのは、1923年の『原子のA B C』(The ABC of Atoms)と1925年の『相対性理論のA B C』(The ABC of Relativity)という2冊の小書、それから、1924年の『イカルス、即ち科学の将来』(Icarus, or the Future of Science)と1925年の『私の信念』(What I Believe)という2冊の小書であった。1924年には、アメリカへの講演旅行でかなりの収入があった。しかし、1926年に教育に関する本を出すまでは、どちらかというと言った(な状態)が続いた。その後1932年までは、特に1929年の『結婚と道徳』(Marriage and Morals)と1930年の『幸福論』(The Conquest of Happiness)、『幸福の獲得』(The Conquest of Happiness)がよく売れたため、経済的に豊かであった。この数年の間の著作のほとんどは、一般向き(通俗的な)ものであり、またそれはお金を稼ぐために執筆したものであった。しかし、より専門的な著作も何冊が執筆された。1925年に『プリンキピア マテマティカ』の新版(Principia Mathematica, 2nd ed)を出し、その新版には多くの増補をした。1927年に『物質の分析』(The Analysis of Matter)を出版したが、この本はある意味では獄中で書き始めて1921年に出版した『精神の分析』(The Analysis of Matter)の姉妹書と言える。</p> <p>モリー(エリザベス)の場合も同様、彼女も終わりがやってきて、兄はエリザベスに陥った。彼女離婚を望んだモリーは、離婚の代償(慰謝料)として、彼に生涯年額400ポンドを支払うこと要求した。兄の死後私がそれを代わりに支払わなければならなかった。彼女は90歳頃に亡くなった。</p> <p>エリザベス(Elizabeth von Amin, 1866-1941)は、彼女の方から兄のものを去り、『ヴェラ』という題の、実に我儘ならぬほど残酷な小説を書いた。この小説では、ヴェラは彼の妻であったが既に亡くなっている。彼女を失って彼は苦痛にくれてはいるというこになっている。彼女は、エリザベス、ハウスの塔の窓から落ちて死亡した。小説を読み進めると、読者はほかに、彼女の死は事故死ではなく、兄の冷酷さのためにひき起こされた自殺であるように推理させられるようになる。こういうことがあったので私は子供たちに、特に彼女をこころを忠告をせざるを得なかった。即ち、小説家は残酷である。</p>		
<p>C1-32</p>	<p>Her day, like Miss Morris's, came to an end, and he fell in love with Elizabeth. Molly, from whom he wished to be divorced, demanded £400 a year for life as her price; after his death, I had to pay this. She died at about the age of ninety.</p> <p>Elizabeth, in her turn, left him and wrote an intolerably cruel novel about him, called Vera. In this novel, Vera is already dead; she had been his wife, and he is supposed to be heart-broken at the loss of her. She died by falling out of one of the windows of the tower of Telegraph House. As the novel proceeds, the reader gradually gathers that her death was not an accident, but suicide brought on by my brother's cruelty. It was this that caused me to give my children an emphatic piece of advice: "Do not marry a novelist."</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 4: Second Marriage, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB24-060.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB24-060.HTM</a></p>	<p>『自由と組織』を書き上げると私は、テレグラフ・ハウスに戻ってドーラにどこか他のところで暮らすように言おうと決心した。それは財政上の理由からであった。私、テレグラフ・ハウスのために、年額1,000ポンドの賃借料を支払う法律上の義務を負っていた。それは、私の兄(John Francis Stanley Russell, 2nd Earl Russell, 1865 ~ 1931)の2人目の妻に扶助料を支払わなければならないことの結果であった。(注: 兄の再婚した妻の遺産の取り分として、テレグラフ・ハウスの所有権の一部は、それ以前、年額400ポンドに設定されたものである。つまりその額、400ポンドは賃借料=扶助料として、兄に代わってラッセルが支払わなければならなかったと推論される。)テレグラフ・ハウスはラッセルの兄の所有物であったが、兄は控室に失敗して破産。兄は1931年9月に死亡した。私自身もまたジョンとドーラのための全経費だけできず、ドーラに対する扶助料(注: 正式に離婚が成立したのは1935年)を支払う義務があった。一方、私の収入は激減した。収入が減ったのは、一部は(1929年に)世界大恐慌が超こり、人があまり金を買わなくなったこと、一部は私がもう通俗的な本を書かなくなったこと、一部は、1931年にカリフォルニアにあるハースト(William Randolph Hearst, 1863-1951)の大邸宅(注: サン・シメオン)に滞在することを拒否したことが原因であった。以前は、ハースト系の新聞に毎週論説を執筆して年に1,000ポンドの収入があったが、私が滞在を拒絶してからは半減し、その後すくにもう論説は不要だと言われされた。テレグラフ・ハウスは広く、そこに適する道は、それぞれ約一マイルある(車が通れる)私道が2本あるだけであった。私はテレグラフハウスを売りたいとは思ったが、それがそこにある間は売りに出すことができなかった。弟の望みは、自分自身で、テレグラフ・ハウスを購入してくれ、そうなる人にとつて魅力的なものになるように努めることであった。</p>		
<p>C1-33</p>	<p>When the writing of Freedom and Organization was finished, I decided to return to Telegraph House and tell Dora she must live elsewhere. My reasons were financial. I was under a legal obligation to pay a rent of £400 a year for Telegraph House, the proceeds being due to my brother's second wife as alimony. I was also obliged to pay alimony to Dora, as well as all the expenses of John and Kate. Meanwhile my income had diminished catastrophically. This was due partly to the depression, which caused people to buy much fewer books, partly to the fact that I was no longer writing popular books, and partly to my having refused to stay with Hearst in 1931 at his castle in California. My weekly articles in the Hearst newspapers had brought me £1000 a year, but after my refusal the pay was halved, and very soon I was told the articles were no longer required. Telegraph House was large, and was only approachable by two private drives, each about a mile long. I wished to sell it, but could not put it on the market while the school was there. The only hope was to live there, and try to make it attractive to possible purchasers.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 5: Later Years of Telegraph House, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB25-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB25-020.HTM</a></p>	<p>『自由と組織』を書き上げると私は、テレグラフ・ハウスに戻ってドーラにどこか他のところで暮らすように言おうと決心した。それは財政上の理由からであった。私、テレグラフ・ハウスのために、年額1,000ポンドの賃借料を支払う法律上の義務を負っていた。それは、私の兄(John Francis Stanley Russell, 2nd Earl Russell, 1865 ~ 1931)の2人目の妻に扶助料を支払わなければならないことの結果であった。(注: 兄の再婚した妻の遺産の取り分として、テレグラフ・ハウスの所有権の一部は、それ以前、年額400ポンドに設定されたものである。つまりその額、400ポンドは賃借料=扶助料として、兄に代わってラッセルが支払わなければならなかったと推論される。)テレグラフ・ハウスはラッセルの兄の所有物であったが、兄は控室に失敗して破産。兄は1931年9月に死亡した。私自身もまたジョンとドーラのための全経費だけできず、ドーラに対する扶助料(注: 正式に離婚が成立したのは1935年)を支払う義務があった。一方、私の収入は激減した。収入が減ったのは、一部は(1929年に)世界大恐慌が超こり、人があまり金を買わなくなったこと、一部は私がもう通俗的な本を書かなくなったこと、一部は、1931年にカリフォルニアにあるハースト(William Randolph Hearst, 1863-1951)の大邸宅(注: サン・シメオン)に滞在することを拒否したことが原因であった。以前は、ハースト系の新聞に毎週論説を執筆して年に1,000ポンドの収入があったが、私が滞在を拒絶してからは半減し、その後すくにもう論説は不要だと言われされた。テレグラフ・ハウスは広く、そこに適する道は、それぞれ約一マイルある(車が通れる)私道が2本あるだけであった。私はテレグラフハウスを売りたいとは思ったが、それがそこにある間は売りに出すことができなかった。弟の望みは、自分自身で、テレグラフ・ハウスを購入してくれ、そうなる人にとつて魅力的なものになるように努めることであった。</p>		
<p>C1-34</p>	<p>Although, for financial reasons, I had to be glad to be rid of Telegraph House, the parting was painful. I loved the downs and the woods and my tower room with its views in all four directions. I had known the place for forty years or more, and had watched it grow in my brother's day. It represented continuity, of which, apart from work, my life has had far less than I could have wished. When I sold it, I could say, like the apothecary, 'my poverty but not my will consents.' For a long time after this I did not have a fixed abode, and thought it not likely that I should ever have one. I regretted this profoundly.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 5: Later Years of Telegraph House, 1968]  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB25-070.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB25-070.HTM</a></p>	<p>財政上の見地から言えば、これは喜ぶべきことであったが、テレグラフ・ハウスを別れることは、私にとって、苦痛であった。高木と森と四方八方に眺望のきく塔の中の自分の部屋を私はとても愛していた。私はテレグラフ・ハウスを40年以上も前から知っており、兄(所有)の時代に徐々に(増築されて)大きくなっていくのを見守った。テレグラフ・ハウスは継続して、いろいろなことを象徴していた。仕事は別にすれば、自分の生涯を過ごして自分が望んだよりもはるかに少なかった(注: 4度の結婚、転居、その他のいろいろ)。財政上の見地からすれば、テレグラフ・ハウスから解放されるのは喜ぶべきことであった。私はその家を持った。私(ロンドンで)ジェリイ(エイト)に出でくる)薬材(禁止されている毒薬を売る時に)言ったように、「私の意志ではなく、貧乏が承諾するのです」と言えるものであった。その後長い間私は、定まった住所(定住地)をもたなかったし、また持てそうもないと思った。テレグラフ・ハウスの件は心から残念に思った。</p>	<p>(注: 日高氏は「だんだんと草花が植えられていくのを見守った。」と翻訳されている。)</p>	

<p>C1-35</p>	<p>Towards the end of the academic year 1939-1940, I was invited to become a professor at the College of the City of New York. The matter appeared to be settled, and I wrote to the President of the University of California to resign my post there. Half an hour after he received my letter, I learned that the appointment in New York was not definitive and I called upon the President to withdraw my resignation, but he told me it was too late. Earnest Christian taxpayers had been protesting against having to contribute to the salary of an infidel, and the President was glad to be quit of me. The College of the City of New York was an institution run by the City Government. Those who attended it were practically all Catholics or Jews, but to the indignation of the former, practically all the scholarships went to the latter. The Government of New York City was virtually a satellite of the Vatican, but the professors at the City College strove ardently to keep up some semblance of academic freedom. It was no doubt in pursuit of this aim that they had recommended me. An Anglican bishop was incited to protest against me, and priests lectured the police, who were practically all Irish Catholics, on my responsibility for the local criminals. A lady, whose daughter attended some section of the City College with which I should never be brought in contact, was induced to bring a suit, saying that my presence in that institution would be dangerous to her daughter's virtue. This was not a suit against me, but against the Municipality of New York (Information about this suit will be found in The Bertrand Russell Case, ed. by John Dewey and Horace M. Kallen, Viking Press, 1941; and also in the Appendix to Why I am not a Christian, ed. by Paul Edwards, George Allen &amp; Unwin, 1957) endeavoured to be made a party to the suit, but was told that I was not concerned. Although the Municipality was nominally the defendant, it was as anxious to lose the suit as the good lady was to win it. The lawyer for the prosecution pronounced my works "lecherous, libidinous, lustful, venerous, erotomaniac, aphrodisiac, irreverent, narrow-minded, untruthful, and bereft of moral fibre." The suit came before an Irishman who decided against me at length and with vituperation. I wished for an appeal, but the Municipality of New York refused to appeal. Some of the things said against me were quite fantastic. For example, I was thought wicked for saying that very young infants should not be punished for masturbation. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 6: America, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB26-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB26-030.HTM</a></p>	<p>1939/1940学年度(1939.9~1940.6)の終わり頃、ニューヨーク市立大学教授になるよう招聘された。この事は既に決定されているように思われた。そこで私は、カリフォルニア大学の学長宛に辞職届けを書いて提出した。学長が私の手紙を受け取って30分後に、ニューヨーク市立大学教授に私が任命されるということはまだ決定されたものでないということがわかった。そこで私は、辞表の撤回を学長に頼んだ。しかし彼はもう議定する片一方で、熱心なクリスチャンの納税者たちが、自分たちが納めた税金を不信心者の給料にあててはけないと抗議している時だったので、学長は私(という厄介者)から逃れられるのを書いた。 ニューヨーク市立大学は、ニューヨーク市庁が運営管理している学校であった。通学している学生たちは、ほとんど全てカトリック教徒かさもなければユダヤ人だった。だがカトリック教徒にとつて残念なことに、奨学金の大部分は(優秀な)ユダヤ人に支給されていた。ニューヨーク市庁は、専業主婦アザカ・ロー・ワズワースの新興都市的存在であったが、ニューヨーク市立大学の教授たちは、学問の自由の体裁をなんとか保とうと熱心に闘っていた。彼らが私を推薦したのも、その目的をとげようとしてであることは疑いなくあった。 一筆公金のある司教が、そのかされて私の就任に反対の抗議をした。そうして(それを受け)、司祭たち(牧師たちは私がニューヨーク市の犯罪の発生に対して責任があるとつて、警察に説法した。警察官はほぼ全員がアイルランド系のカトリック信者であった。私とはまったく関係のない学校に在学中の娘をもっている女性だ。私が市立大学の教授に就任するとは娘の徳行上危険だと説得されて、訴訟を起こした。これは、私に対する訴訟ではなく、ニューヨーク市当局を相手とつてなされたものであった。(ラッセル注: この訴訟に関する情報は、1941年、ポール・M. ケレン編、ワグキニング、ス版の「ハートランド・ラッセル事件」の中に見られる。さらにまた、1957年、ポール・エドワード編、アレン・アンド・アンフイン社版の「わたくしは何故クリスチャンでないか」の付録の中に見られる) 私はこの訴訟について、当事者の(一人)になるように努力したが、私には関係ないと言われた。市当局は、名目上は被告であつたが、原告の女性が訴訟に勝つことを熱望していたと同程度に、敗訴したいと望んでいた。原告(起訴)側の弁護士は、私の著書(注: Marriage and Morals, 1930 / 邦訳書「ラッセル結婚論」)で、好色、露骨な、淫、性欲、色慾、淫淫、淫淫、私欲、罪、虚偽、道徳性喪失、の理、性であると断言した。この訴訟の裁判官はアイルランド人であり、ついに、罵言をあげせながら私に不利な判決を下した。私は控訴を希望したが、ニューヨーク市当局は控訴することを拒絶した。私を攻撃する目的でなされたこととながら、全く清純な方な人もいくつもあった。たとえは、私は幼児が自慰行為をしてもそれを罰すべきではないなどと言うような不道徳な人間であるとされた。</p>	
<p>C1-36</p>	<p>... No newspaper or magazine would publish anything that I wrote, and I was suddenly deprived of all means of earning a living. As it was legally impossible to get money out of England, this produced a very difficult situation, especially as I had my three children dependent upon me. Many liberal-minded professors protested, but they all supposed that as I was an earl I must have ancestral estates and be very well off. Only one man did anything practical, and that was Dr. Barnes, the inventor of Argryol, and the creator of the Barnes Foundation near Philadelphia. He gave me a five-year appointment to lecture on philosophy at his Foundation. This relieved me of a very great anxiety. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 6: America, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB26-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB26-040.HTM</a></p>	<p>私が執筆したものはなんでも掲載してくれる新聞や雑誌はまったくなくなつてしまふ私は、突然生計をたてる手段を奪われてしまった。(母国)英国から金を取り寄せることは法的に不可能だったため、このことは、非常に困難な事態を私たちにもたらした。特に、この時私は3人の子供を扶養しなければならなかつたため、よりいっそうそうであった。多数のリベラルな考えの教授たちが抗議をしてくれた。しかし彼らは、私は伯爵だから先祖から受け継いだ遺産をもつていて、裕福に暮らしているにちがいないと想っていた。ただ一人だけ、実際的なことを何でもやってくれた。それは、ハーンズ博士であった。彼はアージロー(防衛用金銀液)の発明者であり、フィラデルフィア近郊にあるハーンズ財団の創設者であった。彼は私に、その財団で哲学の講義をするよう5年間の約束をしてくれた。これにより、非常に大きな不安を私から取り除いてくれた。</p>	
<p>C1-37</p>	<p>Dr. Barnes was a strange character. He had a dog to whom he was passionately devoted and a wife who was passionately devoted to him. He liked to patronize coloured people and treated them as equals, because he was quite sure that they were not. He had made an enormous fortune by inventing Argryol; when it was at its height, he sold out, and invested all his money in Government securities. He then became an art connoisseur. He had a very fine gallery of modern French paintings and in connection with the gallery he taught the principles of aesthetics. He demanded constant flattery and had a passion for quarrelling. I was warned before accepting his offer that he always tired of people before long, so I exacted a five-year contract from him. On December 28th, 1942, I got a letter from him informing me that my appointment was terminated as from January 1st. I was thus reduced once again from affluence to destitution. True, I had my contract, and the lawyer whom I consulted assured me that there was no doubt whatever of my getting full redress from the courts. But obtaining legal redress takes time, especially in America, and I had to live through the intervening period somehow. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 6: America, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB26-060.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB26-060.HTM</a></p>	<p>彼は変わった性格の持ち主だった。彼には、熱愛していた一匹の犬と、献身的な妻がいた。彼は有色人種のひととを支援者となることを好むとともに平等(同等)に扱った。なぜかという、有色人種は自分達と対等ではないと強く確信していたからである。彼はアージロー(局部消毒用金銀液)を発明した。ハーンズ博士は、常にちやほやされていると気がした。非常に飽学好きだった。私は、彼からの申し出(オファー)を受ける前に、彼はすぐに人に飽きてしまうと忠告を受けていたので、私からは、彼から5年間の契約を強引にとりつけた。(そうして、1942年12月28日、私は彼から契約を(1943年)1月1日から打ち切ると宣言する手紙を受け取った。私は、このようにして再び、裕福な状態から窮乏の状態へと追いやられた。確かに私は契約書を持っており、相談した弁護士も、私が法廷で間違いなく十分な補償(金)を得ることができると確約した。しかし法的な補償(金)を得られるまでには時間がかかるし、アメリカではとくにそうであり、私はその間を何とかして生計をたてなければならなかつた。</p>	

C1-38	<p>... But by this time the trouble about City College had begun to blow over, and I was able to get occasional lecture engagements in New York and other places. The embargo was first broken by an invitation from Professor Weiss of Bryn Mawr to give a course of lectures there. This required no small degree of courage. On one occasion I was so poor that I had to take a single ticket to New York and pay the return fare out of my lecture fee. My History of Western Philosophy was nearly complete, and I wrote to W. W. Norton, who had been my American publisher, to ask if, in view of my difficult financial position, he would make an advance on it. He replied that because of his affection for John and Kate, and as a kindness to an old friend, he would advance five hundred dollars. I thought I could get more elsewhere, so I approached Simon and Schuster, who were unknown to me personally. They at once agreed to pay me two thousand dollars on the spot, and another thousand six months later. At this time John was at Harvard and Kate was at Radcliffe. I had been afraid that lack of funds might compel me to take them away, but thanks to Simon and Schuster, this proved unnecessary. I was also helped at this time by loans from private friends which, fortunately, I was able to repay before long. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 6: America, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB26-070.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB26-070.HTM</a></p>	<p>しかしこの頃には、ニューヨーク市立大学関係の騒動もおさまり始め、時折、ニューヨークやその他の地域で講演をする機会が生まれてきた。就讀するべきは、アムステルダム女子大学のワイス教授から同大学で連続講義を頼みたいとの誘いであった。これは、少なからず勇気が必要とした。ある時は非常に貧しかったので、ニューヨークまでの片道切符を買い、隣りの乗車賃は、もらった報酬で支払わなければならない。私の『西洋哲学史』がほぼ完成した。そこで、アメリカにおける私の著書の出版者であるW・W・ノートンに手紙を書いて私の困難な家計状況を考慮して、『西洋哲学史』(の印紙=原稿料)の前払いをしてくれるかどうかを、おねがひした。彼は、喜んで500ドルを前払いしてくれた。また旧友に対する好意として、500ドルを前払いしようという返事が来た。私は、他ならももっと支払ってもらえるだろうと考え、個人的には未知の簡陋であったが、サイモン・アンド・シュスター(訳注: Simon and Schuster 社の社名=兄弟)と働きかけた。彼らはただちに即金で2,000ドル、半年後にさらに1,000ドルを支払うことに同意してくれた。当時、ジョンはハーバード大学に、ケイトはラドクリフ女子大学に在学中だった。資金不足から、やむなく二人を遠ざかせなければならぬかもしれないと心配していたが、サイモン・アンド・シュスターの助けが、その必要はなくなった。私は当時、個人的に親しい友人からも借金をして助けてもらっていたが、幸いに、ほどなく返済することができた。</p>	
C1-39	<p>My life in England, as before, was a mixture of public and private events, but the private part became increasingly important. I have found that it is not possible to relate in the same manner private and public events or happenings long since finished and those that are still continuing and in the midst of which I live. Some readers may be surprised by the changes of manner which this entails. I can only hope that the reader will realise the inevitability of diversification and appreciate the unavoidable reticences necessitated by the law of libel. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB30-PREF.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB30-PREF.HTM</a></p>	<p>帰国後の生活は、以前と同様、公的および私的のさまざまな事件、但し私生活の部分がますます重要となった。そうして私は、ずっと以前に済んでしまった私的あるいは公的な出来事と、今なお続いていてそのまっただ中に自分が生きている出来事とを、同様に語ることはできないということに気づいている。その結果、私がとり扱う方(語り方)は、読者のなかには驚かれる方もいるかもしれない。私としては、読者が取り扱う方(語り方)が多様になることは避けられないことを理解していただき、『文書による各書業換』の法律のために、やむをえず口が重くなるのも仕方ないと認めることを望んでいる。私自身は、自転車くらの速度で感風堂々と航海する巨大な護送船に乗り、コルベット艦(風雲掃海や対潜水艦用として開発された小型の高速護衛艦)と飛行機によって護衛されて、英国に送られた。私は、『西洋哲学史』を原稿として、不運にも検閲官たちは彼等を利用する情報がこの原稿に含まれていないか一語一語点検しなければならなかった。けれども、検閲官たちはついに、哲学の知識は敵国のドイツ人にまったく役立つものでないことがわかって満足し、きわめて礼儀正しく、私の著書を返して興味深かったと明言した。正直に言えば、その時私は信じ難いと思った。一切が秘密である。私は、いつ航海するか、どこかの港から出帆するか、友人たちに知らせることを許されなかった。私は、ついに独力で処女航海をするリハーデー船(注: 第二次大戦中に建造された規格型輸送船)に乗って、北緯51度を航する。船長は愉快な人で、四隻あるリハーデー船で処女航海で真っ一つに折れたのは一隻だけだなどよく言って、私を元気づけた。言うまでもなく、船はアメリカ船籍のもので、船長は英国人だった。(訳注: 「言うまでもなく」、アメリカ人にはそう言ったユードアは意味がない) 船員から私に共鳴していた船員が一人いた。彼は機関長で、私の『相対性理論入門』を読んでいたがその著者のことは何一つ知らなかった。ある日、私が彼とデッキの上を歩いている時、彼はこの小書の価値を賞賛し始めた。それで、その本の著者は自分だと言ったところ、彼の喜びよりは際限のないものであった。</p>	
C1-40	<p>... As for me, I was sent in a huge convoy which proceeded majestically at the speed of a bicycle, escorted by corvettes and aeroplanes. I was taking with me the manuscript of my History of Western Philosophy, and the unfortunate censors had to read every word of it lest it should contain information useful to the enemy. There were, however, at last satisfied that a knowledge of philosophy could be of no use to the Germans, and very politely assured me that they had enjoyed reading my book, which I confess I found hard to believe. Everything was surrounded with secrecy. I was not allowed to tell my friends when I was sailing or from what port. I found myself at last on a Liberty ship, making its maiden voyage. The Captain, who was a jolly fellow, used to cheer me up by saying that not more than one in four of the Liberty ships broke in two on its maiden voyage. Needless to say, the ship was American and the Captain, British. There was one officer who whole-heartedly approved of me. He was the Chief Engineer, and he had read The ABC of Relativity without knowing anything about its author. One day, as I was walking the deck with him, he began on the merits of this little book and, when I said that I was the author, his joy knew no limits. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-010.HTM</a></p>	<p>(1944年)私自身は、自転車くらの速度で感風堂々と航海する巨大な護送船に乗り、コルベット艦(風雲掃海や対潜水艦用として開発された小型の高速護衛艦)と飛行機によって護衛されて、英国に送られた。私は、『西洋哲学史』を原稿として、不運にも検閲官たちは彼等を利用する情報がこの原稿に含まれていないか一語一語点検しなければならなかった。けれども、検閲官たちはついに、哲学の知識は敵国のドイツ人にまったく役立つものでないことがわかって満足し、きわめて礼儀正しく、私の著書を返して興味深かったと明言した。正直に言えば、その時私は信じ難いと思った。一切が秘密である。私は、いつ航海するか、どこかの港から出帆するか、友人たちに知らせることを許されなかった。私は、ついに独力で処女航海をするリハーデー船(注: 第二次大戦中に建造された規格型輸送船)に乗って、北緯51度を航する。船長は愉快な人で、四隻あるリハーデー船で処女航海で真っ一つに折れたのは一隻だけだなどよく言って、私を元気づけた。言うまでもなく、船はアメリカ船籍のもので、船長は英国人だった。(訳注: 「言うまでもなく」、アメリカ人にはそう言ったユードアは意味がない) 船員から私に共鳴していた船員が一人いた。彼は機関長で、私の『相対性理論入門』を読んでいたがその著者のことは何一つ知らなかった。ある日、私が彼とデッキの上を歩いている時、彼はこの小書の価値を賞賛し始めた。それで、その本の著者は自分だと言ったところ、彼の喜びよりは際限のないものであった。</p>	
C1-41	<p>In the same year that I went to Germany, the Government sent me to Norway in the hope of inducing Norwegians to join an alliance against Russia. The place they sent me to was Trondheim. The weather was stormy and cold. We had to go by sea-plane from Oslo to Trondheim. When our plane touched down on the water it became obvious that something was amiss, but none of us in the plane knew what it was. We sat in the plane while it slowly sank. Small boats assembled round it and presently we were told to jump into the sea and swim to a boat - which all the people in my part of the plane did. We later learned that all the nineteen passengers in the non-smoking compartment had been killed. When the plane had bit the water a hole had been made in the plane and the water had rushed in. I had told a friend at Oslo who was finding me a place that he must find me a place where I could smoke, remarking jocularly, 'If I cannot smoke, I shall die'. Unexpectedly, this turned out to be true. All those in the smoking compartment got out by the emergency exit window beside which I was sitting. We all swam to the boats which dared not approach too near for fear of being sucked under as the plane sank. We were rowed to shore to a place some miles from Trondheim and thence I was taken in a car to my hotel. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-090.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-090.HTM</a></p>	<p>私がドイツに行ったその同じ年に(注: 1948年10月)英国政府は、ノールウェーを説得し反ソ同盟に参加させることを期待して、私をノールウェーに派遣した。私が派遣された場所は、トロムソ(Trondheim)という都市であった。天候は、嵐でしかも寒かった。私たちは、オスロからトロムソ、ノールウェーまで、水上飛行艇(海上飛行艇)でいかなければならなかった。飛行艇が着水した時、何が起ったことが起ったことが明らかとなった。しかし、機内の私たちに、何が起ったのか誰もわからなかつた。飛行艇がゆっくりと沈んでいく間、私たちは機内にしゃべりながら、小さなボート群が、飛行艇のまわりを集まって来た。そしてすぐに、海に飛び込んでボートに向かって泳ぐように言われた。私と同じ場所にいた全員が、言われた通りにした。後で知ったことであるが、機内になつて居る客室にいた19人の乗客は全員死亡した。飛行艇が海面につかつた時、穴があき、そこから海水が急に流れ込んで来たのである。それより先き、オスロで、私のために席をとってくれようとしていた友人に、席をとってくれるなら喫煙できることにしてくれなければ困る、と伝え、おどおどと伝えた。私が「喫煙を吸えない」と言った。それ以後、この機内での生活は、思いがけなく事実となった。喫煙室にいた船客の全員が、私の席のそばにある非常口の窓から外に出た。私たちは全員ボートに泳ぎ着いたが、それらボート群は、飛行艇が沈んだ時に壊れ、しまりの空を飛んで飛行艇に近づいてくるとなつた。私たちは、トロムソの港で数マイル離れたところの岸までボートで運ばれ、そこから私は自動車ホテルまで送られた。</p>	
C1-42	<p>The less fanatical attitude of English people diminished my own fanaticism, and I rejoiced in the feeling of home. This feeling was enhanced at the end of the forties when I was invited by the BBC to give the first course of Reith lectures, instead of being treated as a malfactor and allowed only limited access to the young. I admired more than ever the atmosphere of free discussion, and this influenced my choice of subject for the lectures, which was 'Authority and the Individual'. They were published in 1949 under that title and were concerned very largely with the lessening of individual freedom which tends to accompany increase of industrialism. But, although this danger was acknowledged, very little was done either then or since to diminish the evils that it was bringing. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-100.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-100.HTM</a></p>	<p>英国人のあまり熱狂的(狂信的)でない態度は、私自身の熱狂性(熱狂性)を減らし、そして母国にいるんだという感情にひたり、喜んだ。この感情は、悪人として扱われ、青年たちに対し制限された接触しか許されないという状況から変わって、1940年代の終わりにBBC(英国放送協会)に招かれて最初の(第1回)リース記念講義を行った時にさらに高まった。私は、かつて(以前)自由な議論の雰囲気を楽しみ、それが講義の主題を選択するに大きな影響を与え、私は主題を「権威と個人」とした。それらの講義は、1949年、『権威と個人』という書名で出版された。そして、産業主義の増大に伴って起る個人の自由の減少という問題を非常に痛切に感じ取ったのであった。しかしながら、こうした危険が認められていないながらも、当時もそれ以後も、産業主義がもたらす悪を減じようとする努力はほとんどなされなかった。</p>	

C1-43	<p>There I received the news that I was to be given a Nobel Prize. But the chief memory of this visit to America is of the series of three lectures that I gave on the Matchette Foundation at Columbia University. I was put up in luxury at the Plaza Hotel and shepherded about by Miss Julie Medlock, who had been appointed by Columbia to bear-lead me. Her views on international affairs were liberal and sympathetic and we have continued to discuss them, both by letter and when she visits us as she sometimes does. My lectures, a few months later, appeared with other lectures that I had given originally at Ruskin College, Oxford, and the Lloyd Roberts Lecture that I had given in 1949 at the Royal Society of Medicine, London, as the basis of my book called <i>The Impact of Science on Society</i>. The title is the same as that of the three lectures that Columbia University published separately, which is unfortunate as it causes bewilderment for bibliographers and is sometimes a disappointment to those who come upon only the Columbia publication.</p> <p>I was astonished that, in New York, where I had been, so short a time before, spoken of with vicious obloquy, my lectures seemed to be popular and to draw crowds.</p> <p>[From: <i>The Autobiography of Bertrand Russell</i>, v.3 chap. 1: Return to England, 1969]</p> <p><a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-200.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-200.HTM</a></p>	<p>そこで（プリンストン）では、ノーベル賞授与の知らせを受けた。しかし、その時の米国訪問で一番記憶に残っているのは、コロンビア大学で3回の連続講演のために行なった3回の連続講演（講義）であった。私は豪華なプラザ・ホテルに宿泊させられ、ミス・ジュリー・メドロックが私に付き添った。彼女はコロンビア大学から私の世話をやるよう任命されていた。国際問題に関する彼女の見解はきわめてリベラルで（自由主義的で）、思いやりがあった。それで私たちは、手紙を通じて、また彼女は時々私たち（夫婦）を訪問したのでその時に、国際問題について話し続けた。</p> <p>その後、3カ月して、この時の講演（講義）は、オックスフォード大学のオズキン・コックスが私初めて行なった講演（講義）と、さらに1949年にロンドンの英国医学協会で行なったロイド・ロバーツ記念講演とともに、『社会に対する科学の衝撃』（<i>The Impact of Science on Society</i>）という私の著書の主要内容となって、出版された。この著書は、コロンビア大学での3回の連続講演（講義）を収録しコロンビア大学から別途出版された本の書名と同じである。そのため、不幸にも、書誌作成者を困惑させることになり、また時々、コロンビア大学版だけが見えない人々を失望させている。</p> <p>私は、ほごークで私の講演（講義）が人気を博し、多くの人々をひきつけたようであり、驚かされた（注：ラッセルが醜い目であった「パートランド・ラッセル事件」はたった10年前に起こったこと）。</p>		
C1-44	<p>1950, beginning with the OM and ending with the Nobel Prize, seems to have marked the apogee of my respectability. It is true that I began to feel slightly uneasy, fearing that this might mean the onset of blind orthodoxy. I have always held that no one can be respectable without being wicked, but so blunted was my moral sense that I could not see in what way I had sinned. Honours and increased income which began with the sales of my <i>History of Western Philosophy</i> gave me a feeling of freedom and assurance that let me expend all my energies upon what I wanted to do. I got through an immense amount of work and felt, in consequence, optimistic and full of zest. I suspected that I had too much emphasised, hitherto, the darker possibilities threatening mankind and that it was time to write a book in which the happier issues of current disputes were brought into relief. I called this book <i>New Hopes for a Changing World</i> and deliberately, wherever there were two possibilities, I emphasised that it might be the happier one which would be realised.</p> <p>[From: <i>The Autobiography of Bertrand Russell</i>, v.3 chap. 1: Return to England, 1969]</p> <p><a href="http://russell-j.com/beginner/AB31-240.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB31-240.HTM</a></p>	<p>種々の名譽と、私の著作『西洋哲学史』の販売とともに始まった収入の増加が、自分の全精力を自分のやりたいことに費せる自由や保証があるという感覚を与えてくれた。私は麗大な量の仕事をなしとげた。その結果、楽天的な主義的になるとともに人生に対する熱意を感じた。私はそれまで、人類に脅威を与えている、より暗い可能性を強調しすぎてきたのではないが、また、当時議論が行われていた諸問題のなかで（解決策を見つけないこと）を、きょうな著書より幸運な問題について安心感をもたらすような著書を書く時期ではないかと考えた。私はその著書に『変わりゆく世界への新しい希望』（<i>New Hopes for a Changing World</i> / 理想社刊の邦訳書名：『原子時代に生みて変わりゆく世界への新しい希望』）という書名をつけ、そうして、両方の可能性がある場合には、意識的に、より幸運な方を実現することが可能であると強調した。</p> <p>私が病院にいったことは、既に前にふれた伝説の一つになった。ある日の朝、妻と私は一緒にリッチモンド・パークに長い散歩に出かけた（Richmond Parkの絵葉書）。昼食後、彼女は私の部屋の上の階にある自分の居室に入った。そこへ私は突然現れ、具合（気分）が悪いと彼女に伝えた。無理もないことであるが、彼女はびっくりし、おどおどした。その日は陽光にめぐまれた日曜日で、女王の戴冠式（注：戴冠式は1953年6月2日 / 因みに即位は1952年2月6日）の前だった。妻は、隣人や、リッチモンドやロンドンのがかりつけの医師をつかまえようとしたが、誰一人としてつかまえることができなかった。ついに彼女は、999番（注：英国では警察と救急の番号）に電話をした。そうして、リッチモンド警察がたいいん親切にも、またいろいろと尽力してくれて、救助に来てくれた。警察は、医師を送ってくれた。その医師は私は知らない人物であったが、警察がその見つけることのできた唯一の医師だった。警察がやってくれた頃には、私は真っ青になっていた。妻は、その時までに集まっていた5人の医師の中の一人の有名な専門医に、私はあと2時間の命だろう（←2時間は生きられるかもしれない）と告げられた。私は、救急車に詰めこまれ、病院に急送され、彼らは病院で私に酸素吸入し、私は助かった。</p>		
C1-45	<p>That visit to the hospital became one of the myths to which I have already referred. My wife and I had gone on a long walk in Richmond Park one morning and, after lunch, she had gone up to her sitting-room which was above mine. Suddenly I appeared, announcing that I felt ill. Not unnaturally, she was frightened. It was the fine sunny Sunday before the Queen's coronation. Though my wife tried to get hold of a neighbour and of our own doctors in Richmond and London, she could get hold of no one. Finally, she rang 999 and the Richmond police, with great kindness and much effort, came to the rescue. They sent a doctor who was unknown to me, the only one whom they could find. By the time the police had managed to get hold of our own doctors, I had turned blue. My wife was told by a well-known specialist, one of the five doctors who had by then congregated, that I might live for two hours. I was packed into an ambulance and whisked to hospital where they dosed me with oxygen and I survived.</p> <p>[From: <i>The Autobiography of Bertrand Russell</i>, v.3 chap. 2: At home and abroad, 1969]</p> <p><a href="http://russell-j.com/beginner/AB32-110.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB32-110.HTM</a></p>	<p>私が病院にいったことは、既に前にふれた伝説の一つになった。ある日の朝、妻と私は一緒にリッチモンド・パークに長い散歩に出かけた（Richmond Parkの絵葉書）。昼食後、彼女は私の部屋の上の階にある自分の居室に入った。そこへ私は突然現れ、具合（気分）が悪いと彼女に伝えた。無理もないことであるが、彼女はびっくりし、おどおどした。その日は陽光にめぐまれた日曜日で、女王の戴冠式（注：戴冠式は1953年6月2日 / 因みに即位は1952年2月6日）の前だった。妻は、隣人や、リッチモンドやロンドンのがかりつけの医師をつかまえようとしたが、誰一人としてつかまえることができなかった。ついに彼女は、999番（注：英国では警察と救急の番号）に電話をした。そうして、リッチモンド警察がたいいん親切にも、またいろいろと尽力してくれて、救助に来てくれた。警察は、医師を送ってくれた。その医師は私は知らない人物であったが、警察がその見つけることのできた唯一の医師だった。警察がやってくれた頃には、私は真っ青になっていた。妻は、その時までに集まっていた5人の医師の中の一人の有名な専門医に、私はあと2時間の命だろう（←2時間は生きられるかもしれない）と告げられた。私は、救急車に詰めこまれ、病院に急送され、彼らは病院で私に酸素吸入し、私は助かった。</p>		

C1-46	<p>The pleasant life at Richmond had other dark moments. At Christmas, 1953, I was waiting to go into hospital again for a serious operation and my wife and household were all down with flu. My son and his wife decided that, as she said, they were 'tired of children'. After Christmas dinner with the children and me, they left, taking the remainder of the food, but leaving the children, and did not return. We were fond of the children, but were appalled by this fresh responsibility which posed so many harassing questions in the midst of our happy and already very full life. For some time we hoped that their parents would return to take up their role, but when my son became ill we had to abandon that hope and make long-term arrangements for the children's education and holidays. Moreover, the financial burden was heavy and rather disturbing; I had given £10,000 of my Nobel Prize cheque for a little more than £11,000 to my third wife, and I was now paying alimony to her and to my second wife as well as paying for the education and holidays of my younger son. Added to this, there were heavy expenses in connection with my elder son's illness and the income taxes which for many years he had neglected to pay now fell to me to pay. The prospect of supporting and educating his three children, however pleasant it might be, presented problems.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 2: At home and abroad, 1969 http://russell-j.com/beginner/AB32-120.HTM</p>	<p>リッチモンドでの暮らしは楽しいものであったが、そうでもない憂鬱なひと時があった。1953年(未)のクリスマスの際、私を除く幸福を享受するにやみくもに努力して来たとして修羅していた。しかも妻や家族全員がインフルエンザで倒れていた。息子(注:長男)と息子の妻は、彼女(息子の妻)がその口に出した(子供のことと疲れたと言った)時に、自分たちは子供の世話で疲れたと結論を下した。息子夫婦は、子供たちとクリスマスを共にするつもりで、その後、食べ物の残りを持ち、子供たちを置いてまま家を出て行き、戻って来なかった。私たちは子供たち(ラッセルの孫)が好きであったが、私たちのそれまでの幸福が、ついに生活のまっただ中、きわめて多くの悩ましい問題を引き起こすほど重なり、そっくりとされた。しばらくの間、私たちは、子供たちの両親が親としての役割を果たすために戻ってくれば良いかと期待していた。けれども、私の息子が病氣(注:精神病/確が統合失調症)になってしまったと、私たちはその望みを捨て、子供たちの教育や休養期間のために長期間にわたって手直しや修理をしなければならなかった。その上、金銭上の負担が重く、かなり心の不安を掻き立てた。私は、三番目の妻(注:Patricial Spense)に(離婚慰謝料として)一萬一千ポンドより少し上回る額の金を支払わなければならなかったので、私がもらったノーベル賞金の小切手一万ポンドを(すでに彼女に渡していたが)さらに今や彼女と二番目の妻(注:Dora Black)に(離婚後の)扶助料を払うと同時に次男(注:ピーター)の間に出来た次男コラッド)の教育や休養のための費用をも支払っていた。加えて、長男の病氣の開始で多大の出費があり、早くもわたつて長男がなくなった。だから、そこにもつてきて彼の三人の子供(孫)を扶養し、かつ教育しなければならなくなるという見通しは、どんなにそれが楽しいものではあろうとも、いろいろ問題をまじさせた。</p>	
C1-47	<p>A short time later, on our way home to Richmond from Scotland, we stopped in North Wales where our friends Rupert and Elizabeth Crawshaw-Williams had found a house, Plas Penrhyn, that they thought would make a pleasant holiday house for us and the children. It was small and unpretentious, but had a delightful garden and little orchard and a number of fine beech trees. Above all, it had a most lovely view, south to the sea, west to Portmadoc and the Caernarvon hills, and north up the valley of the Glaslyn to Snowdon. I was captivated by it, and particularly pleased that across the valley could be seen the house where Shelley had lived. The owner of Plas Penrhyn agreed to let it to us largely, I think, because he, too, is a lover of Shelley and was much taken by my desire to write an essay on 'Shelley the Tough, (as opposed to the 'inefficient angel')'. Later, I met a man at Tan-y-Rallt, Shelley's house, who said he had been a cannibal - the first and only cannibal I have met. It seemed appropriate to meet him at the house of Shelley the Tough. Plas Penrhyn seemed to us as if it would be an ideal place, for the children's holidays, especially as there were friends of their parents living nearby whom they already knew and who had children of their own ages. It would be a happy alternative, we thought, to cinemas in Richmond and 'camps'. We rented it as soon as possible.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 2: At home and abroad, 1969 http://russell-j.com/beginner/AB32-140.HTM</p>	<p>その後間もなく私たちは、スコットランド(旅行)からリッチモンドに戻る途中、北ウェールズに立ち寄った。私たちの友人のルバート・クロウシェイ・ウィリアムズとその夫人のエルザベスは、プラス・ペンリン(Plas Penrhyn)と名付けられた一軒の家を北ウェールズに買付けており、その家は私たち夫婦と息子の子供たち(即ち孫)が楽しい休暇を過ごすのに良いだろうと考えていた。その家は小さく、つましいものであったが、心地よい庭と小さな果樹園と多数の立派なブナの木があった(注:Routledgeの原の unpretentious は厳密に「目高げでは無い」の木になってしまっている。リわけその家からは最高に美しい景観を眺めることができ、南に海、西はポートマドックとカナーヴォン丘陵、北はグラスリンからスノードン山への渓谷が見渡せた。私はその美しい眺めに魅了された。特にグラスリン運河の右側(反対側)にあってシェリーが住んでいた家眺めるのが気に入った。(左上及び右下写真:1972年に牧野教授撮影)。プラス・ペンリンの所有者は気前良く私たちにその家を買ってくれることに同意したが、そのわけは、彼もまたシェリーの愛好者であり私が「無力な不従(シェリー)といわれるのとは反対に、タフなシェリー」という随筆を書きたいと強く思っているということに、彼は非常に心を動かされたため、と思われる。後に私はタニー・ラット(Tan-y-Rallt)と呼ばれるそのシェリーの家である男に会った。彼は、単に人食いだったと言った。私が人食いに会ったのは後にも先にもそれがただ一度だけであった。タフなシェリーの家で彼(人食い)に会うというのは、まことにふさわしいことだと思われた。プラス・ペンリンは、長男の子供たち(孫たち)の休養のためには「理想の場所」のように思われた。特に子供たちの両親の友人たちが近くに住んでおり、子供たちは彼らを知っており、また、彼らには同じ年頃の子供たちがいたからであった。それは、リッチモンドにおける(休養時の)映画やキャンプの適切な代替物となるだろうと私たちは考えた。そこで、できるだけざざり早くその家を借りた。</p>	
C1-48	<p>I was unable to go to this first conference because of my age and my health. A large part of my time in 1957 was devoted to various medical tests to determine what was the trouble with my throat. In February, I had to go into hospital for a short time to find out whether or not I had cancer of the throat. The evening that I went in I had a debate over the BBC with Abbot Butler of Downside which I much enjoyed, and I think he did also. The incident went off as pleasantly as such a trying performance could do and it was discovered conclusively that I did not have cancer. But what did I have? And so the tests continued and I continued to have to live on baby's food and other such pabulum.</p> <p>Meik's 画像 Since that time I have made several journeys abroad, though none so long as that to Pugwash. I fight shy of longer journeys partly because I fear if I go to one country people in other countries who have pressed me to go there will be affronted. The only way around this, for one who is not an official personage, is to renounce distant travels.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 (1969) http://russell-j.com/beginner/AB32-330.HTM</p>	<p>私は、自分の年齢と健康状態のせいでも、最初の会議に出かけることができなかった。1957年(ラッセル85歳の時)の私の時間の大部分は、自分の咽喉の障害の原因が何かをはっきりさせるための各種の医学的検査に費やされた。2月に咽喉病ができていたかどうかははっきりさせたため、短期間ではあるが入院しなくてはならなかった。私が入院した日の夕べ、私はBBC放送でダウンサイド修道院のバトラー院長(Abbot Butler of Downside)と討論(対論)を行い(テレビ討論終了後、そのまま病院に上がったのか?)大いに楽しんだ。彼も同様に楽しんだと思う。その出来事(注:彼の障害は、そういつつらいつつこと成就、がそうであるように、終わったときには楽しくなった。そして結論として悪ではないということがわかった。しかし、それならいかなる病気がかかっていたのか?そこで検査が続けられ私は乳幼児食、その他の同じような「味気ない」物を食べて暮らさなければならなかった。</p> <p>それ以来(退院後は)、私は数回海外旅行をしたがいづれも(カナダの1回)は遠くはなないうつたことではない。長旅を選んだ理由は、半分は、もし私がある国へ行けば、私を自由にさせようと懇願してきた他の国々の人々を侮辱することになると恐れるからである。公職についていない人間にとって、それを回避する唯一の方法は、遠出の旅行を「一切」やめることである。(注:日高一輝氏によれば、日本でもラッセルを打ちしるべという計画があった。即ち、「当時、最も身近な相談相手として相談のつてもらっていた朝日新聞論説主幹の笠信太郎先生を、茅ヶ崎の自邸に訪ねた。先生は、即座にこのプランに賛意を示され、そしてラッセル夫妻を日本に招待する費用、一切朝日新聞が負担することと協定してくださった。出典:日高一輝著『世界はひとつ、道ひとつしに』)。日高氏がラッセルに直接会い、訪日を打診したところ、年齢を理由に断ったそうであるが、一番大きな理由はここに書かれたことであったかのしれない。)</p>	

C1-49	<p>Their loss to me was incalculable. I not only was very fond of them, but had come to depend upon their knowledge of everything to do with me and their sympathetic understanding, and I greatly enjoyed their companionship. It must be said that there were limitations to Alan's understanding of the matters discussed in my books. This showed particularly in regard to political matters. I regarded him as rather conservative, and he regarded me as more radical than I was or am. When I argued that everybody ought to have a vote, he thought that I was maintaining that all men are equal in ability. I only disabused him of this belief by pointing out that I had supported eugenics, which is concerned with differences in natural ability. Such disagreements, however, never marred our friendship, and never intruded in purely philosophical conversations.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 (1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-010.HTM</a></p>	<p>彼らを失ったことは、私にとって計り知れないものであった。私は彼らが何でも好きだったばかりでなく、私と関係する全てに関する知識と彼等の如く私と同等の感情的理解(力)に頼るようになっており、また、彼らとの親しい交友を大いに楽しんだ。</p> <p>(だが)私に関する本の中で論じられている諸問題についての私の理解には限界があったと言わなければならない。特に、政治問題に関する議論においては、彼の理解力に限界が見られた。私は彼をかなり保守的であるとみなしており、彼は私を当時の私が実際そうだったよりも、また現在そうであるより、ずっと急進的であるとみなしていた。私がすべての人が投票するに値するに値する時、彼は私がすべての人間が能力において平等だと主張しているのだというふう考えた。私は、生来の能力の差異に関わりのある優生学(参考：日本における優生保護法と母体保護法を支持してきたという事実を指摘して、彼のその信念は誤っていることを指摘することとした。けれども、そのような見解の不一致が私たちの友情を損なうことも、また純粋の哲学上の会話を邪魔するようになくもまっくくなくなかった。</p>		
C1-50	<p>We both believed that the dangers must be called to the attention of the public in as many ways as possible and that if we stuck to mere meetings and even marches, no matter how admirable they might be, we should end by preaching only to the already converted. The chairman of the CND did not approve of civil disobedience and so, though nominally the Direct Action Committee was to be tolerated, it could not be aided openly by the CND. The latter did not, for instance, take part in the Aldermaston March, as it was staged by the Direct Action Committee in 1958. The march proved a success, and the CND took it over lock, stock and barrel the following year and made, of course, a much larger and more important thing of it.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 (1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-040.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-040.HTM</a></p>	<p>私たちは二人とも、核兵器の危険について、可能な限り多くの方法で一般大衆の注意を喚起するようにならなければならないということ、また、たとえどれほど称賛に値することであろうとも、我々が単なる集会や単調な平和行進だけにとどまるならば、既に核兵器反対に立っている人々に対して説教するだけに終わってしまったら、ということを確認した。CNDの議長(委員長)は、「市民的不服従運動」(Civil Disobedience:政府の核政策に対する一般市民の不服従運動)に賛同していなかった。それで、各自上は直接行動委員会はその活動を黙認されていたけれども、CNDから公然と支援を受けることができなかった。例えば、オランダでマスコミにCNDに参加しなかった、というのは、その平和行進は直接行動委員会によって1958年に企てられたものだからである。平和行進は成功した。そこでCNDは、当然のこと、その翌年、その一切切をひき継ぎ、その行進をさらにより大きなものにして重要なものとした。私は、1958年の夏に執筆し1959年初めに出版した「常識と核戦争」(Common Sense and Nuclear Warfare, 1959)の序文の中で、明確に自分の見解を述べた。私はカリフォルニアのオランダ印刷局でBijoyanand Chaitalkarからの寄附により1952年に印刷されたので、科学の普及に顕著な業績のあった人に与えられるユネスコの賞(ラッセルが受賞したのは1957年度)を受賞することによって、1958年の間、大きな励ましを受けていた。インドまでは(体力その他の関係で)旅行ができなかった。カリフォルニアは「バリのユネスコ賞」をいただいた。(これは確かな話であるが、その受賞の行事に際し、私に付き添うよう委任されていたフランスの物理学者は、私の見解を詳しく紹介した後、自分の妻に向かって彼女を懇めるようにこう言った。「いや、まったく気に入ることはないよ、来年度には、フランス(自国)の原爆を爆発させることができるだろうからね」)</p>		
C1-51	<p>I had put my point of view clearly in the introduction to my book Common Sense and Nuclear Warfare which I wrote during the summer of 1958, and published early in 1959. I had been encouraged during 1958 by receiving the Kalinga Prize, at Unesco in Paris as I could not travel to India. (To be sure the French physicist who was deputed to bear-lead me on that occasion remarked comfortingly to his wife after I had been expounding my views: "Never mind, my dear, by next year France will be able to explode her own bomb.") And the continued and growing success of the Pugwash movement, as well as the interest shown in the open correspondence with Khrushchev and Eisenhower (Dulles) were encouraging. I continued my search, as I have done since, to find fresh approaches through which to try to sway public opinion, including governmental opinion.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 (1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-060.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-060.HTM</a></p>	<p>私は、1958年の夏に執筆し1959年初めに出版した「常識と核戦争」(Common Sense and Nuclear Warfare, 1959)の序文の中で、明確に自分の見解を述べた。私はカリフォルニアのオランダ印刷局でBijoyanand Chaitalkarからの寄附により1952年に印刷されたので、科学の普及に顕著な業績のあった人に与えられるユネスコの賞(ラッセルが受賞したのは1957年度)を受賞することによって、1958年の間、大きな励ましを受けていた。インドまでは(体力その他の関係で)旅行ができなかった。カリフォルニアは「バリのユネスコ賞」をいただいた。(これは確かな話であるが、その受賞の行事に際し、私に付き添うよう委任されていたフランスの物理学者は、私の見解を詳しく紹介した後、自分の妻に向かって彼女を懇めるようにこう言った。「いや、まったく気に入ることはないよ、来年度には、フランス(自国)の原爆を爆発させることができるだろうからね」)</p>		
C1-52	<p>I had one moment of high hope when the Minister of Defence, Duncan Sandys, wrote commending the book and saying that he would like to talk with me about it. He was a Conservative, and a policy-maker in a national Government, and had collaborated in a pamphlet on the subject himself. But when I went to see him, he said, "It is a good book, but what is needed is not only nuclear disarmament but the banning of war itself." In vain I pointed out the passage in my book in which I had said that the only way to ensure the world against nuclear war was to end war. He continued to believe that I could not have said anything so intelligent. He cast my other arguments aside. I came away discouraged. I realised that most of the already informed people who read my book would read it with a bias so strong that they would take in only what they wished to take in. For the following months, therefore, I returned to the piecemeal business of speaking at meetings, CND and other, and broadcasting, and to the pleasures of my own life.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 (1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-070.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-070.HTM</a></p>	<p>それから、フルシチョフとアイゼンハワー(実際は代行者ダラス)との間の公開書簡において示された(一般の関心と同様に、バグウォッシュ運動の歴史的な注目を集めた)に大きくなっていく成功は、私を大いに勇気づけてくれた。私は、それ以後今日までやってきたように、政府の見解とともに、一般民衆の見解を左右するための何が新鮮な方法を見出しようかと探求を続けた。私は、国防大臣のダンカン・サンダイス(Edwin Duncan Sandys, Baron Duncan-Sandys, 1908-1987)が私のその本を推薦する文を書き、その本について私と語り合いたいと言った時である。彼は保守党員であり、英国政府の政策立案者でもあった。しかもこの問題に際しては、サンダイスと私と協力していた。私と会った時、彼はこう言った。「これはたいへん良い本です。しかし、必要なのは単に核兵器撤廃ばかりでなく、戦争そのもの禁止です」。私は、その本の中で、核戦争をひき起こさない、世界に保証を与える唯一の道は戦争をなくすことであると述べている部分を指摘したが、無駄だった。彼は私がそれほど聡明なことを言っていないと信じ続けた。彼は私の論じた他の議論を退けた。私は失望し、彼のものを去った。私は、私の本を読み既に知識を持っている人たちは大部分、自分のとり入れたいと思うところだけをとり入れ、身を守る強い先入感をもって読むだろうということを知った。そこで私は、その後数ヶ月間、CNDや他の諸所の集いで演説をしたり、放送をしたりといった、その時々の仕事や自分自身の人生を楽しむ生活に戻った。</p>		
C1-53	<p>Towards the end of July, 1960, I received my first visit from a young American called Ralph Schoenman. I had heard of some of his activities in relation to CND so I was rather curious to see him. I found him bursting with energy and teeming with ideas, and intelligent, if inexperienced and a little doctrinaire, about politics. Also, I liked in him, what I found lamentably lacking in many workers in the causes which I espoused, a sense of irony and the capability of seeing the humour in what was essentially very serious business. I saw that he was quickly sympathetic, and that he was impetuous. What I came only gradually to appreciate, what could only emerge with the passage of time, was his difficulty in putting up with opposition, and his astonishingly complete, untouchable self-confidence. I believed that intelligence working on experience would enforce the needed discipline. I did not at first fully understand him but I happened to be approved of him and, in turn, to approve of what he was then working for. And for his continued generosity towards me personally I was, and can still only be, deeply grateful. His mind moved very quickly and firmly and his energy appeared to be inexhaustible. It was a temptation to turn to him to get things done.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 (1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-150.HTM</a></p>	<p>1960年7月の終わり近くに、ラルフ・シェンマン(Ralph Schoenman, 1935~)という名前の若いアメリカ人が初めて私を訪ねて来た。彼がCNDに関連した活動をしていることをある程度聞いていたので、彼と会うことになり興味を抱いていた。彼は、政治に関して経験が少なく、少し理論に走るまらいがあっても、ユエセルに満ちあふれ、アイデアに富んでおり、知的な人間であるということがわかった。また、私が信ずる主義主張において、残念ながら多くの労働者に欠けているところのもの、即ち「風刺」や「諷刺」の能力に非常に重大な精神的な重さを置いた。そのアイデアを見出す能力を彼は備えており、私は彼のそういうところも好きであった。彼はすぐ共感し、また激しい人間であることがわかった。私が徐々にのみ理解するようになったことであり、時が経つにつれてのみ明らかになったことであるが、彼は反対されることに我慢することが困難であり、寛く、経験を活かすためには知性にも訓練というものが必要だと信じていた(?)。私は当初彼を十分に理解していなかったが、たまたまあることで彼に賛成し、続いて当時彼が活動していたことに賛成した。そして、彼が個人的に私に対して示すしてくれた寛大さに対し、私は感謝した。今日なお感謝するのみである。彼の精神は、非常に敏速かつ確固たる動きをみせた。彼の精力は無尽蔵であるが、ごくごく思われた。物事をなしうるために、彼に頼りたいという誘惑にかられた。</p>		



C1-54-		<p>The morning of February 18th was dark and drizzly and cold, and our spirits plummeted. If it rained, the numbers participating in the demonstration would undoubtedly dwindle in spite of the large nucleus already pledged to take part. But when we assembled in Trafalgar Square there was a great crowd. Precisely how great it was, it is impossible to say. The median number as reckoned by the press and the police and the Committee made it about 20,000. The speeches went well and quickly. Then began the march up Whitehall preceded by a large banner and managed with great skill by the Committee's marshals. It comprised a surging but calm and serious crowd of somewhat over 5,000 of those who had been in the Square. At one point we were held up by the police who tried to stop the march on the ground that it was obstructing traffic. The objection however, manifestly did not hold, and the march proceeded. Finally, over 5,000 people were sitting or lying on the pavements surrounding the Ministry. And there we sat for about two hours till darkness had fallen, a very solid and quiet, if not entirely mute, protest against governmental nuclear policies. A good many people joined us during this time, and more came to have a look at us, and, of course, the press and TV people flocked about asking their questions. As soon as word came that the marchers had all become seated, Michael Scott and Schoenman and I took a notice that we had prepared and stuck it on the Ministry door. We learned that the Government had asked the Fire Department to use their hoses upon us. Luckily, the Fire Department refused. When six o'clock arrived, we called an end to the sit-down. A wave of exultation swept through the crowd. As we marched back towards Whitehall in the dusk and lamplight, past the cheering supporters, I felt very happy - we had accomplished what we set out to do that afternoon, and our serious purpose had been made manifest. I was moved, too, by the cheers that greeted me and by the burst of 'for he's a jolly good fellow' as I passed.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969  chapg3:Trafalgar Square,(1969)  http://russell-j.com/beginner/AB33-190.HTM</p>	<p>2月18日の朝は、うす暗く、霧雨が降り、寒かった。そのためわれわれは気が重かった。もしも雨になればデモ参加者の数は、すでに参加を誓約していた多数の中核者たちがあつたにもかかわらず、減るだろうことは、疑い得なかつた。しかしわれわれがトラファルガー広場に集合した時には、大群衆となつてゐた。どれほど大きな群衆であつたか、正確に言うことは不可能である。新聞社や警察や百人委員会が計測した数の中間をとるとデモ参加者は約2万人を数えた。演説は立派にできばせと行われた。集会の後、大きな幟(のぼり)を先頭に、ホワイトホール(ロンドンの官庁街)に向かって行進が始まつたが、その行進は、百人委員会のデモ連行隊の人たちの熟練した手ぎわのみよき、きつよく進軍された。その行進は、トラファルガー広場にいた人々(約2万人)の中から、5千人をやや上まわる、波のように押し寄せたけれども、穏やかに真摯な群衆から成つてゐた。ある地点で、われわれは警察によつて、交差を妨げるという理由で停止させられた。けれども、選挙権という理由から明らかに効果はなかつた。行進は続行された。最終的には、5千人以上の人々が国防省のまわりの歩道に坐つたり、横になつたりした。そうしてわれわれは暗くなるまで約2時間、そこに坐つた。それは、まったく無音といふことではなかつたが、きわめてまじめで静か、政府の核政策に対する抗議であつた。この座り込みの間、かなり多数の人々が座り込みに加わり、さらに多くの人々がわれわれを一瞥しようとしてきた。また、当然のこと、新聞やテレビの関係者が周囲に群れ集まり、いろいろ質問を行つた。デモ行進者が全員座つたことがアナウンスされるやいなや、マイケル・スコットとシェーンマンと私は、事前に用意した貼り紙(ビラ)を取り出し、国防省玄関のドアに貼り付けた。政府当局が消防用のホースを我々に向けて放水するように消防所に依頼していたことを、我々は知つた。幸いにも、消防隊はそれを拒否した。午後6時になつたところで、座り込みの終了を宣言した。歡喜の波が大群衆にひろがつた。夕暮れの中、灯火に照らされながらホワイトホールへと引き返し、歡呼する支持者たちの間を漕り過ぎた時、私は非常に幸せであつた。我々はその日の午後始めたことを完全になし遂げ、我々が志した真剣な目的が何であるかを明らかにすることができたからであつた。また、私を迎えてくれた群衆の歡呼と、私が通過する際に彼らが一斉に叫んでくれた「彼はとてもいい奴だから・・・」という大合唱に、私は感動させられた。</p>			
C1-55		<p>Towards the end of March, I had arranged with Penguin Books, who in turn had arranged with my usual publisher, Sir Stanley Unwin, to write a further book for them on nuclear matters and disarmament, carrying on my Common Sense and Nuclear Warfare and expanding parts of it. The new book was to be called Has Man a Future? and I began work on it at once. But it was interrupted by a series of recordings that I made in London and by the two Birmingham meetings and then by a very bad bout of shingles which prevented my doing any work whatsoever for some time. But during my convalescence I wrote a good deal of the new book, and it was finished in time to meet its first deadline. It was published in the autumn.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969  chapg3:Trafalgar Square,(1969)  http://russell-j.com/beginner/AB33-190.HTM</p>	<p>3月末に回つて私は『常識と核戦争』(Common Sense and Nuclear Warfare, 1959)で扱つた主題を進め、またその一部を敷衍して、核問題と軍縮に関する新しい本を執筆することについて、ペンギン・ブックス(社)と打ち合わせをし、続いてペンギン・ブックス(社)は私のいつもの出版者であるスタンレイ・アンウィン(Allen and Unwin 社のオーナー)と打ち合わせ(取り決め)を行つた。この新しい本は『人類に未来はあるか?』(Has Man a Future?)という書名がつけられることになつた。私は直ちにその本の執筆を開始した。しかし執筆は私がロンドンで行つた一連の録音とバーミンガムでの2回の集会と、それからしばらくの間いかなる仕事をすることを妨げる非常に悪性の帯状疱疹の発症によつて中断させられた。しかし、私はその回復期に、この新しい本のかなり多くの分量を執筆した。そして原稿締切りぎりぎりに間に合うように書き終えた。その本は、秋に出版された。</p>			

C1-56	<p>A month later, as we returned from an afternoon's drive in North Wales, we found a pleasant, though much embarrassed, Police Sergeant astride his motorcycle at our front door. He delivered summonses to my wife and me to be at Bow Street on September 12th to be charged with inciting the public to civil disobedience. The summons was said to be delivered to all the leaders of the Committee but, in fact, it was delivered only to some of them. Very few who were summoned refused to appear. We went up to London to take the advice of our solicitors and, even more important, to confer with our colleagues. I had no wish to become a martyr to the cause, but I felt that I should make the most of any chance to publicise our views. We were not so innocent as to fail to see that our imprisonment would cause a certain stir. We hoped that it might create enough sympathy for some, at least, of our reasons for doing as we had done to break through to minds hitherto untouched by them. We had obtained from our doctors statements of our recent serious illnesses which they thought would make long imprisonment disastrous. These we handed over to the barrister who was to watch our cases at Bow Street. No one we met seemed to believe that we should be condemned to gaol. They thought the Government would think that it would not pay them. But we, ourselves, did not see how they could fail to sentence us to gaol. For some time it had been evident that our doings irked the Government, and the police had been raiding the Committee office and doing a clumsy bit of spying upon various members, who frequented it. The barrister thought that he could prevent my wife's and my incarceration entirely. But we did not wish either extreme. We instructed him to try to prevent our being let off scot-free, but, equally, to try to have us sentenced to not longer than a fortnight in prison. In the event, we were each sentenced to two months in gaol, a sentence which, because of the doctors' statements, was commuted to a week each.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap3:Trafalgar Square,(1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-220.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-220.HTM</a></p>	<p>それから一カ月後、私たち夫婦が北ウェールズでの午後のドライブから帰宅すると、我が家の玄関先でオモムシにまたがっている、とても当惑しているけれども感しよさそうな巡査部長を見つけた。彼は、(1961年)9月12日にボウ・ストリート(ロンドン中央警察裁判所)に出席するようにとの召喚状を私たち夫婦に手渡した。(上写真出典: Ronald Clark's Bertrand Russell and His World c1987) それは一般市民を運動して市民不服従運動にかりこめてきたということでも出されたものであった。喚状は、百人委員会の幹部全員に対して出されたということであったが、実際はそのうちの何人かに対してだけであった。召喚を受けて出席を拒んだ者はほとんどいなかった。</p> <p>(後章)を宣言しないことなどできるものか。私たち夫婦は、事務弁護士(法律相談に応じたり、法律事務を手伝ったりする弁護士のこと)の意見を求めるため、それからもうと重要なことであるが、運動の同志たちと相談するために、ロンドンに赴いた。上表した。私はそのことで殉教者になることを少しも望まなかったが、我々の考え方を一般に知らせるためにいかなる機会も最大限に活用すべきであると思った。私たちの投獄がある一定の騒動を引き起こすだろうということと理解できないのは我々は無垢ではなかった。我々がそれまで動かされてきた行動理由(動機)に対してこれまで動かされることにならなかった人々の心に突破口を開き、少なくとも幾つかの行動理由(動機)に対して十分な共感(同情心)を創り出すことができるかもしれないと期待した。私たち夫婦は、1週間以上車いすに乗りかかっており、在期間の投獄は悲惨な結果をもたらすだろうという診断書を医者からもらっていた。それを、ロンドン中央警察裁判所で私たちの訴訟事件を担当することになっていた法律弁護士(注: 上級裁判所の法廷に立つ弁護士)に渡した。私が金づた獄中も、私たち夫婦は有罪となつて刑務所にいられるとは、信じていないようであった。法律弁護士は、そんなことをしたら(民衆の批判を受けて)まったく引き合わない英国政府は考えるだろうと思つてた。しかし、政府が私たちを懲罰(投獄)を宣言しないことなどできるものか(ありうるものか)、私たち自身はわからなかった。しばらくの間、私たちの行為が政府を困らせたのは明らかであった。また、警察は百人委員会の事務所の手入れをしたり、その事務所に頻りに出入りしていた多くの会員に対して下等なスパイ行為をしていた。法律弁護士は、私たち夫婦の投獄を完全に拒否することの法廷弁護士と考へた。しかし私たちはいずれにせよ極端は望まなかった。私たちは法律弁護士に、私たちが無罪放免にはならないようにするとともに、2週間以上投獄という判決にならないようにして欲しいと指示した。結局は、私一人はそれぞれ禁錮2ヶ月間の判決を受け、その判決は、医者たちの診断書によつて、二人とも1週間の刑に減刑された。</p>	
C1-57	<p>By contrast the scene in the courtroom looked like a Daumier etching. When the sentence of two months was pronounced upon me cries of 'Shame, shame, an old man of eighty-eight!' arose from the onlookers. It angered me. I knew that it was well meant, but I had deliberately incurred the punishment and, in any case, I could not see that age had anything to do with guilt. If anything, it made me the more guilty. The magistrate seemed to me nearer the mark in observing that, from his point of view, I was old enough to know better. But on the whole both the Court and the police behaved more gently to us all than I could have hoped. A policeman, before proceedings began, searched the building for a cushion for me to sit upon to mitigate the rigours of the narrow wooden bench upon which we perched. None could be found - for which I was thankful - but I took his effort kindly.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap3:Trafalgar Square,(1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-230.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-230.HTM</a></p>	<p>それとは対照的に、法廷の光景はまさにドゥーミエのエッチング(注: 腐蝕版画)のように見えた。(英国)2ヶ月の有罪判決が私に課された時、「恥を知れ!恥を知れ! 88歳の老人だぞ!」という叫びが傍聴人から起こつた。私は腹が立った。その叫びは好意からであることはわかつていたが、私は故意に刑罰を受けようとしていたとありあらずにせよ年齢が有罪か否かという点に何らかの関係があるということは理解できなかった。もし何かに何らかの関係があるとすれば私の年齢(年をとっているということ)は、それだけ私の罪を大きくした。この訴訟担当の治安判事(警察裁判所判事)が彼の見地から見れば私もつと分別があつてよい年齢であると発言したことから判断すると、彼は世間の標準に近い人間であると私には思われた。しかし、大体において、法廷も警察も両者とも私が望んだ以上に、我々全員に対して、優しく振舞つた。裁判が始まる前、ある警察官が私たちが坐つていた狭い木製のベンチの苦しさを和らげるために、私の腰に当てるクッションを求め、我々裁判所内を探してくれた。クッションは見付からなかった(それに対して私は感謝した)。しかし、私は彼の骨折りを親切心からのものと受け取つた。</p>	
C1-58	<p>The Committee had already begun to weaken itself in other ways. Long discussions were beginning to be held amongst its members as to whether the Committee should devote itself only to nuclear and disarmament matters or should begin to oppose all domestic, social and governmental injustice. This was a waste of time and a dispersal of energies. Such widespread opposition, if to be indulged in at all, was obviously a matter for the far future when the Committee's power and capabilities were consolidated. By such projects consolidation could only be delayed. Again, this unfortunate tendency was the outcome, largely, of the practical political and administrative inexperience. The Committee added to the over-estimation of the meaning of September 17th's success. The latter should have been regarded as very great encouragement but not as, by any means, the certain promise of a mass civil disobedience movement. In proportion to the population of the country, the movement was still small and too unproved to stand against determined opposition. Unfortunately, the comparative failure of December 9th was considered only as a discouragement, not as a lesson towards a period of consolidation. I tried in my public statements at the time to overcome the discouragement and, privately, to inculcate the lesson. But in both attempts I failed.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap3:Trafalgar Square,(1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-290.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-290.HTM</a></p>	<p>百人委員会は他の面で既に自らを弱体化させ始めていた。百人委員会は、ただ単に核と軍縮の問題だけに専念すべきであるが、それともあらゆる国内における社会的・政治的・不正に反対(抵抗)する行動を開始すべきであるか、に關して、会員たちの間で長い議論が持たれ始めていた。これは構構の遠慮であり、勢力の分散であった。そのような広範な反対(抵抗)は、いやしくもそれに従事すべきとするならば、百人委員会の力や将来性を強化する時期においては明らかに遠い将来の問題であった。そのような企ては、(百人委員会の)組織の強化を遅らせるだけだった。それに、この不幸な傾向は、主として(1961年)9月17日の集会、その成功の意義の過大評価であるとともに、それに加えて、百人委員会の実際上の政治的及び管理運営上の無経験の結果であった。9月17日の成功は、非常に大きな励みとなつたとみなされるべきではあるが、決して、大衆の不服従運動の成功の見込みが確かになったものとみなすべきではなかったのである。我が国(英国)の人口の割に運動はいまだ小規模であるとともに、強固な反対に立ち向かうためにはあまりにも(美談による)証拠がとまなつていなかった。不幸にも、9月17日に比べ、12月9日の集会、我々が相対的に失敗したことは、百人委員会の強化の時期に向かつての教訓とは考えられず、ただ単にうまくいかなかったとのみ考えられた。私は当時、公的な声明において、葉巻・デモの失敗による失意を克服しようとして努力した。同時に、私的にこの教訓を補えようとして努力した。しかし、その両方の試みに失敗した。</p>	

C1-59	<p>The immediate aftermath of the demonstration of December 9th was the charging of five leaders of the Committee under the Official Secrets Act of 1911. It was, from a layman's point of view, a curiously conducted trial. The prosecution was allowed to present its case in full, resting on the question as to whether it was prejudicial to the safety of the nation for unauthorised people to enter the Wethersfield air field with the intention of immobilising and grounding the aircraft there. The defence case was that such stations as Wethersfield, like all the stations engaged in nuclear 'defence' of the country, were in themselves prejudicial to the safety of the country. Professor Linus Pauling, the physicist, and Sir Robert Watson-Watt, the inventor of radar, who had come from the United States to give evidence as to the dangers of the present nuclear policy of which Wethersfield was a part, and I were kept hanging about for many hours. Then all our testimony, like that of other defence witnesses, of whom some, I believe, were not permitted to be called at all, was declared irrelevant to the charges and ruled out. It was managed quite legally, but all loopholes were ruthlessly blocked against the defence and made feasible for the prosecution.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap3:Trafalgar Square,(1969) http://russell-j.com/beginner/AB33-300.HTM</p>	<p>(1961年)12月9日のデモの直接の余波は、百人委員会の5人の幹部が1911年國家機密保護法に違反するものとして告訴されたことである。一般に(法律の専門家以外)の見地からすれば、遣り方のおかしな裁判であった。検察側は、航空機を移動したり離陸したりすることを不可能にさせる意図をもって権限のない者がウェザーズフィールド飛行場に立ち入ることは國家の安全を脅かすかどうかが問われるに依り、検察側は、被告の証言をすべて受けとめ、被告が許された弁護側の陳述は、ウェザーズフィールドのような基地は、英國のいわゆる核(兵艦)による防衛に従事しているあらゆる基地と同様、その存在自体が英國の安全を脅かすものである、という点にあった。ウェザーズフィールドが従って行っている現在の英國の核政策の危険性について証言をするために米国からやってきていた物理学者(自然科学者)のライナス・ポーリング教授(Linus Carl Pauling, 1901-1994.08.19: アメリカ合衆國の量子化学者、生化学者。1954年にノーベル化学賞、1962年にノーベル平和賞を受賞)とレダガーの発明者ロバート・ワット(Robert A. Watson=Watt, 1892-1973)と私は、長時間宙ぶらりんの状態にされていた。そして、私たちの証言の全てが、他の弁護側証人の証言と同様、弁護側証人のうちの何人かが証人と呼ばれることを認められなかったと私は確信しているが、告訴に關係のないものと宣告され、除外された。裁判は、まったく合法的に行われた。しかし、あらゆる逃げ道が弁護側に対しては不利になるよう無慈悲にも閉じられ、検察側に有利になるようにされた。</p>		
C1-60	<p>Of the celebration party at Festival Hall, under the kind aegis of its manager, T. E. Bean, that took place the next afternoon, I do not know what to say or how to say it. I had been told that there would be music and presentations to me, but I could not know beforehand how lovely the music would be, either the orchestral part under Colin Davis or the solo work by Lili Kraus.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap3:Trafalgar Square,(1969) http://russell-j.com/beginner/AB33-350.HTM</p>	<p>私の陳述(1962年)の翌日(1962.5.5)の午後、(ロンドンの)ロイヤル・ラエステイグアル・ホールで、支配人T. E. ビーンの思いやりのある後援のもと、祝賀パーティが催されたが、それについて何をどういいたらよいかかわらない。(参考:若松繁俊「ある誕生日」)私のために記念コンサートが催され、いろいろな「リサイタル」や「コンサート」があることは聞かされていたが、コンサートがあれほど素晴らしいものにならうとは事前に知ることはできなかった。コリン・デイヴィス指揮のオーケストラの演奏も、リリ・クラウスの(ピアノ)独奏も、とても素晴らしいものであった。</p>		
C1-61	<p>The last months of that year were taken up with the Cuban crisis and then with the Sino-Indian Border dispute. Early in December, Penguin accepted my offer to write my account of these two happenings which I did in January. It was published by Penguin and Allen &amp; Unwin in April under the title Unarmed Victory. I have told in it all there is to tell of any interest about my thought and action at that time, and I do not propose to repeat it all here. Perhaps I should add, however, that I regret nothing that I did at that time in relation to these two crises. My point of view upon them, in spite of further study, remains the same. I will give my critics only this olive branch: I am sorry that I did not couch my telegram of October 23rd to President Kennedy more gently. Its directness made it unlikely to cut much ice, I agree. But I had as little hope then as I should have in similar circumstances now of wise and quick withdrawal on the part of the US Government.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap3:Trafalgar Square,(1969) http://russell-j.com/beginner/AB33-380.HTM</p>	<p>その年(1962年)の最後の2、3ヶ月は、キューバ危機(1962.10.14-10.28までの14日間)とその後に続いた中印国境紛争に没頭した。12月初め、この2つの事件について書きたいという私の申し出をペンギン出版社が受け入れてくれたので、私はそれを翌年の1月に書き上げた。その本は、1963年4月に「Unarmed Victory(『武器なき勝利』)」という書名でペンギンとジョージ・アレン・アンド・アウンから出版された。私はその本の中に、当時の私の思想と行動に関して重要性のあることは、全て書いている。従ってここでそれらのことについて語り出す必要はない。私は私を批判する人々にに対して、平和の象徴の)オリブの枝として、次の言葉を掲げよう。即ち、私がケネディ大統領に10月23日に送った電報をもって穏やかな言葉で言い表わさなかったことを残念に思う。あの電報の率直さが大きな影響力を及ぼし、それも無いものにしたという批評に私も同意する。しかし、私は現在同様の情況でその望みがもてないのと同じく、当時米國政府が賢明にもまた迅速に撤兵するという望みはほとんどもてなかったのである。</p>		
C1-62	<p>In recent years I have become, as I have said, more and more involved in work against the incarceration and the persecution of individuals and groups because of their political and religious opinions. I have received a continually increasing number of written appeals for help from individuals and organisations all over the world and almost daily visits from representatives of the latter. I have been unable to travel to distant countries myself, so, in order to have as nearly as possible first-hand objective information, I have been obliged to send representatives to the various countries.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap4:The Foundation,(1969) http://russell-j.com/beginner/AB34-030.HTM</p>	<p>私は前にも述べたように、個人やグループをその政治上の見解や宗教的意見などの理由で投獄したり処刑したりすることに反対する仕事にしたいに深入りしてきた。私に支援を求める文書が全世界の個人や団体から絶え間なく送られてくるようになり、その数もしたいに増え、さらにほとんど毎日、そうした団体の代表者の訪問を受けるようになった。(註: 隨筆集) 私自身遠方の国々に旅行することがずっとできなかった。私は、できるだけ直接的かつ客観的な情報を入手するために、多数の国々に自分の代理を派遣せざるをえなくなった。</p>		
C1-63	<p>That same April, 1963, I sent a representative to Israel to look into the situation of the Palestine Arab refugees. We wished to form some assessment of what, if anything, might most effectively be urged to help to settle matters between Jews and Arabs concerning the question of the Palestine refugees. Since then I have, often at request, sent other representatives to both Israel and Egypt to discuss the separate and the joint problems of those countries. In turn, they have sent their emissaries to me. I was also much concerned, and still am, with the plight of the Jews in the Soviet Union, and I have carried on a considerable and continuing correspondence with the Soviet Government in regard to it. In addition, a very large number of Jewish families in Eastern Europe have been separated by the Second World War and wish to rejoin their relations abroad, usually in Israel. At first I appealed for permission for them to emigrate individually, but later, under the pressure of hundreds of requests, I began to make appeals on behalf of whole groups. As such work developed, I found myself working for the release of political prisoners in over forty countries where they are held, half forgotten, for deeds which were often praiseworthy. Many prisoners in many lands have been freed, we are told, as a result of my colleagues' and my work, but many remain in gaol and the work goes on.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap4:The Foundation,(1969) http://russell-j.com/beginner/AB34-050.HTM</p>	<p>その同じ年(1963年)の4月、私はパレスチナ・アラブ難民の状況を調査するため、イスラエルに代理を派遣した。われわれはパレスチナ難民問題に関するユダヤ人(ここではイスラエル人)とアラブ人との間の諸問題を、どちらかと言えば、真実に解決する助けとなる最も効果的であり、そのものについてある程度はつきりした評価を行いたいと望んだ。それ以降、私は、求めに応じ、たびたび、イスラエルとエジプト両国に、それぞれ国の個別の問題や両国共通の問題を議論するために、別の代理人を派遣してきた。逆に、両国は、提案を私のもとに送って、私は、パレスチナとエジプトにおけるユダヤ人の現状についても大いに關心を持って、現在でも持ち続けている。そして、ソ連政府とその問題に関して、手紙等のやりとりをかなり頻繁かつ継続的に行ってきた。さらに、東欧における非常に多数のユダヤ人家族が第二次世界大戦によってアザトと離れ離れにされてきており、彼らは海外へ、通常はイスラエルの親戚と再会したいと望んでいる。当初私は、彼らが個々に移民(移住)することを許可するように訴えた。しかしその後、何百という要望におされ、ユダヤ人全グループのために訴え始めた。そのような活動を感得して、いくつれ、私は、しばしば称賛にあたいするような行為のために拘留され半ば忘れられている40カ国以上の政治犯の釈放を求めて活動している自分に気づいた。多くの国々に拘留されていた多数の人々が、私の仲間や私の活動の結果釈放された(と聞いてはいる)。しかし、多くの国々がいまだ獄中にあり、この政治犯解放の活動は継続中である。</p>		

	<p>C1-64</p> <p>All this work steadily mounted in demand. By 1963, it was rapidly becoming more than one individual could carry on alone even with the extraordinarily able and willing help that I had. Moreover, the expenses of journeys and correspondence - written, telegraphed and telephoned - and of secretaries and co-workers was becoming more than my private funds could cover. And the weight of responsibility of being an entirely one-man show was heavy. Gradually the scheme took shape, hatched, again, I think, by the fertile mind of Ralph Schoenman, of forming some sort of organisation. This should be not just for this or that purpose. It should be for any purpose that would forward the struggle against war and the armaments race, and against the unrest and the injustices suffered by oppressed individuals and peoples that in very large part caused these. Such an organisation could grow to meet the widely differing demands. It could, also, reorientate itself as circumstances changed. A good part of my time, therefore, in 1963, was taken up with discussing plans for the formation of such an organisation. Many of my colleagues in these discussions had been working with me since the early days of the Committee of 100.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap4:The Foundation,(1969)  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-070.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-070.HTM</a></p>	<p>全てのこのような活動が、差し迫った要求により、積みあがって増えていった。私には非常に有能かつ自発的な支援者がいたが、それでも1963年までに、一人人間では処理しきれない状態に急速になりつつあった。さらに、旅行費用、手紙や電報や電話(等)の通信費、また秘書や協力者の経費が、私個人の資金ではまかないきれない状態になりつつあった。それにまわって、一人で取り仕切っていることの責任の重さが大きかった。次第に、ある種の組織を創ろうという計画が、再びラルフ・シューマン (Ralph Schoenman) の創造力に薫んだ精神から生まれたものだと思うが、形をなし、孵化した。この組織は、これとがあれどといった特定の目的のためだけのものではあつてはならない。それは、戦争や軍備競争に反対し、抑圧されている個人々が苦しんでいる不安や不正に反対し、そのような不安や不正を非常に広範な地域で巻き起こした人々に反対する運動を前進させるためのあらゆる目的のための組織でなければならない。そのような組織であればさまざまな要求に対して幅広く応えられるようになるであろう。それはまた状況の変化にともなって、自ら新しい環境に適応させることができるであろう。それゆゑ、1963年の私の時間のかなりの部分が、そのような組織をつくる計画の議論に費やされた。こうした議論の仲間の多くは、百人委員会(の初期)の頃から行動をともしていた人々たちであった。</p>		
	<p>C1-65</p> <p>We knew our aims - chief of which was to form a really international organisation - and the long-term means towards them that we must strive to achieve, and the outlines of work that we must carry on, work such as we had been carrying on for some time (Allen &amp; Unwin paper ed. は 'same' と誤植)。We also recognised the fact that the attainment of our purposes necessitated vast sums of money. Rather against my will my colleagues urged that the Foundation should bear my name. I knew that this would prejudice against the Foundation many people who might uphold our work itself. It would certainly prejudice well-established and respectable organisations and, certainly, a great number of individuals in Britain, particularly those who were in a position to support us financially. But my colleagues contended that, as I had been carrying on the work for years, helped by them during the last few years, and my name was identified with it in many parts of the world, to omit my name would mean a set-back for the work. I was pleased by their determination, though still somewhat dubious of its wisdom. But in the end I agreed. When, however, we decided to seek charitable status for our organisation, it became evident to my friends as well as to myself that it would be impossible to obtain it in Great Britain for any organisation bearing my name. Finally, our solicitors suggested that we compromise by forming two Foundations: The Bertrand Russell Peace Foundation and the Atlantic Peace Foundation, for the second of which we obtained charitable status. These two Foundations were to work, and do work in co-operation, but the latter's objects are purely educational. Its purpose is to establish research in the various areas concerned in the study of war and peace and the creation of opportunities for research and the publication of its results. As the Charity Commission registered this Foundation as a charity, income tax at the standard rate is recoverable on any subscription given under a seven-year covenant, which, in turn, means that such subscriptions are increased by about sixty per cent.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap4:The Foundation,(1969)  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-090.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-090.HTM</a></p>	<p>我々は目的を理解していた。主な目的は真の国際組織を創ることであった。また、達成に向けて努力しなければならぬその目的へ向けての長期的手段、方法、それが、我々を支援するべき人々を呼びよせ、実行しなければならぬ活動の輪郭も、我々は理解していた。また、我々の目的を達成するためには巨額の資金を必要とすることも認識していた。同志たちは、私の意志にかり反して、この財団に私の名前をつけることを強く主張した。Foundationの名前を付け加えるも、我々の活動自体を持てくれる多くの個人に、財団に対する先入観を与えることになるだろうということを、私は理解していた。そういうことをすれば、立派に設立された、尊敬すべき諸団体に、先入観を確実に与え、また英国内の多数の個人に確実に先入観を与えられたらう。我々は財政的に支持してくれる地位にある人々に対しては、特にそうである。しかし同志たちは、私は長年平和活動を行なってきたり、最近はその支援を受けており、またその活動は私(ラッセル)の名前と結びつけて認識されきたのであるから、私の名前を添えることは活動を前進させることと意味するだろうと強く主張した。そうすることは賢明なことであるがどうかはわからぬがまだ疑わしいけれども、彼らこそ言うてくれるのをうれしく思った。しかし最後には私も同意した。けれども、我々の組織のために慈善団体としての法的身分を取得することと同等な時、私の名前と個人名を冠した団体はどんな組織であれ、英国で慈善団体としての法的身分を取得することは不可能だろうということが、私自身だけでなく私の友人たちにも明らかになった。</p> <p>最終的に、事務弁護士は、2つの財団をつくることにより、最善の案であると私たちに提案してくれた。即ち、ハートランド・ラッセル平和財団と大西洋平和財団の2つで、後者の大西洋平和財団については慈善団体の資格を取得した。これら2つの財団はたがいに協力しあつて仕事をすることになっていた。現在でもそうしているが、後者(大西洋平和財団)の目的は純粋に教育的なものであった。その趣旨とするところは、関係諸地域における戦争と平和に関する問題の調査研究を定着させ、調査研究の機会及び調査研究の結果を出版する機会を創り出すことであった。英国慈善委員会は、本財団を慈善団体として登録してくれたので、7年契約でなされたいかなる寄付金も、通常のレートで課された所得税はあとではない戻してもらつてくれることである。財団への寄付金額が約6割増えることを意味している。</p>		
	<p>C1-66</p> <p>The Bertrand Russell Peace Foundation was to deal with the more immediately political and controversial side of the work, and contributions to it, whether large or small, are given as ordinary gifts. During its first three years of existence many thousands of pounds have been contributed to it, some from individuals, some from organisations, some from Governments. No contribution with strings tied to it is accepted. Particularly in the case of Government contributions, it is made clear to the donors that the source of the money will not in any way prejudice the methods or results of its expenditure.</p> <p>Unfortunately, I fell very ill at the beginning of September when we had decided to make our plans public, but by the end of the month, on September 29, 1963, we were able to release them. After I had made a vehement statement, we gave the press men the leaflet that my colleagues had prepared about each Foundation. That concerning the Bertrand Russell Peace Foundation gave a list of the then sponsors, and a letter that U Thant had written for the purpose on the outside. I had talked with him about our plans among other things and written to him about them. He had been warmly sympathetic, but explained that he could not be a sponsor because of his position, as Secretary-General of the United Nations. He offered, however, to write the carefully worded but encouraging letter which we printed.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap4:The Foundation,(1969)  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-100.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-100.HTM</a></p>	<p>平和活動の政治的な面及び論争的な面を取り扱うことになっていた。また(慈善団体ではないので)ラッセル平和財団に対する寄付(金)は、金額の多少にかかわらず、通常の贈与としてなされている。平和財団が発足してから最初の3年間に、何千ポンドもの個人や諸団体や諸政府から寄付された。紐つきの寄付金はまったく受け付けていない。特に政府からの寄付の場合には、寄付金の提供元は寄付金の支出の仕方や支出結果についていかなる方法においても介入しない(注文を付けない)ということ、寄付者に明確にしている。不幸にして、平和財団創設の計画を公表しようとして決定した(1963年)9月の初めに私は重い病気にかがってしまった。しかし9月末までに、すなわち、1963年9月29日に財団の創設について記者発表することができた。熟をこめた声明を私が発表した後、私の同志達が2つの財団についてそれぞれ率直なコメントを新聞記者たちにも配付した。ハートランド・ラッセル平和財団に関するリーフレットには、設立時のスポンサーのリストや、財団の目的に賛成して外部者の立場で書かれた、ダント(国連事務総長)の簡短が載っていた。私はずれい助から、他の諸問題と同時に平和財団の計画についてもよくと語り合うとともに、彼に手紙も送っていた。彼は心から賛成していたが、国連事務総長としての立場からスポンサーになることはできないと説明していた。けれども彼は言葉遣いに注意しながらも激励する手紙(注:リーフレットに掲載したもの)を書くことを申し出てくれた。</p>		

C1-67	<p>The two most important public speeches that I have made have been those concerned with the perfidy of the Labour Government under the premiership of Harold Wilson, one in mid-February 1965, and one eight months later. The first deals with the general international policies of the Government, the second dwells upon its policies in regard, especially, to Vietnam and is, therefore, reprinted in my book War Crimes in Vietnam. At the end of the second, I announced my resignation from the Party and tore up my Labour card. To my surprise, this intensely annoyed two of the other speakers on the platform, a Member of Parliament and the Chairman of the CND. The latter remarked to the press that I had stage-managed the affair. If I had been able to do so, I do not know why I should not have done so, but, in actual fact, all the management was in the hands of the Youth CND under whose auspices the meeting was held. The MP, who had often expressed views similar to mine on Vietnam, arrived late at the meeting and stalked out because of my action. I was rather taken aback by this singular behaviour as both these people had been saying much what I said. The only difference seemed to be that they continued in membership of the Party they denounced.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap4:The Foundation,(1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-160.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-160.HTM</a></p>	<p>私が行った最も重要な2つの公開演説は、ハロルド・ウィルソンが首相を務めている下での労働党政府の裏切り(背信行為)に関するものであった。その一つは1965年2月中旬に行なった演説であり、もう一つはその8ヶ月後に行なったものである。最初の公開演説は、労働党政府の外交政策一般を取り扱っており、2番目の演説は、特にフエトナム問題に関する政策について詳細に論じたものであり、それ以後は後者は私の「ワット・オブ・ウォー・イン・ベトナム(War Crimes in Vietnam, 1967)」に収録されている。公開演説の最後で私は、労働党からの脱退を宣言し、党員証をひき取った。驚いたことに、この行為は同じ壇上にいたもう二人のスピーカー(一人は国会議員で、もう一人はCND(核兵器廃絶運動)の委員)をひどくいらぬでさせた。後者は世間の注目をひくために私は勝手な演出(スタンド・プレー)を行ったと新聞に述べた。もし私がそのような行為ができたのであれば、どうして私がそうしてはいけなかったのが、理解できない。しかし、実際のところは一切の運籌は私の公開演説を主催していた青年CNDの手中で行なわれた。(スピーチである)その国会議員は、フエトナムの問題について、以前からしばしば私と同様の意見を表明してきた。- 連れて演説会にやってきたが、私のこの行為のためにこっそりと会場を出て行った。私の言っていることと同じことをその二人とも頻りに言っていたので、このような奇異な振舞によって、私はかなりあつげにとられた。私との唯一の違いは、彼らが公然と非難していたその労働党の党籍を彼らは離脱しなかったということのように思われた。</p>	
C1-68	<p>There are four other charges brought against me which I might mention here since I suppose they are connected, also, with 'The folly of age'. The most serious is that I make extreme statements in my writings and speeches for which I do not give my sources. This is levelled, I believe, against my book War Crimes in Vietnam. If anyone cares to study this book, however, I think that they will find it well documented. If I occasionally make a statement without giving the basis of it, I usually do so because I regard it as self-evident or based upon facts noted elsewhere in the book or so well known that there is no need to name the source.</p> <p>Another charge, allied to this one, is that I myself compose neither speeches nor articles nor statements put out over my name. It is a curious thing that the public utterances of almost all Government officials and important business executives are known to be composed by secretaries or colleagues, and yet this is held unobjectionable. Why should it be considered heinous in an ordinary layman? In point of fact, what goes out over my name is usually composed by me. When it is not, it still presents my opinion and thought. I sign nothing - letters or more formal documents - that I have not discussed, read and approved.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap4:The Foundation,(1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-170.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-170.HTM</a></p>	<p>このほかにも、老齢による無分別(もうろくによる愚かさ)に關係があると考えられるので、こゝで言及してよいと思われ、私に対する批判が4つある。それらのなかで最もひどいのは、私が著作や演説で出典(や情報源)を明らかにしないで、権威的な主張をしているという批判である。こうした非難は、私の著作「フエトナムにおける戦争犯罪」(War Crimes in Vietnam, 1967)に狙いを定めたものだと私は信じている。けれども、もし誰かがこの本に関心を持って調査研究すれば、この本は典拠や引用などでよく証拠付けられていることとがわかるだろう。と私は考える。もし、時に、論議を与えたり私が論議をしている場合は、通常は、それは自明のものであるか、その本の中のどこかで記述している事実に基づいているものであるか、あるいは情報源をあげる必要がまったくないほどよく知られていることであると私が見なしているか、そのいずれかの理由からそうするのである。</p> <p>これに似たもう一つの批判は、私の名がつけられている演説や論文や声明は私自身が書いたものではないというものである。奇妙なことであるが、ほとんど全ての政府の役人や重要な企業の経営幹部による公けの発言(内容)が、その秘書や他の同僚によって作成されているという事は一般に知られていることである。しかもそれがあたりまえのこととされているのである。その同じことが、一般の俗人にあつては、どうして「憎むべきこと」と考えられなければならないだろうか。事実を言えば、私の名前を付しているものは通常は(ほとんど全てと)言つてよいほど)私自身が書いているものである。私が書いたものでなくとも、私の意見や思想を表わしているものはある。手紙あるいはより公式の文書も、私が自分で議論したり、読んだり、承認したりしなかったものにはまったく署名をしていない。</p>	
C1-69	<p>Two other rumours which I have learned recently are being put about, I also find vexatious. They are that letters and documents sent to me are withheld by my secretaries lest they trouble me, and that my secretaries and colleagues prevent people who wish to see me from doing so. But I myself open and read all that is addressed to me at home. My mail, however, is so large that I cannot reply to everything, though I indicate to my secretary what I wish said and read the replies drafted by my secretary before they are sent. Again, it is the number of people who wish to see me about this or that which makes it impossible to see them all. During a week, for instance, that I spent in London towards the end of 1966 in order to open the preparatory meetings of the War Crimes Tribunal, I received visits each day, morning, afternoon and evening, from people wishing to talk with me. But, as well over one hundred people asked to talk with me during this week, many, over a hundred, had to be refused.</p> <p>I have remarked upon these charges at such length not only because I dislike being thought to be silly, but because it exasperates me to have my arguments and statements flouted, unread or unlistened to, on such grounds. I also dislike my colleagues coming under fire for doing, most generously, what I have asked them to do.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap4:The Foundation,(1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-180.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-180.HTM</a></p>	<p>その他にも、私が最近知った二つの噂もひろまりつつあり、それについても腹立たしく思っている。その二つの噂というのは、私宛の手紙や文書が私を煩わすことのないようという配慮で、秘書たちが私が私に渡さず保留しているという噂と、私に会いたいと思う人々を私の秘書や同志たちが私に会わせないようにしているという噂である。しかし、私の自宅宛の手紙は私自身が全て開封し読んでいる。けれども私宛の郵便はあまりにも多いので、私自身がその全部に返事を書くというわけにはいかない。とはいつても(=ただし)私は書いてやりたいことを秘書に指示したり、秘書が書いた返事の草稿を発信する前に読んで確認している。また、いろいろな理由で私に会いたいと希望する人々の数が多いため、それら全ての人に入会することは不可能である。たとえば、フエトナム戦争犯罪国際法廷の準備会議(右下写真)で、セ・法廷準備委員会のついて記者発表する(ノートランド・ラッセル)を開くために、1966年の終わりにかけてロンドンに滞在した一週間の間、毎日、朝、昼、晩、というように私と話し会いたいと希望する人々の来訪を受けた。しかし、百人をかなり越える人々がこの一週間に私と会って語り合いたいと申し込んで来たが、百人以上の多くの人たちの面会を断らなければならなかった。</p> <p>私は長々と私に対する批判に言及してきたが、それは、私が愚かな人間であると考えられるのが嫌であるばかりでなく、そういう理由で、私の議論や声明が囁かれたり、読まなかったり、耳をかきされなかったりすることに憤り立つからである。それにまた私は、同志たちが私が依頼したことをやっために批判を受けることが嫌だからである。</p>	

C1-70	<p>Less than two months after the Foundation was established I, in common with the rest of the world, was shocked by the news of the murder of President Kenedy. Perhaps I was less surprised by this vicious attack than many people were because for a number of years I had been writing about the growing acceptance of unbridled violence in the world and particularly in the United States. Some of my articles on this subject were published, but some were too outspoken for the editors of the publications that had commissioned them.</p> <p>As I read the press reports in regard to the President's assassination and, later, the purported evidence against Oswald and his shooting by Ruby, it seemed to me that there had been an appalling miscarriage of justice and that probably something very nasty was being covered up. When in June, 1963, I met Mark Lane, the New York lawyer who, originally, had been looking into the affair on behalf of Oswald's mother, my suspicions were confirmed by the facts which he had already gathered. Everyone connected with the Foundation agreed with my point of views and we did everything that we could, individually and together, to help Mark Lane and to spread the knowledge of his findings. It was quite clear from the hushing-up methods employed and the facts that were denied or passed over that very important issues were at stake. I was greatly impressed, not only by the energy and astuteness with which Mark Lane pursued the relevant facts, but by the scrupulous objectivity with which he presented them, never inferring or implying meanings not inherent in the facts themselves.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap4:The Foundation,(1969)  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-190.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-190.HTM</a></p>	<p>平和財団が設立されて2ヶ月もたないうちに、世界のすべての人々と同様、ケネディ大統領暗殺（注：1963年11月22日テキサス州ダラスで暗殺）のニュースショックを受けた。（ただし）この残忍な行為を聞いて、他の多くの人々が驚いたほど多分私は驚ろかなかつたように思う。なぜなら私は、長年の間、世界中で特に米国において、野放図な（手がつけられないような）暴力の容認（黙認）がしだいに増大しつつあることについて、それまで書いてきていたからである。この問題に関する私の論文の幾つかは発表されたが、（他の）幾つかの論文は、執筆を依頼してきた出版物の編集者たちによって率直すぎるものであったために、発表されなかつた。</p> <p>ケネディ大統領暗殺に関する新聞報道及びその後オズワルドに不利な証拠といわれるものやルビーによるオズワルドの狙撃に関する報道を読んだ時、はなはだしい誤りがあったように、また、おそらく非常に不潔な何かが隠蔽されたの母親のために事件について独自に調査していたニューヨークの弁護士マーク・レーン（Mark Lane, 1927-）に会った時、彼がそれまでに収集していた事実によって私の疑念が強まった。平和財団関係の誰も私の見解に同意した。そこでマーク・レーンを支援するため、また彼が見た事実の内容を一般に知らせるために、徹夜でできることをまた共同でできることをすべて行った。使われた嫌み消し手段、否定された事実、また無視された事実からみて、非常に重要な（いくつかの）論点が問題であった（未解決であった）ことはまったく明らかであった。マーク・レーンが、この事件と関連のある事実を追求した精力と機敏さだけでなく、彼がそうした事実を提示した周到な客観性にも大いに印象づけられた（感銘した）。そうした事実そのものに本来そなわっていないような意味を推論したり、あるいはほめめがしたりするようなことは決してしなかつた。</p>	
C1-71	<p>Since shortly before April, 1963, more and more of my time and thought has been absorbed by the war being waged in Vietnam. My other interests have had to go by the board for the most part. Some of my time, of course, is spent on family and private affairs. And once in a blue moon I have a chance to give my mind to the sort of thing I used to be interested in, philosophical or, especially, logical problems. But I am rusty in such work and rather shy of it. In 1965, a young mathematician, G. Spencer Brown, pressed me to go over his work since, he said, he could find no one else who he thought could understand it. As I thought well of what little of his work I had previously seen, and since I feel great sympathy for those who are trying to gain attention for their fresh and unknown work against the odds of established indifference, I agreed to discuss it with him. But as the time drew near for his arrival, I became convinced that I should be quite unable to cope with it and with his new system of notation. I was filled with dread. But when he came and I heard his explanations, I found that I could get into step again and follow his work. I greatly enjoyed those few days, especially as his work was both original and, it seemed to me, excellent.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap4:The Foundation,(1969)  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-210.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-210.HTM</a></p>	<p>1963年4月の少し前から、私の時間や思考（考えること）が、しだいにフエトナムで行われている戦争に奪いとられるようになってきた。そのため、それ以外のことへの関心は、大部分見捨てられなければならないがたつた。（とはいっても）もちろん自分の時間のいくらかは、家や個人的な問題に費やされている。それに、極めてまれに（in a blue moon）、自分がかつて関心をもっていたこと、つまり哲学の問題、あるいは特に論理学の問題、などに心を傾ける機会を持っている。しかし、そういった仕事については、（遠ざかっていることや年齢のせいでも）私の能力はさびついてしまっており（鈍くなっており）、また、かなり内気になっている。1965年に、若い数学者のジョージ・スペンサー＝ブラウン（George Spencer-Brown, 1923-）が、彼が言うには彼の研究を理解できる者は私（ラッセル）以外に見当たらないからと、いうことで、自分の研究をみてほしいと強く求めてきた。私は、以前少しだけ彼の研究をみた時好感的に思つたので、また、定着した無関心という不利な条件に抗して、自分たちの新しいそして未知の研究に対して注目してもらおうと努力しつつある人たちに心から同情（共感）することから、私は彼と彼の研究したのものについて語りあうことに同意した。しかし、彼が到着する時間が近づくにつれ、私は彼の研究や彼の新しい表記体系（記号法）を十分理解することはできないだろうと、確信するようになった。私の心は（自分の能力の衰えを自覚されるだろうという恐ろしきでいっぱいになった。しかし、彼がやって来て、彼の説明を聞いた時、私はもう一度数学に足を踏み入れて、彼の研究をわかつてあげることができるとことを知った（注：ラッセル93歳の時のことです！）。私はその数日間というもの大いに楽しんだ（注：Unwin Paperback版ではenjoyedはenovedと誤植。特に彼の研究が強創的なものであり、同時に非常に優れていると思われたので、楽しかった。</p>	

<p>C1-72</p>	<p>Postscript (3) My work is near its end, and the time has come when I can survey it as a whole. How far have I succeeded, and how far have I failed? From an early age I thought of myself as dedicated to great and arduous tasks. Nearly three-quarters of a century ago, walking alone in the Tiergarten through melting snow under the coldly glittering March sun, I determined to write two series of books: one abstract, growing gradually more concrete; the other concrete, growing gradually more abstract. They were to be crowned by a synthesis, combining pure theory with a practical social philosophy. Except for the final synthesis, which still eludes me, I have written these books. They have been acclaimed and praised, and the thoughts of many men and women have been affected by them. To this extent I have succeeded. But as against this must be set two kinds of failure, one outward, one inward. To begin with the outward failure: the Tiergarten has become a desert; the Brandenburger Tor, through which I entered it on that March morning, has become the boundary of two hostile empires, glaring at each other across a barrier, and grimly preparing the ruin of mankind. Communists, Fascists, and Nazis have successfully challenged all that I thought good, and in defeating them much of what their opponents have sought to preserve is being lost. Freedom has come to be thought weakness, and tolerance has been compelled to wear the garb of treachery. Old ideals are judged irrelevant, and no doctrine free from harshness commands respect. The inner failure, though of little moment to the world, has made my mental life a perpetual battle. I set out with a more or less religious belief in a Platonic eternal world, in which mathematics shone with a beauty like that of the last Cantos of the Paradiso. I came to the conclusion that the eternal world is trivial, and that mathematics is only the art of saying the same thing in different words. I set out with a belief that love, free and courageous, could conquer the world without fighting. I came to support a bitter and terrible war. In these respects, there was failure. But beneath all this load of failure I am still conscious of something that I feel to be victory. I may have conceived theoretical truth wrongly, but I was not wrong in thinking that there is such a thing, and that it deserves our allegiance. I may have thought the road to a world of free and happy human beings shorter than it is proving to be, but I was not wrong in thinking that such a world is possible, and that it is worth while to live with a view to bringing it nearer. I have lived in the pursuit of a vision, both personal and social. Personal: to care for what is noble, for what is beautiful, for what is gentle; to allow moments of insight to give wisdom at more mundane times. Social: to see in imagination the society that is to be created, where individuals grow freely, and where hate and greed and envy die because there is nothing to nourish them. These things I believe, and the world, for all its horrors, has left me unshaken. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap4:The Foundation,(1969) <a href="http://russell-j.com/beginner/AB-POST03.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB-POST03.HTM</a></p>	<p>『ラッセル自伝』第3巻への後書きに代えて(3/3) 私の仕事（活動）は終りに近づいており、私の仕事（活動）を一つの全体として概観できる時がきている。私は、どれだけ成功したのか？ またどれだけ失敗したのか？ 私は、若い時から、自分は人生を偉大かつ困難な仕事に捧げていると考えていた。ほぼ3/4世紀前（注：ラッセル自伝：第3巻は1969年の出版。ラッセルがベルリン動物園を放棄したのは1895年。従って正確にいうと74年前）、冷たくさらさら光る3月の太陽の正中で融け始めた雪を踏んでベルリン動物園の中をひとり歩きながら、私は二種類の系列の本を書くことと決意した。一つは抽象的なもので次第に具体的なものになってゆく系列の本である。それらは純粋理論を実際的な社会哲学と結びつけた一つの総合によって栄華を与えられる（有終の美を飾る）予定であった。いまだ達成できていない最終的な総合を掲げ、私はそれらの本をこれまで書いてきた。それらの本は、喝采を浴び、賞讃され、多くの男女の思考はそれらの本の影響を受けた。この程度まで、私は成功した。しかし、これに対し、二種類の失敗、即ち、外的な失敗と内的な失敗を対置しなければならない。外的な失敗は荒れ果ててしまったベルリン動物園に入るために、当時の3月の朝、通り抜けたブランデンブルク門は二つの敵対する帝国（注：東側と西側）の境界になり、両者は隣壁の向う側をお互いを見つめ、残忍にも人類の滅亡の準備をしている。犬吠と鐘音、ファンスト、ナチスは、相繼いで私が良いと思った全てを破壊して（正当性に裏腹を囁いて）成功し、それらを打ち負かす過程で、彼らの敵対者が保持しようとしたものの多くは失われつつある。自由（であること）は弱さ（であること）と考えられるようになり、寛容は背信（裏切り）の衣を着せられるようになり、愛されてきた、若い理想は不適切（時代に合わない）と判断され、拒絶できないかなる教義も尊敬も奪取を奪われぬ。内的失敗は、- 世界にとってはほとんど一瞬のことではあるが、- 私の精神生活を絶えざる闘争へと化した。私はプラトニック的な永遠の世界への信念とも宗教的な信仰から出発（門出）したが、そこででは数学が（ダンテの『神曲 - 天国篇』(Paradiso)の最後の篇におけるような美をもって輝いていた。だが永遠の世界はつまらないものであり、数学はたんに同じことを別の言葉で表現する技術にすぎないという結論に到達した。（また、自由で勇気を持った愛は、闘争して世界を克服できると、この信念から出発した。（しかし）厳しくて恐ろしい戦争（注：第二次世界大戦のことと思われる。）を支持するようになった。これは（内的）失敗であった。しかし、このようなあらゆる失敗の裏背の下にあっては、私は勝利と感しられるくらいかのもをまだ意識している。私は理論的真理というものを間違えてとらえたかもしれないが、そのような真理が存在し、それらの真理は忠誠に値すると考えたことにおいて、間違っていないが。私は自由と幸福な人間の世界への道（道程）が、現実を示されつつあるものよりもずっと短いと思えたかもしれないが、そのような世界が可能であり、そのような世界を我々のより身近なところにもたらそうという目的をもって生きることは価値あることであると考えたことにおいて、間違っていないが。私は個人的にも社会的にもある夢想（vision）を追求しながら生きてきた。（即ち）個人的には、高貴なもの、美しいものを大切にし、より平凡な時代において、知恵を生み出すための内省的な時間を（自らに）与えることである。社会的には、創造されるべき社会を想像力によって見ることである。創造すべきは、個人が自由になり成長し、憎悪や貪欲や妬み等のがないために、それらが死滅している社会である。これらのことを私は信じ、世界のあらゆる恐怖にもかわらず、世界は私を動揺させなかったたのである。（終）</p>			
<p>C2-01 ( 第三者 )</p>	<p>We had a dog, once, who went on walks with us and chased after rabbits, following his nose. We, who walked upright and used our eyes instead of our noses, would see a rabbit run across the path ahead of us, while Sherry, running along with his nose to the ground, saw nothing, until suddenly he came upon the delicious scent of rabbit in his path. Being a dog bred more for looks than intelligence, he often went off in the direction that the rabbit had come, rather than that in which it had gone. We watched this performance with lofty amusement, despising the poor dog for his stupidity and his inability to use his eyes as we did. But secretly I identified with the dog and felt sorry for him, the recipient of our scorn. He was not really stupid, only a dog, behaving as a dog behaves. That is what it was like, having Bertrand Russell for a father. [From: My Father Bertrand Russell, 1975, preface.] <a href="http://russell-j.com/cool/MFBR-PRE.HTM">http://russell-j.com/cool/MFBR-PRE.HTM</a></p>	<p>とりあえず 巻正平（訳） わたしたちは一度1匹のイヌを飼っていたことがあったが、そのイヌはわたしたちといっしょに散歩に出かけては、自分の鼻を頼りにウサギを追いかけたものだった。直立して歩き、鼻ではなく目を使うわたしたちは、前方の小道を横切って走るウサギを見たものだったが、地面に鼻をくっつけて走っているシェリーのほうは、通り道で突然ウサギのくさかな匂いにつぶかまるまでは、何一つ見えなかった。知能よりも見かけのために育てられているイヌはしばしば、ウサギが走り去った方向よりはむしろ、歩いてきた方向へ向えた。わたしたちは高慢にもその行動をおももしないが、そのあつたイヌは、その無能さと、わたしたちのように自分の目が見えないその無能さのゆえにさげすんだ。しかし、わたしはひそかにそのイヌに同情し、あざけりを受けているそのイヌを気の毒に思った。そのイヌはほんとうは愚かなのではなくて、ただふつうイヌが行動するように行動していたにすぎなかったたのである。 ハートランド・ラッセルを父に持つということは、いわばそんなふうであった。</p>			

c2-02	<p>Emotive conjugation (吉田さんご提案)</p> <p>From Wikipedia, the free encyclopedia</p> <p>In rhetoric, emotive or emotional conjugation mimics the form of a grammatical conjugation of an irregular verb to illustrate humans' tendency to describe their own behavior more charitably than the behavior of others.[1] It is often called the Russell conjugation in honour of philosopher Bertrand Russell who expounded the concept in 1948 on the BBC Radio programme The Brains Trust,[2] citing the examples:[3]</p> <p>I am firm, You are obstinate, He is a pig-headed fool.</p> <p>I am righteously indignant, you are annoyed, he is making a fuss over nothing.</p> <p>I have reconsidered the matter, you have changed your mind, he has gone back on his word.</p> <p>Used seriously, such loaded language[3] can lend false support to an argument by obscuring a fallacy of meaning. The inherent incongruity also lends itself to humor [4] as employed by Bernard Woolley in the BBC television series Yes, Minister and Yes, Prime Minister:[5][6]</p> <p>It's one of those irregular verbs, isn't it?</p> <p>I have an independent mind, You are eccentric, He is round the twist.[6]</p> <p>That's another of those irregular verbs, isn't it?</p> <p>I give confidential press briefings; you leak; he's being charged under section 2A of the Official Secrets Act.[7]</p> <p>References[edit]</p> <p>Jump up ^ Ralph Henry Johnson, J. Anthony Blair (2006). Logical self-defense. p. 160 "The Freeloading Term". ISBN 978-1-932716-18-4.</p> <p>Jump up ^ Robert Audi, ed. (1999). Cambridge Dictionary of Philosophy (2nd ed.). Cambridge University Press. p. 223. ISBN 978-0-521-63136-5</p> <p>^ Jump up to: a b Douglas N. Walton (2006). Fundamentals of critical argumentation. Cambridge University Press. p. 220. ISBN 978-0-521-82319-7.</p> <p>Jump up ^ Antony J. Chapman, Hugh C. Foot (1996). Humor and laughter: theory, research, and applications. p. 86. ISBN 978-1-56000-837-8.</p> <p>Jump up ^ Jonathan Lynn, Antony Jay (1984). The Complete Yes Minister. BBC Books. ISBN 0-563-20665-9.</p> <p>^ Jump up to: a b Yes, Prime Minister: The Bishop's Gambit</p> <p>Jump up ^ Yes, Prime Minister: Man Overboard</p>				
c2-03	<p>Some preliminary notes are necessary before beginning to discuss the development of Russell's ideas.</p> <p>I may often have occasion to write that his thoughts were impelled in a certain direction because of his desire to reach such-and-such a conclusion. This must never be taken as implying that this motive, consciously or unconsciously, affected the results of his thinking: the distinction must be kept absolutely clear cut throughout. It has already been pointed out that the general trend of this thought led to results directly opposite to those he hoped to reach; but the distinction also applies to other motives I may mention incidentally. There is a danger that, in tracing connections between Russell's ideas and those of his predecessors and contemporaries, an impression may be given that his thought was not so original as it was. This impression may also be fostered by his own over-generosity in acknowledging his debts to others; he once wrote that a philosopher who claimed priority for a discovery was descending to the level of a stockjobber.</p> <p>Russell probably read more widely than any other contemporary philosopher, with the possible exception of Whitehead. Some of his greatest contributions to philosophy arose through his ability to take a multitude of ideas from many sources and combine them into a fully-wrought system; in the same way that Newton's Principia brought together a number of fundamental concepts originated by Galileo. [^ Russell's remark (in conversation with Alan Wood) that he owed his achievements to 'pertinacity and obstinacy' can be compared with Newton's: 'I had no special sagacity - only the power of patient thought.'] But even when ideas were suggested in the first place by others, Russell wrote nothing which was not the product of his own mind. The most obvious evidence is in the number of cases (for instance, with neutral monism) where there was a long time-lag before he came to accept another philosopher's point of view.</p> <p>From: Russell's Philosophy: a Study of its Development, by Alan Wood. chap. II Cautionary Notes.</p> <p>http://russell-j.com/cool/547-ALAN02.HTM</p>	<p>ラッセルの思想の発展を論じ始める前に、いくつかの予備的注意(注釈)が必要である。</p> <p>ラッセルの思索が、これこれの結論に達したいという彼の欲求のために、ある方向に押し進められたと私は今後たびたび書くかも知れない。しかし、この動機が 産物的あるいは無意識的ラッセルの思索 ( 思考 ) の結果に影響した、ということの意味していること決してとられてはならない。(即ち)この区別は最初から最後まで、絶対的に明確に維持されなければならない。すでに(他の哲学者たちに)よって示されてきているようにラッセルの思想の一般的傾向は、彼が到達しようとして望んでいたものとは正反対の結果に導いたのである。だが、この区別が、私がこの時々に述べる、他の動機についてもあてはまる。</p> <p>ラッセルの考えと彼の先行者及び同時代人(の哲学者)の考えとの関係を追跡するとき、彼の思想が事実上そうであったよりも独自性の度合いが低いかな的印象が与えられる危険がある。この印象は、他人に(他人の業績に)負うところを認めるときの彼の過度の寛大さによっても、助長されるであろう。(たとえば、)彼は以前ある発見を他人よりも自分が先にしたと主張するような哲学者は、病室の水準にまで落ちた者だと書いた。</p> <p>ホワイトヘッドを別にしなければならないかもしれないが、ラッセルは、おそらく、同時代の他のいかなる哲学者よりも、幅広く本を読んだ人であろう。哲学に対する彼の最大の寄与のいくつかは、非常に多くの着想(アイデア)を多くの情報源(著作等)からとって来て、それらを十分に精製された一つの体系にまとめ上げるという能力から生れたものである。(たとえば)ニュートンのプリンキピアがガリレイに起源があるいくつかの根本概念をまとめたように、「ワット注」(ワットとの談話における)自分の業績は、根拠と執拗さから生まれたというラッセルの発言は、ニュートンの「私に特に賢明であったのではない。ただ辛抱強く考える力があつたのだ。」という言葉と比較できる)。しかしこれらのアイデアや思想が、他の人々によって提示された場合にでもラッセルは、自分自身の精神の産物として書かされたものであつたのである。その最も明白な証拠は、(たとえば)中性的一元論のように、他の哲学者の見地を彼が受け入れるまでの長い時間の遅れ(タイムラグ)があつた事例の数(の多さ)である。</p>			
D 三浦修論 D01	<p><b>該当するラッセルの原文</b></p> <p>The root of the matter is a very simple and old-fashioned thing, a thing so simple that I am almost ashamed to mention it, for fear of the derisive smile with which wise cynics will greet my words. The thing I mean - please forgive me for mentioning it - is love, Christian love, or compassion.</p> <p>From: The Impact of Science on Society. 1952. p.114 (= George Allen and Unwin ed.)</p>	<p><b>修論から抜粋</b></p> <p>問題の根本は、きわめて単純な、古風なことなのです。あまり単純なので、賢明な皮肉者たちが私の言葉を冷笑をもって迎へはしないかという懸念から、それを口にすることすら恥ずかしいほどなのです。私が言いたいことというのは、どうかこうういことを口にするを許してください。愛なのです - キリスト教的な愛ないし人間情なのです。</p> <p>(The Impact of Science on Society. 1952. p.114)</p> <p>「自叙伝」第二巻(一九六八)冒頭においてこう言っている、「私の人生は、一九一〇年の前と一九一四年の後とは、はっきり違つていた。それは、メフィストフェレスに会う前と会つた後のアファストの人生と同じであつた……」</p>	<p>三浦コメント最初の部分 ラッセルが恥ずかしがつたのはなぜなのか、それは微妙な個人心理の問題ではあるが、一定の事情を理解するのは難しいことではない。</p>	<p>三浦コメント ( full )</p>	
D02	<p>( 松下注 : うしろの方に省略されていないものが再引用されています。 )</p>				



★	D03	We went first to Kobe to visit Robert Young, the editor of the Japan Chronicle. As the boat approached the quay, we saw vast processions with banners marching along, and to the surprise of those who knew Japanese, some of the banners were expressing a welcome to me. It turned out that there was a great strike going on in the dockyards, and that the police would not tolerate processions except in honour of distinguished foreigners, so that this was their only way of making a demonstration. The strikers were being led by a Christian pacifist called Kagawa, who took me to strike meetings, at one of which I made a speech. From: The Autobiography of Bertrand Russell, vol.2 (1968), chap. 3: China. <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-130.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-130.HTM</a>	<p>ラッセルの日本に対する印象は従って初めから悪かった( 31 )。船が神戸に入港したときには、赤い幟をおしなした大行列が迎えてくるのが見え、横にはラッセルを歓迎する文句が書いてあるのがわかったが、ラッセルは殊更に次のように判断した。</p> <p>「それは、神戸の造船所で行なわれていた大きなストライキのデモだった。普通の外国人を歓迎する場合以外はそのような行進を警察が許さなかったために、私をダシに使うのが、示威行進をする唯一の方法であったということがわかったのである。」( Autobiography vol2, 1968, p134. )</p>			
	D04	We then fell into the hands of the enterprising editors of an up-to-date magazine called Kaizo, who conducted us around Kyoto and Tokyo, taking care always to let the journalists know when we were coming, so that we were perpetually pursued by flashlights and photographed even in our sleep. In both places they invited large numbers of professors to visit us. In both places we were treated with the utmost obsequiousness and dogged by police-spies. The room next to ours in the hotel would be occupied by a collection of policemen with a typewriter. The waiters treated us as if we were royalty, and walked backwards out of the room. We would say: 'Damn this waiter,' and immediately hear the police typewriter clicking. At the parties of professors which were given in our honour, as soon as I got into at all animated conversation with anyone, a flashlight photograph would be taken, with the result that the conversation was of course interrupted. From: The Autobiography of Bertrand Russell, vol.2 (1968), chap. 3: China. <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-130.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-130.HTM</a>	<p>私たちは始終フラッシュの光に追いつけられ、眠っている姿までも写真を撮られた。(中略)京都と東京の両方で私たちは、極端なへつらいのでもなしを受けたと同時に警察のスパイにたえず尾行された。ホテルでの私たちの隣の部屋はいつも、タイプライターを持った大勢の警察官に占領されていた。そうかと思うと、ホテルの給仕たちは、私たちをあたかも皇族のように取り扱い、部屋から出てゆくときにはあとすざりすざりという具合だった。私たちはよく、「この給仕めが!」( Damn this waiter. )と言ったものである。そうすると直ちに、警察官のタイプライターがカチカチ鳴り出すのだった。私たちのために催された教授たちとのパーティでは、私が誰かと少しでも活気のある会話に入るやいなやフラッシュをたいた写真を撮られるのが常で、その結果として、会話はもちろん中断されてしまうのだった。( ibid, p134 )</p>			
★	D05	We made a ten hours' journey in great heat from Kyoto to Yokohama. We arrived there just after dark, and were received by a series of magnesium explosions, each of which made Dora jump, and increased my fear of a miscarriage. I became blind with rage, the only time I have been so since I tried to strangle FitzGerald. I pursued the boys with the flashlights, but being lame, was unable to catch them, which was fortunate, as I should certainly have committed murder. An enterprising photographer succeeded in photographing me with my eyes blazing. I should not have known that I could have looked so completely insane. This photograph was my introduction to Tokyo. From: The Autobiography of Bertrand Russell, vol.2 (1968), chap. 3: China. <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-150.HTM</a>	<p>ラッセル自身は次のように書いている。</p> <p>私たちはつめかけた写真班が一斉にたくまげネシウムの爆発で迎えられた。一回爆発することにドーはとびあがった。そのために流産させられるのではなからうかという私の心配が大きくなった。(三浦注)ドーは中国でラッセルの子を産んでいて、それは我々を志すに激怒した。(中略)私はフラッシュライトを持っている写真班の連中をつままえようと追いつけが、びっこをひいていたためにつかまえられなかった。しかしそのために幸いした一種に殺人を犯しがねなかったからである。一人の冒険心のある写真班が私のそのときの写真を撮るのに成功したが、私の眼は憤りでキラキラ光っていた。私がそのように完全に狂気しみて見えるようになれるとは、この写真がなければついぞ知らなかったことである。この写真で私は東京に紹介された( 32 )。( Autobiography vol2, 1968, p135. )</p>			
	D06	We met only one Japanese whom we really liked, a Miss Ito. She was young and beautiful, and lived with a well-known anarchist, by whom she had a son. From: The Autobiography of Bertrand Russell, vol.2 (1968), chap. 3: China. <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-140.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-140.HTM</a>	<p>ラッセルが、自叙伝の中で名を挙げている日本人は、黄川豊彦 ( Kagawa ) と伊藤野枝 ( Miss Ito )、大杉栄 ( Ozuki ) の三人である。彼が「本当に好ましいと思ったたった一人の日本人」は、伊藤野枝であった。</p>			
	D07	I felt at that moment the same type of passion as must have been felt by Anglo-Indians during the Mutiny, or by white men surrounded by a rebel coloured population. I realized then that the desire to protect one's family from injury at the hands of an alien race is probably the wildest and most passionate feeling of which man is capable. My last experience of Japan was the publication in a patriotic journal of what purported to be my farewell message to the Japanese nation, urging them to be more chauvinistic. I had not sent either this or any other farewell message to that or any other newspaper. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 3: China, 1968. <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-150.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-150.HTM</a>	<p>ラッセル - 日本関係について一歩踏み込んだ興味を抱かせるのは、ラッセル自叙伝の先に引用した箇所のおそらく後に続く記述である。</p> <p>あの時の私の感情というものは、ミューティニーに際して、インド在住英国人たちが持ったに違いない感情。つまり有色人種の叛徒にとり囲まれたときの白人の感情。タイのものを除くならば、私の時分には、その手にかかって書を破ることから家族を護ろうとする願望は、おそらく、人間の持ちうる感情のうちでも最も激しく最も熱情的なものであろうと実感したのである。( ibid, p135. )</p>			
★	D08	The Chinese have (or had) a sense of humour which I found very congenial. Perhaps communism has killed it, but when I was there they constantly reminded me of the people in their ancient books. One hot day two fat middle-aged business men invited me to motor into the country to see a certain very famous half-ruined pagoda. When we reached it, I climbed the spiral staircase, expecting them to follow, but on arriving at the top I saw them still on the ground. I asked why they had not come up, and with portentous gravity they replied:  "We thought of coming up, and debated whether we should do so. Many weighty arguments were advanced on both sides, but at last there was one which decided us. The pagoda might crumble at any moment, and we felt that, if it did, it would be well there should be those who could bear witness as to how the philosopher died."  What they meant was that it was hot and they were fat. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 3: China, 1968. <a href="http://russell-j.com/beginner/AB23-080.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB23-080.HTM</a>	<p>ラッセルの次の悪い出で、彼の日本でのエピソードとの雰囲気と比較してみるとよい。</p> <p>二人の肥った中年の企業家が、大変有名な半ば廃墟となつたパゴダを見せ、田舎から有名なパゴダを見せようとしてくれた。到着すると、私は螺旋階段の上つていった。彼らも私のあとからついて来るとばかり思っていたのに、一番てっぺんに上りきつて下を見おろすと、彼らはまた地上に立っているのだった。どうして上つて来なかったかと尋ねると、彼らは恐ろしく厳粛な面持ちで答えたものである。「私たちは上つていこうと考えていました。そして、上つていくべきかどうか討論したのであります。意見は二つに分かれて、ともに有力な論議でした。しかし最後に、私たちの態度を決定した意見が出たのです。即ち、このパゴダはいつ崩れるかわからない状態だということです。それで、もし今崩れたら、この哲学者がどのようにして死んだかを証言できる者がいるのはまことにいいことだ、と私たちは考えたのです」(中略)多くの中国人が(このような)洗練されたユーモアを持っていた。( ibid, pp. 129-130 )</p>			
★	D09	Before going into the detail of Japan's policy towards China, it is necessary to put the reader on his guard against the habit of thinking of the "Yellow Races," as though China and Japan formed some kind of unity. There are, of course, reasons which, at first sight, would lead one to suppose that China and Japan could be taken in one group in comparison with the races of Europe and of Africa. To begin with, the Chinese and Japanese are both yellow, which points to ethnic affinities; but the political and cultural importance of ethnic affinities is very small. The Japanese assert that the hairy Ainus, who are low in the scale of barbarians, are a white race akin to ourselves. I never saw a hairy Ainu, and I suspect the Japanese of malice in urging us to admit the Ainus as poor relations; but even if they really are of Aryan descent, that does not prove that they have anything of the slightest importance in common with us as compared to what the Japanese and Chinese have in common with us. Similarity of culture is infinitely more important than a common racial origin. From: The Problem of China 1922, p117 (= George Allen and Unwin ed.)	<p>ここで当然われわれの念頭に浮かぶ黄禍論のような問題( 41 )に関して、ラッセルは次のようなことを言っている。これは「中国の問題」第七章、「第一次大戦前の日中関係」のはじめの部分である。</p> <p>中国に対する日本の政策の細目にふれる前に、「黄人 ( Yellow Races ) 」という枠の中であたかも中国と日本とがある種の単一性であるかのように考える読者の脚を否する必要がある。もちろん、見しるべき三つの民族とカアフリカ民族とが比較して、日本人と中国人とを一つのグループに入れるべき理由はある。なによりも、中国人も日本人もともに黄色人種であつて、それが種族的類似性を考えさせるのである。だが、種族的類似性は政治的文化的価値を基たさず、文化の類似性も、類似性は共通の民族的起源というよりも重なり知れぬほど重要である。( The Problem of China 1922, p117 )</p>			

★		D10	Japan, unlike China, is a religious country. The Chinese doubt a proposition until it is proved to be true; the Japanese believe until it is proved to be false. [From: The Problem of China 1922, p169 (= George Allen and Unwin ed.)]	「中国と違い、日本は宗教的な国である。中国人は証明されない限り人の言うことを信用しないが、日本人は確と証明されるまで信用する。」( ibid, p169 )			
★		D11	I spent the evening walking round the streets, especially in the neighbourhood of Trafalgar Square, noticing cheering crowds, and making myself sensitive to the emotions of passers-by. During this and the following days I discovered to my amazement that average men and women were delighted at the prospect of war. I had fondly imagined, what most pacifists contended, that wars were forced upon a reluctant population by despotic and Machievellian governments. I had noticed during previous years how carefully Sir Edward Grey lied in order to prevent the public from knowing the methods by which he was committing us to the support of France in the event of war. I naively imagined that when the public discovered how he had lied to them, they would be annoyed; instead of which, they were grateful to him for having spared them the moral responsibility. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-020.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-020.HTM</a>	しかし、真の意味でラッセルを象牙の塔から地上世界へと引きずりおろしたのは、やはり第一次大戦であった(『49』)。開戦前夜の模様を、彼はこう記している。  夕方、私は、ロンドンの街頭とくにトラファルガー広場の近辺をぐるぐる歩きまわった。そして歓呼している群衆を見、感嘆している通りすがりの人々の心の痛むのを考えた。この日も、終く何日にも、一般の人々が喜ぶ女も、競争が起り、そのなを喜んでうろつきしているのを私は見た。これは驚きだった。私はあさきながらも、ほとんどの平和主義者が論じていたように、競争というものは、尊厳なそして権謀術数に長けた政府によって、嫌がる民衆におしつけられるものだ、と想像していたのである。エドワード・グレイ卿は、競争が起こったらわれわれを競争に駆り立てようといそがに手を打っており、しかもそれを一般国民に気づかれないとして用意周到に嘘をついてきた。私はそれに何年も前から気づいていた。グレイ卿がいかに欺いてきたかを国民が知らずさぞかし激昂するだろうくらいに、単純に(グレイ卿に)想像していたのである。ところが怒るところが国民は、自分たちにも道義的責任の一端を担わせてくれた卿に感謝の意を表わしたのである。( Autobiography vol2, 1968, p16 )			
★		D12	The first days of the War were to me utterly amazing. My best friends, such as the Whiteheads, were savagely warlike. ... The prospect filled me with horror, but what filled me with even more horror was the fact that the anticipation of carnage was delightful to something like ninety per cent of the population. I became filled with despairing tenderness towards the young men who were to be slaughtered, and with rage against all the statesmen of Europe. For several weeks I felt that if I should happen to meet Asquith or Grey I should be unable to refrain from murder. Gradually however, these personal feelings disappeared. They were swallowed up by the magnitude of the tragedy, and by the realisation of the popular forces which the statesmen merely let loose. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968, pp. 16-17.] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-030.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-030.HTM</a>	ラッセルの当惑は、単に知的な不可解の念にとどまっていたのではない。  競争が始まった頃は、私には全く呆れることばかりであった。ホワイトヘッドのような親友たちさえ、野蛮なくらい好戦的だった。(中略)私は競争の惨禍を考えて、恐怖でいっぱいだった。しかしさらに大きな恐怖で私をみたしたのは、全国民の九〇パーセントほどのものが大衆として、中略)前には、虚驚されにくい若い人たちが可哀そうで、どうにもやり場のない気持ちに駆られた。そして、ヨーロッパの政治家への激しい憤怒に燃えた。数週間というもの私は、もしも偶然にアスキスやグレイに逢うようなことがあれば、殺さないではおられないだろうと想像していた(『50』)。しかしながら、こうした個人的感情も次第に消えていった。それは惨劇の大きさに呑み込まれ、政治家がただ解放しさえすればよい民衆の力を目のあたりにして圧倒されたのだった。( ibid, pp16-17 )			
		D13	By the intervention of Arthur Balfour, I was placed in the first division so that while in prison I was able to read and write as much as I liked, provided I did no pacifist propaganda. I found prison in many ways quite agreeable. I had no engagements, no difficult decisions to make, no fear of callers, no interruptions to my work. I read enormously; I wrote a book, Introduction to Mathematical Philosophy, a semi-popular version of The Principles of Mathematics, and began the work for Analysis of Mind.  From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-270.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-270.HTM</a>	しかし、ギルバート・マレーやアーサー・バルフォアの介入によって、第二部から第一部へと変更され、兄フランク(第二代伯爵)の工作で、ラッセルの独房には机、椅子、ベッド、絨毯などが備えつけられて、快適な環境を提供した。  獄中では私は、平和主義者の宣伝を行わない限り、自由に読んだり書いたりすることを許された。刑務所とは多くの面で結構なところだということがわかった。義務づけられた用務がない。法定でもねばらぬ難い問題がない。客室の心配がない。仕事を中断されることがない。私は莫大な量の本を読んだ。『数学の諸原理』の半ば一般向けの解説書である『数理哲学序説』を書きあげ、また『精神の分析』の書述に着手した。( Autobiography vol2, 1968, p34. )			
		D14	Lytton, who was too delicate to be sent to a conventional school, was seen by his mother to be brilliant, and was brought up to the career of a writer in an atmosphere of dedication. His writing appeared to me in those days hilariously amusing. I heard him read Eminent Victorians before it was published, and I read it again to myself in prison. It caused me to laugh so loud that the officer came round to my cell, saying I must remember that prison is a place of punishment. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1 , chap. 3:Cambridge, 1967] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB13-310.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB13-310.HTM</a>	ストレイチーは、その著作『ヴィクトリア朝の名士たち』を出版前に私に読み聞かせてくれた。その本を私は、彼らに再び自分に読み聞かした。それを読んで私があまり声高に笑ったので、典獄がそれを止めさせるためにやって来て、刑務所は刑罰の場所だということを忘れてはならないと言った。( Autobiography, vol1, 1967, p73*( 55 ). )			
★		D15	I was much cheered, on my arrival, by the warden at the gate, who had to take particulars about me. He asked my religion and I replied 'agnostic'. He asked how to spell it, and remarked with a sigh: 'Well, there are many religions, but I suppose they all worship the same God'. This remark kept me cheerful for about a week.  From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-270.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-270.HTM</a>	刑務所に到着すると、私の係になっている典獄が機嫌よく私を迎えてくれた。彼は私の宗教は何かと尋ねた。『不可知論(アガステック)』と私は答えた。彼はその言葉のスペルはどう綴るのかと聞き、ため息をついてこう言った。「やれやれ、たくさん宗教はあるが、わたしやみんなが同じ神様を拝んでると思うよ。」この言葉は約一週間のあいだ私の気分を快活にしてくれた。( Autobiography, vol2, 1968, p34 )			
		D16	At eleven o'clock, when the Armistice was announced, I was in Tottenham Court Road. Within two minutes everybody in all the shops and offices had come into the street. They commandeered the buses, and made them go where they liked. I saw a man and woman, complete strangers to each other, meet in the middle of the road and kiss as they passed. Late into the night I stayed alone in the streets, watching the temper of the crowd, as I had done in the August days four years before. The crowd was frivolous still, and had learned nothing during the period of horror, except to snatch at pleasure more recklessly than before. I felt strangely solitary amid the rejoicings, like a ghost dropped by accident from some other planet. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968, pp.37-38 (= Allen and Unwin ed.)] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB22-010.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB22-010.HTM</a>	ラッセルは五月初日に収監されて、九月十八日に釈放された。十一月十一日、終戦の発表のときの様子をラッセルはこう記している。  十一時に休戦が報道された。その時私は Tottenham Court 通りにいた。二分たつたかないうちにあらゆる商店や事務所の人たちが一人残らず街頭に出てきた。彼らは勝手にバスを占領して好きな方向へ走らせた。互いに全然見知らぬ男女が、道端の真ん中でそれちがいきまきスしあっている風景も見られた。夜遅くまで私は、ひとりて街頭に残って、四年前の八月の開戦の頃や知りそうしていたように群衆の心の動きを見まもっていた。群衆は依然としてうわづまっていた。以前にもましてがむしやりに快楽にとびつくだけで、恐怖の期間に向つてとして学びとってはいなかった。私は奇妙にも、そうした歓喜の中にあつて、或る他の惑星から何がはずみで落ちてきた幽霊でもであるかのような孤独感に襲われるのだった。私も喜んだことは事実である。が、私の喜びと群衆の喜びとの間には何ら共通なものを発見することはできなかった。( ibid, pp.37-38 )			

★		D17	<p>The first thought which naturally occurs to one who accepts this view is that it would be well if men were more under the dominion of reason. War, to those who see that it must necessarily do untold harm to all the combatants, seems a mere madness, a collective insanity in which all that has been known in time of peace is forgotten. If impulses were more controlled, if thought were less dominated by passion, men would guard their minds against the approaches of war fever, and disputes would be adjusted amicably. This is true, but it is not by itself sufficient. It is only those in whom the desire to think truly is itself passion who will find this desire adequate to control the passions of war. Only passion can control passion, and only a contrary impulse or desire can check impulse. Reason, as it is preached by traditional moralists, is too of negative, too little living, to make a good life. It is not by its own force that wars can be prevented, but by a positive life of impulses and passions antagonistic to those that lead to war. It is the life of impulse that needs to be changed, not only the life of conscious thought.</p> <p>From: Principles of Social Reconstruction, 1916, chap.1: the principles of growth  <a href="http://russell-j.com/coo/10T-0101.HTM">http://russell-j.com/coo/10T-0101.HTM</a></p>	<p>本書の意図するところは、人々の生活を形成するにあたって、意識的な目的よりは衝動的なものが、より大きな影響を及ぼすという信念に基いた、ある政治哲学を提示することにある。(Principles of Social Reconstruction, 1916, preface)</p> <p>これは、主知主義的思想家の終焉である。そしてこれは、思想のレベルはとまらない。「社会改造の諸原理」第一章冒頭近くには書いてある。</p> <p>諸衝動がより多く統御されたとし、思考が情熱に支配される度合いがより少なくなったとすれば、人々は戦争が近づくのに反対し、自らの精神を守りて、近隣諸国との紛争は協調裡に解決をみるであろう。それは事実だが、しかしそれだけで十分ではない。正しく思考しようとする欲望がそれ自体一つの情熱となっている人々だけがある。その欲望に戦争の情熱を統御するだけの力があることを見出すのである。情熱のみが情熱を統御できるのであり(中略)、伝統的なモリス主義者たちが説いた形での理性は、よき生活を作り出すにはあまりに消極的で、あまりに生気を欠いている。戦争を阻止しようのは、理性のみによるものではなく、戦争をもたらず衝動や情熱に反するような衝動・情熱のある積極的な生活によってなのである。(ibid, p11)</p>	
★		D18	<p>Throughout my life I have longed to feel that oneness with large bodies of human beings that is experienced by the members of enthusiastic crowds. The longing has often been strong enough to lead me into self-deception. I have imagined myself in turn a Liberal, a Socialist, or a Pacifist, but I have never been any of these things, in any profound sense. Always the sceptical intellect, when I have most wished it silent, has whispered doubts to me, has cut me off from the facile enthusiasms of others, and has transported me into a desolate solitude.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1:The First War, 1968, pp.37-38.(= Allen and Unwin ed.)  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB21-320.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB21-320.HTM</a>]</p>	<p>これは、大戦中のラッセル自身の行動の原理を端的に表わしている。言わば、一國の情熱的行動人屋生の告知である。戦争に賛成し、完全な自己犠牲を要するラッセルのシレシマがあった。例えば、注目すべきは、124-125ページに引用した大戦終結時の部分に続く次の記述である。</p> <p>私は生涯を通じて、熱狂的な群衆と一体だという感情を持ちたいと切望してきた。(中略)私は自分自身のことを、順番に、自由党員である・社会党員である・平和党員であると想像してきたが、私は深い意味においては決してそのようなものにはななかった。常に確固的な知性で、それに沈黙を守ってほしいと最も望んでいる時に、私に囁きかけ嫉妬を吹きこみ、他の人々の安易な熱狂から私を引き離し、孤独の寂寥に送りこんだのである。大戦中ユニーカー教徒や無抵抗主義者や社会主義者たちと一緒に行動していたとき(中略)私はユニーカー教徒たちには歴史上の多くの戦争が正当であったという考えを述べたものだし、社会主義者には自分は国家の専制を恐れているということを述べたものだった。彼らはいつも私を愛な目で見、私の援助を受け続けながらも結局私のことを彼らの仲間ではないと見なしていたものである。(Autobiography, vol2, 1968, p38.)</p>	
		D19	<p>Judge Ben B. Lindsey who was for many years in charge of the juvenile court at Denver and in that position had unrivaled opportunities for ascertaining the facts proposed a new institution which he calls 'companionate marriage'. Unfortunately he has lost his official position for when it became known that he used it rather to promote the happiness of the young than to give them a consciousness of sin Ku Klux Klan and the Catholics combined to oust him.</p> <p>Nevertheless, Judge Lindsey's proposals were received with a howl of horror by all middle-aged persons and all newspapers throughout the length and breadth of America. It was said that he was attacking the sanctity of the home; it was said that in tolerating marriages not intended to lead at once to children he was opening the floodgates to legalised lust; it was said that he enormously exaggerated the prevalence of extra-marital sexual relations, that he was slandering pure American womanhood, and that most business men remained cheerfully continent up to the age of thirty or thirty-five. All these things were said, and I try to think that among those who said them were some who believed them. I listened to many invectives against Judge Lindsey, but I came away with the impression that the arguments which were regarded as decisive were two. First, that Judge Lindsey's proposals would not have been approved by Christ and second, that they were not approved by even the more liberal of American divines. The second of these arguments appeared to be considered the more weighty, and indeed rightly, since the other is purely hypothetical, and incapable of being substantiated. I never heard any person advance any argument even pretending to show that Judge Lindsey's proposals would diminish human happiness.</p> <p>Since shortly before April, 1963, more and more of my time and thought has been absorbed by the war being waged in Vietnam. My other interests have had to go by the board for the most part. Some of my time, of course, is spent on family and private affairs. And once in a blue moon I have a chance to give my mind to the sort of thing I used to be interested in, philosophical or, especially, logical problems. But I am rusty in such work and rather shy of it. In 1965, a young mathematician, G. Spencer Brown, pressed me to go over his work since, he said, he could find no one else who he thought could understand it. As I thought well of what little of his work I had previously seen, and since I feel great sympathy for those who are trying to gain attention for their fresh and unknown work against the odds of established indifference, I agreed to discuss it with him. But as the time drew near for his arrival, I became convinced that I should be quite unable to cope with it and with his new system of notation. I was filled with dread. But when he came and I heard his explanations, I found that I could get into step again and follow his work. I greatly enjoyed those few days, especially as his work was both original and, it seemed to me, excellent.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap4:The Foundation,(1969)  <a href="http://russell-j.com/beginner/AB34-210.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB34-210.HTM</a></p>	<p>ベン・B・リンゼー判事は(中略)彼が「友愛結婚(=61) (companionate marriage)」と呼ぶ新しい制度を提唱した、不幸にも彼はその議論を押し退けし、なぜなら、彼が若者たちに罪の意識を与えよりむしろ彼らの幸福を増進させようとしてその考えを提唱したのだということがばれたとき、KKK団とカトリック教徒が一緒になって彼を追い出しにかかったからである。(中略)リンゼー判事の提案は、アメリカを通じてあらゆる中年層の人々や新聞から轟轟たる非難を浴びせかけられた。曰く、彼は家庭の神聖をおかすものである。曰く、彼は(中略)性欲の水門を開くものである。曰く(中略)純粋のアメリカ女性気質(かたぎ)を傷つけるものである。仕事を怠らなさい。17歳から三十五歳くらいまでは禁欲生活を続けつつ眺らかていられるものだとも言われた。(中略)決定的な議論としては、まず、リンゼー判事の提案はキリストの真実し給わぬものであるということ、それから、アメリカの最もリベラルな聖職者によってすら賛成されていないということである。(中略)また、リンゼー判事の提案が人間の幸福を増進するものだとすることを示そうとする議論だけでは、お目にかかることができなかった。(Marriage and Morals, 1929, pp.129-132)</p>	
		D20		<p>このように肩書によって大ざっぱに区別してみると、ラッセルは晩年に向って、1から次第に2-色の世界へと移行してゆくということがはっきりするだろう。ラッセル九十三歳のときのエピソードなどは、このことの象徴的な現われである。</p> <p>……私の時間および思考が、ベトナムで行なわれつつある戦争に奪い取られることがますます多くなってきた。その他のことへの関心は大部分がふり落されたことになった。(中略)一九六五年、若い数学者のG・スペンサー・ブラウンが自分の研究をどうしてもほめてほしいと頼んできた。わかってくれる人は他に一人もいないと考えるからだと彼は言うのであった。(中略)私は、それについて彼と論じあつてを承諾した。けれども、彼がやって来る時間が近づいてくるにつれて、私は、彼の研究に面と対して、その新しいシステムの記法をうまくこなすことがうていできまいと確信するようになった。私の心は恐ろしさでいっぱいになった。しかし彼がやって来て、彼の説明を聞いたとき、私は自分がかう一度数学へ入り彼の研究をわかるとあることができた、ということを知った。私はその数日間というもの大いに楽しかった。とくに彼の研究は独創的であった。また大変優れたもののように思われたのだ。(Autobiography, vol3, 1969, p166)</p>	

★	D21	<p>Three passions, simple but overwhelmingly strong, have governed my life: the longing for love, the search for knowledge, and unbearable pity for the suffering of mankind. These passions, like great winds, have blown me hither and thither, in a wayward course, over a deep ocean of anguish, reaching to the very verge of despair.</p> <p>I have sought love, first, because it brings ecstasy - ecstasy so great that I would often have sacrificed all the rest of life for a few hours of this joy. I have sought it, next, because it relieves loneliness - that terrible loneliness in which one shivering consciousness looks over the rim of the world into the cold unfathomable lifeless abyss. I have sought it, finally, because in the union of love I have seen, in a mystic miniature, the prefiguring vision of the heaven that saints and poets have imagined. This is what I sought and though it might seem too good for human life, this is what - at last - I have found.</p> <p>With equal passion I have sought knowledge. I have wished to understand the hearts of men. I have wished to know why the stars shine. And I have tried to apprehend the Pythagorean power by which number holds sway above the flux. A little of this, but not much, I have achieved.</p> <p>Love and knowledge, so far as they were possible, led upward toward the heavens. But always pity brought me back to earth. Echoes of cries of pain reverberate in my heart. Childen in famine, victims tortured by oppressors, helpless old people a hatred burden to their sons, and the whole world of loneliness, poverty, and pain make a mockery of what human life should be. I long to alleviate the evil, but I cannot, and I too suffer.</p> <p>This has been my life. I have found it worth living, and would gladly live it again if the chance were offered me.</p> <p>(From: The Autobiography of B. Russell, v.1, Prologue)  <a href="http://russell-j.com/PROLOGUE1.HTM">http://russell-j.com/PROLOGUE1.HTM</a></p>	<p>晩年・死んだ機知の時期も終りの方、死の三年前公刊された自叙伝第一巻「まえがき」にラッセルはこう書いたのだった（冒頭のパラグラフは有名な文句である）、</p> <p>三つの情熱、単純ではあるが圧倒的に強い三つの情熱が私の人生を支配してきた - それは、愛への熱望、知識の探究、そして人類の苦悩に対する耐えがたい憐憫の情である。これらの情熱が、大風のように私をここかしこへと吹き飛ばした。思いもよらぬ方角へと、深い苦悶の大海を越え、絶望の岸へ吹き寄せた。</p> <p>私は最初、愛を求めた。それは陶酔をもたらすがゆえにである。（中略）次に愛を求めたのは、それが寂寥を消えてくれるからだった。（中略）最後に私に愛を求めたのは、愛の結合において、聖人や詩人たちが想像してきたような天国の予示的ヴィジョンを、神秘的縮図のうちに私は見たからであった。（中略）</p> <p>それと同様の情熱をもって私は知識を探究した。私は人類の心を理解したいと願ってきた。（中略）数百年の流転を支配するといつピタゴラス学説の威力を理解すべく努力した。その樂がを、ほんの少しであるけれども、私はなし遂げた。</p> <p>愛と知識とは、その可能なる限りにおいて、高く天上に達した。しかし憐憫の情が私を地上に引きもどした。人々の苦悶の叫びが反響し私の胸にひびくのである。（中略）私は社会悪を減らしたいと切望する。だが私にはできない。それで私もまた苦悶する。これが今までの私の人生である。（後略）（Autobiography vol.1, 1967, Prologue）</p>		
	D22	<p>In every country of the world, children are taught that their country is the best, and in every country except one this proposition is false. ...</p> <p>The idea that what is taught to children should, if possible, be true is, I know, very subversive, and in some of its applications even illegal. But I cannot resist the conviction that instruction is better when it teaches truth than when it teaches falsehood.</p> <p>[From: Education and the Social Order, 1932, chap. : Patriotism in Education, pp.139-140.]</p>	<p>&lt; 善徳としての論理 &gt; に関わって真に重要なのは、前に分析した Q・R などの論理機構をそのまま内蔵している次のような文章であろう。</p> <p>この世界の全ての国において、子どもたちは自分の国が最良の国だと教えられる。しかし、この命題は、ある一国を除いては偽りである。（中略）子どもたちに教えられることは、できることなら真実のことでなければならぬという理念は、非常に破壊的なものである。その適用は双方の如何によっては非法的なものになるということは察せられる。しかし私は、嘘を教えるときよりは真実を教えるときの方が教育活動はよいものであるという確信をおさえることができない。（Education and the Social Order, 1932, pp.139-40）</p>		
	D23	<p>I wish to propose for the reader's favourable consideration a doctrine which may, I fear, appear wildly paradoxical and subversive. The doctrine in question is this: that it is undesirable to believe a proposition when there is no ground whatever for supposing it true. I must, of course, admit that if such an opinion became common it would completely transform our social life and our political system; since both are at present faultless, this must weigh against it. I am also aware (what is more serious) that it would tend to diminish the incomes of clairvoyants, bookmakers, bishops, and others who live on the irrational hopes of those who have done nothing to deserve good fortune here or hereafter. In spite of these grave arguments, I maintain that a case can be made out of my paradox, and I shall try to set it forth.</p> <p>[From: Sceptical Essays, 1928, Introduction: On the Value of Scepticism]</p>	<p>『懐疑論集』（一九二八）の冒頭の文はこうである、</p> <p>私は、ひよっとすると途方もなく逆説的で破壊的にみえるかもしれない一つの説を提出して読者の好意ある審議をわずらわしたいのである。問題の説というのは、こうである。「ある命題が真実であると考えるべき何の根拠も存在しない場合、その命題を信ずることは、望ましくない。」もちろん私としても、このような意見が一般に抱かれるようになるなら、そのために私たちの社会生活や政治体制が完全に変わってしまうだろうということは認めなくてはならない。私たちの社会生活も政治体制も、現在のところ非の打ちどころがないから、この意見はなかなか尊重されずに通らない。（Sceptical Essays, 1928.）</p>		
	d25	<p>In practice, as opposed to philosophy, we only apply the words "true" and "false" to statements which we have heard or read or considered before we possessed the evidence that would enable us to decide which of the two words was applicable</p> <p>Some one tells us that Manx cats have no tails, but as he has previously told you that Manx men have three legs, you do not believe him. When he shows you his Manx cat you exclaim, "so what you said was true!"</p> <p>The newspapers, at one time, said that I was dead, but after carefully examining the evidence I came to the conclusion that the statement was false. When the statement comes first and the evidence afterwards, there is a process called "verification", which involves confrontation of the statement with the evidence.</p> <p>[From: An Inquiry into Meaning and Truth, 1940, chap.5 : logical words, p.79]</p>	<p>あるいはさらに興味深いのは、専門的な理論哲学の著作にまで同種の機知が忍びこんでいることだ。例えば、後期の作『意味と真理の探究』（一九四〇）の中の「論理語」の章には次のような一節がある、</p> <p>哲学の場合と違って、実生活においては、「真」「偽」という語は、そのいずれの語を適用すべきかを決定するための証拠をわれわれが手に入れるより前に聞いたり・読んだり・考えたりした陳述だけに適用される。（中略）いつだってが新聞に「ラッセルは死した」ということが載っていたが、私は、証拠を注意深く調べてみたあとで、その陳述は偽であるという結論に達したものである。陳述が先にきて証拠が後になる場合、そこには、陳述を証拠と対決させることを必要とする「検証」と呼ばれる過程がある。（An Inquiry into Meaning and Truth, 1940, p79）</p>		
	D26	<p>日高武夫がラッセルから聞いた話として日高一編『人間ハートランド・ラッセル』に引用されているものですが、同様の趣旨を述べている著書から、以下抜粋しておきます。</p> <p>An extraordinarily interesting case which illustrates the power of the Establishment, at any rate in America, is that of Claude Eatherly, who gave the signal for the dropping of the bomb at Hiroshima. His case also illustrates that in the modern world it often happens that only by breaking the law can a man escape from committing atrocious crimes. He was not told what the bomb would do and was utterly horrified when he discovered the consequences of his act. He devoted himself throughout many years to various kinds of civil disobedience with a view to calling attention to the atrocity of nuclear weapons and to expiating the sense of guilt which, if he did not act, would weigh him down.</p> <p>From: Has Man a Future? chap.4: Liberty or Death.  <a href="http://russell-j.com/cool/58T-0401.HTM">http://russell-j.com/cool/58T-0401.HTM</a></p>	<p>政府の核政策に抗議し国防省玄関前に坐り込んで逮捕・投獄された八十九歳のラッセルは、自らがそれほどの「罪人」たるを示すことによって、政府の悪を逆説的に世人に訴えようとしたのだ。尖鋭化した&lt; 善徳としての論理 &gt; のこの上なく直接的な表現が、出獄直後の次の言葉である、</p> <p>「現在の世界では、法律を破ることによってのみ、凶暴な罪を犯すことから免れることができる（(74) ）」</p>		

	D27	<p>It would now be technically possible to unify the world and abolish war altogether. It would also be technically possible to abolish poverty completely. These things would be done if men desired their own happiness more than the misery of their enemies. There were, in the past, physical obstacles to human well-being. The only obstacles now are in the soul of men. Hatred, folly and mistaken beliefs alone stand between us and the millennium.</p> <p>From: Portraits from Memory and Other Essays, 1956, chap. 4: From Logic to Politics, p.39. http://russell-j.com/beginner/SHODA-02.HTM</p>	<p>後の章の主題を先取りすることになるが、ここで、「啓蒙された利己心 (enlightened self interest)」と呼ばれるラッセルの状況的意欲を例示してもよからうと思う。</p> <p>現在では、世界を統一して戦争を全く廃棄してしまうことが、技術的に言うて可能だろう。貧困を一掃してしまうことも、技術的に言うて可能だろう。これらのことは、人間が敵の世よりも自分の世の幸福を望むことに実現されるであろう。過去においては、人間の福祉に対する物理的障害があった。現在では、障害は人間の魂の中にある。憎悪、愚行、間違った信念のみが、われわれと至福千年期とを隔てている。(Portraits from Memory, 1956, p39) (傍点三浦)</p>			
★	D28	<p>Since the nuclear stalemate became apparent, the governments of East and West have adopted the policy which Mr. Dulles calls "brinkmanship." This is a policy adapted from a sport which I am told, is practiced by some youthful degenerates. This sport is called "Chicken!" It is played by choosing a long straight road with a white line down the middle and starting two very fast cars towards each other from opposite ends. Each car is expected to keep the wheels of one side on the white line. As they approach each other, mutual destruction becomes more and more imminent. If one of them swerves from the white line before the other, the other, as he passes, shouts "Chicken!" and the one who has swerved becomes an object of contempt. "As played by irresponsible boys, this game is considered decadent and immoral, though only the lives of the players are risked. But when the game is played by eminent statesmen, who risk not only their own lives but those of many hundreds of millions of human beings, it is thought on both sides that the statesmen on one side are displaying a high degree of wisdom and courage, and only the statesmen on the other side are reprehensible. This, of course, is absurd. Both are to blame for playing such an incredibly dangerous game. The game may be played without misfortune a few times, but sooner or later it will come to be felt that loss of face is more dreadful than nuclear annihilation. The moment will come when neither side can face the derivative cry of "Chicken!" from the other side. When that moment comes, the statesmen of both sides will plunge the world into destruction."</p> <p>From: Common Sense and Nuclear Warfare, 1959, chap. 3: Methods of Setting Dispute in the Nuclear Age.</p>	<p>そして、水爆は、事態をさらに複雑にしてしまったのだ。右の引用の数年後にラッセルは書いていた。</p> <p>核問題の手づまり状態が明らかになって以来、東西両陣営の政府は、ダレス氏の言わゆる「瀬戸際政策」を採用してきた。これは、聞くところでは、アメリカの大金持ちの息子たちによって行なわれるスポーツからとって、また政策だという。そのスポーツは「Chicken!」(「いくしなし!」)と呼ばれる。長い直線道路を選び、中央にずたと白線を引いておいて、二台の自動車を両端から向きあいに、猛スピードで発進させるといふ遊びである。どちらの車も、片側の車輪がその白線の上を走り続けるように期待されている。二台が互いに接近すると、共倒れとなる破壊の危険はいよいよ迫迫して来る。もう一方の車方より先に白線から逸れると、相手の方はすれ違つたときに「チキン!」と叫び、逸れた方は軽蔑の種になるといふ寸法である。いい加減な少年たちの遊びとして、このゲームは、危険に隣接しているのはやまである連中のためだけに、いさ、頻りにその危険を考慮して行なわれている。ところが、そのゲームをやるのが著名な政治家たちで、彼らが自分たちの生命だけでなく何億という人間の生命を賭けると、どちらの陣営でも、自分たちの陣営の政治家は高度の知恵と勇気を発揮しているのだから、相手の陣営の政治家が付けかからんのだと思われているのだ。中略、このゲームは、一度は不幸を起さず済むに済むかもしれないが、早晩、面目を失ふことの方が核による全滅より恐ろしいと感ぜられるようにもなる。どちらの陣営も相手の陣営から「チキン!」と叫びの叫びを浴びせられることにならない。そういう刹那が訪れるであろう。(Common Sense and Nuclear Warfare, 1959, p30)</p>			
	D29	<p>I have devoted the first eighty years of my life to philosophy. I propose to devote the next eighty years to another branch of fiction.</p> <p>From: Alan Wood: Bertrand Russell The Passionate, George Allen and Unwin Ltd., 1957, p.235.</p>	<p>最初の小説集『郊外の悪魔』(一九五三)刊行のとき、ラッセルは上機嫌で口上を述べた。</p> <p>「私は生涯のはじめの八十年を哲学に捧げた。今度は次の八十年を小説というもう一つの分野に捧げようと思う((78))。〇年に革命ロシアを視察してその独裁的性格に幻滅を感じていたラッセルは、ソビエトを半ばナチスと同視し、スターリンが核兵器を所有するようになる事態を恐れた。彼の焦りは次のような文章に表われている。</p>			
	D30	<p>引用文は "Humanity's Last Chance" というタイトルで Cavalcade に収録されたのですが Bertrand Russell's America; His transatlantic travels and writings, v.2:1945-1970、p.312 に "What American Could Do With the Atomic Bomb" というタイトルで再録されています。</p> <p>I should, for my part, prefer all the chaos and destruction of a war conducted by means of the atomic bomb to the universal domination of a government having the evil characteristics of the Nazis.</p>	<p>私としては、ナチスが持っていた邪悪な性質を有する政府によって世界が支配されるよりは、むしろ、原子爆弾を用いた戦争によってもたらされる混乱と破壊のほうを選びたい。(「(82)」)(Cavalcade, 20 Oct. 1945, cit. from Ronald W. Clark, The Life of Bertrand Russell, (401) p.520.)</p>			
	D31	<p>I think I was mistaken in being surprised that my lectures were liked by the audience. Almost any young academic audience is liberal and likes to hear liberal and even quasi-revolutionary opinions expressed by someone in authority. They like, also any libe at any received opinion, whether orthodox or not: for instance, I spent some time making fun of Aristotle for saying that the bite of the shrewmouse is dangerous to a horse, especially if the shrewmouse is pregnant. My audience was irreverent and so was I. I think this was the main basis of their liking of my lectures. My unorthodoxy was not confined to politics. My trouble in New York in 1940 on sexual morals had blown over but had left in any audience of mine an expectation that they would hear something that the old and orthodox would consider shocking. There were plenty of such items in my discussion of scientific breeding. Generally, I had the pleasant experience of being applauded on the very same remarks which had caused me to be ostracized on the earlier occasion.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap. 1: Return to England,(1969) http://russell-j.com/beginner/AB31-220.HTM</p>	<p>そして彼は、イギリス政府の依頼をうけて、封鎖下のベルリンやルウェーその他海外各地で対ソ対決を説く講演をして歩くようになった。オーストラリアへの招待もこの頃である。その頃のアメリカ講演(一九五〇)の模様をラッセルはこう書いている。</p> <p>ほんのわずが前にひどい悪罵を浴びせかけられていたニューヨーク(「(62)」)で、私の講演が人気を博し、大衆をひきつけたには驚いた。おそらく、最初の講演だけなら別に驚くほどのこともなかったであろう。つまり、聴衆が、あれほど世を騒がせた思わしい人物を一目見ようとして、ショックとスキャンダルと満場の反響を期待しつつ集まってきたものようだったから。ところが私が私を騒がせたのは、講義が日を重ねるにつれて熱心な学生がだんだん数を増え集まり、講義がいついばいになってしまふことだった。その数があまりに多く、聴講に来た群衆が立錫の余地のないのを見て帰らざるをえなくなるほどだった。これは主催者にとっても驚きであつたろうと思ふ。(中略)したいたいらしては、以前ニューヨークの事件で非難排斥される結果となつたあの時の話と全く同じことを言つて、それで大いに拍手喝采を博するという愉快な経験をしたのである。(Autobiography vol3, 1969, pp.28-30)</p>			
★	D32	<p>1950, beginning with the OM and ending with the Nobel Prize, seems to have marked the apogee of my respectability. It is true that I began to feel slightly uneasy, fearing that this might mean the onset of blind orthodoxy. I have always held that no one can be respectable without being wicked, but so blunted was my moral sense that I could not see in what way I had sinned. Honours and increased income which began with the sales of my History of Western Philosophy gave me a feeling of freedom and assurance that let me expend all my energies upon what I wanted to do. I got through an immense amount of work and felt, in consequence, optimistic and full of zest. I suspected that I had too much emphasised, hitherto, the darker possibilities threatening mankind and that it was time to write a book in which the happier issues of current disputes were brought into relief. I called this book New Hopes for a Changing World and deliberately, wherever there were two possibilities, I emphasised that it might be the happier one which would be realised.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, 1969 http://russell-j.com/beginner/AB31-240.HTM</p>	<p>しかし、主要な背景はもちろん、西側のもっと実地的な政治的な要因である。ラッセルは、漠然とだが、次のように書く、</p> <p>メリット勲章に始まりノーベル賞で終つた一九五〇年という年は、私の社会的榮譽(リスベクタビリティ)の最高頂を印した年であつたように思われる。このことが、盲目的な一般慣行に従つようになる始まりを意味するのはあるまいかと考えて、些か不安を感じはじめたことは確かである。私は常に、開明がことをしないうで社会的榮譽を勝ち得るなどといふことはあり得ないと考えていた。が、私の道徳感覚があまりに鈍感のために、自分ごんごんことで罪を犯したのかわからなかった。(ibid, p31)</p> <p>彼はよく友人にも語つた、「今までえらい(リスベクタブル)人というのはみんな悪漢だと思つてきたので、この頃は毎朝自分の顔をこわこわ見て、悪漢の相が出てきたかどうか確かめることになっている(「(93)」。)」</p>			

		D33	<p>I do not agree with those who object to the manufacture of the hydrogen bomb. ... The next war, if it comes, will be the greatest disaster that will have befallen the human race up to that moment. I can think of only one greater disaster: the extension of the Kremlin's power over the whole world. From: World Horizon, Mar. 1950.</p>	<p>しかし、一九五〇年という年はすでに、前年七月のソ連の原爆実験成功によってアメリカの原爆独占は終りを告げ必然である。ラッセルの論議は方々で自由放送での「人類の危機」(Man's Peril)と題した講演で初めて明確に、ラッセルは戦後の絶対平和主義者として大衆の前に立ち現われたのである。彼は叫んだ、</p> <p>「私は水爆の製造に反対する人々に賛成できない。(中略)次の戦争が勃発すれば、人類は上がってないほどの災厄をもたらすだろう。だがそれ以上の災厄がただ一つ考えられる。全世界にわたるクレムリンの勢力の拡大である(195)。」</p> <p>まだアメリカの迅速な勝利の希望はあった。民主主義の未来は西側の勝利にしか道は開かれていないと彼は焦ったのである。</p>			
		D34	<p>I AM speaking on this occasion not as a Briton, not as a European, not as a member of a Western democracy but as a human being, a member of the species 'Man' ... 全文(長文)は以下にあります。 <a href="http://russell-j.com/MansPeril.htm">http://russell-j.com/MansPeril.htm</a></p> <p>I am speaking on this occasion not as a Briton, not as a European, not as a member of a Western democracy but as a human being, a member of the species 'Man', whose continued existence is in doubt. The world is full of conflicts: Jews and Arabs; Indians and Pakistanis; white men and Negroes in Africa, and, overshadowing all minor conflicts, the titanic struggle between Communism and anti-Communism.</p>	<p>一九五三年三月にスターリング死後と、残虐なソビエトという彼の認識はさらに改まる。そして突如、一九五四年十二月、ヒコ二爆実験の九月後、BBC放送での「人類の危機」(Man's Peril)と題した講演で初めて明確に、ラッセルは戦後の絶対平和主義者として大衆の前に立ち現われたのである。彼は叫んだ、</p> <p>私はこの機会に英国人、ヨーロッパ人、西欧民主主義の一員としてでなく、人間として、存続し続けるのが疑わしい人類の一員として語ろう。(中略)私は特に一つのグループに訴えるつもりはない、全てのグループが同様に危機下にあり、その危機が理解されれば、ともにそれを避ける望みがある。(中略)ヒコ二爆実験以来、水素爆弾は想像されていたよりも速かに広い地域にわたり徐々に破壊を及ぼせることができるということが知られた。(中略)このような爆弾は、地上近くあるいは水中で爆発すると、放射能を帯びた粒子を上空に送り、それは次第に降下して、死の灰や雨の形で地表を覆う。アメリカの専門家が危険地帯と信じていた区域外にいたにもかかわらず日本人漁夫および彼らの魚を汚染したのは、この死の灰であった。(中略)厳然たる、恐ろしい、避けがたい問題は、人類に終止符を打つかそれとも戦争を拒否するかということだ。(中略)対立は戦争によって激化を遂げることはできない。中略)対立は避けられ、喧嘩が忘れられないからといって死を選ぼうとするのだろうか。私は、人間に対し一人の人間として訴える。あなた方の人間性を想起せよ。他のことは忘れよ。あなた方がここでできるのは、新しい死因を回避し、避けられないままに、あなた方の未来には全世界の死以外の何も存在しないだろう。(Portraits from Memory 1956, pp.215-220)</p>			
		D35	<p>But whenever the question of peace or war is relevant, the merits of either side become insignificant in comparison with the importance of peace. In the nuclear age, the human race cannot survive without peace. For this reason, I shall always side with the more peaceful party in any dispute between powerful nations. It has happened that in both the disputes with which this book is concerned, the Communist side has been the less bellicose, but it cannot be said that this is always the case. And, where it is not, my sympathies are anti-Communist. From: Unarmed Victory, chap.1: The International Background, pp.16-17. <a href="http://www.spokesmanbooks.com/Spokesman/PDF/117Russell.pdf">http://www.spokesmanbooks.com/Spokesman/PDF/117Russell.pdf</a></p>	<p>キューバ危機の直後に書かれた『武装なき勝利』(一九六三)には、この優越観念が実際問題にどう関与するかが端的に例解されている。</p> <p>この特定の危機について、私の見解は反米的であった。このことは、共産主義に一般に大敵意があるが、一つの特異な文脈のもとでの政治家の行動およびその行動が核戦争という最大の危機に対してもつ関係にのみ、関わるものだった。(Unarmed Victory 1963, p.33)</p> <p>平和が戦争の問題が関連する場合は常に、東西いずれの主義の長所も、平和の重要性に比較すれば不足な事柄となる。(中略)私は常に、より平和的な側に味方するであろう。この本がとりあげる二つの紛争(注・キューバ危機と中印国境紛争)において、共産側が相手側より非対称的であった。が、常にそうは限らない。そして、そうでない場合には、私は反共産側に共感を抱く。(ibid, pp.16-17)</p>			
		D36	<p>This is such a different world from that of Victorian optimism that it is not altogether easy for a man who grew up in the one age to adjust himself to the other. From: Portraits from Memory and Other Essays, 1956, chap. 6: Hopes: Realized and Disappointed <a href="http://archive.org/stream/portraitsfrommem005918mbp/portraitsfrommem005918mbp_djvu.txt">http://archive.org/stream/portraitsfrommem005918mbp/portraitsfrommem005918mbp_djvu.txt</a></p>	<p>自己と他者とを同時に否定し肯定してそれによって外界との弁証法的感応を自然開きもしたく背徳としての論議が失われたことは、ラッセルの次のような感嘆の原因でもあり、結果でもある。</p> <p>この世界は、ヴィクトリア朝の楽天主義の世界からはあまりにもかけ離れた世界なことを考えるような広いものな人間にとって、他方の時代に自分を適合させることは全く容易なことではない。(Portraits from Memory 1956, p.47)</p>			
★		D37	<p>One is frequently assured by men who have no doubt of their own wisdom that old age should bring serenity and a larger vision in which seeming evils are viewed as means to ultimate good. I cannot accept any such view. Serenity, in the present world, can only be achieved through blindness or brutality. Unlike what is conventionally expected, I become more and more of a rebel. I was not born rebellious. Until 1914 I fitted more or less comfortably into the world as I found it. There were evils -- great evils -- but there was reason to think that they would grow less. Without having the temperament of a rebel, the course of events has made me gradually less and less able to acquiesce patiently in what is happening. A minority, though a growing one, feels as I do, and, so long as I live, it is with them that I must work. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3, 1969, pp.134-135.</p>	<p>一九六二年五月三日『オブザーヴァー』紙掲載の「九歳に於ける得失」という文(これは誕生日の直前である)に彼は書いている、</p> <p>老齢というものには静穏をもたらす、悪とみえるものでも究極は善なるもの手段だと考えるような広いものの方をもちやすさということがある。私はそのような答えを絶対に受け入れ、目もたてできない。静穏ということは、今日の世界では、盲目があるいは無慈悲によってのみ、保つことのできるのだ。一般の信念とは違って、私は年を経ることにだんだんと反逆的になってくる。私は生まれつき反逆的だとは思っていない。一四年まで、自分をとりまき、世界にもかかるとも謙に遠慮していたのである。(中略)反逆的な気質を持ち合わせていないのに、事の成り行きが私をして、起こりつつあることを容れ強く黙って受け入れられなくしたのである。私のように黙っている人は、増えつつはあるが少数しかいない。そして私の生きていく限り、働かねばならないのはこの少数者とともになのである。(Autobiography vol3, 1969, pp.134-5)</p>			

			<p>D38</p> <p>At the same time, for those who believe, as I do, that the total destruction of the population of Britain and of a large part of the population of other countries may occur at any moment and is likely to occur within ten years, it is difficult to put supposed private duty ahead of a public duty which involves protecting one's immediate circle as well as the rest of the world. If all who think as you do protest, the danger may be averted. This is impossible unless protests are very widespread and emphatic. I should not feel inclined to blame those who hang back for the sort of reasons that you indicate, but I could only give positive praise to those who do not hang back. I think it is also worth remembering that, if protests are sufficiently widespread, it will be impossible to victimize any of those concerned except the leaders. From: Dear Bertrand Russell, 1969, p.97.</p>	<p>一九六二年の夏、「私は最近の反核デモに参加して二度も投獄されました。私は自分の信念のために、家庭と、親類たるはるばるの同志とラブレターをもった自分(「106」)」という一市民が「空軍省に対して近く行なわれることになっているデモ(「106」)」についてラッセルに対し書簡で、「いま私は、次の二つの道のどちらを選ぶか、決定しなければならぬ立場に置かれていて、一つは、またも逮捕されて刑務所での仕事を放棄し、自己の信念を貫いてその当然の帰結として投獄されるべきかということ、もう一つは、自分の職業に帰って沈黙を守りながら、ただ唯唯諾諾として従っていく何ぞという人々の一員になりまがるということ、なのですが(「106」)」と問うてきたのに対し、ラッセルは次のように答えている。</p> <p>(前略)英国の全人口と、他の国々の大部分の人口の被弾がいずれも起こりうる状態であり、少なくとも十年以内には起こるかも知れぬと言っているからといっては、実際私もその人ですが、ほんの私的な義務と思われるものを優先させて、公の義務を後まわしにするなどということは難しいものです。それは、全世界を守るのとはより、自分に直接身近な者を防衛することであり、(中略)あなたが示されたような理由でしりこみする人々たちを責めようとは私は思いません。ただ、しりこみしない人々に対して進んで譲歩を呈することができるのみです。また、このことも記憶にとどめる価値がありましよう。すなわち、もし抗議が十分広範囲にゆきわたるならば、権威者以外の関係者を犠牲にすることは不可能となるだろう、と。(Dear Bertrand Russell ..... 1969, p97)</p>		
			<p>D39</p> <p>In estimating the wisdom of a policy, it is necessary to consider not only the possibility of a bad result, but also the degree of badness of the result. The extermination of the human race is the worst possible result, and even if the probability of its occurring is small, its disastrousness should be a deterrent to any policy which allows of it. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969.</p>	<p>ラッセルが自己のその心理を意識的に定式化して明かし、とははなが、あるいはグラドウィン・ローへの書簡中の一節などは有力なヒントとなりえよう。</p> <p>ある政策の賢明かいなかを評価するにあたっては、悪い結果が出る可能性だけでなく、その結果の悪さの程度いをも考慮する必要がある。人類の絶滅は、可能な最悪の結果なので、それで、それが起こる可能性はたとえ小さいとしても、その悲惨さは、それを起こしうるいかなる政策に対しても防止力となるべきであろう。(Letter to Lord Gladwyn, 14 November, 1964, cit. from Autobiography vol3, 1969, p195)</p>		
★			<p>D40</p> <p>In philosophy, hitherto, ethical neutrality has been seldom sought and hardly ever achieved. Men have remembered their wishes, and have judged philosophies in relation to their wishes. Driven from the particular sciences, the belief that the notions of good and evil must afford a key to the understanding of the world has sought a refuge in philosophy. But even from this last refuge, if philosophy is not to remain a set of pleasing dreams, this belief must be driven forth. It is a commonplace that happiness is not best achieved by those who seek it directly; and it would seem that the same is true of the good. In thought, at any rate, those who forget good and evil and seek only to know the facts are more likely to achieve good than those who view the world through the distorting medium of their own desires. (From: Our Knowledge of the External World, 1914, chap. 1) <a href="http://russell-j.com/R601.HTM">http://russell-j.com/R601.HTM</a></p>	<p>キャサリンはラッセルの哲学を主に口頭で学んだようであるが、彼女の言っているような要素は、もちろん、彼の公刊された著述の中にふんだんに見ることができ、それらの最も基本的な表現は、例えば次のものである。</p> <p>私たちの人間的な欲望を満足させようという希望、つまり、この世界にはあれやこれやの望ましく思われる倫理的性質が備わっているということを証明したいという希望は、私の理解できる限りでは、哲学がそれを叶えるために何かしてあげられるといった希望ではない。(中略)善悪の観念が世界を理解する鍵を与えてくれるに違いないという信念が、哲学に避難所を求めてきている。しかし、この最後の避難所からさえ、もし哲学がいくつが心地よい夢であるべきでないとするなら、この信念は追い出さねばならない。(Our Knowledge of the External World, 1914, pp.37-39)</p>		
			<p>D41</p> <p>I do not think, therefore, that there is any reason to regard some satisfactions as bad, so long as they are considered in isolation, without regard to their concomitants and consequences. But when desires are considered as matters of consequence, some are compatible, some incompatible. If a man and woman desire to marry each other, both can be satisfied; but if two men desire to marry the same woman, one at least must be disappointed. If two partners both desire the prosperity of their firm, both can achieve the result; but if two rivals each desire to be richer than the other, one of them must fail. What applies to two desires applies equally to groups of desires. Borrowing a term from Leibniz, I call a number of desires 'compossible' when all can be satisfied by the same state of affairs; when they are not compossible, I call them incompatible. When a nation is at war, the desires of all its citizens for victory are mutually compossible, but they are incompatible with the opposite desires of the enemy. The desires of those who feel benevolently to each other are compossible, but those who feel reciprocal malevolence have desires that are incompatible. It is obvious that there can be a greater total of satisfaction of desire where desires are compossible than where they are incompatible. Therefore, according to our definition of the compossible desires are preferable as means. It follows that love is preferable to hate, cooperation to competition, peace to war, and so on. (Of course there are exceptions.) This leads to an ethic by which desires may be distinguished as right or wrong, or speaking loosely, as good and bad.... From: Human Society in Ethics and Politics, 1954, chap.4: Good and Bad, pp.58-59.</p>	<p>ラッセルの理論的倫理想については、『倫理と政治に於ける人間社会』(一九五四年)が最終的な到達点を示している。その本の「まえがき」によれば、これは先の『人間の知識』の一部に含められる書だったが、倫理学を「知識」とみなしうるとは言えないという理由で独立の一冊として発表されたものである。この書の中心的な教訓は、共存可能の理論 (the doctrine of compossibility) である。その趣旨は次のようなものだ。</p> <p>欲望の充足に付随するものやその結果を顧慮せずに、それだけを切り離して考察する限り、ある種の満足は悪とみなす理由はない。しかし、欲望を手段とみなすとなると、事情は全く違ってくる。対をなす欲望でも、両立するものもあれば両立しないものもある。(中略)二つの欲望について言えることは、一連の欲望群についても言える。ライプニッツの言葉を借りて、いくつかの欲望が全て同一事情によって充足されるとき、それらの欲望は「共存可能 (compossible)」と言い、それとできない場合には「共存不能 (incompatible)」と呼ぶことになる。(中略)</p> <p>言うまでもなく、欲望群が共存可能な場合には、共存不能の場合よりも欲望充足の総計は大となりうる。従って、われわれの善の達成に從えば、共存可能な欲望群の方が手段としては望ましいことになる。(中略)かくして、欲望を正と不正とに、あるいは大きくつばに言って、善と悪とに区別できる裏)所となる倫理が導き出される(「114」)。(Human Society in Ethics and Politics, 1954, p59)</p>		

D42	<p>Question as to "values" - that is to say, as to what is good or bad on its own account, independently of its effects - lie outside the domain of science, as the defenders of religion emphatically assert. I think that in this they are right, but I draw the further conclusion, which they do not draw, that questions as to "values" lie wholly outside the domain of knowledge. That is to say, when we assert that this or that has "value," we are giving expression to our own emotions, not to a fact which would still be true if our personal feelings were different. To make this clear, we must try to analyse the conception of the Good.</p> <p>... When a man says "this is good in itself," he seems to be making a statement, just as much as if he had said "this is square" or "this is sweet." I believe this to be a mistake. I think that what the man really means is: "I wish everybody to desire this," or rather "Would that everybody desired this." If what he says is interpreted as a statement, it is merely an affirmation of his own personal wish; if, on the other hand, it is interpreted in a general way, it states nothing, but merely desires something. ... The consequences of this doctrine are considerable. In the first place, there can be no such thing as "sin" in any absolute sense; From: Religion and Science, 1935 (Oxford University ed.)</p>	<p>因みに、『宗教と科学』におけるラッセルの情緒主義の結論的見解を拾ってみよう。</p> <p>「価値」 - その及ぼす結果とは独立にそれ自身で善もしくは悪であるもの - の問題は、宗教を弁護する人々々が強く主張するように、科学の領域外にある。私はこの点彼らは正しいと考えるが、私に更に、「価値」に関する問題は全く知識の領域外にあるという結論を引き出す。(Religion and Science 1935, p230)</p> <p>人が「これはそれ自体で善である」と言うとき(中略)実際に意味されているのは「私は皆がこれを欲することを望む」とあるにほかならぬ。「善がこれを欲する」とを！ということかと思われる。彼の言うことが陳述として解釈されるなら、それは単に彼自身の個人的希望を確認しているにすぎないし、他方、それが普通に解釈されるなら、それは何事も陳述しておらずに何かを欲求しているにすぎない。(ibid p230-6)</p> <p>その論理を、その説の帰結は重大である。まず第一に、なんらか絶対的な意味における「罪 (sin)」のようなものは存在しなくなる。(ibid, p238)</p>		
D43	<p>We used to think that Hitler was wicked when he wanted to kill all the Jews, but Kennedy and Macmillan and others both in the East and the West pursue policies which will probably lead to killing not only all the Jews but all the rest of us too. They are much more wicked than Hitler and this idea of weapons of mass extermination is utterly and absolutely horrible and it is a thing which no man with one spark of humanity can tolerate and I will not pretend to obey a government which is organizing the massacre of the whole of mankind. ... We cannot obey these murderers. They are wicked and abominable. They are the wickedest people that ever lived in the history of man and it is our duty to do what we can. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3, 1969, p.144.</p>	<p>ところが、ラッセルが人類生存のため皆の善立てと命ずるとき、自分の道徳的格率を人々に押し付けるとき、彼自身の教義が単なる情緒表明である・あるいは試行的なものであることを自覚していたと言えるであろうか。そこには、思想家が行なう押しつけの脱得という奇妙なパトックがある。何れも自身に「道主義的」目的は万人にとって絶対的に正しい目と感ぜられるべきだ、客観的な・宇宙的な真理なのだと固く信じ込んでいない人間が、大衆衆に向って次のような叫びを叫ぶかどうかは、確かに、一考に値しよう。</p> <p>ヒトラーがユダヤ人全てを殺そうと欲したとき、彼の邪悪なることをわれわれはいつも考えていたものです。しかるにケネディやマクミランや東西両陣営の他の指導者たちは、ユダヤ人に限らず、他のわれわれ全てをも小さく殺すことにならざるやう政策を追い求めているのです。彼らはヒトラーよりも遙かに邪悪です。(中略)私は、少しでも成果を期待できると考えることならいかなる非暴力手段に訴えても、そのような政府に反対できる一切の行動をとろうと思ふのです。そして私は、同じように考えてくださるようあなたの方を祈願するのです。彼ら殺人者どもに従うことはわれわれにはできません。彼らは邪悪(ワイケッド)であり、忌まわしい(アボミダブル)。彼らは、人間の歴史にこれまで生存したうちで、最も邪悪な人たちであります。そして自分のなすことを行なうのが、われわれの義務なのです。(114)。(On Civil Disobedience, 15 April 1961, cit. from Autobiography vol3, 1969 p144)</p>		
D44	<p>Many people seem to have been surprised that I should intervene in such matters without having any official status, but I think events show that, even in our highly organized world, there are things that a private individual can do which are much more difficult for a Minister or an organization. In particular, it is much easier to agree with a powerless individual without loss of face than it is to agree with those whose arguments are backed by H-bombs of almost infinite destructive power. Another advantage enjoyed by a private individual is the possibility of acting swiftly. This was especially important in the Cuban crisis ... It is easier for a great power to concede something to an unarmed individual than to a hostile power breathing destruction. ...</p>	<p>一九六二年十月のキューバ危機に際して、ラッセルは秘書とともにほとんど不眠不休の電話をかけて、フルシチョフとケネディに何度も説得の電報を打ちました。その返事を受け取ったが(" (118) )、もし彼が国際政治に重要な影響力を与えたと見えるときがあるとするなら、まずそれはこの時であった。ラッセルはいろいろな場所から「あの危機を解決したことが、あの一週間の私の生涯のうち最も価値あるものにしてくれた」ということを私は確信できます(" (119) )ということを書いている。そしてこう書く、</p> <p>私が何ら公式の地位に就いていないにもかかわらずそのような問題に首を突っ込んだことに、多くの人が驚いていたようである。しかし、これほど高度に組織された世界においても、どの大団体の団体にも手も足も出ない事柄があり無官の個人にはその事柄に打つ手があるという事実、今回の事柄はそのことを示している。私は思えば、フルシチョフの抱く自尊心は、敬遠を口にし敬遠を指く合衆国政府に譲歩するのを許さなかつたかもしれない。ところが、平和達成の念願だけが唯一の関心事である無力な一個人に同意することは、面子(めんづ)を失うこともなく、すつと容易だったのである。個人にはもう一つの利点がある。即ち個人は、同僚の役人たちと相談することを待たずに急速に行動できるということだ。あと二・三時間で事態が決定的となりそうな時に個人的意見を強く表現する重要な理由は、こういうことだったのである。( Unnamed Victim, 1963, pp.12-13. とp148.の同題目の二箇所を混合して訳出)</p>		
D45	<p>By contrast the scene in the courtroom looked like a Daumier etching. When the sentence of two months was pronounced upon me cries of 'Shame, shame, an old man of eighty-eight!' arose from the onlookers. It angered me. I knew that it was well meant, but I had deliberately incurred the punishment and, in any case, I could not see that age had anything to do with guilt. If anything, it made me the more guilty. The magistrate seemed to me nearer the mark in observing that, from his point of view, I was old enough to know better. But on the whole both the Court and the police behaved more gently to us all than I could have hoped. A policeman, before proceedings began, searched the building for a cushion for me to sit upon to mitigate the rigours of the narrow wooden bench upon which we perched. None could be found - for which I was thankful - but I took his effort kindly. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 chap3:1 Trafalgar Square, (1969) http://russell-1.com/beginner/AB33-230.HTM</p>	<p>ついに九月十二日にエディス夫人とともに(また百人委員会の若干のメンバーもともに)ボウ・ストリートに召換される。そのときの模様をラッセルは次のように書いている。</p> <p>私たちがボウ・ストリートに出頭した朝、十時三十分少し前、大勢の傍聴者の間を法廷に向って同志連とともに歩いていくと、スエーデンの舞台にも似たような感じだった。人々がほとんど全ての窓に押し寄せ、おり、そのうちいくつかの窓は鉢いばいの花で飾られて晴れやかだった。それは対照的に、法廷内の光景はドレーミエのエッチング画のように見えた。</p> <p>大体において、法廷も警察も私が善むことのできる以上に優しく振舞った。彼が始めて、一人の警察官が、私たちの座っている狭い木製ベンチの背しさを和らげるために、私の腰に当てるクッションを求めて裁判所内を探してくれた。それに対して私は本当に感謝した。クッションは一つもみつかなかつたけれども、彼の背折りを私は優しく受けとった。</p> <p>二カ月の判決が私に言い渡されたとき、「シェーム！シェーム！八十九歳の老人だぞ！」という叫びが傍聴席から起こった。私はその叫びに腹が立った。それが好意から出ていることは私にもわかってはいた。が、私はわざと罰を受けていたのだ。いずれにしても、有罪かどうかということに年齢が何らかの関係があるということは納得しがねたのである。( Autobiography, vol3, 1969, p.116, 文章の順序を一部変更して訳出、 )</p>		



		D46	<p>No-violent civil disobedience was forced upon us by the fact that it was more fully reported than other methods of making the facts known, and that caused people to ask what had induced us to adopt such a course of action. We who are here accused are prepared to sower imprisonment because we believe that this is the most effective way of working for the salvation of our country and the world. If you condemn us you will be helping our cause, and therefore humanity. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3:1944-1969 .chap3:Trafalgar Square,(1969),p.145.</p>	<p>ラッセルは、「私はわざと (deliberately) 罰を受けていた」と言った。さらにその法廷でのラッセルの陳述の終り近くに、次のような一節がある。</p> <p>非暴力不服従運動の展開をわれわれが余儀なくされたのは、それが、事実を一般に知らせるための他のいかなる方法よりもより十分に報道されるという事実によってであります。そしてそのような報道ゆえに何がわれわれをしてかような行動をとらせただかについて人々が尋ねるようになったわけです。ここで今罪を問われている私たちは、投獄される心の用意ができております。と言いますのも、それが、わが国ならびに世界を救うために善とする最も効果的な方法であると信じているからであります。もしあなた方が私たちが有罪にすれば、あなた方は私たちの目的を授け、従って人類を救うことになるのであります。( Statement at Bow Street, September 12, 1961, cit, from, ibid, p145 )</p>			
	★	D47	<p>I have been trying to be interested in Politics, but in vain: the British Empire is unreal to me, I visualise the Mother Country and the Colonies as an old hen clucking to her chickens, and the whole thing strikes me as laughable. I know that grave men take it seriously, but it all seems to me so unimportant compared to the great eternal facts. こらはまた後から追加します。 From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.1, 1967, pp.167-168.</p>	<p>マーチン・ドネリイへの手紙に「大作(マグナム・オウパス)を完成して、ようやく、今まで忘れようと大いに努めてきたこと・世界には人間がいるということの思い出す暇と自由ができました(1132)」と述べた彼は、その半年後にやはりリシイへの手紙の中で、まるで人事(ひとこと)として次のように言っている。</p> <p>ぼくは、政治に興味を待とうと努力してきました。しかし無駄でした。大英帝国もぼくにとっては現実の問題ではありません。ぼくには 奇麗な植民地と年々上った雌鶏がコックと鳴いて雑議を呼ぶのと同じ姿に映るのです。そうして一切が可笑しく感じられるのです。それにしても真面目な人々はそのうしたことをさも重大なこととして考えるのですが、ぼくには、偉大な永遠の事柄と比較すると、全く重要ものではないように思われるのです。ロンドン人にとっては「永遠」なるものが月刊雑誌によって代表され、日刊新聞から非常に困難とともに向上してそうした月刊雑誌を読むようになるわけですが、彼らはことごとく、ぼくの目には傀儡として、自然力の無計画な具象化として映るのです。彼らは、欲望を断ちつければ瞑想することや学ぶ時に訪れる解放を決して成就することがありません。人間が神たりうるのは思索においてのみであり、行動と欲望においては、われわれは環境の奴隷であります。( November 25, 1902, cit, from Autobiography vol1, 1967, pp.167-168 )</p>			
		D48	<p>Another cause which contributed to the dissipation of his immense energies was the necessity for giving satisfaction to his princely employers. At an early age, he refused a professorship at the University of Altdorf, and deliberately preferred a courtly to an academic career. ... But being the champion of orthodoxy against the decried atheist, Leibniz shrank from the consequences of his views, and took refuge in the perpetual iteration of edifying phrases. The whole tendency of his temperament, as of his philosophy, was to exalt enlightenment, education, and learning, at the expense of ignorant good intentions. This tendency might have found a logical expression in his Ethics. But he preferred to support Sin and Hell, and to remain, in what concerned the Church, the champion of ignorance and obscurantism. This is the reason why the best parts of his philosophy are the most abstract, and the worst those which most nearly concern human life. From: The Philosophy of Leibniz, 1900, chap. 16, p.202</p>	<p>理論哲学者としてのラッセルはライプニッツの研究から出発したのだが、その結果である『ライプニッツ哲学の批判的解説』(一九〇〇)において彼は、一六二一年に兄フランクから受託されることになるのが些が類した種類のことを、かの論理的哲学者に関して述べている。</p> <p>若い頃ライプニッツは、アルトドルフ大学の教授職を拒んで拒否し、宮廷のむかえとなった。(中略)公敵を書かせるために、競争相手の哲学者に反駁するために、あるいは神学者の非難攻撃を脱れるためになら、彼はどんな努力も惜しまなかった。(中略) 悲しいかな晩年には彼は、諸公への余計な厭煩と彼らを書かせるため傾けた努力とによって時間を浪費することとなったのである。( A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz, 1900, pp.1-2 )</p> <p>正教の闘士となったライプニッツは、自分の見解の帰結からしりこみして、建設的なお題目を永久の繰り言として囁きながら中絶した。(中略)これこそ、彼の哲学の最善の部分か何故か最も抽象的であり、最悪の部分か人間生活に極めて近いかの理由である。( ibid, p202 )</p>			
		D49	<p>It seems highly probable that Khrushchev never intended an actual clash between his ships and the blocking force of the US. But in the hours before he ordered his ships to withdraw, all sorts of accidents might have caused the clash that he aimed at preventing. There might, for meteorological reasons, have been an interruption in communications of Russians with Moscow. There might, on either side, have been an accidental explosion which would have been attributed to enemy action as in the case of the Maine in 1898. There might have been, on either side, an over-zealous captain who exceeded orders. From: Unarmed Victory, 1963, chap. 4: Lessons of the Two Crises, p.141</p>	<p>再びキューバ危機を考えると、かりに米ソそれぞれにため隙のレベルでは解決システムが出来上っている本気で恐怖した者は馬鹿をみたのだということが言われるとしても、しかし、ラッセルの言う次のような事実は疑いえないがたであらう。</p> <p>フルシチョフがソ連船と会衆国封鎖艦隊との現実的衝突を本気で企画しはしなかったとは大いにありうることである。だが、彼がソ連船に引き返しを命じた数時間前に、あらゆる種類の突発事象から、彼の阻止せんと望んだ衝突が発生させられたかもしれない。気象上の理由で、ゼネグワとソ連艦隊との通信連絡の断絶が起こったかもしれない。米ソいずれの側にも、一八九八年におけるメイン号事件のように敵側の行動にその原因ありとする偶発的事故が起こったかもしれない。米ソいずれの側にも、指示命令よりも行き過ぎた措置をとるほど熱の度を越した指揮官がいたかもしれない。 ..... ( Unarmed Victory, 1963, p141 )</p>			

D50	<p>When I come to what I myself can do or ought to do about the world situation, I find myself in two minds. A perpetual argument goes on within me between two different points of view which I will call that of the Devil's Advocate and that of the Earnest Publicist. My family during four centuries was important in the public life of England, and I was brought up to feel a responsibility which demanded that I should express my opinion on political questions. This feeling is more deeply implanted in me than reason would warrant, and the voice of the Devil's Advocate is, at least in part, the voice of reason. "Can't you see," says this cynical character, "that what happens in the world does not depend upon you? Whether the populations of the world are to live or die rests with the decisions of Khrushchev, Mao Tse-tung and Mr. John Foster Dulles, not with ordinary mortals like ourselves. If they say 'die' we shall die. If they say 'live,' we shall live. They do not read your books, and would think them very silly if they did. You forget that you are not living in 1686, when your family and a few others gave the king notice and hired another. It is only a failure to move with the times that makes you bother your head with public affairs." Perhaps the Devil's Advocate is right but perhaps he is wrong. From: Portraits from Memory and Other Essays, 1956, 6: Hopes: Realized and Disappointed</p>	<p>彼は、ジャーナリズムによる自己の滑稽化をはじめとする世間の冷たい反応をしばしば正確に感知している(196)し、また機知の死が完了した初めの頃すでに彼はこう書いている。</p> <p>私自身が世界情勢について何をなしえ、なすべきであるかに思いつくとき(中略)絶えざる議論が私の中で二つの異なる見地を織り交ぜ、悪魔の代言者の見地と呼びもう一方を裏面自な共和主義者の見地と呼ぼう。(中略)私は、政治問題に自分の意見を表明する責任感を持つように育てられた。この感じは私の中へ、理性が保証する以上に深く植えつけられているが、悪魔の代言者の声の方向は全くも部分的には理性の方向である。「君にはわからないのか。このシニカルな性格は言う、「世界に起こることが君には依存しない」ということが。世界の人間が生きて死ぬかは、フルシチョフや毛沢東、ジョン・F・オスター、ダレスにかかっている。われわれみたいな凡人にはかかっている。彼らが「死ぬ」と言うならわれわれは死ぬだろう。彼らが「生きよ」と言うならわれわれは生きるだろう。彼らは君の本など読まないし、読んだとしてもそんなものは馬鹿げたものと思うだろう。君は、一六八八年、君の家族と他の幾人かが王を解任し別の王を戴したような時代に生きているのではない、ということをおぼえている。君の顔を公事で悩ませるなどというのは、時勢についてゆき損ねているに過ぎないのだよ。」おそらく悪魔の代言者は正しいだろう。(Portraits from Memory, 1956, pp.48-49)</p> <p>自覚しているドン・キホーテは、厳密にはもはやドン・キホーテではないだろう。ただ、すぐ次にラッセルは自嘲の言を翻す。</p> <p>- しかしたぶん彼は間違っているだろう。おそらく独裁者たちはそう見えるほどには全能でないだろう。多分世論は彼らをゆすぶり動かすことができるだろう、ともかくある程度は。そして多分書物は世論を振り出すのに役立つだろう。こうして私は、悪魔の代言者の嘲笑を無視して自分を押し通す。(ibid, p49)</p>			
D51	<p>Although we won both the world wars, we should now be much richer if they had not occurred. If men were actuated by self-interest, which they are not—except in the case of a few saints—the whole human race would co-operate. There would be no more wars, no more armies, no more navies, no more atom bombs. ... There would not be armies of officials at frontiers to prevent the entry of foreign books and foreign ideas, however excellent in themselves. There would not be customs barriers to ensure the existence of many small enterprises where one big enterprise would be more economic. All this would happen very quickly if men desired their own happiness as ardently as they desire the misery of their neighbours. ... And among those occasions on which people fall below self-interest are most of the occasions on which they are convinced that they are acting from idealistic motives. Much that passes as idealism is disguised hatred or disguised love of power. From: Human Society in Ethics and Politics, 1954, part II, chap.3 pp.173-174.</p>	<p>しかし、その理論と表裏一体ながら核状況への人間的対応という点でより重要な形態をとった思想がある。それは、それまでも全著作の通奏使として脈々と流れていながら、その同じ「倫理と政治における人間社会」において初めて明示的に打ち出されたラッセルの社会倫理の原則で、よく非公式に「啓発された利己心」(enlightened self-interest)と呼ばれる。</p> <p>政治的議論において倫理的考慮に訴える必要があるのはまれである、なぜなら、利己主義も啓蒙されたものになると、普通、一般的善に則って行為するよう、十分に動機づけられるものだからである。(Human Society in Ethics and Politics, 1954, p.106)</p> <p>われわれは世界戦争には一度も勝ったが、戦争がなかったならば今は遙かに豊かになっていた筈である。人間がもし利己主義に動かされるものであるとしたら(中略)全人類が力を合わせたであろう。そこにはもはや戦争もなく、陸軍も海軍もなく、原子弾もなくないであろう。(中略)外国の書物や外国の思想が、それ自体に代わっていようと、入り込んでくるのを防ごうとする役人の大軍などいかなかったであろう。これらは全て、人々が隣人の悲惨を望むのと同じくらい熱烈に自分自身の幸福を望んだなら、ただちに実現したことでであろう。(中略)利己主義以下に転ずる筈の場合、人々は自分たちは理想主義的な動機から行動しているものと信じている。理想主義として通用しているもの多くが、擬装した憎しみが擬装した権力愛である。(ibid, pp.173-174)</p>			
D52	<p>It would not be necessary to invoke idealistic motives, although they could be validity invoked. It would be necessary only to appeal to motives of national self-interest. Common Sense and Nuclear Warfare, 1959, p13</p> <p>For all these reasons, not only idealistic motives, but the plainest and most insistent motives of self-interest make it imperative that East and West should no longer seek to settle their differences by war or the threat of war. Common Sense and Nuclear Warfare, 1959, pp.33-34.</p>	<p>しかし、直載に愛や人道を叫ぶだけでは間に合わぬ状況を核兵器はつくり出した。全滅は万人の利己心に反する、という信念にもとづいて、ラッセルは、人道の動因を利己的機知の訴えに置き換えてしまったのである。この説教法は、核戦線下に一直貫して続けられた。</p> <p>理想主義的な動機に呼びかけることは、有効な働きをするともあろうが、必ずしも必要ではなからう。必要なのは、国民的な利己心という動機に訴えることだけであろう。(Common Sense and Nuclear Warfare, 1959, p13.)</p> <p>理想主義的な動機だけでなく、最も素朴かつ執拗な自己本位の動機も、東西陣営はその相違を競争の脅威によって解決しようとするべきでないということを上命とすべきである。(ibid, pp.33-34)</p>			
D53	<p>Under the influence of prophets and sages, however, a new morality arises, sometimes side by side with the old one, sometimes in place of it. Prophets and sages, with few exceptions, have valued things other than power-wisdom, justice, or universal love, for example and have persuaded large sections of mankind that these are aims more worthy to be pursued than personal success. Those who suffer by some part of the social system which the prophet or sage wishes to alter have personal reasons for supporting his opinion. It is the union of their self-seeking with his impersonal ethic that makes the resulting revolutionary movement irresistible. From: Power, 1938, p.262. (George Allen and Unwin ed. では pp.261-262ではなく、p.262にありますので、三浦さんの訳記と思われます。)</p>	<p>このようなラッセルと民衆、ラッセルと青年たちとの心の相互の興わりの仕組みを予知的にみこむことに説明した文が、第二次大戦直前の彼の著書の中にある。</p> <p>予言者や賢人は、殆ど例外なく、権力以外のもの - 例えば知恵、正義、普遍的な愛など - を尊重して、人類の大半にこれらのものを個人の成功以上に追求する価値のあるものだと説いて、予言者なり賢人なりが愛されたいと願っている社会制度の何らかの部分のために悩ま苦しむ人々が、この予言者なり賢人なりの意見を支持するのには、当然な個人的理由がある。その結果として生じうる革命運動が不可抗な力を与えられ、苦しむ人々の自己本位の倫理が予言者、賢人の非個人的な倫理と合して一つになるときである。(Power, 1938, pp.261-2)</p>			

D54	<p>Where danger is real the impersonal kind of feeling that philosophy should generate is the best cure. Spinoza, who was perhaps the best example of the way of feeling of which I am speaking, remained completely calm at all times, and in the last day of his life preserved the same friendly interest in others as he had shown in days of health. To a man whose hopes and wishes extend widely beyond his personal life there is not the same occasion for fear that there is for a man of more limited desires. He can reflect that when he is dead there will be others to carry on his work and that even the greatest disasters of pastimes have sooner or later been overcome. He can see the human race as a unity and history as a gradual emergence from animal subjection to nature. It is easier for him than it would be if he had no philosophy to avoid frantic panic and to develop a capacity for stoic endurance in misfortune. I do not pretend that such a man will always be happy. It is scarcely possible to be always happy in a world such as that in which we find ourselves. But I do think that the true philosopher is less likely than others are to suffer from based despair and fascinated terror in the contemplation of possible disaster. From: Portraits from Memory and Other Essays, 1956, p.170.</p>	<p>憐れむ主体はあくまで高みにいる。憐愍する一般大衆の世俗的利己心から隔絶した核時代の聖人としてラッセルが立ちえたのは何故かといえば、一つには彼が哲学者であったこと、もう一つには彼が老人であったということによるだろう。 哲学者であることについては、ラッセルは次のようなことを書いている。 危険が実在するところでは、哲学が生み出すような非個人的な感情が、最良の治療薬である。(中略)希望や願望が個人生活を超越して広がる人は、欲望のもつと限られた人が恐れる場合よりも恐れない。(中略)彼は人類を一つの統一と見做す場合でも自然への動物的畏れからの衝動的な脱出と見ることができ、不幸に際して、気遣いじみた狼狽を避け、ストア的な忍耐力を強めることは、哲学を持たぬ人よりも持つ人の方がずっと容易だろう。私は、そのような人が常に幸福だとは言わない。われわれは、そのような世界では、皆に幸福であることが不可能だ。しかし、私は、真の哲学者は、起こりうる悲惨をじっと見つめたとき、絶望や恐怖に苦しむことは、他の人々よりもずっと少ないと思うものである。(Portraits from Memory, 1956, p170)</p>	
D55	<p>Some old people are oppressed by the fear of death. In the young there is a justification for this feeling. Young men who have reason to fear that they will be killed in battle may justifiably feel bitter in the thought that they have been cheated of the best things that life has to offer. But in an old man who has known human joys and sorrows, and has achieved whatever work it was in him to do, the fear of death is somewhat abject and ignoble. The best way to overcome it so at least it seems to me - is to make your interests gradually wider and more impersonal, until bit by bit the walls of the ego recede, and your life becomes increasingly merged in the universal life. An individual human existence should be like a river: small at first, narrowly contained within its banks, and rushing passionately past rocks and over waterfalls. Gradually the river grows wider, the banks recede, the waters flow more quietly, and in the end, without any visible break, they become merged in the sea, and painlessly lose their individual being. The man who, in old age, can see his life in this way, will not suffer from the fear of death, since the things he cares for will continue. And if, with the decay of vitality, weariness increases, the thought of rest will not be unwelcome. I should wish to die while still at work, knowing that others will carry on what I can no longer do and content in the thought that what was possible has been done. From: Portraits from Memory and Other Essays, 1956, http://russell.com/cool/481_HOW_TO_GROW_OLD.HTM</p>	<p>また、老人であることについては、ラッセルは次のように言った。 競争で殺される恐れのあるような若い人たちは、生命が奪われるのを恐るべきではない。むしろ、苦しむべきという感しをもつのが定めし当然だろう。しかし、人間の悪癖 - 暮らさずとも知り、なすべきあらゆることを仕遂げた老人の場合には、死の恐怖はなにか卑しく恥すべきことである。死の恐怖を征服する最良の法は、少なくとも私にこう思われるのだが、謙遜の心を広げ、個人を非個人的にしていき、ついに自我の壁が少しずつ後退して、諸君の生命が次第に宇宙の生命に没入するまでにすることである。個人の人間存在は河のようなものである。最初小さく、狭い土手の間を流れ、烈しい勢いで丸石をよそり、滝を越えて進む。次第に河幅は広がり、土手は後退して水はもつと静かに流れ、ついにはいいつのまにやら海へ没入して、苦痛もなくその個的存在を失う。老年になってこのように人生を見られる人は死の恐怖に苦しまないだろう。自分の死にかけ責(はく)む物事がないと感じるのだ。そして生命が永遠よりもほんのうさぎ増すならば、休息という考えはむげに斥けられたものでもないだろう。( Ibid, p52)</p>	
D56	<p>It is my earnest belief that this Tribunal can prevent the crime of silence. I believe that we are justified in concluding that it is necessary to convene a solemn Tribunal, composed of men eminent not through their power, but through their intellectual and moral contribution to what we optimistically call "human civilization". We command no armies and compel no audience to hear us. If civilization is to be more than an unfounded hope, it must be possible for people who have sought only to contribute to it to claim the right to speak in its name and to defend it. From: Speech by Bertrand Russell to Press Conference Called by International War Crimes Tribunal, Nov. 16th, 1966.</p>	<p>一九六六年十一月十三日から三日間、ロンドン、マハトマ・ガンジー・ホールで開催された戦犯裁判予備会議のあとで記者団に発表した声明の最期に、ラッセルはこう言っている。「この裁判によって沈黙の罪を犯さないでますませることができると言うのが、私の切実な信念であります。つまり、この裁判は、人類への道義としての裁判である」と同時に、同じ声明の中でラッセルはこうも言っているのである。 私は、暴出した人物から構成される厳肅な裁判を開催するのには、必要だと考えています。これらの人は権力によって暴出しているのではなく、私たちが楽天的に「人類文明」(human civilisation)と呼んでいるものに対して、知的ならびに道徳的に貢献している程度によって暴出しているのです。(中略)私ははいかなる軍隊も持たないし、人々に私に言うべきことをきいてくれるような強制することもできない。しかし、もしも文明がはかない幻想以上のものであるべきだとすれば、文明にひたすら貢献しようとしてきた人々、文明の名において語る権利、および文明を擁護する権利を主張することは許されるべきです。(Speech by Bertrand Russell to Press Conference called by International War Crimes Tribunal, November 16th, 1966, mimeographed copy.)</p>	
D57	<p>A pessimist might argue: why seek to preserve the human species? Should we not rather rejoice in the prospect of an end to the immense load of suffering and hate and fear which has hitherto darkened the life of Man? Should we not contemplate with rejoicing a new future for our planet, peaceful at last, sleeping quietly at last after coming to the end of the long nightmare of pain and horror? To any student of history contemplating the dreadful record of folly and cruelty and misery that has constituted most of human life hitherto, such questions must come in moments of imaginative sympathy. Perhaps our survey may tempt us to acquiesce in an end, however tragic and however final, to a species so incapable of joy. But the pessimist has only half of the truth, and to my mind the less important half. Man has not only the correlative capacities for cruelty and suffering, but also potentialities of greatness and splendour, realized, as yet, very partially, but showing what life might be in a freer and happier world. If man will allow himself to grow to his full stature, what he may achieve is beyond our present capacity to imagine. Poverty, illness, and loneliness could become rare misfortunes. Reasonable expectation of happiness could dispel the night of fear in which too many now wander lost. And with the progress of evolution, what is now the shining genius of an eminent few might become a common possession of the many. All this is possible, indeed, probable, in the thousands of centuries that lie before us, if we do not rashly and madly destroy ourselves before we have reached the maturity that should be our goal. No, let us not listen to the pessimist, for, if we do, we are traitors to Man's future. From: Has Man a Future?, 1961, pp.127-128.</p>	<p>ラッセルが各国政府に放った呪詛の言葉は、こうして、自己の權益を奪われんとする動物の本能的防衛の叫びに他ならなかった。押しつけられる死に反発する青年の利己的の叫びとラッセルの叫びとは、ミクロ-マクロの対照をもちながら、同質のものとして完全に協和していた。ラッセルは言う、 悲観論者は論ずるかもしれない。なぜ人類を保存しようと思うのか。われわれは、悩みや憎悪や、今まで人類の劣劣を根絶にしてきた恐怖の長い夜の悪夢を終わらせ見ようとした。それより恐ろしく長い悪夢を終わらせよう。苦痛と恐怖の長い悪夢の結末にきて、ついに平和となり、ついに静かに眠れる。この地球の新しい将来を歓迎しつつ見つめようではないか? と。(中略)しかし、悲観論者は、真理の半分だけを持っているにすぎない。それは私の心にとどめて、重要性のより少ない方の半分である。人間は、残酷さや苦悩に密接に関わる能力を持っているばかりでなく、偉大さと素晴らしさの可能性も持っている。(中略)人類がその成長発展をフルに遂げようすれば、(中略)貧窮、病氣、寂寥は、いさぎよくなるべきであるだろう。合理的に幸福を望むならば、それは現在あまりに多くの人々が悲嘆に暮れてしまっている恐怖の暗夜を追い払うであろう。そして進歩の発展につれて、現在は、少数の愚鈍者の輝かしい特異であるものが多数の人の共通のものになるだろう。これら全てが、われわれの前途に横たわる幾千世紀の間に可能であり、また事実ありそうなことなのである。もしもわれわれが、目標たるべきその成熟に達する前に無分別と狂乱のうちで自分自身を破壊させてしまわないならば、いやいや、悲観論者には耳を傾けまい。もしもそうするならば、われわれは人類の未来の叛徒となるからである。(Has Man a Future? 1961, pp.127-8)</p>	

		<p>D58</p> <p>...</p>	<p>Undoubtedly we should desire the happiness of those whom we love, but not as an alternative to our own. In fact the whole antithesis between self and the rest of the world, which is implied in the doctrine of self-denial, disappears as soon as we have any genuine interest in persons or things outside ourselves. Through such interests a man comes to feel himself part of the stream of life, not a hard separate entity like a billiard-ball, which can have no relation with other such entities except that of collision. All unhappiness depends upon some kind of disintegration or lack of integration; there is disintegration within the self through lack of coordination between the conscious and the unconscious mind; there is lack of integration between the self and society where the two are not knit together by the force of objective interests and affections. The happy man is the man who does not suffer from either of these failures of unity, whose personality is neither divided against itself nor pitted against the world. Such a man feels himself a citizen of the universe, enjoying freely the spectacle that it offers and the joys that it affords, untroubled by the thought of death because he feels himself not really separate from those who will come after him. It is in such profound instinctive union with the stream of life that the greatest joy is to be found.</p> <p>(28)The Conquest of Happiness, 1930, chap. 17 : The happy man http://russell-j.com/beginner/HA28-030.HTM</p>	<p>利他的にとどまる限り冷たいものとなりがちなる。あるいはみられがちな愛を、血の通った温かいものとするのは、道徳的であろうか。愛を与える側の利己である。利己的愛は、受ける側のほんもの感動を呼ぶのである。このことの人生論としては、核時代到来の二十年近く前に、あからさまに大衆受けを狙った本の末尾でラッセルが書いた次のような文章がある。</p> <p>伝統的な道徳家たちは、愛が非利己的なものでなければならぬと言っただろう。ある意味では確かにそうである。つまり愛は、ある点以上に利己的であってはならぬものだ。しかし、愛とは、自分自身の幸福ある成就と密く結びついている。性質上のものであるべきだ。ということは疑う余地がない。もし、ある男が、ある令嬢の幸福を熱望してしかも同時に彼女は彼に理想的な自己犠牲の機会を与えてくれるだろうと考えて、そういう理由によって彼女に結婚を申し込んだとすれば、彼女がそれによって果して本当に喜ばされるかどうか、私は疑問だと思ふ。注：この種の「愛」は、まさにドン・キホーテのトルシネアへの愛によって崩壊されていっただろう。)無論、われわれは自分の愛する人々の幸福を奪わなければならない。しかし、それはわれわれ自身の幸福と引き替えにはない。事実、自分自身と自己以外の世界との対立、これは自己犠牲の教義の中に含まれているのだが、その全ての対立は、われわれが自分の外部の人や物にほんとうの関心 (genuine interest) を抱き始めるやいなや、消えてなくなるものである。このような関心を通じて、初めて、人間は生命の流るる一部である自己を、例えは衝突のとき以外は別の球と何らの関係も持たない撞球の玉(ビリヤード・ボール)のような硬い孤立した存在ではないところの自己を、感ずるのである。(中略)そのような人間は、自分の後に続き来た人々とならぬ別個のものとして生存することはない。最も大きな歓喜の見出されるのは、こうした生命の流れの深い本能的な融合においてである。(The Conquest of Happiness, 1930, pp.246-8)</p>			
		<p>D59</p>	<p>The period from 1910 to 1914 was a time of transition. My life before 1910 and my life after 1914 were as sharply separated as Faust's life before and after he met Mephistopheles. I underwent a process of rejuvenation, inaugurated by Ottoline Morrell and continued by the War. It may seem curious that the War should rejuvenate anybody, but in fact it shook me out of my prejudices and made me think afresh on a number of fundamental questions. It also provided me with a new kind of activity, for which I did not feel the staleness that beset me whenever I tried to return to mathematical logic. I have therefore got into the habit of thinking of myself as a non-supernatural Faust for whom Mephistopheles was represented by the Great War.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1: The First War, 1968] http://russell-j.com/beginner/AB21-010.HTM</p>	<p>ラッセルが、第一次大戦に遭った自分をメフィストフェレスに会ったファウストに擬しているということは、序章ですでに簡単に引用した。そこを完全に引用し直すならば、次の通りである。</p> <p>私の人生は、一九一〇年の前と一九一四年の後とは、はっきり違っていた。それは、メフィストフェレスに会う前と会った後のファウストの人生と同じであった。私はオットーリーン・モレル夫人によって回春を味わい、それが世界大戦によって持続させられた。戦争が人を若返らせるとは奇蹟に聞こえるかもしれないが、事実、その大戦は、私の偏見を振り落とし多くの基礎的な問題について改めて考え直させてくれた。そればかりか、新しい種類の活動を始めさせてくれた。この新しい活動に対しては、数理論理学に立ち返ろうとするとき決まった私を悩ませていたあの味気なさを感ずることがなかった。そのために私は、自分自身を随分自然にさせるファウストとして考える習慣に陥るようになったが、そこでメフィストフェレスに相当するものは、第一次世界大戦であった。(Autobiography, vol2, 1968, p15)</p>			
		<p>D60</p>	<p>The first time that I was ever in bed with her (we did not go to bed the first time we were lovers, as there was too much to say), we heard suddenly a shout of bestial triumph in the street. I leapt out of bed and saw a Zeppelin falling in flames. The thought of brave men dying in agony was what caused the triumph in the street. Colette's love was in that moment a refuge to me, not from cruelty itself, which was unescapable, but from the agonising pain of realising that that is what men are.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 1 : The First War, 1968]</p>	<p>とまれがどのような事情で二人の愛は大戦勃発後しばらくすると行き詰まることになるが、ラッセルは、T・S・エリオット夫人との恋愛事件なども経て、やがて戦争となつた頃、徴兵反対運動を通じて女優コレット・オーニルと知り合う。</p> <p>私がはじめて彼女と同衾したとき(中略)突如として敵の咆哮に似た勝利の叫び声が街頭に起こるのを聞いた。私はベッドからとびおりた。そしてツェッペリン飛行船が炎に息絶れて墜落するのを見た。大衆は、勇敢な飛行士が苦悶しつつ死んでゆく有様を思い描いてその焼死を羨しているのだ。その時、コレットは私の愛こそが私の救いであった。逃れられぬその残酷さからの隠れ家ではなく、これが人間というものと惜らざるをえない心の苦痛からの救いであった。(中略)戦争世界の醜態と密着して離れなかつた。憎悪にみちたこの世界にあって彼女は愛を保ってくれた。それは、愛という語のあらゆる意味における、いたってありふれた愛から最も深い愛まで全ての愛であった (ibid, p26)</p>			
		<p>D61</p>	<p>There seems a good chance that the authorities will relent towards me -I am half sorry! I shall soon have come to the end of the readjustment with Mrs. E. [Mrs. T. S. Eliot] I think it will all be all right on a better basis. As soon as it is settled, I will come to Garsington, long to come. I have been realizing various things during this time. It is odd how one finds out what one really wants, and how very selfish it always is. What I want permanently -not consciously, but deep down -is stimulus, the sort of thing that keeps my brain active and exuberant. I suppose that is what makes me a vampire. I get a stimulus most from the instinctive feeling of success. Failure makes me collapse. Odd things give me a sense of failure -for instance, the way the C.O.s. all take alternative service, except a handful.</p> <p>[From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1: The First War, 1968, p.74.]</p>	<p>ラッセルが前端的に否定し、憎んだ戦争を育徳として(こそ)こうした彼の生涯最も愛のつがひ開化しているという事実、何を意味するのかが、大戦は確実にラッセルの回春 (rejuvenation) を実現したのだ。そして彼自身分派していく。これは、と恋愛に関し、はかりではない。ラッセルは書簡その他において、見逃されやすいがきわめて注目すべき発言をしはばなしているのである。戦争中オットーリーンに書いた手紙(一九一六年九月)の中に、次の一節がある。</p> <p>当局がぼくに対して同情をよせるような兆しがみえます。ちょっと残念なような気がしますがね！(中略)ぼくは、こうした間にさまざまなことを悟りました。自分が裏に求められているものも奇妙なことに、利己的なものがあるのだし、またそれが常にとも利己的なものだというのも奇妙なものです。ぼくが永遠に求めてやまないのは、意識はしていないが、心の底の方では、刺激です。すなわち、ぼくの頭脳と生き生きさせ、元氣旺盛ならしめておくような種類のものです。そして、ぼくは、ぼくを醜の吸血鬼 (a vampire) たらしめるものなのです。ぼくは成功という本能的感情から最も刺激を得ます。失敗はぼくをだめになります。(ibid, p74)</p>			

			D62	<p>But my disquietude grew. My inability to make my fellow men see the dangers ahead for them and all mankind weighed upon me. Perhaps it heightened my pleasures as pain sometimes does, but pain was there and increased with my increasing awareness of failure to make others share a recognition of its cause. I began to feel that New Hopes for a Changing World needed fresh and deeper examination and I attempted to make this in my book Human Society in Ethics and Politics, the end of which, for a time, satisfied my craving to express my fears in an effective form.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England, p.32.]</p>	<p>あるいは彼は、自分の反戦活動を次のように評する。</p> <p>大戦が終わったとき、私が知ったのは、自分のそれまでやってきた全てのことは、自分自身に対して以外全然何の役にも立たなかったということだった。( ibid, p40)</p> <p>これは逆に言えば、確かに、大戦中の活動は大いに自分のためになった、ということに他なるまい。これはおそらく、核時代の平和運動についても同じことが言えるのである。ラッセルは次のように書く、</p> <p>私の不安は次第につのった。まわりの人々をして、彼らおよび人類の前途に待とうける危険を感ぜさせることのできない私の無能さが、私に重荷としてのしかかった。おそらくそれは、苦痛とはしばしばそうなのだが、私の楽しみを増してくれたようである。だが苦痛は、私が他の人々をしてわが苦痛の原因をともに認識させないという責めにだんだん重くつけられて増えた。私は、すなわち、より深く世界への新しい希望を新たに、より深く吟味し直す必要を感じ始めた。そこでその試みを『倫理と政治における人間社会』の中で行なったが、それが完結して、しばらくの間、私の恐れを効果的な形で表現する希望は満足させられた。( Autobiography, vol3, 1969, p.32)</p> <p>その放送(注・BBCの「人類の危機」(一九五四))は、個人的にも社会的にも大きな効果があった。個人的な効果というのは、私の個人的な不安が一時的にいたことと、この問題に対する適切な言葉を発見したという感じを私が持つに至ったことであった。( ibid, p72)</p>			
			D63	<p>I used to think that when I reached old age I would retire from the world and live a life of elegant culture, reading all the great books that I ought to have read at an earlier date. Perhaps it was, in any case, an idle dream. A long habit of work with some purpose that one believes important is difficult to break, and I might have found elegant leisure boring even if the world had been in a better state. However that might have been, I find it impossible to ignore what is happening.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 3: Trafalgar Square, p.134.]</p>	<p>あるいは彼は、九十歳誕生日直前、一九六二年五月十三日付「オブザーヴァー」にこう書いている。</p> <p>私はかつて、老年に達したら自分は、世界から引退し優雅な文化生活を送ろう、若かりし日に読むべきであったあらゆる偉大な本を読もうと考えていたものである。どのみちそれは、怠惰な夢であらう。重要であると信ずる目的を抱いて働く、という毎年の習慣を破ることは難しい。それで私は、たとえ世界が今よりも良い状態にあったとしても、優雅なレジャーを退屈だと思ったことだろう。それがどのようなものであろうとも、私は、起こりつつあることを無視することは不可能だと思ふ。( ibid, p134.傍点三浦)</p>			
			D64	<p>I know extraordinarily little of your inner life now-a-days, and I wish I knew more, but I don't know how to elicit it. My own existence has become so objective that I hardly have an inner life any more for the present - but I should have if I had leisure.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1: The First War, pp.69-70.]</p>	<p>そしてそれはファウストと同じく、&lt;聖なる利己心&gt;のような高尚な動因を持ち出さずともそれ以前に、もっと確信的に冷やかな意味で「自分のため」と言いうる反戦活動・反移活動だったのだ。継続した外界に向って探るような好奇心と探究心を投じ熱烈な行動に挺身することが、とりもなおさず自我の内面に自己向上の満足をもたらすことだったのだ。ラッセルはあるとき確かに次のようなことを洩らしている(一九六六年、オットー・リーンの手紙)、</p> <p>ぼくはこの頃は、あなたの内的生活を全くと言っていいほど知りません。ぼくはもっと知っていたがったんです。(中略)ぼく自身の存在はというと、今のところ、きわめて目的になっていますので、もはや内的生活というものは殆ど持てない状態です。しかし暇ができれば持てるでしょう。( Autobiography, vol2, 1967, pp.67-68)</p>			
			D65	<p>It is not an altogether pleasant experience to find oneself regarded as antiquated after having, for a time, in the fashion, it is difficult to accept this experience gratefully.</p> <p>From: My Philosophical Development, 1959, p.214.</p>	<p>また、ラッセルは、最後の哲学書『人間の知識』を書いた十一年後、『常識と核戦争』などを書いたと同じ年の一九五九年に、自己の(社会・政治思想は除いた)理論哲学の解説書である『私の哲学の発展』を書いたが、その中の、現代日常言語学派への反論を展開した章で次のように言っている。</p> <p>自分がいざらなくのあいだ世にもてはやされたあと、時代運れたと捨てられるのを見ることは、必ずしも愉快な経験ではない。この経験を上品に( gracefully )受け入れることはむずかしい。( My Philosophical Development, 1959, p214)</p>			

D66	<p>He always got into a fury if one suggested that anybody could possibly have kindly feelings toward anybody else, and when I objected to war because of the suffering that it causes, he accused me of hypocrisy. "It isn't in the least true that you, your basic self, want ultimate peace. You are satisfying in an indirect, false way your lust to jab and strike. Either satisfy it in a direct and honorable way, saying 'I hate you all, liars and swine, and I am out to set upon you,' or stick to mathematics, where you can be true. But to come as the angel of peace no, I prefer Tirpitz a thousand times in that role."</p> <p>I find it difficult now to understand the devastating effect that this letter had upon me. I was inclined to believe that he had some insight denied to me, and when he said that my pacifism was rooted in blood lust I supposed he must be right. For twenty-four hours I thought that I was not fit to live and contemplated committing suicide. But at the end of that time, a healthier reaction set in, and I decided to have done with such morbidity. When he said that I must preach his doctrines and not mine I rebelled and told him to remember that he was no longer a schoolmaster and I was not his pupil. He had written, "The enemy of all mankind you are, full of the lust of enmity. It is not a hatred of falsehood which inspires you, it is the hatred of people of flesh and blood, it is a perverted mental blood lust. Why don't you own it? Let us become strangers again. I think it is better." I thought so too.</p> <p>From: Portraits from Memory and Other Essays, 1956, p.107.</p>	<p>第一次大戦中、反戦運動で、意気投合したラッセルとD. H. ロレンスが共同講演を企画したことがあったが、ラッセルはロレンスとロレンスの反民主主義思想(これをラッセルはファシズムの先駆と評した)とは始めから相反の種を蒔いていたに等しく、二人の書簡は次第に険悪なものとなっていった。ラッセルは次のように回想している。</p> <p>私が、その惨禍のゆえに戦争に反対すると、彼は、偽善だと言って私を非難した。「君が、君の根底の自我が、究極の平和を欲しているなんてことは少しも真実でない。君は、人を打ったり叩いたりする欲望を、間接的に、不実な方法で満足させている。」「おれは全部、嘘つきや豚野郎を憎む、そしてお前たちをなんとか開動しようとするのだ」と言って、直接的な正直な方法でその欲望を満足させたまえ。さもなければ、君が真実になりつる数学にしがみつくな。しかし、平和の穴でもテイルピッツ(172)の方を千倍も高く買おう。この手紙が私に与えた破壊的效果を理解することは、今や難しくなっている。彼が私にはないある種の洞察力をそなえていると私は信じている。私の言ったとき、私は彼の方が正しいに違いないと思つたとき、私は彼の方が正しいに違いないと思つたとき、二十四時間のあいだ、私は自分が生きるに値しないと思ひ続け、自殺を考えた。しかし、その時も最後になって、もっと健全な反応が起こり、そのような病的な考えとは手を切ることを決心した。私の説ではなく彼の説が私が講じなければならぬと彼が言ったとき、私は反駁し、もはや彼が校長ではなく私が生徒ではないということをおぼろげに彼に告げた。彼はその前にこう書いてきていた。「君は全人類の敵だ。憎しみの欲求でいっぱいだ。」「君を鼓舞するのは、感傷への憧憬ではなく、人々への肉と血の憧憬であり、それは肉なぬ曲がった血の欲求だ。なぜ君はそのことを認めないのか。ぼくたちはもう一度赤の他人になろう。その方がいいと思う。」私もそのように考えた。(Portraits from Memory, 1956, p.107. 傍点は原文イタリック)</p>		
D67	<p>Some may ask by what right I address you. I have no formal title; I am not any part of the machinery of government. I speak only because I must; because others, who should have remembered civilisation and human brotherhood, have allowed themselves to be swept away by national passion; because I am compelled by their apostasy to speak in the name of reason and mercy, lest it should be thought that no one in Europe remembers the work which Europe has done and ought still to do for mankind. It is to the European races, in Europe and out of it, that the world owes most of what it possesses in thought, in science, in art, in ideals of government, in hope for the future. ...</p> <p>While all who have power in Europe speak for what they falsely believe to be the interests of their separate nations, I am compelled by a profound conviction to speak for all the nations in the name of Europe. In the name of Europe I appeal to you to bring us peace.</p> <p>From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.2 chap. 1: The First War, pp.30-31.]</p>	<p>第一次大戦の時、ラッセルはワイルソン米大統領に、「あなたは、あの偉大なアブラハム・リンカーンの為したことを深く素晴らしい奉仕を、人類のために為される機会をお持ちです」と、和平調停を要請する公開状を送った。その中で彼は書いた、</p> <p>何の権利があつて私があなたに訴えるのかと問う者があつても構いません。(中略)それは、人類のためにヨーロッパがなしてきた業績、あなたもおもひなき奉仕のたくさんあることを、心に留めている者がヨーロッパに一人もいないなどと思われたいからです。世界は、思想において、科学において、芸術において、政治理想において、将来の希望において、その保有している大部分を、ヨーロッパの諸民族に属しているものであり、見せつけているのであり、(中略)ヨーロッパは、見せつけを持っている全ての者が、それぞれ自国の利益であると誤信している物事のために代弁している間は、私は絶大な確信をもつて、ヨーロッパの名において、全ての箇の名において私は、平和をわれわれにもたらして下さるようあなたに訴えるものであります。(Autobiography, vol2, pp.30-31)</p>		
D68	<p>(I have never been an absolute pacifist or an absolute anything else. I think that an act is to be judged right or wrong by its consequences: the right act being that which of all acts that are possible gives the greatest balance of good over bad consequence.)</p> <p>You ask whether I have ever been in contact with prolonged suffering of innocent people caused by war. I have not. I might retort: have you ever been at Auschwitz and watched large numbers of innocent Jews herded into the gas chamber? If you have not, then, to quote your own phrase, 'your reasoning is of necessity cold'.</p> <p>(From: Dear Bertrand Russell: a selection of his correspondence with the general public, 1950 - 1968. Allen &amp; Unwin, 1969. <a href="http://russellj.com/beginner/DBR4-24.HTM">http://russellj.com/beginner/DBR4-24.HTM</a>)</p>	<p>想像力といえば、第一次大戦以来のラッセルの精力活動の主たる原動力が、現実体験にはなく単なる想像力に基づけられていたということこそ不思議のようでもある。ラッセルの市民との往復書簡に、次のようなものがある(一九五六年十月)。</p> <p>「先生の『いずれが平和への道か』(注、一九三六)を読みまして、先生が当時絶対平和主義者だったことがわかりました。けれども私の理解したところでは、先生の考えを委ねさせたのはヒトラーの非人間的な政治でした。さらには、たゞを別の「絶対平和主義」に置き換えます。先生はもとの「絶対平和主義」に戻ると思っています。- 原子兵器の力のゆえに。.....ここで私は提言したいのですが.....多分先生は、感情をゆさぶるような環境におられた経験が一度もなかったでしょう。もしあったとしたら、一九三九年の時の先生の理論は修正されたでしょう。当時の先生の理論は、やむをえなかったものではあります。冷たい感じでした。もし先生が、いつか、爆弾で手足を切断された婦人や子どもたちに直接触れられたとしたり、きつと先生は絶対平和主義者のままでおられたと思ひます.....」</p> <p>「拝啓 (中略)あなたは、私が今までに、戦争のため長い間災難に苦しんでいる罪のない人々に接したことがあるかどうかをお尋ねですが、私はそういう人々に接したことがありません。今度は、あなたがお尋ねしましょう。あなたは今までに、アウシュビッツで莫大な数の罪のないユダヤ人がガス室に追い込まれたのを目撃したことがありますか。もしなかったら、あなた自身の句をここに引用しましょう。「あなたの理論は、やむをえなかったことではあるが、冷たい感じですよ。」敬具」(Dear Bertrand Russell..... 1969, pp.143-144)</p>		

		<p>D69</p> <p>Assuming Communism to be as bad as its worst enemies assert, it would nevertheless be possible for improvement to occur in subsequent generations. Assuming anti-Communism to be as bad as the most excessive Stalinists think it, the same argument applies. There have been many dreadful tyrannies in past history, but, in time, they have been reformed or swept away. While men continue to exist, improvement is possible; but neither Comminism nor anti-Communism can be built upon a world of corpses. From: 'Has Man a Future?', 1961, p.43.</p>	<p>想像力は、ラッセルの感覚や情緒のみならず、知性にも強く作用している。自由が死か、のシンドニー、フックとの争点からんでラッセルはこう書いている。</p> <p>共産主義を、その最悪の敵が主張しているくらい悪いものだと思っても、それでも続く幾世代のうちには改善が起つてくることか可能であらう。反共産主義を最悪な奴隷主義と見做すか、それと見做しても、同じことか言える。過去の歴史には、多くの恐ろしい専制政治があつた。しかしそれらはやがては改善されあるいは掃蕩された。人間が生存し続けている間は、改善は可能である。しかし、共産主義化する反共産主義にしろ、どちらも死骸の世界の上には建設されえない(「189」)。(「Has Man a Future? 1961, p.43」)</p>			
		<p>D70</p> <p>Sometimes one is tempted to take refuge in cheerful fantasies and to imagine that perhaps in Mars or Venus happier and saner forms of life exist, but our frantic skill is making this a vain dream. Before long, if we do not destroy ourselves, our destructive strife will have spread to those planets. Perhaps, for their sake, one ought to hope that war on earth will put an end to our species before its folly has become cosmic. But this is not a hope in which I can find any comfort. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 3: Trafalgar Square, p.134.]</p>	<p>煎じ詰めればこれは即ち、地球の滅亡によって失われた知的文明の宇宙の意識が、火星人によって採られるという想像である。九十歳誕生日直前、ラッセルが『オプザーヴァー』紙に執筆の次の文章がそれを直截に語っている。</p> <p>素晴らしい空想に逃避して、火星や金星には地球よりももっと幸福でもっと正義な生活形態が存在するかもしれないと思われたいと想像したくなること時々あるものだが、われわれの気遣いしみた技術が、これをはかない夢と化しつつある。遠からず、人類が自らを滅亡させない限り、その破壊的な闘争が火星や金星にまで広がってしまうことになるであろう。思ふに、火星や金星のために進めべきは地球人の悪行が宇宙に広がる前に、地球上の闘争が人類を滅ぼすことなのかもしれない。(「Autobiography, vol3, 1969, p134.」)</p>			
		<p>D71</p> <p>I should be very sorry if it were supposed that the stories are meant to point a moral or illustrate a doctrine. Each of them was written for its own sake, simply as a story, and if it is found either interesting or amusing it has served its purpose. From: Satan in the Suburbs and Other Stories, 1953, preface.</p>	<p>創作へと解放されたラッセルの想像力は、自然科学に俾依した哲学者らしく、多分にSF的色彩を帯びたものだった。それは、その現実離れした内容そのままに、著述姿勢そのものも現実問題を超越していたかと思わせるものがある。『郊外の悪魔』の序文にラッセルはこう書いている。</p> <p>これらの小説が、寓意を示すためとか何かの意見を例証するつもりでとかで書かれたと思われたいとしたら、私としては甚だ心外に思う。どの小説もたまたま小説として書かれたのであり、それが自ら心から書きたいと言われれば、それで目的は達せられるのである。(「Satan in the Suburbs, 1953, preface」)</p>			
★		<p>D72</p> <p>The writing of these stories was a great release of my hitherto unexpressed feelings and of thoughts which could not be stated without mention of fears that had no rational basis. Gradually their scope widened. I found it possible to express in this fictional form dangers that would have been deemed silly while only a few men recognised them. I could state in fiction ideas which I half believed in but had no good solid grounds for believing. In this way it was possible to warn of dangers which might or might not occur in the near future. From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3 chap. 1: Return to England p.35.]</p>	<p>しかしまた、ラッセルは自叙伝の中では、自分の創作についてこう言っているのである。</p> <p>これらの小説を書くことによって、これまで表現していなかった諸々の感じや、何らの合理的根拠もないというおそれを告白しなくては述べることのできない思想を、大いに解放することができたのである。その解放の領域は次第に広がられていった。ごくわずかの人のだけに認識されおきたかからは馬鹿げたものとみなされてきた危険を、この創作の形で表わし示すことができたのがわかった。半は信じてはいないが、さればといって信ずるだけの十分にしっかりした根拠のない考えを、創作の中では述べることができた。このようにして、近い将来に起こるかもしれない起こらないかもしれない危険について、警告することが可能となったのである。(「Autobiography, vol3, 1969,p35.」)</p>			
		<p>D73</p> <p>... In December, 1959, I had read Neville Shute's On the Beach and attended a private viewing of its film. I was cast down by the deliberate turning away if displayed from the horrible, harsh facts entailed by nuclear war - the disease and suffering caused by poisoned air and water and soil, the looting and murder likely among a population in anarchy with no means of communication, and all the probable evils and pain. It was like the prettified stories that were sometimes told about trench warfare during the First World War. Yet the film was put out and praised by people who meant to make the situation clear, not to belittle the horror. I was particularly distressed by the fact that I myself had praised the film directly after seeing it in what I came to think the mistaken opinion that a little was better than nothing. All that sort of thing does, I came to think, is to make familiar and rob of its true value what should carry a shock of revulsion. [From: The Autobiography of Bertrand Russell, v.3, chap. 3:Trafalgar Square, 1969] <a href="http://russell-j.com/beginner/AB33-130.HTM">http://russell-j.com/beginner/AB33-130.HTM</a></p>	<p>これらは互に矛盾している。</p> <p>核時代の想像力の典型例を示すホロコーストのSFについて、ラッセルはどう考えていたのだろうか。彼は例えばこう述べている。</p> <p>自らの破壊に対する人類の大部分の態度は私を驚かせた。私はネヴィル・シュートの『渚にて(On the Beach)』を読んだことがあつたが、一九五九年十二月、その映画試写会に出席した。その映画は、核戦争の結果生ずる恐ろしい苛酷な諸事象(中略)をたくみにさらしていたので、私はがっかりさせられた。それは、第二次大戦中の監獄について時折語られていた美化された物語に似ていた。しかもその映画は、恐怖を小さくすることなしに事態をはっきり見せようと意図する人々により紹介され、賞賛されたのである。私がとくに悪感したのは、私自身がその映画を見た直後にはそれを賞賛したということがあつたからで、その時は、少しでもみるべきものがあれば皆無よりははまだだと考えたのだが、しかしその考えは間違いだと思つた。つまり、そのような映画がなすことといえば、激しい嫌悪感を生ぜしめるべきものをありふれたもののように感じさせ、その本当の意味を見失わせることに他ならないと私は考えるようになったのである。(「ibid, pp.108-109」)</p>			

		D74	<p>In the conflicts between Christianity and Islam, it was war that decided which countries should be Christian and which Mohammedan. In the conflicts between Protestants and Catholics, it was again military success and failure that decided the issue. America, North and South, is Christian because European arms were more effective than those of Red Indians. This long history has become so deeply embedded in the outlook of both statesmen and ordinary men that it is extremely hard to think in the new terms required in the modern world. Prominent authorities in America, Britain, Russia and China have in quite recent times expressed their belief that the ideology which they favour could be rendered world-wide by a nuclear war. It is impossible to know whether such pronouncements are wholly sincere or whether they are only part of a game of bluff. Whichever they may be, they are exceedingly dangerous. If they are only bluff, there is a danger that bluff may be called.</p> <p>From: Common Sense and Nuclear Warfare, 1959, pp. 41-42.</p>	<p>一方、ラッセルの興味関心はすでにキリスト教やそこに由来する性道徳・教育問題にはなく、もっぱら核の影にあった。ラッセルの次の文章を見よう。</p> <p>キリスト教とイスラム教の争いにおいては、どこの国がキリストを信じどここの国がマホメットを信じるものとされるかを定めるのは、戦争であった。プロテスタントとカトリックとの争いにおいても、問題を解決するのはやはり軍事的な勝敗だった。南北アメリカが現在キリスト教国であるのは、ヨーロッパの軍隊がインディアンの軍隊より強かったからである。この長い歴史が、両陣営の政治家や一般人のものの見方に深く根を沁み込ませてきたために、現代の世界で要求される新しい流れによって思考することがきわめて難しくなっている。アメリカ、イギリス、ロシア、中国の著名な権威者たちは、ごく最近、自分の好むイデオロギーは核戦争によって全世界的なものにしようのだ、という信念を表明している。そのような声明が全く真摯なものなのか、それとも脅しの戯れのせりふにすぎないのかは、知ることができない。ただいずれにしても甚だ危険である。それらが脅しにすぎないとしても、脅しが事実を惹起する危険があるのである。( Common Sense and Nuclear Warfare, 1959, pp.41-2 )</p>			
		D75	<p>On the intellectual side, again, there is a tendency for advocates of change to organize themselves into groups, welded together by a narrow orthodoxy, hailing heresy, and viewing it as moral treachery in favour of prosperous sinners. Orthodoxy is the grave of intelligence, no matter what orthodoxy it may be. And in this respect the orthodoxy of the radical is no better than that of the reactionary.</p> <p>From: Education and the Social Order, 1932, p.21.</p>	<p>しがしづれにせよわれわれは、能率（あるいは美）のために知性を捨て去る必要はない。意見のフアラエティは、怒りや熱情のために知性が死んではいないことの証拠である。ラッセル自身、機知の死よりかなり前に、次のようなことを書いていた、</p> <p>変革の唱道者たちは、一つの偏狹な正統説で互いに融合し、異端を嫌い、異端の存在は采える反動犯罪人たちにとって有利であるから道徳的裏切りだと見做して、グループへと自らを組織しようとする傾向がある。正統説というものは、たとえそれがいかなるものであれ、知性の墓場である。そしてこの点において、急進派(ラディカル)の正統説も、反動家のそれより少しもよいものではない。( Education and the Social Order, 1932, p.21 )</p>			